日本戲曲全集
第十三卷

顔見世狂言集

東京
春陽堂版

「伊勢平氏攝神風」二番目大詰孔雀長屋

三世坂東三津五郎の新兵衛　五世岩井半四郎の小女郎狐

日本戲曲全集　第十三卷　目次

顏見世狂言篇

御攝勸進帳（ごひゐきくわんじんちやう）

顔見世狂言の話

渥美清太郎

昔の劇場が俳優の雇傭期限は、滿一年が定めで、その切替へ時は、江戸が十一月、京坂が十二月であつた。毎年その月には、新たなる俳優の顔觸れに依つて第一回興行をなし、その一座は來年の前月まで續く次第であつた。この第一回興行を、新らしい顔を見せるといふ意味から來たのであらう、顔見世興行と呼び、顔見世狂言とは、その興行に上演される脚本を指して云ふのであつた。江戸時代の劇場としては、この興行を最も重要なものとなし、隨つて又、一年中で最も殷盛を極めたものであつた。芝居國での正月と呼ばれた位なのだ。そして、東西ともに顔見世狂言といふものは、他の月の狂言とかけ離れて、種々な特徴を持つて居た。先づ江戸の顔見世狂言の事を云はう。

江戸の顔見世狂言は、數種の世界に限られて居た。世界とは、その背景となる時代の事である。「奥州攻の世界」(貞任義家等が活躍する)「秀郷記の世界」(將門秀郷等が出る)「前太平記の世界」(頼光良門等)「伊勢物語の世界」(行平業平等)「御位爭ひの世界」(黒主小町等)「保元平治の世界」(清盛爲朝等)「平家物語の世界」(清盛宗盛等)「伊豆日記の世界」(頼朝文覺)「木曾の世界」(義仲巴等)「義經記の世界」(義經辨慶等)「鉢の木の世界」(時頼佐野等)「太平記の世界」(新田楠等)「東山の世界」(不破名古屋等)「甲陽軍記の世界」(信玄謙信等)「出世奴の世界」(秀吉信長等)が、その重なるもので、この中から選擇して毎年必らず新作されたのである。狂言は必らず一番目と二番目に分けられ、一番目が時代、二番目が世話で、しかもその世話物も終りに近づくと主役各々本名を現はして、必らず時代に戻つてから打出しになるのが特出した習慣であつた。その外、一番目の三建目(序幕)には「暫」があり、その返し幕には「だんまり」があり、四建目には「所作事」が附き、

大詰は「金襖の御殿」の幕で、謀叛人の見出しでケリが附き、二番目の世話場は必らず雪が降り、事件は引越し騷ぎや夫婦喧嘩の滑稽を主とし、大切には又ぞろ「所作事」が附く。といふやうな事が、多少の異例はあるが先づ大抵は守られた形式であつた。その外、筋なども同じ世界では似たり寄つたりで、作者としては、いろ／＼拘束されながら、その間に新機軸を出してゆくのが味噌であつた。これらの習慣は、大體嘉永頃までは守られて來たものである。

京坂の方は、斯うしたやかましい規則はなかつたが、それでも種々な特徴はあつた。京坂の顏見世興行は日數が大抵十日位の、短期であつたのが第一の特色で、次期に出す狂言を「二の替り狂言」といつて、十二月或ひは一月に初日を出し、一年中の華やかな狂言にする爲、顏見世狂言は云はゞその序開きとも稱すべく少ない幕數で、簡單な筋で、しかも滑稽を主としたものが多かつた。興行は重大なものであり、殷盛を極めたのではあつたが、狂言は甚だ呑氣な、お神樂に毛の生えたやうなものが大部分であつた。同じ滑稽と云つても江戶の方は二番目の世話場で、云はゞ社會劇の寫實な滑稽を見せたものだが、京坂のはお伽芝居であつた。乙姫と雷が喧嘩する所へ、オロシャの黑ん坊が仲裁に入るなどといふ、奇想天外な筋が多かつた。元來京坂の看客は狂言も理智的なものを好んだものだが、顏見世狂言だけは、狂言よりも寧ろ俳優の顏を見るといふのを主眼にして、いつもとは違つた呑氣なものを喜んだのである。俳優と看客と最も融和した所を見せるのはこの月で、俳優は何かの機會に盛んに口上を云ふ。大手笹瀨なぞといふ連中は殆んど舞臺の人と同じやうに、褒め詞とか答禮とか、演伎に近い事までする。如何にも顏見世といふ名にふさはしい、內輪的な興行であつたものだ。

その爲か、京坂の顏見世狂言の脚本といふものは、滅多に傳はつてゐない。本集に收めたのはしかも京都の顏見世狂言で、非常に珍らしいものと云つてよろしい。京坂顏見世狂言の見本としてお讀みを願ひたい。

本集のその他の五種は、いづれも江戶のもので、安永度、寬政度、文化初年、文化中年、文政度と、五期に分けて置いたから、斯うした特殊な脚本にも、年を經る每に進步のある事がお解りになるだらうと思ふ。作者も全部別人にして置いたし、世界も、義經記、太平記、奥州攻、前太平記、伊豆日記、と五つとも特色のある物を選んだから、不完全ながらも顏見世狂言の大體の模樣は窺はれやうと信じてゐる。

御攝勸進帳

安永二年中村座の顔見世狂言で、作者は初世櫻田治助である。世界は義經記で、例の勸進帳の件を摑まへてある所が面白い。顔見世式の呑氣さも、この位な古い物になると、さう日にも立たず、全部にのんびりした氣持ちが行き渡つてゐて、如何にも安永度の悠長さが好く偲ばれる。一番目の大詰に、何の故もなく不動明王が出現するなぞは、寶曆時代の氣分が出て殊に古風である。

「色手綱戀の關札」といふ淨瑠璃も、顔見世式の華やかな踊だ。この幕だけは、地を淸元に改調して、大正十一年中村福助の狐衣役で復活した。義經（中村福助）忍の前（中村時藏）直井左衞門（市村龜藏）お旣喜三太（坂東三津五郎）といふ役割であつた。また安宅の關の件は、淺草の松竹座が開場式の折、市川猿之助の辨慶、市村龜藏の義經で再演された。こんな時代の顔見世物が、二幕まで最近復活されたのは珍らしい事だ。

初演の役割は左の通りである。非常な大當りで、看客の割當に困つたといふのも、一つはこの役割の通り當時の人氣役者を網羅してゐた所爲であらう。

直井左衞門秀國。元吉四郎高衡（三世大谷廣次）駿河次郎淸重。下河邊庄司行平。せいたか童子（二世市川門之助）坂東太郎照早。家來時介實ハ伊勢三郎義盛（市東又太郎）七ッ道具の長兵衞實ハ備前守行家（大谷友右衞門）齋藤次祐家（中島勘左衞門）左大辨氏國。麻生の段八。（中島國四郎）鷲尾三郎義久。半澤六郎成淸（市川雷藏）義經北の方岩手姫。伊勢三郎女房おいち。龜井六郎重淸（佐野川市松）富樫妹松風。こんから童子（瀨川雄次郎）直井妹村雨（瀨川吉次）長兵衞女房およし實ハ土佐坊娘數妙（芳澤崎之助）三國の傾城若松實ハけいろう山鷄の精（中村里好）馬方、門出の由松（市川高麗藏）是明の君。伊達次郎泰衡（初世中村仲藏）常陸坊海存（嵐音八）粕谷藤太有末。家主佐七（市川純右衞門）稻毛入道重成。遣り手おたつ。錦戸太郎國衡（富澤半三郎）秀衡娘忍の前。元吉四郎女房おふゆ（四世岩井半四郎）熊井太郎忠基。鹿島の事觸れ、べい／＼詞の彌五兵衞實ハお旣の喜三太。富樫左衞門家直。不動明王（五世市川團十郎）源の義經。和泉三郎忠衡（四世松本幸四郎）武藏坊辨慶。姉輪の平次實ハ秩父庄司重忠（四世市川海老藏）川越太郎重賴（中村少長）藤原秀衡（中村傳九郎）

御攝勸進帳

三建目　暫らくの場

役名――是明の君。稻毛入道重成。鷲尾三郎義久。稍の權藤太。池瀨兵内。稍谷藤太有末。坂東太郎照早。下河邊庄司行平。富樫妹、松風姬。直井妹村雨姬。義經室、岩手姬。川越太郎重頼。西の宮右大辨永高。藤の森左大辨光高。下り松右中辨宗春。信濃小路左中辨神平。正親町左少辨義國。熊井太郎忠基。

本舞臺、三間の間、正面御簾屋體。東の柱、紅梅。西の柱、白梅。これに人の登るやうにしてあり、尤も大きなる洞あり、舞臺先に池の體、人の出入りする事あり、幕の内より稻毛の入道、廣袖、衣裳、ちよつぺい頭巾、大口、土佐坊の見得にて馬に乘り、松明をかゝげて居る。鷲尾三郎義久、上下衣裳にて股立ちを取り、その馬の尾筒を取りて扣へ居る。軍兵大勢、松明を振りて扣へ居る。呂俊の諸。鬨の聲、

ドン／＼にて幕明く。

稻毛　ハテ、なんとも心得ぬ。いま稻毛の入道重成が、是明君の御諚を請け、川越太郎重頼が姬、岩手姬を引ッぱらはうと、かんだす馬の尾筒へと、取ッついた奴を見りやア、鷲の尾三郎義久だな。何ゆゑありて入道が、馬の尾筒へ取ッついた。惡く邪魔をひろいだら、蹄にかけて蹴殺すが、とつとゝそこを退くまいか。

鷲尾　そりやアならない。忝なくも岩手姬さまの御事は、主君義經公の北の御方。仔細あつて今日、重頼どの御同道にて、お館へ御入りの由、これ好き幸ひの時節、何卒御兩人に御意得奉り、某もろとも、是明君の御前にて、我が若判官義經公、御身の誤まりなき由を、申し開かんと來て見れば、稻毛の入道重成どのに出合うたが、今に變らぬ惡企み。サア、その根性よしにして、馬より下りて三拜しろ。達てヂタバタぢくねると、武藏坊にはあらねども、坊主頭の鯰首、この世の暇を取らせるが、早くこの場を立去るまいか。

稲毛　コレエ〳〵。小さい形をして、大きな寝言をぶちまけたな。よく聞け。今度、九郎判官義經には、奢る平家を亡ぼしたる武威に誇り、兄たる頼朝を失はんとなす由、早くも梶原これを聞きつけ、頼朝公へ言上なす。これ天下の一大事と、先つ頃土佐坊昌俊、討手を蒙むり、堀川の舘へ押寄せし砌りより、義經主從は行くへ知れず。さすれば天下の日蔭者。その日蔭者の分際で、この入道に刃向はんなんどゝは、身の程知らぬ素丁稚め。早くそこを失くなれ〳〵。

鷲尾　イヤ、どこまでも、やる事はならないぞ。

稲毛　ヤレ面倒な。やるなエ、。

軍兵　やらぬワ。

　トこれより早笛になり、稲毛、鷲尾、馬引きのやうなる見得あつて、よい程に馬より引き下ろし、これより軍兵、鷲尾にかゝると、立廻りあるべし。此うちに

鷲尾　どつこい。

稲毛　こいつは堪らぬ、逃げるがいゝわい。

　ト云ひながら、向うへ一散に駈けて入る。鷲尾、皆々を追ひ廻し、トゞ奥へ追ひ込むと、早笛を打ちあげろ。てんつゝになり、向うより村雨姫、振り袖、御守殿の形にて、文箱を持つて出る。その供、綺麗な奴の形にて附いて出て、本舞臺へ來ると、奥より鷲尾、取つて返し、村雨姫と行き當る。村雨姫、愕りして

村雨　おゝ怖。

奴　何者なれば、おらが大事のお姫様に行き當つた。推參な奴の。

村雨　コレイナア、何を其やうに、とが〳〵しう云やるぞいの。モシ、どなた様か存じませぬが、只今の無禮の段、眞平お免しなされて下さりませ。

　ト云ひながら、顔を見て

村雨　ヤア、お前は義久さま。

鷲尾　さう仰せられるは、村雨どのか。

村雨　お前は何ゆゑ、お越しなされましたぞえ。

鷲尾　某これへ參りしは、下河邊の庄司行平どのに對面なし、君の御和睦を願はん爲、この御殿へ伺候いたしてござる。して、其許には、何用あつて爰へは參られしぞ。

村雨　サイナア。自らこれへ參りましたは、行平さまにお目にかゝりたいばつかりに、これまで參りましてござりまする。どうぞお前と御一緒に、お逢はせなされて下さんせいなア。

鷲尾　すりや、其許にも行平さまに

村雨　逢はねばならぬ事あつて、わざ〳〵參りましたわいなア。

鷲尾　如何にも某同道にて、奧殿にて行平さまに

村雨　お逢はせなされて下さんすか。

鷲尾　人目にかゝらぬ其うちに、某と一緒に、サア。

村雨　そんなら三郞義久さま、お前と一緒に。

鷲尾　サア、ござりませう。

ト鷲尾、村雨を連れて奧へ入る。と神樂になり、以前の軍兵出る。

軍兵　さて〳〵、形に似合はぬ手ひどいわッぱしめ。それに弱い入道さま、どこへ逃げさつしやつたか。探さずばなるまい。サア〳〵、來やれ〳〵。

ト云ひながら向うへ入る。本神樂になる。兵内、忍びの形にて、義經の八龍の兜を持ち、池の中より出る。梅の梢より權藤太、忍びにて、一通を啣へ、靜々と出て、互ひに顏を見合せて

兵内　梢の權藤太。

權藤　池淵兵内。

兵内　して、首尾は。

權藤　まんまと主君錦戸太郎さまの仰せを請け、この館へ忍び入り、何かの樣子を窺ふところに、是明君の御謀叛に、相違ないわい。

兵内　如何にも。某もこの義經の着せし、八龍の兜を所持なして、水底に忍び、委細の樣子は殘らず聞いた。この兜を所持なして水の中に居れば、平地にゐるも同然。なんと不思議な兜ではないか。

權藤　成る程、稀代な兜もあるものだなア。時に、この一通は、錦戸太郎さまより、是明さまへ、御味方に參らんとの一通。一先づこれを、富樫の左衞門どのへ送り届け直ぐに奧州へ。

兵内　出かした〳〵。さりながら、最早夜も明けぬけば、人目にかゝつては一大事。先づそれまでは、

權藤　おれは矢ッ張り、あの梅ヶ枝。

兵内　おれは矢ッ張りこの水底。

兩人　それよ。

ト兩人、元の所へ忍ぶと、三味線入りの樂になり、向うより粕谷藤太、弓矢を持つて來る。後より岩手姬、襠裲、衣裳にて、三方に願書を載せ、持つて出て、花道の中にて兩人、鶯をキッと見て

藤太　さても我れ今日、是明君を諫め奉らんと、小鳥狩りの催ほしをなし、諸鳥を獻ぜんと思ひしに、時ならざる鶯の囀り。誠に鶯は日月星を囀る。これ正に三種の神寶に倣らへて、時ならざる囀りは、是明君の御位に、立たせ給はんとの吉瑞なるか。何にもせよ心よき鳥の囀りぢやよなア。

岩手　鶯は經讀み鳥、春王殿を囀れば、御位に立たせ給はん事思ひもよらず、剃髪染衣の御姿を、致への爲のあの鶯。ハテ面白き、囀りよなア。

藤太　何にもせよ、善惡二つの鶯は、いま某が只一矢に。

ト つか〳〵と舞臺へ來る。岩手もツカ〳〵と來て、藤太を隔て

岩手　紺谷の藤太有末さま、マア〳〵お待ちなされませい。

藤太　ハテ心得ぬ岩手姫。時節ならざる音を發する、梅の梢の鶯を、射て落さんと立寄るを、何ゆゑ止め召されたな。

岩手　サイナ、お止め申さいでは。時節ならぬと仰しやれども、時は一陽來復の、春待ち顔のあの囀り、なんの怪しい事がござりませう。マア〳〵、お待ちなされませい。

ト 隔てる。

藤太　イヽヤ。そこ退いた。

ト 少し立廻りのうち、向うより稻毛入道、羽織衣裳にて、軍兵を連れ、ヤレ參れ〳〵と云ひながら、駈けて出て、岩手を見付けて

稻毛　ヤア、よい所へ岩手姫。これより直ぐに引ッ立て、この入道が手柄にする。サア、おれと一緒に來な。

ト 岩手姫が手を取つて、引立てにかゝる。藤太、突き退け

藤太　推參な稻毛の入道。今朝、是明君の御諚に依つて、川越太郎、岩手姫、この兩人を召し來れと、某に仰せつけられ。さるに依つて同道なしたる岩手姫。無體に手を取り、なんとおしやる。

稻毛　イ、ヤ、なんとも仕らぬ。拙者がお手を取りましたは、矢張り君への忠心でござる。先へ廻るはお髭の塵、惡根性は仕らぬ。あんまり腹をお立てやるな。

岩手　コレモシ、そりやマア何を仰しやりまするぞいな。自らが事は、御存じもござりませう、九郎判官義經と申しまする大事の夫のある身の上。これはつかりはならぬわいなア。

藤太　イヤ、さうは云はさぬ〳〵。例へ鎌倉どのであんべ

いかゝ、御諚を背けば大罪人。その上又義經は、先つ頃より行くへ知れず。さすれば後家の岩手姫。誰れに遠慮もない事だ。否でも旦那に供へる。左やう合點してお居やれサ。

岩手　イエ〳〵、なんぼうでも、こればつかりは否ぢや否ぢや。否ぢやわいなア。

稻毛　これはどうしたものだ。さりとは惡い心得だ。よくよく物を積つて見たがいゝ。是明君は上なき御位、その妃に立つ岩手姫、舅川越太郎は殊によると關白職。それになんぞや、腰拔け武士の義經に貞女立て。なんぼ戀しい床しいと思つても、大方今頃は喰ひ物に困つて、どこぞでのたれ死に、くたばつたであんべい。なんと藤太どの、左やうぢやアござらぬか。

ト岩手、口惜しきこなし、いろ〳〵あるべし。

藤太　左やう〳〵、入らざる事に御心中立て。なんの鮑の片思ひ。それより我れ〳〵が云ふ事を

兩人　聞いておくれ。

岩手　例へこの身はどのやうになるとても、この事ばかりは、わしや否ぢや。其やうな辱しめを受けうより、いつそ殺して下さんせ。自らは死にたい。いつそわたしや死にたいわいなう。

藤太　手ぬるく云へば、附け上がりのするどち女郎だ。この上は、我が君の御前へそびき出して、口說くがいゝ。入道、合點か。

稻毛　合點だ。

ト岩手姫が後へ廻り

サア岩手姫、我れ〳〵と一緒に

皆々　うしやアがれ、えゝ。

ト引立てようとする拍子に、ドロンと梅の洞の中より、眞赤な手を出して、稻毛が頭を摑む。

皆々　ヤア。

稻毛　待て〳〵。いま是明の君の御前へ、岩手姫をそびき出さんとする所へ、この入道が禿頭を、田夫野人に摑んだが、そもまづうぬは

皆々　何奴だえゝ。

坂東　待ちやアがれ、えゝ。

トこれより太鼓流しにて、坂東太郎照早、赤面、上下、衣裳にて、股立ち取り、梅の洞の中より出て、皆々を追ひ廻し、花道より取つて返し、岩手を圍ひ、しやんと見得になる。

皆々　ドッコイ。
藤太　ヤレ待て。いま岩手姫を引立てんとする所へ、白梅の中から、眞赤な奴が顯はれたが、そもまづうぬは
皆々　何奴だ。えゝ。
坂東　それ、一陽來復の時來つて、東山の梅からつん出るのも、古きを以て新らしく、紅葉染めなす龍田川、眞赤な面のから紅ゐ、色も姿も吉野川、その千年川音無川、可愛川の御方を、無體に袖を布引川、惡根性をよし川に、流しておれに桑川なら、この場も水に隅田川、但しやるなと佐川なら、片ッ端から初瀨川、痛い目見せつ湊川、御裳裾川の風變らず、淸き河原の其うちに、とつとゝ爰を白川と、惡態交りの氣短かは、何れも樣も御存じの、長谷川町の腕白者と、ホヽ、敬つて申す。
皆々　ドッコイ。
岩手　よい所へ坂東太郎照早さま、よう來て下さんしたなア。
坂東　オヽ、おれが來るからは、もう氣遣ひな事はなんにもない。五六も分けたと思つて、落ちついて居な。落ちついて居な。
稻毛　なんだ。此奴に洒落る奴ぢやアないか。坂東太郎なら實事師。岩手姫を妃に立つべいと思つて、そこで御前へそびくのだ。邪魔立てして坂東太郎、大きな目に遇ふなよ。
坂東　このすだれちよめ。コレ、よう聞けよ。君を諫めるは臣下の役。それにうぬら、斯樣に非業非道を勸めるは、世の中で云ふげぢ〳〵侍ひ。岩手姫を妃にしてよけりやアおれがする。われらが知つた事ぢやアない。すッ込んでけつかれ。それに又、この坊主が同じやうに、いかさまの頭取株。いゝ加減に惡さをしろ。あんまりしつこく駄々を云ふと、ひどい目にあはせるぞ。
稻毛　此奴は、餘り人を安くする奴だ。そのいけッ口を。
ト坂東太郎にかゝらうとするを
藤太　コレサ入道、お待ちやれ。高が赤子同然の智惠なし野郎だ。締める所で締めて見せう。入道、お來やれ。
稻毛　でもあんまり。
坂東　なにを。
藤太　坂東太郎。
坂東　兩人。
稻藤　後に逢ふべい。
ト神樂になり、藤太、稻毛入道、軍兵、皆々、奥へ入る

ろ。岩手、坂東、殘ろ。

坂東　ヤレ〳〵、堀川の館の亂より、いろ〳〵との艱難苦勞。さぞかしと推量いたしてござる。

岩手　ほんにマア、西も東も敵の中、心ならざるその中に、夫の行くへを案ずるは、女子心の果敢なさと、御推量なされて下さりませ。

トこのキツカケに、「今樣始まり」と呼ぶ。

坂東　最早今樣始まりとあれば、爰に長居は如何。某と一緒に奧殿へ。

岩手　そんなら、お前と御一緒に。

坂東　岩手姫どの、ござれ。

ト又、「今樣始まり」と呼ぶ。これより所作の鳴り物になる。この鳴り物をかりて、坂東、岩手、奧へ入る。直ぐに、正面の翠簾を卷き上げさせる。結構なる山臺の上に紅葉を飾り付け、後の方に段幕を張り、紅葉狩の見得。これに下河邊庄司行平、羽織、衣裳にて、中啓を持ち、左の肩に長劍をかけ、眠つて居る見得。富樫左衞門妹松風姫、襠裲衣裳にて、般若の面と、鐵杖を持ち、上の方に立つて居る。これを押し出して、誂らへの所作いろ〳〵あるべし。

〽月待つ程のうたゝねに、夢打ち覺ます夕時雨。

〽四方の梢もいろ〳〵と、錦色どる谷川に、風の掛けたる柵は、流れもあへぬ紅葉ばを、渡らば錦中絶えん。

〽よしや思へばこれとても、前世の契り淺からぬ、深き情の色見えて、かゝる折しも道野邊の、草葉の露のかごとをも、かけてぞ頼む行末を、契るもはかな打ちつけに、人の心も白雲の、立ち煩らへる景色かな。

〽こうきんしうの山よそおもひをなす、これなる紅葉の下枝に、落葉掻き寄せ薪となし、酒くゆらするその景色、忍ぶ心の面白く、いざや汲むべし〳〵と。

〽唐の朱買臣は錦の袂を會稽に飜へす、彼の七賢が樂しみも、酒にせい、銚子持て來い、杯持て來い、さてお肴は何々ぞ、頃しも秋の山、草花の匂ひを含む〳〵、酒の願、〽今まで爰に彳む女、とり〴〵手管の姿を顯はし、或は悋氣の炎を焦し、又は虛空にしなだれかゝり、咸陽宮の煙もいそよ、七尺の屛風の上に猶餘りて、そのたけ一丈の血文、角も折れかし、面も向けぬ恥かしや〽惟茂少しも騷がずして、南無や意氣地の大菩薩と、心に念じ、煙管を持つて待ちかけ給へば、口舌になさんと飛んでかかるを飛び違ひ、煙管の眞中持ち添へ給へば、その手を

引きしめ、なんなくお敵に從ひ給ふ、紅葉の威勢面白や〽あたら紅葉の散るは〳〵散り來るは〳〵、笠にとんとんとまれば、とん〳〵とまれば猶いとしく、腰をしめたや抱かれて寢たや、おこんとこんと紅葉ばを、敷くや蓐にねん〳〵〳〵、ねとござる、ねとござるえ。うつゝなや。〽所は山路の菊の酒、何かは苦しかるべきと、人々興に入り給ふ、花やかなりし風情かな。

ト唄切れる。

松風　ほんにマア、あられもない、今樣を幸ひに、爰までは來たれども、お顏を見れば今さらに、云ひたい事もえ云はず、ほんに辛氣な事ではあるわいなア。申し行平さま、たつた一言女夫ぢやと、仰しやつて下さんせいなア。

ト此うち後へ村雨姫、出て、これを見て眞中へ入る。

村雨　ちつとお邪魔になりやんせう。

ト云ふ。松風、恟りして

松風　オヽ怖。こりやお前は村雨さん、何しに爰へ來やしやんしたえ。

村雨　わたしぢやとて、爰へ來ぬものかいな。モシ、行平さま。いつぞや都へお上りなされし折、フッと見染めしそのお姿、忘るゝ隙はないわいな。どうぞ色よい御返事を。

松風　エヽ、つんとモウ、なんぢやいな。お前に返事させましてよいものかいなア。自らに御返事を。

ト取りつく。

村雨　イヽエ、私しへ御返事を。

ト兩方より取りつくを、行平、振り切つて

行平　如何に女子なればとて、聞分けのなきこの有樣。某とても岩木にあらぬ身なれども、兼ねて噂にも聞き給ふらん、この度九郎御曹子、御謀叛の由、頼朝公のお耳に達し、先達て土佐坊昌俊、堀川の御所へ押寄せしより、御行くへ知れ給はず、御いたはしく存ずるゆゑ、何卒御在所を尋ね奉り、御兄弟の御仲を、日月の如くなし奉らんと、千々に心を碎く下河邊庄司行平。それになんぞや、不義放埓に身を委ね、鎌倉どのゝ御所へ對し、なんと申し譯のあるべきぞや。思うは思はぬ松風どの、村雨どの、逢はぬ昔と諦らめて、思ひ切つて下されや。

松風　成る程、いま仰しやつたお詞を、無理とはさら〳〵思はねども、いま爰で女夫にならうと云ふではなし、未來で添ふと仰しやつても、嬉しうなうてなんとせう。お

前の口から女夫ぢやと、一口云うて下さんせ。それ聞かぬうちは、なんぼでも妾放しやせぬ。放さぬわいなア。

村雨　さうでござんす。どのやうに云はしやんしても、この返事のないうちは、動かす事ぢやないわいなア。

行平　それ程までの志し、返事せいではなけれども、いづれを見ても憎からぬ、源三位にはあらねども、引きぞ煩らふ花菖蒲、いづれへ返事を。

ト思案する。

松風　そりや御思案には及ばぬ事。わたしが千束の文玉章、よもやお忘れはあるまいがな。

村雨　そりやわたしとても同じ事。通ひ事の文の数々、この御返事は自らに。

松風　なんぢやいな、嫌らしい。年端も行かいでアタしつこい。なんぼ其やうに云はしやんしても、寝るのはわたしが先ぢやわいなア。

村雨　イエ〱、そりやお前、みんな嘘ぢや。わたしが先に寝るわいなア。

松風　まだかいなア。黙らしやんせ。

村雨　お前、黙らんせ。

松風　こなさん、黙らんせ。

村雨　其方、黙らんせ。

松風　わが身、黙りや。

兩人　エヽ、ほんに阿房らしい。

行平　さてこそ、悋氣嫉妬は女の常。さうなうて叶はぬ事。ハテ、どうしたらよからうなア。

トあたりを見て

ソレ。

トこれより合ひ方になり、行平、両方の梅の枝を切つて來て、松風、村雨が前に置く。

兩人　これは。

行平　その二枝は行平が返事。

兩人　この梅ケ枝を御返事とは。

行平　サア、こちへ誠の返事せば、こちらが怨みんこの場の仕儀。それゆゑ手折るこの梅ケ枝、時に取つての花軍。勝色見せしその方へ、如何にも返事をしようわいなう。

兩人　そんならわたし等二人して

行平　花の軍の勝負をば。

松風　こりやほんに面白いわいな。この松風と村雨さん、夫を争ふ花軍。

村雨　わしが殿御と云ふものか。

松風　わたしが殿御と云ふものか。
村雨　わたしやちつとも容赦はせぬぞえ。
行平　立ち上がつて、勝負々々。
松風　イザ。
村雨　イザ。
トこれより三味線入り、太鼓賑やかなる合ひ方になり、松風、村雨、花軍のタテ。行平、行司のやうな事いろいろあつて、取組みいろ／＼あるべし。トヾ松風、村雨にさん／＼叩かれ、口惜しきこなしにて、トヾ癪を發し、氣絶する。村雨、大きに嬉しきこなし、いろいろあるべし。行平、驚ろき介抱する。村雨、腹を立て、振り放す事あるべし。いろ／＼にしても氣が付かぬゆゑ、トヾ行平、池の端へ來て、水を汲まうとして、池をキッと見て、思ひ入れして、見得になる。本神樂。
行平　ヤア、怪しき音聲は、内にかけある陰中の、陽を含む池中の面、水滿々として氣上に漲るは、ハテ、心得ぬ事ぢやなア。
ト此うち權藤太、梅の枝より出て、見て居る。行平、これを見付けて
爰にも寫るあの梅ヶ枝。エイ。

ト小柄を手裏劍に打つ。この途端に梅の枝より權藤太、飛び下り、一散に向うへ行かうとする。これを引き戻し、見事に投げ、起き上がる所を、一刀にこれを切り、權藤太が落せし一通を取つて懷中する。所へ鷲尾出て、行平が刀の血を拭き、シヤンと納める。
行平　鷲尾三郎、今の樣子を
鷲尾　とくと拜見いたしてござりまする。
行平　それぢやア生けては置かれぬわい。
ト切りかゝる。立廻りありて、しやんと止めて
鷲尾　必らず早まり給ふな、行平さま、例へ如何やうな儀がござればとて、只今の仕儀、何しに人に物語らん。先づ先づお控へ下さりませう。
行平　しかと左やうか。
鷲尾　刀に掛けまして
行平　忝ない。
ト納める。
鷲尾　只今の御褒詞に、拙者めが願ひ。何卒義經公の御在所知れたる上は、御和睦のお願ひを。
行平　そりや某が命に替へて。
鷲尾　エヽ、有り難い。

行平　コリヤ村雨姫、松風姫に心を附きや。
村雨　アイ。
ト水を汲んで、松風に飲ませ、氣を付ける。松風氣が
付き、村雨を突き退け、キッとして
松風　エ、怨めしい村雨姫、情ない行平さま、こりやマア
どうせうぞいなア。
ト行平、最前の一通を打ちつけてやる。松風見て
松風　この上書は富樫の左衛門どのへ、錦戸太郎。これは、
行平　村雨おぢや。
ト唄になり、行平、村雨を連れて奥へ入る。松風、鷲
尾、殘りて
松風　南無阿彌陀佛。
ト鷲尾が刀にて死なうとする。鷲尾止めて
鷲尾　こりや氣が違うたのか松風どの、いま行平の詞の端、
一つの功を立てたなら、思ふ方より風や吹くらんとの謎
の一首。その一通見ずに與へ行きしは、この場の寸志。
彼れこれ以て大事の命。この場で死ぬる事ではない。必
らず共に早まり召さるな。
松風　そんならこの一通、内や床しき、兄さんの心の底を
聞きまして
鷲尾　善惡二つの其うちにて
松風　もし兄さんのお心が、善に極まるその時は
鷲尾　思ふ方より風ぞ吹く。
松風　あのお歌を
鷲尾　待つてお居やれ。
松風　アイ。
ト唄になり、松風、奥へ入る。池の中より兵内出る。
鷲尾、これを見て、小隱れする。兵内やう／＼に、あ
たりを見て
兵内　最前のどさくさは、慥かに權藤太めが、化けの皮が
顯はれたわい。おれも斯うしちやア居られない。ちつと
も早く逃げるがいゝ。さうだ。
ト鷲尾、これを引き戻し、兜を引ッたくる。兵内、花
道の方へ行かうとするを、引き戻し、池へ抛り込む。
鷲尾　これこそ主君義經公、御秘藏ありし八龍の兜、いま
思はずも手に入る事、大願成就、忝ない。
ト頂く所へ、後より奴四人、對の誂らへの形にて鎗を
持つて出て、兩方より取卷き、四人別れ
四人　人殺しめ、動くな。
ト聲をかける。

鷲尾　こりやア何をひろぐのだ。
奴一　いま後で見て置いた。人を殺したその上に
奴二　うぬが物したその兜、早く此方へ
皆々　渡せ、えゝ。
鷲尾　命知らずのうんざいめら。いらざる事に邪魔せずと、そこ押ッ開いて通せばよし、悪く騒ぐと片ッ端、あの世この世の暇乞ひ。首と胴との別れだが、そこ押ッ開いて通すまいか。
四人　どつこい。
　トこれより太鼓入りのタテになり、花々しきタテいろいろあつて、トゞよい程に、二人を池へ抛り込み、二人は当て身をして、兜を持つて一散に向うへ入る。二人起き上がり跡を追つて入る。鳴り物、打ち上げる。直ぐに管絃になり、奥より藤太、行平を引摺り出る。これを松風、村雨、介抱しながら付いて出る。藤太、行平を引据ゑて
藤太　慈な行平の大腰抜けめ。汝が今度上京なしたるは、義経を詮議の為ぢやアないか。それになんぞや、松風村雨の戀路に迷ひ、現を抜かす大べら坊め。武士の風上にも置かれぬ奴。おのれがやうな腰抜け侍ひは、粕谷の藤太が、斯う〳〵するワ。
　トさん〴〵に打擲する。松風止めて
松風　コレ、申し、藤太さま、そりやマアどうの斯うのと云つたのは、わたしら二人が業、主さんに科はない程に、構へて聊爾さしやんすな。
藤太　何を、このとち女郎め、うぬ獨りでもある事か。おぼこ娘の村雨まで、疵物にしやアがつたな。例へ女の方から仕掛けても、役儀を大切と思へば、なか〳〵不義放埒がなるものか。根が色好みから起つた事だ。エヽ、まじまじとしたしやッ面だわい。
　ト行平が顔を蹴る。行平、口惜しきこなし、いろ〳〵あつて
行平　是明君の御殿と云ひ、身に誤りのあるゆゑに、無念をヂッと耐えて居りやア、行平程の武士を、土足にかけて蹴つたぞよ。
藤太　蹴たがどうした。腰抜け武士だから蹴たワ。それが口惜しいか。口惜しくば、なぜ義経の詮議はせぬ。なぜ色事に日を送る。但し、鎌倉どのゝ云ひ付けで、遥々と都へ上り、松風や村雨と、色をしろとの云ひ付けか。よもやさうぢやあるまいぞや。

ト此うち行平、いろ〳〵口惜しきこなしあつて

行平　エヽ、おのれをな。

ト反りを打つ。松風、村雨、兩方より止める。

松風　滅多な事をなされまするな。

藤太　わりやア、そりを打つて、おれを切る氣か。コレエ

エ、爰を何處と思ふ。是明の君の御殿だぞ。その鯉口が

一寸でも放れると、この場に於て逆磔刑。サア拔け〳〵。

所詮面倒な。我君の御殿へうしやアがれ。

ト引立てにかゝるを、向うにて

川越　待つた。

藤太　待てとは。

川越　川越太郎重頼が、お止め申した。マア〳〵お待ち下

されい。

ト太鼓、唄になり、川越太郎、上下にて出て來り、藤

太を突き退け、行平を圍うて、しやんと見得になる。

藤太　川越太郎重頼どの、只今、不義の科ある行平を、

引立てんと仕るを、なぜ邪魔をおしやるのだな。

川越　イヤ、全くお邪魔は仕らぬ。さりながら、よく思し

召しても御らうじろ。未だ若輩な下河邊の行平、彼れら

は蕾める松風村雨、左やうな事もござらいでは。その上

また今日、この御殿に於きましては、今樣與行の由。そ

の役に指されましたる行平、松風。今樣のその一手に、

味な氣味振りもありさうなもの。すりや、其やうに御詮

議には及びさうもないものかと、重頼めは存じまする。

藤太　すりや、なんと仰せらるゝ。不義徒ら致しても、大

事ないと仰しやるか。

川越　左やうではござらぬが、よもや誠に。

藤太　でも、不義者に相違ござらぬ。

川越　然らば、なんぞ慥かな證據になるべき、文などござ

るかな。

藤太　イヤ、そんな物はなけれども、なんであらうと不義

者サ。

川越　左やう仰せられては、御詮議が暗いかと存じまする。

こりや此まゝに差措かれいサ。

藤太　なんだか呆れて物が云はれぬわい。道理でこそ、其

許の御息女岩手姫、是明君の御心に從がはいで、義經と

乳繰り合ひ、揚句の果に振りつけられ、この程は寡婦ぐ

らし。親が馬鹿なら子もたわけ。イヤハヤ氣の毒千萬な。

川越　なにを。

トきつとなると、向うにて、右大辨參內と呼ぶ。これ

より下がり葉になり、西の宮右大辨永高、公家の形にて、笏を持ち、沓を履いて出る。仕丁、付いて、日傘をさしかけ出る。同じく左大辨參內。と呼び、藤の森左大辨光高、出る。同じく右中辨參內。と呼んで、下がり松の右中辨宗春、出る。同じく左中辨參內。と呼んで、信濃の小路左中辨仲平出る。同じく左少將參內。と呼んで、正親町左少將義國出る。何れも公家の形にて、仕丁、日傘をさし、出掛け、花道へ並ぶ。打揃ひ、本舞臺へ來て、皆々居並ぶ。川越太郎、下河邊行平、粕谷藤太、松風姫村雨姫、皆々下の方へ下がり扣へる。

藤太　これは何れも樣には、お揃ひ遊ばされ、只今の參內、なんとも合點參りませぬ。

西宮　不審は尤も。今日是明君の御諚には、我れ〳〵を密かに召され、何か御內意あるとの事。さるに依つて、斯く申す西の宮右大辨永高。

正親　まつた正親町の左少辨義國。

下松　下がり松の右中辨宗春。

信濃　信濃の小路左中辨仲平。

藤森　藤の森の左大辨光高、斯く我れ〳〵參內の上からは、兼ねて申しつけ置きたる岩手姫が事。

藤太　イヤ、その儀は氣遣ひあられますな。早先達てこの所へ、召し寄せましてござりまする。ナニ、稻毛の入道、岩手姫を同道してお來やれ。

稻毛　心得てござる。

ト管絃になり、岩手姫を連れて出る。岩手姫、川越太郞を見て

岩手　重賴さま、只今參內遊ばされましたか。

川越　岩手姫、其方ははや先達て參內の由、定めて君の御諚を、逐一承はつたであらう。

岩手　イエ〳〵、今に於きまして、なんの御沙汰もござりませねども、最前から藤太さま入道さま、それは〳〵いろいろな無理非道な事ばかり。いつそ口惜しうて〳〵ならぬわいなア。

藤太　コレ、エヽ、なんの無理非道を云ふものだ。おいらが女房にするのぢやアなし、君の妃に供へようと云ふものを、無理だと云ふは其方の無理。

正親　それとも又、御心に隨はずば、違背の罪に落つべえぞ。

信濃　親も浮めば子も浮む、結構な身の上を嫌がるのは、大べら坊。

下松　行くへも知れない義經に、義理立てをしようより、後になり上がる分別。
藤森　戀しいと思ふ義經は、のたれ死にくたばつたか。
西宮　お先も知れぬ色事より、いま目の前の旨い物、喰つたがよかんべえ。
稻毛　但し、嚴命を背く氣か。重賴ともに返事をしろ。
藤太　この返答はどうだエ、。
ト このキツカケに、翠簾の內より
是明　かしましい。靜まれ、エ、。
ト下がり葉に成り、翠簾を卷き上げる。是明の君、金冠、白衣にて、笏を持ち、沓を履いて、左の手に寶劍を持ち、二重臺の上に、床几に掛つて居る。後に坂東太郎、日傘をさしかけて居る。これにて押し出す。下がり葉を打ち上げる。
坂東　是明君の御入りなるぞ、靜まれ。
皆々　ハア。
是明　麿、この度、天下の望みある所に、先達て須磨の亂れに、義經密かに奪ひ取つたるこの寶劍、堀川夜討の爭亂に、又ぞろ麿が手に入つたる事、大望成就の奇瑞の印。さるが中にも、麿が心に任さぬは、戀は曲者と岩手姬、思ひに餘る心より、今日爰へ呼び寄せて、今宵を直ぐに新枕。川越太郎。
川越　ハア。
是明　これへ參つて水入らずに、麿と妹脊の仲人しろ。
ト眞中へ出る。
川越　ハア、御諚には候へども、凡そ天地のその間に、無理非道の第一はこれ不義なり。その御鏡にもならせ給はん御身にて、貞女を破らせ給ふ事、世の人口も如何。この儀は何卒、思し召し切らせ下されませうならば、有難う存じ奉りまする。
是明　默れ重賴。汝が今の一言は、全く麿を諫めの詞にあらず。九郎判官義經を、何國へか隱し置き、後日に義兵を催ほして、鎌倉を討ち亡ぼし、一天下を望む下心。それに違ひはあるまいがな。
川越　こはお詞とも覺えませぬ。九郎御曹子に於きまして、謀叛の兆しなんどは、かつ以てござりませぬ。
行平　その上、川越太郎重賴は、斯く申す行平と申し合せ、義經の行くへを尋ね求め、御和睦を願ふ所存。謀叛なぞとは思ひも依らず。滅多な事を御意なされまするな。
藤太　小ざかしき素丁稚め、おのれが不義を差措いて、忠

臣顏が見つともない。誰れより先へ、マアうぬを。
ト行平へかゝるを、坂東太郎、藤太を突き退け、行平を圍ふ。

藤太　坂東太郎、何をするのだ。

坂東　何をするとはべら坊め、旦那どのが駄々ア云やア、同じやうに騒ぎやアがる。是明の君さま、旦那どの、なぜ其やうに、無理な事を云はつしやる。主のある岩手姫へ、戀慕をなさるとは、そりやア無體だ。これ程廣い日本國。尋ね出しやア、いくらでもお望みに叶ふやうな女はある。こればつかりはおれがさせない。坂東太郎がさせないぞ。

是明　爲に向つて要らざるおのれが諫言立て。所詮我が心に隨はざる岩手姬。まつた義經を逃がせし上、何國へか隱し置いたる川越太郎、兩人ともに首を打て。
ト皆々。

五人　エヽ。
ト驚ろく。

川越　すりや、兩人ともにこの場にて。

是明　太刀取りは坂東太郎。おのれにキッと云ひ付けたぞ。

坂東　そりやアあんまり。

皆々　御諚を背くと朝敵だぞ。

坂東　エヽ、忌々しい。

是明　下河邊の庄司行平は、身の一大事を打忘れ、松風村雨兩人と、不義をなしたる不所存者、三人ともに首を打て。

藤太　畏まつてござりまする。サア、何奴も此奴も、キリ〳〵爰へ直りやアがれ。

川越　身に覺えなき罪科にて、罪に遭ふのも皆因緣。下河邊行平どの。

行平　川越太郎重頼さま。

岩手　松風さん、村雨さん。

松村　岩手姬さま。

五人　是非もなき、世の有樣ぢやなア。

皆々　キリ〳〵そこへ、直れエ、。
トこれより三味線になり、川越、岩手を眞中に引据ゑ、坂東太郎、後へ廻り、太刀を拔く。藤太、下の方へ行平を連れ行き、後の方へ廻り刀を拔く。稻毛入道、松風、村雨を、上の方へ直し、太刀を拔く。

坂東　いま思はずも主命もだし難く、坂東太郎照早が、一刀の下に命を絕つ。岩手姬、川越太郎。

藤太　下河邊庄司行平。
稲毛　松風、村雨。
坂東　今が最期だ。
三人　觀念。
熊井　暫らく。
皆々　イヤア、暫らくと聲を掛けたぞよ。
是明　待て〳〵。廛いま上見ぬ君と仰がれ、その威世界に滿ちて斯くの通り。心に任せぬ者ども、命を絕てよと云ひ付けたる、劍の下を暫らくと、聲をかけたは
皆々　何奴だ、エ、。
熊井　暫らく。
皆々　暫らくとは。
熊井　暫らく〳〵。
皆々　どつこい。
淨瑠璃主膳太夫〽かゝる所へ熊井太郎忠基は。
ト鼓の合ひ方、人寄せになり、熊井太郎忠基、花道より、柿の素袍、烏帽子、大太刀にて、中啓を持ち出る。
〽一陽に咲く顏の、隈こそ今年と一昨年も、三升の紋の智仁勇、三德を兼ねし荒若衆、世々吉例の大太刀は、龍の臥すかと疑がはれ、すさまじかりける次第なり。

皆々　どつこい。
坂東　暫らくと聲かけて出やつたは、去年一昨年向ひ町の役者付けで見た三升の紋だな。素袍の襴の荒事出立ち。
そも先づうぬは
皆々　何奴だエ、。
熊井　東岸西岸の柳は遲速同じからず、南枝北枝の梅は、歸り新參の我まゝ者、足かけ三年柿八年、柿の素袍に三升の紋、罷り出でたるこの色子は、九郎判官義經公の膝下去らず、熊井太郎忠基と云ふ坊主殺し、一聲かけて見てあれば、いよ又傍若無人の振舞ひ、呆れて歸る一陽來復、芝の端から勸三の代も厄介若衆、鬼も十八情知り、わしは山谷の三ヶ月さまよ、宵にちらりと似たばかり、似せます眞似ます隈取ります、升々賑はふ花の顏見世花の笑み、雪に見紛ふ三芳野の、古鄕の錦金冠り、無理な所へ横車、廻る月日の八聲の鳥、實に勇ましき歌舞伎の門出、市川十まで呑み込み刎ね込み、御免三升仕つた、一昨年尊の出見世の判取り、大福帳年馴染みの秀鶴、お見知りなされてくんないもぐさ、團十郎にやア貴賤群集のまん中村と、ホ、敬つて白す。
皆々　どつこい。

稻毛　さちやアおのれが義經の家來、熊井太郎忠基だな。とんだ所へ出たぞよ。見たか。これにお渡りなさるゝは、忝なくも是明の君さまだぞ。その外美々しき雲の上人。うぬらがやうな無位無官、食ふや食はずの瘦せ浪人、主に離れた素丁稚の出る所ぢやアない。早くそこを無くなれ無くなれ。無くなりやうが遲いと、稻毛入道重成が、うぬを取つてぺいするぞ。

熊井　太い奴ぢやアないか。岩手姫は主君の簾中。川越太郎どのは舅君、御難儀と見て爰へ出た熊井太郎。進退ともにおれが三昧。斯うぶッ坐つちやア、生えぬいたも同然、動く事は否だ。

藤太　否だと吐かせば、君の御前見苦しい。誰れかある、熊井太郎を引立て召されい。

皆々　ハア。

西宮　待て〳〵。誰れ彼れと云はうより、力自慢の公家の腕立て、某が取つて打ッちやるべい。

ト花道へかゝり

ヤイ、童め、今年は引立ても氣を替へて、優に優しき冠り裝束、見かけとは違ふぞよ。サア、痛い目に遭はぬうち、キリ〳〵爰を立去るまいか。

熊井　見れは立派な裝束だ。地合ひも見ればもくらんだな。

西宮　なにを。

熊井　もくらんの母は餓鬼道の苦しみ。可愛や此奴も餓鬼道の苦しみかい。して、お前のお名は、なんと云ふえ。

西宮　西の宮の右大辨永高と云ふお公家様だ。

熊井　なんだ、牛の小便なま長い。

西宮　おきやアがれ。その口を、おれが引ッ裂くぞ。

熊井　それこそほんに途方もない。引ッ込みやアがれ。

西宮　永高さまお入り。

ト永高、舞臺へ來る。信濃の小路左中辨出て

信濃　エヽ、埒の明かない。ドレ〳〵、四谷の先生が出てやらう。

ト花道へ行き

コレヤイ、おれが出たぞ。怖く思はゞ、早くキリキリ下がれやい。

熊井　此奴はなんだ。おらア元來お江戸生れ。この芝居に久しく居た者だ。うぬがやうな奴を、ついぞ見た事がない。なんと云ふ公家だ。

信濃　信濃の小路左中辨仲平と云ふ、歌をよく詠むお公家様だ。

熊井　なんだ、信濃者の中氣病みだ。
信濃　なにを。
熊井　信濃なら信濃のやうに、新宿で冬奉公でも稼ぎやアがれ。
信濃　その代り、春になつたら
熊井　踏み殺してやるべい。
信濃　うぬを。
熊井　なんと。
信濃　構ひもせぬものを。
ト後じさりに舞臺へ來る。
藤森　エヽ、埒の明かない。ドレ〲、こんな時にやア新參古參の容赦はない。おれが出て片附けべい。
下松　コレ〲、また先へ出るか。今年から仲を好くするやうに、二人一緒に行くべいぢやないか。
正親　待ちやれ〲、一人で行かうより、好い連れがあるうち、おれも行くべい。
藤森　そんなら三人一緒に行つて、物の見事にあの童を、やらかしてくれべい。
下松　手柄は一つ、褒美はてん〲。三人つん〲連れ立ち、一イ二ウ三イで行くべい。ムウ。
藤森　お定まりの通り、それがよい。
ト花道へかゝり
三人　一イ二ウ三イ。わッぱしめ。立て、エヽ。
熊井　こりやア三人お揃ひなされてお出でだの。
三人　ちつと舞臺が大きいぞ。
熊井　名が聞きたい。
下松　聞きたくば、高らかに名乘つて聞かせん。よつく聞け。某こそは古馴染みの下り松の右中辨宗春。
藤森　某は、藤の森の左大辨光高。
正親　某こそは、正親町の左少辨義國。
熊井　なんだ、正親町に下り松、藤の森。斯うもあらうか。
三人　なんと。
熊井　無駄な願、正親町より下り松は、命にかゝる藤の森かな。
三人　おきやアがれ。
藤森　斯く我れ〲が出立つて、赤恥かいて居られうか。力任せに粉微塵。
下松　首と胴との生き別れ。
正親　觀念ひろげ。熊井太郎、返答は
三人　どうだエヽ。

熊井　味噌をぶち上げると、睨み殺すぞ。
三人　なんと。
熊井　引ッ込みやアがれ。
藤森　これだに依つて、見ずでもあんまり通られぬ。
下松　頭で引立てを踏んで出ればよかつた。
正親　それでも尻に又、親王が居る。
下松　丈夫な芝居、済んだわえ。
正親　さはさりながら。
熊井　なんと。
三人　晩程参りませう。
ト三人ともに、舞臺へ來る。稻毛入道、急きに急いて
稻毛　何奴も此奴も役に立たぬ。ドレ、どうでおれが出ずばなるまい。サア、熊井太郎、たつた今、首を叩き落すぞ、觀念ひろげ。と云ふはみんな嘘。三升さん、お前はマア、どうなされやしたえ。度々お噂サ。例年の通り御贔屓連中、幕もよう榮まりました、おめでたうござります。私しもこの暫らくの引立ては、お前のお祖父樣の時分から、お父樣の時、そしてお前にも度々出たが、ついぞ荒事を、敵役の方から引立てた事がござりませぬ。依つて今年は氣を替へて、なんとこれから留場の口までも、お前に立つてもらひ申せば、私しも女房子の前へ、外聞がようござりまする。どうぞお慈悲に、お立ちなされて下さりませ。ヤレ〳〵、お父樣によう似申しなさつた。
熊井　誰れだと思つたら、貴樣は稻毛だな。
稻毛　左やう〳〵。
熊井　わしも旦那方のお庇で、どうやら斯うやら此方へ呼んでもらつたに依つて、云はゞめでたいこの顏見世、祝儀心に貴樣を立てつて
稻毛　爰をあつちの方へ。
熊井　退いてやつたらよからうが、金輪際退くまい。
稻毛　なんと。
熊井　否だ。
稻毛　此奴、なか〳〵太い奴ぢやアないか。甘酒を營めさせて置けば喰ひそばえて、いろ〳〵な事を吐かしやアがる。誰れだと思ふ。稻毛入道、手もなくうぬを
熊井　引立てるか。
稻毛　くどい。
熊井　そりやアどこで。
稻毛　爰で。

熊井　いつ。
稻毛　今。
熊井　誰れが。
稻毛　おれが。
熊井　誰れを。
稻毛　われを。
熊井　アハヽヽヽお臍でお膳が茶を沸かす。
稻毛　ところを。
熊井　腕をもぐぞ。
稻毛　イヨ、市川の大當り。
熊井　あんまりそりやア古い。
稻毛　これも御祝儀のうちよ。
ト舞臺へ來る。
皆々　熊井太郎、キリ〳〵下がれ。どうだエヽ。
熊井　どうで爰から物を云つちやア、二階から目藥。ドレ、そこへ行つて親玉樣にも、又お爺にも、近付きになるべい。片ッ端から襟と襟とを括し合せ、手に手を取つて用心しろ。
皆々　イヤア。
熊井　一番そこへ大波をぶたせべいか。ドレ。

皆々　アリヤ〳〵〳〵。
ト大太鼓入りのトヒヨになり、熊井太郎、舞臺へ來る。若い衆、敵役、殘らず立廻りあつて、皆々を圍ひ、是明の君、坂東太郎が中へ、シヤンと見得になる。
皆々　どつこい。
坂東　如何なれば熊井太郎、下賤匹夫の身を以て、我が君に近附き、上を恐れぬ無禮の振舞ひ。氣が狂つたか、醉ひ狂ひか。坂東太郎が相手になるぞ。
熊井　相手になるとは面白い。何奴なりとも相手に嫌ひは荒金若衆。親玉樣には內々で、御無心申さにやアならない物がある。妨げひろぐと毆り殺すぞ。
藤太　待て。我が君へ對し奉り、內々で御無心とは、合點のゆかぬわッぱしめ。粕谷の藤太が相手にならうか。
熊井　うぬらに頓着するのぢやアない。サア、是明の君さま、深く隱して所持なされし朝日の御劍、溫ためある事を兼ねて聞き、主君義經、この度鎌倉よりお疑ひを蒙むられたるも、三種の寶調はざるゆゑ、忠臣の我れ〳〵、尋ね求めて禁庭へ差上げ、義經に野心なきとの申し譯を立てにやアならぬ。速かにその寶劍を、忠恭へ渡すまいか。返答は、ドヾどうだ。

是明　ヤア、存外なる熊井太郎。卑職凡下の身を以て、麿に對し敵たふ有様。剩さへ寶劍を持ちしなんぞとは、なんのたわ言。殊に岩手姫を匿まひ、我が望みの妨げなす汝。眼下に命を失はん。可哀や〳〵。

熊井　命を輕んずる事、英雄の好むところ。サア、寶劍をお渡しなされい。

是明　寶劍は知らぬわやい。

熊井　何がなんと。

是明　岩手姫を渡せ。

熊井　寶劍を渡せ。

兩人　どつこい。

ト大勢かゝるを、突き退け、掻きのけ、是明君の懷中の寶劍を取り出す。

皆々　どつこい。

熊井　これこそは、疑ふ所も無き朝日の御劍、熊井太郎が手に入りしこそ、未だ義經公の御武運長久の印。エヽ、有難やなア。

藤太　それを。

トかゝる。粕谷藤太を突き退け

熊井　アヽ、つがもねえ。

岩手　今に始めぬ熊井太郎が忠心、父上様、お喜びなされませい。

川越　かゝる忠義の武士を、家臣に持つたる堀川どの、如何なれば讒言の舌にかゝらせ給ふやらん。それにつけても、殘念なる事ぢやなア。

熊井　そのお悔みはさる事ながら、一先づ都をくらまされ、折を見合せ御開運あらん。イザ〳〵、お立ちあられませう。

行平　熊井太郎が働らきにて、危急を遁がれしこの行平。

松風　折を待てとのこの松風。

村雨　この村雨も紫の

熊井　雲井を餘外にお立ちあられ、然るべう存じ奉りまする。

藤太　坂東太郎照早、かゝる大事を餘所に見て、知らない顏は

皆々　こりやアどうだ。

坂東　どうだ斯うだと云ふ事があるものか。神寶を尋ね出し、禁庭へ納めんとある忠臣の、熊井太郎へ刃向へば、邪ま非道。りきんでは見たものゝ、心安くしてもらはにやア、ちつと此方の理窟が惡い。寶劍をやるべいと、領

づき合つたこの照早。首尾よく行つためでたい顔見世。
親分、一つ〆めべいか。

熊井　旦那方も助け參らせ、寶劍を守護なせば、この上の本望はない。祝つて一つ〆めべいか。

兩人　よい〱〱。

熊井　サア、立歸る熊井太郎、ちつくりとでも云ひ分がござるか。是明の君、仰しやり分は、仲さん、どうだ。

是明　無念には逸れども、忠臣の心を感じ、命助ける、早く歸れ。

熊井　然らばお暇仕る。

稻毛　ソレ、やるなエ、。

皆々　どつこい。

トかゝるを、見事に首切つて落し、刀を擔ぎ、キツと思ひ入れ。

熊井　岩手姫のお立ち。

〽いでや紅葉の色見えて、名に紫の江戸の花、ゆゝしかりける。

ト岩手姫、川越太郎、寶劍を持ち、下河邊行平、松風姫、村雨姫後より熊井太郎、大太刀を擔ぎ、花道の中まで行き、振返つて

皆々　さらば。

トこれより、早下がり葉にて、各々花道へ入る。よろしく幕引く。

四建目　氣比明神の場
淨瑠璃の場

淨瑠璃「色手綱戀の關札」富本連中

役名‖古鐵買ひ、七つ道具の長兵衛 實ハ備前守行家。同女房、およし。同娘、小富。加賀次郎年國。金澤太郎照門。雲助、麻生の段八。鎌田兵衛一子、保丸。齋藤次祐家。秀衡の娘、忍の前。直井左衛門秀國。鹿島の事觸れ、べい〱詞の瓣五兵衛 實ハお馬屋の喜三太。伊豫守源の義經。

本舞臺、三間の間、しん〱たる森に、玉垣、石燈籠數多、一體、越前の國、氣比の明神境内の體。西の方に、乘り物。東の方に、四つ手駕籠、兩方離れてあり、神樂にて幕明く。

ト花道より加賀次郎年國、上下にて、出て來る。後よ

り侍ひの形にて、中間、鷄を抱へて來る。鎗持ち、草履取り、挾み箱、持ち添ひ出る。東の方より金澤太郎照門、ぶッ裂き羽織にて、捕り手五人、附き出る。雙方、本舞臺にて、行き逢ふ。

金澤　其許樣は、富樫の左衛門家直さまの御家來、加賀の次郎年國どのではござりませぬか。

加賀　左やう仰せらるゝは、齋藤次祐家さまの御家來、金澤太郎照門どの、これは／＼、變つた所で御意を得申したな。

金澤　さればでござる。手前儀は、堀川の御所に於て、備前守行家、まつた伊豫守義經、兩人心を一致にして、賴朝公を追討の宣旨を蒙むり、及ばぬ逆意を企て、遂に都を出奔して、行くへ知れねば世上の騷動。依つて義經なりとも、行家なりとも、搦め捕つて出世せよとある、鎌倉どのよりの上意に依つて、手の者を引き具し、只今にても斯くの如く。して其許には、何方へお越しなさるゝな。

加賀　拙者儀は、主人富樫の左衛門、當社氣比明神へ心願の旨ござつて、納めまする所のこの鷄。即ち、富樫左衛門が干支の七つ目、代參として拙者が參詣、其許樣にも大切なる御用、御苦勞千萬に存じまする。

金澤　役目でござれば、さのみ大儀とも存ぜぬ。只今承れば鷄は富樫の左衛門さまの、干支の七つ目ゆゑ、御立願の爲、御奉納なさるとな。

加賀　左やうでござる。武運長久の爲、一つには仰せ付けられた、加賀の國安宅の關、其許樣の御主人、齋藤次祐家さまとはお相役にて、我れ／＼主人も固めの大役。隨分と過ちなきやうに、我れ／＼までもしんを取り、參詣仕りまする。

金澤　それは手前とてもその通り。今にも義經姿を替へ、往來仕るまじきものでもない。其許樣にも隨分、お心を付けられい。拙者も次手がましけれども、氣比明神へ參詣いたさう。御案内を賴み存ずる。

加賀　然らば、斯うお出でなされい。

ト宮神樂になり、加賀次郎、金澤太郎、鷄を好き所へ放し、入る。

中間　ヤレ／＼、今日のやうに草臥れた事はない。煙草にしよう／＼。

中二　如何に手前が歩かぬと云つて、おいらを使ひ殺すと云ふものではないか。義經をぼッ匿けうとても、夜晝な

しに駈け廻つて、或ひは二十里三十里、毎日々々歩く事だに依つて、息も精も續くものではない。

ト下に居る。

中三　ヤレ〱草臥れた。

中四　その草臥れた所へ憂さを晴らすは、これ我れ〱が貯へ、賽を一壺、水鉢の柄杓にて押ッ伏せた所が、ちよぼ一、なんと張る氣はごんせぬか。

中一　此奴、なか〱思ひ付きがよいわい。サア、旦那のお歸りまで、爰でやッつけべいぢやアないか。

中二　よかんべい。ちよぼ一なら七里歸つても張れと云ふ譬へがあれば、押ッ始めろ〱。サア、旦那のお歸りまで、なんのかのと云はうより、四割の廻りで、貰ひ備が四割半。寺なしの大道博奕。サア、伏せる所が我れらが壺。

ト手水鉢の柄杓にて、賽を伏せる。

中三　ソレ、ぴんよ。ソレ三よ。ソレ四よ。ソレぴん。四戻り。

ト押ッ伏せると、てん〱に煙草入れより錢を出して、張りかける。段々壺を廻して、トゞ殘らず、錢を張り込んでしまふ。

中一　成る程、この賽はよく刎ねる賽だ。ア、コレ、もちつと張りたいが、錢が無くなつた。なんぞ手頃な物を遣らうか。時代のものだなア。

中二　おれもこの、家に傳はる一腰を、賣つてしまつて、もう四五百續かして見る氣だ。

中三　氣どころではない、どのやうな事をしても、五六百勝ちたいものだ。

中四　勝たうにも負けやうにも、錢を拵らへてえものだ。どうぞ斯う云ふ所へ、工面のよい商人が

皆々　欲しいものだなア。

ト切り幕にて

長兵　古鐵買はう〱。

皆々　イヤア。

中一　錢の一文も無い所へ、古鐵買ひとはよい壺だ。よい者が來るぢやアないか。

皆々　さうとも〱。

ト云ふうち、てんつゝにて、古鐵買ひ、七つ道具の長兵衞、花道より古鐵買の形、やつし上へ袖無し羽織、上帶、提げ煙草入れ、門札下げ、淺黄股引、紺の足袋、草鞋を穿き、雨掛け、古鐵買ひの荷物を擔ぎ、長兵衞

の娘小富、やつしの娘の形に、迷子札を下げ、古鐵買ひに手を引かれ、出て來る。花道の中程にて

長兵　古鐵買はう／＼。

小富　申し父さん、わたしはいかう草臥れたわいなア。

長兵　尤もぢや／＼。草臥れもせいでは。慾心まん／＼たるこの長兵衛、命限り足限り、歩く事ぢやもの。其方は草臥れいでなんとせう。あの境内の水茶屋で、大ころばし喰はせる程に、早うおぢや／＼。

小富　アイ／＼。

ト舞臺へ來る。

中一　よい所へ古鐵買ひ。賣らねばならぬ物がある。その子を連れて古鐵どの、マア／＼、爰へ來たり／＼。

皆々　サア、早いがよい／＼。

長兵　ハイ／＼、ドレ／＼、そこへ參りませう。

中二　コレ／＼、早速貴樣に賣りたい物がある。この脇差はいくらにならうな。

長兵　ドレ／＼。ても見事な拵らへ。鮫がなうて柄糸が眞田。せつぱはときが只の赤金。身が生くらで鞘が後家鞘。その變り鍔が國廣。踏んで見た所が鍔ばかりの値、百六十文に買ひませう。

中二　それはあんまり酷いと云ふもの。なんぼ此やうな態でも、百六十文と云ふ腰の物があるものか。二百文に買つて下され／＼。

長兵　どうして、これが二百に買はれるものでござりまする。

中二　そりやアあんまり酷いと云ふものだ。

長兵　そんなら、もう四文買つて上げう。

中二　そんなら負けてやれ。

ト手を打つ。その後へ中間一出で、

中一　サア、この布子、一ぱいに買つて、いくらが物があらうの。

長兵　ドレ。

ト布子を、いろ／＼に廣げ見て、綿をつまんで

この布子は、三百で持つて行きませう。

中一　ア、コレ／＼、此奴が／＼。引賣り同然な事を云やアがるな。コレヤイ、如何にこの布子が着過ぎだといつて、穢れたばかり、外になんともないぞえ。武士の衣類。大道中で三百文とは、どうだ。そこへ出て相手になれ。免さぬ／＼。

長兵　ア、申し、早まらしやりまするな／＼。お前の方で

賣らぬ氣なら、買はぬばかり。布子は其方の物、錢は此方の物。何も商賣づくでござります。お腹が立つなら堪忍なされ。
中一　それでも三百とは、あんまり廉い値の附けやう。
長兵　ハテ、また云はつしやりますか。この布子ばかりで二百文、百だけは虱を値に入れて三百文に附けました。
中一　エヽ、忌々しい。いつその事に三百に賣つてやれ。
長兵　三百に買つても、お前、腹は立たぬか。
中一　男は當つて碎けろだ。負けてやらう〳〵。
ト長兵衞へ布子を渡して、羽織の上へ帶を締める。
長兵　そんならソレ三百よ。お前にも百六十文よ。
ト錢を渡して、布子、脇差を籠の中へ入れる。
中一　サア〳〵、これから又、博奕が出來ると云ふものだ。
中二　サア、始めろ〳〵。
中二　それがよからう〳〵。シタガ、待ちやれよ。追ッ附けお歸りに間もあるまい。なんと、この森の蔭へ行くべいぢやアないか。
中三　それがよい〳〵。サア〳〵、來やれ〳〵。
長兵　お前方はもう、何も賣る物はないかえ。
中四　この頃に屋敷へ來やれ。

長兵　ハイ〳〵。
皆々　サア來い〳〵。
ト皆々下座へ入る。宮神樂になる。長兵衞、あたりを見廻し
長兵　如何に世の中の成行きぢやと云うて、誰れあらう、備前守行家ともあらう者が、辨慶縞の常陸屋、七つ道具の長兵衞と云ふ古鐵買ひ。思へば〳〵、エヽ、口惜しい世の中ぢやなア。
小富　申し父上さん、其やうな事仰しやつて、人が聞いても大事ないかえ。
長兵　大事なれど、口惜しいにつけ、不便につけ、思ひ出される我が身の上。追ッつけ甥の頼朝を亡ぼし、義經とこの行家、京と鎌倉とへ別れて、子孫の榮えを樂しみ、その時には其方にも、好い物着せて、それぞれに女も大勢使はせう。今は昔の物語り、樂しんで居や。
小富　イエ〳〵、わたしやどのやうな好い身の上にならずとも、お前の側に居たいわいなう。
長兵　そりや父とても同じ事。天にも地にも、たつた一人の其方、どうして離して置かうぞいなう。
ト云ふうち、花道にて人音する。長兵衞、ちよつと影

を隠す。花道より鎌田兵衛の一子、保丸、順禮の形にて、玉鶏の印を袱紗に包み、抱へて走り出て來る。跡より麻生の段八、雲助の形にて出て來る。保丸を引寄せて

段八　サア、わッぱしめ、らぬかぽつぽへ入れてけつかる、義朝軍勢催促の玉鶏の印、おれが方へ渡しやアがれ。

保丸　どのやうな事があつても、大切なる玉鶏の印、渡す事はならぬわいなう。

段八　麻生の段八へ渡せ。

保丸　ならぬわいなう。

段八　渡しやアがれ。
　ト保丸を引寄せて、玉鶏の印を取らうとする。

保丸　アレエ〳〵。
　ト逃げる。段八、追ひかける。後より長兵衛出で、段八を取つて投げ、寄る所を當てる。段八、ウンと倒れる。保丸、長兵衛にかゝるを、引寄せて締め殺す。小富、ブル〳〵慄へて居る。

長兵　怖い事はない〳〵。

小富　それでも怖いわいなう。

長兵　これこそ義朝の篋の一品。軍勢催促の玉鶏の印。エヽ、忝ない。
　ト頂き、懐中して段八を蹴る。段八、起き上がつて

段八　ヤア、こなたは行家どの。

長兵　やかましい。仕事は山分け。此方へ來い。
　ト行かうとする。岩戸神樂になり、西の方の乗り物より、齋藤次祐家、種ケ島を持ち出る。長兵衛、手はしこく小富を帶へ縛し附け、段八を引ッ張り、楯に取つてヂリ〳〵廻る。段八、長兵衛、氣味の惡きこなし、行かうとするを見て

齋藤　身動きすると、親子とも命がないぞ。

長兵　サアそれは。

齋藤　七つ道具の長兵衛と云ふ町人、尋常ならぬ人物と、兼ね〴〵聞いて待ち設けたる、越前の國の住人、齋藤次祐家。所領に替へて頼みたき仔細あり。うぢ〳〵せずと、これへ〳〵。

長兵　合點參らぬ祐家さま、拙者をお頼みなされたしとて、所領に替へんと仰せらるゝ、して又その御用はな。

齋藤　加賀の國に据ゑられたる、安宅の新關相改めとして、富樫の左衛門、聰明叡智を鼻にかけ、某をないがしろにするその無念、須臾の間も止む時なし。何卒彼れが越度

を拵らへ、腹切らせんと思へども、手段なければ是非に及ばず、今日まで延引せり。頼むと云ふは爰の事。彼れが妹松風姫、先つ頃、是明の君の御殿に於て、下河邊行平と不義をひろいで、御殿を穢せし科に負はせ、富樫の左衛門諸ともに、流罪させんと似せ勅使。この事仕負ふせるその人物、其方ならで外になし。手段と云ふは。

ト乗り物の中より風呂敷を一つ取り出し、長兵衛へ渡し

これを用意に、その科を。

長兵　烏帽子冠り、大紋装束。

ト開き見て

すりや、似せ勅使となつて

齋藤　頼まれたと云ふ誓言聞かう。

長兵　サア、その誓言は。

齋藤　なんと。

ト詰めよる。長兵衛、最前の鷄を捕へ

長兵　この鷄こそ日本の鳥類、願主を見れば富樫の左衛門。これこそ屈竟の會盟の印。この血を絞つて固めの神水。

ト鷄を殺し、血を呑んで齋藤次へ渡す。齋藤次呑んで段八へ投げて渡す。段八、氣味惡さうに呑んで長兵衛へ渡す。長兵衛取つて、その鳥を御手洗の中へ投げ込む。ドロ／＼になり、誂らへの合ひ方になり、池の中より、鷄の精、セリ上げる。四つ手駕籠の内よりおよし出て、これを見る。段八、齋藤次ともに、氣を失なひ、茫然と立ち竦み居る。其うち鷄の精、そろ／＼花道の方へ行くを、長兵衛、抜いて切りつける。鷄の精、業道にて長兵衛を苦しめ、花道の中にて消える。長兵衛、方々と切り拂ひ、舞臺へ來る。齋藤次、段八、心附いて三人、顔を見合せて囁き合ひ、齋藤次を先に立て、段八、花道へ入る。長兵衛、風呂敷包みを抱へ、小富が手を引いて四つ手駕籠を明ける。内よりおよし世話女房の形にて出る。直ぐに長兵衛が胸倉を取つて

よし　エヽ、こなさんは／＼。先刻にから、この内にて、みんな様子は聞いて居たわいなア。又しても／＼、惡い事にばつかり身を入れて、末はその身は、どうならうと思はしやんすぞ。こちの人。

長兵　エヽ、やかましい意見立て。惡事と知つて與みするも、みんな身の爲、我が子の爲。さて聞き分けてこの小富を、幸ひな所で預けた程に、大事にせい。

ト行かうとする。

よし　イエ〳〵、なんぼうでも、やらぬ〳〵。
長兵　エヽ、面倒な、退きくされ。
よし　待つた〳〵。

ト長兵衛、行かうとする。およし、無理やりに留めると、無理に振り放し、風呂敷包みを抱へて一散に向うへ入る。およし、小富を連れて、身拵らへして、後より行かうとする後へ、加賀次郎年國出て、小富を抱へ、およしを突き退け、花道へ一散に入る。およし驚ろき、加賀次郎が後を追うて花道へ入る。道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面に山組みの景色にて、左右の杜、紅葉の立ち樹、豊志太夫連中、見得よく並ばせ、正面より下げ下ろす。近年になき道具の物好きにて、前弾きより直ぐに淨瑠璃になる。

〽闇の地獄は親よりましぢや、ゆるさぬ妻、ゆるさぬ妻を持つ、親もゆるさぬ妻糸を、撫にかけたる縺の端まで解け兼ねて、わく方も、なげの情や仇惚れも、色の世界の小紫、お江戸氣質は女子にも、吾妻からげの何くれとかいやりすてし佛は、昔の道を慕ひ行く、月に紅葉に色増して、花にうつらふ戀の首尾。

ト淨瑠璃切れると、鳴り物入りの合ひ方になり、義經、眞中に廣袖衣裳、羽織の形にて、煙管を持ち、小さ刀を差し、紫の頭巾を頭に置き、張り肱をして馬に乘つて居る。この馬、もくらん張りにて綺麗にして、この東の方に、忍の前、女馬士、廣振り袖の形、肱ざかけ、頬かぶりをして、手綱を鞭にして立つて居る。直井左衛門、眞赤に塗つて、奴の形にて、岩臺に腰を掛け、紅葉の枝に塗り樽を付けて擔いで、左の手に大津火繩を持つて居る。この見得にて、三人をセリ上げる。

〽御痛はしや義經公、讒者の爲に御連枝の、御仲斷ちし旅衣、昨日は勅選の一に撰まれ給へども、今日は野中の月一つ、宿かる露のかごとにも、夕べ〳〵の夜を數へ、日を送る間の我れながら、雅よげに見ゆる女馬士、梅の一重は室にも寐るが、色に逢ふ夜の室がない、やつす姿も戀草の、戀の重荷に面痩せて、手綱を鞭にさま参る、しどけ形振り目に立つ娘、目に立つ供の丈夫や、直井の左衛門跡に附き、酒に科なき初紅葉、顔の日和と御贔屓を、力にかりの錦取り、氣轉きかせてねい〳〵〳〵、おつとまかせの煙草の火、差上げ参らせそろ〳〵と、ひそり染めたる脊と脊、擬つた女郎衆が憎かろならば、お先

鳥毛は十文宿、いつも我れらは八文字。
ト淨瑠璃のうち、いろ／＼面白き振りあつて
義經　直井の左衞門、なか／＼其方は味をやるわいの。どうも云へぬ／＼。
直井　これは／＼。拙者儀も、今度始めて斯樣な、有り難いお供を仰せ附けられましたるに依つて、なんでも氣が後れてはなりますまいと存じまして、熱燗にして、りんなりで、八九杯やッつけましてござりまするに依つて、ほろ／＼醉ひの酒機嫌、面白いやら嬉しいやら、うかうかこれまで參りましたでござりまする。ネイ、ござりまする。
義經　さうであらう／＼。時に、某も、斯うぢやわいの。馬の上はいから寒うて、裾から風が入つてならぬ程に、これから下りて、ちつとのうちも歩いては、どうであらうぞ。
直井　それは一段とようござりませう。サア／＼、拙者がお抱き申しませう。
ト側へ寄る直井を、煙管で退けて
義經　コレ野暮め、其方に抱かれて下りる位なら、飛んで下りても濟む事ぢやわいの。我れら、其方には、抱かれまい／＼。
直井　さて／＼、それではお危なうござります。ドレ／＼、拙者が。
義經　又かいの、ソレ、あれを知らぬか。キッとして結構なあの馬士、抱いて乘せるも抱いて下ろすも、道中の馬は馬方次第。氣轉きかせ／＼。
直井　實に／＼これは誤まつたり。君の仰せを蒙むれば、ドレ／＼、肱で突くべいか。
ト忍の前の側へより、脊中を叩く。
忍　おゝ辛氣。
直井　辛氣な筈だ。初舞臺來年一ぱい百助め、可愛がつてくんなさい。
忍　そりや此方から云ふ事ぢやわいなア。お頼み申さにやならぬぞえ。
直井　そりや又なんで。
忍　ハテ、轡の紋は馬方に、よくも大谷叶うたり。
直井　こいつはお洒落を岩井氏、爰で扇の蝶つがひ、離れぬやうに頼みんす。
義經　直井の左衞門、寒うてどうもならぬ。早う下ろしてくれぬかい。

直井　畏まりました。時にお娘、おれは此やうに見えても、馬に乗る事がきつう不器用。十四五年前に、古河の松原で落ちたものだ。それから此方、馬の側へ寄るのも嫌ひだ。近頃おせもじさまながら、おらが旦那を、ちよつと馬から下ろしてくれまいか。

忍　どうしてマア殿達を、女子の業に下ろし申す事がなるものぢやぞいなア。

直井　イヤ、あのやうに見えても、おらが旦那は、軽いと云つては〳〵、かるきのうしほ姿か、とうすみ賣りの一人者。ちよつと當つて見給へ〳〵。

忍　ぢやと云うて、あなたのお側へ、こちとらがやうな賤しき者が。

直井　そこが旅の習ひ、ちつとも大事ない程に、サア、お側へ寄つて、早う〳〵。

忍　そんなら、お免しなされませい。

直井　免さいでは〳〵。

義經　早う下ろしてもらひたい。

忍　それならドレ〳〵、わたしが下ろし申して上げませう。

ト義經を抱く。直ぐに忍の前に抱きついて、馬より下りる。直ぐに忍の前、振り放さうとする。直井、これを見て

直井　見るものぢやない。通らしやい〳〵。

忍　モシ〳〵、何をなされまするぞいな。悪い事をなされますな。爰お放しなされませ。

義經　爰がどうして放されるものか。田甫の替りぢや。ちつとの間、斯うして置いてたも。

忍　つんとモウ、お免しなされて下さりませい。義經さま。

ト義經、直井と顔見合せ、忍の前を引き廻して

義經　合點のゆかぬ。某が名をよつく知つて居る、其方は只の馬士ではないわいの。

直井　眞直に身の上を。

ト詰め寄る。

義經　聞くに及ばぬ伊達女子、所習ひの馬追ひ姿、名所古跡が尋ねたい。

忍　サアそれは。

直井　なんと。

〽驛路に慣れし賤の業、覺えし事も有りふれし、その名所に身を寄せて、松の色あるかいの濱、あれ荒乳山風誘

ふ、心のたけと胸の火と、思ひくらべて身を秋篠の、里も噂も世の譏りをも、罪も報いも未來の責も、だんないだんない、なになか〱にいとはじと、思ひ亂れし黒髪も、誰が賤機の山かづら、飽かぬ別れの淺水の橋や、篠山玉江に映る俤の、戀しうて〱、遙々したひ氣比の浦、誠の岩根に打つ波の、共に碎けてちり〱鳥の、鳴いて明かして居たわいな、誰れも袂は川島の、憂きには濡るゝ習ひぞや、寐覺の千鳥浮き寐鳥、鳴いて別れし都の空、思ひ出すも情なや、そもそも甲冑を枕となし、弓箭の業を本意ぞと、軍務に暇あらざりし、この身も今はうたかたの、哀れ果敢なき陸奥へ、再び結ぶ鴈の文、誰が玉章の返り事、思はせぶりの戀の罠、掛けて木賊の園原や、そのはらで居るこの奴、戀の奴は使はれものよ、寒の師走も日の六月も、さまに焦れて夜も日も通ふ、所讃ひかお國のさはり、姉が妹のヤレ酌をする、うつぼり〱浮かれて又、浮氣盛りのこのお娘、娘々と澤山さうに、云うてたもんな主さんならで、外に任せぬ身ぢやものを、女子たらしの憎らしい。

直井　なんぼ此方がさう云ふ氣でも、おらが旦那は、大抵や大方の疑ひではない。女にかゝると先を潜つて、あゝ云ふのは株であらう。斯う云ふのはあゝであらうと、潜つて〱潜り木戸を潜つてござるに依つて、相性でも見てもらふの、縁結びでもしてもらはざア、色事にもなるまい程に、さう思つてさつちいろサ。

忍　さつちいる事は、否ぢやわいな。

直井　それでも、あのやうに堅い顔してござりなさるれば、滅多に側へ寄られまいぞ。

忍　オ、辛氣。

〽千早振る、神の敎へを一筋に。

ト合ひ方になり、花道よりお馬屋の喜三太、鹿島の事觸れの形にて、白丁の肩ばかり掛けて、淺黃頭巾の上に烏帽子着て、襟に幣をさし、鈴を振つて出る。

〽諸國諸在所を、うんどもらが足にかけまくも、かけまくもかしこくも、これはこれより東の國、常陸鹿島さの事觸れて、おしやり申してござり申す、今年や世がようて、稲に八重穂が咲くと云ふ、酒の出來がよく小色がざらに、おかゝお寐るなら戸をたてゝお寐れ、かまが入るぞ鎗梅か、やれこれこんこちない鎗梅の、梢も梅にて候かしく、戀の色文戀草の、種蒔きよしと立ちよれば。

直井　コレ、喜べ〱、相性を見てもらひたい所へ、あれ

へおんぢやり申す鹿島の事觸れ、おれが爰へ呼ぶ程に、なんなりとも、そもじの願ひを、云つて見やれ〳〵。

忍　(思)こりや好い思ひ付きぢやわいなア。そんならお前、どうぞ好いやうに云うて、爰へ呼んで下さんせいなア。

直井　呑み込んだ〳〵。コレ事觸れ、貴樣にちよつと頼みたい事があるに依つて、あのお娘が側へ、なんと來てはくれまいか。

喜三　有やうはこの事觸れも、何ぞの用もあらうかと、ひよつくらひよつと出申した。願ひ望み失せ物待ち人、當卦本卦の占ひが、當ります〳〵。

ト鈴を振る。その袖を扣へて舞臺へ來る。

直井　當るとは有り難い。ちよつとお娘が手の筋を、どう云ふ筋か、見てやつてもらひたい。

喜三　ドレ〳〵、ちよつと見てやりませう。

忍　そんなら手の筋を、お世話ながら見て下さんせ。

ト手を出す。喜三太、手の筋を見て

喜三　ハア、先づこの筋が戀慕れゝつ。こちらの筋が浮氣半分。こちらの筋が眞實半分。こりやちつとむづかしいわいの。コレ、こちらの方のこの筋、先でも少し思ふと云ふ、手の筋に見えるわいの。

忍　そんなら、先でも思うてかえ。

喜三　思うてとも〳〵、思つて下馬先つなぎ馬、つなぎたがつて居らるゝ。

忍　そりやマア、ほんの事かいなア。

喜三　コレ、この手筋に顯はれて、あり〳〵と見えてある。

直井　ドレ〳〵。

喜三　それ〳〵、この手の筋が、すつと眞直ぐに通れば、相惚れの筋。この手の筋が横ッ丁の方へ押し通してあれば、角屋敷の嫁入り筋。それから斯うが小田原町。斯う廻れば石町、神田傳馬町。それから先が吉原筋、通つて居るが通り者、我れら手の筋の大通でえす。

ト鈴を振る。

直井　なか〳〵此奴、奇妙々々。とてもの事にサア旦那も、手の筋、どうでござりまする。

義經　イヤ〳〵、我れら手の筋どころでないでえす。見れば見る程可愛らしい手の筋。どうぞ、なら事ならば、足の筋から膝の筋、どこやらを見てやりたうて見てやりたうて、何所も彼所も無性れいほう。用心の鈴が鳴り居つて、大將甚だ辟易いたした。

喜三　さもさうず〳〵。そこを我れらが呑み込んで、祭り

を渡すこの宮奴。落ちついてござりませ。

直井　こりやア落ちついて居られますわい。落ちついて居るうち、どこからどんな風が吹いて來やうも知れぬに依つて、サア、此方から持ちかけたり〳〵。

忍　おやと云うて、打ちつけに恥かしいらしい。どうしてマア。

直井　云はれぬ所を、この奴が、そもじに替つてやらかすべい。

喜三　べい〳〵詞の辯口、さらば我れらも色事師と、ちよつと替つて聞くべいか。

直井　云ふわいなア。

喜三　聞かうわいなア。

〽これ申し、人に恨みがあらばこそ、思ひ切られぬ身の因果、思ひ過して戀しさの、袂の乾く隙とては、一日片時もないわいな、わたしやお前に打込んで、寐ても起きても、ほんにやれ、忘りやせぬにと、にじり寄り、後は無性にほえにける。

〽これ其やうな當振りでは、この色男はゆかぬぞや、自體奴が戀慕れゝつの譯知り、泪々に三泪、こざるきやれ、紋日物日をくつくり附きよとて、おん女郎さんさまの泪がけ、又は彌生の雛棚過ぎて、一季半季の花曇り、我れらが如きの裏店住居、山の神が怒り出し、皿や小鉢の滅多投げ、去つて〳〵去り狀の、三下り半のその上に、落ちる泪は茨の花、竈の神のお祟りを、すゞしめ給へとしやべりける。

義經　それ〳〵、世の中に、女子程恐ろしいものはないわいの。竪から見ても、上から見ても、人を騙さう〳〵と、明暮れ思うて居る所へ、ツイうか〳〵とかゝらうとは、危ない事。ドリヤ、我れらは去にましよか。

〽これなんの事ぢやいな、憎らしい、女子心は取分けて、戀には迫る胸の闇、つれなき人を戀ひ焦れ、亂れ染めにし陸奥の、文の文字摺りくど〳〵と、案じ煩らひ身をかこち、そもまアどのよなお神さんに、仇な緣を結ばれて、思ひ切られぬ小田卷の、いとし殿御と見る人は、三千世界を尋ねても、外にま一人あろかいな、惚れたが因果、これいなア、惚れられ給ふが因果ぞや、因果同士の中々に、さまでいとはぬ逢瀨川、わたしが心も思ひやり、可愛と思うて賜はれと、顏をも得上げず縋り寄る、君も今は片糸の、解けてかゝりし戀衣、ほころび安きと見て取つて、側から跡を月よみ日よみ、さて雨の宮風の

宮、とうかみ縁に引かれては、かんこん眞實取持つて、二つ枕を手枕に、ちよつと鹿島の事觸れか、やう〲吉野の夕まぐれ、月雪花の詠めかえ。〽雪が戀するものならば、逢はぬ夜毎に積るもつらい、逢うて解けぬも又辛氣、逢ふ夜つもりて打解けて、雪をば詠めるものならば、嬉しからうぢやあるまいか、それそれも嬉しかろ。〽花が戀するものならば、うつろふ色に替るもつらい、仇に契るも又辛氣、八重に思つて一重に咲いて、あかぬ盛りを詠めるならば、嬉しからうぢやあるまいか、それ〲それも嬉しかろ。〽月が戀するものならば、曇る心が折々辛い、晴れて思ふも又辛氣、逢ふ夜曇りて心が晴れて、替らぬ影を詠めるならば、嬉しからうぢやあるまいか、それ〲それも嬉しかろ、嬉しからうの若盛り。

ト踊り切ると、方々に人音する。直井、忍の前、義經を後に圍ひ、キッと思ひ入れある。喜三太俄かに驚ろき、をかしみいろ〲あるべし。

義經　しや、小癪なる鎌倉武士、義經これにある事を、早知つたるにやあの人音、昌俊如きの寄せ手の面々、某引請け追ひ返さん。

直井　こは御短慮なるぞや、太刀物の具もあらざるに、急かせ給ふは何事ぞや。先づ〲お扣へあられませう。

忍　それ〲、マア〲、お待ちなされませい。

直井　アレ〲、敵は近々へ寄せたれば、今こそ御身の御大事。先づ〲お忍びなされませい。

ト義經、忍の前、直井、ちよつと蔭をする。喜三太一人殘り、いろ〲身拵らへするをかしみあるべし。其所へ宮神樂にて、金澤太郎、以前の形にて、組子を大勢連れて來て、直ぐに喜三太を押取卷き

皆々　動くな。

金澤　サア、汝こそ義經の家來、お馬屋の喜三太と、よつく見拔いて取卷いた。遁がれぬ所だ。腕廻せ、エヽ。

喜三　ヤア、おぢやつたかな〲。お馬屋の喜三太と見拔かれたからは、どうで隱すに隱されぬ。有やうに名乘つて聞かさう、よつく聞け。事も愚かやつがれは、義經公の身内に於て、五天王の隨一と呼ばれたる、法性入道前の關白太政大臣、お馬屋の喜三太とはおれが事だ。

皆々　ヤア。

喜三　サア、何奴なりとも相手になれ。こちらの腕に八百人力、こちらの腕に八百人力、都合せて千六百人力。

一度に出して寄せ手の面々、一々並べてその首を、胴の中へ叩き込むぞ。それぢやア飯が喰はれまいぞ。

金澤　おきやアがれ。爭ひ面倒な。ソレ、喜三太に繩かけろ。

皆々　やらぬワ。

喜三　どつこい。

トこれより、笛、三味線入り合ひ方にて、をかしみのタテあつて、大勢を相手にいろ〳〵あつて、トヾ捕り手を花道へ追ひ込む。喜三太、花道へ入る。金澤太郎、小隠れする所へ、奥より、義經、忍の前、直井の左衛門出て、あたりを窺ひ

直井　今こそ君の御大事。一先づ爰をお立退きあつて、然るべう存じ奉りまする。

義經　とても斯くなる義經が絶運。寄せ手を引請け潔よく腹掻切つて最期を遂げん。直井の左衛門、用意々々。

直井　御切腹とは云ひ甲斐なし。暫しのうちの御艱難、御凌ぎあるものならば、頼朝公にも御連枝の御間、遂にめでたく御和睦。只今となり御短慮は、いよ〳〵野心に似給ふぞや。先づ〳〵お扣へ下さりませう。

忍　それ〳〵、直井の左衛門秀國どのゝ申されまする通り、月にも日にも折々は、曇り給ふ慣ひあり、暫しのうちは世の中を、忍ばせ給ふも御身の爲。憚りながら自らが、あなたの御供いたしませう。サア〳〵御立ちあられませう。

直井　待て。最前からの立振舞ひ、合點のゆかぬと思ひしに、今また君の御供して、いづれへに立退かんと、頼もしき詞の端。そもマア其方は、何者ぢや。

忍　斯うなりまする上からは、何をかお隠し申しませう。私し事は陸奥の一城主、藤原の秀衡が娘、忍と申しまする者でござりまするわいなア。

直井　ヤア、ナニ、其方が奥州秀衡が娘、忍の前とや。

忍　アイ〳〵、左やうでござりまする。

直井　誠に、思ひ出せば秀衡が五人の兄弟、その末子に忍の前、某下りし折柄は、まだ角髮のいたいけ盛り、父秀衡の秘藏深く

忍　義經公は、この忍が、夫よ妻よと仰しやつた、そのお詞を忘れかね、十三年の年月を、焦れ〳〵しこの身の上。都の事を承はり、もしやあなたも今一度、お下りなさるゝ事もやと、お遊びの爲あられもない、女子の業に馬追うて、不思議にお目にかゝれしも、盡きせぬ縁でご

ざります。憚りながら我が君にも、忍が心を御汲み分け遊ばし、これより直ぐに奥州へ、お下りなされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

義經　聞けば聞く程深切なる、忍の前が心ざし、忘れは置かぬ。嬉しいぞや。

直井　左やうでござる。十三年以前から、あなたの事を大切に、心にかけて居られしとは、日本一の情ある娘。御目かけられて遣はされませう。

義經　成る程〱、某とても兼ねてより、奥州へ下らんと、思ひ設けし事なれば、これより行くは安けれど、女子を連れて道しも如何。人の目つまにかゝらぬうち、其方は早う先へ行きや。

忍　イエ〱、折角これまで参りまして、お目にかゝりし忍、どうしてお先へ参られませう。どうぞあなたと御一緒に、お供いたして参りませう。

義經　サア、その心ざしは厚けれども、其方と一つに行く事は

忍直　そりやお情なうござりまする。折角これまでやうやうと、思ひ思うて参りましたに。

直井　ハテ〱、お別れ申してこの後に、二度逢はぬと云ふではなし、平にお供は、御無用々々。

忍　サア、さう仰しやるなれど、これぱつかりは。

義經　聞分けのない忍の前、唐李將軍が陣中にて、女を戒め氣を計りたる例しもある。静御前も津の國、大物の浦にて別れしぞや。おしつけ堅固で奥州の、父の屋形で對面せん。サア〱、早う先へ行きや。

忍　お詞返すは恐れあれど、五つや六つのその時より、思ひ初めたる義經公。

直井　ハテサテ、それもおしつけ何やかや。搗てゝ加へてお話し申すぢや。

ト云ふうち人音する。

直井　アレ〱、又も追手の人音。目にかゝつては爲にならぬ。サア〱、早う立退き召され。

義經　それ〱、直井の左衞門、忍の前を四五里がうち、せめて送つてやつてたも。

直井　畏まりました。イザ〱。

ト忍の前を引立てる。

忍　コレ申し、我が君様。

直井　コリヤ。

〽忍は餘りに堪え兼ねて、逢ふ事しげき戀路さへ、別れ

て辛いものなるに、まして妾が身の上は、お側離れていつか又、お詞交す事もなく、戀し〳〵と思ひ寐の、夢にお顏を見るよりは、外に泪の憂き別れ、せめて筐と縋り寄る、汀も便なく思せども、今さらの物思ひ、未練見せじと振り拂ひ、立退き給ふを慕ひ寄る、仲を隔つる雨やさめ、諫め〳〵て詮方も、泪に道も白河や、陸奧さして。

ト忍の前、直井の左衞門、入る。

義經　忍の前の心ざし、不便には思へども、この身に迫る今の難儀。堪忍してくれいやい。

ト思ひ入れして

イヤ〳〵、斯う云ふうちも安からぬ、某が身の上。人目にそれとかゝらぬやうに。

トおしよぼからげなして、頰かぶりをかぶり、馬士の形に拵らへ、馬を引いて、花道へかゝる。金澤太郎始め皆々、義經を押し返す。

皆々　動くな。

義經　これは旦那衆、どうでござりまする。この馬士に動くなとはえ。

金澤　成る程こりやア馬士だ。隱れまがひもない馬士だと、よつく見拔いて取卷いた。馬士ならば用がある。

義經　ハテ怖い。馬士なら、して馬方に御用とはえ。

金澤　外の事でもない。今度鎌倉表より、お尋ねなさる馬がある。それゆゑわれにその馬の、在所をちよつと聞かうと思つて。

ト立廻りあつて、捕り手を投げて

義經　成る程、わしやア馬の事なら、なんなりともお尋ねなさい。お話し申しませう。

金澤　そんならわれがあの馬の所謂れ、古事來歷、尋ねる事を吐かすぢやまで。

ト寄る。立廻りあつて、金澤を投げて

義經　そりや、なんなりとも申しませう。

金澤　ソレ。

皆々　やらぬワ。

義經　やらぬもやるも馬士次第。はいしいどうでも相手になるか。

〽傳へ聞く、車匿の童子も御佛の、誓ひの駒に法の道、荒乘り道の駒だにも、つなげばつなぐ物ならば、色と情のないまでも、手綱を腰に馬柄杓、難波入り江の蘆分けの、駒や月毛ひばり毛甲斐の黑額、白三つ白四つ白つき額、さても見事な乘掛け馬や、手綱早めて行く時は、い

つも櫻の花心。

皆々　どつこい。

〽透を窺ひ左右より、捕つたとかゝるを無二無三、なぐり情も荒馬に、ひらりと法の玉鉾や、西天竺までかけりたる、彼の周の代の駿馬にも、劣らじものと勇み足、駒も嫩葉の山嵐、颯々と吹き下ろす、風か木の葉か、さら〳〵、流石源氏の御大將、越路をさして一鞭に、打立て打立て。

ト三重の切れに一セイになり、向うへ義經、馬に乗つて、紅葉の枝を鞭にして、勇ましく入る。

幕

五建目　安宅の關の場

大薩摩主膳太夫連中

役名――伊豫守源義經。富樫左衛門家直。源八兵衛廣綱。鷲尾三郎義久。常陸坊海存。備前平四郎成景。江田源三廣基。大津次郎民利。堺尾十郎兼房。赤井八郎景次。駿河次郎清重。齊藤次祐家。出羽軍藤太俊高。樋爪太郎則秀。武藏坊辨慶。

本舞臺、三間の間、加賀の國、安宅の關所にて、西東に見得よき木戸を出來ひ、正面に幕を張り、突棒刺叉を飾りつけ、番手桶、これに好みあり、東の柱に、松の上枝をとぢ附け、思ひの儘に枝葉茂り、高塀一ぱいに這ひかゝり、その枝、南の柱まで屆き、この枝に里好が紋の付いたる衣裳の片袖を掛けある。幕の内より、大すゝ流しの紋の附きたる高提灯五張り、侍ひ大勢持つて居る。出羽軍藤太、樋爪の太郎、對のぶッ裂き羽織、袴、股立ちの形にて、弓張り提灯を持つて居る。物音して人聲にて幕明く。

ト出羽、樋爪、方々へ氣を附ける。

出羽　方々ぬかるな。この關所こそ、この度源二位頼朝公、伊豫守義經公、御連枝の御仲不和となり給ひ、都堀川の館を逐電ありて、行くへ知れずとの風聞によつて、新關を据ゑ置く。もしや奥州へ二度下らんとの心もやと、往來を改めるその爲。正しく最前忍び越えしは怪しき曲者。なんと左やうではござらぬか。

樋爪　如何にも。出羽の軍藤太俊高どのゝ仰せの通り、夜の明けぬに忍び越せしは、曲者に相違ござらぬ。晝のう

ちは齋藤次祐家が役目、曲者に關を越えられしは、富樫左衞門が不調法。申し譯はござるまい。侍ひ中、關所のぐるりを詮議をしやれ。

ト云ふうち花道にて「齋藤次祐家の御入り」と呼ぶ。時の太鼓にて、祐家、白髮親仁にて、股立ち、烏帽子、大紋、龍神卷きにて、中啓を持ち、先へ轡の紋の付きし高提灯を二張り立て、侍ひ大勢附き添ひ、直ぐに本舞臺へ來て、方々見廻す。出羽、樋爪、下へ下がつて

出羽　齋藤次祐家さま、關所を越せし曲者の樣子。

樋爪　詳しくお聞きなされましたか。

齋藤　如何にも。この度頼朝公の嚴命にて、新たに据ゑられし加賀の國安宅の關所、何者にか越えられしとの風聞あつては、富樫の左衞門は格別、斯く申す越前國の住人、齋藤次祐家、年こそ寄れ、鎌倉どのへ對し、一言半句の申し譯がござらぬ。依つて取る物も取り敢へず、爰へ罷り越してござる。定めて爰の角、彼所の隅々、怪しい所を各々は、詮議をしやつたか。

出羽　左やうでござる。隨分と殘りなく詮議いたしてござれども、これぞと申す怪しい事も見えませぬ。夜の明けぬうち、詰め所の關所を、破られし富樫左衞門は、論なしの不調法。差當つて痛い腹をやらかさざアなりますまい。なんと齋藤次どの、苦々しい事ぢやアござらぬか。

樋爪　越度がござれば我れ／＼とても、武士の役目、切腹仕るは兼ねての心得。大切なるこの關所を越したる曲者こそ、義經の身寄りかも知れませぬ。左やうでござれば、富樫の左衞門は切腹では濟みますまい。殊に依つたら縛り首。

齋藤　コレ／＼、如何に若いとて、滅多な事を申すな。大切なる安宅の關所、富樫左衞門家直、何者に越えられしと、此方から訴へても、證據なければ水掛け論。却つて人の嘲りを受くる。それとも慥かな證據があるか。

樋爪　サアそれは。

齋藤　なんと。

出羽　まだ其所へは參りませぬ。

齋藤　馬鹿々々しい。其やうな事で、富樫の左衞門に腹切らせられるものか。控へてお居やれ。

出羽　心得てござる。

齋藤　ナニ、方々、いよ／＼曲者忍び越えしとの儀に相違なくば、今一度方々詮議おしやれ。

皆々　ハア。

ト所々へ氣を附ける。

齋藤　待て〳〵。見れば合點のゆかぬ、あの松が枝に掛りあるは、何やら異な物の體に見ゆる。早く下ろして持つて參れ。

皆々　畏まりました。

ト手ばしこく、松の枝にかゝりたる片袖を取つて、齋藤次に渡す。齋藤次、合點のゆかぬ思ひ入れして

齋藤　さてこそ片袖。縫ひたる紋は抱き若松、殊に女の片袖、あの松が枝に掛りしは、關を越したる曲者の證據。これさへあれば富樫の左衞門家直が、不調法に相違はない。然らば鎌倉どのへ、右の樣子を言上して

出羽　左衞門が身の上は

樋爪　いよ〳〵切腹。

齋藤　やかましい。この上は、義經に氣を附けい。

皆々　畏まりました。

ト囁き、皆々思ひ入れして、齋藤次、片袖を隱して、見事に居並ぶ。ト主膳太夫、淨瑠璃、大薩摩。

〽旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん、鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日もはる〴〵と越路の末、義經公の御有樣、木にも萱にも往來にも、心を奧の高館へ、主從以上十二人、いまだ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日明け初めていつまでの、限りといざや白波の、末は遙かに湊なる、蘆の篠原波よせて、なびく嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。

トこの淨瑠璃、好き程のうちより、義經、駿河次郎、大津次郎、赤井次郎、江田の源三、常陸坊、源八兵衞、いづれも廣袖、着流し、水衣、兜巾、篠懸、半大口にて、脛當を垂れ、草鞋、金剛杖、珠數、各々綺麗に取揃へ、花道へ出て居並ぶ。

義經　義經いやしくも淸和の臺を出で、多田の滿仲の正統いま天下に威を振ひ、六十餘州がその間を納め給ふ、右大將正二位賴朝、我が兄ながら、梶原父子が奸佞の舌先にかゝり、空しく兄弟の親しみを斷ちしが、思へば思へば淺ましいなア。

駿河　その御憤りこそ御尤もに存じまする。我が君親兄の禮を重んじ給ひ、鎌倉どのへ對し、野心なきとの義經公の御胸中は、源氏の氏神、正八幡も照覽あれ。

大津　世に讒言程、情なきものはなし、ゆゑに菅原の道眞卿、道を尊び給へども、讒者時平が業に依つて、遂に筑紫の波枕。

鷲尾　誠に叢蘭茂らんとすれば、秋風これを破るとかや。平家や木曾の大敵を打ち亡ぼし、國家を治め給ひしも、皆我が君の鋒先ならずや。云ひ甲斐なき頼朝公の御計らひ、これ大將の器にあらず、憤りを以て憤り向はゞ、忽ち御連枝吳越となり。

備前　無順となりてしのぎを削らば、我れ〳〵とても必死の一戰、おのれやれ鎌倉勢、敗北させてくれんずものと

増尾　早る心も君の爲、一先づ都を開かせられ、再び奥へ忍ばるゝ、義經公の御身の上。御痛はしくも時節を待ち

赤井　只諦らめて道すがら、供奉するが忠臣ならずや。行く先とても敵の中、油斷のならざる今の身の上。

江田　八方へ目を配り、互ひに心附け合ひて、すは御大事と見るならば、今の命は浮世の塵。

常陸　さもさうず〳〵、命の値段は三分五厘、極まる相場は皆相伴。後れは取らじ働らきて

源八　君に惻隱の仁あれば、臣に羞惡の義を頂き、憐愍深き主君を持ち、などか落命苦しかるまじ。さりながら、今の旅行は安からぬ御身の上。

駿河　駿河の次郎淸重。

大津　大津の次郎氏利。

鷲尾　鷲尾三郎義久。

備前　備前平四郎盛景。

増尾　増尾の十郎兼房。

赤井　赤井次郎景次。

江田　江田の源三廣基。

常陸　常陸坊海存。

源八　源八兵衞廣綱。各々心を

皆々　一致にして。

義經　音高し〳〵。これより先は安宅の湊。富樫の左衞門家直、齋藤次祐家、爰に新關を据ゑ、山伏を堅く忌むとの事。我れ〳〵が身の上に、差當りたる難儀の一つ。

常陸　こは御諚とも覺えぬものかな。この關一つは苦にならぬ。只打ち破つて。

義經　コリヤ、この關一つ打ち破り、通らん事は易けれど、秀衡が館へ某が落ちつくまで、路次の狼藉覺束なし。只何事も事故なく、源八兵衞廣綱、其方よきに計らうてよからう。

源八　畏まつてござります。某キッと心をめぐらし見まするに、我れ〳〵を初め、何れと申しましてか相違ござらぬ山伏姿。我が君を見まするに、陳じても陳じられぬ伊

豫守義經公、恐れ多くは候へども、某がこの笈を、君の御脊におほはかれば、御篠懸をも退けられて、只剛力の姿にて、笠深々とめし給ひ、隨分と疲れ給ひし御姿にて、我れ〳〵よりも引下がりて、御通り遊ばされ、然るべう存じ奉りまする。

義經　イカサマ、これは尤もなる廣綱が計らひ。併しながら、この所を立越えんには、武藏坊辨慶、道に後れしゆゑ、爰にて待ち合せ、我れ〳〵諸とも通らいでは。

駿河　武藏坊辨慶、我が君に後れましたるこそ幸ひ、まだ明けやらぬ東雲に、目立たぬやうに、イザ〳〵お越しあられませう。

義經　ナニサマ、その儀然るべし。ドレ〳〵。

源八　イザ篠懸を取らせられ、この笈を、イザ。

ト花道にて源八、義經に笈を負はせ、篠懸を取つて跡へ殘し、源八、上の方へ直り

隨分と、草臥れたる體を、必らずお忘れなされまするな。

義經　合點ぢや。

源八　イザ。

トのつとになり、源八初め、何れも舞臺へ來る。義經、後より足を引摺りながら來る。齋藤次見て

齋藤　ソリヤ。

ト云ふうち、大勢立ちかゝつて

皆々　待てエ、。

源八　合點の參らぬ各々方、我れ〳〵を何ゆゑ止め給ふ。南都東大寺建立の爲に、國々へ役僧を遣はし、報謝にあづからんが爲に、只今北陸道を罷り通る、我れ〳〵を、支へ給ふは何ゆゑでござる。

齋藤　ヤア、何ゆゑとは愚か〳〵。賴朝義經、御仲不和にならせ給ふにより、判官どのは奧州秀衡を賴まんが爲、十二人の山伏となりて、この關へ通らんは必定。依つて國々に新關を建て、往來を止むる我れ〳〵が役目。齋藤次祐家、この所に扣へる上からは、どつこいそつこい、一人も通す事はならないぞ。

源八　この情なき關守の仰せ。例へ鎌倉どのゝ仰せなりとも、よもや誠の山伏を止めよとの仰せには候ふまじ。サア恙なう、この關を通し召されて下されい。

齋藤　誠にもせよ、似せにもせよ、問答はむづかしい。一人も通す事はならぬ。

源八　然らば、いよ〳〵通さるゝ事はなりませぬか。

齋藤　くどい〱。某この所に在りながら、やみ〱通しては、鎌倉どのへ申し譯がない。どこがどこまでも通す事はならぬぞ。

皆々　ホイ。

齋藤　一々何奴らにも繩をぶて。

出羽　心得てござる。サア、山伏達、遁れぬところ。尋常に腕を廻して繩にかゝれ。

樋爪　又この上にいおむお吐かさば、どんな憂き目を見やうも知れぬ。キリ〱腕を廻せ、エ、。

皆々　こりやもう、いつそ。

源八　エ、情ないこの場の仕儀、打ち破らんは易けれど、手を拱ぬいて控へるか。エ、殘念な。

皆々　エ、、口惜しいなア。

樋爪　繩かゝれ。

皆々　どうだエ、。

辨慶　待つた。

皆々　どつこい。

トのつとになる。辨慶、花道より、緋の衣の露を取つたる形にて、毬栗かづら、檜笠にて、いらたか珠數、金剛杖を持ち、重ね草鞋にて出で來りて、直ぐに本舞臺へ來て、侍ひを突き退け、十人を後に圍ひ、キツと思ひ入れある。

皆々　どつこい。

樋爪　待て〱。大きな坊主がつん出たが、さらやア和僧は親玉だな。

出羽　合點のゆかぬ山伏ども。通す事はならないぞ。

齋藤　キリ〱爰を下がれ、エ、。

皆々　どうだ。

齋藤　イヤサ。

皆々　どうだエ、。

辨慶　それ山伏といつぱ、不思議な緣の優婆塞で、勸三が芝居を動かず去らず、不動と成田屋十兵衛、三代四代とち萬歲、頭に頂く御兜巾は、こちの判官を象りたり、十二因緣霜月朔日、柿の素袍は子に讓り、柿の篠懸染め替へた、斯くて妨げなすならば、握る拳の法螺貝で、一張はつて春の峰、落花狼藉千萬な、命の手の内乞はん爲。これまで出たる優法師。お見知りなされてくんさりませう。

皆々　どつこい。

出羽　此奴が〱、どうやら氣味の惡い奴だが、うぬはマ

ア、なんと云ふ山伏だ。
辨慶　ナニわしかえ。わたしが名は讃岐坊。
出羽　なんだ齒拔け坊だ。そんなら龜の甲の笠をかぶれば
いゝワ。
樋爪　おきやアがれ。
齋藤　合點のゆかぬ山伏十二人。義經主從に違ひはない。
ソレ、やるな。
皆々　やらぬぞ。
山皆　なんと。
皆々　動くな。
富樫　待つた。
皆々　待てとは。
富樫　加賀の國の住人、富樫の左衛門が留めた。方々お扣
へなされ。
皆々　ヤア。
ト鼓の合ひ方になり、正面上げ障子。この内に富樫、
素袍の形にて、キッと思ひ入れして居る。
齋藤　誰れだと思つたら富樫の左衛門。胡亂なる山伏十二
人、引ッ縛らんと存じた所を、貴殿はなんで止め召さる
た。

富樫　頼朝公義經公、御仲不和とならせ給ひ、先年奥州へ
立退かれ給ふ例ありとて、この所に關を据ゑ、往來を止
めよとの、鎌倉どのよりの嚴命。某とても義經を詮議な
す役人。怪しき者と存じたればこそ、貴殿をお止め申し
た。相役の富樫の左衛門、卒爾な事は致さぬ。先づ〳〵
下にお居やれ。
齋藤　こりや面白い。義經を見遁がせば謀叛の荷擔人。詮
議の仕樣が手緩いと、この齋藤次祐家が、鎌倉どのへ言
上するぞ。
出羽　年寄りを差措いて、差出た事をお云やつて、必らず
後悔おしやるな。
樋爪　ひよつと不念な事があつて、よしない事をしたなど
と、口の内で云ふものサ。
齋藤　そんなら隨分、不調法のないやうに詮議をしやれ。
富樫　凡そ孝德天皇の御宇に、始めて諸國に關所を据ゆる。
それより伊勢の國に鈴鹿の關、美濃の國に不破の關、近
江の國に逢坂の關、越中に礪並の關、越後には直江の關、
加賀の國には安宅の關。風も洩らさぬ天下の上意。富樫
の左衛門實直、若輩ではござれども、卒爾な事は仕ら
ぬ。お年寄りのお心遣ひは、御無用にして差措かれい。

齋藤　萬事よろしく頼み申す。
富樫　ちつともお氣遣ひなさるゝな。サア、往來の山伏達、なんとも合點がゆかぬ。義經主從も十二人、おことらも同行十二人。伊豫守義經どの主從と見た目は僻目か。有やうに身の上をお明かし召されい。
辨慶　こは思ひも依らぬ關守りの御尋ね。我れ〳〵事は、紀州熊野より出羽の羽黑山へ、罷り通る山伏に相違ござらぬ。深くは詮議おしやつても、山伏は山伏、生粹の山伏。キリ〳〵關を開いてお通し召されい。
山皆　通し召されい。
富樫　容易には通さぬ〳〵。サア、山伏とある慥かな證據が出でざれば、富樫の左衞門が罷り成らぬ。
山皆　サアそれは。
富樫　誠南都の建立とあれば、俊乘坊澄源より添へ狀のあるべき筈。大佛殿の建立とある添へ狀なければ、叶はぬ。
辨慶　サアそれは。
富樫　添へ狀があるか。
辨慶　さん候ふ。新關の据りし事、南都にては未だ知らず、さるに依つて添へ狀は持ち申さぬ。

富樫　添へ狀がなくて證據があるか。
辨慶　慥かな證據は勸進帳。人を進むるこの一卷、身の上の證據に聞し召されい。
富樫　十二人を進むる勸進帳とや。
辨慶　如何にも。
富樫　證據とならば早う。
辨慶　心得申して候ふ。
　トこれより叉鼓の合ひ方になり、辨慶、心附いて、浮瑠璃の卷き物を出して讀みかゝる。兩方より「捕つた」とかゝるを投げ散らす。どつこいととまる。
それ、つら〳〵思ん見れば、大恩敎主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢、驚ろかすべき人の上。
　ト兩方より勸進帳を取りにかゝる。これを左右へ投げてどつこいととゞまる。
〽茲に中頃の帝在します、御名をば聖武皇帝と名付け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、なんだ玉を貫く思ひ。
辨慶　思ひを千路に飜へして、るしやな佛を建立す。斯樣の靈場の絕えなん事を悲しみて
出樋　それを。

ト又かゝる。

辨慶　何ひろぐ。

ト兩人の腕を捻ぢ上げる。

〽しゆせん蓮華の上に座せん、奇妙敬首敬つて申すと、天も響けと讀み上げたり。

ト淨瑠璃のうち辨慶、下に置きし勸進帳を取つて頂く。淨瑠璃切れる。

富樫　その一卷の勸進帳を聞く上は、詮議に及ばぬ。爰を通り召されい。

辨慶　すりや、爰を。

富樫　通り召されい。

齋藤　待つた。先達て噂には、武藏坊辨慶こそ、三塔一の博識にて、辯舌ふるなを欺むくとや。勸進帳の出放題、やらかすまいものでもない。それを證據に通すとは、年のゆかぬ富樫の左衞門、ちつとどやつとど御不念でござらうぞや。

富樫　サアそれは。

齋藤　最前から目を附けて罷りあつた中に、一人の山伏こそ、伊豫守義經に違ひない。繩ぶつて詮議する。者ども、戸さしを固めて、一人も動かぬやうに油斷をするな。

辨慶　すりや一人、義經に似たる者ありとのお咎めとや。

齋藤　くどい〳〵。ソレ、笠傾むけて顏を隱し、後に下がりし山伏こそ伊豫守義經。ソレ、やるな。

皆々　やらぬワ。

ト大勢、義經を取卷く。辨慶、大勢を突き退け、義經を引寄せて、金剛杖にて、滅多打ちに打ち据ゑる。皆々驚ろき

皆々　これは。

辨慶　言語道斷、强方やある。汝が後に後れずば、義經と咎むる者もあるまじきに、又ぞろ道に後るゝゆゑ、人も怪しむワ。斯くあらずんば、能登の國まで行くべきに、憎くき强力の振舞ひ。思ひ知れ〳〵。

ト義經を打ち据ゑる。皆々辨慶が側へ寄らうとする。

義經　如何なる打擲に遭ふとても、申し譯なきこの强力。足に痛みの候へば、免して給はれ先達どの。我が誤まりと存ずるゆゑ、返す詞はござりませぬ。

辨慶　彼奴こそ我れ〳〵が連れたる處の强力。この上にも疑はるゝものならば、金剛杖の相伴に、力の程をお目にかけうか。サア〳〵、なんと。

齋藤　そんなら、えゝわサ。

辨慶　あゝ、つがもない。
富樫　ハテ、たくましき先達の有樣。詞に誠を現はしたれば、强力に相違もござるまい。安宅の關守り富樫の左衞門家直、詮議の上、相違もなき往來の山伏、キリ〳〵爰を通り召されい。
辨慶　すりや、爰を。
富樫　早う〳〵。
辨慶　エヽ、忝ない。
齋藤　そりやアならない。鎌倉どのより嚴命に依つて、山伏を留めよとある。安宅の關をやみ〳〵通しては、おてまへは格別、斯く申す齋藤次祐家が立ち申さぬ。どこがどこまでも罷りならぬ。
富樫　左やうこざらばようござる。富樫の左衞門家直を差措き、其許一人の計らひにおしやれ。
齋藤　云ふにや及ぶ。この由、鎌倉どのへ上聞に達して。
富樫　仰せつけられたる役目が立つか。
齋藤　サアそれは。
富樫　鎌倉の詮議を賴まば、我れ〳〵がこの所に於て詮議いたすは詮なき事。それでも役目が勤まりますか。
齋藤　サアそれは。

富樫　お年が寄つたか祐家どの、刃金が内へ廻り申す。
齋藤　そんなら貴殿の御勝手次第。さりながら、その先達こそ辨慶に違ひはない。有やうに名乘れ〳〵。
辨慶　サアそれは。
齋藤　齋藤次祐家も、相役の目鏡を以て繩かける。ソレ、あの先達に繩を掛けろ。
出羽　心得てござる。
齋藤　早く〳〵。
出羽　サア、先達の大入道、遁がれぬ所、辨慶と名乘らぬか。サア〳〵なんと。
辨慶　はい。
出羽　捕つた。
ト出羽、辨慶を縛る。皆々寄らうとする。
出羽　途方もない奴だ。
齋藤　出かした〳〵。その松の木へ縛し附けい。
樋爪　立たう。
ト辨慶を松の木へ縛し付けろ。
富樫　行く先とても關所あり、爰の切手なうては叶はぬ叶はぬ。富樫左衞門家直が、相違なきとの往來切手。
ト切手を投げてやる。

皆々　これは。
富樫　越えぬより、思ひこそすれ陸奥の、名に流れたる白川の關。キリ〳〵爰を通り召されい。
皆々　忝ない。
富樫　祐家どの、ござりませう。
ト唄になり、富樫、齋藤次、奥へ入る。時の太鼓になる。義經、皆々、奥へ行く。辨慶一人、殘る。樋爪、出羽、侍ひ殘らず舞臺先へ出て
出羽　ヤレ〳〵、むづかしい詮議であつた。成る程、今のを通してやるにやア、ちつと不氣味であつた。
皆々　それ〳〵。
樋爪　時にこの坊主めだ。辨慶ならば、よもやお主が手で、縛られさうもないものだ。
出羽　コレ〳〵、あんまり人を安くするな。辨慶だと云つて、おれだと云つて、あんまり力に負けはせぬ。日頃からなんぞで力量が見せたかつた。今日と云ふ今日、音に聞えし三塔一の强者、武藏坊辨慶を搦め捕つたは、なんと强い手柄ぢやアあるまいか。
樋爪　成る程、あれが辨慶ならば、おぬしやア大きな手柄者。何しろあの親玉を縛るとは、途方もない役が當つたぞや。
出羽　また煩らはねばよいが。さて、これからみんな寄つて、あの坊主を弄るべいぢやねえか。
樋爪　そりやよからう〳〵。
出羽　コレ、ヤイ、さう縛られては動きは取れぬ。サア、有やうに名を名乘れ。
辨慶　無理な事ばつかり云はつしやる。辨慶ではないもせぬものを。
出羽　なんだ、辨慶でない。辨慶でないと吐かせば、コレ、この金剛杖で頬ぺたを突き破るぞ。
ト樋爪の太郎、辨慶が前へ金剛杖を突き出す。辨慶、膽を潰す。出羽軍藤直ぐに
出羽　ヤイ先達、先達て承知いたした。われは大方辨慶であらう。おいらに縛られて口惜しいか。口惜しかア名を名乘れ。
辨慶　お前、無理な事を云はつしやる。辨慶ではないものを。
出羽　辨慶でないと吐かせば、甘酒を振舞ひませう。
樋爪　おいらも振舞ひませう。
侍皆　おいらも振舞ひませう。

ト思ひ〳〵に、辨慶を蹴たり踏んだりして、いろ〳〵弄る。辨慶、めそ〳〵泣く。

出羽　これ見やれ。此奴は辨慶ではないさうで、大きな態をして、めそ〳〵吠えるさうだ。コレ坊よ、わりやア泣くか。ヤレ、可愛や〳〵。こんな時だ。一年中投げられたり、踏まれたりする代りに、斯うしてやるべい。

ト叩く。

樋爪　コレヤイ、それ程に縛られたのが切なきア、辨慶と名乘れ。

皆々　名乘りやアがれ〳〵。

辨慶　おれも有やうは辨慶と名乘りたいが、辨慶でもないもせぬものを。

出羽　そんなら辨慶ではないか。

辨慶　なにサ。

皆々　ハテナア。

辨慶　腹からの山伏でごんす。今度出羽の國、羽黒山へ閉ぢ籠りに、行くに違ひはござりませぬ。

出羽　そんなら、それに違ひはないか。

辨慶　なにサ。

出羽　そんなら、この道筋を知つて居るか。

辨慶　イヽエ。

出羽　そんなら、この道筋を知らないか。

辨慶　どうぞ教へて下さりませ。

樋爪　この安宅の關から、野の市へ一里、野の市から加賀の金澤へ又一里。

出羽　加賀の金澤から高松へ出で、今濱いくの山、この間が山越しに十八里。

辨慶　そんなら今の山伏も、餘ッぽど行つたでござりませうな。

出羽　慥かにもう一二里行つたであらう。

辨慶　そんならまだ早いわえ。

出羽　早いとは。

辨慶　お前の事サ。

出羽　おれが事とは。

辨慶　お前の手の內、わしに繩をかけさしやつた、その手の內の早さと云ふもの。それが早かつたと云ふ事サ。

出羽　さう云はれて、乘り地を語るではないが、まだ〳〵あんなこつちやアない。

辨慶　ハテナ。

出羽　早いと云つちやア、先づ第一足が早い。そして

樋爪　手が早し、そして女房は子が早し、そして口が早し、耳が早し。

辨慶　もういくら程、今の山伏は行つたらうな。

出羽　大方三里も行つたであらう。

辨慶　そんなら、もう好い加減だわい。

出羽　好い加減とは、なんの事だ。

辨慶　好い加減とは、後から行く事だ。

出羽　そんならわりやア

辨慶　武藏坊辨慶だワ。

ト縛り繩を切る。

皆々　イヤア。

辨慶　我が君を落し參らせ、後から追ッかくる忠義の一つ。そこ押ッ開いて通すまいか。

出羽　辨慶と聞いちやア通されぬ。ソレ、やるな。

皆々　やらぬワ。

辨慶　いで物見せん。

皆々　どつこい。

トこれより太鼓の合ひ方になり、辨慶、氣味のよきタテあつて、トゞ殘らず首を拔き、天水桶の中へ打込む。これを出羽、懷へながら手傳つて運ぶ。それより出羽が首を引き拔き、キッと思ひ入れする所へ、以前の山伏殘らず出て來る。此うち、義經ばかり出ず。皆々取つて歸し、辨慶を見て

山皆　出來た／＼。

辨慶　やかましい。

ト辨慶、金剛杖を二本取つて、首を芋のやうに、天水桶に立てゝ洗ふと、片シヤギリにて、幕引く。

一番目大詰　富樫館の場

役名——富樫左衛門家直。齋藤次祐家。下河邊庄司行平。常陸坊海存。馬士、由松實ハ富樫直石丸。加賀次郎年國。奴、時助實ハ伊勢三郎義盛。直井左衛門秀國。井上次郎重永實ハ備前守行家。同娘、小富。中納言義明實ハ麻生の段八。義盛女房、お市。敷妙實ハ行家女房およし。富樫妹、松風姫。直井妹、村雨姫。腰元、籬。同、幾代。同、早枝。遣り手、お遠。若い者、喜助。傾城、若松實ハ鷄の精。鷲尾三郎義久。川越太郎重頼。不動明王。矜迦羅童子。制多迦童子。

本舞臺、三間の間、富樫の左衛門館の體。上の方へ寄せて綺麗なる亭あり、下柱に紅葉の立ち木、この所に井筒、人の出入りなるやうにして、幕の內より松風姬、襠補衣裳にて、手拭にてめんないちどりなかけ、その先へ下河邊行平、上下衣裳にて、腰元、籬、早枝、幾代、何れも襠補衣裳にて、目隱しなして居る見得。騷ぎにて幕明く。

ト いづれも逃げ廻り、行平を度々突きやる。行平、突きやられて逃げようとする。

行平　手の鳴る方へ〱。

皆々　お姬樣。まだえ〱、手の鳴る方へ〱。

行平　サア取つて見やれ。

皆々　お姬樣。まだえ〱。

ト 方々へ逃げ歩く。行平も同じやうに、逃げ歩く。松風、方々と追ひかけて、度々、籬、幾代、早枝、行平を突き出し、松風姬に捕まへさせる。行平、振り放さうとする。松風姬抱きつき

皆々　サア、行平さまが鬼ぢや〱。

松風　そんなら行平さまかいの。

行平　わしぢやわいの。

松風　おゝ嬉し。

行平　サア、わしが鬼ぢや程に、爰を放して下されいなう。松風どの、人が見るわいなう。

松風　それでもあなたが、目隱しの鬼にならしやんしたぞえ。

行平　鬼ぢやわいなう。

松風　鬼も〱、鬼より增したお心强さ。云はゞ語らば玉の緖も、絕ゆる程に思うて居やんすこの松風。

行平　コレ〱、もう其やうな事は云うて下さるな。この下河邊の行平は、義經公のお行くへにつき、富樫の左衛門家直どのゝ、その心底聞かんが爲、賴朝公の仰せに依り、この程からこの館に止まる其うちに、其やうな淫らな事があつては、どうも松風どのゝ兄、この館の主、左衛門どのへ立ちませぬわいなう。

松風　又あのやうな、堅い事ばかりおしやんすわいの。

籬　どのやうな堅い事云はんしても、ちつともお氣遣ひな事はござりませぬ。申し行平さま、其やうなお心强い事仰しやらずと、松風さまの御堪能なさるゝやうに、どうぞ色よい返事して、上げましておくれなされませいな

う。
幾代　ソレイナウ、大抵や大方の御執心ではござりませぬ。如何に堅いが、お生れ附きぢやと云うて、情と云ふ事を、ちつとは思し召しなされませい。
早枝　女子と云ふものは、突き詰めた者ぢやに依つて、酷い〳〵と思ふその一心が、大抵怖いものぢやござりませぬぞえ。
松風　それ〳〵、自らがこれ程に思ふ事を、仇に思うて下さんすと、この松風は一思ひに死んでしまうて、未來で鬼になるぞえ。
皆々　エヽ。
松風　鬼も鬼、怖い鬼になつて、いとしと思ふ行平さまを
行平　思ひ切つて下さるか。
松風　イヽエ、鬼になつても、矢ッ張り惚れて居るわいなア。
行平　それ程に思うて下さる心ざし、幾度も云ふ通り、決して辛うは思はぬわいの。さりながら、蘆分け舟の障り勝ち、どうもまゝにならぬ行平が身の上。添はれぬ緣と諦らめて、思ひ切つて下されい。
松風　なんのマア、思ひ切らるゝ位なれば、何しにこれ程に思ひ詰めませうぞいの。なんぼうでも自らは、思ひ切る事はなりませぬ。聞えたわいなう。其やうに仰じやるは、直井左衞門秀國さまの妹御、あの村雨どのと、女夫におなりなさるゝお心でござりまするかえ。
行平　なんの〳〵、其方につれなう云ふからは、村雨姫とも行平は、添はぬ心ぢやわいなう。
籬　イエ〳〵、さう仰しやつても、村雨さまとお添ひなさるゝ。
行平　ナンノイナウ。さうした心ではないわいなう。
皆々　イエ〳〵、さうであろ〳〵。
行平　これは又迷惑な。マア、爰放して下されいなう。
松風　イエ〳〵、なんぼでも、放す事ぢやござりませぬ。
行平　マア放して下されい。
皆々　ならぬ〳〵。
ト騒ぎの三味線になると、行平逃げようとする。松風、籬、幾代、早枝、駒鳥のやうに網へかける。これに構はず花道より、時助、奴の形にて、革文箱を、水油と、鬢つけを入れたる袋を提げて、出て來る。うかうかと舞臺へ來り、思はず知らず、時助を五人の中へ挾む。行平、引ッ張り、東の方へ連れて行くと、松風

引ッ張り、西の方へ連れて來る。また行平、東の方へ連れて行くと、松風、西の方へ連れて來る。時助、呆れて居る。兩方より引ッ張る。この時、顏を見合せて皆々、恟りする。

時助　氣が狂つたさうだ。

松風　オヽ辛氣。ひよんな所へ時助がおぢやつたわいなう。こりやマアどうせうぞいなう。

皆々　悪い所へおぢやつたなう。

時助　ハイ、斯樣な所へ歸りましたは、照降町、下河邊が油見世へ、御上意の御用にて參りましたるこの時助。すいた事のないやうでも、すき油のすき通し、かういふ所へ小間物ならばよかつたに、氣を附けたぼの氣も附かず、いぢや〳〵とより油、女中方を銀出しの代りに、お使ひなさるゝとは、夢にも我れら白絞り、油づくしをじくねるとは、ちと伽羅臭うござりませう。

皆々　なんのこつちやいの。

時助　モシ、お前方は、あんまり眼が見えませぬ。この時助は、お庇で皺だらけになりました。お樂しみなされませ。

松風　堪忍してたも。みんな自らが悪かつたわいな。

時助　お前がさう仰しやつて下されますれば、なんぼ賤しいわたしでも、又どうぞお力になるまいものでもござりませぬ。申し、なんなりと、仰せ聞けられ下さりませ。

松風　そんならそれが定かいな。

時助　ほんの事でござりまする。

松風　そんなら聞いてたも。自らは、兄さん左衞門さまへお隱し申して、行平さまへ、どうもならぬ程

時助　ほうれい眞綿と仰しやる事か。

籬　それぢやに依つて、こちらがお取持ち申すのぢやわいなう。

幾代　それを、なるのならぬと行平さまが、お心強い事を仰しやるわいなう。

早枝　あなたがならぬと仰しやれば、松風さまのお身の上の疵。こちら始め、立たぬわいの。

行平　なんぼ立たぬと云うても、この行平は家直どのへ立たぬに依つて、それで返事せぬのぢやわいなう。

時助　成る程、義經公の御行くへを糺さんとて、この程館にお出でなさる行平さま。返事なさらぬも尤も。

ト指を折る。

また取持ちかゝつて返事を聞かねば、松風さまへ立たぬ

と云ふも尤も。
ト指を折る。
また成るの成らぬのと仰しやるが、お心強いと云ふも尤も。
ト指を折る。
また松風さまの事は、お主様だに依つて、取持つと云ふも尤も。
ト指を折る。
また富樫の左衛門さまへお隠しなさつて、人知れず惚れて居ると仰しやるも。若いお身の上ではこれ又尤も。
ト指を折る。
五尤も。物の云はれは、これで知れた。
松風　なんの事ぢやいなう。
行平　どうぞよいやうに云うて、松風どのに、思ひ切らるるやうに云つて下されい。
時助　そりやお前、あんまりお胴慾と申すものでござります。隣り町から縫ひに焦れてこの云ひ譯。さう仰しやらずとこの紋ばかり、一つ附けておやりなされませ。
行平　其方までが、其やうな事云やるわいの。
松風　それ〳〵、其方をほんまの結ぶの神さんぢやと思うて頼んだ程に、必らず返事を聞かせてたもや。
時助　結ぶの神にしては、柄向き相應、結ぶの神、どうなり斯うなり、道行を附けてあげませう。
松風　そんなら頼んだぞや。
時助　人に頼まれた事ならば、針の山を俵轉びでもする氣でござりまする。お氣遣ひなされまするな。サア、下河邊の行平さま、これ程にまで仰しやる事、なんとお返事なさるゝお心ではござりまするか。
行平　默らう。某は義經公の御行くへを尋ね求めんが爲、頼朝公の御内意にて、この所に逗留いたすも、富樫の左衛門どの、もし二心でもあらんかと、未だ疑ひも解けざるに、妹の松風姫、例へ縁あればとて、この行平が差當つて心に任せぬ。依つて返事には及ばぬ程に、思ひ切つて下されい。
ト云ひ切つて、行かんとする。
皆々　マア〳〵、お待ちなされませい。
行平　イヤ〳〵、放して下されい。
時助　先づ〳〵お待ちなされませい。
行平　イヤ〳〵放した。
皆々　先づ〳〵お待ち下さりませい。

行平　イヤ〳〵放した。
齋藤　待つた。
皆々　待てとは。
齋藤　色の所譯も中島の、色爺いが押ッ留めた。姐さん達、一番待つてくんなさいよ。
トきつかけに、丹前の出になり、花道より奴紅梅、奴白梅、對の形にて出て來る。奴の所作少しあつて、納まると、花道より齋藤次祐家、廣袖、羽織、衣裳にて、紫の頭巾、重ね草履、丹前の形にて、奴を大勢連れて出て來る。本舞臺にて納まる。
齋藤　ソレ、罷り出でたるやつがれは、親も勸六、子も勸六、合せて今年十二箇年、それから後の歸り花、五山の雪にあらねども、色樣方の御贔屓を、頂く笠の紋所、お江戸の敵役根元根本、なまじりながら味噌をあげくにお叱りを、受けぬ拂ひめ二側目の、のめ爺いが顏見世の、丹前出立ちとつん出るこんだ。
紅梅　旦那、申し上げまする。今日はこの屋敷へ、御大切なる御用にて、お出でなされたではござりませぬか。
白梅　それに左やうの寛濶出立ち、憚りながら奴めは、ちつとゝやつとゝ、合點が參りませぬで
兩人　ネイ、ござりまする。
齋藤　このひッきりどもは、ませた事を聞いたりな。今日斯く云ふ齋藤次祐家、富樫の左衞門家直に、ちと尋ねべき用事あつて、内々で參りたり。祐家聞けばこの頃、富樫の左衞門には、越前三國の傾城、室屋の若松と云ふ太夫職、屋敷へ置くと噂とり〴〵。馴染みの末の祝ひ心、目立たぬやうにこの出立ち、その若松に近附きになるべいとて、えつちらおつちら參つた。越前の國の住人、齋藤次祐家が參つたと、取次いでおくりやれ。
松風　どなたかと存じましたれば、齋藤次祐家さま、ようお出でなされました。
齋藤　これは〳〵、富樫どのゝか妹御松風どの。ヤレ〳〵、久しうて逢ひましたな。それにお居やるは、下河邊行平どのではござらぬか。
行平　左やうでござりまする。祐家どのには、いつも〳〵御元氣でござりまするな。
齋藤　これぱつかりが、年の一德でござりまする。時に承はれば、行平どの、其許儀は、頼朝公より御内々にて、富樫の左衞門へお尋ねなさるゝ事あつて、お出でと承はつたが、いよ〳〵左やうでござるかな。

行平　さる程に、左やうでござりまする。
齋藤　左やうでござりまする。コレヤイ、賴朝公の御用にて、この所へ來りし行平、娘子供をそゝのかし、爰に長居して、御奉公がなり申すか。
行平　サアそれは。
齋藤　この間、承はつた、是明の君の御殿にて、松風姫と村雨姫、其許一人を引ッ張り合ひ、見苦しい事がござつたげな。それでも悧巧さうに、鎌倉どのより御内々の御用があつて參つたとは、ようマア其やうな白々しい事が、こなたは云はれる事だの。
行平　さては先達て、是明君の御殿にての樣子を、貴殿はお聞きなさりしとや。
齋藤　おんでもない事。
行平　ホイ。
齋藤　巧い事をしに跡で、やいのすうのと、さつさと並べた詮索だわえ。
行平　何事もこれまで。さうぢや。
松風　申し〳〵、滅多な事をなされまするな。
行平　この行平が身の上の事、外々へ聞えて面目なし。不義いたづらは、賴朝公へ申し譯なし。そこ放して、殺して下されい。
時助　滅多な事をなされまするな。例へあなたがどのやうな、いたづらがましき御身持ちにもせよ、松風さまも村雨さまも、未だ主なき蕾の花、若いお身にはある習ひ。少しも大事にござりませぬぞ。
齋藤　イヤ、大事がある。
時助　何がなんと。
齋藤　松風姫は誰れが娘、斯く云ふ齋藤次祐家が娘、安宅の關守り、富樫の左衞門、齋藤次、この兩人仰せ附けられ候うてより、大切なる同役ゆゑ、某事は娘松風を、富樫の左衞門へ妹に遣はし、まつた富樫の左衞門はコレ。
ト懷中より、袱紗包みを取出し、封じ入りの觀音を出し
これこそ九條の御曹子、伊豫守義經公の御母常磐御前が、近江の青墓の宿にて、熊坂の爲に最期を遂げし砌りまで、所持なしたるところの、馬郎婦の觀音、家の寶とて富樫の左衞門、肌身離さぬこの厨子を、某へ讓りもの。
時助　すりや、その馬郎婦の觀音を。
齋藤　齋藤次祐家の娘松風と引替へ。

時助　観音の事は、富樫の左衛門さまが御所持と聞いて、入込みしこの義盛。サ、その所持なさるゝその観音、あなたの方にあらうとは、思ひがけなき祐家さまのお話し。

斎藤　この観音と引替への、身が娘の松風と、どれ合つたる行平。この祐家に云ひ分あるか。

行平　サアそれは。

斎藤　委細の事はこの家の主、富樫の左衛門家直に逢つての事。松風、奥へ案内しろ。

松風　ハイ。

斎藤　行平、續いてお來やれ。

ト唄になり、斎藤次、行平、松風始め皆々、奥へ入る。時助跡へ殘る。

時助　馬郎婦の観音の事は、義經公の御母君、常磐御前の守り本尊、何卒母君の御遺物手に入れ來れとの、義經公の仰せ、畏まり候ふと御請け申して、入込みし伊勢三郎義盛、假に姿をやつしたる中間の時助、折を窺ひ、富樫の左衛門が佛間に忍び入りて、奪ひ取らんと思ひの外、斎藤次祐家が所持なしたる體、爰にて拜せしこそ幸ひ、何とか我が手に入れたいなア。

ト云ふうち、花道にて

常陸　馬士どのや、馬を急いでもらひませう。

由松　合點でごんす。

ト揃り鉦の唄、坂は照る〳〵の唄になり、花道より由松、脚絆、甲掛け、やつし、廣袖、腹掛け、馬士の形にて、頬かむりして、片肌脱ぎ、煙管を持ち、馬を引いて出て來る。この馬に乘り、笈を脊負つて、常陸坊出て來る。花道の中程にて

常陸　馬士どのや、もうなん時であらうの。

由松　イカサマ、昨日の今時分でもごんせうかいの。

常陸　昨日の今時分にしては早いやうだが、何里程來ました。

由松　されば、もう二三町も來たでごんせう。

常陸　今朝からたつた二三町か。

由松　其やうにたんと歩くと、この馬士は草臥れるでごんす。

常陸　イカサマ、たんと歩いたら、草臥れさうな大病な馬方。ハテ、よい馬に乘つたわえ。さりながら、馬士どの、ちつと急いでもらひませう。

由松　合點でごんす。ほてッ腹め。

トまた唄になり、舞臺へ來る。

サア〳〵旦那、來ました〳〵。下りさつしやい。

常陸　ヤレ〳〵、早く來たなア。ドレ〳〵、駄賃をやらう。ソレ、極めの六十四文、ソレ、外に酒手の替り、鹿子餅の代が十五文、ヤレ〳〵、よく乘せて來た〳〵。

由松　なんと、早かつたかえ。

常陸　花道から爰まで來たものを、早くなくつてどうするものだ。アヽ、おれも色事師ならば、米屋と艾屋と煎餅屋に、この出を語つてもらはうに、何を云ふにも、豆太皷を見るやうな品つきで、淨瑠璃でもあるまい。時に伊勢の三郎義盛に逢ひたいものだが、案内をしてみよう。賴みませう。

時助　誰れだ〳〵。

常陸　ヤア、貴樣は伊勢の三郎義盛。

時助　コレ、その名を。

ト方々へ心を附け

常陸坊海存、この所へお來やつた、用事は心元とない。なんと〳〵。

常陸　外の事ではござらぬ。我が君義經公の仰せには、常磐御前の御遺物、あの白銀町の觀音、イヤ〳〵、馬喰町の觀音。なんでも、其やうな名の觀音を、持參おしやれとの仰せつけ。それゆゑわざ〳〵海存參つた。どうぞ一つ飲ませて下され。馬の上で寒い目をしたれば、水洟ばかり。武士の奉公と申すものは、さて〳〵苦しいものでござる。コレ、忠臣藏だと貴樣は勘平。おれは彌五郎。

トいつまでも口をきいて居るを、時助、突き倒し

時助　馬鹿々々しい。內でも外でも同じやうに。我が君の仰せ附けられには、常磐御前の御遺物、馬郎婦の觀音を、この義盛に奪ひ來れとの仰せつけられとな。

ト常陸坊、モヂ〳〵して居る。

常陸　その事は先達てより、承知いたして居る。斯く云ふ伊勢の三郎は、勢州鈴鹿の盜賊なりと聞し召されて、この御用、主命に背かじと、入込みしこの義盛。今日中に貴殿へ渡さう程に、義經公へ差上げておくりやれ。

常陸　心得てござる。

時助　待つてお居やれ。

ト合ひ方になり、時助、奥へ入る。常陸坊、後を見送りて

常陸　コレ、まだ用がある。話したい事がある。アヽ、そつかしい。おれに待つて居ろと云うても、こんな形で待つて居ては人目にかゝつて、云ひ譯がどうもあるもの

ぢやない。アヽ、どうぞ常陸坊と、知れないやうに形を變へて、待つて居たいものだが。

ト考へる思ひ入れあり

ある〳〵。こんな時の御用意に持つて來た、この羽團扇、天狗道の神通を得たる不思議の團扇。この團扇で一招き招けば、なんでも人の心をぐにやぐにやとさせて、欲しい物がそこへ出ると云ふが一つのかすり。ドレ、一招き、招いて見よう。ドレ、エヽ。

トそろ〳〵開けて、舞臺へ風呂敷包みを置く。常陸坊、これを見て

〆めた〳〵。ドレ〳〵、この風呂敷包みの內を拜見いたさう。

ト開けて見て

イヤア、羽團扇の模樣の衣裳羽織。こいつを着れば體はよいが、頭が詰まらぬものだ。幸ひ〳〵、コレ馬士。

由松　なんの用でごんす。

常陸　コレ、近頃世話ながら、おれがこの鬢の毛を、後でちよつと結うてもらひたい。

由松　合點でごんす〳〵。ドレ〳〵出さつしやい。

ト常陸坊が鬢の毛を奴のやうに結ふと、直ぐに常陸坊、羽織、衣裳の形にて、形を作り

常陸　どうも云へぬ〳〵。これでは誰れが見ても、常陸坊海存とは見えぬ。時にこの笈は、この井戸の內へ斯うして置いて、これからちつと、洒落かけやう。

ト云ふ。由松、羽團扇をソッと取つて置く。

思ひ出せる事こそあれ。某が事を知つたる者は馬士ばかり、下郎は口のさがなきもの。此奴は助けては置かれぬわい。馬士、覺悟をしろ。

由松　そんなら貴樣が、アノおれを。

常陸　おんでもない事。

由松　つがもない。

常陸　どつこい。

トこれより合ひ方になり、立廻りあり、トヾ由松、常陸坊を煽ぐ。をかしみにて、よろ〳〵奥へ入る。續いて由松も奥へ入る。バタ〳〵にて、花道より加賀次郎、小富をひッ抱へ、出て來る。奥より下河邊行平、出て來て、互ひに行き合ふ。

行平　加賀の次郎どのか。

加賀　下河邊の行平さまか。

行平　合點のゆかぬ、その小兒は。

加賀　これこそ日頃お尋ねなさる、辨慶の常陸長屋、七つ道具の長兵衛と申す古鐵買ひの娘。

行平　それこそ備前守源の行家、彼れが行くへを尋ぬるには屈竟の餌。出かしめされた。

加賀　主人富樫の左衛門へ。

行平　某よろしく物語らん。

加賀　行平さま。

行平　加賀の次郎、お來やれ。

ト行平、小富を加賀次郎より受取り、引ッ抱へて兩人奥へ入る。本神樂になり、東の垣より敷妙、黒仕立ての形にて、龕燈提灯を持ち、袖頭巾を着て出ると、西の井筒の内よりお市、同じく黒仕立てにて、龕燈提灯を持ち、忍びやかに出て來る。互ひにあたりを窺ひ

敷妙　東南に風起り、西北に雲靄かならず。もしやそれぞと知られじと、窺ひ寄りしこの館。富樫の左衛門家直さま・お居間はいづくぞ。よき傳手が欲しいなア。

いち　思ひ廻せば恐ろしい、女のあられぬこの姿。夫に逢ひたい意地ばかりで、來る事は來ても、案内は知れず、よろしき傳手が欲しいなア。

ト云ひながら、兩方互ひに顔を見合せて、悄りして、

お市、行かうとする。

敷妙　待つた。

いち　此方の事かえ。

敷妙　合點のゆかぬ。何者なれば、富樫の左衛門家直が館へ、窺ひ寄りしは何者ぢや。

いち　成る程、御尤もなお尋ね。わたしや如何にも紛れ者、命を的にこのお館へ、忍び入つたる曲者ぢやわいなア。わたしが事を咎めさんすお前は、さうして、どなたぢやえ。

敷妙　サ、それは。

いち　サア、お前の名を、聞きやんせう。

敷妙　サア。

いち　合點のゆかぬ。富樫の左衛門家直さまのお館へ入込み曲者、尋常に身の上を明かしや。

敷妙　ホヽヽ、仰山ぢやわいなア。今にもそれと顯はれなば、女だてらに大膽なと、噂にかゝるは覺悟の前、命一つを名にくれて、忍び入つたる身の上は、よく〳〵の事あればこそ。

いち　そんならお前も人知れず。

敷妙　願ひが叶へて欲しきゆゑ、このお屋敷へ。

いち　このお館へ思ひ合うたる
敷妙　身の上の、女子もあれば
兩人　あるものぢやなア。
いち　よく〳〵の事なればこそ、爰まで來たる恐ろしさ。怖い〳〵と思ふ上に、寒さを凌いだその所爲に、わたしや左へ癪が差込んだ。どうも痛うてならぬわいなア。お前、藥はござんせぬかえ。
敷妙　わたしも常々癪持ちゆゑ、藥は持つて居るわいなア。ドレ〳〵、藥を上げよう。
　ト懷中より、疊紙を出して、藥をやり、お市を介抱する。
女子と云ふものは氣の弱い者ぢやに依つて、ちつとした事があつても、この差込みには困るわいなア。
いち　これは〳〵、有り難うござります。
敷妙　なんのお禮に及ぶ事かいなア。
　ト向うにて
呼び　直井の左衞門秀國さまのお入り。
　ト呼ぶ。お市、敷妙、恟りして囁き合ひ、お市は元の所へ忍び、敷妙は、龕燈提燈を提げて花道へ行く。また直井の左衞門さまお入りと呼ぶと、切り幕より、直井の左衞門、上下、衣裳にて、扇を持ち出て來る。花道の中程で、敷妙と行き合ふ。互ひに思ひ入れあつて、後へ敷妙を押し返す。舞臺にて立廻りあつて、敷妙、花道へ行かうとする。
直井　待て。
敷妙　はい。
　ト立ちとまる。
直井　代々顏見世のお定まり、赤い男に黒ん坊、珊瑚樹取りを見るやうな、取合つたと思ひの外、ぽつとり姿の後影、戀の曲者ござんなれ、直井の左衞門秀國が、目にかかつちやアむづかしい。聞かにやアならぬ事がある。身が膝元へズッと來い。
敷妙　ソレ。
　トづか〳〵と立歸り詰め寄せて
參りましたが、御用かえ。
直井　シタリ、年增の生粹、見事な者。時に合點のゆかない、奧を勤むる者ならば、座敷の上を頭巾でもあるまいし、よしんば他所の者にもしろ、隱れ忍ばうやうがない。どちらからどう廻つても、聞かにやアならぬお身樣の身の上。元來お主は何者だ。

敷妙　ハイ、御尤もなるそのお尋ね。例へお尋ねないとても、お話し申さにやならない者。直井の左衞門秀國さまと、お名を只今承りまして、此方から却つて身の上を、お明からさまに申し上げ、その上にてはわたしが願ひ、お聞きなされて下されませい。
直井　直井の左衞門秀國と、某が名を聞いて、身の上を明かし、願ひがあるとか。
敷妙　アイ、お馴れ〳〵しい事ながら
直井　アノ秀國に。
敷妙　アイ。
直井　滅多にやア聞かれまい。
敷妙　そりや又なんで。
直井　女の際によろしくない。なんで盜みをひろぐのだ。
敷妙　サアそれは。
直井　イヤサ、なんで盜みをひろぐのだ。
敷妙　サア、その盜みは
直井　なんだ。
敷妙　男を盜みに來たのぢやわいなア。
直井　忍び入つたは、アノ男を。
敷妙　アイ、わたしや盜みに來たわいなア。
直井　とんだものを盜みに來たな。
敷妙　お聞きなされて下さりませい。恥かしながら戀ゆゑに、斯うした形でござりまするわいなア。
直井　して又、男は誰れだ。
敷妙　北陸道七箇國に隱れなき、加賀の國の住人、富樫の左衞門家直さまに、いつか心をかけ、帶の解けぬ女の心より、思ひあまつて徒らな、あなたを盜みに來たわいなア。
直井　取持つてやらう。
敷妙　エヽ。
直井　實か嘘かは知らねども、女の身にてつき詰めた、男を盜みに入りしとは、あんまり膽が潰れしゆゑ、不便なこつた。取持つべい。
敷妙　そウ有り難うござりまする。あなたを見初め丸三年、便り求めて文の傳手、幾度となう差上げしが、叶はぬ事とてもしほ草、書捨て置きしに今日の今、あなたの今のお詞が、わたしが爲には力草、よもや直井の左衞門さま。
直井　刀にかけて相違ない。
敷妙　アノ、刀にかけられて。
直井　そもじの戀は、取持たう。

敷妙　エヽ、有り難うござりまする。
直井　曲者觀念。
ト直井、拔いて切りつける。手ばしこく立廻りあつて、其うち敷妙、四辻目の玉鷄の印の袱紗包みを、懷中より取落す。直井それを取上げて、兩人、キツと見得になる。
敷妙　時こそ野間の內海にて、落命ありし高の殿。
直井　義朝公の玉鷄の印、軍勢催促のこの印を、所持せし女の身の上は。
その時向うにて、「勅使」と呼ぶ。
敷妙　勅使とや。
直井　來い。
ト直井、敷妙、入る。直ぐに下がり葉になり、花道より麻生の段八、冠裝束にて、笏を持ち出て來る。後より井上次郎重永、烏帽子、素袍の形にて出て來る。後より村雨姬、襠裲衣裳にて縛られ、これを若黨、割り竹にて、押ッ立て／＼出て來る。奧より松風、腰元籬、同幾代、同早枝、加賀の次郎、出て來る。後より齋藤次、出て來て、直ぐに麻生の段八、井上次郎、齋藤次、松風、籬、幾代、早枝、加賀の次郎並び、村雨姬を舞臺先へ直す。
松風　思ひ設けぬ今日のお勅使。折惡しく兄富樫の左衞門事は、白山權現へ參詣いたしまして、御挨拶にはこの松風。お勅使の趣き、仰せ聞けられ下さりませうならば、ハイ、有り難うござりまする。
井上　すりや富樫の左衞門には、白山權現へ參詣いたし、折惡しう在宿いたさぬとな。
松風　ハイ。
井上　然らば、彼れへ、仰せ聞け下されませう。
段八　勅使の趣き餘の儀にあらず、この間是明の君の御殿に於て、下河邊行平は、富樫の左衞門が妹松風、まつた直井の左衞門が妹村雨、上を恐れず、どれ合つて不義をひろいだその科に依つて、三人ともに、須磨の浦へ流罪せよとの勅使。
松風　エヽ、そんなら今樣の折柄、是明君の御殿を穢せし科に依つて、行平さまも村雨もこの松風も、アノ須磨の浦へ流し者とや。ホイ。
村雨　自らとてもその折柄、御殿を穢したる科に依つて、思ひ設けぬこの縛しめ。
松風　そんならお前も、

村雨　松風さまも。
松風　皆戀ゆゑに。
兩人　ハア。
井上　遁がれぬ所ぢや。ソレ、松風に繩かけい。
侍ひ　ハア、。
雛　憚りながら、お待ちなされて下さりませい。松風姫がその科にて繩かゝりまするは、勅使の仰せ、是非に及びませぬ事でござりますれども、折惡しく富樫の左衞門居りませねば、先づ／＼お待ち下さりませい。
加賀　殊に我れ／＼この席に列なり居つて、松風が不義徒ら、詳しく樣子承知いたさぬ其うちに、繩打たれんとは粗忽の至り。先づ／＼お待ち下さりませう。
齋藤　小積なる加賀の次郎。行平、松風、村雨、繩打ち來れとは、是明君の仰せ出され。流罪とあるは勅諚も同然。脫のしまひは富樫の身の上。急いで松風に繩を打て。
皆々　サア、それは。
井上　勅諚を背けば違勅の罪。キリ／＼繩をかけないか。
皆々　サアそれは。
井上　サア
皆々　サア

井上　サア／＼どうだ。
　ト向うにて
呼び　殿のお歸り。
　ト呼ぶ。誂らへの鳴り物になり、花道より若い者喜助抱き若松の紋付きたろ、女郎の提灯をともし、出て來ろ。後より若松、襠裲衣裳、傾城の形にて出て來ろ。これに富樫の左衞門、上下衣裳にて、から傘さしかけろ。後より對の禿形にて、松之丞、梅之丞、鼻紙、煙管を持ち、附いて出ろ。後より遣り手お達、出て、花道の中程にて
富樫　優に優しき月に花、眺めいや增す君が風情、富樫の左衞門家直、我れながら迷うたわいの。
たつ　惚れられたのと惚れたのは、强い違ひの人心。誰れあらう、文武に名高き左衞門さま、よく／＼お氣に入つたやら、今日の今日までお二人一緒、あの嬉しさうなお顏わいなア。
喜助　イカサマ、世の中に、お屋敷に抱へられた若い者程、かすり廻らぬものはない。紋日物日はお屋敷ばかり、貰ひ引きが出來ず、無心が云はれず、御門は堅し、これでも旦那、ようござりまするか。

富樫　野暮め、諸事萬端は胸にあるわえ。

梅之　申し太夫さん、今日はどうした御趣向やら、殿様のこのお姿、堅いやうでもどうやら、粋な性と見えるわいなア。

松之　さうぢやわいなア。揚屋入りとは事變り、お庭傳ひの八文字、下ろし歩みも珍らしかろ。ほんにしみじみ粋なぞえ。

若松　好いた好かぬは初手のうち、馴染めば同じ谷川の水。流れを立つる憂き節にも、誠を明かすが苦界の花。今また開く仲の町、この花道の初ひ〳〵しく、皆さん、免しておくれいなア。

富樫　季延年が一説より、世に傾城の名起れり。島原に啼く鶯、吉原に住む蛙、猛き者の立籠る城郭。遊里と見込み、山程積る睦言を、語り明かすは何より。身共に續いて、サア、おぢやれ。

禿二　アイ〳〵。

ト清掻になり、皆々舞臺へ來る。直ぐに富樫、眞中に坐る。傾城若松、富樫へもたれて居る。喜助、煙草盆を持つて行く。遣り手、杯を持つて行く。此うち始終清掻。

喜助　サア旦那、一つお上がりなされませい。さて〳〵この間は、寒じが強うなりましたでござりまする。あなたはいつも〳〵お盛んで、お羨やましうござりまする。ナウ、お達どの。

たつ　それ〳〵、喜助どのゝ云はしやる通り、主さんのやうなお客さんばかりなればよい、と蔭では新造さんや、仲の町の御亭さん方と、お噂ばかり致して居りましたでござります。ホヽヽ、一つお上がりなさりませ。

富樫　また酒に致さうか。一つついでくれ給へ。

若松　わたしが酌をしやんせう。

富樫　君の酌とは有り難い。名こそ多けれ、寶屋の若松太夫と云ふ酌では、一つ呑まずばなるまいかえ。

若松　サア〳〵、一つ上がれいなア。

齋藤　井上次郎忠永どの、この體を御覽なされたか。

井上　イヤモウ、呆れて物が申されぬ。富樫左衞門がこの態。

齋藤　ナニ、家直どの、齋藤次祐家でござる。只今お歸りなされたか。

若松　オヽ、怖、ありやなんぢやえ。

富樫　なんでもよい〳〵。

若松　怖い爺さんが、何やら物云うてぢやぞえ。
富樫　捨てゝ置きや〳〵。
齋藤　コレ〳〵、富樫の左衛門家直、茶にするも事に寄る。これに御入りなされたは、中納言義明卿、まつた井上次郎忠永どの、是明君の嚴命に依つて、お立ちなされた今日の勅使、席を改めて御挨拶おしやれ。
若松　勅使とは、なんのこつちや。
たつ　ハテサテ、それは杓子サ。
喜助　杓子さまとは、茅場町ではないかえ。
齋藤　おきやアがれ。
ト立ちかゝり
うぬらまでが其やうに嘲弄する。憎い奴の。富樫左衛門家直、齋藤次祐家に挨拶はないか。挨拶がなければ、いいツ、取交したる娘松風、某、連れて立歸る。松風來い。
富樫　待つた。
齋藤　なぜ留める。
富樫　一旦貰ひ請けたる妹松風、理不盡に手を付くると、腕骨切つて切り下げるぞ。
齋藤　富樫の左衛門、氣が出て面白い。お身樣のやうな腰拔け侍ひに、娘松風を、やる事はならぬわえ。

富樫　扣へ召され、祐家。なんで富樫の左衛門を、腰拔けとはお云やるぞ。
段八　勅使。
富樫　勅使とあらば、事の仔細を承る。若松、ちつとの間、其方はそこに居てたもれ。どつちへもやりやせぬぞや。
若松　合點ぢやわいなア。
富樫　ちつとの間、默つて居や……思ひ設けぬ勅使のお入り。富樫の左衛門家直へ、仰せ開けられ下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。
井上　ソレ、家直に繩打て。
皆々　ハア。
富樫　勅使のお入り、某が繩かゝるべき科、わつぱさつぱと立騷ぐは、どなたなりとも、お相手に罷りなるぞ。
井上　ヤア、落ち付くな〳〵。富樫の左衛門家直、妹松風こそ、近頃是明さまの御殿にて、乳繰り合つた行平、その行平を留め置くは、富樫の左衛門が心に一物。依つて繩打つて某が陣屋へ引く。速やかに繩にかゝれ。
段八　勅使に立ちしもその趣き。行平、松風、村雨ともに、播州須磨の浦へ流罪せよとの勅諚。遁がれぬ所だ。松風

を渡せ。

齋藤　異議に及ぶと、左衞門は重罪、遁がれぬ所だ。返答は

三人　どうだ。

富樫　勅使の趣き、委細承知いたしてはござれども、富樫の左衞門家直は、鎌倉の上意に依り、當時安宅の關守りたり。妹松風が身の上の儀は、申さば彼れが徒らと申すもの。某、曾て存ぜぬ事に、繩かゝり囚人となつて、賴朝公より仰せつけられたる役目は、いづくにある。富樫の左衞門が關守りの役目は勤まるかな。

三人　サアそれは。

富樫　まだその上に松風が身の上、下河邊の行平と通じましたると云ふには、なんぞ慥かな證據がござるかな。

三人　サア、それは。

富樫　何がなんと。

井上　證據のない事を云ふものか。證據と云ふは松風、村雨、彼れらが覺えがあればこそ、村雨姉に繩かける。彼奴等が論より慥かな證據。富樫の左衞門遁がれぬ所だ。繩にかゝれ。

富樫　すりや行平に心を通じ、是明さまの御殿を穢せし慥かな證據。

井上　目前に松風村雨、御殿を揚屋同然に、寄つてたかつて穢したる、慥かな證據は二人に聞け。

富樫　すりや兩人に。

井上　くどい／＼。慥かな證據があるからは、いよ／＼三人は須磨の浦へ流罪。行平を引込んだる、富樫の左衞門は押籠め。繩ぶつて引いて行く。速やかに腕廻せ。

富樫　サアそれは。

三人　なんと。

富樫　繩にかゝる事罷りならぬ。

三人　そりや又なぜだ。

富樫　おきやアがれ。

三人　なんと。

ト云ふうち、若松を引寄せる。

富樫　三國一の若松、この君の容色に、富樫の左衞門殆んど弱り、暫しがうちも離れる事ならんでえす。繩かゝる氣ならば、餘人に仰せ聞けられい。

齋藤　勅使へ對して不屆きなる挨拶、祐家が繩かける。富樫の左衞門、腕廻せ。

富樫　妹松風を連れてお行きやれ。

齋藤　なんと。
富樫　富樫の左衞門、妹に松風があればこそ、某が難儀。妹松風を其許へ歸せば、家直に科はないぞ。
齋藤　サアそれは。
富樫　松風姫を、連れてお行きやれ。
松風　これはマア兄樣、お前は〳〵お情ない。如何に血筋でないとても、今の今まで、兄樣妹よと呼ばれたるその中を、お心强い家直さま、自らはなんぼでも、あなたと緣は切れぬ。
富樫　たわけづらめ。例へこの場で某が緣を切つたとて……ハテサテ、緣を切つた。緣を切つてはどこがどこまでも、緣を切らねばこの場が濟まぬぞ。そこ立つてうせう。
松風　お心强い家直さま。
齋藤　娘を此方へ取返せば、これで一家のよしみはない。富樫の左衞門、繩かゝれ。
富樫　松風を返しても、なぜ家直に繩打つのだ。
齋藤　賴朝公よりの仰せつけられたる安宅の關守り、關を越されたる富樫の左衞門、慥かな證據のこの片袖。この科ゆゑに繩かける。遁がれぬ所、腕廻せ。
　ト袖を取つて、思ひ入れあるべし。

富樫　サアそれは。
齋藤　サア
富樫　サア
齋藤　サア〳〵、どうだ。
井上　富樫の左衞門、捕つた。
　ト井上の次郎、素袍の袖を捲りかゝる。富樫その手を取つて
富樫　待つた。其許の名はなんと云ふ。
井上　井上次郎忠永。
富樫　かけも構はぬ關破りの詮議に、素袍の袖を捲り立てて、捕つたやらぬと仰しやるは、御人體にお似合ひ申さぬ。
井上　サア、そりやア。
富樫　なんと。
若松　思ひも依らぬその片袖。
富樫　覺えがあるか。
若松　イ、エ。
富樫　覺えのないのに、きつい膽の潰しやうの。
齋藤　云ひ譯があるか。
富樫　云ひ譯いたさう。

若松　爰は端近。
齋藤　案内おしやれ。
井上　中納言義明公のお入り。
ト井上、若松を始め、殘らず入る。富樫一人殘り
富樫　合點のゆかぬ勅使の有樣。こりや一思案せずばなるまい。
ト煙草のみ居る所へ、直井の左衞門、上下にて出て來る。
直井　それにお居やるは、富樫の左衞門どのではござらぬか。
富樫　左やう仰せらるゝは、直井の左衞門秀國どの。
直井　左やう〳〵。
富樫　これは〳〵直井どの、マア〳〵、これへ〳〵。
直井　然らば御免下され。
ト座敷へ上がる。
富樫　さて〳〵その後は、中絶仕つた。先づ〳〵近う。
直井　何かとお話し申さう。いろ〳〵山々。
富樫　御同然々々。先づ〳〵何事を差措きまして。
直井　貴公にも御堅勝で、珍重に存じまする。
富樫　其許にも御堅固にて、大慶に存じまする。

直井　これは〳〵。早速ながら、御祝儀申さうは、貴殿の御身分、當時鎌倉どのゝ御前よろしく、段々との御立身。若手の中の隨一で、お羨やましう存じまする。
富樫　これは〳〵、有り難い御挨拶。近頃以て忝ない。其許樣にも、日々の御評判夥しく、御贔屓を承はり、每度お噂仕る。定めて當時御要向の直井どの、色事などはどうでえす。
ト扇にて、脊中を叩く。
直井　お恥かしい事ながら、面の赤いが癖になり、色事と云ふは、氣もない事〳〵。日頃より鈍なその上に、女にかけちやア、無手と來たものおやに依つて、色事は三年塞がり、女郎買ひは鬼門、淋しく暮らして罷りある。其許樣こそ承はつた、品川通ひの幕などを、かけしも聞かまほし參らせ候ふ。
ト脊中を叩く。
富樫　これは〳〵迷惑千萬な。左やうな事はなけれども、出合ひましたるこそ幸ひ、これから折々何方なりと、そろ〳〵押して見ませうかえ。
直井　見ませうかとは有り難い。
ト側へ寄る。

富樫　我れらも變らず
直井　呑みかけ山。
　ト側へ寄る。
富樫　山とは。
直井　古いか。
　ト側へ寄る。
富樫　畜生め。
　ト手を引く。
　誰れぞ來いよ。お杯を持つて來い。
若松　アイ〳〵。
　ト合ひ方になり、若松、裃袴衣裳にて、銚子杯を持つて出て、直ぐに富樫直井が中へ坐る。
富樫　斯う云ふ所は、又そもじでなければゆかぬわいの。ちよつとお引合せ申さう。彼奴め、我れらが閨の花、お見知りなされて下されい。
直井　シタリ見事。直井の左衛門秀國でえす。折々參つてお世話になるでござらう。
若松　ナンノイナ、今お目にかゝるこそ幸ひ、隨分とお心安う。
直井　來るなと云つても參らねばならぬ。その癖に酒盛りをして居る事がならない、氣ぜん我まゝな奴サ。
富樫　そりや拙者なぞがその通り。杯を控へて、たら〳〵として居る事が嫌ひでえす。ドレ〳〵、さうして居るうち、其許へ進上いたさう。
若松　ドレ〳〵、つぎやんせう。
富樫　お酌か。
若松　珍らしうもないわたしが酌、お嫌かえ。
富樫　お嫌とは、どうでえす。
若松　それでもどうやら、嫌さうだに依つて。
直井　イヨ〳〵、若松さんだの。
　ト褒める。富樫、扇にて顏を隱す。
若松　そんならこの杯をば、わたしが拾うて、あなたへお上げ申さうか。
　ト若松、直井へさす。直井、取上げて
直井　さらば、一つ下されるか。
若松　ドレ〳〵、お酌いたしませう。
　トつぐ。
直井　これは〳〵、強いお酌の。
富樫　若松、口取りはどうぢや。お吸ひ物を申し附けぬか。
若松　アイ〳〵。ちよつと云うて參りませう。

富樫　待ちや〳〵。直井どのゝ珍らしいお出で。なんぞ好い口取りで、一つ進ぜたいものだ。オ、、ある〳〵。幸ひ〳〵、アレ、次へ仕掛け置いたあの火鉢、帆立貝も何もかも、皆調へて持つておぢや。

若松　アイ〳〵。

ト若松、奥より帆立貝、盆にいろ〳〵積み並べて、玉子を添へて持つて出る。富樫、直ぐに火鉢を引寄せて

富樫　時に直井どのには、なんと思し召して、今日のお出でえす。

ト富樫、火鉢の火を拵らへながら話すうち、若松は、鼻紙にて火を煽ぎ、帆立貝を掛ける。直井は杯を引寄せて

直井　拙者、今日參つたる事は、ちと其許に、御意得たい儀がござつて、わざ〳〵參りました。

富樫　左やうならば家直に。

直井　ちと拙者が御無心がござる。

富樫　何がな。

直井　外の儀でもござらぬが、下河邊の行平どの、鎌倉一の若衆盛り、奇麗な所に目が附いて、拙者が妹、あの者と譯ある仲。なんと行平さまを、其許樣のお世話で、拙者が妹へ下さるまいか。その儀をどうぞ。

富樫　そりやなるまい。

直井　なぜに。

富樫　直井の左衛門秀國は、義經公へ内縁の武士。富樫の左衛門家直も、常磐御前へ内縁の武士。近頃伊豫守奥州高館、藤原の秀衡が方へ立越えられしとの、とり〴〵の噂。安宅の關を越えられしは、富樫の左衛門が業なぞと、頼朝公の上聞に達し、それよりお疑ひかゝつて、鎌倉表より下河邊の行平、仰せつけられ、某が身の上詮議。その行平を拙者が仲人いたしては、世間體が濟みますまい。何は兎もあれ、頼朝公へ申し譯がござらぬ。其許のお頼みでも、この儀は御容赦にあづかりたい。

直井　富樫の左衛門、そりやおてまへ、日頃にも似合はぬ、挨拶に掛け語があつて、表向きの好い事ばかり、直井の左衛門、承はるまいわえ。

富樫　默り召されい。直井の左衛門、何ゆゑに某が挨拶に掛け語がござるな。率爾な事云やつて、跡で後悔おしやるな。

直井　家直に對し、率爾な事を申さうか。其許の妹松風姫に、下河邊の行平を添はせたいと、手前勝手の富樫左

衛門。これに違ひはあるまいがな。
富樫　生得不實なる直井左衛門、富樫左衛門が魂ひを見違へたか。女子供のわざくれ事、それを取上げて、得手勝手を申すやうな、器の狭い侍ひぢやないぞ。
直井　何がなんと。
富樫　頼朝公の命を重んじ、富樫の左衛門、義經公を見遁がさぬと云ふ、申し譯さへ立てば、妹の一人や二人、眼前命を捨てる事も存ぜぬが、誠の武士を磨くところ。それを知らず、詞過すと、富樫の左衛門が免さぬぞ。
直井　相手になるべい。
富樫　相手になるか。
直井　サア拔け。
富樫　サア拔け。
兩人　なんと。
　ト刀の柄へ手をかける。若松、心意氣あつて
若松　コレ。
富樫　へヽ。
直井　へヽ。
富樫　ハ、、、、。
直井　ハ、、、、。

兩人　ハ、、、。いかいたわけな。
若松　わたしやほんまの事かと思うて、恟りしたわいなア。
直井　どうして／＼。何を云ふのも心安さの儘。
富樫　左やう／＼。
若松　そんなら、お二人さんながら機嫌直して、サア／＼、一つ上がれいなア。
直井　ドレ／＼、又酒か。酒はたヾ、呑まねば須磨の浦淋し。
　ト杯を取上げる。
若松　呑めば明石の、波風ぞ立つ。
　ト酒をつぐ。
富樫　さらば御馳走の貝燒出來た。斯らして置いてこの玉子、火箸の手の內、お目にかけやう。
　ト富樫、玉子を取つて火箸にて割る途端に、鷄の聲すると、直井、懐を押へ、心遣ひあるべし。若松、鷄の聲を聞いて、ギヨッとする。富樫は火箸を持ちながら、若松、直井を見て
富樫　鷄既に啼いて、忠臣曉を待つ。折も折とて玉子の手の內、碎くと等しく鷄の聲。ハテ、面白き今の一聲。
直井　それかあらぬか東天紅、東より先づ杯にも、白けて

見えたる、この場の仕儀。

富樫　鷄の息より霞む朝かな。直井の左衞門、奥へ。

ト唄になり、富樫、直井、奥へ入る。若松、跡を見送り、一人殘りて

若松　思ひがけない今の一聲、心に誤まりあるゆゑに、ハッと立つたる顏の色。物に賢き富樫の左衞門、最早覺つてこの場の體、濟まぬと思うて行かんしたが、氣にかゝる事ぢやなア。

ト云ふうち奥より、お達、鏡臺を持つて出て

たつ　爰へ鏡臺を持つて參じたわいなア。お湯もよう沸いたと云つて來たわいなア。早う髮も梳いてしまうたがよいわいな。

若松　それ〳〵、そんなら鏡臺、爰へ直して下さんせ。

たつ　ちよつと髮も梳きやんせう。鐵漿も沸かさうと思うたがな、寒くて附かぬわいな。お前さんは知らぬ事、わたしや雪齒ぢやに依つて、寒いと此やうに附かぬわいなア。

ト云ひながらお達、襷を掛けて、若松が髮を梳きにかかる。若松、鏡臺を引寄せて、鏡に向ふ張合ひに、舞臺に落ちてある法螺貝を見付け

若松　お達どん、ありやなんぢやえ。

たつ　これかえ。若松さんとした事が、こりやなんぢやわいな。山伏の持つ物ぢやわいなア。をかしい物ぢやなア。此やうな形でも、天上をする時は、恐ろしい物ぢやと云ふ話しを、誰れやらがしたわいなア。オヽ、それそれ、大門の兵庫屋からござんす客人の話しぢやわいなア。

若松　怖いものぢやなア。

たつ　マア、手に取つて見さんせいなア。

若松　怖い物ぢや。こちや嫌。

たつ　マア〳〵、此やうに重いわいなア。

トお達、貝を手に取る。貝の中より米を若松が膝にこぼすと

若松　こりや米ぢやないかえ。

ト云ふうちお達、鏡に映る若松が顏を見て

たつ　ヤア〳〵〳〵、若松さんの顏が、鷄に見えるわいなア。

ト驚ろく。若松、その鏡を取つて、お達を見事に切る。キッと思ひ入れする。唄になり、若松、心を納め、死骸を隱して、あたりを窺ひながら廊下へ入ると、齋藤次出て、呼子を吹く。以前の奴、大勢、出て來る。

奴皆　御用かな。

齋藤　家來どもへ申しつけ置きたる通り、折を窺ひ、富樫左衞門を討つてしめろ。某事は、娘松風姫を引立て、屋形へ歸る。用事あらば合圖の呼子を。必らずぬかるな。

奴皆　心得ました。

齋藤　合點のゆかぬは下部の時助。この馬郎婦の觀音へ心を掛ける體。彼奴こそ正しく義經が餘類、イヤ／＼、先づこの用心には紲を張れ。この馬郎婦の觀音を取られぬやうに。

　ト懷中より出して、包み直さうとする所へ、お市窺ひ、厨子へ手をかける。齋藤次、振り放して

齋藤　この女は、何をする。

いち　サアこれは。

齋藤　合點のゆかぬとち女郎め、この觀音へ手を掛けるは、曲者に違ひはない。サア、有やうに身の上を明かすまいか。

いち　滅多な事を仰しやりますな。私しがお側へ參りましたは。

齋藤　齋藤次が側へ寄つたは

いち　サア、これは。

齋藤　なんと。

いち　オヽ、それ／＼、それぢやわいなア。あなたが承はりましたる齋藤次祐家さま。今日のあなたの御趣向は、丹前出立ちよしや風。よしやと云へば名に連れて、お供の御用もあらうかと、ちよつとお側へ。

　ト懷中へ手を入れる。立廻りあつて

齋藤　なんと。

いち　寄つたわいなア。

齋藤　面白い。丹前出立ちの齋藤次、供の役にも立たうかと、それでそさまが寄つたのか。

いち　アイ。

齋藤　この馬郎婦の觀音を。

いち　サア、それは。

齋藤　寄りやアがるな、とち女郎め。これに心を掛くると見えた。詮議がある……と云はうぞ。有やうはそもじのやうな可愛らしい、どうやら物に氣轉のきいた女があらば、老の寢覺に手なづけたい。年が寄ると、二度初心、若者に負けまいと我慢が嵩じて、疳が出る。早速其方に用がある。

いち　その御用は。

齋藤　その用は。

　ト抜きかける。お市、手ばしこく立廻りあつて、齋藤次が懐の厨子を取りて行かうとする。奴、バラ／＼と取巻き、此うちにお市、白い手拭を襟に巻き、奴の形になる。

奴皆　どつこい。

齋藤　詮議のあるその女め、繩ぶつて屋敷へ引け。

皆々　動くな。

いち　その厨子こそ觀世音、實にや大悲の誓ひには、枯れたる木にも花の鳥、一振り振り出す八文字、供の奴と思惑の、その仲の町。

　ト齋藤次へかゝる。

齋藤　どつこい。

皆々　どつこい。

　ト立廻りあつて

いち　ヨンヤサア。

　トこれより下座の口に取り、丹前の所作、面白くあつて、トゞ大勢を取つて投げ、キッと見得になる。

皆々　どつこい。

　ト奴時助、奥より出て、顔見合せ

いち　ヤア、こなさんはこちの人。

時助　コリヤ／＼、なんにも云ふまい、他人だぞ。眞赤い他人の奴仲間、滅多な事を云ふまいぞ。

齋藤　面白い。丹前の奴に荷擔人か。身の上の詮議に歯ごたへがする。それ程この觀音を欲しがつて、心をかけるは、義經の由縁か。

時助　サア、それは。

齋藤　なんと。

時助　サアこれは。

　ト時助、思案してお市を突き倒し、背打ちにする。

いち　これは、なんとしやんす。

時助　女の際に大それた、齋藤次祐家さまが、御所持なされた尊像へ、心を掛けるは合點がゆかぬ。サア、身の上を吐かすまいか。

いち　モシ／＼、此方に思はぬお疑ひ。觀音に心を掛くるとは、ほんにをかしいわいなア。

時助　盗人猛々しいと、有やうに吐かさにやア、刄物次手にくたばつてしまへ。

　トお市を引退け、齋藤次に切りつける。立廻りあつて、齋藤次が懐中の厨子に手を掛ける。立廻りあつて

齋藤　ソレ、やるな。
皆々　やらぬワ。
　　トかゝる。時助、皆々を追ひ散らして、お市を連れ、花道へ入る。唄になり、敷妙出て來る。井上次郎、以前の形にて出て來る。
井上　井上次郎となつて入込みし備前守行家、富樫の左衞門が秘藏なすところの八龍の鎧、奪ひ取つて立歸らば、一戰に及ぶ時、菜が肩に掛け、花々しく合戰と、思ひ詰めたる今の願ひ。何卒折を窺ひ、八龍の鎧を手に入れたいものぢやなア。
　　ト上の方に居る井上を知らずに
敷妙　まんまと入込みし敷妙、富樫の左衞門家直に、戀慕の體にもてなして、來る事は來ても、館の案内それと知らねば、我が子の行くへ、どこに居るやら覺束なく、只其うちもこの身の上、もしやそれと知られやうにと、怖いものぢやわいなア。
　　ト云ひながら井上次郎を見付け
マア／＼、こなさんはこちの人、長兵衞どのかいなア。
井上　女房。
敷妙　アイ。
井上　おのれは／＼、内を明けて、なんで爰へ失せたのだ。
敷妙　サア、それはナ。
井上　それはどころか、ヤイ、掛向ひの裏店住居、内を留守にしてなぜ失せた。第一、火の用心が悪い。さうして小富はどうしたぞ。
敷妙　サア、その小富の事に付いて、それで爰へ來たわいなア。
井上　氣にかかる事を吐かし居る。小富はどうした／＼。
敷妙　聞いて下さんせ、こちの人、お前から預かつたアノ
井上　小富を。
敷妙　あの小富を、富樫の左衞門が家來、加賀の次郎に奪ひ取られたわいなア。
井上　ヤア／＼、あの小富を、加賀の次郎に奪ひ取られたとは。
敷妙　氣比明神の境内に於て
井上　エ、、おのれは／＼憎い奴の。よう聞けよ。今でこそ古鐵買ひ、辨慶縞のおれは長兵衞、われはおよし、その昔は何者ぢや。この長兵衞は備前守行家、おのれは土佐坊昌俊が娘の敷妙、氏も系圖も歴とした侍ひではないか。その侍ひの娘が、預け置いたるあの小富、取られた

と云うて云ひ譯があるか。エヽ、おのれは、どうしてくれう。

ト腹を立つて、立つたり居たりする。

敷妙　尤もでござんす。常々可愛がらしやんすあの小富、奪ひ取られては、わしも云ひ譯がないと思うて、それで爰まで來たわいなア。

井上　わいなアどころか。コレヤイ、あの娘があればこそ、幾度か腹切つてくたばらうと思つて居る命を、斯うして居るではないか。ヤイ、あの小富を奪ひ取られては、もうもうなんにも要らぬ。侍ひも要らぬ。古鐵買ひも要らぬ。代りにはおのれにも添はぬ。サア〳〵、出てうせろ。

敷妙　サア、その腹立ちは尤もぢや。命に替へても取返す程に、どうぞ堪忍して下さんせ。

井上　イヤ〳〵堪忍せぬ。去つた程に、出てうせう。

敷妙　そりや又お前、聞分けがないわいな。

井上　聞分けがあらうがあるまいが、おのれがやうな奴は、女房には持たぬ。

敷妙　そんならお前、去らしやんすか。

井上　去つて〳〵去りこくる。

敷妙　そんなら去らしやんせ。

井上　去らいで〳〵。

敷妙　去らうわいなア。

井上　おのれは〳〵。

敷妙　こなさんは〳〵。

ト井上次郎は、素袍着になり、敷妙は、忍びの形にて、世話狂言の夫婦喧嘩のやうになる所へ、直井、以前の形にて出て來て兩方へ分ける。

直井　マア〳〵待つた。

敷妙　イエ〳〵、留めて下さんすな。

井上　退いたり〳〵。惣體おのれは長屋附合ひが惡い。路地の鍵も借りて置かず、計り炭の小炭も買はず、氣に入らぬ事ばかりぢや。出てうせう。

直井　サア〳〵、尤もぢや〳〵。お内儀も默らつしやい。

ト初めて、敷妙、井上次郎、直井、顏見合せると、思ひ入れ、合ひ方になる。

敷妙　ヤア、お前は。

直井　直井の左衞門秀國。其方は最前の女中、

敷妙　アイ。

直井　其許樣は。

井上　井上次郎忠永。

直井　見ますれば、烏帽子素袍で只今の御口論、長屋附合ひが惡い、路地の鍵を借りて置かずとは、變つた事の。
井上　サア、今云つたのは。
直井　あれは。
井上　物でござる。町人風情の女夫喧嘩、裏店小店にある、その日暮しの者の申すを、つい戯れに申したのでござる。
直井　イカサマ、井上次郎忠永どの戯れには、琴棋書畫等の樂しみの外、裏店小店の夫婦喧嘩を、只今の戯れとは、こりや、やりませうわい。
井上　わしもその心サ。
直井　それに又こちらの女中、最前富樫の左衞門に、深く心をかけ、帶の解けぬ思ひのなんかのと、口へ出任せ出次第に、あゝ云つたのは思ひ付きか。こりや、やりませうわい。
敷妙　わしもその心サ。
直井　取持つてやるべい。
敷妙　エヽ。
直井　富樫の左衞門を、この直井の左衞門が、命に替へて取持つてやるべい。樂しみに女なし夫なし、仲人になつて世話をしてやるべい。サア、おれと一緒に奥へお來やれ。
　ト手を取る。
敷妙　モシ〳〵滅相な。どうしてマア、わたしが。
直井　なぜに。折角お主が武士と見掛け、おれを頼んだに依つて、取持つてやるのだ。
敷妙　サア、それは。
直井　變替へか。
敷妙　サア、それは。
直井　嫌氣になつたか。
敷妙　サア、それは。
直井　そんなら、歩びやれ。
敷妙　わたしも行きたさは行きたいが。
直井　なぜ。
敷妙　今日は日が惡いわいなア。
直井　成る程、今日は日が惡い。第一、天一天上大天上を見ぬうちに、おいらが方の色事は、止めにするがよかんべい。止めにするなら止めにして、聞きかゝつたるお主が身の上、町人の娘でないと云ふ、その話しを聞くべいか。
敷妙　サア、それは。

直井　何者の娘で、名はなんと云ふ。それを聞かうか。
敷妙　サア。
直井　サア〳〵なんと。
井上　直井の左衞門觀念。
ト井上次郎、後から切りつける。直井左衞門、直ぐに立廻りにて、その刀を引ツたくり、井上を疊みかけてぶつ。その烏帽子、素袍も取れて、古鐵買ひの形になり、直井、悔りする。と敷妙、よろしくこなし。直井、敷妙が前へ刀を投げ出す。
直井　滅多に寄ると、秀國が背打ちの相伴に、主の側杖が食ひたいか。
敷妙　サア、それは。
直井　見て居やれ。此奴が態はなんだ。烏帽子素袍で、侍ひの振りをしやアがつて、それでも井上次郎忠永か。詮議をしたら、どのやうな事が知れまいものでもない。おのれを。
敷妙　コリヤ。
直井　富樫の左衞門へ、取持つてやる腹癒せに、存分にして命は助けた。キリ〳〵立つてうせう。
ト唄になり、敷妙を連れ、直井、入る。井上次郎殘つて
井上　エヽ、忌々しい。鳶の子は鷹にならずと、よう云うたものぢや。折角井上次郎になり、入込みたる古鐵買ひの長兵衞。直井の左衞門に出會うて、又この態。今年は又、忌々しい奴が隣り町からうせて、來年一ぱい、こんな目に會ふであらう。アタ怪體の惡い。それにつけても娘の小富、どこにどうして居るやら。逢ひたいものぢやなア。
トほろりとする。また唄になり、井上次郎、叩かれた腰の痛む思ひ入れにて、素袍を疊み、風呂敷に包み、腰に卷いて、形を作つて
所詮知れたる身の上。生きるとも死ぬるとも、奧へ踏み込み、富樫の左衞門が秘藏なす、八龍の鎧を奪ひ取つて立歸らん。目ざす敵は富樫の左衞門。エイ。
ト亭を目掛け、手裏劍を打つて障子を引き開ける。この内に富樫、上下、衣裳にて、刀を杖に、煙草盆持ち、劍を受け、キッと思ひ入れして居る。井上次郎、この體を見て、ギヨッとして、花道へ駆け出す。
富樫　備前守行家、待つた、
井上　何がなんと。

ト立歸る。管絃になる。

富樫　今打つたる所のこの小柄、これこそ六條の判官爲義公、御所持の笹龍膽のこの小柄。隱すに隱されぬ源の行家と、有やうに本名を名乘れ。

り　トきつと云ふ。井上次郎、立歸り、富樫に詰め寄つて

井上　聲かけられて思はずも、立ち留つたる昔氣質。町人とはなつたれども、魂ひはやつさぬ備前守。

富樫　行家どのでござらうがな。

井上　おんでもない事。

富樫　行家どの。

井上　富樫の左衞門。

富樫　替つた所の

兩人　參會ぢやなア。

井上　サア、斯う名乘り合ふからは、行家が願ひ、云うて聞かさん。富樫の左衞門、おことが秘藏なすところの八龍の鎧、源氏の重寶たりしを、待賢門の軍の折柄、藤原家の手に入つて、汝が家の寶物。某既に一戰に及ばんと思へども、時節來らず、今にも天運環り來て、籠城して鎌倉方の討手を引請け、その期に望む折柄は、何卒父の形見たる八龍の鎧、この行家が肩に掛け、目覺ましく働らかんと、思ひ詰めたる武士の一念。サア、聞き屆けてその鎧を、この行家におくりやるまいか。返答聞かん。なんと〳〵。

富樫　沛公は楚を討つて政事に仁なく、韓信は齊を保つて忠缺けたり。御身源氏の正統として、一心の納め惡しく、正しく鎌倉どのゝ伯父君、天下の伯父にありながら、國國所々を經歴して、膝を入るゝ所もなく、一擧に義兵を上げんとは、へ、、、、ハ、、、、愚か〳〵。剩さへ、富樫の左衞門家直が、家に傳はる八龍の鎧、乞ひ請けんなぞとは、及ばぬ望み、叶はぬ事〳〵。サア、尋常に立歸らば、この所を見遁がさん。但し心を翻へさず、頼朝公を亡きものにせんと企てあらば、搦め捕つて、注進なす。サア〳〵行家、返答は如何に如何に。

井上　小癪な諫言立て。某、一歲、義經を語らひ、大藏卿に執奏して、所持なすところの頼朝追討のこの黒附、後鳥羽院の綸旨頂くは、謀叛でない、逆意でない。サア、家直も味方になれ。違背に及ぶと命がないぞ。

富樫　さほどに云はるれば、八龍の鎧、富樫の左衞門、進上いたさう。

井上　何がなんと。

富樫　加賀の次郎參れ。
加賀　ハア、、。
　ト奥より鎧、持ち出る。
富樫　申しつけた最前の一領。イザ、行家へ渡し召されい。
加賀　ドレ。
　ト鎧櫃の中より、小富を出して井上次郎に渡す。井上次郎、恟りする。
小富　父樣いなう。
井上　ヤア／＼、これこそ我が娘。可愛や／＼。
富樫　滅多な事をお云やるな。腰に附けたるこの札に、辨慶橋常陸屋、古鐵買ひ長兵衞娘。
井上　なんと。
富樫　其許樣は源の行家、町人に娘はない筈。某が家の重寶、八龍のその鎧、行家の所望ならば、それにも等しきその鎧を、この町人の古鐵買ひの長兵衞に、云ひ附け召されい。
井上　すりや、この娘の父は、古鐵買ひの長兵衞ゆゑ
富樫　鎧の手筋をお聞きなされい。
加賀　またこの上に八龍の鎧を、御所望おぢやれば、目前にこの加賀次郎が、この幼な子を、先ッこの通り。
　ト加賀の次郎、小富を引寄せながら、手籠めにする。井上次郎、恟りして
井上　ヤア、それは。
小富　怖いわいなう／＼。
加賀　行家どの、この通り。
富樫　これでも鎧がお望みか。
井上　サアそれは。
兩人　サア／＼。なんと。
　ト云ふうち、詰め寄せられ、井上次郎、加賀次郎と立廻りあつて、小富を圍ひ
井上　思ひ立つたる大望も、可愛と思ふ我が子の爲、我が子にあらぬ町人の娘、鎧の手筋に受取つた。
富樫　然らば所望の源氏の重寶ならぬこの寵愛、娘をさして御寮と云ふ、鎧をさして御料と云ふ、名に准へたる八龍の鎧、これをこの場の思ひ出に、立歸られよ行家どの。
井上　手段に乘つて本意なけれど、一先づこの場は立別れん。折を窺ひ
加賀　何がなんと。
井上　後の參會。
富樫　行家どの。

井上　家直。
三人　さらば。
ト見得になり、加賀次郎、奥へ入る。井上次郎、小富
を連れて、花道へ入ると、唄になる。左右より敷妙、
若松、出て、思ひ入れあるべし。ト〻側へ寄りて
兩人　富樫の左衛門家直さま。
富樫　其方は。
若松　若松ぢやわいなア。
富樫　其方は。
敷妙　敷妙と申しまする。
富樫　ついに見馴れぬ女中ぢやが、家直に御用か。若松も
用があるさうに、其方も富樫の左衛門に。
若松　云ひたい事が、あるわいなア。
富樫　兩人ながら家直に
兩人　アイ。
富樫　若松、其方の用と云ふは。
若松　サア行て寐よう。歩ばんせいなア。
敷妙　イヤ、待つて下さんせ。此方も用があるわいなア。
富樫　して、其許の用はな。
敷妙　女房に持つて下さんせ。
富樫　思ひがけなき御相談。富樫の左衛門家直には、ちと
こちらに先約がござつて、その返事は
敷妙　ならぬかえ。
若松　アイ、この若松がならぬわいなア。
敷妙　こりや面白いわいなア。こなさんがならぬと云はし
やんすれば、ようござんす、主をわたしが貰うたぞえ。
若松　そんならこなさんが、富樫の左衛門家直さまを。
敷妙　アイ。
若松　貰はしやんすか。
敷妙　女だてらに、斯う振り込んで來たからは、お否であ
らうと、好かしやんせずと、女房に持つてもらはねば、
どうも一分が立たぬわいなア。女房に持つて下さんせ。
若松　其やうに云はしやんすが、お前はマア、どこの者で、
お名はなんと云はしやんすえ。
敷妙　わたしや、どこからも來ぬわいなア。あつちの方か
ら來たわいなア。わざ〳〵來たのは、富樫の左衛門さま
と、女夫にならうと思うて來たわいなア。
若松　押しつけがましい女夫沙汰。なんぼこなさんが其や
うに云はしやんしても、そりやならぬわいなア。
敷妙　ならぬと云はしやんしても、わたしがマア、斯う云

ひかゝつては、女夫になつて見せうわいなア。

若松　そりや又どうして。

敷妙　富樫の左衞門家直さま、サア、お前のお心お一つで
わたしが女子の一分立つやうにも、立たぬやうにもなり
まする程に、御挨拶なされて下さりませい。

富樫　如何なる人の由縁かは存ぜぬが、某へ御執心とて、
これまでお出で。數ならぬ身に、近頃以て有り難いでえ
す。御返事いたさう。御挨拶仕らう。

敷妙　有り難うござりまする。どう云ふ御返事かは存じま
せぬが、御挨拶なされうとの御事、有り難うござります
る。

ト富樫が側へ寄る。若松、この中へ入り、ムツとして

若松　なんぢやいな、富樫の左衞門さま。この若松を側へ
置いて、あの女中さまへ挨拶せうとは、なんと挨拶さし
やんす。それ聞きやんしよ〳〵。

ト急く。若松の方を、下へ退けて

富樫　ても、はしたない、流石は傾城。例へおのれが制せ
ばとて、某が料簡にさへ落つれば、返事せいでなんとせ
う。すツ込んで居やうぞ。……サア〳〵、これへ〳〵。

ト手を取る。敷妙、いつそ嬉しがり、側へ寄る。若松、

腹を立てる。

敷妙　ハイ〳〵。

富樫　時に、そもじの御身の上は、何國如何なるお住居、
お名はなんと云ひますえ。

敷妙　ハイ、わたしはずんど田舍在所の、奧のひようたく
れの野暮助、なんにも存じませぬ者でござりまする。い
つぞや白山の祭の夜、宮にお出入りの町人衆の所ぢやと
云うて、金屛風やら、掛け盤やら、囃子舞子の打群れて、
唄三味線のその中に、あなたがお出で遊ばしたを……こ
れはしたり、この召し物に、綻びが切れて居まするわい
な。ちよつと縫うて上げう。

ト敷妙、手ばしこく頭の針を取つて、帶の糸を拔いて
話しながら縫ふ。

富樫　シタリ、そくいで付けても、斯う早くは縫はれぬも
のぢや。さらば一服。

敷妙　ハイ煙草。

ト煙草盆を出す。

富樫　南無三、袂に

ト云ふうち、敷妙、煙草入れを出す。

合點のゆかぬ。

ト云ふうちに

敷妙　この箱かえ。

ト香箱を出す。

富樫　時にもう

敷妙　八ツでござりませう。

富樫　さて〳〵、氣轉のきいた女子。煙草入れと云ひ、某が聞きたいと思ふ刻限を、八ツでござると今のさそく。こりや、女房に持たずばなるまいかいの。

敷妙　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

若松　なんぢやいな。わたしぢやと云うて、お前の心を知らぬではなし、朝夕お側に居る若松。サア、なんなりと、云うたがようござんすわいなア。

富樫　若松。

若松　ハイ〳〵。

富樫　今日は、いから寒いぢやないか。

若松　法螺貝。

ト側へ持ち行く。

富樫　妹松風が身の上の事につき

若松　サア、酒一つ。

ト銚子杯を持ち行く。

富樫　時に今は。

ト云ふうち若松、小柄を持つて行く。

さて〳〵、不氣轉千萬な。寒いと云へば法螺貝、松風が事を申せば小柄を出す。取り所もなき不氣轉者。今日より某が目通りへは叶はぬぞ。立つてうせう。

若松　そんならわたしを。

富樫　暇を遣はした。キリ〳〵立つてうせう。

ト云ふ。敷妙、小柄を取上げて

敷妙　この小柄の模様は、七つ附けたる笹龍膽。

富樫　六條の判官、爲義が所持のこの小柄。

敷妙　エヽ。

富樫　見覺えたる女。さては。

敷妙　わたしがどうしたぞいなア。

富樫　さて〳〵、氣轉の利いたる女子もあればあるものぢやなア。これからは其方が眞實の女房。さりながら、餘り只今では見一無頭、早急に存ずれば、御心底の程も覺束ない。誠に我れらが女房にならるゝならば、其許の心中。

ト云ひながら、前の箱の上書を見て

この書附けはなんぢや。午王入れ筑前坊長寛。午王入れとは面白い。ドレ〳〵。
　ト箱より午王を、一枚取出し
幸ひ〳〵、折も折とて熊野の午王、この小柄刃物まで、揃うたる起請の調度。サア〳〵、二世も三世も變らぬと云ふ、誓紙が見たい〳〵。
敷妙　サア、それは。
富樫　サア、替らぬと云ふその誓紙が書かれぬか。
敷妙　サア。
富樫　サア〳〵なんと。
敷妙　ハイ。
　ト當惑する。
富樫　さては起請は書かれぬな。左やうならば女房には持たぬ。サア、そんなら若松、奧へおぢや。
　ト手を取る。
最前のは某が惡かつた。機嫌直して奧へおぢや。
　トまた若松が手を取る。若松、また振り放さうとする。この張合ひに富樫、わざと袂より、若松が片袖を落す。
若松、これを見て
若松　ヤア、その片袖の紋は。
富樫　影に縫うたる抱き若松。
若松　ソレ。
　ト花道へ逃げようとする。
富樫　關破り。女に越され、武士の一分が立たぬ。富樫の左衞門家直が留めた女、おのれ、待つまいか。
若松　すりや關破りと。
富樫　睨んで置いた。
若松　さうぢや。
　ト若松、ツカ〳〵と來て肌を脫ぐと、片袖の無き脫ぎかけとなる。キッと見得になる。
富樫　おのれゆゑに、富樫は恥辱を取つて、人前の交はりならず、武士の道を捨てしもおのれゆゑ。サア、何ゆゑに關を越せしぞ。それ吐かせ。聞かう。
若松　サア、それは。
富樫　サア〳〵なんと。
若松　ホイ。
富樫　關破りの若松、富樫の左衞門、成敗の仕樣は、先づ斯くの如し。
　ト富樫、敷妙を引廻し、午王の上にて、指を切る。とドロ〳〵になる。敷妙、慄へる。富樫、起證を取つて

さてこそ、熊野の午王へ血汐を濺ぐや否や、俄かに慄ひわなゝく有様。オゝそれよ、心に浮かむ事こそあれ。近頃土佐坊昌俊、鎌倉どのゝ討手を蒙むり、堀川御所に於て義經公を討たん爲、書いたる誓紙の御罰にて、不思議や土佐が血筋たる者、熊野の午王へ血を濺げば、目前に悶絶なすと聞きしは、都の噂なりしを、いま目のあたりに女が有様。サア、午王を恐れ苦しむ有様、昌俊が身寄りなりと、とも／＼懺悔をなすまじきや。

ト詰め寄る。ドロ／＼にて敷妙、苦しむ。

敷妙　勿體なや恐ろしや。上は梵天帝釋四天王、五道の冥官、空誓文の報いにて、午王の烏の、アレ／＼、我れを目がけて飛びかゝるは、ハテ恐ろしきものぢやなア。

富樫　土佐坊昌俊が娘と、名乘れ／＼。

ト背打ちに打つ。ドロ／＼にて苦しみながら、玉鷄の印を、午王の上へ取落す。ト燒酎火燃える。途端に鷄の聲發すると、大ドロ／＼になる。若松は、鷄の聲を聞いて、鷄の見得になる。敷妙は燒酎火を見て、烏の睨ぎかけになる。富樫、兩方をキッと見て

さてこそ、形を顯はしたる兩人の、この體は。

若松　あら恥かしや、我れながら、鷄の形を顯はせしは、その義朝の玉鷄の印、我れと雌雄の因みある、戀し／＼と云ひ告げ鳥、假に姿を人と化し、これまで參り候ふぞや。

ト飛び／＼啼く。

富樫　さてはおことは、玉鷄の印に雌雄を因みし鷄とや。假に形を契りの若松、傾城と云ふ文字は、鷄の聲と書く。夜をこめて、鳥の空音ははかるとも、世に逢坂の關破り。ハテサテ、怪異な事を見るものぢやなア。サア、おことも、身の上を明かすまじきや。

敷妙　今は何をか包みませうぞ。我れこそは、土佐坊昌俊が娘、敷妙と申す者。父の報いを身に受けて、今の今までこの通り、不便と思うて下さりませう。

トどろ／＼。

富樫　察するに違はず、昌俊が娘よな。午王の不思議、玉鷄の印の奇瑞。

敷妙　今より後に土佐坊が、古跡に殘す午王が池。

若松　この契りの若松が、身に殘す鷄籠山。

富樫　この玉鷄の印と、この小柄は、この家直が寸志。イザ。

兩人　エゝ、有り難い。

富樫　早く行け。
ト大ドロ〳〵にて幕引く。
本舞臺、三間の間、大翠簾。幕の内より一セイを打ちかけ、幕明く。
〽汐汲み車わづかなる、浮世にめぐる悲しさよ。
トこの謠にて、村雨、花道より、着流しの上へ、紋紗の狩衣にて、烏帽子を着て、中啓を持ち、汐汲み桶を擔ぎて、花道の中程にとまる。
村雨　立別れ、稻葉の山の峰に生ふる、松とし聞かば今歸り來ん。仰せも重き御跡を、忘れもやらず村雨が、今の浮身を賤が業。行平どのにお逢ひ申さん。ソレ。
トまた一セイにて、村雨、舞臺へ來ると、奥より腰元籬、同じく幾代、雪洞を持ち出て、村雨を留める。
幾代　待つた。
村雨　こりや、村雨を、なんで留めさんす。
幾代　留めいでわいなア。このお館は松風さまのお館、直井の左衞門秀國さまのお妹御、村雨さまを、奥へやる事はなりませぬ。
籬　それのみならず戀の敵、嫉妬深いは女の性。行平さまの御身の上に、もしもの事もあらうかと、留めねばならぬ村雨さま。
村雨　そりや聞えぬわいなア。女子は互ひ。戀しく思ふ行平さまに、どうぞ逢はせて下さんせ。
籬　ならぬわいなア。
村雨　通さんせ。
兩人　ならぬ。
三人　どつこい。
トこれより
〽松に吹きくる風も狂うて。
ト謠の切りにて、三人、見事になり、立廻りあつて、トヾ村雨、兩人を當てゝ入る。續いて、籬、幾代、入る。バタ〳〵にて奥より齋藤次、松風を引立て來て、引据ゑ。
齋藤　コレヤイ松風、おのれを生ました親だぞよ。ようもようも親の目を拔いて、行平にどれ合つて、是明さまの御殿を、揚屋同然にしやアがつたな。よしないうぬらゆゑに、この兩家まで、たわけ者の卷添へになる。うぬらがやうな奴は、赤恥をかゝせてくれべい。
ト帶を解きにかゝる。行平出て

行平　祐家さま、マア／＼お待ちなされませい。

齋藤　うぬア、下河邊の庄司行平だな。いゝ所へうせやアがつた。うぬも松風と同罪だ。おれが斯うする。

ト足にて蹴る。

行平　こりや又あんまり。

ト急く。

松風　コレイナア、父さん、お前は／＼胴慾な。如何にお前の娘ぢやとて、あんまりぢやわいな／＼。娘可愛と思はしやんせぬか。エヽ、情ない。

ト云ひながら、行平へ、恥かしきこなしあるべし。

コレイナア行平さん、お前の難儀も自らゆゑ。堪忍して下さんせ。顔合せるも面目ないわいなア。

行平　富樫の左衞門家直どのへ對し、云ひ譯なきこの行平。頼朝公の嚴命に依り、義經公の御行くへ、富樫の關を見遁せしは、家直どのゝ二心と、實否を糺さんその爲に、密かに來りしその行平。松風どのと不義の惡名。身のいたづら申し譯なく、只今腹掻き切りて相果て、せめてもこれを武士の眞似と思し召されて下されい。ソレ。

ト行平、切腹せうとする。齋藤次、これを留める。

齋藤　どつこい／＼。殺さぬ／＼。娘を一人棒に振れば、滅多に殺してよいものか。まだ／＼これぢやア腹が癒えぬ。松風も行平も、某が館へそびいて、思ひの儘にせにやア置かぬ。サア、兩人ともに、うしやアがれ。

ト引立てようとする。富樫出て、兩人を圍ひ

富樫　齋藤次祐家、お待ちやれ。妹松風を貴殿の館へ連れ召さるれば、先達て取交したる、馬郎婦の觀世音、富樫の左衞門へ渡し召されい。

齋藤　サア、それは。

富樫　此方へ申し請けた貴殿の娘。貴殿へ返しまする上は此方から遣はしたる觀音、富樫の左衞門が受取り申さう。觀世音受取らぬうちは、松風は身が妹。指でも附けると免さぬぞ。

齋藤　成る程、受取り置いたる觀世音、其許へお返し申さう。ナニ奴ども、エヽ、最前の下郎をこれへ。

皆々　ハア。

ト管絃になり、花道より中間時助を縛り、奴の形にて若黨、舞臺へ連れて出る。

富樫　ヤア、其方は身が家來、時助ではないか。

齋藤　貴殿の家來のうちにも、とんだ奴があつて、取替はしたる、馬郎婦の觀世音を奪ひ取つて、立退きたる盗人、

富樫の左衛門がお見やる前で、身の上を詮議なし、奪ひ取られた觀世音、身が方へ取戻し、貴殿へ渡してその上にて、娘松風を連れ歸らん。コリヤ、時助とやら、中間の分際で、常磐御前の守り本尊、馬郎婦の觀音を、かッ淩つてかん出した。やうに白狀しろ。

時助　命に替へても盜み取らんと、入込んだ中間の時助、この身は例へ、づた／＼にならうとも、思ひ込んだ馬郎婦の觀音、こかしたところは、云はない／＼。

齋藤　ヤア、しぶとい下素下郎め、身が方へ受取らいでは、齋藤次が一分が立たぬ、しゝびしほにしてなりとも、受取つて見せう、これでも觀音を出さないか、これでもかこれでもか。

ト時助を齋藤次、背打ちにする。

時助　叩かれやうが切られうが、云はない／＼。云はないぞ。

齋藤　おきやアがれ。

ト詰寄る所へ、バタ／＼にて、伊勢女房お市、以前の形にて、取つて歸し、齋藤次に縋り付き

いち　マア／＼待つて下さんせ……コレ、こちの人。

時助　コレ／＼他人だぞ。

いち　でも。

時助　ドレ／＼。ハテ、この時助は盜人な、盜人に親しければ盜人の同類、他人だぞ／＼。

いち　イエ、他人ぢやござんせぬ。わたしやお前の女房、アイ、女房でござんする。例へ、お前が盜人にせい、女房は女房、この場になつてこのお市は、盜人の女房ぢやないと云ふやうな、水臭い女子でもござんせぬ。女房でござんす。夫につるゝは女房の習ひ。御詮議なさるゝその觀音は、わたしが盜んだわいなア。

齋藤　なにを。

いち　主の知つた事ぢやござんせぬ、時助は存じませぬか。わたしを御詮議なされませい。

齋藤　此奴は／＼、男に惚れた物の云ひやう。どうで此奴等ばかりおやア濟まぬ。同類一々縛つて詮議をする。この野郎より先づ、富樫の左衛門、盜人を拘へて置いては、おてまへにも詮議がある。遁がれぬ所だ觀念をしやれ。

富樫　御尤もなお疑ひ。この時助、身が家來ではござれども、生得存ぜぬあぶれ者。常磐御前の守り本尊、馬郎婦の觀世音へ心を付ければ、正しく此奴、義經の同類、富樫の左衛門が詮議がござる。マア／＼お年寄り、お世

詰やかれずと、ちつとそれにて見物おしやれ。蛇の口を灰汁で洗ひ流したやうに、松風が身の上も、行平が身の上も、其許の身の上も、これは善、これは悪と、さつぱりと顔見世小袖。仕立て進上仕らう。

齋藤　すりや、其許は盗人の身の上。

富樫　刀にかけて。

齋藤　面白い。

　トこれより富樫の左衛門、股立ち取つて、肩衣脱ぎ、身拵らへして

富樫　この盗人の同類を詮議なすは、火より水よりぶりぶりより、中納言義樹公、これへ入らせられませい。

段八　心得た。

　ト奥より麻生の段八、以前の公家にて出て来る。富樫直ぐに、段八が首筋を取つて、こづき廻す。

段八　こりやマア／＼、どうする。中納言義樹をどうするのだ。

富樫　どうするものだ、イケ盗人め。うぬにやア大分詮議がある。サア、同類を白状ひろがう。

　ト冠装束も叩き落して突き出す。段八、起き上がつて、時助を見付け

段八　ヤア、貴様は、おれが親方、勢州鈴鹿の盗人頭、伊勢の三郎義盛どの。

時助　さう吐かすは、麻生の段八。

富樫　覚えがあるか。

時助　サア、それは。

富樫　もうよい／＼。麻生の段八、サア盗人め、何者に頼まれて、冠装束を引きはつて、富樫の左衛門屋敷へは、何しに来た。真直に白状せぬと、その頭から爪先まで空竹割りだぞ。なんと。

　ト詰め寄る。

段八　マア、申しませう／＼。

齋藤　それを云はれちやア。

　ト齋藤次、段八へかゝる。富樫。隔てゝ

富樫　齋藤次、ちつと用が遊ひさすべい。サア、松風も村雨も行平も、須磨の浦へ流さうと云つたのは、偽はりであらうがな。

段八　左やう／＼。

富樫　誰れに頼まれた。それ吐かせ。

段八　誰れと申して、外に誰れがござりませう。あれにお居やる齋藤次前家どのに。

齋藤　南無三方。
富樫　齋藤次の家どのに、頼まれたに相違はないか。
段八　左やう〳〵。
齋藤　それを聞かれちやア、一世の浮沈、富樫の左衛門、觀念。
ト切りつける。富樫、直ぐに、その刀を取りて、時助が繩を切つてやる。
段八　それは。
ト段八、時助にかゝる。見事に首を切る。
皆々　これは。
富樫　觀世音の盗賊。
時市　忝ない。
富樫　松風は行平を伴ひ、奥へ。
行松　忝ない。
富樫　行け。
ト早三重にて、行平、松風、奥へ行く。
齋藤　ソレ。
ト切りつける。
富樫　どつこい。
ト立廻りになり、あわてゝ入る。齋藤次、立ち上がり

齋藤　伊勢の三郎をやるな。
皆々　やらぬワ。
時助　どつこい。
トこれより時助、立廻りありて、トヾ、時助、お市、下座へ入る。ドン〳〵にて、これより早笛になる。奥より腰元早枝、襷がけ、甲斐々々しき形にて、兜を持つて出る。これに續いて中間二人、眞黒出立ちにて出て後にかゞんで居る。
早枝　大切なるこの兜、兄さん源八兵衛どのへ。ソレ。
ト行かうとする所へ、中間二人、立ちふさがつて
中間　動くな。
早枝　こりや自らを、なんとするのぢや。
中一　なんとするとは久しいものだ。疑はしいその兜、此方へせしめて我れ〳〵が、褒美の金に當てゝある。女だてらに八龍の兜とは、ほんに入らぬ物。此方の流儀は一刀流。
中二　一向流や無敵流、流儀々々の手の內で、りう〳〵はつしと、ひどい目に、逢はぬ昔を元價にして、とつとゝ兜を渡せやい。
早枝　ホヽヽヽ、をかしいわいなア。女子ぢやと思うて、

侮らしやんしたら、ちつと當が違ふぞえ。悪い奴ぢやと思はんしよ。わたしもやう／＼向ひ町から、この屋敷へは初舞臺。少しなりとも殿様へ、忠義が立てたい／＼と、思ふ所へ幸ひの、二人のおさんを相手とは、願うてもないこの場の仕儀。お望みならばお二人さん、サア／＼相手にならうぞえ。

中一　なんだ此奴は、なま長い事を吐かしたな。そんな事には頓着ない。早くそれを此方へ渡せ。

早枝　そこ退いて通しや。

中間　渡せ。

早枝　通しや。

三人　どつこい。

ト　これより早笛になり、三人、いろ／＼のタテあつて、ト、二人を向うへ追ひ込むと、ドン／＼にて、樋爪の太郎、鉞を持つて出て來て

樋爪　ヤレ／＼、思ひがけもないドン／＼で、大きに膽を潰したわえ。斯う云ふ姿に出立つて、手柄をするはこの時節。なんでも手頃なをぶッちめべい。ドリヤ。

ト花道へかゝる。向うより馬士由松、以前の形にて、鞭を持つて出て來る。樋爪の太郎を押し戻し、舞臺へ來て、どつこいと止まる。

樋爪　此奴はなんだ。小さな奴だが、おれを爰まで押し戻し、どうせうと思ふ。

由松　コレお爺、いま彼所で聞いて居れば、手頃な奴があるならば、ぶッちめうと云うたに依つて、おれが相手に相應な持遊びだから、これからわれを馬にして遊ばうと思つて、それでわれを留めるのだ。

樋爪　此奴は／＼、太い奴ぢやアないか。うぬが形を見れば馬士だな。おれを馬にしようとは。

ト　これを直井の聲色にて云ふ。

由松　いんや、おらァ馬士ぢやアない。義經公詮議の爲、馬士と姿をやつす某こそ、富樫の左衞門直家が一子、直石丸とはおれが事だ。われが首を引ッこ抜いて、お父様へ土產にする。おれに首をくれろ。

樋爪　此奴は／＼、あめん棒でも貰ふやうに、首を容易く遣られるものか。悪じやれせずと、そこ退け。退きやうが悪いと、捻り殺すぞ。

由松　面倒な。首をくれろ。

樋爪　そこ退け。

両人　どつこい。

ト　これより早笛になり、直石丸、樋爪の太郎、いろいろのタテあつて、トヾ樋爪の太郎を馬にして、向うへ入る。早笛のうち向うより、常陸坊以前の形にて、四つ手駕籠に乘り、ヤツサコリヤサと聲をかけ出て來る。後より喜助、若い者にて、これに付いて出て、本舞臺へ來て

喜助　申し〳〵旦那、お約束の所へ參りました。

ト　云ふ。常陸坊、默つて居る。

申し〳〵旦那。

ト　大きく云ふ。恟りして

常陸　やかましい奴だ。

ト　云ひながら、駕籠を出る。

何をそんなに、かしましう云ふぞやい。

喜助　やかましい事はござりません。お約束の通り、爰まで參りました。サア、この間の下がりと、駕籠賃を遣はされませい。

常陸　なんと云ふ。いつぞやの勤めと駕籠賃を寄越せ。

喜助　左やう〳〵。

常陸　此奴は〳〵、太い奴ぢやアないか。おらア女郎買はうが、居酒を呑まうが、博奕を打たうが、ついぞ地切りを出した事はない。爰まで歩いて來たならば、ひよつと道で金を拾ふまいものでもない。又その上に駕籠に乘つて、一汗かゝせうと思つて、坊主なればこそ後生心で來たものだ。この館へ來ればとて、どうして一文も出來るものだ。悪い料簡な男でござるわえ。

喜助　茲な坊樣、こなたは立派な形をして、太い事を云ふ事だ。金錢を使はずに、女郎が買はれるものかな。

駕舁　さうして、おいらを寒いに依つて、汗をかゝせう爲に乘つて來たとは、あんまり人を茶にする奴だ。こりやアこの分では濟まぬわえ。

駕舁　なんと喜助さま、いつそこの坊主を、引ツ剝ぐがようござりませう。

喜助　それがよい〳〵。いつそ引ツ剝げ〳〵。

ト　三人、常陸坊を踏みのめし、剝ぎにかゝると、ドロドロになり、上より羽團扇、舞ひ下がる。これにて三人、ウンと悶絶する。

常陸　サア、これからは力強くなつた。コレヤイ、何奴も起きろやい〳〵。

ト　起す。三人ともに膽を潰し

三人　こりやどうだ。
常陸　なんと膽が潰れるか。これだから、勤めを取らずに早く歸れ。
喜助　例へ命を捨てるとも、下がりを取らずに歸られうか。尋常に勤めを寄越せ。
常陸　ア、是非もない。殺生せまいと思へども、もう料簡がならぬわえ。
喜助　ヤレ面倒な。引ッ剝げやい。
駕舁　やらぬワ。
常陸　羽團扇が爰へ飛び來るからは、いで物見せんと云ふまゝに。

トこれよりをかしみのタテ、いろ〳〵あつて、トゞ、喜助、駕籠舁き三人にて常陸坊を引ッ剝ぎにかゝる。中間二人を當て、置き、喜助と常陸坊タテあつて、喜助を殺し、一人の駕籠舁きに活を入れ、駕籠の先棒にして、後を常陸坊擔ぎ、ヤッヤコラサにて、捨ぜりふを云ひながら花道へ入る。直ぐに大太鼓のナガシになる。直井、時助、赤面、大廣袖の衣裳にて、八龍の鎧を持つて、岩の上に乘り、これを押し出す。うしろ山幕になる。兩方へ石碑を出す。太鼓打ち上げる。

直井　八龍きんきの甲冑こそ、誂らへ付けたる我が土產、仁王のやうな腕ぶしを、なぜこの鎧へさッかけた。
時助　おやッかな。伊勢三郎義盛が、せしめべいと思ふ鎧、主に渡してつまるものか。尋常におれに渡せ。やだアと云ふと、久し振りとは云はさない。早く此方へくれまいか。
直井　へ、、、仰しやつたりな伊勢の三郎、昔馴染みのよしみだけ、やるまいものぢやないが、この鎧に限つちやア、ちつとのうちも渡されない。これこそ主君義經公、御秘藏ありし八龍の澤瀉、この鎧を人手に渡してなるものか。邪魔せずとそこ放せ。やだアと云ふと腦天から爪先まで、はり〳〵と引裂くぞ。痛い目せぬその先に、キリキリそこを放せ〳〵。
時助　面倒な。おれに渡せ。
直井　そこ放せ。
時助　渡せ。
直井　忠義に凝つたる左右の力。
時助　慾に凝つたる左右の力。
直井　力と
時助　力の

直井　力較べだ。

トこれより、大太鼓入りの合ひ方になり、兩人、いろいろタテあるべし。トヾ花道より引き臺になり、舞臺へ引き戻し、しやんと見得になる。ドン／＼にて、向うより齋藤次、馬に乘り出て來る。これに續いて軍兵、大勢出て來る。

齋藤　ヤレ、直井の左衞門をやるなエ、。

皆々　やらぬワ。

川越　待つた。

ト川越太郎、奥より、長上下にて出て

川越　如何に直井の左衞門、敵は大勢、味方は小勢、必らずともに早まるまいぞ。

齋藤　重頼ともに、討つて取れ、エ、。

皆々　やらぬワ。

ト立廻りあるを向うより、鷲尾三郎、大廣袖、衣裳にて、出て來て

鷲尾　川越太郎の御難儀と、聞いて參りし鷲尾三郎、いで物見せんと云ふ儘に。

ト立廻りあつて、しやんと見得になる。

齋藤　アレ、討つて取れ。

皆々　やらぬワ。

トこの時

三尊　やみなん／＼。

トこれよりナガシになり、正面の山幕、引き上げると、眞中に不動明王、石の不動の見得にて、左右に、こんがら童子、せいたか童子の見得にて押し出す。太鼓打ち上がる。

齋藤　待て／＼。いま、川越太郎、直井の左衞門をぶッちめべいとする所へ、異形の姿を顯はしたが、そも先づうぬア

皆々　何奴だエ、。

齋藤　イヤサ

皆々　何奴だエ、。

不動　やみなん／＼。我れはこれ義經、日頃信心なす、岩倉山に安置なす、不動明王の靈像なり。

トどろ／＼／＼。

こん　義經を守護の爲、顯はれ出でたるこんがら童子。

せい　我れこそ武運長久を、祈らん爲のせいたか童子。

不動　例へ義經、一旦災難に遭ふとても、再び武運を咲かすべし。

三人　夢々疑ふ事なかれ。

ト どろ／＼／＼。

川越　ア、、有り難やなア。

齋藤　エ、、忌々しい。義經を亡ぼす血祭りに、いらざる所へ不動も秀國も、ぶッちめべいと思ひしに、川越太郎がつん出て、討ち洩らすか殘念な。よし／＼、この場は一旦別るゝとも、重ねての見參には、うぬらが首をおれが取る。さう思つてけつかれ。

直井　愚か／＼。うぬがやうな白髮首、打ち落すは易けれど、不動明王の利劍に依つて、この場は命を助けて歸す。どつちへなりと、うしやアがれ。

齋藤　なにを。

川越　ヤレ／＼、方々控へ召されい。二番目も廻つて居れば、一番目でたく、納めて此まゝ別れ召されい。

直井　然らば舅君の命に任せ、この場は此まゝ別れべいか。先づそれまでは伊勢の三郎。

時鶯　井の左衛門。

齋藤　川越太郎重賴。

川越　方々

皆々　さらば。

ト これより太鼓ナガシにて、直井、時助、鐙引き合せて眞中に立ち、鷲尾、軍兵を積み重ねて、下の方にその上へ乘り、小さき三升の紋の扇を開き、あふぐ。川越太郎、上の方へ直る。いづれも見得よし。

三曄　猶々行く末守るべし。

ト これより、唐樂になり、上より三升の付いたる大提灯、兩方へ下がる。花降る。唐樂打ち上がる。

川越　これより二番目の始まり。左やうに御覽下されませう。

ト 幕引く。

二番目　　藤原秀衡館の場

役名＝伊豫守源義經。同北の方、岩手姫。藤原秀衡。同一子、錦戸太郎國衡。同、伊達次郎泰衡。同、和泉三郎忠衡。同、元吉四郎高衡。同女房、お冬。秀衡娘、忍の前。腰元、梅路。同、錦木。局、袖野。家主、佐七實ハ本多次郎近常。下郎、島助實ハ半澤六郎成淸。下郎、綱助。姉輪平次景宗實ハ秩父庄司重忠。

本舞臺、三間の間、一面の障子屋體。西の方に枝折り門、東の方、九尺の亭、揚げ障子、見付け柱に紅梅の幹を取りつけ、一面に雪の降り積りたる見得。幕の内より錦戸太郎國衡、上下衣裳にて、三方に高さ二尺ばかり、幅一尺位の板に、結構に釣り鐘を繪に書かせ、これに、撞鐘再興願主、藤原秀衡と書きつけ、三方に載せてあり、下郎島助、同綱助、奴の形にて、庇の雪を掻いて居る見得。ちよん／＼にて幕明く。

綱助　錦戸太郎國衡さまへ申し上げまする。見ますれば、江州三井寺撞き鐘再興願主、藤原秀衡と、大殿の御名を記しなされたるその繪圖。

島助　それにお据ゑなされましたは、如何の思し召しつけでござりまする。仰せ聞けられませうなら

二人　有り難う存じ奉りまする。

錦戸　樣子知らねば、尋ぬるは尤も。江州三井寺の撞き鐘こそ、父秀衡が先祖、下野の國の住人、田原藤太秀郷、百足を退治、その功に依つて、龍宮城より送りたるところの、赤銅の撞き鐘は、梵聲の物なればとて、三井寺へこれを奉る。この度秀衡、如何なる願ひにや、碎きしところを再興せんと、斯くの通り繪圖をば認め、近々に鑄させんとの事。國衡これを承り、今日最上吉日なれば、父秀衡へ伺はんと、これまで持參いたしたわやい。

綱助　イカサマ、これは有り難い思し召し立て。御先祖藤原の秀郷公より、お家めでたき藤原の秀衡公。三井寺の鐘御再興とは、何よりの御孝行でござりまする。

島助　それにつきまして伺ひまするは、今日の御上使、鎌倉表より、姉輪の平次景宗さま、御入りなさるゝとの儀。いよ／＼左やうでござりまするかな。

錦戸　成る程、この度義經公、都を遂に開かせ給ひ、御行くへ知れねば、父秀衡にお疑ひかゝり、もし匿まひ置きしかと、それゆゑの上使。大切の折柄なれば、粗忽のないやうに心を付けい。

兩人　畏まりましてござりまする。

錦戸　時に申しつけるは、この館廻りの掃除。上使の御入りに見苦しうないやうに、爰役所に降り積りたる雪を掻け。

兩人　ネイ。

ト唄になり、錦戸、煙草のみ居る。島助また橋がゝり

の雪を掻きにかゝる。この唄のうち、雪いよ〳〵強く降り、花道より岩手姫、襠裲衣裳にて、肌に子を抱き、市女笠に、銀の杖を突き、花道の中程に立ちとまる。

島助綱助、内へ入る。

岩手　折惡しうこの雪の降る事わいなう。我が君義經公に錦劇吸にてお別れ申し、人目を忍ぶ身の上は、それぞと心の付かぬやうに、この高館まで尋ね來いと、重き仰せと我が子の事、經若がこの顔を、ちよつとなりとも早うお目にかけたさ。我れこそ急ぎこの道のべ。果てしの付かぬものぢやなう。

トまた唄になり、岩手姫、本舞臺へ來て、あたりを窺ひ

嬉しや、爰ぢや〳〵。マア、案内を乞うて見るがよい。コレ、ちよつと問ひたい事があるわいの。誰れぞさう云うてたも。賴みたいぞや〳〵。

綱助　ハテ、ぞんざいな案内の乞ひやう。誰れだ〳〵。

島助　コレ、おぬしやア、そんなに輕はずみに物云うて、後で目でも廻さないがよい。この雪の降るのに女の聲。大方雪女であるかも知れぬ。

綱助　イヤア。

島助　それだに依つて、滅多に挨拶せぬがよい。

綱助　イカサマ、そこもあり蓋もあり。

島助　よしやれ〳〵。

綱助　なんの、事があるもんだ。奥州六郡の主、秀衡さまのお屋敷に、奉公する程にもない。雪女でも大蛇でも、怖がつて詰まるものか。おれがどこまでも行つて見て來よう。とは云ふものゝ、や張りおれも氣味が惡い。

島助　ソレ見やれ、どうして一人行かれるものだ。お主とおれと連れ立つてはどうだ。

綱助　こいつはよい〳〵。そんなら行きやれ〳〵。

島助　サア行かう。

ト島助綱助、氣味惡さうに門口より窺ひ

綱助　イヤア、なんと見たか。

島助　美しいものぢやアないか。

綱助　申し、いま賴みたいと仰しやつたは

兩人　お前かえ。

岩手　サイナア、自らは遙か田舍の者なるが、秀衡親子の人々に、逢はねばならぬ用があつて、雪をもいとはず來た程に、主に斯くと傳へてたも。

島助　なんだか知らないが、ぞんざいな物の云ひやう。主

へ斯くと傳へいとは、此奴、將棊をさしに來たな。

綱助　時にお前は、どちらから爰へござりました。

岩手　サア、それは。

綱助　島助、油斷するな。この女子は、合點のゆかぬ奴だわえ。この雪の降るのに供をも連れず、懷へ子を抱いて、うぶ女かと思へば足があるし、頭を見れば田町の祭りを見るやうな笠を着て、こりや化けたな。今おいらが女に餓ゑて居ればとて、つまみに來たな。油斷をするな〳〵。

島助　合點だ〳〵。

岩手　そりやマアなんの事ぢやぞいの。自らは秀衡どのとは、よしみある者。詳しい話しは逢うての事。なんであらうと、早うこの由云うてたもれ。

綱助　云うてたもれ。ひい〳〵たもれがあきれるワ。サア、正體を顯はすまいか。どうだ〳〵。

錦戸　滅多な事をするな。早まるな。待て。

ト錦戸、立ち替り

あなた樣は、伊豫守義經公の北の方、川越太郎重賴どのの御息女、岩手姫さまではござりませぬか。

岩手　自らが身の上を、詳しう知つて居やしやんす、其許樣は。

錦戸　藤原の秀衡が惣領、錦戸太郎國衡めでござりまする。

岩手　アノ、其許が。

錦戸　先づ〳〵これへ。

ト岩手を上座へ直し、あたりを窺ひて

先づ以て先つ頃、龜割坂の邊にお忍びましましたとは承はりしが、經若丸さま御誕生より、御安泰の體を拜し、斯樣な嬉ばしい儀はござりませぬ。父秀衡儀も、義經公、あなたさまの御入りを、明暮れお待ち申して居りました。

岩手　世になき君や妾まで、待つて居たとは、嬉しや嬉しや。

ト云ふうち、錦戸立つて、島助、綱助を見て、反りを打ち

錦戸　サア、あなた樣が義經公の北の方岩手姫、鎌倉どのより詮議嚴しく、梶原平三景時の名代として、姉輪の平次景宗、この所へ來る由。先達て飛脚到來。申さば大切なる折柄、下郎は口のさがなき者。サア、他言ひろぐと芋刺しだぞ。

綱助　ア、コレ〳〵、滅多な事をなされまするな。何事も命あつての物種と、他言は決して

島助　仕りませぬ。

錦戸　しかと左やうか。
兩人　そつともお氣遣ひなされまするな。
錦戸　爰は端近。
岩手　そんなら案内。
皆々　先づお入りなされませう。

ト唄になる。岩手、錦戸、島助、綱助、入ると、奥より腰元錦木、同梅路。袖野、老女の衣裳、襠裲、下げ髮にて、花筒へ梅の花を入れて持つて出る。唄の中にて、障子を上げると、この内に藤原秀衡、羽織、衣裳にて、鏡に向ひ、香を聞いて居る。この後に忍の前、衣裳襠裲、病ひ鉢巻にて、秀衡が髮を撫で付けて居る。

錦木　忍の前さまへ申し上げます。今朝は珍らしき雪の景色、おしつらひに障りませうかと思ひの外、常にない御機嫌。
梅路　ほんに、大殿様のお髮をお上げ遊ばして、お睦まじきお二方の御仲。この上の事はござりませぬわいなア。
錦木　今日は、鎌倉表より、姉輪平次景宗さまの御入り。御上使との兼ね〴〵のお噂。
袖野　如何なる事か存じませねども、大切なる事。随分腰元衆も麁相のないやうにしませうぞや。これは又、お庭に咲きし梅の花、大殿様へ進ぜられるとの、忍の前さまの仰せつけられでござりまするわいなア。
秀衡　雪降れば、木毎に花ぞ咲きにける。
忍　いづれを梅と分けて折らまし。
秀衡　時知り顔に咲きたる梅、ても、しをらしい物ぢやなア。
忍　父上様へ申し上げまする。今日は鎌倉表よりの御上使のお入り。如何なる事か存じませねども、わたしやいから案じられまするわいなア。
秀衡　さして案じる事はない。この間より飛脚を以て、梶原平三景時方より案内。某が主人と仰ぎ奉る、伊豫守義經公、まつた北の方岩手姫の御行くへ、某が館に又ぞろ匿まひ置き、秀衡逆意を企つるなぞと、以ての外の噂とりどり。思ひも依らぬ事なれば、上使へ對し某が申し譯は、いづれとも相分る儀。少しも氣遣ひない程に、其方もさう思うて居るがよい。
忍　あの義經さまは、奥様があるかえ。
秀衡　ハテ、仰山な尋ねやう。義經公に北の方があれば、なんとする。
忍　サア、それは。

秀衡　忍、コレ、あの江州三井寺の、撞き鐘再興の繪圖を見い。先祖秀郷、龍の都より授かり得たるところの梵鐘の器。誠、壽量品の切刀には、龍女も佛果を得たるとの不思議。只さへ女は罪深い。よう諦めて、嗜なみや嗜なみや。

忍　イ、有り難うございまする。悪い事とは思へども、義經公に奥方があつては、嫉ましう

秀衡　又かいやい。嫉妬は女の七去の一つ。女の疵ぢや。嗜なまう。

忍　ハイ。

秀衡　早う髪をしまうてたも。

忍　畏まりました。

ト唄になり、雪強く降る。と花道より義經、一番目の山伏の形にて、笈の上にも、笠の上にも、雪の積りたる體にて出て來て、直ぐに舞臺へ來て、門の外に立ちて

義經　行き暮らしたる旅の修行者。殊に斯様に降り積り、案内もとくと知らざれば、一夜の宿を御貸しあれ。卒爾ながら御挨拶、頼み存じまする。

秀衡　珍らしき修行者の音信。日こそ多けれ今日は、鎌倉より上使の御入り。大切なる館の用。止宿の願ひ叶ひ申さぬ。

忍　申し、父上様、仰しやる事は、御尤もとは存じますれども、自らが病氣のうち、人の難儀を救ふには、妾が身にも加持祈禱。忍が願ひでございまする。どうぞ今宵は、お泊めなされて下さりませい。

秀衡　其方の云やる事ならば、強ひては云はぬ。兎も角も、

忍　有り難うございまする。常々お前のお話しに、あの光明皇后さまは、千人の垢をお洗ひなされしも、お身の願ひにてなされしとや。勿體ない事ながら、それに習うて自らも、心の願ひも叶ふやうに、ドレ〳〵、忍がお泊め申しませう。

ト忍の前、亭の下へ下りて、門の口を明けて

降り積む雪に御難儀との事。今宵のお宿を致しませうわいな。

義經　これは〳〵、早速のお志し、忝ない。

忍　サア〳〵、此方へ。

ト忍、義經、顔を見合ひ、恟りして

義經　ヤア、其方は。

忍　お前様は義經公。

秀衡　ナニ、義經さまと。
忍　サア、義經さま……義經さまならぬ修行者様、お宿申しませう。
義經　思ひも依らぬ忍の前……世を忍ぶ身のお宿の無心。然らばそれへ通りませうか。
忍　サア／＼、こちらへお通りなされませい。
ト忍、無性に嬉しきこなしにて、秀衡が前に行き、笑ひかけ
申し、父上様、御難儀とあるお方を、お宿いたさいでよいものかいな。今も今とてお噂申した、伊豫守義經さまでござりまするわいなア。
秀衡　ヤイ／＼、たはけ者め、今日爰へ鎌倉より上使のお入りは、その義經公詮議の爲。かゝる危きその中へ、義經公をお泊め申してよいものか。
忍　おやと云うても義經さま。
秀衡　まだ吐かすか。世の中に、義經公に似たるお方もある噂。粗忽な事を申すな。どこがどこまでも義經ではないぞ。
忍　ハイ。
秀衡　御修行者、心置きなう、これへ／＼。
義經　これは／＼、然らば參ります。
秀衡　先づ／＼。
ト秀衡、亭より下へ下りて、義經を上座に直す。忍、煙草盆を出し、茶を酌んで行く。
義經　矢張り、差措かれて下されい。
秀衡　ハテサテ、目まぐるしい。其方がせいでもよい事を。女子どもに云ひつけい。して御修行者には、どれからどれへ通るぞ。
義經　手前儀は、紀州熊野山より、出羽の國の羽黒山へ、年籠りに參詣仕る者でござる。誠に頼みまするは人の御助力、文字にも即ち合せる力と、人の力を假の世に、命一つをこれまでやう／＼、難行苦行いたして參る、山伏でござるでッ。
秀衡　御身、在俗にてましませし時は、奢る平家を討ち滅ぼし、源家の武運を開き、勲功の一に擧まれ、或る時は野に臥し山に伏し、山伏とまでなり果て給ふ御身の上。如何に讒言の舌の根の鋭ければとて、鎌倉どのゝ御心底、思へば／＼何事も前世の約束。藤原の清衡は、義家公の眷顧の武士、某とてもその通り、義經公に似たる山伏、どこがどこまでもお泊め致さう。

義經　すりや、世に捨てられて世を捨てし、この山伏を、昔に替らず、お宿なさるゝ御所存か。

秀衡　武士の魂ひ大磐石。

義經　忝ない。

秀衡　娘、義經公に似たる、大切なる御修行者。もしもの事のないやうに、其方、お側に居て御馳走申しや。

忍　アイ、自らをあなたのお側に。

秀衡　如何にも。皆の者參れ。

ト唄になり、秀衡、錦木、梅路、袖野、續いて奥へ入る。合ひ方になり、忍、義經が側へ行き、振り袖にて脊中の雪を拂ひ、置き炬燵を下ろして、義經が側へ置く。

忍　此やうな嬉しい事がござりませうかいな。焦れ〳〵て居りました、あなた様にお目にかゝると云ひ、あの物堅い父上樣まで、あなたのお側へ付いて居よと、何から何まで、斯うした首尾もあればこそ、惜しからぬ命を長らへ居ました。ようお顔を、お見せなされて下さりませい。

義經　某とても、懷かしさは同じ事。いつぞや越前の國秋行にて、不思議に逢うて、それより後は便りも聞かず、どうか斯うかと案じ居たが、ヤレ〳〵、よう其方にも達者で居てたもつたなう。

忍　ハイ、あなたにお目にかゝらう〳〵と、思ふ一念ばつかりで、マア斯う致して居りまする。時に申し上げねばならぬ事。今日この館へ、鎌倉よりあなたの御身の上詮議とて、梶原が名代、姉輪の平次が參りますわいなア。

義經　ナニ、某身の上詮議の爲、兄頼朝公より、この家の主秀衡へ、姉輪の平次が上使とや。

忍　ハイ、お身の爲に大切なる、今日の上使。何かにお心をお付けなされませう。

義經　ヱヽ、情なき頼朝の計らひ。列なる枝葉の某を、なんぞや叛逆密謀の族と等しく、根を斷つて葉を枯さんとの今日の上使か。よし〳〵、此まゝに死なんより、おのれ姉輪の平次、陪臣ながらも當の敵。主に刃向ふ人非人。某が一刀の下に討つて捨てん。ソレ。

忍　申し〳〵、お情ない事仰しやります。そんな短氣なお心から、よしない梶原が讒言。あなたのお腹は立たうとも、お待ちなされて下さりませい。

義經　忍の前、支ゆるな。猪武士とも云はゞ云へ、おのれ姉輪平次、義經が刀の切れ味見せん。ソレ。

忍　先づ／＼お待ちなされませい。
ト義經、行かうとするを、忍の前、いろ／＼留める。それにも
此うちに舞臺に有りし柿箱を引ツくり返す。
構はず、義經振り切つて行かうとする。
忍　先づ／＼、お待ちなされませい。
義經　放した／＼。
泰衡　伊豫守義經公、伊達の次郎がお留め申しまする。先
づ先づお待ちなされて下されい。
ト唄になり、障子を引き上げる。内に泰衡、長上下、
小さ刀にて居る。上の方に岩手姫、以前の形にて、經
若丸を抱き立つて居る。義經、岩手姫を見て
義經　ヤア、其方は岩手姫ではないか。
岩手　我が君様、先づ／＼お待ち下さりませい。
ト岩手姫、下へ下りて義經を留める。忍の前、無性に
腹を立つ。
忍　アヽ阿房らしい。なんのこつちやいの。あなた様は、
どなた様でござりまするえ。
泰衡　義經公の北の方、岩手姫さま。先つ頃龜割坂にて、
御誕生まし／＼たる、若君經若丸さま諸とも、先達てこ
の館へお越しなされた。隨分御大切に致せ。

忍　なんの、兄さんとした事が、マア、あなた方のお世
話が、どうしてこうとらかなるものでござんすぞいなア。
世間の譬へにも、女子は男同士、お前、よいやうにお世
話なされて上げましたが、ようござんすわいなア。
泰衡　此奴、いろ／＼の事を云ふ奴ぢや。憚りながら義經
公へ申し上げまする。御若年の折柄、お目見得仕りまし
たる秀衡が次男、伊達の次郎泰衡めでござりまする。益
益御機嫌よい體を拜し、恐悦至極に存じ奉りまする。
義經　誠に承安四年より、いま文治二年まで、十四年が間、
文通のみにて中絶したる、伊達の次郎であつたか。汝
も堅固で、重疊々々。
泰衡　有り難い御意を承りましてござりまする。經若丸さ
まへも、御挨拶を遊ばされませい／＼。
義經　ドレ／＼、經若丸か。ヤイ、其方の父ぢや。コレ、
顏見せてたも。
ト抱き子を受取る。
岩手　ハイ、あなたによう似た顏のかゝり。よう御覽遊ば
しませい。二人になりしその日より、今の今まで、そも
やそも、大方ならぬ艱難辛苦。此お子まで、何かの不自
由をさせましたわいなア。

義經　廣き世界に生れながら、現在の兄は日本の武將。弟に生れし義經親子は、斯くまでこの身を狹められしか。思へば〳〵口惜しいなア。

ト思ひ入れすると、抱き子、泣き出す。岩手姫取つて抱きかゝへ

岩手　可愛い〳〵。

泰衡　憚りながら伊達の次郎が、ちと若君をお抱き申しませう。近頃憚りながら、ドレ。

ト岩手姫が方より、抱き子を取つて、忍が前へ連れ行く。忍の前、その子を見て無性に腹を立つ。

岩手　自分が乳がなうて、大抵や大方の難儀な事ではなかつたわいなう。

泰衡　左やうでござりませうとも。さりながら、義經公に似させ給ひ、氣高いお生れ。コレ〳〵妹、お側へ寄つてお見上げ申せ。

忍　知らぬわいなア。

泰衡　此奴が〳〵。如何におのれ、年がゆかぬとて、若君をお抱き申すを、知らぬとは、物の云ひやうを知らぬ。コレヤイ、この若君は義經公と北の方、御仲睦まじうて、御平産なされた若君經若君、其方もおあやかり申すやうに、サア〳〵、お抱き申せ〳〵。

忍　無理な事ばつかり云はしやんすわいなア。どうして義經公と岩手姫さまと、御仲が睦まじうてお出來なされた若君様、何が面白うて抱かるゝものぢやぞいなア。阿房らしい。人の心も知らしやんせいで。

泰衡　いろ〳〵の事を吐かし居る。かゝるめでたき若君様おむづかる程に、お側へ寄つて笑うてお目にかけい。

忍　なんの、をかしうもないに。

泰衡　兄が詞を背くか。

忍　そんなら笑ひますわいなア。

泰衡　サア、早う笑うてお目にかけい。

忍　笑はいでは。おゝをかし。えゝゝゝ。

泰衡　もつとお側へ寄つて、お抱き申して御機嫌を伺へ。

忍　なんの、それには及ばぬわいなア。

泰衡　ハテ、お抱き申せ。

忍　アイ。

泰衡　何を其やうに不人情な顔をする。笑うてお目にかけい。笑ひ居らぬか。

忍　アイ……へゝゝゝ。

ト泣きながら笑ふ。

泰衡　若君御誕生で、千秋萬歳と御祝儀を申せ。

忍　オヽ、おめでたい事でござりまする。人にはなんにもないと云つて、よう此やうなめでたい事。若君御誕生とは、ほんにアタめでたう、アタ嬉しい事でござりまする。餘りめでたうて〱、めでた涙がこぼれますわいなア。

ト忍の前、抱き子を泰衡に突きつける。泰衡、わざと取落して抱き子を泣かせる。此うち義經、忍の前が云ふ事を咳拂ひして、岩手に聞かせぬやうにする。岩手は、義經と忍の前が體を見て、いろ〱氣を揉む事あるべし。トヾ岩手、下に泣いて居る抱き子を取上げる張合ひに、櫛箱より落ちたる疊紙を落す。それを知らず、岩手は抱き子を寢せつける。義經、何心なくその紙の落ちるを取上げると、義經が膝へ、タラ〱と血汐したゝると、義經、恟りして、鼻紙にて拭いて見て

義經　斯う云ふ事もあるものか。疊紙より落ちくるこの黒髮。なんとなう取上げ見れば、コレ此やうに血汐のしたたり。誠や髮は血に屬して、女のせんたいとす。自然と愛着を生ずるゆゑ、至つて嫉妬の深きもの。かゝる不思議のあると云ふ、異說を思ひ合すれば、ても恐ろしい女の心。見えぬ黒髮の血汐になりしは、ハテナア。

泰衡　すりや、その疊紙より落ちたる黒髮の、血汐のしたたり、至つて嫉妬の深きゆゑと、義經公の仰せらるゝにて、心當りの事こそあれ。妹忍、それへ出い。

ト泰衡、忍の前を引寄せて、疊紙と黒髮とを取つて忍の前に見せる。忍の前、義經が方へ顏を隱し

忍　兄さん、わたしや恥かしいわいなア。

ト泣き伏す。

泰衡　そんなら今の黒髮は、忍の前の黒髮。

岩手　ハテナア。

ト顏見合せ、思ひ入れあるべし。此うちバタ〱にて、花道より元吉四郎高衡、隨分穢なき中間の形にて走り出て、花道の中にて手を突き

高衡　申し上げまする。鎌倉どのより御上使、梶原さまの御名代として、姉輪の平次景宗さま、只今これへお入りでござります。

泰衡　ナニ、御上使とや。

義經　ヤア、其方は秀衡が悴。

高衡　泉の三郎が弟、元吉四郎高衡でござりまする。義經公には御安泰にて、お入りなされましたか。

〇ト高衡、ツカ／＼と枝折り戸の側へ行く。泰衡、門の戸をさして。

泰衡　兄と同席叶はぬぞ。下がれ。

高衡　なんと。

ト詰め寄る。花道にて「上使」と呼ぶ。これより、義經、岩手驚ろき、忍の前ともに三人を泰衡、奥へ忍ばせると、高衡、橋がゝりへ扣へる。ト奥より秀衡、錦戸、島助、綱助、居並ぶ。また「上使」と呼ぶと、太鼓、樂になると、姉輪の平次、上下衣裳にて三方に墨付を載せて持ち出る。これに侍ひ大勢付いて出る。花道の中程にて立ちとまる。

秀衡　この度の御上使、堀原平三景時どのゝ御名代として、姉輪の平次景宗どの、鎌倉表より遙々との御出で。長途のお疲れ。先づ／＼御休足ながら、あれへ。

姉輪　上使でござる。上座いたす。

皆々　イザ／＼これへ。

姉輪　許さつしやい。

ト管絃になる。姉輪、上座へ坐る。泰衡、島助、綱助、秀衡、錦戸に居並ぶ。

秀衡　早速ながら、鎌倉表より御上意の趣き、秀衡親子に仰せ聞けられて下されうならば、千萬忝なう存じまする。

姉輪　頼朝公より仰せ出され、秀衡どのへ申し達すると承はるは、姉輪の平次が役目。聞くまいとお云やつても、此方から聞かすべき筈。各々方の身の上に、めでたい事やら忌々しい事やら、まだ知れもせぬ事を、忝ないとは、差當つて粗忽の挨拶。上使の趣き餘の儀にあらず、この一通に認めたるを、とくと拜見おしやれ。

秀衡　ハア。

ト秀衡、墨附を取上げ、頂き見る。

ナニ／＼「承安四年の頃、秀衡が先祖清衡より、主從のよしみに依つて、判官義經を誘引して、年を經て都へ逆り、又ぞろこの度頼朝公、義經と吳越と別れし折を窺ひ、再び義經を匿まひ置き、逆心の念ある由、鎌倉表へ訴へ頻りに依つて、秀衡親子の心底明かされべく候。文治二年十一月三日、秀衡どのへ、平三景時」……すりや義經公を秀衡誘らして、逆心を企つると、鎌倉どのへ訴へしとや。ホイ。

ト秀衡驚ろく。

泰衡　ナニ、又ぞろ義經公を匿まひ、父秀衡、逆心を企つ

るとの風聞とや。ホイ。

錦戸　よろしからない取沙汰。これはこの分では濟みますまい。弟泰衡、こりやなんとしたらよからう。

泰衡　左やう〳〵、秀衡一族の爲には、身にも覺えぬ御疑ひ、早速お請けなされませい。

錦戸　この上は、父秀衡のお請け次第で、家の大事と

皆々　罷りなりまするぞ。

秀衡　某先祖藤原の淸衡よりこの方、三代が間六郡を管領し、繁榮を極むる事、全く源家の御厚恩。いかでかこれを謝すべきや。逆意などとは穢らはしき、秀衡が家の瑕瑾。これのみならず、義經公を又ぞろ匿まひ置きしなぞとは、思ひも依らぬ世の人口。申し譯は追つての事。差當つて御上使の趣き、委細承知いたしてござる。

姉輪　承知の上は、鎌倉どのへ速やかに、その云ひ譯を立てらるゝとも、また籠城に及ばれて、討手の勢を待たるるとも、二つに一つの御挨拶を、姉輪の平次が承はらう。

秀衡　御請け致すまでは、長途の疲れを晴らさるゝやうに、休息なされい。方々、申しつけたる用意を致せ。

島助　ハア。

ト島助、綱助、結構なる煙草盆を姉輪が前へ直す。島助、茶臺に銀の茶碗に茶を酌み出す。結構なる高坏へ、菓子を盛り、姉輪が前へ直す。

姉輪　お心遣ひ御無用でござる。五十四郡に上使は一人、ひよつと毒でもかはれては、平次が馬鹿々々しい。喰べたも同然、御馳走御無用。何は兎もあれ秀衡どのには、御令息數多と承はつたが、器量骨柄、一々鎌倉どのへ申し上げる爲、お近づきになりませう。お引合せ、賴み存ずる。

秀衡　これは〳〵、御尤もなるお尋ね。御上使にお引合せ仕らう。

姉輪　早う〳〵。

秀衡　家の惣領、家督にも立つべきは錦戸太郎。それへ。

錦戸　畏まりました……拙者が即ち秀衡が惣領、錦戸太郎國衡、お知り人になりませう。御上使、御苦勞に存じまする。

姉輪　これは〳〵御挨拶でござる。其許が秀衡どのゝ御惣領、國衡どの、定めて武藝の儀は申すまでもなし、諸藝等の心掛け。取分け打ち物取つての早業。早速そのお心掛けを見まする爲、姉輪の平次が、カホ。

ト姉輪、扇にて錦戸へ打ちつける。刀を取上げるうち

にひた打ちに、叩き落す。錦戸、赤面してあたりを見廻し

錦戸　面目次第もござらぬ。

姉輪　して御次男は、何處でござる。

泰衡　拙者が卽ち、秀衡が次男、伊達の次郎泰衡でござる。

姉輪　御舍兄とは事替り、中々健やかなる生立ち。定めて御手蹟など、ようござらう。

泰衡　少しばかりは、唐やうのにじり書。

姉輪　左やうならば歌なぞは。

泰衡　よいと申すは如何でござる。少しばかりはその道も。

姉輪　軍學は。

泰衡　七歳の時より。

姉輪　馬は。

泰衡　生得、好きでござる。

姉輪　定めて劍術、鎗術ともに。

泰衡　お相手になりませう。

姉輪　サア、そのお相手には。

ト姉輪平次、手裏劍を打つ。泰衡、中にて留め

泰衡　こんなものでござる。

姉輪　なか〳〵、味をやらるゝ。して、三男の和泉の三郎忠衡どのとやらは、如何でござる。

秀衡　その三男の三郎儀は、今朝より申しつけ置きたるに、未だ爰へ參らぬとは不屆き千萬。ナニ、島助、同道いたせ。

島助　畏まつてござりまする。

秀衡　早う〳〵。

ト云ふうち島助、花道へ驅けて入る。直ぐ取つて返し花道の中程にて

島助　秀衡さま申し上げまする。和泉の三郎さまには、いつもの如く大酒の上、お次に大いびきにて御寢なつてござりますれば、何を申しましても、一向他愛はござりませぬ。

秀衡　憎くい奴め。その分に差措かれぬ。例へ酒に性根を奪はれても苦しうない。上使の御前が相濟まぬ。綱助も次へ參り、三郎を爰へ連れ參れ。

綱助　畏まりました。

秀衡　兩人ともに、早う〳〵。

ト秀衡、急いで云ふ。島助、綱助、立つて入ると、花道より和泉三郎、長上下にて、鼓を枕として、他愛な

く寢て、其まゝにて、疊ともに、島助、綱助、釣上げて出て來て、直ぐに舞臺へ和泉三郎を下ろして

島助　和泉の三郎さまへ申し上げまする。御上使の御前、秀衡公のお側、御本性におなりなされませい。

和泉　やかましいわい。捨て置いてたも／＼。

島助　それでも、御前が濟みませぬぞ。

綱助　忠衡さま、お心をお付けなされませい。鎌倉表より義經公の儀につき、姉輪の平次景宗さま、御上使にお立ちなされて、爰にござりまするぞ。

島助　梶原どのゝ御名代として、姉輪の平次どの、お出でござりまする。

和泉　なんと云ふ。アノ梶原が。

皆々　お心を付けられい。

ト立つうち、和泉三郎、鼓を打ちながら

和泉　そも／＼景時が、その讒言の水上を思へば、渡邊や霞がくれに蒲汐の、逆櫓を立てんと浮舟の、梶原が申す事、よもしゆんきにや候まじ。

ト和泉三郎、この後を唄ひながら鼓を打ち、起き上がり、生酔ひのこなし、いろ／＼あるべし。

また酒々。誰れぞ銚子を持つておぢや／＼。

秀衡　和泉の三郎忠衡。

和泉　忠衡とは、體柄でえすの。さう云ふは誰れぢや。

秀衡　其方が父秀衡。倅、氣を付けまいか。

和泉　ヤ、、、和泉の三郎が父とは、鼓のちゝつぽ、これから我れら、鼓の習ひを打つてお聞かせ申さう。

秀衡　情ない亂酒。姉輪どのは鎌倉表よりの御上使、かゝるみだらな有樣。失禮とや云はん、無禮とや云はん。サ、心を付けて行儀を正し、御挨拶申せ。

和泉　いかう親仁も酔はれたさうな。我れら微塵も酔ひは致さぬ。さるに依つて、舌の廻る事、銭獨樂も裸足。御上使お入りとあらば、上下も着仕らん。和泉の三郎忠衡、酔はぬでえす。さらば上下お目にかけう。

トいろ／＼立ち上がり、生酔ひのこなしあつて、肩衣前後に着る。島助綱助、氣の毒がるこなし。脇差を差し、刀と三味線を取り違へ、よろ／＼して、秀衡が前を通り、姉輪が前へ手を突いて

和泉　我れら秀衡が三番息子、和泉の三郎忠衡、和泉の三郎忠衡……忠ひら參上仕つてござる。其許が梶原平三どのゝ御家來、姉輪の平次、承知いたした。キッと承知いたしたでえす。サア、御一緒に參らう。上下で女郎買

ひ。こりや面白い。誰れぞ駕籠を二挺拵らへさせい〳〵。

ト よろ〳〵立ちかゝる。泰衡、ズツと立つて、和泉三郎が襟を取つて引据ゑ

泰衡　既に三百六十五日、日々酔つて泥の如し。和殿がやうなる酔どれは、武士の家には逆磔刑。三國の英雄と呼ばれし關羽、詩文に聖と呼れたる李白、大酒に性根を奪はれ、末世末代辱にかゝるくたばり態。そでない死を遂げん爲に、酒を喰ふか、たわけ者め。大切なる上使の前、酔を醒まして本性になれ。伊達の次郎泰衡が、折檻の爲にだんびら物。正氣が付かねば氷の刃を、たつた今、ソレ。

ト 和泉三郎が前へ刀を抜いて突きつけ、試す思ひ入れあるべし。

いつそ一思ひに。ソレ。

姉輪　ヤレ、早まり召さるな。伊達の次郎。

泰衡　でも、兄弟のよしみを思ひ、陸奥武士の魂ひを、貴殿へお目にかけん爲。

姉輪　秀衡どのゝ血筋にも、其許のやうなる萬事に敏き勇士もあり、また酔どれの和泉の三郎。姉輪の平次が目のあたりに、正氣を付けてお目にかけう。一刀に討つて捨てんには、流石に惜しき人品骨柄。姉輪の平次がよきにいたはり、大酒の酔を醒ます妙藥。薬を進上仕らう。

泰衡　すりや、其許のお薬で、三郎が酔を醒まし召されうとや。

姉輪　如何にも。

泰衡　然らばよろしう頼み存ずる。

ト 泰衡、扣へると、姉輪立つて、大火鉢を持つて、和泉の前に寄り

姉輪　和泉の三郎忠衡、聞きしに増さる天晴れの武士。姉輪の平次、とくとお近付きになりませう。

和泉　こりや有り難い。拙者生れ付いて、未熟な事が嫌ひ嫌ひ。石部金吉金兜。酒杯たべる者を見ますと、七りけつぱい。なか〳〵風上へも置けぬ。我れら生得嫌ひです。キツと嫌ひでえす。

姉輪　お頼もしうござる。左やうならば武士の心掛け、兵法の御稽古、御手練の程が、ちと拝見いたしたい。

和泉　拙者が手練御所望とな。何より以て安う候ふ。コレコレ武士の嗜なみ、この三味線、まさかの時は、これがなければ役に立たぬぢや。

姉輪　三味線で人が切れるかな。

和泉　切るればこそ、砧の手。

ト和泉、三味線を取つて　砧の手を彈き、下座にて地を彈く。和泉が額を姉輪、キッと見て、火鉢の火を挾み、和泉が膝へ載せる。それにも構はず、三味線を彈き、醉ひたるこなし、いろ〳〵あるべし。仕掛けにて、膝の上にて火燃える。

姉輪　和泉の三郎、これでも正氣は付かないか。

和泉　どうも云へぬ〳〵。

ト餘念なく寢てしまふ。

姉輪　如何なる亂酒も聞き及びしが、燒け爛れよと景宗が、膝に置きしは烈火。それをもこたゆる和泉の三郎。すりや、本性は酒に奪はれたわい。所詮、此やうなる腰の拔けた侍ひは、姉輪の平次、カウ〳〵〳〵。

ト姉輪、刀を拔いて和泉を背打ちに、打ち据ゑると、高衡、小蔭より飛んで出て、姉輪が利き腕を取つて

高衡　待つた。

姉輪　茲な二才野郎め、變つた所へうしやアがつて、姉輪の平次が利き腕へ取りついたが、どこから飛んでうしやアがつた。數ツ奴め。

高衡　この家の主、藤原の秀衡が心に違ひ、とても武士にはなるまいと、子を見拔いたる親の目鏡。今は長屋の奥住居、身を顧ず、爰へ和泉の三郎が弟に、元吉四郎高衡と申す、兄弟五人のその一人、役にも立たぬ藪からし、野暮な藪蚊でござりまする。

姉輪　さては五人の兄弟のうち、元吉四郎とは、われが事か。なんだ。われは吹拔きの布子一つ。穢い汚ないその形で、姉輪の平次景宗が前とも憚らず、イケ厚かましくうしやアがつて、それのみならず、武士の利き腕に取りついて、なんとひろぐ。うぬらがやうな二才野郎めに、けちを付けられて、間尺に合ふものか。馬鹿な面な。

ト姉輪、高衡を突き退ける張合ひに、姉輪が懷より一通を落す。高衡取つて

高衡　オヽ、姉輪の平次景宗とのへ、泰衡より。

ト讀む。姉輪、引ッたくり、ずた〳〵に引裂き、高衡を足蹴にして、その一通を丸め、打ッちやる。

姉輪　なんだ、この反古がどうした。其方へ泰衡より、旅行の挨拶を書いたるこの一通。アタ不作法な。わいらが引ッたくつて、どうせうと思ふ。

高衡　サア、それは。

姉輪　誰れだと思ふ、姉輪の平次、關東育ちの武士の生粹。

まだ顏むきも固まらぬ態をして、いゝかと思つて、某を疑ふらしい面魂ひ。赤鰯へ反りを打つて、どうせうと思ふエヽ。
ト高衡を輕々と引寄せてこづき飛ばす。高衡、無念のこなし、いろ〳〵あるべし。
高衡　推參な。
姉輪　その面はなんだ。
ト高衡を足にかける。
高衡　最前から事を控へて、ヂッと心で堪えて居れば、姉輪の平次、陪臣の分として、元吉四郎高衡を、よう土足にかけたぞよ。
姉輪　足にかけたが、なんとした。
ト蹴る。高衡、直ぐに反りを打つて詰め寄る。姉輪、バッタリ下に居る。
高衡　土足にかければ手は見せぬぞ。
姉輪　姉輪の平次は上使だぞ。
高衡　何がなんと。
姉輪　伊豫守義經公、北の方岩手諸共、秀衡の館に隱れ居る由、見付けて首引ッ提げて立歸れと、重き役目を蒙むつたる、姉輪の平次は上使だぞ。

高衡　なんと。
ト詰め寄る。
姉輪　エヽ、この野郎は、疊ざはりの悪い。ジタバタひろぐな。埃が立つわえ。エヽ、馬鹿な面だ。
ト扇で高衡の眉間をくらはせる。直ぐに高衡詰め寄る。襟を姉輪、引ッ掴み、立ち上がつて
又しても〳〵、きつぱを返す元吉四郎。姉輪の平次が云ひ分ある。動きやアがるな。サア秀衡、義經岩手隱れ居るに相違はない。首討つて出せ。返答はなんとだ。
秀衡　サア、その儀は。
姉輪　なんと。
秀衡　上使のお請け。暮れ六ッ時の鐘を合圖に。
姉輪　暮れ六ッ時の鐘を合圖に。
秀衡　キッと返答仕らう。
姉輪　先づそれまでは、元吉四郎を、預けた〳〵。
ト突き放す。寄らうとするを、秀衡キッと留めて
秀衡　コリヤ、御上使へ對して慮外者め。
高衡　エヽ、口惜しい。
姉輪　泰衡、案内。
泰衡　先づ、お入りなされませう。

ト唄になる。姉輪、國衡、泰衡、秀衡、高衡、島助、綱助、入る。雪、段々降り積る。この唄のうち、和泉三郎、そろ〳〵起き上がり、あたりを窺ひ、

和泉　金の代りに女房になれと、せがみ立てられ、返事もならず。

ト三勝を唄ひながら、よろ〳〵して、姉輪が捨てたる反古を拾ひ、あたりを見ながら、銚子の酒を手水鉢へ明けて、引裂いたる手拭を段々手水鉢の中へ並べ、上より鼻紙をかけて引上げる。これにて、悉く企みあらはるゝ。

ナニ〳〵「兼ね〴〵申し合せ候ふ義經岩手姫、高館へ入り來り候はゞ、早速申し達すべく候ふ、その折柄兩人の首、御持參なされ候はゞ、あなた樣のお手柄にも相成り申すべく候ふ、右の段、梶原どのへもよろしく頼み入り候ふ、月日、姉輪平次どのへ、泰衡。」

ト讀んで、恟りして。

すりや先達てより、鎌倉表へ斯くの如く內通せしは、我れ〳〵が兄、伊達の次郎泰衡どのか。よもや〳〵と思ひしに、我が身の內に敵あるとは、恐ろしとも危ふしとも、義經公の御身の大事。ホイ。

ト思ひ入れするうち、後へ泰衡出て、無二無三に切りつける。和泉、有り合つたる鼓を持つて、しやんと留めて

こりや泰衡どのには、拙者をなんとなさるゝな。

泰衡　後に聞く人あるぞとも、知らぬはおことが絕體絕命。大酒に性根を亂せしも、裏から裏へ廻らん爲の、手段とも知らぬ我れ〳〵が、うつかり姉輪の平次が引裂いたる、今の一通を見られちやア、例へ汝が親にもせよ、助けて置いちやア某が、梶原どのへ云ひ交したる一分立たず。サア、速やかにくたばつてしまへ。

ト立廻りあつて

ト切りつける。和泉三郎、見事に請け留めて、また生醉のこなしあつて

和泉　お急きなさるゝな兄者人。我れら醉ふでえす。憚りながら、キッと醉ふでえす。

泰衡　何がなんと。

和泉　さなきだに、人心亂るゝ節は、竹の葉の露ばかりだに、かけしとは思ひしかども、杯に向へば違ふ心かな。」

トこの紅葉狩の謠を唄ひながら、生醉ひのこなしにて、

泰衡　段々に西の方へ行く。泰衡、これをチリ〳〵附けて本性を明かせ。心の知れぬ和泉の三郎、生酔ひの化けを顯はして、

和泉　サア、それは。

泰衡　サア

和泉　サア

泰衡　サア〳〵、なんと。

和泉　小波や〳〵、志賀唐崎の松の上葉を、さらり〳〵とさゝらの眞似を珠數にてすれば。

ト此うち、色々鼓をかせに立廻りあるべし。よき程に高衡、奥より出て、この中を隔てる。立廻りにて、三人キッと見得になる。

高衡　先づ〳〵、待つてもらひませう。

兩人　其方は。

高衡　元吉四郎高衡でござります。兄者人……兄者人、兩方ともに、必らずお急きなさるゝな。

泰衡　元吉四郎、伊達の次郎は、われに挨拶はないわえ。

高衡　拙者に御挨拶ないとは。

泰衡　伊豫守義經公、岩手姫も、わりや助ける心だらうがな。

高衡　サ、それは。

泰衡　どうだ。

高衡　元吉四郎高衡は、親にも兄にも見限られ、世に捨てられし一本立ち。誰れにも彼れにも頓着ない。兄頼朝の命に違ひ、かゝらう島もない義經を、主君と頼むはたわけの至り。窺ひ寄つて高衡が、御首振つてぶち落し、姉輪の平次へ手渡しせば、身代を起す一元手。飽くまで敵になる心。して又、兄貴の心底は。

泰衡　伊達の次郎泰衡は、道を守つて信義を立て、どこがどこまでも、義經公も岩手姫をも、お助け申す心底だ。

高衡　すりや義經公を。

泰衡　泰衡がお助け申すワ。

高衡　ハテナア。

ト思ひ入れして、和泉三郎が側へ行き

兄者人、和泉の三郎忠衡どの、其許様の御心底は、義經公をお助けなさるゝお心か。

和泉　如何にも、義經公をお助け申す心底ぢや。

高衡　イヤ〳〵、お隠しなさるゝな。左やうに仰せられても、義經公を貴殿、討たるゝお心で、三郎どのにはござりませうがな。

和泉　如何にも、義經公を討つ心ぢや。
高衡　イヤ〳〵、左やうには仰せらるゝが、義經公をお助けなさるゝお心でござりませうがな。
和泉　如何にも、お助け申す心底ぢや。
高衡　措かつしやい。義經公をお助け申す心かと云へば、如何にも。御首討つ心かと云へば、如何にも。あちらを聞いても、こちらを聞いても、如何にも〳〵。それぢやア兄貴、貴殿の胸中は、どちらがどうか解らぬが、それでも武士の本意が立つか。
和泉　立たぬでえす。
高衡　なんと。
和泉　和泉の三郎忠衡が心底、どうして其方達に云はうぞ。義經公の御首討つかと問はれて、討つ事ならぬと云うたら、鎌倉どのゝ鎌倉風吹かせて、二心ぢやの、弓引く心ぢやのと、思はぬ事を目くじら立て、耳やかましう云ふであらう。また討つ氣ぢやと云うたら、先祖淸衡どのより大恩請けし秀衡親子、義經公の首討つたは、主殺しぢやの不忠ぢやのと、箸の上げ下ろしに云はるゝ事なら、これもうるさい事ぢやに依つて、討つかと云へば討つ、討たぬかと云へば討たぬ。お身替りを立てようと云へばそりやよからう。蝦夷三界へ落し參らせうと云やれば、よからう。人が何云うても、和泉三郎は背かぬ。高が裸で物を落さぬやうなもので、體に疵が附かず、惡う云はれうが譏られうが、叩かれうが、踏まれうが、なんでも貴樣の仰せ次第。候べく候にやつて捨てるぢや。
高衡　取留めない三郎どのゝ挨拶。それにも一物あつての事か。
和泉　ないぢやわいの。
高衡　措かつせい。
和泉　措けと云へば措けぢや。
泰衡　面白い。和泉の三郎忠衡は、善とも惡とも片附かず、四郎高衡は、義經公の首討ち落す心よな。
高衡　おんでもない事。
泰衡　しかと左やうな。
高衡　おんでもない事。
和泉　助ける心、討つ心。
泰衡　云ふが誠か
高衡　云はぬが嘘か
和泉　親にも
高衡　子にも

泰衡　兄弟にも

和泉　それとも明かさぬ、心と

泰衡　心。

高衡　心々の二人の兄貴。

泰衡　元吉四郎。

和泉　後に逢はう。

ト唄になり、和泉三郎、泰衡、思ひ入れ、奥へ入る。

見送りて

高衡　兄弟五人の其うちに、錦戸太郎國衡どのは、懦弱不才の生れつき。次の伊達次郎泰衡どのは邪智佞人。和泉三郎忠衡どのは、柔弱にして、胸中知れず。斯く云ふ四郎高衡は、武骨短慮の生れつき。兄弟中それ程に整はずして、そもやそも、これで主君へ忠義が立てられうか。時も時とて姉輪の平次、お二方の御首受取らんと退引きならぬ手詰めの難儀。命にも力にも、頼みに思ふ親王に、この場の敵に廻られちやア、例へ矢竹に逸つても、心ばかりで歯は立たず。とは云へ此まゝ差措いては、義經公の御大事。岩手ゝさまの今の御難儀。いゝ料簡が欲しいなア。

ト思ひ入れして、膝を打つて

好い料簡が出たぞ〳〵、手もなく義經公、岩手姫さまのお身替りに、斯く云ふ四郎が首と、あの女房お今が首、揃へて出せばお二方。さうして置いてあなた方を、お供申して立退くが、身に叶うたる忠義の手段。それ〳〵。

ト喜んで又思案して

菜が首を、お身替りに立てば、あなた方のお供する命が、外になけりやアならねえ。エヽ、忌々しい事だなア。

ト無性におされて下にゐると、てんつゝになり、花道より佐七、火事羽織を着たる、やつし家主の形にて、逃後頭巾を、ぶッ、懐手して出て來る。後よりお冬、木綿綿帽、木綿帯の形にて、風呂敷包みを提げて出て來る。後より若い者、障子、疊下駄と盥、焙烙と鍋を一つに、兩掛けにして擔いで出る。後より今一人の若い者、行燈と味噌桶と煙草盆と蒲團を一つに兩掛けにして、擔いで出る。花道の中程にて

佐七　日傭の衆、やう〳〵と來ました。さて〳〵、店だてと云ふものは、家主の世話なものでござる。このお内儀を引渡したばかりで濟めばよけれども、まだ〳〵店賃の御定、近所の貰ひがゝり、わしが方へ引請けて來たに依つて、此方の方が附かねば、この人を渡して、引取りを

御亭主の前から取つてしまつた後が又金づく。貴樣達の日備代も、先で取つてやりませう程に、大儀ながら、そのがらくたを持ち込んで下されゝ

若一　どうで爰まで來たものだに依つて、先まで行つてやりませう。わしらは同じ日傭でも、このお內儀とは隣り同士、折角馴染みましたに、氣の毒な事でござります。

若二　それ〳〵、附合つて見れば、心立てもよい人だが、どのやうな事があつて、店立てを喰はつしやるか。氣の毒な苦々しい事でござる。

佐七　聞いて下さい。わしも門前おやア云ひ惜い事だが、コレこの人は、秀衡さまの若殿樣のうちで、元吉四郎。

ふゆ　ア、申し〳〵大家さん、其やうな事は人も聞くわいなア。蔭の事ならせうどもござんせぬ。現在目の前で云はれては、わしもお前も立たぬわいなア。

佐七　なんの、立たぬ事があるものでござる。高が獨り身で、食ふや食はずに居やうより、大家が勸めて地獄に出ろと、云ふ事を聞かぬゆゑ、そこで店に置かぬのだ。何もかも云ふ事がない。貴樣の店請け人へ引渡してやれば事が濟む。二人の衆、大儀ながら、そのがらくた、此方へ持つて來て下さい。

若者　合點でえす。

佐七　コレ、貴樣、先へ行つて、仙臺のきため町、家主の佐七が來たと云つて下さい。

ふゆ　アイ〳〵。

ト舞臺へ來て、高衡を見付け

申し〳〵四郎さま、わたしはお前に逢はねばならぬ用があつて、爰までわざ〳〵來たわいなア。

高衡　どのやうな用か知らぬが、女の身で、この雪の降るのに、何しに來た。

ト云ふうちも、奧を氣遣ふ心持ちあるべし。

ふゆ　外の事でもないが、お前の知つて居やしやんす通り、きため町の裏店を借りたは、畢竟お前と一つに居る事かならぬに依つて、わたしをお前の妹分にして、マア當分居たやうなもの。なれども、何かに附けて自由にならぬお前の身の上、大家さんがやかましう云つて、たつた今、店を明けいと云はしやんして、わたしを連れてござんしたわいなア。

高衡　そんなら、なんと云ふぞ。この元吉四郎は勸當同然な、こんな態の身の上。錢一文も才覺も出來ぬに依つてきため町の店を借りて置いたが、あの家主の世話にばつ

かりなつて居るに依つて、そこで大方大家もムッとして、店を立てたと云ふ事か。

ト此うちも身替りの事を案じる思ひ入れあるべし。

ふゆ　アイ、さうぢやわいなア。

高衛　如何にさうだと云つて、この雪の降るのに、店を立てると云ふやうな。

トむつとする。この後へ佐七來て

佐七　邪慳な男、さぞ貴樣は業腹だんべい。

高衛　これは〳〵お家主樣、其許樣に對して一言も云ひ譯はござりませぬ。ヤレ〳〵、この寒いのに、ようござりましたの。

ト大笑ひ。

佐七　これ〳〵、追從らしい輕薄笑ひ、措いてもらはう。サア、家賃の勘定、どうするのだ。その外に掛り合ひ、おれが引請けてやらにやアならない。

高衛　左やう〳〵、私し方から致し方が惡さに、其許にお腹を立たせまする。段々御無沙汰になりましたが、拙者儀も、

佐七　これサ〳〵、久しいもんだ。貴樣の妹を店に置いて、世間まで擧げたこの家主。サア、何は免もあれ妹を渡すからは、引取りを書いてもらひませう。

高衛　オヽ、書きませいでは。ちよつと書いて進ぜませう。

ト硯箱を出して書くうちも、身替りの事案じる思ひ入れあるべし。

一つ、我れら妹借家を借り置き申し候ふところ、我れら方へ慥かに引取り申し候ふ、以上、佐七どのへ、四郎高衛。

ト書いて渡す。家主、受取つて改め

佐七　よし〳〵、これでよし。貴樣へ妹を渡してしまへば、マア、此方にかゝり合ひはないと云ふものだ。これからが又金づく。家賃を貸す大家こそ多けれ、月々六百づゝの家賃を十六箇月、やがて一年半と云ふもの貸して置いて、勘定が九貫六百。これが先づ一兩二分六百よ。その外に米味噌、炭、薪、小遣ひ一切立替へて置いた、その勘定が十三兩に一兩二分と六百、二口〆めて十四兩二分六百。サア、たつた今、拂つてもらはう。

高衛　大家樣、これは又お前、どうでござりまする。御存じの通りの拙者が身の上、勘當請けてしまつた位なれば、今まで何しにチッとして居ませう。親と云ふ字に棄かれまして、斯う致して居るが、この胸にどのやうにござり

ませう。御推量なされて下さりませ。今少しのところ、お家主様、どうぞお待ちなされて下さりませい。

佐七　コレ、それを聞くまいと思つて、早く地獄に出ろ出ろと、家主のおれが　めるを聞かずに、外聞が悪いの恥かしいのと、力んだ事ばかり云つて、サア金の段になつて二文も出來るか。コレ、地獄々々と、忌々しいやうなれど、地獄の沙汰も金次第、一時ころびやア儘が餅、一分づゝ取る巧い商賣。世話してもらつてよい事だと思へばこそ、この家主の佐七が勸めたぢやアないか。それとも聞かないで、借りた方を待つてくれろとは、あんまり太い挨拶ばかり。料簡はならない。十四兩二分六百、たつた今寄越してもらはう。きなか缺けても受取らない。寄越してもらはう〳〵。

高衡　サア、それは段々の御深切でござれども、どうも其やうな儀は。

佐七　ならざア、金を返してもらはう。

高衡　サア、その金子の儀は。

佐七　出來ないか……出來ざアよい。出來ないものを無理矢理に、家主をして居る佐七、その位の事を聞分けないでもない。

高衡　左やうならば、お聞き届け下さりましたか。これはこれは。

ふゆ　マア〳〵、そこは雪風、寒さにござりまする。どなたも、こちらへお入りなされませいなア。

高衡　エ、、氣の附かぬ。なぜお茶でも上げぬ。お煙草盆を持つて來い。

ふゆ　アイ〳〵。

トお冬、茶を汲んで家主へ出す。

佐七　構はつしやるな〳〵。サアお冬、挨拶さつしやい。

トお冬が手を取り、連れて行かうとする。お冬、悔りして

ふゆ　大家さん、どこへ行くのでござんすえ。

佐七　知れた事。十四兩二分の金の代りに、鹽釜へ連れて行つて、其方に勤めをさせる。

ふゆ　エ、。

佐七　サア、歩んだ〳〵。

高衡　マア、待つて下さりませ。すりや、金の代りに妹を、あの鹽釜へ。

ふゆ　勤め奉公に出すといなア。

高衡　そりや又あんまり。

ト高衡、お冬の顔をフツと見る。これより身替りに立てようと思ふ心に、俄かになる。いろ〳〵とお冬を見て
よい所へお冬、よう戻つてくれたなア。
ふゆ　なんのこつちやいの。思ひ出したやうに、よう來たの悪う來たのと云ふ事があるものかいな。
佐七　サア、お冬どの、挨拶さつしやい〳〵。
ト連れて行かうとする所を、高衡、佐七を取つて投げ
高衡　ならないぞ。妹お冬をやる事はならぬ。借り請けた金は、こりや相對。身が妹を勤め奉公させやうとは、憎い奴の。サア、キリ〳〵と歸り居らう。
佐七　力むワ〳〵。金を借りて世話をして、雪の中へぶち込まれて、どうやらわしが損だけれども、せう事がない。金さへ取れば一分が立つ。サア、貸した金をたつた今、受取るべい。
高衡　サア、それは。
ト高衡が胸づくしを取る。
佐七　金を受取るべいの。金が出來ざア、いつその事に、うぬをおれが、斯うしてくれべい。
ト高衡を突き倒す。高衡、起き上がつて、腕捲りをする。
太い野郎ぢやアないか。金を返せ〳〵。
ト高衡を踏みのめす。お冬、見兼ねて側へ寄り
ふゆ　コレナア佐七さん、そりや又お前、あんまりであらうぞえ。
佐七　あんまりとはなんだ。あんまりとは此奴が事だ。
ト叩いて居る所へ、奥より泰衡、上下衣裳にて、最前より見て居て、ツカ〳〵と出て、家主を投げ背打ちに打ち据ゑ、懐より金を出して包み、上書をして懐中して居る。
泰衡　身動きすると命がないぞ。
佐七　なんだ、この侍ひは、人を滅法界にぶち据ゑたが、どうするのだ〳〵。相手が面白い。ぶたれべい。叩かれべい。
ト泰衡が側へ行く。
泰衡　素町人の分として、慮外を働らく不屆き者。切り下げるは安けれど、鎌倉よりの上使のお入り。ソレ、僅かの金子。
ト高衡へ投げて渡す。高衡、受取り、頂き
高衡　サア、先達てより借り請けたる金子、返濟する。キ

り〳〵持つてうせう。

佐七　うせいでは〳〵。金さへ取ればうせいでは。さらば我れら、うせませう。

ト佐七立つ。高衡、泰衡が側へ行き

高衡　どうもお禮の申しやうがない。日頃親人にも其許樣にも、お氣に叶はぬ四郎高衡。只今の難儀を見かね、金子をお貸し下さるとは。誠に親は泣寄りぞや。誠に有り難い〳〵。其方が金子、勝手次第に持つてうせい。

ト家主に打ちつける。その金を取つて、ニコ〳〵笑ひして

佐七　切り屑なしに十五兩、家主の佐七が受取つた。

泰衡　其方が金子受取つたからは、此方に係り合ひはないぞ。

佐七　左やう〳〵。

泰衡　係り合ひがなければ身が女房。サア、泰衡と一緒におぢや。

ト泰衡、お冬が手を取る。お冬、高衡、膽を潰す。

ふゆ　エ、。

泰衡　サアお冬、キリ〳〵おぢや。

ふゆ　泰衡さまとした事が、滅相もない。わたしや誰れぢやえ。

泰衡　知れた事、四郎が妹、身が婦妻に申し受けても苦しうない。某が奧にする。泰衡が嬶ァに貰つたぞ。

高衡　これはどうでえす、兄者人。あのお冬儀は、ちと仔細あつて世間を憚り、親仁樣の思し召しに、差控へてござれども、元吉四郎高衡が女房。妹と申したは僞はりでござる。

ふゆ　まだろく〳〵に、お目にかゝりませねど、常々のお噂、主の厄介。ハイ、マア、女房のやうな者。お見知りなされて下されませ。

泰衡　其方が云はいでも、二年跡から見知つて居る。無理合點で惚れた。泰衡が女房になれ。否でも應でも抱いて寢る。サア、某へお冬をくれろ。

高衡　如何に邪まを好めばとて、現在の弟、この高衡が女房を。

泰衡　女房とは云はさぬ。後日の證據は書いた一札、妹を引取つたと自筆に書いたぞ。又その上に家主に渡した十五兩の金子、上包みの書付けは帶代。

高衡　なんと。

泰衡　帶代として十五兩受取つたならば、否應は云はさな

い。但しは今の金を返すか。妹ぢやアないか。拔差しのならぬやうに、ぶんぢ搦みのこのお冬。身が女房に貰つたぞ。
高衡　サア、それは。
泰衡　妹と書いたこの引取り、おぬしやア忘れはせまいがな。
高衡　サア、それは。
泰衡　サア
高衡　サア
兩人　サア〳〵〳〵。
泰衡　サア、おぢや。
ふゆ　なんのこつちやいの。手を附けて下さんすな。如何に邪まな生れ附きぢやとて、現在の弟嫁、まんざら知つたこのお冬を、女房にしようとて金貸して、それでもお前は武士かいな。侍ひかいな。男かいな。さもしい卑しい腑甲斐ない、胴慾なお心でござんすなう。
　ト泣く。
泰衡　コレ、嬶ア、この伊達の次郎泰衡は、其方ゆゑにやア武士でもない。侍ひでもない。それだに依つて男でもない。所詮惚れたを負けにして、犬とでも猫とでも云へ。否でも應でも抱いて寐る。キリ〳〵おれと奥へ來い。
ふゆ　否ぢや〳〵、否ぢやわいなア。
泰衡　否と吐かしやア。カウ〳〵。
　トお冬を背打ちにする。高衡、無念がるこなしあつて、側へ寄らうとする。佐七、高衡が襟を取つて下に引据ゑ
佐七　動きやアがるな野郎め。罰が當るを合點して、うぬを存分にせにやアならぬ。ようも〳〵今まで、うぬが女房を妹にして、この家主をよくも仕掛けに掛けやアがつたな。おれを一杯喰せたが、よいか。これかこれか。
　ト高衡を打擲する。高衡が額を下駄にてぶちこはす。
　高衡キツとして
高衡　こりや高衡が生き面に。
佐七　疵が付いたわえ。
高衡　もう料簡がならぬわえ。
佐七　なにを〳〵。
泰衡　ハヽヽヽ、よい態な。元吉四郎がしやツ額へ疵が付いちやア、ざつと義經が身替りには立たれまい。
高衡　何がなんと。
泰衡　岩手姫が身替りに、當てゝ置いたこのお冬。伊達の次郎が女房にすれば、これで思ひ殘る事はあるまい。

高衡　なんと。
　ト詰め寄る。泰衡、高衡を押へて
泰衡　右と左に四郎とお冬、これを肴に一杯呑まう。ナニ、
　佐七とやら、身に續いて奧へ參れ。
　ト唄になり、お冬高衡を引立て、家主と若い者を連れ
　て泰衡入る。奧より、バタ／＼にて、義經出て來る。
　後より岩手姬、抱き子を抱へて出て來る。
義經　岩手姬、今も今とて聞きやる通り、早義經が身の上
　にかゝる、大事の一世の浮沈。淺ましき最期を遂げんよ
　り、經若丸を刺し殺し、潔よう自害して、身に誤まりの
　なき由を、兄頼朝へ告げ知らせんと、認め置きたる含み
　狀。
　ト懐中より出し、岩手姬へ渡す。
　其方も後より未來へおぢや。半座を分けて待つ程に、未
　練殘さず最期々々。
岩手　あなたの仰せまでもなく、妾も兼ねて亡き身ぞと、
　認め置いたる書置。さはさりながら經若丸、胤腹かした
　も名ばかりにて、千代もと祈る甲斐もなく、只一時の親
　子の緣、露より脆き命かと、思へば思へば、それが悲し
　うござんす。
　ト泣き出す。
義經　よしそれとても前世の約束。兼ねて亡き身と思はず
　ば、この世に心の殘るべき。斯く成り果てしこの義經。
岩手　妻子も同じ死出の旅。
義經　死ぬるばかりが誠なりけり。
岩手　我が君樣。
義經　岩手姬。
岩手　思へば果敢ない
義經　緣ぢやなア……ソレ。
　ト小さ刀へ手をかける所へ、奧より秀衡、羽織衣裳に
　て出て來て、義經を留める。
秀衡　先づ／＼お待ちなされませう。
義經　其方は。
秀衡　藤原の秀衡。義經公、御生害には及びませぬぞ。
義經　何がなんと。
秀衡　必らずお急きなされまするな。
　ト云ひながら、岩手姬を引立て、外へ突き出し、門口
　しやんと締める。
岩手　合點のゆかぬ秀衡どの、自らばかりこの體は。
秀衡　左やうなされてござるのも、義經公の皆お爲。

ト云ひながら、義經が側へ來て
イザ、我が君様には、爰よりお立退きあつて、御尤もに
存じ奉りまする。
義經　すりや某を。
秀衡　お落し參らする、秀衡が兼ねての所存。委細の事は
奥の一間で申し上げん。イザ〳〵。
ト義經を無理やりに引立てると、早拵らへにて、忍の
前、バタ〳〵と出て來て、義經を留めて
忍　先づ〳〵お待ち下されませい。
秀衡　幸ひ〳〵忍の前、某は義經公の御供申して立退けば、
跡にましまス岩手姫、其方お供仕り、光り堂まで立越
えよ。早く〳〵。
忍　ハイ〳〵、斯様な時こそ御奉公。女子は女子同士の
お供。これから直ぐに參りませう。
秀衡　出かした〳〵。義經公には忍の前、お詞を下されま
せい。
義經　秀衡親子の心遣ひ、何から何まで忘れは措かぬ。忝
ない〳〵。
忍　そんならあなたには、父秀衡も私しも、大事にかけ
まするると思し召しまするかえ。
義經　そりや思はないでなんとせう。
忍　有り難うござりまする。
秀衡　忍の前、早うお供して立退かぬか。
忍　アイ〳〵。さりながら父さんへ、わたしやお願ひが
ござんすわいな。
秀衡　この場になつて願ひとは。
忍　その願ひは。
秀衡　なんと〳〵。
忍　そのお願ひは、あの岩手姫さまのお供をば、父さん
お前遊ばして、義經公のお供をば、どうぞわたしにさせ
て下さんすまいかえ。
秀衡　たわけ面め。義經公のお供を、なんのおのれらが願
ふ事。キリ〳〵岩手姫さまのお供を致せい。
忍　嫌ぢやわいなア。
秀衡　そりや又なんで。
忍　なんでとは父さん、野暮な事ばかり云はしやんす。
あの義經公のおいとしらしいお供は、わたしがよい役目。
朝な夕なのお宮仕へ、又はお寐間のお伽。それが男がな
るものかいなア。
秀衡　それはおのれ、何を吐かす。かゝる急なる折に、よ

い機嫌な。すりや、どうあつても岩手姫さまの、お供はせぬか。

忍　堪忍して下さんせ。

秀衡　エ、、おのれ。イザ、義經公には、岩手姫さま諸ともに、お立退きあつて然るべう存じ奉りまする。

忍　イエ〳〵、そりやならぬぞえ。岩手姫さまと義經公と、一緒に置く事は、どこがどこまでも、ならぬ〳〵。

秀衡　ならぬと吐かせば足手まとひ。おのれは秀衡が、先ツこの如く。

ト忍の前を高手小手に縛り、梅の幹へ縛り附ける。

少しも苦しうござりませぬ。イザ岩手姫さま、義經公と御一緒に、秀衡がお供仕りませう。

忍　コレ申し父上樣、ようも〳〵此やうに、情なくも縛しめて、忍の前は我が君を、思ひ焦れて死ねよと、云はぬばかりのお心が、酷いわいな〳〵。

ト泣き出す。

義經　忍の前、不便とは思へども、皆義經を大切に、事を計らふ秀衡が心ざし。

岩手　女子心は女子が知る。それとは知れどこの身にも、任せぬものは憂き離儀。堪忍して下さんせ。

秀衡　おのれ、その戀に凝りしその片意地は、親の秀衡存じて居る。コレ、この三井寺の鐘の繪圖。

ト取つて、忍の前に置き

昔、紀州に眞名古の庄司と云ふ者あり、彼の者一人の氣を持つ。この秀衡もその通り。その頃奥州より、熊野へ渡りつる山伏ありしが、その山伏も義經公、某其方を寵愛の餘り、幼ない時に云ひ聞かせし、夫よ妻よが仇となり、嫉妬に沈むか情なや。道成寺の云ひわざを、我が身に引いて思ひ切れ。それが我が子へ父が教訓。お二方には先づ、お入りなされませう。

トこれより誂らへの唄になり、義經、岩手姫、秀衡、入る。

〽爰は山陰森の下、月夜烏はいつもなく、我れは戀ゆる泣き明かす、ひさげの水の沸きかへり、胸にせまるも女娘の、思ひかへ〳〵おゝさりながら。

ト合の手。

忍　情ない我が君樣。我が身の上を思ひ思うた、義經公は父上に隔てられ、お宮仕へも免されず、剩さへ此やうに、縄目にかゝる女子の恥。如何なる因果な身の上ぢやなア。思ひ切らうと思うても、思ひ切られぬ忍が心を思

ひやり、義經公には露程も、可愛と思うて下さんせいなア。

ト泣き出す。

〽我が身の出絲薄紅葉、涙の露の亂れ髮、亂れ染めにし陸奥の、誰が手を觸れん賤が錦木。

ト唄切れる。此うち雪、次第に降り積る。忍の前、苦しきこなし、いろ／＼あるべし。トヾ釣り鐘の繪圖をキッと見て

この撞き鐘をつく／＼と、見るにつけても妬ましや。初夜に殿御を待ち初めて、後夜に逢瀨の睦言を、早曉も後朝の、鐘に急かるゝ憂き思ひ。嬉しいにつけ悲しいにつけ、妾が殿御義經公、岩手姫とは添はさぬ／＼。女の思ひがあるものか、ないものか。今に思ひ知らせうぞ。義經さまに逢ひたい。我が君樣のお側に居たい。戀し床しと思ふ身の、積り／＼て降るならば、今降る雪と諸ともに、消えなんものをこの命、眞名古の庄司が娘にも、やはか劣らんこの忍。忍が思ひを思ひ知れ。

ト いろ／＼こなしあつて、忍の前、この鐘の繪圖を踏むと、ゴンと鳴る。ドロ／＼にて、この繪圖の上、燒酎火燃える。忍の前、キッと思ひ入れして

今思はずもこの鐘を踏めば、不思議や鐘の音の、それかあらぬか聞えしは、忍が心の通ぜしか。ても恐ろしいものぢやなア。

ト忍また、繪圖を踏む。又ゴンと鳴る。これをキッカケにて、方々にて遠責めの鳴り物する。忍の前、キッと思ひ入れして

さては思はず響きたる、鐘を合圖に我が君樣を、寄せくる人の物音か。これにつけても義經公の御身の上。この繩切つてお供せん。さうぢや。

ト身悶えする。大ドロ／＼にて、燒酎火燃えて、縛めの繩を燒き切る。思ひ入れして忍、奥へ駈け込まうとする所へ、バタ／＼にて秀衡出て、忍の前を引き戻し、取つて押へ、首を切り、袖に包んで入ると、和泉の三郎出て、寢刃を合す。奥より高衡、この體を見て、直ぐに舞臺へ出て、立廻りにて引留める。

高衡　こりや兄者人、貴樣はどこへござるのだ。

和泉　義經の首打ちに。

高衡　何がなんと。

和泉　鎌倉表より、姉輪の平次景宗が、お二方の首、受取らんと、アレあの如くに取圍む。是非に及ばず主人の首、

和泉の三郎忠衡が、討ち奉る心底ぢや。
高衡　すりや、お匿まひ申したる、義經公の御首を。
和泉　物の見事に討ち奉る。
高衡　その心底なら忠衡どの、兄者人とて容赦はせぬ。主人に刃向ふ人非人。元吉四郎が相手にならう。
和泉　小積な奴め。そこ立ち去れ。
ト立廻りあり。
高衡　主君は討たさぬ。
和泉　妨げするな。
ト立廻りあつて
高衡　すりや、どうあつても。
和泉　義經公を。
高衡　義經公を。
ト立廻りあつて
和泉　先ッこの如く。
ト立廻りのうち、和泉三郎、諸肌脱いで切腹する。高衡驚ろき、立廻り。
高衡　ヤ、、、忠衡どの、、この體は。
和泉　さのみ驚ろく事なかれ。兼ねて覺悟の御身替り。
高衡　何がなんと。

和泉　慮外な、下がれ。
高衡　ハ、、ハア。
ト飛び退つて敬ふ。忍び三重になる。
和泉　秀衡に五人の子あり、心の忠不忠、兄弟心を一にせずんば、まさかの時の妨げと、心付くより大酒に長じ、本性を失ひし、酒の名に寄る和泉の三郎。親兄弟にも見限られ、かゝる折柄お役に立ち、日頃の不孝の云ひ譯せんと、思ひ詰めたる武士の一心。忠義に凝りし其方まで、今日まで隔てゝ忠衡は、皆我が君への忠臣ぞや。今までは、この兄を、元吉四郎は恨みつらん。兄が詫びする、堪忍せい。
ト苦しきこなしあるべし。
高衡　勿體ない、兄者人の御一言。某、君の御身替りに立たんずものと思ひしに、運盡きしか情なや。其許樣は、この日頃の願ひ叶うて、我が君の御身替りに立てるとは、お羨やましう存じまする。この高衡は兩親へ、不孝の罰が今日の今、お主の役によう立たず、夫婦二人が赤恥かき、長らへて居る胸中。コレ、兄者人、忠衡どの、お免しなされて下されい。
和泉　イヤ、さにあらず、また長らゆるもお主の爲。サア、

寄つて介錯おしやれ。
高衡　サ、それは。
和泉　苦痛をさせるは兄への不孝。氣後れするは卑怯であらう。
高衡　さはさりながら弟の身で、現在兄の介錯は、なんと刃が當てられう。
和泉　苦痛させるは不孝であらう。
高衡　サアそれは。
和泉　とく〳〵介錯〳〵。
高衡　サアそれは。
和泉　サア
高衡　サア
兩人　サア〳〵
和泉　なんと。
高衡　是非に及ばぬ。南無阿彌陀佛。
ト和泉三郎が首を切り、直ぐに高衡、その首を首桶へ入れ、血刀を拭いて居る所へ、奥より秀衡、以前の忍の前が首を桶に入れ、持つて出て
秀衡　元吉四郎高衡。
高衡　親人樣。
秀衡　岩手姬の御首。
高衡　義經公の御首。
ト一度に首桶の蓋を取る。思ひ入れあるべし。
秀衡　陸奥の、岩手忍ぶはゑぞ知らぬ。
高衡　書き盡してよ壺の碑。陸奥の岩手姬さま。
秀衡　忍の前、岩手忍ぶは
高衡　ゑぞ知らぬ
姉輪　書き盡してよ壺の碑
兩人　なんと。
姉輪　今ぞ誠の約束の刻限。サア、兩人の首を受取るべいか。
ト障子を引き上げる。姉輪、以前の形にて出で
秀衡　契約の通り、義經公の御首、姉輪の平次、お渡し申さう。
高衡　岩手姬の御首、景宗へお渡し申さん。
三人　イザ。
ト秀衡、高衡、姉輪へ首を渡す。
姉輪　道を守る秀衡、淸衡より大恩を思ひ、討つまじきと思ひしに、兩人の首美事に打つた。出かし召された。
秀衡　すりやこの首が。

姉輪　義經岩手姫。
高衡　しかと左やうな。
姉輪　如何にも。
高衡　エヽ、忝ない。
姉輪　お暇申す。
兩人　御上使、御苦勞。
ト秀衡、高衡、奥へ入る。姉輪、首桶を抱へ行かうとする。後へ泰衡、錦戸太郎出て來て
錦戸　待つた。
姉輪　姉輪の平次を、なんで留める。
泰衡　鎌倉よりの上意には、義經公岩手姫が首、打つて來れとの嚴命でないか。その首は眞赤いな似せ物。似せ首を持つて歸つて、姉輪の平次、武士が立つか。
錦戸　五分も透かない顏をして、吹替へを喰つちやア、姉輪の平次は武士が立つか。
泰衡　ソレ、その首は似せ物だ。
姉輪　なんだ、似せ物だ。
泰衡　おツかぶせだ。
姉輪　おツかぶせとはなんの事だ。おツかぶせは流行らないワ。似せ物を喰つて堪るものか。義經公、岩手姫の首に相違はない。さらばだ。
ト姉輪、ツカ〳〵と花道の中まで行く。
泰衡　姉輪の平次待て。
姉輪　まだ留めるか。
泰衡　義經も岩手姫も、伊達の次郎が虜にした。目前慥かな證據があつても、それでも誠の首か。
姉輪　サア、それは。
泰衡　なんとだ。
姉輪　姉輪の平次は、似せ首を受取りに來た。
ト姉輪、花道の中に坐る。
錦戸　おきやアがれ。似せ首を受取りに來たとは、合點のゆかぬ。ヤレ、景宗ともにやるな、エヽ。
ト奥にて
侍ひ　ハアヽヽ。
ト奥より、侍ひ大勢、出て、兩方より取巻きやらぬワ。
泰衡　姉輪の平次、似せ首を受取つても云ひ譯あるか。
姉輪　兩人參れ。
ト佐七島助。
二人　畏まつて候ふ。

ト佐七、島助、對の柿の上下、萠黄の小袖、股立ちを取つて、大小を差し、切り幕より出る。

兩人　御用でござりまするかな。

泰衡　ヤア、其方は身が家來。最前の町人。こりやどうだ。

佐七　主人畠山庄司次郎重忠、兼ねて申し附けられたには、秀衡親子、心々の五人の兄弟、もしや野心もあらんかと、隱し目付けの我れ〲兩人。四相を覺る重忠の家臣、本多の次郎近常。なんと膽が潰れるか。

島助　まつた某も窺ひ寄り、家來となつて入込みしも、友切丸の行くへ、まつた義經公、逆意あらざる含み狀、主人重忠指圖にて、斯くは入込みし奴の島助、誠は半澤六郎成淸だ。お見知りなされてくんさりませう。

佐七　本多の次郎近常。

島助　半澤六郎成淸、主人の御用を聞かん爲。

兩人　これまで推參仕つた。

錦戸　イヤア。

泰衡　兩人ながら重忠の家來とか。こりやどうだ。本多の次郎、半澤六郎、この兩人を家來と云ふ、姉輪の平次が本名は。

姉輪　當時鎌倉に於て、三老の席に列なる、畠山庄司次郎重忠なるワ。

泰衡　何がなんと。

ト反り討つ。

姉輪　やつと參つたな。頼朝公の耳を舐る、梶原平三景時。もしこの時手に向はゞ、義經公の御身の仇となるべきと御連枝の血筋を思ひ、義經を助け奉らんと、鎌倉表より出立の砌りから、似せ首を受取るは、重忠が兼ねての忠心。それとも知らず某を、姉輪の平次と一杯喰つたか。

泰衡　エヽ、口惜しい。

姉輪　似せ首を受取るは此方の勝手。似せ首を訴人する天命知らずめ。身替りを受取るは狂言の趣向。それをうぬらア知らないか。

泰錦　サア、そりやア。

姉輪　アヽ、つがもねえ。サア、義經公と岩手姫を、虜になしたと吐かしたは、よもや僞はりではあるまい。有やうに白狀ひろげ。

泰衡　畠山の重忠、姉輪の平次となつて助ければ、伊達の次郎が手段をめぐらし、虜になしたる兩人。義經も岩手姫も、ヤレ、矢褄にかけろエヽ。

侍ひ　觀念。

ト これをキッカケに、障子を引き上げる。義經、岩手姫、襠裲を持つて防ぎ居る。

泰衡　サア、義經も岩手姫も、虜になした生死の境、これでも重忠、云ひ譯あるか。

錦戶　矢を切つて放さうか。

姉輪　サアそれは。

皆々　サア

姉輪　サア

皆々　サア〳〵〳〵。どうだエヽ。

姉輪　今こそ重忠が日頃念じ奉る、摩利支天の奇瑞を見せしめたび給へ。奇妙頂來々々々々。

ト 刀を拔いて、この中に切つて入る。矢先を切つて切り落す。立廻りにて、泰衡、錦戶を突き退け、義經、岩手を、佐七、島助が手に渡して

義經公、岩手姫さま。兩人お供仕れ。

佐島　畏まりました。

泰衡　ソレ。やるな。

皆々　やらぬワ。

佐島　どつこい。

ト 立廻りになる。秀衡、高衡、最前の形にて出て來て

秀衡　義經公には御安泰か。

高衡　有り難い。

ト 喜ぶ。

泰衡　觀念。

ト 秀衡高衡へ切りかける。秀衡、しやんと留めて

高衡　これこそ正しく友切丸。

泰衡　どつこい。

ト 立廻りあつて、よき程に高衡、引ッたくつて、姉輪に渡す。殘らず見得になる。

秀衡　義經公のお立ち。

ト 秀衡と高衡と姉輪の平次と佐七と下部島助。

五人　めでたい〳〵。

姉輪　先づ今日はこれぎり。めでたく打出し。

御攝勸進帳（終り）

寶來山金礎

寶來山金礎

明和二年十一月朔日初日で、京都の布袋座に上演されたものである。臺本の中では比較的古いところが珍らしいが、それよりも、京坂の顔見世狂言といふのが更に珍らしい。京坂の顔見世狂言は、上演の期日が短かい爲か、内容が茶番式の云はゞ口立て式である爲か、脚本として殘されてゐるのは實に僅かなのである。編輯中に偶然これが發見されたので、早速京坂の顔見世狂言の代表作として加へたのである。矢張り江戸のそれと同じく、一幕物の連續同樣に各幕の連絡が不鮮明である。内容が荒唐無稽である。滑稽分子が多い。到るところで口上があつたりして觀客と接近してゐる。これらは大分江戸のと似てゐる。只それが京坂だけに、どこか理智的な色彩がある。それと、役名の附け方の、極めてフザけてゐるのが京坂の特色である。この狂言にも、燈臺元九郎だの、藝は身太助だの、赤けりやぼん助だのと、洒落だか串談だか解らないやうな名の役が出てくる。江戸には斯うした例はない。役割は左の通りであつた。

この狂言の作者は不明である。

大殿伊吹内膳（岡田彦九郎）龜千代丸。娘唐崎姫。（尾上条助）三上隼人（小倉山三千藏）千歳屋勘左衛門（野川久太夫）（尾上藤藏）傾城三浦（榊山千菊）唐崎漢林齋。燈臺元九郎。鵜の目鷹右衛門（浦山七五郎）うまさが蛸藏本名伊吹宮内（藤川音右衛門）赤けりやぼん助本名伊吹熊太郎（藤川半三郎）藝は身太助本名桃栗口助（江戸坂京右衛門）おみの（榊山四郎太郎）堅田城之助（中村浪藏）堅田佐五右衛門（櫻山四郎三）妹おきぬ（中村松代）篠田元水本名高安藏之助（小川吉太郎）川立川右衛門（嵐八五郎）後室桂壽院（藤川岡右衛門）妹篠の井（櫻井喜代藏）鷲山右大辨本名奴時平（市川歌藏）小娃詠みと歌助（藤川山吾）妹浪の戸（中村佐野八）大鳥平馬（山中平十郎）春藤帶刀（尾上紋太郎）敦賀のおべく本名帶刀妻久野谷（中村富十郎）

山形の秋葉芳美氏には、役割その他で相變らず御厄介をかけた。この頁で御禮申して置く。

寶來山金礎

口明

伊吹屋形の場

役名——大殿、伊吹内膳。同娘、唐崎姫。三上隼人。千歳屋勘左衛門。同抱へ、三浦。堅田佐五右衛門。堅田城之助。燈臺元九郎。桃栗三左衛門。柿八太夫。藝は身太助。腰元、小菊。娘、おみの。うまさが蛸藏實は伊吹宮内。赤けりやぽん助。實は伊吹熊太郎。

座附き仕舞ふと、後の金襖引き分けると、兩方に一間づゝの障子屋體突き出す。眞中に社二つあり、と渡り拍子になると、大殿伊吹内膳、寶の兜を臺に載せ持ち出る。次に唐崎姫、綸旨の箱入りを臺に載せ持ち出る。次に三上隼人、袋入りの九寸五分を臺に載せ持ち出る。向うへ三つの寶を直し、並よく並ぶ。腰元、局附き出る。

内膳　當屋敷、この兩社は、牛頭天王伊吹大明神なり、そもこの伊吹大明神と申すは、出雲の國、山田の大蛇の神體を勸請の靈神。身共が先祖、藤原の季利、奥州の朝敵安部の貞任退治の時、源の頼義が手に屬して、討手に向はるゝ折から、當社大明神へ、朝敵退治の大願を掛け、一七日參籠ありしに滿ずる七日の夜、夢中に聲ありて、汝朝敵退治の大願の信心、我れ納受するがゆゑに、一つの鱗を與ふ。この鱗を兜の鍬形に打つて、貞任を亡ぼせと、お聲あらたの夢の告げを蒙むり、夢覺めて季利御覽あれば、枕元にその鱗ありしゆゑ、感歎膽に銘じ、三度押戴き、兜の鍬形にその鱗を打つて、奥州厨川の戰ひに先祖藤原の季利、朝敵安部の貞任を組みとめられた。この高名に依つて、有り難くも後冷泉院、正五位に任ぜられ、その上伊吹山を苗字となし、この大蛇の鍬形の兜を以て、代々世嗣の參内の印に致すべしとの事。即ちそれなるは、後冷泉院の御綸旨。それゆゑ伊吹山を苗字となし、これまで跡目相續するも、これ偏へに、伊吹大明神のお加護。それゆゑ今日の祭禮の吉日に任せ、今日一日この三種の寶を神前に供へて、神事を取行ふ大切なる寶

有り難う思うて拜見いたせ。

隼皆　ハヽア。

唐崎　又この一振りの劍、この綸旨、御先祖季利さま、奥州にて功名なされたお差添。これも今日の神事に、この神前に飾り置く。殿達の身の上では功名にあやかると云ふものぢや。有り難う思うて拜んだがよいぞや。

皆々　ハアヽ。

隼人　今日の御神事と申すは、御先祖季利さまが、この神前にて霜月壬の日に、それなる鍬形の鱗を授からつしやれた、その吉例に任せ、毎年霜月壬酉の日に、御祭禮取行ふ。今日は壬酉の日。しかも天氣もようて、殿樣もさぞお喜びでござりませう。

内膳　オヽ、めでたい〳〵。

唐崎　父樣、今日の御祭禮の上にて、何やら外にお前、深い御願望があると仰しやりましたが、お前の御願望は、なんでござりまするか

隼人　姫君樣、お尋ねに及びませぬ。お前の聟君樣は、河内の國守高安藏之助さま、當國へお入り遊ばされまする筈のところに、如何なる事にや、出國なされて、行くへ知れず、その事ゆゑに、この間、姫君には、どうやら御氣分もお勝れなされませぬやうに、お見えなさるゝ。御病氣でも重らぬやうにと、思し召しての御願望でござりませう。

小菊　成る程、こりや隼人さまの仰つしやりまする通り、聟君樣のお心を察しやつて、それゆゑの事でござりませうぞいな。

内膳　姫、其方の心根を思ひやつての、身共が願望。某この國を治めてより、男子なく、子と云うては其方一人。尤も身共京都在番の砌り、末の女に手をかけ、男子一人産ませたれども、心あつて屋敷へも呼び入れず、何國に居るとも行くへ知れず。さるに依つて、河内の國より聟を取つて、この國を讓らうと思うたる所に、この國へも入らず、出國召されて行くへ知れず、それゆゑ河内の國よりも、行くへを尋ね出る。また身共が方よりも、堅田佐五右衛門が弟、城之助を尋ねに遣はした。どうぞ早く行くへも知れるやうにとの、願望でおぢやるわいなう。首尾よく神事相濟んだらば、神も納受あつて、追つけ聟の行くへも知れるであらう。姫、さう心得て、隨分信心召され。

唐崎　父樣、忝なうござりまする。皆の衆も、よう拜んで

たもや。
皆々　畏まりましてござりまする。
ト烽臺元九郎、旅裝束の侍ひにて出る。
元九　殿樣、これにござりまするか
内膳　其方は城之助が家來。この度其方は、城之助が供したが、城之助は歸つたか、どうぢや
元九　主人城之助、只今立歸りましてござる。定めて殿樣にも、お待ち兼ねであらう。身共が歸つた樣子申し上げい、追つけそれへ罷り歸ると、申し遣はしましてござりまする。
唐崎　そんなら父さん、聟君樣のお供して、戻りやつたかいなア。
隼人　城之助どのは、聟君をお供なされたか。
元九　主人城之助、聟君のお行くへ、方々尋ねましてござれども、遂にお顏も知らぬ聟君でござれば、お行くへも知れ難く、それゆゑ追つけ聟君樣、この國へお出でなさるゝ、手がゝりの者を連れ歸りましてござる。
隼人　手がゝりの者とは。
元九　聟君出國なされたは、傾城ゆゑでござれば、その傾城三浦と申す女を、身請けを致して、歸られましてござりまする。
唐崎　殿樣に捨てられたは、その傾城ゆゑぢや。それにその傾城を請け出して、わしやその傾城と一つに居る事は嫌々。
内膳　ハテサテ、家來城之助が、なんの惡い事するもので。マア、よいわいの。
隼人　左樣でござりまする。先づ城之助に、委細お聞きなされたがようござりまする。今日は大切なる御神事でござれば、お通夜をなさるゝ御用意遊ばされませう。
内膳　それ〳〵、神主へ參り、通夜をする用意をせう。姫、皆の者、參れ。
隼人　先づお入りなされませう。
ト皆々入る。神樂になると、元九郎と腰元小菊殘り居る。
元九　お腰元、鳥居のねきに、身共が乘つて來た、駕籠の者と、主人の荷を附けて來た馬方とが居らう。これへ呼んで下されい。
小菊　アイ〳〵。
ト橋がゝりの方へ向き
コレ〳〵、馬方、駕籠の者、二人ともに爰へおぢや。

ト幕の内にて、うまさが蛸藏、あかけりやぼん助「ォォイ／＼」と云うて、ぼん助、駕籠かたげ、澁紙包み附けて、駕籠舁きの形にて、蛸藏、馬方の形にて、腰に馬の沓附けて兩人出る。

小菊　コリヤ／＼、駕籠舁き、馬方。もそつとキリ／＼歩けいやい。

兩人　オ、イ。

小菊　さつても横柄な、駕籠舁きや馬方ぢやなア。

ぼん　蛸よ。

蛸藏　ぼんよ。

ぼん　聞いたか、なんぞ腹の中から、駕籠舁きや馬方をして居るやうに思うてけつかる。して、あのマア、下さげな物の吐かしざまわい。

蛸藏　ソレイヤイ。

ぼん　コリヤ、駕籠舁きや馬方よと、アタ横柄な、エ、、水の流れを知らぬなア、不便や／＼。

蛸藏　ぼんよ。

ぼん　蛸よ。

蛸藏　キリ／＼來いと吐かすからは、彼奴も駕籠舁きか馬方の娘ぢやわいやい。

ぼん　どうして。

蛸藏　ハテ、キリ／＼ぢやに依つて、六十の増し遣らうと云ふ事ぢやわいやい。

ぼん　先刻にから、これ程つりつけて置いて、ろうぢや災難の増しで濟むものかいやい。捨てゝも二人で、まだがものは見えてある。また御仁體な旦那どのぢやものなア。

蛸藏　ソレイヤイ、おりや馬の口に附き始めてから、昨日乘せたやうな、氣の廣い旦那どのはないわいやい。急ぎの道ぢやと云はれたに依つて、とんと畜生を追ひ立てゝやつたれば、酒を買へて又くれて、まだその上に畜生めにも、秣せいとて雀二百、温まつたわいやい。

ぼん　おれの乘せた旦那も、増し下された。その上に、新家の茶屋で、げんこどり三つ、それからその先で、芋の濁り二杯、强飯は喰ひ次第に喰へて。

蛸藏　おれも三百で、仕舞ひであらうと思うたれば、宿屋へ着いて、油揚げの浮いた吸ひ物を。

ぼん　鴨か。

蛸藏　下卑た奴ぢや。鴨位で堪るものか。はかり鯨ぢやわいやい。さうして、上諸白をこなから、二日酔ひで、お

りやまだろくに醒めぬわいやい。

ぼん　昨日の强飯で、今朝からなんにもいけぬわいやい。おりや二日飯ぢや。

蛸藏　ぼんよ、默れ。旦那どのも、あそこに聞いてぢや。あそこに居やるを知つて、知らぬ顏で、今のやうな事を云うて、あの人に氣を持たすかと思はれては惡い。如何に馬方や駕籠舁きすればとて、モシ旦那、今のは嘘でやす。ぼんよ。昨日の旦那どのは、イヤ、皆嘘でやすぞ。

ぼん　申し旦那、今わしらが云うた事は、皆嘘ぢや。ほんかと思うて、必らず氣を張らしやつて下さりますな。いかい迷惑でござりまする。極めの賃金を貰ひますりや、もう去ぬるのでござりまする。片棒は先へ歸りましたれども、何やら用がある、もちつと待てと仰しやりましたゆゑ、待つて居りました。必らず增しなど遣らうと、氣を張つて下さりまするな。その七十や八十の端下錢を貰ふ事ぢやござりませぬ。餅も酒も振舞はうと、必らず思はつしやつて下さりまするな。昨日のせた事は嘘でござりまする。そウ、なんにも仰しやつて下さりませ。御馳走は御迷惑でござりまする。

元九　お腰元、ソレ、酒取つて來やれ。

小菊　アイ。

ト取りに入る。ぼん助、蛸藏顏見合せ、笑ふ。

ぼん　蛸よ。

蛸藏　ぼんよ。

兩人　もう、お暇申しませう。

元九　待て〳〵。二人ながら、餘り氣の輕い、心よい者どもぢやに依つて、酒を呑まさうと思うての事ぢや。一つ呑んで行け。

トまた兩人、顏見合せ笑ふ。

兩人　それが術なうござりまする。

ト小菊、銚子杯持ち出る。

小菊　コレ〳〵、寒からう。酒一つ呑まつしやれ。

ぼん　蛸よ、どうせういなア。

蛸藏　ハテ、お辭儀申すも却つて慮外。われ一つ呑め。

ぼん　そんなら、お戴き申しませう。

蛸藏　コリヤ〳〵、おのれは二日醉ひぢやないかいやい。

ぼん　上戸と云ふものは、汚ないもので、酒を見ると咽喉がぎく〳〵云ふわいやい。

蛸藏　むさい奴ぢや。

トぼん助、酒注ぎ、呑まうとする。

小菊　コレ、わが身達に問ひたい事がある。
ぼん　もそつと待つて。呑んでしまうてから尋ねる事があるなら尋ねさつしやつて下さりませい。
　ト呑まうとする。蛸藏留めて
蛸藏　コリヤ、何やら尋ねたいと仰しやるぢやないかいやい。逃げも走りもせぬ。マア、下に置いて、あなたの仰しやる事を、聞いてから呑めやい。
　ト杯を下に置かす。
ぼん　そんなら早う問はつしやつて下さりませい。なんでござりまする。
小菊　先刻にから聞いて居れば、其方の名はぼんよ〳〵と云ふ。又あの人の名は、蛸よ〳〵と云やるが、どうして二人ながら附いた名ぢや。をかしい名ぢやなう。
ぼん　成る程、蛸のぼんのと申しまするは、先祖代々から樣子のある名でござりまする。
小菊　どうぢや。聞きたいわいの。
ぼん　彼奴が名を蛸と申しまするは、生れついて彼奴は阿房で、うまい奴でござりまする。まだその上に、馬を追ひまする。そこでうまさが蛸藏と申しまする。
小菊　ハレ、をかしい名ぢやなア。
　トこの間に蛸藏、杯の酒を呑む。
　其方をぼんとは又、どうして云ふや。
ぼん　私しをぼんと申しまするは、また彼奴とは違うた、位のある名でござりまする。私しが親どもは、猩々のぼ助と申しまして、私しは親代々の酒呑みでござりまする。併し、ちつとでも呑みますると、顏が赤うなりまする。赤いに依つて、赤けりやぼん助でござりまする。
小菊　ハテ、をかしい名ぢやなア。
　トこの間、蛸藏、息杖に燗鍋を引ッかけて、口から呑んでしまうて、又ぼん助の側へ直して置く。
ぼん　なんと、謂れ因縁、面白い名でござりませうが。ドリヤ、一つたべませう
　ト杯を取り見て悔りし、燗鍋を取り、注いで見ても出ぬゆゑ、振つて見たり、底を見たり、いろ〳〵して蓋を明けて見て、さま〴〵あつて、蛸藏が方を見る。蛸藏、キヨロリとして居る。ぼん助蛸藏が側へ行き、鼻を嗅いで見る。
蛸藏　むさい奴の。何をしをる。
ぼん　汚ない奴の。盜んで喰うたな。
蛸藏　眼潰れめ、おのれはあそこに居る。おりや爰に居る

爰からあそこの酒が、どう呑まるゝものぢや。
トぽん助、合點のゆかぬ顏して、小菊の方を見て、けらけら笑ひして、
ぽん　申し〳〵、おむづかしながら、ちよつと替へさつしやりて下さりませ。
小菊　ドレ〳〵。
ト銚子持ち入る。この間、蛸藏煙草のみ居る。
ぽん　申し〳〵、その銚子は洩るさうにござりまする。まそつと大きな物の洩らぬ燗鍋で下さりませい。
ト大きな聲で云ふ。
蛸藏　コリヤ〳〵、如何に駕籠舁きぢやと云うて、あんまりぢや。むさい事吐かすないやい。
ぽん　おのれは、駕籠舁き〳〵と、おのりや馬方ぢやないか。畜生の口に、つく形をしをつて。
蛸藏　イヤ、おのれは畜生の口につくとは、なんの事ぢや。すべてお大名でも、馬に乘らつしやるワ。駕籠舁きは、なされぬワ。そんなら馬子は、お大名も同じ事ぢや。
ぽん　大名が腰に、馬の沓を提げて居るものかいやい。
蛸藏　それでも駕籠舁きより、馬方が上ぢや。
ぽん　イヤ、駕籠舁きが上ぢや。

ト兩人せり合ふ。と、小菊樽を持ち出て、眞中へ直し
小菊　それ〳〵、お臺所が忙しいに依つて、樽口持つて來た程に、勝手次第に呑まつしやれ。
ト兩人ちやつと、樽に取りつく。
ぽん　放し居れ、これやおれが貰うた酒ぢや。
蛸藏　こりや、おれが貰うた酒ぢや。
ぽん　おれが貰うた。
蛸藏　おれが貰うた。
小菊　ハテ、其やうにせり合はずとも、どちらからなりと呑みやいなう。
ぽん　蛸よ、引け。
蛸藏　ぽんよ、引け。
ぽん　サア、引け。
蛸藏　サア、引け。
兩人　引け〳〵〳〵。
ぽん　蛸どの、お受けなされ。お酌申さう。
ト蛸藏、手水鉢の柄杓を取つて來て
蛸藏　ぽんどの、慮外。
トぽん助注ぐ〳〵
ぽん　丁度〳〵。

蛸藏　オツと、ありはら〳〵。
ト戴き、呑まうとする。
ぼん　おのれにそれを呑まして置いて、われら瀧呑み。
ト樽の口から呑んで顔顰める。
ア丶、鹽辛い酒ぢや。
蛸藏　その手は喰はぬ。さう云うて、これをおれに呑ます
まいとは、エ丶、忝ない。
ト一口呑んで顔顰める。
エ丶、こりやなんぢやい。
ぼん　ドリヤ、見せい。
ト杓の内を見て
こりや醬油ぢや。
小菊　ほんに、こりや酒の樽と取違へたわいの。
兩人　エ丶、情ない。
ト顔顰める。
ぼん　先刻に酒をおのれが盜んで喰うたに依つて、おれが
今の醬油を呑んだ。先刻の酒返し居らう。
トくらはしにかゝる。蛸藏逃げる。ぼん助追ひかけ廻
る。あちこちと逃げるうち、ぼん助、紙入れ落す。蛸
藏逃げて入る。と堅田城之助、衣裳社杯にて出る。見
物へ顔見世口上云ふと、場の中より贔屓連中二人出て
手を打つ。新らしき編笠の紐の附いたるを遣る。城之
助戴き、これは御贔屓を頭に戴きまするでござりませ
うと、禮を云うて、本舞臺へ來て、紙入れを見附け、
拾ひ、中を改め見て、起證を見て愕りし、思案して、
そこにある三方の上をこぢ離し、息杖に括りつけ、高
札にして矢立を取出し、書きつけをして、柱の脇へ立
て置く所へ、ぼん助、蛸藏せり合ひ〳〵出る。
蛸藏　ヤイ、おのれは男の胸倉取つて、盜人め、出さぬか
とは何を吐かすやい。
ぼん　おれが落したを知つて居つて、知らぬ顔で、くすね
居る。出せ〳〵、出さぬか。
蛸藏　ヤイ、おのれが落したは、なんぢややら知らぬが、
おれが體中を詮議さして、ない時には、あやまつたとは
云はさぬぞよ。ほてツ腹めが。
ぼん　それはその時の事。
蛸藏　サア、體中どつこなと詮議せい。
ぼん　せいで置かうか。
ト懐や兩袖、詮議する。
蛸藏　あるかよ。

ぼん　待て、脊中から太股を。
　ト股倉へ手を入れる。
蛸藏　脊中にあるか。
ぼん　こりや〳〵。
蛸藏　アイタヽヽ。そりやおれが大事の寶物ぢや。サア、なんとあるか。どうぢや。
ぼん　面妖な事ぢや。
蛸藏　男に云ひかけひろいだぞよ。
ぼん　あやまつた〳〵。
　ト逃げ廻り、立て札を見て
待て〳〵。
　ト讀む。
今日この所にて、紙入れ拾ひ申し候ふ、誰れにても落したる者覺え候はゞ、爰へ尋ね參らるべく候ふ、その品々相改め、一種にても相違なく候はゞ戻し候ふべし。……
コリヤ蛸よ、おれが落したと云ふ證據は、この書附け。われが隱して置いたかと思うて疑うた。堪えてくれ〳〵。
城之　コリヤ〳〵、兩人のうち、紙入れを落した者は誰れぢや。
ぼん　ハイ、私しでござりまする。
城之　紙入れの色品さへ合へば、渡してくれう。云うて見い。
ぼん　私しが物ぢやに依つて、知つて居りまする
城之　云うて見よ。合うたらば戻してくれう。
ぼん　アイ、隅取りの紙入れ、赤地の金襴、裏は黒繻子にて、見返しには折り重ねの二つ紋、中には裏表、宗金の香包み、東山の證を極彩色にて畫き、伽羅は五朱、紫の袱紗一つ。琴の爪は緋縮緬の袱紗に包んでござりまする。
城之　成る程、合うた。
ぼん　合ひましたらば、此方へ下さりませ。
城之　成る程、それまでは合うたが、今一種、其方が云ひ落した物がある。それが合うたらば遣らう。それ云へ。
ぼん　も一包み。
　ト思案して居る。
城之　サア、なんぢや。
ぼん　エヽ、そりや書いた物でござりまする。
城之　それ〳〵、その書いた物。
ぼん　サア、云ひました程に下さりませい。
城之　サア、その書いた物はなんぢや。その品を云へ。云

はねば遣られぬ。書いた物はなんぢや。品を云へサ。
ぼん　そりや男の口から、どうも申されませぬ。お慈悲になりませう。下さりませい。
蛸藏　云ひ居らざ、遣らつしやりまするな。
城之　云はねば遣られぬ。
ぼん　是非に及びませぬ。恥かしけれど申しませう。それは私しが、深う云ひ交しました、女の方へ遣はしました起證でござりまする。
城之　そこが合點がゆかぬ。その女の方へ遣はした起證が、其方が手にはどうしてあるぞ。
ぼん　御尤もでござりまする。私しは親と親との云ひ約束で、さる國のさる人の娘と、夫婦になる筈でござりました。それを、その起證の宛名の女が聞きまして、おれを捨てるが腹が立つと云うて、その起證を戻しましてござりまする。云ひ號けの女には、添ふ心はござりませぬに依つて、その起證を元へ戻しませうと存じまして、紙入れへ入れ置きましてござりまする。それゆゑに親の家は立退きまして、斯樣な淺ましい姿になりましてござりまするは、元その起證ゆゑでござりまする程に、お戻しなされて下さりませうならば、忝なうござりまする。
城之　成る程、それで知れた。とてもの事に、起證の宛名が聞きたいわいやい。
ぼん　そりやお許されませい。恥かしうござりまする。
蛸藏　云ひ居らざ、遣らつしやりまするな。
城之　云はねば戻さぬぞ。
ぼん　申しませう。
城之　宛名は。
ぼん　千歳屋三浦どのへ。
城之　最前よりの話しの太夫。然らばお前は。
ぼん　エヽ。
城之　紙入れ戻しませう。
ト出す。
ぼん　エヽ、忝ない。
城之　先づ〳〵、此方へお出でなされませう。
トぼん助を敬ふ。ぼん助、合點のゆかぬ顏する。
元九　サア〳〵、お出でなされませい。
トぼん助、意地張るを、無理に連れ入る。後に蛸藏一人殘る。と唄になる。
蛸藏　紙入れの内に二つ紋、起證の宛名は千歳屋三浦。そんならお前は。バタ〳〵〳〵。サア、お出でなされま

せ。ハレ、合點のゆかぬ。とんとおれ一人か。これがほんの月夜に釜ぢや。

ト思案して居る。橋がゝりバタ〳〵と足音する。蛸藏聞いてちやつと駕籠の內へ隱れる。と傾城三浦、風呂敷包み割りがけ走り出る。あちこち隱れようとして駕籠を見附け、內へ隱れようとする。蛸藏ヌツと出る。三浦、悔りして

蛸藏　これは如何なる事。人の屋敷へ案內もなしに、入るは何者ぢや。

三浦　エヽ、わしは大事ない者ぢやが、其方はこの駕籠の內に。アヽ、其方は駕丁ぢやの。

蛸藏　オヽ、駕丁と云はつしやれば、下ろす。上げいと云はつしやれば、上げる。上げなり下ろしなりと、其方の勝手にさつしやれ。上げてやらうか、下ろしてやらうか。

ト包みを取る。

三浦　エヽ、茲な人わいの。此方の機嫌も知らいで、よい機嫌な。コレ、賴むわいの。賴みたいわいなう。

蛸藏　エヽ、茲な和郎わいの。譯も云はずに賴む〳〵と、何を賴まつしやつても、錢三文の才覺はならぬてや。

三浦　イヽヤ、そんな事ではない。賴むと云ふは、わしを匿まうて下されいなう。

蛸藏　ヤア、さては貴樣は駈落ち者ぢやの。

三浦　今爰へ大勢、人が捉まへに來るわいの。ちやつと匿まつて下されいなう。エヽ、機轉の利かぬ人ぢや。

蛸藏　なんぼ機轉が利いたとて、見ず知らずの駈落ち者、どう匿まはれるものでいの。マア、譯を云はつしやれいの。

三浦　エヽ、悠長な。その譯は後での事。それ云うて居る間に、捕まへらるゝと、死なねばならぬ程に、人一人助ける事ぢやと思うて、爰な如來さん、ちやつと匿まつていな。拜みます〳〵。

ト蛸藏、思案して居ると、橋がゝりバタ〳〵とする。

三浦　アレ〳〵、もう來るさうなわいの。

蛸藏　匿まうたぞ。

三浦　嬉しうござんす。

ト蛸藏、橋がゝりを見て、三浦を駕籠の中へ突き入れる。垂れを下ろし、凭れかゝり居る。ト千歲屋勘左衛門、下男連れ走り出る。

勘左　片意地な事云ふないやい。この道ぢや。キリ〳〵歩

けいやい。
下男　あちらの道へ行つたでござりませう。
勘左　後の茶屋で問うたれば、この道へ來たと云うた。方方尋ねい〳〵。
蝮藏　駕籠やろい〳〵。
勘左　ムウ、駕籠か。
蝮藏　戻りぢや、乘らんせぬか。
勘左　駕籠舁き、その駕籠の垂れを上げて、中を見せてくれぬか。おいらは人を尋ねる者ぢやが、どうやら氣がゝりな。ちよつと垂れを上げて見せてくれぬか。
蝮藏　旨い事を云ふ旦那どのではあるわいの。この駕籠の内に人が乘つて居れば、こなたに駕籠貸そとは云はぬわいの。空駕籠で戻りぢやに依つて、廉うしてやらう。乘つて行かつしやれと云ふのぢや。
勘左　さうぢや、捕まへたら、どうで空ぢやならぬに依つて、借ろ〳〵。有やうが、おいらは女の駈落ち者を尋ねるのぢや。
蝮藏　エヽ、旦那どの、皆まで云はしやんすな。その駈落ち者の女と云ふは、此やうな模樣の着物着た奴で、形恰好は此やうで、年頃は十八九、二十ばかり、器量の好い女か。
勘左　さうぢや〳〵。どこに居る。知らせてくれ。
蝮藏　ヤレいとしや。マア一足の違ひぢやわいの。わしは今この駕籠かたげて來かゝつたれば、その女が橋の上から、眞逆樣に首を縊つて、身を投げて自害して、死なれたわいなう。
　ト泣く。
勘左　南無三方、コリヤ、聞いたか。五百兩が身を投げて首縊つて自害して死んだといやい。そりやどこで。
蝮藏　これから三十町ばかり先で。
勘左　南無三方。サア、來い〳〵。
　ト下男連れ向うへ入る。ト蝮藏、後見送り、三浦を駕籠より出す。
三浦　命の親樣。エヽ、忝ない。嬉しいぞえ。
蝮藏　禮には及びませぬ。今の奴等は騙してやつたれば、モウ、先へこそ行け、後へは戻らぬ。氣遣ひな事はない。氣を落ちつけて、樣子をとつくりと云はつしやれ。こなたは先刻におれを見て、駕丁ぢやさうなと云うたからは、マア、廓はどこにもせよ、傾城ぢやの。
三浦　さつても粋な。命の親のこなさんに、隱さうやらは

ない。成る程、わしは浪花新町の傾城ぢや。深う云ひ交した男がある。その人ならでは外の男に、一生肌は觸れまいと思ひ詰めては居れども、勤めの身の因果、夜毎に替る客の肌。僞りに枕は交せども、心の眞實。辛抱の男と云ふは彼の人ばかり、情なや、わしゆゑに親御さんの國を出さしやんして、行くへが知れず、どうならしやんした事ぞと案じても、泣いても、尋ねる事のならぬは籠の鳥。廓は出られず、怪我過ちのないやうにと、賴むは神佛さんより外はないわいの。女の心のくど〳〵と、病になつて、この頃は、わしも氣病みに煩うて居ました所に、嫌らしい、聞いて下され。わしにも知らせず、親方と談合して、つひに一度も呼び出さぬお客が身請けして、今日はあつちへ遣る筈ぢやと、昨日の暮れ方に親方が、云ひ出した時のわしが悲しさ。いつそ死んだらよかつたもの。廓に居たらば、彼の男が、尋ねてござんすまいものでもないと思うて、ま一度顏が見たさに。

ト泣き

イヤ〳〵、どうで廓に居ては、云ひ交した男へ立たぬ。廓さへ出たらば、女の念力でなりとも、一度は巡り會はぬと云ふ事はあるまいと、覺悟極めて昨夜、終太鼓のぞめきの中へ打交つて、まんまと門は出たけれども、暗さは暗し、どこをどうぢやと道は知らず、滅多無性にこの道へ走つて來ましたれば、氣の急く任せに、わしが紙入れを落しました。中には命にも替へぬ、大事の書いた物がある。それが無うては彼の人に逢うても、わしが立たぬ事ぢやに依つて、斯う來た道を尋ねて戻つたれば、今のやうに親方どのに、すんでの事に見附けられやうとした。こなさんと云ふ人が、匿まつて下さんせずば、また廓へ引戻されると、わしや直ぐに自害する。さりながら落した紙入れがなければ、男へ立たぬに依つて、死なねばならず、どちらへどう廻つても、わしが命は今日限り。可愛い事ぢやと思うて、袖の振り合せも他生の緣とやら云へば、死んだ後ではせめて、一遍の回向をして下さんせ。世の中に、色と義理ほど悲しいものはござんせぬわいなう。

ト泣く。

蚫藏　ハヽヽヽ、讀めた。お傾城、死ぬる事もなんにもない。落した紙入れもあるぞ。

三浦　エヽ、そりやどこにえ。

蚫藏　エヽ、それはの。

ト奥にて「殿のお入り」と云ふ。
なんぢやあらうと、おれ次第にして、ござれ。
ト蛸藏、三浦を連れて橋がゝりへ入ろ。と奥より、內膳、唐崎姫、隼人、小菊、城之助出ろ。
內膳　城之助、なんと云ふ。聟高安藏之助どのが、お入りなされたとあるか。それは誠か。定かいやい。
唐崎　イヤ、申し父さん、慥かに殿樣がお入りなされましたと城之助の云やるからは、よもや違ひはござりますまいぞいなア。
內膳　それ〱。
隼人　城之助どの、聟君藏之助さま、お入りなされたに違ひござらぬか。
城之　聟君と申す證據がござりまする。何事も私し次第になされませい。
內膳　然らば早う聟どのに對面したい。これへお出でなされと云やれ。
城之　畏まつてござりまする。
ト立ち、障子の方へ向ひ
聟君、高安藏之助さまへ申し上げまする。主人伊吹內膳聟舅の御對面申したいとあつて、これまでお迎ひに參られました。早くこれへお出でなされませい。但しそれへお供仕りませうか。
ぼん　お出でなされうとは慮外の至り。藏之助、それへ參り御對面申さう。
城之　然らばお出で下されませう。
ト障子明ける。ぼん助、𧘕𧘔大小、立派なる形にて出ろ。
內膳　聟殿、これへ〱。
ぼん　お許されませう。
內膳　聟どの、ついに今まで對面は致さぬが、手前は伊吹內膳、次に居るが、こなたと云ひ號け致した、唐崎姫でござる。疾にも、こなたは手前の屋敷へお入りなさるゝ筈のところ、承はればこなたには。
唐崎　申し〱父樣、モウ、なんにも仰しやつて下さりまするないなア。
城之　成る程、姬君樣の御意の通り、聟君お入りなさるゝからは、何事も仰しやらぬがようござりまする。
內膳　如何にも〱。これだけが身が年寄つたと云ふものぢや。
ぼん　御意なされずとも、この藏之助めには、御親子とも

に一通りのお恨みござらうと存じ、一生の御對面も思ひよりませなんだる所に、フト侍ひの恥かしい物を落しましてござる。あれなる城之助どのに拾ひ取られ、是非に及ばず、家名を名乗りましてござる。直ぐにこなたへ對面と申し・なんの面目ない。生面提げて歸らうと申してござれば、何れもに留められ、思はずも聟舅の對面。別して姫、こなたの恨み、察し入つてござる。さりながら斯樣に罷りなりまするからは、眞實の倅と思し召され、御不便の加へられ下されませうならば、千萬忝 なうござりまする。

内膳　眞實の親子とも／＼。

隼人　先づ聟舅君の、お杯なされませい。

内膳　如何にも。その銚子土器持て。

隼人　ハア。

ト橋がゝりより、侍ひ一人出て

侍ひ　申し上げまする。聟君高安藏之助さまより、お使者が立ちましてござりまする。

城之　ナニ、藏之助さまよりのお使者とな。

藏之　身共がこれへ參つたは只今の事。よもや國元に知られやうはないが、ハレ、合點のゆかぬ。

城之　して、そのお使者は、なんと云ふお侍ひがお出でなされた。

侍ひ　イヤ、お侍ひではござりませぬ。女中でござりまする。

城之　女の使者。ムウ。なんにもせよ、使者とあれば、これへ。

侍ひ　畏まつてござりまする。お使者、この方へお通りなされませい。

ト唄になり、橋がゝりより、三浦、裲襠にて出る。城之助出迎ひ

城之　河州の御城主、高安藏之助さまより、お使者とござる女中。遠路御苦勞に存じまする。して、お使者のお名はな。

三浦　河内の國高安市之守口眞似をも致しまする、禪の崎鈴右衛門が女房、りんと申しまする者でござりまする。こなた樣のお名はな。

城之　堅田城之助と申しまする。して、お使者の御口上はな。

三浦　成る程、こなさんに云ひやんしても、大事ない譯な事ぢや、けれどもな、あのマア、主人市之守さんの云は

んすには、先づ殿さんに直に逢うて、何やかやの所譯を云へてゝ申されました程に、直に殿さんに、こなさんの手管で逢はして下さんせうならば、千萬大悦、有り難くござんせうわいな。

內膳　そのお使者、これへ通せ。

城之　畏まつてござりまする。これへお通りなされませ。

ト三浦、褄を取り、道中の身振りにて行き、ちやつと思ひ出し、堅い身振りにて行き

三浦　皆さん、御免なさんせえ。ヤア、エイ。

ト下に行て、足を投げ出さうとして、ちやつと畏まる。

內膳　高安市之守どのより、使者は其方か。

三浦　ハア。

兩膳　身は伊吹內膳ぢや。身共に直に逢ひたいとは、何事ぢや。

三浦　親方、イヤ、主人申し越しましたは、お前のお娘御と、此方の息子藏之助と、夫婦の契約いたしましたけれども、傾城ゆゑに國を立退きましてござれば、死んだやら生きて居るやら、藏之助が身の上は知れませぬ。大事のお娘御を、若後家にいたしまするは、如何にしてもおいとしう存じまする。此方の藏之助は、死んだと思し召して下さりませい。緣を切りましてござりまする程に、如何なる方へも、緣にお附けなされませいとの、使者でござんすわいな。

城之　イヤ、そのお使者ならば、緣は切られぬ。歸りやれ。

三浦　イヤ申し、藏之助が在所知れませぬに、緣を切るまいとは。

城之　聟樣は御存命でござなさるゝ。

三浦　エヽ、そりやどこにえ。

ぼん　高安藏之助はこれに居るわい。

三浦　なんと。

ぼん　主の面を見忘れたか。

三浦　ドレ。

ト顏を見て思案し

成る程、藏之助さまぢやが。

ぼん　藏之助が面を見たか。

三浦　何れも樣、ついに御對面もなされぬ聟樣なれば、よもやお見知りはござりますまいが、あなたを聟藏之助さまとは、どうして御存じなされましたか。

城之　お名乘りもなされず、お見知りも申さねども、あなたが聟樣と云ふ慥かな證據。あなたのお落しなされたを身共か拾うたが證據。
三浦　ドレお見せなされませい。
　ト紙入れを取り、中を改めて
ヤレ嬉しや。これを取らうばつかりに。
　ト戴き
皆さん、さらばえ。
　ト行かうとする。
ぼん　其奴、留めい
隼人　女、動くな。
ぼん　縄かけてこれへ引け。
隼人　女、腕廻せ。
三浦　粗相さしやんすな。
　ト皆々取卷く。所へ蛸藏、裃大小にてズツと出る。侍ひを取つて投げ、少し立廻りあつてとまる。
隼人　おのれ、何奴ぢや。妨げすると、おのれともに、ソリヤ。
侍ひ　やらぬ。
　トかゝる。また少し立廻りあつて
蛸藏　おのれは身共が、詞も出さぬ其うちに、この女に縄の事はさて置き、指でもさすと許さぬぞ。飛び退いて居れ。
隼人　イヤ、御意ぢや。
蛸藏　御意とは、何奴が。
隼人　この國の聟、藏之助が云ひつけた。
蛸藏　聟であらうが、どなたであらうが、この家國の血統が、只今御入部なされた。身共が屋敷に居るからは、御意呼りは聞きたくいな。默つて居れ。
ぼん　其奴、縛れ。
　ト隼人、侍ひ、また立ちかゝる。また少し立廻りあり
蛸藏　殿内膳さまに、一通り云はねばならぬ仔細あり。それまでバタ〳〵騷ぎやがるな。
内膳　身共に逢うて、一通り云はうとは。
　ト顏を見て
ヤア、そちや、弟宮内ぢやないか。
城之　宮内さまとは、御幼少にて、御勘當お受けなされた殿樣の弟御の、宮内さまでござりまするか。
内膳　幼少の節より、心悪黨なるゆゑ、可愛い子には旅の心で、わざと勘當いたし置いたが、艱難辛苦をいたし、

壓が切り目へ沁み込んで、性根が直つたか。
蛸藏　親は泣き寄り、悲しい時には、繼母の從兄を尋ねるとやらで、幼少の砌り、心悪黨ゆゑ、勘當は受けましてござれども、何卒一度心を入れ替へ、屋敷へ歸らんと存じ明暮れこの屋敷の取沙汰に心を附け、聞き合せ居りましたる所に、姫と云ひ號けの聟、藏之助どの、出國して行くへ知れずと聞く所に、今日不慮に藏之助どの、入られたと云ふ事を聞き、先づ兄者人に勘當の願ひをして、聟どのにもお目にかゝらねばならぬ譯あつて、參つてござる。これまでは若氣の至りの悪黨。前非を悔いて勘當の願ひ、お許され下されうならば、家國のお爲になる仔細を申し上げたい。御勘當お許され下さりませうならば、有り難う存じまする。
内膳　兄弟の緣切り、勘當いたして二十年餘。面出しもせぬ其方。殊に勘當赦さば、家國の爲にもなる事、云はうと云ふ志し。なんにもせよ家國の爲とあれば、先づ勘當は赦したが、仔細はどうぢや。
蛸藏　先づ御勘當御赦免なし下され、千萬有り難う存じまする。
トずつと、上座へ直り、

兄者人の勘當赦さるゝからは、先づ身共はこの國の伯父よ。斯うならねば先行きも明かされず。何かの詮議もならぬぢやて。先づ今日お入りなされた聟どのに、お近附きになりませう。
ぼん　あらまし樣子は聞いて居たが、大殿の弟、宮内どのはこなたか。
蛸藏　聟藏之助はこなたか。
ト兩人顏見て
ぼん　蛸藏か。
蛸藏　ぼん助か。
兩人　以後別懇に申し談じませう。
隼人　御一家の杯〳〵。
ト君は千代ませの謠になる。ト島臺持つて出る。宮内の前へ三方直す。ぼん助、土器取らうとする。
蛸藏　イヤ、藏之助どの、お控へなされ。お肴仕らう。
ト三方に拔き身を載せ、藏之助が前へ直し。
聟どの、その肴一つ參れ。
ぼん　現在の弟の身なれども、この藏之助がこの屋敷へ入つては、家國を其方が繼ぐ事ならぬと思うて、それゆゑ身共にこの肴か。

蜘藏　玆な似せ者めが。
ぼん　なんと。
蜘藏　似せも似せ、眞赤いな大騙りめ、縛り首を打たれぬ
先に、潔よう腹を切れ。
ぼん　身共を似せ者と云ふ證據は。
三浦　わしでござんす。
隼人　また似せ者でないと云ふ證據は。
城之　最前の紙入れ、女、その紙入れを爰へ出せ。
蜘藏　サア、その紙入れが似せ物と云ふ證據。
ぼん　なんと。
蜘藏　こなたこの女、見知つてござるか。
ぼん　ありや、身共が國より使者に參つた女。
蜘藏　紙入れの內には起證がある。あの起證はこなたの身
から、誰れに書いてやつた起證ぢや。
ぼん　知れた事。傾城三浦に。
三浦　その三浦と云ふは、わしぢやわいなう。
ぼん　ヤア。
蜘藏　あの紙入れは、この傾城三浦が落した紙入れを、お
のれが拾うて、中の起證を證據に、藏之助と名乘つて、
この家國を納めうとは、大殿樣兄者人、コレ、これを詮
議せう爲、勘當を赦して下されいと申したてや。
內膳　出かした／＼。いよ／＼勘當赦したぞ。
蜘藏　なんと、似せ者であるまいか。返答あらば云うて
見よ。返答なくば腹切れ。切らずば身共が切らしてやら
うか。
ぼん　イヤ、滅多に腹は、えゝ切るまい。
蜘藏　切らさいで置かうか。
ト切りつける。三方にて受け留め、少し立廻りあつて
とまる。三方にて押へる。
大騙りめ、似せ者め、手向ひするか。
ぼん　成る程、藏之助と名乘つたは似せ者ぢや。
隼人　さてこそな。似せ者ならば腹を切れ。
ぼん　イヤ、腹は切るまい。
蜘藏　切らずば斯うして
トまた立廻りになる。立廻りにて、ぼん助、息杖を中
より切り折る。內より一通出る。
ぼん　腹切られぬと云ふは、これで。
宮內　なんと。
ぼん　殿內膳さま、この一通、覺えがござりまするか。
內膳　その一通とは。

卜藏之助讀む。

其方、身共が胤を懷胎し、產み落したるところ男子なり、仔細あるゆゑ、早速屋敷へ入れ難く、成人の後、この左文字の刀を證據に、名乘合ふべきものなり。

月日　近江國主

伊吹內膳判

ト讀みしまひ、その一通と鎧通しとを、うや〳〵しく

深草の里　お大、誕生の倅　熊太郎兩人へ

內膳の前に直し

とくと御覽じませい。お覺えがござりませう。筐とあつて殘し置かれた左文字の刀、太刀の姿、幅廣く鎬高にして、切尖はのび、地色黑々亂れ燒。重ねうすに張り高く、背丸くして筋かひの鑢目、目針穴の下平らかに、左と內裏に筑州の住と、慥かに記してありませうがな。

內膳　成る程、紛ふ所もない、左文字の刀。この一通も身が手蹟。そんなら其方は熊太郎。

唐崎　日頃お話しなされた、あれが

內膳　この證據があるからは

城之　京都御在藩の砌り

ぼん　御在藩の砌り、稻荷へ御參詣。緣でがなござりませう、大殿と申し、水茶屋の女、お乘り物の內よりお目にとまり、御逗留のうち、お屋敷へ召され、お情の餘りに胤を宿し、平產いたした熊太郎。印とあつて、下し置かれたお墨附お腰の物。母は三年以前に、空しくなりましてござりまする。

城之　熊太郎さま、斯程慥かな證據を持ちながら、何ゆゑ今まで御對面もなく、その上今日、卜藏之助さまと僞はつて、何ゆゑお出でなされたな。

ぼん　唐崎姬と云ひ號けの高安藏之助どの、傾城ゆゑに出國召されて、行くへ知れずと聞き、この國の跡目も如何と、覺束なう思ひ、いつそ身の上を明かし、これへ參らうかと存じてござれども、斯く淺ましい身の上なれば、我れこそ大殿の御胤よと、名乘り參らば親人、こなたの思し召しも如何と、兎やせん角と思ふ折から、不慮にあの女が紙入れを拾ひ、これ僞はりの幸ひ、卜藏之助さまとなつて入込み、親人にも對面いたし、家中の善惡を見分け、密かに藏之助どのゝ在所を尋ね、家國治まる上は、本名を名乘り、髮をも下ろし、母人の菩提をも弔はんと存じたが、何事も水の泡となつた。熊太郎が本意なさ。殿樣、何れも、思ひやつておくりやれいなら。

内膳　すりや、この女は、使者と云ふは僞はりで、わりや傾城か。

三浦　アイ、わたしは傾城三浦でござんす。おいとしぼや、藏さんは、わしゆゑに家を出さしやんして、廓に居ても心ならず、つひに一度も逢はぬ客が、身請けをせうと云ふ。それゆゑわしや駈落ち致しました。その道で紙入れを落しました。それをあの人さんが拾うて、それを證據に、爰へござつたと聞いたに依つて、紙入れの中には、藏さんの起證がある。それを取らうばつかりに、使者と云うて來ましたでござんすわいな。

隼人　紛らはしい女め、傾城ぢやと吐かすも僞はりであらう。此奴、詮議のある奴ぢやわいやい。

　ト云ふ所へ、橋がゝりより千歳屋勘左衞門、下男連れ出て、三浦を見附け

勘左　ヤア、太夫、わりや爰に居るか。よう駈落ちして難儀かけたな。先樣へ渡さねばならぬ。連れて去ぬる。サア、立て。

三浦　旦那さん、マア、待つて下さんせ。

勘左　待てとは、身請けなされた先樣へ、今日渡さねばならぬ。男ども、引ッ立てい。

城之　コリヤ〳〵、待て〳〵。其方は千歳屋勘左衞門ぢやないか。

勘左　ヤア、お前は、この三浦を身請けなされた大盡樣か。

城之　それが、其方が抱への三浦に極まつたか。

勘左　これが三浦でござりまする。

城之　身請けの入金は、先達て渡した。證文は此方にあるからは、この三浦は身共が直に受取つたワ。この以後三浦に、其方達、出入りあるまいな。身が直に受取つた。早く歸れ。

勘左　そんなら慥かに渡しました。

城之　受取つた。行け〳〵。

勘左　ヤレ〳〵、嬉しや。去んでお神酒でも上げよう。來い來い。

　ト下男連れ入る。

城之　三浦、其方は聟君を釣り寄せる手がゝり。身が屋敷へ連れ歸る。先づそれまで奥へ行きやれ。

三浦　アイ。

城之　殿樣、姫君樣、御兄弟のお杯は、御神事納まりました上の事。先づ一間へお入りなされませい。

内膳 成る程、さう致さう、サア、娘來やれ。ハテ、泣く事はないわいの。皆の者參れ。

隼人 先づお入りなされませう。

ト神樂になり、皆々入る。ぽん助の熊太郎、蛸藏の宮内殘り、あたり見廻し

熊太 伯父御宮内どの。

宮内 里の子、熊太郎どの。

ト兩人、向うへ出て

熊太 ア、。

宮内 仕附けぬ事は措いたがよい。

熊太 こなたは殿の現在の弟ぢやに依つて。

宮内 こなたは殿の現在の胤ぢやに依つて。

熊太 この近江一國を

宮内 こなたが

熊太 こなたが

兩人 治める氣か。

ト城之助、出かけ聞いて居る。

城之 この近江一國を、馬に乘せる氣か、駕籠に乘せる氣か。

兩人 ヤア、なんと。

城之 一人は駕籠舁き、一人は馬方、馬と駕籠との一國駄賃爭ひ。見物いたさうわい。

ト向うへ出て兩人の中に立つ。兩人、城之助が顏をヂツと見て

宮内 熊太郎。

熊太 宮内。

宮内 どうやら邪魔になりさうな面。

熊太 蟻の穴から堤が崩れる。

宮内 蚤の息が天へ上がる。

熊太 生けて置いたら。

ト宮内、拔打ちに、城之助へ切りつける。熊太郎、ヂツと見て居る。城之助、刀拔かずに鞘にてあしらひ、宮内が刀脇差ともに打ち落す。熊太郎、爰にて又切りつける。宮内も落ちたる刀を取つて、兩人より切りつける。兩人を品よく留めて、大小投げ出し、後へ下がり

城之 お味方。

兩人 なんと。

城之 御兩人のうち、何れへお國を治められるとも、お味方仕りませう。

宮内　イヤ、そりや僞はりぢや。
城之　僞はりない證據は、大小ともに。
ト投げだした大小を見せる。
宮内　イヽヤ、合點がゆかぬ。
城之　まだこの上に、如何やうの事なりとも。
熊太　其方が心底を見るは後での事。
ト宮内、馬の沓を取つて來て
宮内　サア、熊太郎、籤取りせう。近江の國一國、籤取りぢや。取れ。
熊太　イヽヤ、籤取るまい。
宮内　なぜ籤取らぬ。
熊太　この籤にわれが負けたら、ハツと云うてしまふ氣かおりや、負けても勝つても籤取らいでも、おれが家國治める。
宮内　そりやならぬ。おれが取る。
熊太　イヽヤ、おれが取る。
宮内　イヽヤ、おれが取る。
熊太　おれが。
宮内　おれが。
ト兩人詰め合ふ、城之助中へ入り

城之　イヤ、そりや惡からう。もう仲間割れがした。先づ御兩人が半國づゝ治めると思うて居て、マア、片附けて置いてから。
宮内　片附けて置いてからとは。
熊太　親殿を。
宮内　片附けてしまうてからか。
城之　マア、そんなものであらうかい。
兩人　尤も。
宮内　して、われが心底は。
熊太　見るに及ばぬ。傾城三浦をおれと寐させよ。
宮内　ソレ、姫とおれとを抱かせて寐させよ。
熊太　すりや、コレ、おのづと聟藏之助と、この家の緣は切れると云ふもの。
宮内　さうぢや。奉公初めに寐さすか。
兩人　どうぢや。
トこの間に、三浦と唐崎姫、東西の障子より窺ひ聞いて居る。
城之　委細畏まりました。
熊太　早呑み込み、合點がゆかぬぞよ。
城之　ハテ、お疑ひ深い。

宮内　いつ寐さす。
城之　今宵のうち。
熊太　しかと云ひつけたぞ。
城之　畏まつてござりまする。
　ト唐崎と三浦、ツカ〳〵と出て、城之助に取りつき
姫三　エヽ、城之助、其方は。
三浦　わしや殿様へ。
城之　コレ、悪いやうにはせぬ。身共次第にしてござれ。御両所、追つけ吉左右申しませう。
熊太　待つて居るぞ。
城之　ハア。
　ト城之助、姫と三浦を連れ入る。
熊太　して、家國を治める三つの寶は。
宮内　氣遣ひ召されな、三左衛門、八太夫と申して、忍びの術を得たる者に申しつけ、兜は八太夫、家の系圖は三左衛門、両人いたして盗み取れと云ひつけ置いた。
熊太　出かした〳〵。
宮内　手筈もよし。
熊太　首尾もよし。
宮内　熊太郎どの。
熊太　宮内どの。
両人　奥へ参らう。
　ト唄になり、両人奥へ入る。後へ隼人出て、あたりを見廻し
隼人　隼人が家來参れ。
　ト鈍平出る。
コリヤ、これを身共が屋敷へ、人に見られぬやうに持つて参れ。
　ト袋入りの九寸五分を出し渡す。
鈍平　旦那、これは。
隼人　あの両人の奴等が國へ入つては、身共が思ふやうにさせ居るまいと思ひ、こりやお家の寶の三つのうち、身共が預かり居る九寸五分の鎧通し。三種ともに揃はねば、家は治められぬゆゑ、先づ一種なりともと思うて、おれが盗んで置いた。
鈍平　出かしました。
　トこの間、城之助、後へ出て聞いて居る。
隼人　早く身共が屋敷へ持つて歸れ。
鈍平　畏まりました。
　ト行かうとする。城之助、引ッたくり

城之　さうはさせぬ。

ト投げる。

隼人　城之助、われを。

ト切りかける。拔いて當てる。隼人こける。鈍平、拔いて切りかける。引ッ擔いで投げる。起き上がる所を縛る。隼人起きて、切りかける。立廻りあつて、これも縛る。兩人ともに手水鉢の手拭にて猿轡はめ、宮の脇へ連れ行き、隱し置き、九寸五分を最前見物に貰ひし編笠の中へ隱し置く所へ、熊太郎出る。

熊太　城之助、隙取るがどうぢや。

城之　最早神事の刻限でござれば、首尾よく神事いたしまして、萬事はその上で。

熊太　家國を治めさするか。

城之　私し次第になされませい。

內膳　さうはさすまい。

ト大殿出る。

熊太　なぜさせぬ。

內膳　ヤイ、おのれは身が胤なれども、外戚腹。この家國は唐崎姬と、藏之助どのと夫婦にして、家國を治めさする。おのれが其やうな根性とは知らいで、呼び入れて、後見なりと、さうと思うたに、最早この國には叶はぬ。出てうせう。

ト熊太郎を突き出す。熊太郎、大殿の首筋を取つて引きつけ

熊太　ヤイ、モウ六。

內膳　玆な天命知らずめ。親をなんとする。

熊太　サア、親ぢやワ、親ぢやぞよ。おりや、われが子ぢや、子が親の跡目を繼ぐに、誰れが點の打手がある。その根性骨であらうと思うたに依つて、おれが身の上を隱し、藏之助ぢやと云うて似せて、この屋敷へ來た所に、思ひがけもない、傾城めがけつかつて、身の上が知れた所が、矢ッ張りおりや、おのれが子ぢやぞよ。その子に家國を讓らずに、外の國の者を呼び寄せて、家國を遣らうとは、これまで代々傳はつたこの國、外へ渡さうと云ふは、家國を亡ぼすのか。おのれは謀叛人ぢやなア。謀叛の張本はおのれ。家國には替へられぬ。おのれがやうな奴は、國中への見せしめて、仕樣がある。

ト散々に叩く。

內膳　エヽ、おのれは、刻んでも飽きのない奴ぢやなア。城之助、其方はそれに居りながら、熊太郎めが今の身共

への扱ひ様子を見て、なぜ默つて居るやい。
ト城之助、ヂロリとして見て居る。

ヤイ〳〵、城之助め、おのれはなア。イヤ、モウ、おのれにも構はぬ。熊太郎、身が國におのれは置かぬ。出てうせう。

ト内膳、熊太郎に取りつく。熊太郎、内膳を取つて投げ、突き退ける。城之助、割り竹持つて

城之 熊太郎さま、手緩い。此やうな奴は。
ト内膳を割り竹にて叩く。

内膳 道知らずめ。おのれは主を叩いたぞよ。

城之 主とはどこへ、身が主人と云ふは伊吹山。コレこの
ト宮内ズッと出て

宮内 熊太郎か、おれか。

城之 御兩人のうちへ、身共が心底をお目にかける。おれが爲には、われは主でもなんでもない。それで叩く。オオ、まだ打つ。
ト叩く。内膳泣き

内膳 エヽ、口惜しいなア。

宮内 城之助。心底見えた。其奴、打ち放してしまへ。

熊太 イヤ〳〵、殺すに及ばぬ。あの通りの老ぼれ、最早餘命もない奴、國中への見せしめに、阿房拂ひにせい。

城之 畏まりました。
ト唐崎姫。三浦出て、内膳に取りつき

唐崎 申し、父樣。

三浦 この形は。
ト取りつく所を、城之助、姫と三浦を縛る。

唐崎 コリヤ城之助。

三浦 これは。

城之 やかましい〳〵。
ト云ひ〳〵縛る。

内膳 エヽ、無念なア。

城之 なんの無念な、口惜しい事がある。大たわけめ。おのれがこの年寄つた態をして、熊太郎さま、宮内さまへ敵對をせうとは、野太い奴の。コレヤイ、おのれが眼にかゝらぬか。熊太郎さまは龍の勢ひ。宮内さまは虎の勢ひ。眼を明いて見い。龍虎の爭ひをせうと思うてござる兩人へ、敵對するは、おのれがたわけ者。早くこの場を出てうせい。長居ひろぐと命がないぞ。立て。うせい。
ト内膳を引ッ立て、突き出す。唐崎姫、三浦、行かうとするを、城之助引きとめる。内膳立つて、しを〳〵

行かうとする。
たわけめ。待ち居らう。せめてものよしみに。
ト編笠を持ち出て
せめてものよしみに、この笠くれる。これを被つて、國
境まで面を隱して。
ト笠の内に守り刀隱しあるを、内膳に見せる。内膳恟
りする。城之助、笠を内膳に渡し
面を隱して失せ居らう。
ト内膳、しを／＼と向うへ笠を持ち入る。
熊太　城之助、心底見えた。
宮内　サア、これから姫を抱かして寐さすか。
熊太　三浦を手に入れぬか。
城之　とくと申し含め、只今それへ遣はしませう。兩方の
座敷へお入りなされて、お待ちなされてござりませい。
兩人　待つて居るぞよ。
ト兩方へ別れ兩人入る。城之助、姫と傾城の繩を解く、
唐崎　城之助、われを。
三浦　其方を。
ト兩人、城之助が大小を拔き取り、切りかける。少し
立廻りあつて、兩人を押へ囁く。

城之　コレナ、合點か。
ト傾城、姫、兩人ともに襠裲脱ぐ。城之助、火を消し
て、宮の脇より鈍平と隼人を連れ來て、姫と傾城の襠
裲を着せて、障子の側へ連れ行き、姫、傾城の告げ聲
で
唐崎　そんなら城之助、行くぞや。
三浦　わたしも行くぞや。
ト城之助、鈍平と隼人を兩方の障子の内へ入らす。
城之　熊太郎さま、宮内さま。唐崎姫、傾城三浦ぢや。ソ
レ。
ト障子の内へ入れ、三浦と姫の手を城之助取つて
先づこれはよいが、大殿樣のお身が心元ない。ござれ。
ト兩人連れ、花道へ行かうとする。兩方の障子明けて
手燭突き出し、隼人、鈍平を見て
宮内　これは。
城之　緩りと抱いて御寐なされませ。
ト姫傾城を連れ、城之助、向うへ走り入る。道具替る。
後ろ一面の黑幕、舞臺先に兩方へ樋の口二つ出る。
ト向うよりおみの、小提灯灯し出て、ウロ／＼とあ

たりを見て

みの　これはマア、どこをせうどにウロ〳〵と。

ト思案し、懷中より狀を出し、提灯の灯にて讀み

惣堀の水拔き。水門の樋の口より忍び入るべく候ふ。

ト讀んで、あたりを見て居ると、東の方前なる樋の口

上がる。黑裝束にて兜頭巾の忍び者、綸旨の袋を持ち

出る。花道へ行くを、おみの、附け行つて

コレ、父さん。

ト本舞臺へ引摺り來て

コレ、申し、父さん、こなさんは、なぜ此やうな惡事に

與みして下さんしたぞ。エヽ、如何に浪人して貧しう暮

らして居ればとて、此やうな惡事に與みして、どうせう

と思はしやんす。この間から、どうやら侍ひが來て、お

前と密々の談合、合點のゆかぬ事と思うて居るところに

今宵夜更けて、わしが寐て居るねきを忍び足で、コレ、

この黑裝束を出して、わしや寐た顏して見て居たぞえ。

それからソッと內を出やしやんすに依つて、あんまり合

點がゆかぬに依つて、起きて見たれば、こなさんの寐床

所に、コレ、賴みの狀。さてはと思うて、お前に逢うて

意見して連れまして戾らうと思うて來ましてござんす。

コレ、申し、娘のわしを可愛いと思うて下さんせぬか。

父さん。エヽ、胴慾な。どう云ふ心で此やうな。

ト云ふうちに忍びの者、拔いて切りかける。おみの、

脇へ拔けて逃げる。忍びの者、向うへ行かうとする

を、おみの引きとめる。この立廻りにて兜頭巾脫げる。

おみの顏を見て、

ヤア、こりや、父さんではない。そんなら其方は……

イヤ、其方には構はぬ。

トおみの行かうとする。

三左　見附けられては、もう是非に及ばぬ。

トおみのを切らうとする。おみの拔けて

父さんかと思うたりや、

トまた行かうとする。また切りかける。是非なくタテ

になる。おみの、三左衞門を殺して、懷中を見て綸旨

を出して、提灯にて見て

こりや、この國の重寶。これさへあれば父さんの云ひ譯

の種。

ト走り入る、と向うより太助、提灯灯し、花道へ來か

かる。と西の方の樋の口の蓋、明きかゝる。太助、提

灯にて透かし見て、提灯の灯を隱し、花道に忍び居る。

ト忍びの者、黒裝束、兜頭巾にて、兜を盜み出る。花道へ行かうとする所を捕まへ

太助　コレ、親仁様、こなたは〳〵、如何に浪人として、貧しい暮らしをして居ればとて、此やうな惡事に與みして、子のおれは可愛うはござらぬか。エヽ、こなたはなう。

ト忍びの者、拔いて切りかける。立廻りにて、これも兜頭巾、太助引ッ張り脫げる。

ヤア、親仁様かと思うたれば、おのれは、

トまた忍びの者、拔いて切りかける。立廻りにて、忍び八太夫を殺し、兜を見て、

太助　八岐の大蛇の鱗を、鍬形に打ちたる兜、これはお家の重寶

ト云ふ所へ佐五右衛門、向うより裃にて、同じく提灯ともさせ出る。太助、この灯にて隱れる。佐五右衛門、本舞臺へ來る。侍ひ、死骸を見附け

侍ひ　こりや何者か、殺されて居りまする。

佐五　ナニ、人が殺めてある。ドレ、提灯。

ト家來の提灯を取り、死骸を見て、向うを見ようとすると、太助、提灯へ小柄の手裏劍打つ。佐五右衛門、持つたる提灯の火消える。太助向うへ走り入る。佐五右衛門見送る。

幕

二段目　　堅田屋敷の場

役名――大殿、伊吹内膳。伊吹宮内。堅田佐五右衛門。同妹、おきぬ。娘、おみの。腰元、小菊。葵は身太助　實ハ桃栗口助。川立川右衛門。鵜の目鷹右衛門。検校、篠田元水　實ハ高安藏之助。

造り物、屋敷の體、二重舞臺前に緣附き。東の柱へ引きつけて土藏あり、扉前立て、人の出入りあり、上に窓、兩方に二つあり、内より顔出すやうにして、西の柱、陣太鼓掛けあり、表門屋根へ人の上る事あり、緣先に手水鉢あり、疊敷きあり、幕の内にて眠ろまい眠らつしやるなと二三度云うて幕引く。眞中に、伊吹内膳、大殿の形にて、敷蒲團敷き、腰縄を附けられ、居眠り居る。兩方に割り竹持つた侍ひ兩人附き居る。その脇に、伊吹宮内、直り居る。二重舞臺の下に、堅田佐五右衛門裃にて手を突き居

る。その後に侍ひ見得よく並ぶ。

侍ひ　眠るまい、眠らつしやるな

ト割り竹にて舞臺を叩く。内膳眠りを覺まし

内膳　佐五右衞門、眠たい。寐させてくれいやい。

宮内　内膳どの、もう、好い加減で、劔の在所を云はつしやれい。兄弟のよしみに、命は助けてやらうわサ。サア有やうに云はつしやれサ。

侍ひ　眠らつしやるな。コレ、眠るまいてや。

ト割り竹にて叩く。また内膳、目を覺ます。

佐五　内膳さま、定めて苦しうござりませう。この間より樣々お尋ね申せども、劔の在所を白狀なされぬ。それゆゑ今日で最早十二日が間、晝夜寐させませずの現責め、お年寄られまして、お命の程も覺束ない。有やうに仰せられませいの。

内膳　如何にも、家を出る時、城之助が志しで、その劔は身共に渡した。それからどこをせうどに行く所はなし、其方の屋敷へ來て

トまた眠る。また起す。

侍ひ　ハテ、眠るまいてや

宮内　サア、その後に、どうぢや〳〵。

内膳　サア、佐五右衞門が屋敷へ來て

ト眠る。

侍ひ　眠らつしやるな〳〵。

ト起す。

佐五　イヤ〳〵、侍ひ中、先づお待ちなされい。何を申しても他愛がない。先づ暫らくのうち御猶豫なされい。

ト侍ひ「ハア」と云ふ。

宮内　佐五右衞門、其方が事は、代々この内膳が家老なれども、この度身共、また熊太郎兩人、當國の主となるべき心ゆゑに、この老ぼれめは、阿房拂ひに渡した。いま吐かす通り、どこをせうどにうせる所はなし、御身の屋敷へ來たとある。直さまお身が引ッ捕へて、熊太郎と身共へ注進召された。すりや、コレ、二心なき其方が心底と見たるゆゑ、この老ぼれを其方に預け、番人を附け置き、熊太郎と身共、一日替りに、毎日々々劔の詮議をすれども、吐かさぬ死太い奴の。とても在所は吐かすまい。いつそ、打ち放してしまはう。

ト立ちかゝるを、佐五右衞門留めて

佐五　これは御短慮千萬な。何事でござりまする。内膳どのを殺してしまうて、劔の在所は何者が存じ居りまする。

その上、こなた樣お一人の心には濟みませぬ事。只今では當國は、熊太郎さまと御兩人なされて、治めうと思し召されてござるぞや。それにお前の心一つで、內膳さまを殺さつしやりました時には、熊太郎さまが、オ、出かしたと仰しやるればよけれども、劍の在所も知れぬうちに、何ゆゑ殺したなどゝ御意なされた時は、なんと御返答なさるゝ。これ御兩所の確執の基と云ふもの。ハテ、マア、今のうちは御兩所樣ともに、お仲睦まじうなされてござるが、よからうかと存じまする。

宮內　尤も。して、詮議は、どうせうと思ふ。

佐五　御覽の如く、現責めの事でござれば、何を尋ねても他愛がござりませぬ。また暫らく休ませて置いて、その上で手を替へて、詮議の致しやうもござりませう。侍ひ中、先づいつもの通りに、內膳どのを藏の內へ連れてござれ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

宮內　侍ひども、番代りまでは、云ひつけた通り附いて居れ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト內膳寢て居るを、侍ひ兩人して藏へ連れて入る。佐五右衞門、藏へ錠を卸ろし、鍵を紙入れへ入れて持ち居る。

宮內　佐五右衞門、いま熊太郎と身共兩人して、家國を横領したが、熊太郎が國の守になりさうなものか、おれが國の守になりさうなものか、何れであらうと其方は思ふぞ。

佐五　天地の間に日月なければ暗闇。熊太郎さま、宮內さま、御兩所は日月陰陽、月なくて叶はず、日なくてならず、いま御兩所と云ふ月日なければ、當お國は暗闇でござりまする。

宮內　して、この宮內は月か、日か。

佐五　月とても日とも分ち難けれども、御兩所の光りを以て、この國をお治めなさる。併し、その日月にも、日蝕月蝕と申す障りがござりまするてや。

宮內　その障りと云ふは、云ひ號けの聟藏之助。それゆゑ此奴が行くへも、詮議させうと存じて、面體とくと覺えたる者に、藏之助めが繪圖を書かせ、繪姿を以て方々と詮議すれば、この障りも大方尋ね出しさうなものぢや。

佐五　藏之助さまばかりでござらぬ。このお國へ志しを盡しまする者は、多くござれば、內膳どのを預かり居る私

し、もし志しの者どもが忍び入りまして、内膳どのを盜み出しませうかと、晝夜油斷は仕りませぬ。御前にも御油斷なされぬがようござりまする。

宮内　その儀ならば氣遣ひ召されな。藏の内に兩人の者を附け置き、時代りに代らせて、もしもの事あるならば、早速内膳を刺し殺してしまへよと云ひつけ置いたゆゑ、この儀は少しも氣遣ひ召されな。

佐五　御尤もに存じまする。

ト宮内立つて、陣太鼓を打つと、藏の窓より侍ひ兩人顏を出し

侍ひ　御用かな。

宮内　イヤ、用はないが、心を附けて番をせよ。

侍ひ　畏まりました。

ト藏の内へ引ッ込む。

宮内　佐五右衛門、藏の内の番の者どもも、油斷せまいものでもない程に、せき／＼この通りに陣太鼓を鳴らして氣を附きやれ。

佐五　畏まつてござりまする。

ト侍ひ二人出て

侍二　時代りでござりますれば、番を代りまする。

佐五　御大儀。

ト立つて、藏の錠を鍵にて明ける。と始めの侍ひ兩人、藏より出て

侍ひ　お代り申しませう。

侍ひ　御苦勞でござりまする。

ト入れ替り、今來た侍ひ二人また藏へ入る。

侍ひ　お暇申しまする。

宮内　休め。

ト佐五右衛門また藏へ錠を卸す。

佐五　宮内さまには、暫らく圍ひへお出で下されませい。少しばかり挽溜めもござりまする。澁くとも一服差上げまするでござりませう。

宮内　よからう／＼。少し休息いたさう。案内しやれ。

佐五　あれへお出で下されませう。

ト唄になる。宮内、佐五右衛門、奥へ入る。侍ひ殘らず入る。和らかなる唄になると、向うよりおきぬ、篠田元水、相合傘にて出る。元水檢校の形、角頭巾、衣にて出る。花道の中程まで來て

元水　申し／＼、まそつと靜かにお歩きなされて下されませいなう。目の不自由な者を、手を引ッ張つて引摺り歩

いて、どうなされまする事でござりまする。

きぬ　元水さん、こなさんは昨日云はんすには、明日は早早參りまして、日の暮れるまで、稽古もしたり、話しも致しませうとは云はんして、なぜ今日は此やうに遲うござんした。

元水　エ、、それかえ。それはナ、今朝疾から行かうと思うて居りました所に、聞かつしやりませ、昨夜から弟子衆が來て、私しが家はドヤ／＼致しまする。なんの事ぢやと存じましたれば、明日は俄の顏見世ぢやに依つて、贔屓の役者へ積み物をするのなんのと、大勢寄り合つて、とんと今朝まで居られました。私しもそれに連れられて、夜を明かしまして、あまり眠たさに寢過しまして、それで遲うなりましたところへ、お前がお出でなされまして、引き立てお出でなされて、こりやなんとなされまする。

きぬ　サイナア。朝疾から來ると云うて、わしを待たして置いて、あんまり遲さに、わしが直に行たのでござんすわいの。

元水　そんなら、どれなりとも、腰元衆でもおこしたがようござりまするわいな。

きぬ　イ、エ、腰元どもを迎ひにやつて、お前の手を引かす事は、わしや嫌々。

元水　なぜでござりまする。

きぬ　腰元どもに限らず、外の女にお前の手を引かす事は嫌々。さうして、マア、この手の冷たい事わいなう。

　ト元水が手を我が懐へ入れる。

元水　コリヤ／＼、門中でござりまするわいの。

きぬ　門中なれば、なんとするえ。

元水　人が見ますわいなう。

きぬ　人が見て、なんと云ふえ。

元水　ハテ、根問ひをして尋ねさつしやりまする。人が見たら笑ひますわいなう。

きぬ　笑うたら大事かいな。わしや人に笑はれても大事ないが、お前は又、笑はれりや惡いかえ。

元水　それぢやと云うて。

きぬ　なんとしたいなア。元水さん、お前とわしとが斯うして歩くを、人が見たら、なんぢやと云はういなア。

元水　ハテ、知れた事。お前は堅田佐五右衞門さまのお妹御、私しは人の知つた八人藝の篠田元水と云ふ、盲人でござりますわいな。

きぬ　そりや知れた事いなア。お前は殿達、わしや姫御前。その殿達と姫御前とが、此やうに連れ立つて、仲好うして居るを、人が見たら、なんと云はういなア。
元水　さればな。イヤ、それは、あの女は、若いが目醫者ぢやさうな。こちらの盲目が目の療治でもしてもらはうと思うて、あのやうに附いて歩くのであらうと申しませう。
きぬ　何を云はんすやら。殿達と姫御前が、此やうに仲の好いのはな。
元水　好いのは。
きぬ　女夫。
　ト恥かしさうに云ふ。
元水　ナアニ、目も見えもせぬ者を。
きぬ　ほんぼんに。
元水　コレ、申し、おきぬさま、とんとお前は惡い癖な。私しを見ると、いろ〳〵の事を云うて、嬲らつしやりますわいの。兄御佐五右衛門さまは、物堅いお侍ひ様。ひよつとお聞きなされましたら、大抵の事ではござりますまい。重ねてから其やうな事を、仰しやつて下されまするな。

きぬ　お前をわしが直に迎ひに行たも、お前の手を取つて、道すがらも此やうな事なと云うて、樂しまうと思うて、それでの事ぢや。大事ないわいな。
　ト引寄せる。
元水　コレ、申し、エヽ、つんとモウ。
　ト突き放す。
きぬ　そんなら、どうなりと勝手。
　ト本舞臺へ來る。
元水　コレ、申し〳〵、どこへござりましたぞいの。申し〳〵。
　ト辿み歩き
エヽ、方角が違ひましたわいなう。エヽ、とんと、ほんのこれが、杖に離れたと云ふのぢや。
　トうろ〳〵尋ね廻り、内へ入る。おきぬ、門口の口に手を擴げ、待つて居る所へ、元水、探り〳〵來て、門へ入るを、ちやつと抱きつく。
元水　エヽ、又かいなア。
　トおきぬ、手を取り連れ行き、下に置き、琴を出して側へ持つて來て
きぬ　サア、昨日の沖の石の後はえ。

元水　それはな。

卜琴を調べる。卜おみの、向うより綿帽子、抱へ帯にて出る。後より小菊附き出る。花道にて

小菊　申し〳〵おみのさま、もそつと靜かにお歩きなされませいなう。

みの　小菊、其方も早う歩きやいの。

小菊　おみのさん、今日はお前の志しの日ぢやと云うて、寺詣りさしやんすに依つて、旦那樣の云はしやんす事には、一人は遣られぬ、わしを連れて行けと云はしやんしたに依つて、ヤレ嬉しや、今日はあつちこつちへ面白う歩かうと思うたに、なんの事はない、お先途するやうに歩かしやんすに依つて、ツイ内へ戻りましたわいなう。

みの　サイナウ。わしも今日は志しの日ぢやに依つて、旦那樣へ斷わり云うて、寺々へ詣つて、ゆる〳〵と一日歩かうと思うて居たに、若黨の太助どのが、わしも今日は志しの日ぢや、旦那樣へお暇を貰うた程に、行かうと云うて、わしに附いてござる。内を出る時は、なんの心も附かなんだが、道へ出ると人が見て、あれ見よ〳〵と笑ふに依つて、よう思うて見れば、あの太助どの、形のをかしいのを指さしして笑ふのぢや。あんまり後には、人が附いて歩いて笑ふに依つて、それが恥かしさに、此やうに早う歩いたのぢやわいなう。

小菊　ほんに又、あの太助どのゝ形は、見とむない形でござんすなア。

みの　人が笑ふ筈ぢやらう。

小菊　脊は低く、脊中はひよいと出てあり

みの　其やうな事、あの人の側で云やんな。腹を立たつしやるぞや。

小菊　アレ〳〵、あそこへ見えるぞえ。

みの　ほんにアレ、ちよこ〳〵と、あの形わいの。

卜向うを見て笑ふ。太助、奴の傴僂にて出る。

小菊　太助どの〳〵。

太助　オイ〳〵。おみの、小菊。さても〳〵早い足かな。如何に股倉に邪魔な物がないと云つて、ツカ〳〵〳〵。もそつと靜かに歩きやいなう。

みの　男だてらに、遲い足ではあるわいの。

太助　イヤそウ、歩かうと思へば、どのやうにも早うは歩けども、今日は旦那樣よりお暇を貰ひ、出かけた事ぢやに依つて、今日一日は主なし。おのれやれ、一日がけに歩いて來うと思うたに、悪い人と連れになつて、見さつ

しやれ、日足がまだ晝にならぬ先に戻つて退けた。さうして、おらを後に捨て置いて、先へ戻つて、同じ屋敷へ御奉公して居るに、わいらはおれを嫌ふな。コリヤ、犬も朋輩、鷹も朋輩ぢや。嫌ふない〳〵。

みの　これは太助どのとした事が、なんのこなたを嫌ふものぢやぞいなう。

太助　イヤ〳〵、嫌ふ〳〵。嫌ふ證據がある。

みの　何が證據ぢや。

太助　ソレ、一昨日の晩に。

みの　一昨日の晩に、なんとした。

太助　一昨日の晩に、お旦那もお姉御も、お休みなされたゆゑ、ソツとわれが部屋へ行たワ。その時、わりや草履取りの百助めに、灸据ゑてもらうて居たワ。そこでおれが云ふには、百助めは手が顫うて、灸を落し居つて悪い。おれ据ゑてやらうと云うたれば、イヤ〳〵、こなたに据ゑてもらふ事は嫌ぢやと云うた。それでもなんと、おれを嫌はぬか。

みの　そりやさう云はいぢや。

太助　なぜ〳〵。

みの　この間もこなたが、風呂へ入ると云はつしやつたに依つて、脊中流してやらうかと云うたれば、イヤ〳〵、脊中流さいでも大事ない。必らず風呂場へ來るなと云うて、わしをこなたが嫌ふぢやないか。さうして、湯殿の戸を内から、鍵金かけて置いて、わしが行くかと思うてぢや。ほんにこなたが、こちとらを嫌はつしやるわいの。

太助　ムウ。それか〳〵。それなら腹立つてくれな。おれがこの脊中が、どう流してもらはるゝものぢや。それなら腹立つな。堪えい〳〵。

みの　太助どの、こなたの脊中は、どうして其やうになつたぞいなう。

太助　サア、これはな。

みの　どうして其やうになつたかや。

太助　おらが五つの年であつた。この脊中の眞中に、ちよつと栗粒程な穴が明いたげな。その穴から水がぢやつぢやつと出るげな。一日には五六度も出る。また冷る時分には度々出るげな。親達が、ソリヤ水が出るワと云うて、溝端へ連れて行て、その水をやられた。或る時、溝端でその水を虹蚓にしかけた。それから此やうに、脊中が腫れて、今に直らぬてサ。

みの　何を譯もない事。
小菊　あれが傴僂と云ふのぢやな。
太助　それ程知つて居つてから、彼奴が。
ト追はへかけ、門の内へ逃げ込む。太助、追はへかけ入る。おみのも内へ入る。この間、元水おきぬは琴を調べて居る。
きぬ　おみの、小菊、太助、戻りやつたか。
みの　只今歸りましてござりまする。
元水　おみのどの、太助どの、今日はどこへ行かしやつた。
太助　元水さま、これは早うお出でなされた。稽古なされまするな。
みの　ほんに、何時も暮れ方でなければ、お出でなされぬに、今日は早いお出でゞござりまする。
きぬ　イヤ、ありやわしが、呼びに行たに依つて、來てくれてゞあつたわいなう。
みの　これは如何なる事。お前が直に呼びにお出でなされましたか。其やうな事があるものでござりまするか。其やうに浮き／＼と、なされましたら、人目に立つて、兄御様へ聞えましたらば、大抵の事ではござりますまいぞえ。ちとお嗜みなされませい。
きぬ　それでも、わしが云ふ事、聞かんせんものを。
みの　サア、わたしが聞かせまする。氣遣ひなされまするな。ナア元水さん、さうぢやないかえ。
元水　今日は二人ながら、旦那様の暇を貰うて、方々歩いて、好い慰みであらうなう。
みの　イヤ、モウ、今日は一日氣晴らしせうと存じましたに、ひよんな事があつて、思ひの外に早う歸りました。
太助　とんと、あのおみのどのが早う歩くに依つて、自づと私しも早う歸りました。併し、お屋敷にばつかり居りまして、また此やうに出かけますると、氣が晴れまする。寺々には參詣がたんとござりまする。物賣りぢやの、放下師ぢやのと、賑やかな事でござりまする。
きぬ　さうであらうとも。
太助　それは／＼、賑やかな事でござりました。
みの　さうして、人は先へ戻るのに、こなさん後へ殘つて何して居たぞ。
太助　こなたと一緒に戻らうと思つたが、彼の八幡様の社の内で、變つた物を賣つて居りました。
みの　何を賣つて居たかや。

太助　形は醫者の形で、さま〴〵の藥を賣り、その店に、びいどろの德利の内に、蠑螈を生けて置いて、その蠑螈の黑燒ぢやと云うて、賣つて居りました。

小菊　その蠑螈の黑燒と云ふ物は、惚れ藥ぢやないかいなう。

太助　ませた事を覺えて居るな。

みの　こなたもマア、そんな物を賣るのを、立つて見て居やんしたかいなう。

太助　見て居た段ではない。

きぬ　其方は、それを買うておぢやつたかや。

太助　ムウ。

　ト恥かしさうに笑ふ。

みの　買うでござつたかといなう。

太助　買うて來た。高い物の。三十二文ぢや。おらが一日の切り米を出して、買うて來たには樣子があるぢや。

きぬ　どんな物ぢや。見せやいなう。

　ト太助、紙入れより包みし物を取り出す。おきぬ小菊、覗いて居る。

太助　さて、これが斯うぢやて。

きぬ　どうぢやえ。

　ト欲しさうに云ふ。

太助　彼の、今の彼奴に惚れたが、どうぞこの戀叶へたいと思ふ時に、その者の知らぬやうに、この黑燒をソッと首筋から、その者にかけるが否や、どうも堪らぬげなの。

元水　どう堪らぬや。

太助　ハテ、知れた事、その者に惚れて〳〵、惚れ拔くといなア。

元水　それは好い藥ぢやなう。

太助　それから氣がワク〳〵なつて來て、惣身の體がしやつきりとしやき張つて、どうも堪るものではないといの。

元水　成る程、前から蠑螈の黑燒は、惚れ藥と云ふ事は聞き及んで居るが、ツイに見た事がないが、利くかの。

太助　利くとも〳〵。殊の外利くといの。おらもちつと心當があつて買うて來たて。

　トこの間に、おみの、それをソッと取つて、おきぬに遣り、元水に掛けいと云ふ事、仕方にてする。おきぬ嬉しがり取つて、元水に掛ける。小菊も太助に掛ける。兩人、それを知らずに

元水　太助どの、無心ながら、それをちつと下されぬか。
太助　イヤ〳〵、我れら少々心當があるぢやて。
ト脇へ立たうとして、太助グニヤ〳〵とする。
元水　コレ〳〵、ちつとばかり下されいなう。
ト立たうとして元水も、グニヤ〳〵する。兩人、グニヤグニヤする。
こりや、なんぢや〳〵〳〵。
太助　足が立たぬワ。
ト兩人、をかしき身振りにてグニヤ〳〵する。
みの　ソリヤ〳〵、廻つて來たさうなぞや。
元水　何が廻るのでござるぞいの。
みの　今の黒燒を、二人に掛けたのぢやわいなう。
太助　なんぢや。蠑螈の黒燒を二人へ掛けたか。
ト元水、太助、手を取り合せ、グニヤ〳〵する。
みの　オイナウ。
太助　掛けたはよいが、惚れ氣はせいで
元水　此やうにグニヤ〳〵するは。
トぐにやつく。
太助　とんと身内がしやき張ると云うて賣り居つたに、此やうにゝ

トぐにやつく。
元水　こりやどうも、ならぬワ〳〵。
トぐにやつく。
太助　面妖な、この筈ではないが。
ト包み紙を見て
南無三方、こりや高野の土砂と取違へてのけた。
皆々　何を阿房らしい。
トおきぬ、おみの、小菊、逃げて入る、
元水　コレ、水を一つ呑まして下されいなう。
ト探り〳〵入る。太助一人、後に殘り、グニヤ〳〵して居る所へ、鷹右衞門、侍ひに具足箱を持たせ出て
鷹右　頼まうぞや。頼みたい。
太助　ドウレ。
トぐにや〳〵して表へ出る。
どなたでござりまする。
鷹右　佐五右衞門どのに、お目にかゝりたう存じまする。取次がしやれ。
太助　成る程、取次ぎは致しませうが、此やうにグニヤつきましては。
トぐにやつく。

鷹右　コリヤ〳〵、其方はなんとした。
太助　振りかけ居りましてござりまする。
鷹右　振りかけたとは、なんの事ぢや。
太助　尾籠千萬な物を取違へて振りかけられましたゆゑ、惣身が蒟蒻のやうになりまして、どうもなりませぬ。どうぞちつと、しやき張りまするやうに、なされて下さりませい。
鷹右　なんの事ぢや。他愛もない。お身は佐五右衞門どのの家來か。どうぢや。
太助　家來は家來でござれども、ぐにやつきまする。聞えぬは、弘法大師でござる。此やうにグニヤつく物を、高野に拵らへて置いてから。
鷹右　此奴、どうでも氣狂ひぢやさうな。
太助　氣狂ひでもござらねども、兎角グニヤつきまする。恨めしいは弘法大師でござる。此やうな事を企み出して
　ト ぐにやつく。
鷹右　なんの事ぢや。他愛がないワ。
太助　どうで他愛はござりますまい。恨めしの弘法大師ぢや。
鷹右　どれなりとも、外の者に逢ひたい。

小菊　太助どの〳〵。
　ト 表を見て
ハア、これは、どれからお出でなされました。
鷹右　身共は宮内さまの御家來ぢや。主人宮内さま、この家に御座なさるゝゆゑ、用事あつて罷り越しました。
小菊　先づ此方へお通りなされませい。
　ト 鷹右衞門、具足櫃持つて入る。太助もグニヤ〳〵入る。
宮内さまは、主人佐五右衞門と、奥に何やらお話しなされてござりまする。
鷹右　宮内さまに直お目にかゝつて申さうが、この具足箱は、今日持參いたした。これに置いてくりやれ。
小菊　畏まりました。
鷹右　宮内さまにお目にかゝらう。案内召され。
小菊　斯うお出でなされませい。
　ト 入らうとする。
太助　コリヤ、小菊、よう振りかけたなア。
小菊　何をわつけもない。サア、お出でなされませい。
　ト 小菊、鷹右衞門入る。太助、グニヤついて入ると、侍ひ一人、臺に鯛を載せ持ち出る。

侍ひ　頼みませう。
太助　通らつしやれ。
侍ひ　イヤ、頼みませうでござる。
太助　そんなら、ドウレ。
　ト表へ出て
　ハア、今の頼みませうは、こなたか。
侍ひ　ハイ。
太助　ムウ、生物を持つてござつたの。生物見たれば、體がしやつきりとなつた。これは〳〵、忝なうございまする。
　ト引ッたくり
　ようごんした。大儀でごんした。
　ト内へ入らうとする。
侍ひ　アヽ、コレ〳〵、まだ口上も云ひもせぬのに。
太助　ほんになう。
侍ひ　こなたは佐五右衞門どのゝ家來か。
太助　如何にも家來。
侍ひ　然らば身共は、伊吹熊太郎より參りました。今日は我れら非番にて、宮内どの參られたでござらう。これは我れら志しの魚でござる程に、この魚にて宮内どのをおもてなしなされいとの口上でござる。
太助　心得ました。
　ト内へ入らうとする。
侍ひ　アヽ、コレ〳〵、待たつしやれ。
太助　オツと、まだなんぞ下さるか。
侍ひ　イヽヤ、主人申しつけまするは、佐五右衞門どのへ直にお目にかゝつてお渡し申せ、萬一お留守ならば、持つて歸れと申しつけました。
太助　旦那は内に居りまする。なれども、お客がござるゆゑ、逢はせまする事はなりませぬ。それと又、一旦くれて置いて、取返さうとは譯の悪い。返す事はなりませぬ。
侍ひ　然らばキッとお渡しなされて下されい。
太助　成る程、慥かに受取りました。
侍ひ　然らばお暇申しませう。
太助　ようござりました。
　ト後見送りて、
　おのれ、一旦内へ入つた物を、なんの戻すものぞ。
　ト内へ持つて入り
　生物を見て、ぐにやつきが直つた。よい〳〵。先づ奥に

はお客があり、あの客へ馳走にもてなせと云うて來たからは、先づ片身は作つて、片身は吸ひ物にせうか、燒き物にせうか。マア、なんでも料理して、

ト奥へ持ち行かうとして思案し

使ひの奴が、いかう念を入れて、旦那どのに直に渡せと云ひ居つた。

ト思案して居る所へ、おみの出かけて後に居る。

一國の主とも云はるゝ、熊太郎どのからの進物には、審かしい遣ひ物。使ひの口上には、念を入れて直に渡せ。

ト鯛を見て手を組み思案し、

傳へ聞く、越の范蠡、勾踐の爲に、その身は魚商人となつて、鱸の魚の腹に一通を入れ、文通して後、勾踐を代に立て、四百餘州を治めしも、魚の腹の一通。どの道この魚、仔細ぞあらん。

ト思案して、魚を打返し、いろ／＼見て、口の内より竹の皮に包みし物あるを見て取出し

さてこそ／＼。

トあたりを見る。おみの、具足箱の脇へ隱れる。太助竹の皮の中の狀を披き

密かに申し入れ候ふ。

ト讀み又、あたりを見る。おみの、隱れる。これよりこの狀を、太助、口の内にて讀み

斯うあらうと思うた。この狀通ずる佐五右衞門の心底は善か惡か。

みの　旦那佐五右衞門さまの心底、善惡を糺す、こなたの心は。

太助　おみのどの、なんぞ見たか、聞いたか。

みの　鯛の腹から狀の出た事も、こなたの云うた事も、なんにも知らぬわいの。

太助　ハテ審らかに知らぬなア。さう何もかも知らぬからは、隱すに及ばぬ。ソレ

ト今の狀を出し見せる。おみの、讀む、

みの　密かに申し入れ候ふ、兼ねて申し合せし通りに、今日其方屋敷へ參り居り申す、宮内を首尾よく騙し討になさるべく、後にては内膳も、今日中に首打ち、御持參あるべく、委細は御意得萬々申し入るべく候ふ、堅田佐五右衞門どのへ、伊吹熊太郎。

太助　それぢやに依つて

みの　善惡の詮議は後の事。太助どの、わしやこの狀を元通りに、鯛の腹へ入れて、旦那樣へ持つて行て、渡した

らばよからうと思ひまする。
太助　何ゆゑに。
みの　先づあのやうな惡人は、一人づゝなりと、片附けさするが、よからうぢやあるまいか。
太助　それはよけれども、ソレその狀の中に、內膳さまもと。
みの　ハテ、そこが善惡の詮議どころぢや。
太助　尤も。
　ト狀を元の通にして
おみのどの、御口上の通り、旦那へ申し上げませう。
みの　私しが、取次ぎ致しませう。
太助　御苦勞でござりまする。
　ト唄になり、兩人入る。太助、仔細らしう魚を持つて入る。とおきぬ出て、硯紙持ち出て、書置書く。と元水、後へ探り出て、
元水　おきぬさん／＼。
　トおきぬ、默つて書く。
おきぬさん、どこにござりまする。惡洒落な、どこにござりますぞいな。物も云はずに。
　トおきぬ、矢張り物云はずに書置書く。元水、ソロソロ目を明き、後に立つて見て恟りし、探り寄つて
おきぬさん／＼、何してござりまする。
きぬ　嫌々。わしやなんぼうでも。嫌々／＼。
元水　お前はこりや何事ぢや。なぜお前は死なつしやりまするぞ。
きぬ　お前がわしに隱さしやんすに依つて。
元水　コレ、申し／＼。そりや何仰しやりまする。私しがお前に何を隱しましたえ。
きぬ　お前は目が
　トあたり見て、思ひ入れして
見えやうがな。
元水　エ、。
きぬ　なぜわしに隱して下さんす。
元水　譯もない。なんの私しが、目が見えませうぞ。
きぬ　お前、目の見えぬ者が、わしになぜ又、死ぬるぞとは云はしやんした。
元水　そりやお前が書置を書いて居やしやんすに依つて。
きぬ　わしが書いて居るを、書置ぢやとは、どうして知らしやんした。
元水　エ、。

きぬ　目の見えぬお前が、わしが書いて居る物を、どうして書置とは見やしやんした。
元水　サア、それは。
ト内より、佐五右衛門
佐五　妹々、おきぬ、どこに居るぞ。
きぬ　ソレ、兄さんが。
トちやっと、元水、琴の調子を合し、素知らぬ體になる。佐五右衛門出て
佐五　ホウ、元水、こりや琴の稽古か。
元水　ハイ。
きぬ　兄さん、なんぞ御用でござんすか。
佐五　圍に宮内さまがござる程に、其方が手前で一服上げませい。
きぬ　アイ。
トうぢ／＼、行きとむなさゝうにして
サア、元水さん、ござんせ。
佐五　イヤ／＼、元水には用事がある。其方一人行け。
きぬ　アイ／＼。
トうぢ／＼する。
佐五　ハテ、行けと云ふに。

ト大きな聲で云ふ。
きぬ　サア、行くわいな。
ト走り入る。
佐五　ハテサテ、女と云ふものは、ザワ／＼／＼と。ナニ元水、其方にちと尋ねたい事がある。
元水　なんなりとも、お尋ねなされませい。
ト佐五右衛門、懐中より守り刀を出し、物云ひ／＼松の枝へ隠す。この間元水、琴を調べて居て云ふ。
なんでござりまするえ。佐五右衛門さま／＼。なんのお尋ねでござりまする。
ト云うても、佐五右衛門物云はずに、松の枝へ隠し居る。元水窺ひ
佐五右衛門さま／＼、どこにござりまするえ。
ト音せぬゆゑ、元水、ソツと目を明いて見る。佐五右衛門、後向きになつて、松の枝へかゝり居る。元水とくと見る。佐五右衛門、振り向く。一時に元水、ちやつと目を塞ぎ
佐五右衛門さま、どこにござりまする。どこに何されてござりまする。
佐五　イヤ、なんにもしやせぬて。

ト　おきぬ出て
きぬ　兄さんの何云はしやんすやら。宮内さまは、ようお休みなされてござりまするものを。
佐五　ハテ、ザワ〳〵と妹、何事ぢや。奥には宮内さまが來てござる。藏の内には、大殿内膳さまも捕はれてござる。それにザワ〳〵〳〵と。嗜なめ〳〵。
ト　この間に、元水、佐五右衞門が隱した松の枝の守り刀をソッと取り、懷中へ入れる。佐五右衞門、見ぬ顏して居る。
きぬ　兄さん、わしはなんにも、ザワ〳〵しやせぬわいな。
佐五　元水々々。
ト　呼ぶ。元水、ちやつと下に居て、
元水　ハイ、御用でござりまするか。
佐五　爰へ來よ。
きぬ　兄さんが呼ばしやんす。あそこへちつと行かしやんせ。ドレ、手を引いてやりませう。
佐五　妹、イヤサ、手を取るに及ばぬ。盲人と云ふものは、感の深い者ぢや。構はずと捨て置け。サア、元水、爰へ來やれ。

ト　呼び、元水が來る道へ煙草盆突き出し置く。
元水　アイ。
ト　元水、佐五右衞門が側へ行かうとして、思ひ入れし、探り〳〵這ひ寄り、煙草盆に行き當り、煙草盆退けて
佐五右衞門さまの惡洒落な。私しを呼びかけて、私しが來る道へ此やうに邪魔をして置いてから。
ト　煙草盆を脇へ退け、側へ行く。
なんぞ御用でござりまするか。
佐五　元水、其方は幼少の時から盲人かやい。
元水　アイ、私しは七つの時、疱瘡いたしまして、その時から此やうに
ト　この時、佐五右衞門、扇子を、元水が鼻の先へ突き出す。元水、ちやつと顏を引いて
ア、惡い蠅めが。
ト　蠅を追ふやうにして思ひ入れ。
佐五　七つの時の疱瘡で。
ト　佐五右衞門、脇差をソッと拔く。
きぬ　コレ、兄さん、何さしやんす。
ト　大きな聲にて云ふ。佐五右衞門、おきぬを引きつけ

元水へ脇差突きつける。元水、飛び退き

元水　おきぬさま〳〵、今の聲はなんでござりまする。とつと惘り致しましたわいの。さうして、なんぢややら、目の先へ、ヒラリと、薄氣味惡い。

佐五　なんの氣味が惡い。

元水　エヽ。

佐五　イヤサ、何を惘りした。

元水　今のおきぬさまが大きな聲で、コレ兄さんと仰しやりました。その聲で惘り致しました。

佐五　それに目の先へ、ヒラリとは、何がヒラリぢや。

元水　それはな。

佐五　それは。

元水　あの蜘蛛の巣と云ふ物は、惡い物でござりまする。

ト顔に蜘蛛の巣の張つた思ひ入れ。

佐五　ムウ、蜘蛛の巣か。

元水　アイ。

佐五　苧環の書來る事のならざれば

元水　夜手に觸はる蜘蛛の糸。アイ、これも蜘蛛の巣ぢやげにござりまする。

佐五　蜘蛛と云ふ物は、所々におのが巣を張り、家を拵らへおのれが住家とする。虫さへおのれが家を拵らへるに、まして人間。おのれが家國にも離れて、うろたへ歩く馬鹿者めが。

元水　アイ、蜘蛛にも毒がござりまする。ナア、おきぬさま、あの青蜘蛛と申す物は、毒でござりまする。人の命も取るものな。恐ろしい、人の命を取つてなりとも、おのれが命を、サア、おのれが命を助からうと思ふも、あの青蜘蛛の毒。サア、毒蟲と申すは、青蜘蛛の事でござりまする。

佐五　すりや、毒と見たか。

元水　毒も毒、珍らしい鴆毒でござりまする。

佐五　毒藥變じて藥となる。其方が藥ともなりさうなものぢや。サア、その目の見えぬ藥とも、なりさうなものぢやと云うはな、アレ、あの奥にござる宮内さまと、熊太郎どの御兩人なされて、伊吹山の家を押領し、その上、高安藏之助どのと云ひ號けのある、唐崎姫に戀慕して、その戀叶はぬとあつて、唐崎姫は宮内どのが、手にかけて首打ち落して、戀の仇を晴らし召された。

ト元水、思ひ入れあり

身共が爲には古主の事ゆゑ、唐崎姫を葬むり、菩提を弔

はんと存じ、亡骸は身共が申し請け置いた。

ト元水、思ひ入れして

元水　すりや、唐崎姫は宮内どのに。

佐五　殺されさつしやつたと云ふ話しを、其方にして聞かすのぢや。われが聞いて、役に立たぬ事ながら、今はこの國は、右も左も敵の中ぢやと云ふ事を、何者にも知らする爲ぢや程に、元水、其方もさう心得て、目界の見えぬ者ぢや程に、何かに心を附けてよと云ふ事。

元水　知らぬ事の話しぢやが、私しに云うて聞かさうと思し召しますなら、ハテ、承りませうわサ。

佐五　その上、其方に見せる物がある。

元水　ナニ、私しに見せる物。ハ、、、目界の見えぬ者に、見せる物があるとは、何を仰しやりまするやら。

佐五　目は見えずとも、盲人は感の深いものぢや。いま見せる物がある程に、なんであらうと觸つて見いよ。

元水　ハイ、マア、なんでござりまするな。

ト佐五右衛門、庭へ下り、飛び石を跳れ返し、下より首桶を出し、元水が前へ据ゑ

佐五　サア、おれが前へ据ゑて置いた物は、なんであらうぞ。考へて見い。

ト元水、いろ〳〵思ひ入れし、嗅いで見たり、さまざまあり、目を明いて見たいと云ふこなし、いろ〳〵あり、首桶を見て悔りし、蓋を取らうとする。佐五右衛門刀の鐺にて押へ

元水　小野とは云はじ芒生ひけり。西行法師諸國修行の時、秋風の、吹くにつけてもあなめ〳〵と鳴る物あり、何事なるぞと見給へば、年經る髑髏芒原に茂りたる芒原を通りしに、風の音に連れて、から〳〵とあつて、目鼻の内より芒生ひ出て、風に連れて、からからと鳴るを見て、いと哀れに思はれ詠みし歌、すりやこの内は。

佐五　唐崎姫の。

元水　ヤア。

佐五　緣はなくとも、回向せい。

ト元水、さま〳〵あつて思ひ入れし

元水　ハテ、女と云ふものは、一途に思ひ詰めて、云ひ號けの夫へ心中立て、死んだか。姫、可哀や〳〵。

ト泣き、思ひ入れし氣を替へ

餘所の事なれども、涙がこぼれて。

ト泣く。

佐五　未練な。その根性では役に立つまい。

ト飛び石を元水に投げつける。元水、宙にて受け留める。兩人見得。

元水　佐五右衛門どの、なんと盲人は、感の深いものでござらぬか。

トきつとなる。

佐五　とても事に、首に回向せい。

ト元水、首桶の蓋を取る。内より證文出る。元水、探り取つて披げる。おきぬ見て

きぬ　こりや傾城三浦が奉公人證文。

元水　ヤア、これは。

佐五　姫君のお果てなされたと云ふは、皆嘘ぢや。

元水　そんならこの證文は。

佐五　弟城之助が忠義の一札。回向の代りに、禮を仰しやれ

ト唄になり、佐五右衛門入る。元水、思ひ入れして居る。おきぬ、元水が膝へ突つかゝり

きぬ　エヽ、聞えませぬ〳〵。わしがお前を此やうに思ふ元は、兄さんの云はんす事には、其方があの師匠の篠田元水は、目が見えるさうな程に、見えるか見えぬか試して見よ、目が見えるならば、おれに知らせよと、兄さんの云ひつけ。初めの程はそれを試して見る心であつたが、お前の顔を見ると、その事はフッツリ打忘れ、モウモウほんに、今日も逢ひたい、明日も逢ひたい、逢ひたい逢ひたいと、お前の立振舞ひまで心を附けて見て居るわいな。お目の見えぬ時さへ、此やうに思うて居るに、お目が見えたら、わしやなんぼう嬉しからうぞ。それをわしに隱さしやんすに依つて、思ひ込んだお前ゆゑに、わしや死ぬるわいなア。

ト泣く。と元水、目を明き

元水　道理ぢや〳〵。つい假初めの事と思うたに、それ程にこなたは、おれを思うて下さるか。さう思ふ心ならばなぜおれが頼んだ物を下されぬぞ。

きぬ　あの藏の鍵かえ。

ト元水、あたりを見て、おきぬが口を塞ぎ

元水　それ程覺えて居て、なぜ兄佐五右衛門が持つて居る鍵、盗んでくれぬぞ。

きぬ　お前の云はしやんす事ぢやもの、やらいでなんとせうぞいな。鍵を盗んで遣つたら、どうさしやんす。

元水　鍵を貰うて、どうせうにや。あの藏を明けて。

きぬ　明けても、内の人様は出されぬぞえ。

元水　なぜ。

　トおきぬ、元水を脇へ退けて、掛けてある陣太鼓を打つ。藏の内より侍ひ二人、顔を出し

侍ひ　御用でござるかな。

きぬ　イヽエ、なんにも用はござんせぬが、兄さんは奥に宮内さまと話してござるに依つて、もしもお前が油斷もあらうかと、わしに云ひつけて、太鼓打てと云うてゞあつた。隨分氣を附けて番をさしやんせ。

侍ひ　心得ました。

　ト引ッ込む。おきぬ、元水を向うへ連れて出て

きぬ　あれ見やしやんしたか。あの通りぢやに依つて、鍵があつても役に立たぬわいなア。あの藏をお前が明けさしやんした時には、内にござるお方にも、又お前の身にも、ひよつとした事があつては、わしや悲しいわいなア。

元水　さても〳〵しをらしい志し。女と云ふものは、志しのしをらしいものぢやなア。

きぬ　あの藏の内のお方に、逢ひたがらしやんすお前は。

元水　なんと。

きぬ　高安藏之助さまぢやな。

元水　藏の内の人に逢ひたがるに依つて、藏之助ぢやと云ふのか。また藏之助なればなんとする。

きぬ　例へお前が藏之助さまにもせよ、兄さんの心入れ、善惡の知れぬうちには、わしや知らぬ顏ぢやわいなア。

　トこの前方より、具足箱より、川立川右衛門出て聞いて居る。

川右　イヤ、そりやおれが知つて居る。

元水　ヤア、おのれは何者、どこから出た。

川右　斯う云ふ事もあらうかと、宮内さまの指圖で、最前より具足櫃の内にて、何もかも聞いた。この通り奥にござる、宮内さまへ注進する。

　ト奥へ行かうとする。元水、引きとめ

元水　それを奥へ云はせては。

　トこれよりタテになる。元水、弱きタテ、具足櫃の紐にて、兩人いろ〳〵して絞め殺す。をかしきタテなり

アヽ、しんど〳〵。

　ト川右衛門、立つて死んで居るを兩人見て、怖がる。

こりや、しやき張つたワ〳〵。

きぬ　どうさしやんす。怖い事ぢやぞえ。

元水　大事ない〳〵。

ト側へ行くと、轉げろ、また恟りして、片附けようと
して、
片附けようと思うても、しやき張り返つて居る。
きぬ　どうせうぞいなく。
　ト川右衛門の死骸しやち張つて居る。
元水　よいく、最前の土砂は。
きぬ　爰にござんす。
　トおきぬ、最前の土砂を出す。元水取つて川右衛門へ
振りかける。川右衛門死骸、ぐんにやりとこける。
元水　禍ひも三年置けばぢや。
きぬ　さうして、どこへやらしやんす。
元水　矢ツ張りあの内へ。サア、手傳うて下んせ。
　ト兩人、重たき思ひ入れにて、川右衛門が死骸を具足
櫃へ入れる。トおみの出る。
みの　おきぬさんく。
　ト兩人、恟りして
元水　ソリヤ出たワ。
　ト元水、うろたへて、頭巾を前後へかぶる。
みの　これはなんぢや。
元水　これはな、あのおきぬさんが盲目鬼せうてゝ。

きぬ　アイ、それでこの元水さんを。
みの　又お二人が一所へ寄つて、じやらくと。おきぬさ
ま、兄樣がお呼びなされますする。奥へお出でなされま
せ。
きぬ　オヽ、サア、元水さんござんせ。
元水　アイ。
　ト手を引かれ
なんの事はない。後ろ面ぢやまで。
　ト元水、おきぬ入る。と唄になる。トおみの、あたり
を見て、懷中より戒名の書いたるを出し、手水鉢の水
を柄杓にて汲み、向うへ持ち出て、戒名に水を手向け
みの　法名圓譽變刃信士、百ヶ日追善菩提の爲。父さん、
七日々々五十日にも、位牌の前で申しまする事ながら、
お前は、マア、どう云ふ心になつて、あのやうな事を頼
まれて、淺ましい死をして下さんした事とや。その夜、
お前を尋ねて參りましてな。
　トあたりを見て思案し
ア、なんの役に立たぬ。ほんに死人に文言ぢや。未來成
佛、南無阿彌陀佛。
　ト回向して、あたりを見て、前巾着より鍵を大分出し

て、あれこれを見て、藏の錠前へ合せる。見て合はぬに依つて、外のを合せ見る事度々あり。この間、奥より鷹右衞門出かけ見て居る。また藏へ合せに行く所へ鷹右衞門、ズッと出て引き退け

鷹右　女、おのれは何する。

ト　おみの惘りして

みの　イヤ、なんにもわしや致しませぬ。

鷹右　おのれは、コリヤ、この藏へ合鍵をして。

みの　コレ、申し〳〵、そんな事は致しませぬぞ。

鷹右　そんな事せぬものが、こりや、なんぢや。

ト　鍵を取り見せ

大分の鍵を持つて、合鍵するからは、あの藏の内の、内膳が身寄りの者か。

みの　左やうな者ではござりませぬ。

鷹右　吐かすな。おのれ、詮議のある女め。縄かける。腕廻せ。

みの　粗相な事仰しやりまするな。

鷹右　腕廻さぬか。

ト　附け廻す。

みの　是非に及ばぬ。

ト　鷹右衞門が脇差抜き、切りかける。立廻りあつて鷹右衞門を殺し、止め刺し、それより死骸をどこへ隱さうぞと思案し、具足櫃を見附け、具足櫃の蓋明ける。内を見て惘りし、脇へ飛び退き、ソロ〳〵寄つて、とつくりと見て、

ヤア、こりや死んで居るワ。

ト　云うて、ちやつと我が口を押へ、具足櫃の蓋をして、鷹右衞門が死骸は疊を上げて、下庭へ入れ、疊にこぼれし血を水かけて拭いて居る所へ、太助出る。おみのに行き當る。兩人惘りして

ソリヤこそな。

ト　大きな聲にて云ふ。太助惘りし

太助　ソリヤこそなとは、なんぢや。

みの　ソリヤこそなと、云うたのは。

太助　ソリヤこそは。

みの　ソリヤこそ。

太助　ソリヤこそは。

みの　ソリヤこそ與太郎が浮いて來た。

ト　唄を唄ふ。

太助　ニ、、面白さうに。ア、、奉公の身の上と云ふもの

は、思うやうにならぬものぢや。今日は大事の命日。
ト懐中より戒名を書いたを出し、
法名釋浄忍信士、百ケ日追善菩提の爲、南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛。
みの　太助どの、わしやこなさんに、ちと尋ねたい事がある。
太助　おれもこなたに、尋ねたい事がある。
みの　こなさんから問はんすか。わしから問はうか。
太助　女役にこなたから。
みの　今日こなさんは、志しの命日ぢやと云うて、寺々へ詣らしやんしたその上に、今の回向は百ケ日との事。ありやお前の爲には、どう云ふ人の回向ぢやえ。
太助　こなたも今日は志しの命日ぢやと云うて、寺へ詣つたは、こなたの爲には何者で、誰れが回向をするのぢや。
みの　それはな。
太助　それは。
ト佐五右衞門、内より出て
佐五　その樣子、身共が云うて聞かさう。
太助　我れ〳〵しきが身の上の儀、お取上げあつて、お勿體ない。
みの　旦那樣、最早聞かずと、よしになされませ。
佐五　聞かねばならず、云はねばならぬは、お家の大事。光陰は矢の如く、お家の亂れしは百日以前。その節は身共は病氣にて、出勤も止まり居たれども、お家の大事と聞くと等しく、取る物も取敢へず、近道なれば裏門よりと志し、家來一人召し連れ參りしに、惣堀の水拔き、水門の樋の口に、殺され居つたる兩人の者。一人は桃栗三左衞門、又一人は柿八太夫。同じ出立ちの黒裝束の忍び姿。仔細を見んと提灯差しつけしに、發矢と打つたる小柄の手裏劍、おのれ曲者、逃がすまじと思うたれども、イヤイヤ、先づ死骸をとくと改めてと、詮議せし所に、コレこの頼みの一通。一人は懐中にあり、又一通は死骸の脇に落ちたる頼みの書面。兩人、これを讀んで見よ。
ト二通ともに向うへ抛り出す。兩人讀む。
みの　こりや、コレ、お家の寶を盗み取れよと
太助　頼みの書面
佐五　宛名は。
みの　桃栗三左衞門どのへ、伊吹熊太郎。
太助　柿八太夫どのへ、伊吹宮内。

佐五　其方達が回向の亡者、戒名の内に刃の字を附けしは劍にかゝりし者の戒名。さては其方達が親であつたか。不便やなア。併し此やうな惡事に與みしたる親々どもなれば、どうで斯うなる筈の事。おのれが罪おのれを責むる。自業自滅と諦めて居れサ。

みの　そんならお前は、桃栗三左衞門さまのお子の、口助さまか。

太助　こなたが柿八太夫どのゝ娘、おみのどのか。

兩人　ハテナア。

佐五　其方達兩人は、親々が云ひ號けの夫婦であらうがな。

みの　ツイに顔は知らねども、三左衞門さまのお子、口助さまと云ひ號けがしてある。嫁入りもさす筈の所に、口助さまは、身上稼ぎと、家をお出なされたとの事。そんならお前とわたしは親々の

太助　云ひ號けの夫婦と云ふ事は、どうして旦那には、御存じでござりまするか。

佐五　身共が弟誠之助に、おみのを娶さんと、我れが親八太夫へ、内證にて尋ねたれば、桃栗三左衞門が伜口助と云ひ號け致し置いたとの返答。それゆゑ存じて居るわい。

みの　すりや、お前とは云ひ號けの夫婦。

太助　其方の親の八太夫は、身共が舅。

みの　お前の親御三左衞門さまは、わたしが舅。

佐五　兩人ともに、討たねばならぬ親の敵。討たねば孝が立つまいがや。

太助　敵討ちは私し事。親への孝よりは、先づ主人へ忠義を立て、その上で敵討。

佐五　其方が主人と云ふは誰れぢや。

太助　ハテ、知れた事、お前樣。

みの　堅田佐五右衞門さま。

佐五　イヽや、身共を主人と云ふは表向き、心の忠義を盡す主人があらうが。

太助　心の忠義を立つる主人とは。

佐五　妹きぬ、篠田元水を連れ、これへ來い。

きぬ　アイ。

　トおきぬ、元水出る。

きぬ　兄さん、御用でござんすか。

佐五　兩人の不義者め。動くな。

　ト元水を縛る。

きぬ　ア、コレ申し兄さん。

ト寄るを同じく縛る。太助、おみの、心遣ひあり

元水　佐五右衞門さま、こりやなんとなされまする。

佐五　太助、おみの、この兩人の奴等は不義者。證據は最前奥にて、妹が袖より落ちたるこの書置。この兩人は其方達二人へ預ける程に、不義の詮議せい。

きぬ　兄さん、こりやお前の云ひつけで、元水さんの目が見えるか見えぬか、試して見いと云はしやんしたぢやないかえ。

元水　それに又不義者とは。

佐五　詮議して不義に極まらば、兩人ともに討つて捨てい。殺してしまへ。

太助　イヤ、殺されませぬ。

佐五　なぜ。

太助　主でござりまする。

佐五　主とは誰れを主。

太助　ハテ、お前は身共が主人。その主人のお妹御樣、おきぬさまは主人ぢやに依つて、殺されませぬ。

みの　わたしどもを主殺しにせうと云ふ事かな。

佐五　口助、われや、マア、どちら方ぢや。

太助　さう仰つしやる旦那は、どちら方でござりまする。

佐五　知れた事、熊太郎さま、宮内さまを、國の主にせうと思ふ、この佐五右衞門。

みの　そりやお前、僞はりでござりませうが。

佐五　なぜ。

みの　妹御に云ひつけて、元水どの、目が見えるか見えぬか試して見いとは、なぜ仰しやりました。

ト佐五衞門、殿の繪姿を出し

佐五　コレ、この繪圖に合うたらば、殺してしまはうと思うて。

ト太助も繪姿を出し

太助　爰にも持つて居りまする。繪姿に合うたらば、殺してしまはうと思し召す心ならば、なぜ今ぶち放してしまはつしやりませぬぞ。

佐五　それゆゑ其方に云ひつけて、殺せよと云ふに、殺さねば、わりや藏之助方ぢやな。

太助　すりや、この元水は藏之助か。

佐五　藏之助ならなんとする。

太助　熊太郎さまより繪圖を受取り、この繪圖に合つた者ならば、首切つて熊太郎さまへ渡し、御褒美にあづかり

侍ひ分の奉公いたしまする。

佐五　そりや僞はりぢや。その心なら、われがなぜ元水は殺さぬ。

太助　身共に云ひつけずとも、なぜお前の手にかけて、殺してしまはつしやりませぬ。

佐五　すりや、この元水は藏之助か。

太助　藏之助なら、なんとなさるゝ。

佐五　殺してしまへ。

太助　不義者の成敗するは兩人。一人はお主。殊に盲人。繪圖に盲人とは書いてはござりませぬぞや。

みの　人違ひして殺させ、その罪をかけうとなさるゝ事かえ。

きぬ　元水さんの目が見えれば、藏之助さまに極まりまするか。

太助　繪圖に合うたら、首打つ心かな。

佐五　其方が繪圖を持つて居るは、その繪圖に合うた藏之助を守り立て、國を治めさする心であらうがや。

太助　イ、ヤ、首打つ心。

佐五　然らば首打て。

太助　人違へして粗忽の首は、えゝ、打ちますまい。

佐五　すりや、藏之助ではない。誠の盲人か。

太助　サア、そこが詮議どころでござりまする。

佐五　詮議もせい、思案もせい。

みの　思案とは、なんの思案をな。

佐五　ハテ、兩人ともに親の敵、舅の敵を討たねばならぬ。身の上の思案せい。

宮内　その思案、身共が貸してくれう。

ト出る。

佐五　これは宮内さま。彼れ如きの下々の儀、お構ひは御無用に遊ばされませい。

宮出　イヤ〳〵、さうでない。下司下郎と云うて、捨て置かれぬ。禍ひは下からと云へば、捨ては置かれぬ。

みの　宮内さま、御思案をお貸し下されうとは、どう云ふ思案でござりまする。

宮内　ハテ、思案と云うて、餘の事でない。われとあの下郎めと、緣を切らすのサ。

みの　緣を切らすのとはな。

ト宮内、元水とおきぬが繩を解き

宮内　元水、おきぬ、わいらにも用がある。動くな。

元水　私しには、なんにも覺えはござりませぬぞ。

きぬ　不義ではござりませぬぞえ。
みの　ハテ、大事ない。默つてござりませい。
宮内　佐五右衞門、其方が家來のあの下郎めを、身共にくれい。貰ひたい。
佐五　すべて下郎は渡り奉公。その本人の心に依り、主取り致すもの。手前は成る程遣はしませうが、あの者が心入れをお聞きなされい。
宮内　下郎、わりや身共に奉公する氣か。身共が屋敷に奉公すれば、其やうに穢い態では置かぬ。侍ひに取立てくれる。なんと奉公する氣か。
　　　卜この間、宮内、煙草のみ居る。
太助　二人扶持に一兩二分、お定まりの扶持切り米。形なども見苦しい下郎めを、何ゆゑお望みでござりまするか。
宮内　其方がその容形の見苦しいところが、望みぢや。佐五右衞門、貰うたぞよ。
佐五　成る程、差上げまするでござりませう。コリヤ口助お望みゆゑ、あなたへ遣はす程に、アレ、一國のお大名樣ぢや。ナ身共などゝは違ふ程に、心を附けて奉公せよ。コリヤ、御奉公申す氣か。どうぢや。

みの　口助さま、お前はこの佐五右衞門さまの屋敷を離れ、外の屋敷へ奉公する氣かえ。
太助　あの宮内さまのお心入れならば、此方より望んでなりと、奉公いたしたい心。お旦那佐五右衞門さま、お暇下されませうならば、成る程、宮内さまへ御奉公申しませう。
佐五　ハテ、宮内さまへ御奉公申せば、其方も侍ひに取立てらるゝワ。すりや、立身すると云ふものぢやな。首尾よく奉公せいよ。
太助　畏まつてござりまする。イヤ、モウ、ずんと首尾よく御奉公いたしませう。
佐五　侍ひ分になる其方ならば、定めて宮内さまよりも、腰の物大小ともに下し置かれるであらうなれども、其方が侍ひにもならうと云ふ嗜なみの腰の物が見たい。佐五右衞門が前へ突き出し見せて
　　　卜太助、脇差を拔き、思ひ入れあつて、佐五右衞門とくと見て
太助　せいごう村正。覺えある業物でござりまする。
佐五　成る程、この嗜なみならば、さのみ奉公もしかねもせまい。何者ぞ、銚子杯持て。

腰元　アイ〳〵。
　ト銚子杯持ち出る。
佐五　口助、宮内さまと主從の杯せよ。
太助　畏まつてござりまする。
佐五　宮内さま、家來めは進上仕りましてござりまする。お杯をお遣りなされませ。おみの、其方も口助と由緣ある身ぢや。首尾よく奉公いたすやうに、世話してやれ。兩人來い。
　ト唄になり、元木、おきぬを連れ入る。
宮内　ハテ、佐五右衞門と云ふ者は、知れた事を長々と云ふ者ぢや。サア、口助、これへ來い。杯せうわい。
太助　ネイ。
　ト側へ寄る思ひ入れ、おみの、心遣ひあり
宮内　ハテ、怖い事はない。爰へ來いやい。
　ト太助、二重舞臺の下へ行く。
宮内　おみの、酌せい。
みの　アイ。
　ト銚子持ち行く。
宮内　注げ。
　トおみの注ぐ、宮内飮んで
口助、献さう。主從の杯。
　ト献す。口助、杯取る。おみの注ぐ。
待て、口助。肴せう。
　ト懐中より種ケ島出し、火繩を煙草盆の火にてつけ、口助に突きつけ
この肴で飮め。
太助　ハア。
　ト思ひ入れあり
宮内　イヤ、粗相はない。奉公始めに其方に云ひつける仔細がある。應と云へばよし、嫌と云ふと二つ玉。サア。應と云ふか。
太助　如何やうの儀でござりまする。
宮内　其方と云ひ號けのある、このおみのを口說いて、おれと女夫にせい。
太助　エ、。
宮内　嫌か應か、返答はどうぢや。
太助　すべて世の中の夫婦合ひの、退去りもならず、緣の切られぬと云ふは色と義理。ましてこの女と私しは、親親の云ひ號け致し置いたと云ふ事は、今日の只今承りましてござる所に、この女と此まゝに緣切りましては、

心の立ちませぬと申すは、色でなく義理でなく、緣切りましては、武士道の立ちませぬ儀がござりまする。この儀ばかりは御免なされて下さりませう。

宮内　ならずば斯うぢや。

ト種ヶ島を突きつけろ。おみの圍ひ

みの　成る程、お心に從ひませう。

太助　コリヤ〳〵、其方と身共が緣切つては、身共が心に立たぬ事がある。

みの　サア、わしもお前と緣切つては、心に立たぬ事がある。その上、斯うした事は、なんぼもある事。お前の方からあなたの心に從へと云はしやんしても、わしが嫌と云ふ筈のところを、わしが方からお心に從ひませうと云はな、アレあの飛び道具。お前の命が心元ないゆゑ、わしが方から心に從はうと云ふ、わしが心を推量して下さんせ。宮内さま、成る程、お心に從ひませう。

宮内　イヤ〳〵、口助が心得せぬうちは合點がゆかぬ。

みの　成る程、口助どのに得心させませう。

宮内　そりや何時。

みの　今この場で。

宮内　出かした。アレ、障子の内に、琴三味線の稽古。あの唄の切れぬうち、唄ひしまはぬうちに、口助に得心させい。

みの　心得ましてござりまする。

ト障子の側へ行き

申し、おきぬさま、元水さま、口助さまのあの堅いお心でござりまするゆゑ、ちつとは合點いたされますまい程に、隨分長う彈かつしやつて下さりませ。

ト障子の内にて調子合する。

琴の音の峰の松風通ふらん、いづれの便り調べ初めけん。

ト太助が側へ行き

ついにまだ、枕も交さず、まだ寐もせぬに、

トこれより沖の石の唄になる。とまだ寢もやらぬ手枕より、おゝなんとせうと唄ひ彈く。合ひ方になる。

みの　コレ、口助さん、こなさんに、わしが緣切つて下さんせと云ふはな、どうでお前とわたしとは。

太助　添はれぬと云ふ事か。サア、こなたにその心があるに依つて、添ひ遂げられはせねども、緣切つて別れてはどうも。

みの　立たぬと云ふ譯は、百日以前の今宵今日、お屋敷の

裏門の樋の口で、父さんかと思うて意見して、連れて戻らうと思うたりや、父さんではなうて知らぬ顔。

太助　身共とてもその通り。そんなら親人を手にかけたは其方。

みの　女のあられもない。

太助　すりや、身共が手にかけたは其方の親。

みの　云ひ號けばかりで、互ひに舅の顔を

太助　知らなんだが誤まり。

みの　親の敵、舅の敵は、お前もわしも

太助　過去生々の約束事。

みの　サア、爰を思うて、わしが云ふ事、聞いて下さんせいなう。

トまた唄になる。悲しみの涙はいとゞより、深き思ひの淵となるまで、彈いて、また合ひ方になる。

太助　すりや、其方はあの宮内どのゝ、心に從ふ氣か。

みの　ハテ、斯うなつたりや、せう事がないわいな。

宮内　ハレ、長い唄ぢやなア。どうぢや、おみの、まだ口説は合點せぬか。

トこの間、宮内、始終種ヶ島を突きつけて居る。

みの　ハテ、お忙しない。まだ沖の石の唄がしまひもせぬに。申し、お二人ながら、隨分合の手を長う彈いて下さりませいえ。

太助　昔唐土秦の代荊軻。秦の始皇を討たんと謀り、咸陽宮に登りしところに、夫人の琴の音に聞き入りしその例し。七尺の屏風も、躍らばなどか越えざらん。

みの　羅綾の袂も引かば、などか、切つて下さんせ〳〵。緣切つて下さんせ。

ト疊かけて云ふ。

太助　親々が非業の死、元の起りは、

ト行かうとする。種ヶ島突きつける。おみの圍うて

みの　太刀取りよりは、繩取りが恨めしいと

太助　その恨みある者の、心に從ふか。

みの　サア、その從ふが身の爲、第一お前の爲、我が身の爲より人の爲な。人の爲とは、ハテ、人偏に爲と云ふ字は僞でない、わしが心底。あなたへ見せて、お心に從ひますわいなう。

太助　エヽ、女ながらも、エヽ、憎い女ぢやなア。

トまた唄になる。見るにつけ聞くにつけより、袖も乾かぬ沖の石としまひまで唄ふ。

宮内　唄しまうたか。

みの　サア、口助さん、お前が合點さしやんしたりや、あなたへさう云はしやんせ。
太助　お聞きの通り、下郎めも思ひ切りまして、お望みの女、差上げませう。
宮内　出かした。寐よう、床取れ。
太助　エヽ。
宮内　口助、其方が女房と、爰で寐る。寐所せい。
ト太助氣味合ひあり、おみの留めて
みの　口助どの、寐所せいと仰しやるぢやないか。
太助　ネイ。
ト太助、蒲團持ち出て敷く。この間、始終種ケ島突きつけ居る。
宮内　枕も二つ取つて來い。
太助　ネイ。
ト枕取りに行く時、床の花活を見、思ひ入れして枕二つ並べる。始終この間突き廻すこなし。宮内、蒲團の上へ上がり、
宮内　おみの、爰へ來い。
みの　アイ。
トうぢ／＼する。太助、立たうとする。

宮内　口助、おのれはどこへも行かずと、そこに張り番して居れ。
太助　ネイ。
宮内　おみの、爰へ來いやい。
みの　アイ／＼。
トうぢ／＼する。
太助　ソレ、お寐間へ來いと仰しやる。
みの　アイ。
トうぢ／＼、おみの蒲團の上へ上がる。
宮内　眞實わりやおれと寐るか。
みの　アイ。
宮内　我が身の爲、人の爲。人偏に爲と云ふ字は、僞と云ふ文字の割り。わりやいから物識りぢやわいやい。
トおみのを抱へる。この間、太助、花活の水を種ケ島へざんぶりとかける。
宮内　ヤア、これは。
太助　飛び道具の火が消えたりや、千人力ぢや。
ト尻からげる。おみのも脇へ退く。
宮内　下郎め、こりや何ひろぐ。
ト尻からげる。

太助　下郎々々と舌長な。下郎の魂ひ一國のお大名の魂ひも、別に替つた事はない。一寸の蟲にも五分の魂ひ。

みの　蚤の息が天へ登るわいなう。

宮内　よい／＼。具足櫃の内に忍ばせ置いた、川立川右衞門參れ。

　ト具足櫃を打返す。川右衞門の死骸出る。

みの　オヽ、その川立川右衞門に逢はさうか。

宮内　ヤア、此奴は、こりや、くたばつたか。よい／＼鵜の目鷹右衞門參れ。

みの　オヽ、その鷹右衞門にも逢はさうか。

　ト疊を上げる。鷹右衞門が死骸出る。

宮内　此奴もくたばつたか。よい／＼、堅田佐五右衞門參れ。

佐五　ハア。

　ト佐五右衞門出る。

宮内　佐五右衞門、此奴が身共に手向ひする。ぶち放してしまへ。

佐五　こなたへ遣はしたりや、こなた樣の家來ぢや。主の威光で、如何やうともなされませい。

宮内　そりやわれは惡いぞよ。もうおれには構はぬ氣か。最前われが熊太郎と、おれとは、日月ぢやと云うたぢやないか。

佐五　サア、爰が日蝕月蝕の眞只中ぢやわいの。

宮内　そんなら、おれを殺さす心か。

　ト佐五右衞門、最前の魚の中の狀を出し

佐五　それ御覽じ。殺してしまへとある。熊太郎さまよりの御狀。

宮内　もう是非に及ばぬ。

　ト切りつける。口助と兩人、見事なるタテさま／＼あつて、宮内を殺す。

みの　出かした／＼。

太助　我れ／＼親どもが非業の死は、元彼れが惡事から事起る。その禍ひの根を絕つたれば、日本晴れがしたわいやい。

佐五　篠田玄水、妹きぬ、兩人ともに參れ。

　ト元水、おきぬ出る。

元水　御用でござりまするか。

佐五　口助おみのこの兩人の者、最前も云ふ通り、其方達兩人へ預ける。殊に一人は盲人、心を附けて、先途を見屆けてやりやれ。

きぬ　そんならわたしも、

佐五　勘當ぢや。親兄に見替へた、思ふ夫に添ひ居らう。

きぬ　エヽ、忝ない。

太助　然らば、先づ一旦、この場は立退きませうか。

佐五　最前主從の緣切つた其方。心任せにせい。

みの　そんなら一緒に。

佐五　オヽ、一緒に立退き、敵討ちせい。

みの　敵討ちせいとは。

ト佐五右衞門、脇差を拔き、おみのが手に持ち添へさせ、太助が持つて居る刀、我が手に持ち添へさせ、

佐五　親の敵、覺えたか。

トおみのに、太助が脊中を切らせ、太助におみのが帶を切らす。口助が脊中より寶の兜出る。おみのの帶より綸旨出る。

元水　こりや、家の重寶の兜と綸旨。

佐五　何を盲人の見なして、それがほんの盲目の垣覗き。其方達兩人、身共が屋敷へ參るより、身が屋敷の家の棟に、靑雲棚引き雲起る。これ重寶の集まるところと、心が附いたわいやい。

みの　すりや、これで敵討も、濟みましてござりまする。

佐五　敵と狙ふ敵も敵、双方五分々々。隨分仲よう添うたがよいぞ。

兩人　エヽ、志し忝ない。

佐五　志しとは何事。其方達に志しを盡す、佐五右衞門ではないわいやい。

元水　とても の事に、藏の內の內膳さまを、お供いたしたうござりまする。

ト佐五右衞門、太助、元水を門の外へ突き出し、門を閉める。おみの、おきぬ、佐五右衞門が側へ寄る。

佐五　高聲に云ふな。藏の內には番があるぞ。熊太郎さまへ味方したこの佐五右衞門。藏之助方の者に詞は交さぬぞ。

みき　エヽ。

ト佐五右衞門、本舞臺へ來る。兩人附いて來る。佐五右衞門、眞中に立つ。おみの、おきぬ、兩方へ來る。

佐五　ハテサテ、今宵は騷がしい。さま〳〵の奴がうせたワ。

きぬ　兄さん、わしは。

みの　なんと致しませうぞ。

ト佐五右衞門、物云はずに、紙入れより藏の鍵を出

し向うへ抛る。おみの取つて、藏の方へ行かうとする。

佐五　コリヤ〳〵、おみの、妹、今宵は殊の外騷がしい夜ぢや。コリヤ、門前へ出て、最前の奴等兩人は、歸つたか見て參れ。

トおみの行かうとする。

コリヤ〳〵、女の其方達、心元ない。コレ、この飛び道具を。

ト火繩に火を附け、おみのに持たせ、

紛らはしき奴等があらば、擊つて捨てい。紛らはしき奴等を。

ト藏の方を敎へる。

みの　心得ましてござりまする。

ト門を明け出る。右のうち表に居る。元水、太助、門へ耳當てゝ聞いて居る。おみの、種ヶ島持ち、表へ出て、藏の鍵も見せて躁く。太助が肩を踏まへ、元水、門の上へ上がる。太助は花道の門の所へ出て、兩人鐵砲構へて狙ふ。內にて、佐五右衞門、床几に腰かけて刀を杖に突き居る。兩人鐵砲構へる、ト佐五右衞門、陣太鼓を打つ。藏の內より番の侍ひ兩人、額出し

侍二　御用でござりまするか。

ト元水、太助、一時に鐵砲放す。藏の窓より額出した侍ひ、額出しながら死ぬる。元水、門より飛び下り、太助、元水、おみの、おきぬ、四人、內へ入る。佐五右衞門腰掛け、刀を杖に突いて眠り居る。太助、藏の錠を明ける。元水、內へ入り、內膳を連れ出る。四人差足して、佐五右衞門が前を通る。佐五右衞門、目を明き見る。四人、兩方より詰めかける。佐五右衞門見て

佐五　ハレ、變つた夢を見たなア。

ト幕

三段目　高安館の場

役名――高安後室、桂壽院。同一子、龜千代丸。唐醫、漢林齋。鷺山右大辨實ハ奴林平。彈正妹、笹の井。小姓、詠みと歌助。野川久太夫。下女、お種。大鳥平馬。春藤帶刀。同妹、浪の戶。同女房、久野谷　假名實貴のおべく。

造り物、和泉の國高安の屋敷なり。正面、金襖、二

重舞臺、枝折り門、臆病口も橋がゝりも一面の屋形、城の體。琴唄にて、幕明く。
奥より後室桂壽院、大島平馬、衣裳上下にて出る。

平馬　後室桂壽院さまへ申し上げまする。今日はお家の御代續ぎ、龜千代さま、繼目の御參内、首尾よく相濟み、都より御入部の御知らせ。如何ばかりおめでたう存じ奉りまする。

桂壽　大島平馬、其方とも覺えぬ今の詞。先御臺の腹に出生した龜千代が、この高安の家を納める繼目の參内。何がめでたい事がある。今日この國へ入部すると云ふ知らせを聞くと、自らは癪の蟲が、もんどり立つ程嫉ましいわいの。

平馬　御尤もでござりまする。

桂壽　憎い繼子の龜千代が入部より、兎角自らは、里の娘が來るのを待つて居るわいなう。

ト云ふうち、橋がゝりより木遣りの聲する。

平馬　ハレ心得ぬ。あれは何事でござりまするな。この屋敷へ大勢の女の聲にて、今の木遣り。モシ、お上より仰せつけられましたかな。

桂壽　オヽ、不審尤も。あれは自らが云ひつけぢや。氣遣ひしやんな。

ト鳴り物、三味線入り囃子になる。と橋がゝりより、笹の井、襠裲衣裳にて出る。腰元、小姓、局、地車に紅梅色の石を載せ、綯ひ交ぜの引綱にて曳き出る。後より、浪の戸、局、扇をかざし、木遣りにて出る。囃子止む。

平馬　オヽ、見ればこの河内の里に、年經る業平の舊跡の、紅梅石を車に載せ、場内へ引いてお來やつたが、彈正が妹の笹の井、帶刀の妹浪の戸、樣子はどうぢや。

浪戸　これは〳〵、平馬さまの御不審、御尤もでござりまする。シタガ、この河内の國高安のお家の御家老樣には、似合ひませぬお咎めでござんす。都加茂の岩本の神と云はれ給ふ、好色の守り神、業平朝臣の舊跡。あの紅梅石を、これへ引きましたは、戀の願ひでござんすわいな。

桂壽　ムウ、その紅梅石を引けば、戀が叶ふと云ふ事は、この家の後室にまでなつた自らなれども、知らぬ程に、樣子を云うて聞かしやいの。

笹井　お恥かしい事ながら、戀の願主と申しまするは、この笹の井でござんす。わたしもこの國の者でないに依つて、業平の紅梅石を引けば、思ふ戀が叶ふと云ふ事、そ

れで皆を頼んで、爰まで引いてもらうたのでござんす。
局一　笹の井さんが惚れた殿御と、女夫になるやうにとあつて、こちらをお頼みなされますのぢやわいな。
局二　わたしらも、思ふ戀人の出來た時の爲ぢやと思うて、それで笹の井さんに力を添へて、引いて來たのでござんすわいな。
平馬　身が屋敷から、爰まで凡そ十丁餘り、殊に笹の井、御身は大和の國飛鳥の家の、彈正の妹、外ならぬ家筋とて、後室樣のお招き。この野瀨に逗留のうちに、見初めての戀か。先づその惚れたと云やるは、何者ぢや。
浪戸　平馬さん、それがあの笹の井さんの口から、どう名指して云はるゝのもぢやぞいなア。この家中で幾萬人か知らねども、あの笹の井さんの戀人を、取持つてくれいと頼まれて居るは、この浪の戸でござんすわいな。
笹井　昔在原の業平朝臣、平岡の神に詣で、この高安の里へ來て、丁度わしがやうに、小板屋の內より、硯の水を汲みに出た娘を見付けて、それからの河內通ひ。
浪戸　昔と今と品こそ變れ、變らぬ物は、その小板屋の娘の硯の水を汲みし古跡は、戀の水と云うて、今に殘りて在原の昔語り。
笹井　業平朝臣の合圖の笛を、調じ給ひし所に、一本の松の殘りて、今に笛吹きの松と名に呼びて、
浪戸　やんごとなき雲の上人、女の元へ夜な〱通ひ路。奈良の京より、只一人雪の夜も、風の夜もいとはで通ふ戀衣、夜露に濡れし紅梅色の狩衣を、この石にかけて、乾すてふ色も香も、この石に留まりて、この如く紅梅色に染まりしゆゑ、紅梅石とも又、衣掛け石とも申しますといな。
笹井　それゆゑこの石を、思ふ殿御の在ます所へ引けば、戀の願ひ成就と聞きましたに依つて、後室樣へ憚りも顧みず、引きましてござんす。何事も、お免されて下さりませいえ。
桂壽　そんなら笹の井、其方が戀人は、この館の內にあるの。おれが贔屓に思ふ彈正が妹ゆゑ、何事も聞き流してやるぞや。
浪戸　エヽ、有り難い後室樣のお詞。笹の井さん、お前の戀はわたしが取持つて、叶へて進ぜますぞや。
笹井　ほんに、これと云ふも後室樣のお情。有り難う存じまする。
ト橋がゝりより侍ひ一人出て

侍ひ　申し上げまする。漢林齋と申す醫者、お召しに依つて登城いたしたと申しまするが、これへ通しませうかな。

平馬　オヽ、その漢林齋、お上にもお待ち兼ね。早く御前へ連れて參れ。

侍ひ　畏まりました。

ト入る。と漢林齋、唐醫の形にて、家來に結構なる壺を持たせ出る。右の壺、目通りへ直す。

平馬　唐土の醫者漢林齋、お上より仰せつけられし秘藥の油、持參いたされたか。

漢林　すうらんふくめい、これちよぼいちゆう、かいめんびんつうずう、いつぱらぱい〳〵。

女形　アレマア、何を云ふ事ぢやぞいなア。

平馬　アコレ〳〵女中方、何を笑ふのぢや。あの漢林齋は唐土金れうと云ふ所の醫師なれども、十ヶ年ばかり以前より、日本へ渡り、唐船着岸の地なれば、今は當國堺に住んで、日本の詞も、よく聞分け申すぞ。必らず粗忽云はれな。

浪戸　先達てお上のお噂で、聞き及んだ漢林齋どの。今のやうに唐音で云はしやつては、後室樣にも御合點がゆくまい。さつぱりと日本の詞で申し上げさつしやれ。

桂壽　イカサマ、委細は先達て、あの平馬の披露で聞き屆けて居る。目通りへ直させたこの壺が、自らが云ひつけた金ゑきの油か。

漢林　ハア、その器に籠め差上げましたが、人皇六十三代、三條の帝の御時、始めて日本へ渡りし、金ゑき油と申します秘藥の油。お望みに依つて、金れうの漢林齋が、獻じ奉りまするやうにござりまする。

平馬　お家にさして由緒もなき漢林齋。早速御用の秘藥、獻上いたさるゝ事、恩賞はキッと御沙汰に及ばう。先づ御前を立つて休息召されい。

桂壽　ソレ、漢林齋を奧へ伴ひ、馳走せい。

皆々　斯うお出でなされませ。

ト漢林齋、奧へ入る。浪の戸、笹の井も入る。と侍ひ出て

侍ひ　申し上げまする。在所者と見えまして、女兩人、後室樣へ直に御目にかゝりたいと申して、これへ通りますやうにござります。

平馬　在所者と見えて女が二人。

ト桂壽院と顏見合せ

そりや幾つばかりの者ぢや。
侍ひ　十八九なる女、一人は殊の外の大馬鹿と見えまする。
當途もない事を申しまする。
桂壽　ハレ面妖な。
ト幕の内にて「下がれ〳〵」と云ふ。
侍ひ　アレ〳〵、モウ〳〵あれへ參りました。
ト敦賀のおべく、稻荷樣の形にて、風呂敷包み脊負ひ出る。奴二三人付き出る。
侍ひ　コリヤ〳〵、待て〳〵女。何所までうせる。下がり居れ〳〵。
ト口々に云ふ。
べく　バア、。
ト人形の首を出して奴に見せる。
侍ひ　大馬鹿め。何をひろぐ。馬鹿盡すと縛し上げるぞ。
べく　滅相な事しやつたら、また彳に噛ますぞ。
ト人形を出す。
武藏坊辨慶は、安宅の關守欺きし、例しも斯くやと門番を、押退け〳〵通りしは、凄まじかりける次第なり。
ト人形廻す。
侍ひ　默つて居れば方途もない奴の。

べく　ト睨み、反り打つ。
顏を顰めて睨みしは、哀れにも又いぢらしく。
侍ひ　イヤ、此奴は持ちも提げもならぬ馬鹿だ。
べく　コレ、あなずりやんな。おれが父さんは、智惠がぶつぷつと鞘走つた。父さんに智惠がどがつきがしたに依つて、ちつと無理が出來て、わしは足りぐろしいと云はんした。なんと、しやつとでも云うて見や。
侍ひ　細言吐かすと免さぬぞ。門外へ出をらぬか。
べく　出やらざ、耳引かう〳〵。
ト奴の耳を引いて廻る。
平馬　コリヤ〳〵、中間ども、御前ぢや。鎭まれ〳〵。
べく　鎭まれ〳〵。
平馬　不調法千萬な。心密かに尋ぬる事を、嵩高な。扣へて居らう。
べく　扣へて居らう。
侍ひ　ハア。
ト皆々下に居る。
べく　わあい、叱れたわい。よい氣味の。
ト笑ふ。また奴睨む。
べく　アレ又、睨むぞえ。

平馬　まだか。
　ト奴を叱る。
べく　重ねての爲ぢや。グッと云うて置かしやんせ。
平馬　オヽ、えい〳〵。在所者なれば、勝手を知らぬ筈。此方も少と在所者には、心當りの事がある。怖い事はない。身が側へ來い〳〵。
べく　油斷は致さぬ。其やうに云うて、わしを側へ近寄せて置いて敵からと思うて。マア、さうはえゝ致さぬ。
平馬　ハテサテ、廻り氣な。怖い事はないわサ。爰へ來いサ。
べく　そんなら、その手に持つて居さんす脇差を、ズッとあつちへえんにんさんせ。
平馬　斯うか〳〵。
　ト下に置き、脇へやる。
べく　まだ、ま一本殘つてある。それも〳〵
平馬　ハテ、むづかしい。
　ト大小ともに下に置く。
桂壽　どうなりとして、樣子を問うて見やいの。
平馬　サア、爰へ來いサ。
　ト下に居る。

べく　そんなら今行くぞえ。油斷さんすな。ソレ〳〵。
　トばた〳〵と走り行き、下に居る。
平馬　今一人連れがあると云ふが、その女はどうした。時に、なんでござんす。
べく　サイナア。わしらは敦賀の者ぢやわいな。父の屋敷の婆さんが、尋ねにおこさんしたげな。それで折角來てな。門を入らして下んせと云うたに、男の卑怯な、よう入れさんせぬ。入れう入れまいのせり合ひぢやわいな。
平馬　鎌介、今一人連れの女があると云ふが、さうか。
侍ひ　イヤ、さうではなささうにござりまする。
平馬　何を吐かす。なんの事か、樣子が知れませぬ。今一人の女を尋ね出して、これへ連れて參れ。
侍ひ　ハア。
　ト云ふ所へ、お種、走り出る。
たれ　オヽイ〳〵、おべくさん〳〵、爰にかいな。とつとあんまり叱れたに依つて、廣いお屋敷ではあり、見失うたわいな。
平馬　コリャ〳〵女。其方は、この女の連れぢやな。
たれ　アイ、左樣でござりまする。
平馬　名は何と云ふ。

たれ　わたしはお種と申しまする。
べく　我れらはおぬく。
たれ　なにを。おべくさんと申しまする。あのやうに愚かしうござりまするに依つて、在所の衆が、おぬく〳〵と申します。
べく　そりや隱すこつちやわいな。
桂壽　親の名を問へば、ツイ知れるわいの。
平馬　イカサマ、コリヤおぬく、其方の親の家名は何と云ふ。
べく　心月道榮信士と云ひやんす。
たれ　なにを。そりや戒名ぢやわいな。
べく　それでも、戒名云へと云はんすもの。
平馬　イヤサ、戒名ではない家名の事サ。
べく　なんぢや……け……ハ、、、イエモウ、死なれました。自分に棺桶を覗いて見たりや、毛はござりませなんだ。ずんぼろぼんと剃りこぼつて、葬禮いたしました。
平馬　ハ、、、こりやハヤ、看板を打つたおぬくで埒が明かぬ。
べく　ちつとさうもあるまいて。

平馬　そちらの女、其方は知らぬか。
たれ　わたしは敦賀へござんしてからの懇ろ合ひ。あのおべくさんが出世して、ほんの母御さんの所へ行かしやんすと云うて、わたしは供に雇はれて參りました。あのお人の父御は、元播磨の姫路ぢやげにござんす。
べく　きつい水で難儀したぞい。
たれ　ほんに、きつい洪水で、畑も流れたげにござんす。それから近江の隣村に近付きがあつて、尋ねて上らしやんした。兼ねて話しに聞けば、親御さんの名は、岡村嘉一兵衞さまと云ふ名。
べく　わあい。そりや生きて居る時の名ぢや。
たれ　サア、それをお尋ねなさるゝのぢやわいな。
べく　生きて居る間が嘉一兵衞。死んだ所が道榮信士、最後物語り、あら〳〵斯くの通りでござりまする。
桂壽　ヤア、そんなら其方が岡村嘉一兵衞へ、養子にやつて置いた、おれが娘か。
べく　アレエ。
ト逃げて、お種が後へ隱れる。
平馬　ヤレ〳〵、おめでたや。この間から、殊ないお待ち兼ねでござりました。サア〳〵、あれへお越しなされませ

桂壽　ちつと爰へおぢやいなう。おべく／＼／＼。
べく　ばあゝ。
ト　お種が後より顔出す。
たね　コレイノ、あなたは、お前の眞實の阿母樣ぢやといの。
べく　それでも、ついに近付きにもなりませんもの。
平馬　二つや三つでお別れなされたもの、なんの覺えがあらう。モシ、おべくさま、眞實の母御樣に、逢ひはござりませぬ。ちやつと物仰しやれ。
べく　それでも、氣味の惡い顔ぢやもの。
桂壽　ヤレ、ちつと側へ來てくれいやい。
べく　そんならお前は、ほんぽに、ほん／＼の母さんかえ。
桂壽　オイヤイ。
たね　ちやつと側へ行かしやんせいな。
べく　そしたら母さん。
桂壽　ヤア／＼。
べく　母さん、乳が呑みたい。
ト　取りつき泣く。
桂壽　ヤレ／＼、大きうなつてくれたなア。小さい時は、凛々しい顔であつたが、うとましや、どうして此やうに未通女なぞいやい。それが猶可愛いわいやい。
ト　浪の戸、出て
浪戸　先刻から承りますれば、後室樣の里の姫君樣のお入り。今日はお家の御代繼ぎ、龜千代さまの御入部遊ばす折から、重ね／＼、おめでたう存じやす。
平馬　浪の戸の申さるゝ通り、吉事も重なれば重なるもの。今からはお前は、姫君樣でござります程に、左樣に思し召されませい。
桂壽　平馬、姿が見苦しい。ソレ、小袖を云ひつけてたも。
平馬　畏まりました。
桂壽　コレ、家中の者どもは、皆其方の家來ぢや。さう思や。
べく　そんなら今からお姫さんかえ。あの奴めが叱りやせぬかえ。
べく　ヤイ奴よ。
平馬　家來でござるわいの。
侍ひ　ハア。
べく　お姫さんぢやぞよ。門を出たり入つたりしても、云

ひ分はないか。
侍ひ　ハア。
べく　きついものぢや。人形廻しするなら、相手になるか。
侍ひ　ハア。
べく　きついもんぢや。さうしたら母さん、わしが云ふ事は、なんでも聞いて下さんすかえ。
桂壽　オヽ〳〵、どのやうな事でも、聞かいでなんとせう。なんぞ〳〵。
べく　母さん、ちよつと其所へ出てもらひやんしよ。
桂壽　なんぢやぞいやい。
べく　下に居てもらひやんしよ。
桂壽　下に居たが、なんぢやいやい。
べく　別の事でもござんせぬが、へヽ、をかしいこつちや。
ト恥かしがる。
平馬　なんなりとも、御遠慮なしに仰せられませい。
べく　さうしたら云ふぞえ。
桂壽　云やいの。
べく　アノナ。
桂壽　アノナ。
べく　アノ〳〵〳〵。
桂壽　オヽ、なんぢやいやい。
べく　わしはな、可愛い人さんがある。嫌な奴の。
ト恥かしき思ひ入れして笑ふ。
平馬　お前も誰れぞに惚れさつしやりましたか。
べく　ちつとばかり。嫌な氣味ぢやて。
ト皆々笑ふ。
桂壽　コレ浪の戸、愚かなやうでも、あんな賢こい事云ふわいの。
浪戸　さうして、その戀人は、どなたでござりまする。
べく　誰れぢやしらん。
浪戸　ハテ、滅相な。惚れた人を知らぬとはえ。
べく　サア、惚れたは惚れたけれども、何所の人やら、知らぬ人に惚れた。
平馬　當途もない惚れやうぢやな。
桂壽　マア、惚れたと云ふは、どのやうなが惚れたと思うて居るぞや。
べく　惚れたのかえ。惚れたのはな、その人の顔を見たりや、首筋へ寒い風が吹いて、體がぴこ〳〵として、を

かしい氣味合ひぢや。

桂壽　イヤモウ、皆の手前も面目もない。親の前でも遠慮なしに

べく　廣げてさしやれ紅葉傘。

平馬　何を仰しやるやら、なんとも氣の毒千萬な。

桂壽　氏より育ちとは、よう云うたものぢや。幼ない時から武家の作法格式は、見た事もないもの。道理〻〻。幸ひ、あのおべくが介添には、浪の戸、其方を云ひつけたぞ。

浪戸　イヤモウ、その儀は御辭退申し上げませう。

平馬　そりやどうぢや。其方も春藤帶刀が妹でないか。

浪戸　左樣ではござりますれど、不調法な私しなれば、あのおべくさまの介添のお役目は、お免されて下さりませ。

べく　コレ、女中さん。搔取りはむづかしい事はないぞえ。ツイ斯うさんせの。

ト褄を取る。

桂壽　イヤモウ、あのやうに早合點が阿房の癖。是非共其方を賴む程に、粗相のないやうに、萬事引廻してくれいよ。

浪戸　これは〳〵、有り難いお詞でござりまする。畏まりました。申しおべくさま、私しは浪の戸と申しまして、今からお前の家來。只今あれに居られまするは、家老平馬どのでござりまする。

べく　オ、桂馬、宗慶の弟子かの。

浪戸　オヽ笑止、何を仰しやるやら。

桂壽　おべくを迎ひに、野川久太夫と云ふ侍ひをやつたが、何ゆゑ、久太夫は、これへ供をせなんだ。

たれ　成る程、その久太夫さまと云ふお方が、尋ねて見えまして、爰へ參りまする道すがら、頓死してでござんした。

桂壽　ヤア、なんぢや。久太夫は死んだか。それには、よう爰まで尋ねて來た事ぢやなア。

たれ　あのやうな愚かしい、おべくさんのお供をして、長の道中、御推量遊ばして下さりませ。

べく　きついわしが世話いなア。

浪戸　何を仰しやるやら。道理でござんす。今からわしが代つて、お世話申しまする程に、ちつと助からしやんせ。

たれ　そんならお前を賴みまする。

べく　ドウレ。
二人　何仰しやるやら。
べく　それでも、頼みますと云ふに依つて、ドウレと云うたのぢや。
浪戸　そんな事では、後に若君樣龜千代さまへ御對面の時、恥をお掻きなされうぞえ。
桂壽　サア〳〵、其所を頼む程に、浪の戸、おれが娘らしう、指圖して、詞少なに挨拶をさしてくれいよ。
浪戸　アイ〳〵。さうしたら、歌をマア一首覺えさしまして置きまするでござりませう。
平馬　如何にも〳〵。それがよからう。
べく　歌かえ。歌なら習はいでも、わしやよう覺えて居るぞえ。
桂壽　そりや大方古歌であらう。
べく　イヽエ、白雪の歌でござんす。しかも富士の白雪の歌ぢや。
浪戸　富士の白雪と仰しやれば、山邊の赤人、田子の浦に。
べく　イヤ〳〵〳〵、そんな歌ぢやない。
桂壽　イカサマ、富士の雪とあれば、古歌はたんとある。

ドレ、吟じて聞かしや。
べく　富士の白雪ほやれほ、朝日に解けるえ、解けて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧の水。
　ト唄ふ。
桂壽　云はして皆けば、取り所もない。おぬくではあるわいの。
浪戸　その歌ではござりませぬ。後に若君樣へ御對面の時今の御挨拶は止しにして、私しが云ふ歌を覺えてお詠みなされませえ。
べく　そんなら、その歌、ちやつと敎へて見て下さんせ。
浪戸　八重一重、九重とこそ思ひしに、我が故鄕に匂ふ梅が香。
　ト繰り返し吟じる。
べく　ヤイ人よ。
浪戸　ヤイ人ではないわいな。八重一重、九重とこそ思ひしに。
べく　八重一重、九重とこそ思ひしに
浪戸　我が故鄕に匂ふ梅が香。
べく　我が振り袖に匂ふ毘沙門。
浪戸　エヽ、そつけもない。匂ふ梅が香でござりますわいな

ア。よい〳〵、萩大名のやうに、仕方で物に准へて、覺えさしまるすでござりませう。マア、八重一重と云ふ時にな、指を八つと一つと、お目にかけませう。八重一重。

べく　ト仕方する。八重一重。よいワ。

浪戸　九重とこそと云ふ時には、帶を廻す眞似を致しまする。

べく　合點ぢや。

浪戸　思ひしにと云ふ時の仕方は、どうであらうな。

平馬　ハテ、思ひしなら、重石を持つた身振りがよい。ト石持つて歩く眞似する。

思ひしに。

べく　思ひしに。ト同じく身振りする。

浪戸　我が故郷にと、輪をかいてお目にかけませう。故郷は袖を振りませう。匂ふと云ふ時は、香をきく眞似を致しませう。梅が香と云ふ時には、お庭の梅の立ち木を教へますぞえ。

べく　合點がいた。覺えて居る。

浪戸　早合點が合點が參りませぬ。精出して歌をお覺えなされませ。歌の德には、目に見えぬ鬼神も柔らけき心に、叶はぬ戀も叶ふが、歌の德でござりまするぞえ。

べく　そんなら歌を覺えると、戀が叶ふかや。母さん、精出して歌覺えやう程に、今云うた人と、女夫にして下さんせや。

桂壽　オ、、そりやおれが、よいやうにする。マア〳〵、奧へ行て小袖着替や。

べく　そんなら、ほんぼに女夫にして下んすかえ。

桂壽　オ、、可愛い其方に、なんの嘘を云はうぞいやい。奧へ行て待つて居や。

べく　嬉しい事ぢや〳〵。母さん、騙しぢやないかえ。

桂壽　なんのいやい。ちやつと奧へ行けいやい。

べく　嬉しい事ぢや、母さん。

桂壽　なんぢやいの。

べく　老人、後に逢はう。唄になり、皆々入る。後室と平馬殘る。

桂壽　平馬、あのやうな愚かしい娘なれども、血を分けた子なれば、この家が、あの里の娘おべくにやりたい母が念願。兼て其方と諜し合した通り、萬事ぬかりはあるま

いの。

平馬　何がさて、惣領の藏之助どのは、他家へ養子に遣はされたなれども、傾城狂ひで取り所もないたわけ者。その弟龜千代どのは、この高安の家の世繼ぎと極まり、繼目の參內、首尾よく相濟んだとは云へ、兼ね〲大宮の宰相どのと、申し合せ置いたれば、先達て綸旨は、此方の手に入る。今は家老春藤帶刀が、龜千代どのをお供して歸ると、罪に取つて落す謀り事。お目にかけませう。

ト平馬、あたりを見て、枝折り戸を締める。

桂壽　それは嬉しい。繼子の龜千代、家老帶刀を殺しさへすれば、綸旨はおれが手に入れ、思ひの儘ぢや。

平馬　奴時平、參れ。

ト「ハア」と奴時平、花道より出る。

時平　御用でござりまするか。

平馬　後室樣、この者は時平と申しまして、大宮の宰相さまの、草履取りでござりまする。兼ねて此方の味方でござりまする。お近付きにおなりなされませ。

桂壽　これは〱、大宮の御家來、時平とは其方の事か。萬事家老平馬を以て頼んだ通り、首尾よう仕負せさへすれば、褒美は望み次第ぢやぞ。萬事頼んだぞ。

時平　ナイ〱、數なりませぬ時平と申す奴ではござりますれども、大宮どのに仕へ居りますれば、堂上の事は粉にして呑んだ程、存じて居りまする。お氣遣ひなされまするな。

平馬　後程これへ、あの時平を勅使に仕立て、差越しまする。先達て大宮どのゝ、盜んで遣はされた御綸旨。暫らくあの者にお預けなされませ。

桂壽　成る程〱。御綸旨は肌身も離さず、この桂壽院が持つて居る。

ト桂壽院、綸旨を出し、時平に渡す。

時平　御綸旨慥かに預かりました。

ト懷中する。

平馬　奴時平、委細は申し合はした通り、ぬかるまいぞ。

時平　合點でござりまする。

平馬　行け。

時平　ハア。

ト橋がゝりへ入る。

平馬　家來ども、參れ。

ト「ハア」と侍ひ二人出る。

面倒なこの石。身が屋敷へなりと引いて置け。

侍ひ　畏まつてござりまする。

卜石を引いて橋がゝりへ入る。とめでたき太鼓謠になる。と向うより、龜千代、若殿の形。後より、春藤帶刀、家老にて、綸旨の箱を提げ、侍ひ付き出る。

桂壽　龜千代丸繼目の參內、首尾よう叶ひ、道中堅固にて入部召されて、一家中の喜び、母が嬉しさ。これと云ふも家老帶刀、いかい心遣ひであつたなう。

帶刀　これは冥加に叶ひました、後室樣のお詞。禁廷のお首尾よろしく、繼目の御參內相叶ひまして、高安の家萬萬歲と、如何ばかり大悅に存じ奉りまする。

龜千　私しは藏之助さまを差措き、この高安の家を繼ぐ、望みはさら〳〵ござりませぬ。なれども一家中の勸めゆゑ、繼目の參內を相勸め、歸國いたしましてござりまする。

平馬　これは〳〵、古への伯夷叔齊も、恥づる程なる龜千代さまの御發明。偏へにお後見帶刀どのゝ、仁義の正しきを手本となされて、今の如き若君の御一言。驚ろき入りましてござりまする。

帶刀　これは〳〵、平馬どの、痛み入つたる御挨拶にあづかりまする。

平馬　ナニ、何れも、若君への今日の獻上物、繼目參內の折柄の吉例に任せて、家中より差上ぐる品々。御披露召されい。

卜「アイ〳〵」と腰元、局、名酒の德利を持ち出る。また生鯉の鉢などを持ち出る。小姓歌助出る。

歌助　この付け札に、生駒山と銘のござりまするは、春藤帶刀さまの奧方樣より、獻上でござりまする。

帶刀　いつとても、この河內のお家繼目の御祝儀に、私しが家に、生駒ヶ嶽の靈水を以て酒を造り、生駒山と名付け、差上げる事、御先祖高安長者信道公よりの、吉例でござりまする。

局一　次の銘酒は、當國壺井の水を以て、造りたる德命酒、これは卽ち大鳥平馬さまの獻上でござりまする。

平馬　あの酒に、德命酒と名を致す事、御先祖高安の長者より、武名の德を以て、命全う、長く傳はる家風を、祝ひましての獻上でござりまする。

歌助　この生鯉は、當國平中の宮の神主より、獻上でござりまする。

龜千　何れも、高安の家の繼目を祝ひ、數の贈り物、過分にこそあれ。

帶刀　御先祖高安の長者より、龜千代君まで三十六代……
鯉の鱗は三十六枚、六々鱗と云うて、時に取つての吉瑞。
千鶴萬龜、おめでたう存じ奉りまする。
ト奥より、おべく、浪の戸、出る。
浪戸　申し〳〵、御合點でござりまするかえ。
べく　覺えて居るわいの〳〵。初手がこれぢや。その次が
これ〳〵。
ト歌の仕方をする。帶刀、見て、合點のゆかぬ顔する。
浪戸　シイ〳〵。
べく　シイ〳〵。なんぢや、猫が來たか。シイ〳〵ニヤンニヤン。
浪戸　モシ〳〵、それ〳〵、
ト帶刀を教へる。帶刀と顔見合せ
べく　なんぢや。
帶刀　これは、ついに見馴れぬ女中。どなたでござりまする。
平馬　ア、イヤ〳〵、帶刀どの、あなたはおべくさまと申しまして
桂壽　兼ねて其方にも噂をした、おれが里に殘し置いた娘ぢやわいの。龜千代の爲には姉姫ぢやわいの。
帶刀　さては左樣でござりまするか。存ぜぬ事とて不調法お免されて下されませう。私しは帶刀と申してお家の執權、お見知り遊ばされて下さりませ。
べく　ムウ、其方の名は帶刀と云ふか。どうやら暖簾の模樣のやうな名ぢやの。
桂壽　コレ〳〵。アイヤ帶刀、姉は氣が輕い程に、どんな事云はうとも、氣にさへてたもんなや。
帶刀　畏まつてござりまする。
べく　畏まつて居てからに、まだ畏まらんすか。
浪戸　シイ〳〵。
べく　もう直ぐに詠まうか。
帶刀　ハア。
べく　おりや歌詠むぞや。
帶刀　歌をお好き遊ばしまするか。
べく　遊ばす〳〵。そろ〳〵やらうか。
ト忘れた體。浪の戸の方を見る。浪の戸、思ひ入れして
浪戸　ソレ〳〵。
べく　ソレ〳〵。

浪戸　ソレ〳〵。
べく　ソレ〳〵〳〵。
　ト浪の戸、指を八ツ見せる。
べく　ぱまちゑい八ツか。
浪戸　何仰しやる。もう暮れ前でござりまする。
べく　八重……一重、九重とこそ思ひ〳〵。
浪戸　これは〳〵、面白い上の句ぢやわいな。八重一重、九重とこそ思ひしに。さうじて下の句は、どうでござりまするぞえ。
べく　丸い……イヤ、輪ぢやが。
　ト浪の戸、袖を振り見せる。
駕籠舁き……振る……故郷に、ソレ〳〵、オヽ、我が故郷に。
浪戸　我が故郷に。
　ト浪の戸、香をきく眞似する。
べく　匂ふ梅が香。なんと好い歌であらうがな。
帶刀　イヤモウ、天晴れな歌でござりまする。
べく　アヽ、辛どやの。歌を一番詠んだりや、愛宕山詣りした程草臥れた。
帶刀　ハヽヽ、八重一重、九重とこそ思ひしに、我が故郷に匂ふ梅が香。御弟龜千代さま、九重の都に御座なさると、いま故郷にて巡りお逢ひなされたと云ふ心を、梅が香に倣らへて、連なる枝の御兄弟。御對面の喜びのお歌。おべくさまには恐れながら、秀逸の御詠歌でござりまする。龜千代さま、姉君へ御挨拶遊ばされませう。
龜千　さてはお前が、私しが姉樣でござりまするか。只今までお行くへも知れませず、御對面も申しませなんだ。今からは姉樣、可愛がつて下さりませいえ。
　トおべく、龜千代を見て恟りし
べく　母さん〳〵、ちよつとござんせ〳〵。
　ト引ツ張る。
桂壽　なんぢやぞいの〳〵。
べく　アノナ、わしが先刻に云うたな、首筋の寒うなる。ぴこ〳〵さんは、あの若衆さんぢやわいな。
桂壽　ヤア、。
べく　サア〳〵、オヽ、寒々。嫌な氣味な。
桂壽　コリヤ〳〵滅多な事云ふな。ありや、われが爲には弟ぢやわいやい。
べく　なんでも大事ない。ちやつと女夫にして下さんせいな。

桂壽　苦々しい、何を云ふ事ぢややら知れぬ。コレ〱、浪の戸、奥へ連れて行きや。コリヤ姉よ。

ト囁く。おべく、嬉しさうな顔をして

べく　エヽ、嬉し。そんなら奥へ行て、待つて居るぞえ。

桂壽　オイヤイ。

浪戸　サア、ござんせ。

べく　アヽ、浮世ぢやなア。

ト浪の戸、おべくを連れ奥へ入る。

皆々　ハヽヽ。

帶刀　ハレ、おべくさまには、おべくさまでござりまするなア。

ト云ふ所へ、奥より笹の井出て

笹井　龜千代さま、今日はおめでたうござりまする。最前から、そウ〱待ち兼ねて居りましたわいな。御機嫌のよい、可愛らしいお顏を見まして、嬉しいは嬉しいが、龜千代さま、あのやうにちよつと逢すがらで、一目見た女中さんさへ、あのやうにおしやんすもの。平常お側に居りますもの〻心を思ひやつて、可愛らしいお詞を下さんしたとて、罰も當りや致しますまいに。エヽ、心强いお方ではあるわいな。

平馬　コレ〱笹の井、後室樣の御前とも憚らず、そりや何を云ふのぢや。

桂壽　平馬、帶刀、兩家老ともに聞きやる通り、愚かな娘が心に焦れ慕ふ、その戀人と云ふは、腹こそ替れ兄弟。斯う云ふ事も、宿世の因果かいなう。

帶刀　アイヤ〱、か〻る例しも無き事にもあらず。在原の業平朝臣は、御妹若草の君の麗はしき姿に愛でて、うら若きねよげに見ゆる若草の、人の契らん事惜しぞ思ふと、遊ばされたる業平は、歌の德に依つて妹君に、執着の心うせたと承る。

平馬　されば、歌の德でさへも、道ならぬ戀を思ひ切る不思議あり。今あの如く、愚かなる姉姫樣なれども、御綸旨を頂戴なされば、まさなき思ひの羈も晴れ、お心も敏くおなりなされまいものでもない。御綸旨の箱を開き、拜見いたさせまする儀はなりますまいか。

帶刀　僞心狐ではござらず、生れついて愚かなるお心の、賢うおなりなされうやうはない。

桂壽　イヤ〱、帶刀、さう一槪には云はれまい。左箸に生れ付きし幼な子に、供御の御箸を持たすれば、自然と右の手に箸を取つて、一生の身の癖が直ると聞くぞや。

平馬　すりや、姉姫の愚かなるも、御綸旨拜見なされなば、御發明におなりなされまいものでもないて。

帶刀　御綸旨の儀は禁廷にて、龜千代さま頂戴遊ばされますると、直ぐにあの如く封印が付きましたれば、私しにはムザと開かれませぬ。

平馬　勅封を手柄に、御綸旨を拜見さしめされぬは、なんとも心得ぬ。

歌助　イヤ、平馬どの、有職に疎きと申しませうか。御家老の職を勤めながら、これしきの事が御合點が參りませぬか。勅封を開いて、是非に拜見がしたいと仰しやるは、心入れあつての事でござりまするか。

平馬　何を猪口才な、慮外な一言。

帶刀　身が心を疑はつしやる平馬どの、勅封を無理に見たがらしやる心底が、何とも心得ぬ。

平馬　ハテ、其方が心底が。

帶刀　こなたの心底が。

兩人　何ともハヤ。

龜千　コレ／＼、兩人ともに待ちや。あの姉樣の、まさなきお心も直り、賢うおなりなさるれば、この龜千代が母への孝行ぢや程に、御綸旨のお箱を開いて、拜見させませしやいの。

帶刀　仰せではござれども、勅封を開きまする事は、如何にしても。

龜千　ハテ、母樣のお心安めぢやわいの。

帶刀　畏まりました。

ト思ひ入れして、紐に付きし封を切り、蓋を開く。悄りして又蓋をする。

桂壽　帶刀、綸旨を何ゆゑこれへ出して、拜見させぬぞ。

帶刀　ハツ、イヤ、その儀は。

平馬　その儀はとは、箱の内に御綸旨はないか。

帶刀　御綸旨は、この箱の内にござる。

平馬　あるならば、早う拜見せうわい。

帶刀　サア、その儀は。

平馬　サア。

帶刀　サア。

桂壽　サア。

三人　サア／＼／＼。

二人　なんとぢや。

ト この時内より

呼び　お勅使。

帶刀　勅使のお入りとござる。御綸旨拜見の儀は、暫らく御容赦下されませ。
平馬　然らばこの儀も、勅使の御前で。
帶刀　お勅使、此方へお通り下されませう。
ト並よく並ぶと、橋がゝりより、奴時平、束帶にて、仕丁二三人付き出る。上座へ通る。
平馬　お勅使、御苦勞千萬に存じまする。
時平　汝等は高安市之守が一家の者どもぢやな。身が事は鷺山右大辨と云うて、御座近う昵近の身なれども、この度御不審の事あり、遙々と都より下つた。
帶刀　これは寒氣の節、御苦勞に存じ奉ります。即ちこれに居りまするが、市之守が後室。次が倅龜千代、斯く申すは執權春藤帶刀。
平馬　これに扣へましたが、大鳥平馬。主人龜千代、繼目の參内いたして間もなきに、思ひがけなき勅使の御下向。
兩人　恐れながら勅命の趣き、承りたう存じ奉ります。
時平　野瀨龜千代丸、繼目に罷り上りし節は、この右大辨、歌合せに罷り出て、龜千代にも帶刀にも逢はなんだが、改めて某が尋ぬる仔細がある。事明白に申し開きを立てたがよいぞ。
龜千　お上より御不審の條々、早く仰せ聞けられませい。
時平　勅使の趣き餘の儀にあらず。此度龜千代繼目の參内の時、天奏大宮の宰相を以て、君より賜はりし御綸旨を蔑しろにして、何ゆゑ盜賊に奪はれた。
帶刀　イヤ、その儀は禁廷に於て、主人龜千代へ大宮どのがお渡しなさるゝ時の、紛失と存じられますが、綸旨の失せたる儀を、早速大内へは、何者が奏聞いたしてござりまする。
時平　檢非違使の役人の手へ、召捕つたる盜賊、御綸旨を懷中して罷り在るゆゑ、早速御吟味にかゝりしところに、紛ひもない高安の家へ、下し置かれたこの御綸旨。
ト懷中より出し見せて
これが檢非違使の手へ廻らずんば、都にて盜まれた事を沙汰なしにして居るであらうな。
桂壽　帶刀、あの綸旨を盜んだ盜賊めが、大内の檢非違使のお役人に召捕られて、事顯はれたは、其方が天命の盡きと云ふもの。思ひ知つたか。
ト帶刀、綸旨の箱を出し
帶刀　斯くなりました上は、申し譯いたしてから、役に立

たぬ事ながら、この如く綸旨の箱は、勅封を下し置かれた所に、その御綸旨は輕々しう、盜賊の手へ廻らうやうはござりませぬ。

時平　然らば綸旨の箱は、其所に持つて居るか。

帶刀　右大辨さま、御覽なされましたか、封の儘持つて、お箱は此方にあつて、その御綸旨が盜賊の手へ渡つたとあれば、こりや禁廷にて紛失いたしたものと思はれまする。

時平　帶刀、その云ひ譯は立たぬ。禁廷にて失せたに極まれば、その箱の封は切らずにある筈。

龜千　あの箱の封は、先刻これへ歸りました上で、私しが申し付け開かせました。

時平　然らば龜千代は、大それた違勅の者。朝敵も同然ぢやぞ。

帶刀　そりや又何ゆゑな。

時平　勅封の付いた御箱、私しになぜ封切つた。

帶刀　最前この箱を開けとあるは主命。むざと開いては、後日の誤まりと存じたに依つて、故實を以て大内の封印は其まゝに疵を付けず、御箱の横手より紐を切つて開きましたが、勅封を切らぬと云ふ申し開き。

時平　云ふな帶刀、勅封に疵が付かぬとて、蓋を開いて故實とは、その云ひ譯、濟まぬ／＼。

帶刀　例へば靈佛靈社の、大切なる神形にもせよ、名作の佛にもせよ、御戸開きあつたその上にて、勅封を付け置かるゝ事、世々にその例し少なからず。如何に勅封なればとて、不時に火難水難のある時には、勅封に疵を付けず、或ひは扉を打割り、守り出し奉るが故實。其所を存じてこの御箱の、勅封には疵を付けず、紐切り解いて、内なる御綸旨を檢めましたが、なんとこれでも申し譯が立ちますまいかな。

時平　サア、それは。

帶刀　なんとでござりまする。

平馬　封印を切らぬ申し譯は立つにもせよ、盜まれたは帶刀、御身の誤まりサ。

帶刀　イヤサ平馬、勅封にさへ疵が付かねば、御綸旨の失せたるは大内での事。

時平　その云ひ譯は追つての事。改めて勅諚。

皆々　ハア。

ト頭を下げる。

時平　龜千代は綸旨を等閑にして、盜賊に盜まれた越度。

猶帶刀とてもその通り。さるに依つて、この御綸旨は後室桂壽院に、暫らくお預けなさるゝ程に、高安の家の世繼ぎになるべき者の器量を見立て、讓り與へよとある綸言。

ト綸旨を後室に渡す。

桂壽　ハア、有り難い勅諚の趣き、畏まり奉りましてござりまする。

ト受取る。

時平　さて外に一ヶ條、兩家老へ禁廷よりお疑ひ。あの龜千代丸は、高安市之守血筋の伜でない。その仔細は、あの龜千代は當年十七歳とある。十八年以前に市之守は、相州に御領付けられ、一ヶ年餘り鎌倉表の管領を勤めし事相違がない。然ればあの龜千代は、市之守が鎌倉の留守のうちに、出生した伜。すりや、市之守が胤ではないぞよ。

帶刀　アイヤ〳〵、それは憚りながらのお覺え違ひ、主人市之守、鎌倉へ管領職を仰せつけられましたは十九年以前。鎌倉より歸りまして、一ヶ年後に龜千代丸の誕生。この儀はとくと大内の御帳を吟味あられますれば、市之守が鎌倉へ赴きましたる事、十九年以前に相違ござりませぬ。

時平　大内外記司の帳面に、相違があるものか。

帶刀　然らば十八年以前と仰せらるゝからは、違ひました。

平馬　アイヤ、憚りながら勅使へ申し上げまする。斯樣に人の胤の疑はしきを、糺し見る屈强の秘傳がござりまする。お目通りに於きまして、その證跡を顯はしてお目にかけたう存じまする。

時平　何にもせよ、疑はしきを糺し見る事なれば、苦しうない。早く〳〵。

平馬　泉州堺より呼び寄せ置いたる、唐醫漢林齋、用意せし秘藥の油に、灯火を點じさせ、これへ持て。

漢林　ハア。

ト漢林齋、片手に手燭、片手に油差しを持ち出る。

帶刀　あの醫者が持參せし灯火、どうして人の血筋を分つ、平馬どの、樣子が承りたい。

平馬　あれに用意してござるは、先達て姉樣おべくさまを、大殿の胤か胤でないか、糺し見よう爲、あの漢林齋に申しつけました、金ゑきの油を以て灯したる、あの火影に人の影を映し見るに、聖人の古語にある如く、老人の子

には影なしと申す諺の如く、或ひは父親が五十以後にとまりたる子は、影が映らず、また若き時とまりたる子はあり〳〵影を映す、眞似邪正を立ち所に顯はします。漢林齋、用意しめされ。

漢林　畏まつてござりまする。

ト衝立を程好き所へ直す。その前に漢林齋、燭臺へ火を灯し直す。

平馬　先づ試みに、これなる猿の井、お身の親父、妹脊山外記太夫どの、老年に及んで儲けられた娘なれば、老人の子に影なしと云ふ、印を顯はすには屈強の役人。早くあの火影に向うて、身の影を映るか映らぬか、衝立の前を歩いてお見やれ。

猿井　かゝる大切な御吟味の折柄なれば、畏まりました。

ト衝立の前を歩く。猿の井、影法師映らぬなり。

漢林　灯火の影に向うて、影法師の映らぬが、老人の子に影なしの證據。御覽なされましたか。

時平　イカサマ、不思議な事を見るなア。

平馬　それなる歌助、其方は親父が、幾つの年に出生した。覺えぬか。

歌助　私しは親どもが、ずんと若いうちに生れました、子ぢやげにござりまする。

平馬　早くその前を歩いて見い。

歌助　畏まりました。

ト小姓歌助、衝立の前を歩く。影法師映る。

漢林　あの者が父親、老人でない證據には、今の如く影が映りましてござりまする。

帶刀　イカサマ、不思議なる妙案なう。

ト思ひ入れあつて、見て居る。

桂壽　サア〳〵、これから龜千代丸の番ぢや。早う立ちや。

龜千　アイ。

平馬　大殿が六十餘りになつて、御出生の龜千代さま、金ゑきの灯火の、火影に影が映れば御身の大事。サア、早くあれへござりませ。

龜千　老人の子に影なしと云ふ、古人の詞、我れ未生以前の事なれども、市之守さまの胤か、胤でないかと云ふ、實否を糺すこの場の詮議。むざとは影は映されまい。帶刀、なんと思やる。

帶刀　イヤ、左樣仰せられて、御猶豫なされては、いとゞ母御桂壽院さま、あのお勅使さまの御不審が晴れますま

龜千　如何にも。
帶刀　サア、お立ちなされ。様子を御覧なされませ。
　ト龜千代、衝立の前を通る。漢林齋、火を差向ける。影映る。皆々思ひ入れあつて
桂壽　サア、大殿の年寄つての子なれば、あの火に影が映らぬ筈。
平馬　先御臺所と、不義の夫の中に出來たお子に相違はない。
龜千　エヽ、無念な。
　ト腹切らうとする。帶刀、留めて
帶刀　ヤア、早まらつしやりまするな。何にもせよ、火影に向うて影の映るが、何が不思議。お前は大殿市之守さまのお胤に相違ござりませぬぞ。
時平　ヤア、帶刀、老人の子に影なしと云ふ本文の通り、龜代千丸が影法師、映りさへせねば、如何にも市之守、伜に極まれど、影が映れば不義者の胤と云ふ證據サ。
平馬　身共が親は七十三の年、この平馬は出生いたした。老人の子に影があるかないかは、平馬が體が好い試み。帶刀見られよ。
　ト平馬、衝立の通を通る。影映らぬなり。

漢林　アレ、あの如く、影のないのが老人の子の證據。
帶刀　イヤサ、老人の子にもせよ、影の映るもあらうし、映らぬもある筈。一概には云はれぬ〳〵。
時平　ヤア、さうした理破りを云ふからは、帶刀、その龜千代は先御臺と、われが密通の伜ぢやな。
帶刀　イヤ、それは餘りのお疑ひ。
平馬　然らば龜千代は、市之守どのゝ血筋の子と云ふ、慥かな證據があるか。
帶刀　サア、その儀は。
平馬　サア〳〵、なんと。
　ト時平、平馬、後室、一時に云ふ。
帶刀　お勅使へ願ひ奉りまする。如何にも、この眞僞キッと相立てませう間、今暫らくの間、御猶豫なされて下さりませい。
時平　成る程、願ひの通り、暫しの猶豫は致してくれう。平馬、計らへ。
平馬　侍ひども、龜千代どの帶刀兩人を圍ひ、引立てい。
侍ひ　ハア。
　ト龜千代、帶刀が手を取り
龜千　コレ帶刀。

ト無念がる。

帶刀　サア〳〵、ようござりまする。何事もこの帶刀が居りますれば、悪しうは計らひませぬわいの。

時平　今日暮れ六ツ限りに、キツと明りを立てい。便々と期が延びれば、某が計らふ胸があるぞ。

帶刀　畏まつてござりまする。サア、お入りなされませ。

侍ひ　サア、ござりませい。

ト侍ひに囲はれ、龜千代、帶刀、すご〳〵奥へ入る。

平馬　お勅使にも、先づお入り下されませう。

ト唄になり、皆々入る。奥より、浪の戸、出て、いろいろ思案する所へ、おべく出て

べく　サア〳〵〳〵、大事ぢやぞ〳〵。

浪戸　モシ〳〵、そんな事仰しやんないなう。

べく　それでも、大切の色さんを、ひよつと死なしやんしたら、どうもならぬ。今夜中に濡れ事を取持つて、首筋を寒うして下さんせいなう。

浪戸　何を仰しやるやら。そこ所かいな。

べく　それでも思ひ出すと、アレ〳〵、びこ〳〵する。オオ寒々。

ト浪の戸、思案して

浪戸　そんなら逢はせませう。ツイちよつとぢやぞえ。シタガコレ、物仰しやる事はならぬぞえ。お勅使樣も來てござるに依つて、暗がりで囁いて、ちよつと物仰しやつたら、ツイ此方へお出でなされませいえ。

べく　そんなら大きな聲せずに

ト囁く眞似して

斯うか〳〵。

浪戸　追ッつけ首尾見て、龜千代さまをおこしまする程に其所に待つてござらつしやれや。灯を消すぞえ。

べく　合點ぢや。そんなら爰に待つて居るぞや。

浪戸　大きな聲して物仰しやんな。

ト灯を消す。おべく、暗がりのこなし、チツとして待つて居る。浪の戸、そろ〳〵橋がゝりの方へ行く。笹の井、手燭灯し、奥よりソロ〳〵出て、浪の戸を捉へ

笹井　コレ、浪の戸さん、お前に兼ね〴〵頼んで置いたぢやないかいな。明日をも知れぬお身の大事。せめてたつた一度。エヽ、頼み甲斐のないおさんではあるぞ。

ト泣く。

浪戸　これは又、きつい所へ持ちかけた事ではあるわいの、

心安さうに、あなたがツイ爰へ連れまして來らるゝものかいな。

笹井　それでも、ひよつともしもの事があつたら、どうせうぞいな〳〵。

ト泣く。浪の戸、思案して

浪戸　氣遣ひさんすな、逢はす。

笹井　エヽ、ほんにかえ。

浪戸　大きな聲で物云ふ事はならぬぞえ。ひよつとお勅使樣のお耳に立てば、どうもならぬ。あそこの暗がりに待たせまして置いた。側へ行て抱きついて、口々さんしたら、ちやつと此方へござんせ。隙がいつて、人が來たらあなたの爲にならぬぞ。

笹井　エヽ、忝なうござんす。

ト拜む。

浪戸　あの、嬉しさうな顏わいの。この灯も消して

ト灯を消し、そろ〳〵本舞臺へ來て

ソレ鎚千代さまぢや、ソレ。

ト合ひ方になりて突きやりて浪の戸は、ソロ〳〵逃げて入る。おべく、嬉しい思ひ入れにて、探り廻ると、銘酒の德利に行き當る。それを持つて、そこらを尋ねる。笹の井、また德利に行き當る。おべく、恟りして引ッ込める。右の手を取り下へ引据ゑ裾へ抱きつく、おべく、立つて德利提げ、身を振る。笹の井、囁く。嬉しい思ひ入れ。また囁く。こそばい思ひ入れ。其うちに德利の口へ指入れる。拔けぬ思ひ入れ。脇へ退き拔かうとする。笹の井、また側より

笹井　なんでござりますぞいな。わたしにばつかり物云はして、オヽ、憎い。

ト抓る。

べく　オヽイタ。

トちやつと口塞ぐ。

笹井　オヽ怖。どうぞたつた一度、寢て下さりませいな。

トおべく、ギヨッとして後へ寄る。

えいなア〳〵。

ト付いて寄る。

べく　それでも、女子同士は、しまひが付かぬもの。

ト笹の井、恟りして

笹井　エヽ、さう云ふお前は。

べく　ぬくさんぢや〳〵。

笹井　エヽ。

べく　ぬくさんはぬくさんぢやが、德利へ指が入つて拔けぬわいな。
笹井　オヽ辛氣。なんのこつちやいな。
ト云ふ所へ龜千代、手燭持ち出る。
龜千　騷がしい。何事ぢや。
トこの間浪の戶、出かけ見て居る。
笹井　申し、ほんにお前は心强い。お前は〱。
ト龜千代が胸倉を取り泣く。
べく　お出でなさんせ。
ト同じく胸倉を取る。德利が邪魔になるゆゑ、左の手にて胸倉を取り
お前は、ようわしが首筋をば、寒うさんしたなう。エヽお前は〱。
ト右の手にて、舞臺を叩く。德利割れる。
オヽ、嬉しや。ハア、拔けた。この拍子にちよつと。
ト抱きつく。
龜千　何なされますぞいの。
ト云ふ所を笹の井、おべくを突き退け
笹井　なんぢやいな。阿房らしい。
トまた抱きつく所へ、浪の戶、ズツと出て

浪戶　御尤もでござりまする。モシ、おべくさま、如何にお心が足らはぬと云うても、あなたはお前の弟御樣、兄弟女夫になつてよいものかいなア。
笹井　それ〱、兄弟抱かれて寐るものは、畜生でござんす。
浪戶　一人あなたのお名の穢れ。重ねてそんな事仰しやんな。
べく　アノ、兄弟女夫になる事はならぬものかえ。そりやなぜにぢやぞいの。他人より結句、世話がなうてよささうなものぢや。いつちだんない事ぢやになア。
浪戶　何を又仰しやるかいな。
べく　不自由な事を、誰れが始めた。しよ事がない、法度なら止めるぢや。エヽ、首筋の寒氣が止んで、グイと熱が出た。
浪戶　若君樣、笹の井が常々の志し、どうぞたつた一度の情を、かけておやりなされませ。
笹井　嫌と仰しやると、わたしや斯うぢやぞえ。
ト死なうとする。
浪戶　コレ〱、お勅使のお立ちなされたに、血をあやしては越度になる。マア、あの障子の內へ、ちよつとお出

でなされませいな。
龜千　默れ浪の戸。身に覺えもない不義者の胤と、惡名を受け、口惜しうてならぬわいやい。面白さうに、おりや嫌ぢやわいの。
べく　ヨウ若衆だて樣。
笹井　おべくさまがござんすに依つてかえ。
龜千　おりやそんな事は知らぬ。嫌ぢやわいの。
笹井　嫌と仰しやりや。
トまた死なうとする。
浪戸　コレ／＼、血をあやす事はならぬぞえ。
龜千　それでも、おりや、嫌ぢや／＼。
浪戸　エヽ辛氣な。無理に連れまして行かしやんせいな。
笹井　サア、ちよつとお出でなされませいの。
龜千　嫌ぢやわいの／＼。
ト無理に兩人して障子の內へ入れる。と合ひ方になる。この間おべく、煙管持つて腹立てるこなし。浪の戸、兩人が入りし後の障子を閉め
浪戸　ソレ、放すまいぞ／＼。
べく　惡いぞ／＼。片ちんばな物の仕樣ぢや。ほんに阿房らしい。

ト煙管をあちらこちらに咥へる。
浪戸　でも、お前とは御兄弟ぢやわいな。
べく　さうしたらよい事。
ト大きな聲にて云ふ。
浪戸　怖い事の。ドリヤ奧へ行て。
ト行かうとする。
イヤ／＼、あなたを爰に置きましたら、モシ。
トこの間、おべく、障子の內を覗き居る。
浪戸　コレ、おべくさま、何をなされます。此方へお出でなされませ。
べく　嫌ぢや／＼。嘘ばかり。
浪戸　何を仰しやるやら。
べく　阿房らしい。
ト腹立てるを、無理に浪の戸連れて橋がゝりへ入る。
帶刀　浪の戸／＼。
ト云ひ／＼帶刀、奧より出る。龜千代も走り出る。
笹井　コレイナア／＼。
ト後を追うて笹の井も出る。帶刀に行き當る。
帶刀　お身は笹の井ではないか。
笹井　アイ、さうぢやさうにござんす。

龜千　滅相な。てんがうばつかり。
笹井　ちつとばかりの事を仰山さうに。それにござりませ。
　ト逃げて入る。
帶刀　イヤサ、コレ〳〵。
　ト云ひしなに帶刀、德利に行き當り、鯉にも行き當る。
　こりや何ぢや。
　ト手燭にてとくと見て
　ハレ、合點のゆかぬ。爰に生鯉、酒德利、酒は打零して鯉の鱗の色が赤色に變じ、毒氣に苦しみ死んだるこの鯉の體。
龜千　大鳥平馬が送りし、德命酒の付け札。
帶刀　鯉魚の死したるは、正しく毒酒の業。かゝるお家の凶變に及びし折柄、毒酒を献じ奉りしは、これ正しう大鳥平馬、後室桂壽院と心を合せて、野心を挾むに極まつたり。未だ天の時到らざるゆゑにや、若君跡目の參內相叶ひし所に、かゝる凶事をなすは、惡人輩の業。高安のお家の滅亡か。この帶刀が武運の盡きか。エヽ、無念やなア。

龜千　帶刀、思案はないか。どうしたらよからうぞいなう。
　ト帶刀、思案して
帶刀　この付け札は生駒山と云ふ銘酒、我が家より献上のこの酒。
　ト外の德利を出し
　この德命酒と書きし、毒酒の銘を貼り替へて、彼れらが企みの樣子を、試し見まするでござりませう。かゝる樣子を知る事、弓矢神のまだしも御利生か。
　ト唄になる。帶刀、德利の酒の毒酒の札を、外の德利へ貼り替へる。ト橋がゝりより野川久太夫走り出る。龜千代は奧へ入る。
帶刀　誰れやら參りまする。先づ奧へ。
久太　ヤア、帶刀さま。
帶刀　ムウ、其方は後室の里のお娘御、おべくさまを迎ひに參つたでないか。
久太　されば、その儀に付きまして、不覺を取りましてござりまする。後室樣の御前へ參り、一通りを申し上げて切腹仕る覺悟でござりまする。なれども、直にお目にかゝるも面目なく、卽ち委細の樣子は、この一通に認

め置きましてござりまする。後室様か平馬どのへ、お屆けなされて下されませう。面目次第もござりませぬ。
帯刀　すりや、この中に樣子は認めてあるか。
久太　左樣でござりまする。
帯刀　そりや好い思案ぢや。
　ト拔打ちに切る。ト少し立廻りあつて當てる。ウンとこける。狀を開き見て
「恐れながら御斷わり申し上げ候ふ、この度おべくさまお行くへ、方々詮議仕り、やう〳〵お供し立歸り申し候ふ道すがら、何者とも知れず、おべくさまを奪ひ取られお行くへ知れ申さず、重々不調法の段、御免下さるべく候ふ、申し譯の爲切腹仕り候ふ覺悟にて御座候ふ、野川久太夫、後室桂壽院さまへ」。
久太　帯刀どの、なんで殺さつしやる。
　ト久太夫、起きてかゝる。
帯刀　其方に科はなけれども、密事を外へ洩らさぬ手段。佐々木の三郎が藤戸の浦人を殺したるに相同じ。下郎なれば助け置かれぬ。
久太　エ、無念な。
　トこれより久太夫をとくと殺し

帯刀　若君を追ひ失ひ、里の娘に家を繼がせんとする、後室や平馬が企み、ハレ、何とも。
　ト思案する。奧より人音するゆゑ、死骸を片付け、いろいろ思ひ入れ、あつて入ると奧より平馬、漢林齋、兩方より出て行き當り、思ひ入れして
平馬　漢林齋。
漢林　平馬どの。
平馬　まんまと大方に仕負ふせた。龜千代帯刀兩人ともに。
漢林　誠の勅使と。
平馬　シイ。さりながら、あの帯刀め、大抵の奴ではない。あれで行かずば、これでやらうと、我れらが献上の毒酒。
漢林　して、試みなされたか。
平馬　試みせいでも、一杯呑まするが最後、忽ちコロリと參る。
　ト此うち、おべく、出て聞いて居る。
べく　ハア、奇妙な事の。
　ト兩人、悸り。
平馬　おべくさま、なんぞお聞きなされましたか。

べく　誰れかやら毒酒を呑ますと云はんした事。こちや何にも聞きやせぬぞえ。
兩人　ヤア。
　ト悔りする。
平馬　一大事を聞かれたれば、むまうても只は置かれぬ。いつそ試みささうかい。
漢林　平馬どの、このおぬくさまは、後室樣の秘藏娘、お前と御夫婦になさるゝお心入れぢやぞえ。それにアノ試みを、あなたになされまするお心入れは。
平馬　ハテ、知れた事。此やうなおぬくを、おれが奧にした時には、一家中に身が面を眺めらるゝ。身が大望成就さへすれば、身は大名。幾人でも氣に入つた女を手廻りで使はうと儘ぢや。このおぬくがどうなるものぢや。
べく　尤も。
平馬　先づ帶刀めを片付けるまでは、後室の手前、美しうしてと思うたれども、今のを聞かれたれば、此奴から片付けてしまはにやならぬ。
漢林　然らばこの毒酒を。
平馬　コリヤ〳〵。
　ト云ひ消し、あたりを見る。おべくも同じやうに見廻す。
平馬　聲が高い。何者も居らぬか。
べく　爰に莨盆があるぞえ。
平馬　コリヤ〳〵……アイヤ、ナニ、おべくさま、お前には、御酒をお上がりはなされませぬか。私しは一つたべまするか、氣の屈した時には、酒がなうては、ナウ漢林齋。
漢林　如何にも。酒は憂ひを拂ふと申す。酒は陽氣な物でござる。
べく　陽氣と云ふは、美しい唐の女子ぢやないかえ。
漢林　なにを。そりや楊貴妃の事サ。唐も大和も、廢らぬ物は色と酒ぢやて。
べく　まだ廢らぬ物があるぞえ。
平馬　なにが。
べく　まゝ。
平馬　イカサマ、こりや尤もぢや。すりや、わりや……アイヤ、お前樣は酒はお嫌ひかな。
べく　十三七ツぢや。
平馬　十三七ツとは。
べく　お好き樣ぢや。

兩人　ハヽヽ。
平馬　左樣ならば、幸ひ、一つお上がりなされませ。
べく　上がらう／＼。
平馬　ドレ／＼。
　ト右の德利を持ち出て、あたりを見て
サア／＼、一つ上がりませい、
べく　夜酒ぢや程に、お辭儀なしに始めませう。
平馬　丁度一つ。
　ト注ぐ。おべく飮む。
べく　ア、冷た。甘い／＼。
　ト舌打ちする。兩人あたりを見廻す。
アレ／＼。
　ト咽喉を撫で、苦しい身振りする。
漢林　さつても覿面。奇妙々々。
平馬　ソリヤ／＼。もうソロ／＼廻つて來たさうなぞ。
漢林　咽喉が苦しいか。その筈／＼。
べく　どうもならぬ／＼。どうぞして／＼。
平馬　馬鹿とは云ひながら、假にも身が妻にもと思うた奴。
大馬鹿ゆゑに、われと最期。南無阿彌陀佛。
漢林　心持はどうぢや。

べく　エヽ、氣味惡やの。
　ト首筋を手で拂ひ、蜘蛛を摑む身振り。ソレソレと方
方這うて廻る。兩人も同じくうろたへる。
コレ／＼、此奴ぢや／＼。どつから入り居つたやら、首
筋をこの蜘蛛めがぞめき居つてから、アヽ、こそば。一
昨日、來い／＼。
　ト捨てる思ひ入れ。兩人、顏見合せ
平馬　ムウ。今のは蜘蛛が這うたのか。
漢林　さうして、今の酒を飮んだ心持ちは。
べく　どうやら、ほぎ／＼として、面白いわいなア。
漢林　平馬どの、利かぬぞや。
平馬　面妖な。ま一ツ上がりませぬか。
べく　そりや猶よからう。
平馬　一つでは堪えまい。今度は猶きつからうぞ。
　ト注ぐ。おべく、請けて飮む。
べく　アイタヽヽ。
平馬　ソリヤ／＼、痛むぞ。廻つた／＼。南無阿彌陀佛。
　ト拜む。
べく　お腹が痛うて、どうもならぬわいなア。アヽイタヽ
タ。

平馬　痛い筈ぢや。地水火風を元へ戻す所ぢや。苦しかろ。
兩人　痛むか〳〵。
べく　オヽ、イタヽヽ〳〵。
兩人　南無阿彌陀佛。
べく　オヽ、道理こそ、痛い〳〵と思うたりや、衣にこんな針があつたわいなア。
平馬　ドレ。
べく　それから御覧じ。へゝゝゝ。
漢林　ドレヽその針。
　ト手を出す。
べく　ソレ。
　ト漢林齋が手を針で突く。
漢林　アいたしこ。
　ト手をちやつと引く。
平馬　ムウ、今の痛いは、その針でか。
べく　アイ、この針取つたりや、物忘れしたやうに痛みを忘れた。
漢林　利かぬぞえ。
平馬　面妖な。利く筈ぢやが……ヤア、この器は、身が進物とは違うてある。こりやどうぢや。
べく　そりや違うてある筈ぢや。先刻にひよつと德利へ指を入れたれば、モウ〳〵、なんぼでも拔けぬと思はんせ。何がそれを無理に拔かうと思ふその拍子に、德利を打割つた。それで中の酒は皆、零れたわいな。
兩人　ヤア。
べく　貼り紙は、誰れぞが貼り替へた、ものぢやあらう。
平馬　エヽ、忌々しい。
　トおべくの襟髪を持ち引きつけて
　爰な大馬鹿め。よう大切な酒を捨てゝしまうたなア。
べく　コレ〳〵、お姫様を何とするのぢや。ほんのこれが、さゝ罰が當らうぞや。
漢林　これサ〳〵、其奴には構はずと、どうぞ思案はござらぬかいの。
平馬　サア、思案も瓢簞も此奴が、微塵にしたわいの。
べく　イエ、こちや瓢簞は微塵にしやせぬわえ。德利こそ微塵にしたれ。
平馬　まだ其やうな口を叩くか。うぬを。
　ト反りを打ち睨む。おべく、逃げて入る。と、内より、

呼び　勅使の御入り。
漢林　勅使、これへお出でとござりまする。
平馬　漢林齋、扣へ召され。
漢林　ハア。
ト兩人、下へ下がる。奥より、時平、桂壽院、出る。浪の戸、三方に腹切り刀持ち出る。歌助、三方に簑笠竹杖を載せ持ち出る。帶刀、淺黄上下。龜千代、侍ひに圍はれ出る。と入相の鐘ゴンと鳴る。燭臺に火灯す。
平馬　サア、約束の刻限。暮れ六ツの鐘。提灯燭臺に火を灯せ。
侍ひ　ハア。
ト燭臺持ち出る。
時平　御綸旨紛失の申し譯立たぬに依つて、家老帶刀には切腹を申しつくる。まつた龜千代丸は、高安市之守が血筋と云ふ事、明なる證據なきに依つて、帶刀と同罪に申しつくる筈なれども、これなる後室の願ひに依つて、命は助ける。兩人に用意の物を早く與へい。
歌助　ハア。
ト浪の戸、三方に腹切り刀、帶刀が前に直す。歌助、簑笠を龜千代丸の前へ直す。

浪戸　申し兄樣、御綸旨紛失の申し開きが立たぬに依つて敢へない切腹なされまするなう。
歌助　龜千代さま、お前はこの簑笠を着て、阿房拂ひにお遭ひなされまするか。
龜千　歌助。
歌助　若君樣。
帶刀　妹。
浪戸　兄さん。
帶刀　無念さを推量してくれいやい。
兩人　お道理でござりまする。
桂壽　コリヤ〳〵、帶刀、何かと云うて切腹を隙取ると、あの大勢が矢尖にかゝつて、其方は元より、龜千代までが命がないが、キリ〳〵切腹せぬか。
帶刀　全く命惜しんで、猶豫は致しませねども、この帶刀が命あるうちに、主人龜千代さま、阿房拂ひにお遭ひなされてなりとも、この館を首尾ようお出なさるゝが、見て死にたうござりまする。
平馬　先御臺と帶刀、其方が不義して出生した龜千代丸が、親子ぢやに依つて、それ程までに名殘り惜しいか。
帶刀　今まで相役の身として、平馬、そりやあんまりな雜

言。最前おてまへが指圖の、金ゐき油の灯火の影に、あの若君のお姿が映りしゆゑ、御老體の大殿樣の胤ならば、老人の子に影なしと云ふ本文に適ひ、影法師が映らぬ筈。影が映るからは、この帶刀が倅と、推量業なる非道の罪とは思へども、勅使の仰せなれば、勅諚も同然と思ひ、指圖に任せて切腹する、心の内の無念さ奇ッ怪さ。云へば云ふ程、この若君の爲にならぬ……後室樣、こなたの里の娘御に、好い聟を取つて、お手に入つた御綸旨を讓り、この高安の家を、行く末長う納めさつしやりませい。妹、歌助も、この帶刀が菩提の爲と思ひ、あの若君樣へ隨分忠義を盡せ。

浪歌　畏まりました。

龜千　いま切腹する臨終まで、おれが事をそれ程に、大切に思うてたもるか。帶刀。

帶刀　若君樣。これが今生の

龜千　互ひの名殘り。

ト兩人、取りつき泣く。

時平　ヤア、未練の繰り言見苦しい。帶刀が切腹せずば、ソレ。

侍ひ　ハア。

ト侍ひかゝる。見事に投げ、立廻りある。

平馬　手向ひに及ばゝ、飛び道具にて圍へ。

ト侍ひ、弓矢に圍ふ。

帶刀　コリヤ、早まるな。春藤帶刀、只今切腹。

ト帶刀、腹へ突ッ込む。

皆々　ハア。

ト泣く。

桂壽　ヤア／＼平馬、帶刀が切腹した上は、高安の家の古法に任せ、その簑笠を龜千代に着せ、阿房拂ひにせい。

平馬　サア、龜千代立つた。

ト上着を脫がせ、簑笠着せると、笹の井、奥より走り出て

笹井　龜千代さま、淺ましいお姿にならしやんしたなう。

平馬　高安の家の御定法、先祖高安の長者、信道公の御子俊德丸をあの如く、簑笠を着せ、津の國天王寺へ捨てられたる、昔の俊德丸は、繼母のさかしらゆゑ。それに引替へ龜千代どの、こなたは繼母君の情に依つて、命助けて阿房拂ひ、キリ／＼出て行かつしやれい。

帶刀　帶刀が今、腹へ突ッ込み居る九寸五分の苦しみよりあの若君の淺ましいお姿を見る目が辛い。妹も歌助も、

某が息あるうちに、早く御供して行てくれい。
浪戸　アイ〳〵。
ト兩人泣き〳〵、龜千代の側へ寄る。
とても何時まで爰にござりましても、どうでお出でなさらねばならぬ。思ひ諦らめて、お立ちなされませ。
歌助　御出世までの御供は、この歌助が致しまする。
笹井　それ〳〵、わたしもお供いたしまするわいな。若君樣、隙取つてはお爲になりませぬ。サア、お出でなされませ。
ト龜千代が手を取る。龜千代、帶刀の方を見て泣いて居る。
漢林　阿房拂ひの若君樣の供に、女童は無益。この漢林齋が望んでお供いたす。
ト笹の井を引退け、龜千代を足にて蹴やり、
キリ〳〵行かうてや。
ト龜千代、反り打つ。笹の井、氣色して漢林齋にかゝる。歌助、反り打ち無念がる。
帶刀　股を潜る韓信が堪忍も、今この時。必らず無念と思し召すなや。
龜千　さは思へども、今この身になつたればとて、陪臣も同然の醫者づれが、足にかゝつたが口惜しいわいの。
ト泣く。歌助も泣き
歌助　御尤もでござりまする。
笹井　まさかの時は、この笹の井、この世のお供が叶ひませずば、未來のお供いたしまする。マア、時節を待つて下さりませいな。
帶刀　しをらしい笹の井どの、お力になつて下されや。必らず短慮を龜千代さま、お出しなされて下さりますなや。
龜千　ぢやと云うて、忠臣と頼んだ帶刀。其方は切腹しやる。もう龜千代が長らへる心はないわいの。
ト自害せうとする。
笹井　ア、コレ、待つて下さりませいなう。
浪戸　マア〳〵、早まりなされまするな。
ト兩人留める。帶刀、手負ひの體にてあせる。
帶刀　留めて下され〳〵。
歌助　先づお待ちなされませいなう。
ト帶刀、手負ひの體にてあせる思ひ入れ。揉み合ふ所へ、おべく、走り出て龜千代を留めて
べく　ア、コレ、若君樣、敦賀のおぬくが留めた〳〵。惣

れたお前を、なんぼうでも殺さぬ〳〵。一番留めた。
桂壽　ヤイ娘、家法に合はぬ龜千代が、望みの通りに切腹を邪魔すな。此方へ寄つて居いやい。
　ト引退けうとする。おべく振り放す。
平馬　阿母樣の仰せを背くのか。
　ト同じく取りつく。また振り放し
べく　コレ若君、大功は細瑾を顧みず、僅かの無念に切腹せうとは、一國の主にもなるお身に似合はぬ。死は易うして生は難しと云ふ事、御存じござりませぬかいな。
桂壽　ヤア、阿房かと思へば、滅切りと賢い今の一言。
べく　わしを阿房と思はんす、こなさん方が、いかい阿房ぢや。
桂壽　ヤア。
平馬　そんなら今まで阿房と見せたは。
べく　こなさん方を阿房にしたのぢや。母さん、ほんの娘のわたしに迷はしやんすに依つて、その惡心を直さう爲の作り阿房。
桂壽　そんなら賢いか。
べく　サア、わたしが一人前の智惠は、相應に持つて居る程に氣遣ひさしやんすな。龜千代さま、なんぼうでもお前は殺さぬ。
帶刀　おべくどの、その一言聞いた上はとても助からぬこの帶刀に成り代りて、若君の事頼みますぞ。南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。
　ト帶刀死ぬる。皆々大泣き。
べく　帶刀どのゝ今の一言を聞くからは、母さんに背いても若君の後立てには、今からわしがなるぞ。
時平　ヤイ〳〵、おのれ、後室に背いたら、勅使に立つたこの右大辨が許さぬぞ。それでも龜千代が肩を持つか。
平馬　勅使の仰せは勅諚も同然。背く事はなるまい。是非とも背けば違勅の科。どなたでも何奴でも許さぬぞ。
時平　サア、なんとぢや。
べく　あんまり其やうに、勅諚々々と、勅諚を功に着て、許さぬのなんのと云はしやんしたとて、怖がるやうな女ぢやないぞえ。さうして、右大辨の左大辨のと云ふ官は君のお側近う仕へて、口には鷄舌香と云ふ香を含み、手には蘭を握り、なか〳〵輕々しうお前のやうに、反りを打つて犇くやうな作法は、辨家の身にはない事ぢやげにござんす。
時平　わりや、小むづかしい事を、よく知つて居るな。

べく　イヽエ、知つたと云ふ程の事ぢやなけれど、仔細あつて堂上に、お末の宮仕へをした事もあるに依つて、見たり聞いたりして置いた事もあるが、右大辨樣、お前のマアこの御裝束の模樣が違うた。凡そ左右の中將方は立梓染め。右大辨ならば、濃き紅ゐの筈なるを、今は堂上方の作法も替つて、こんな色な御裝束を召しますかえ。

時平　サア、それは。

べく　古へは濃き朱、只今のやうなれば黑き方も召されうなところ、何やらもやくやした物を召してござるは、曖昧な右大辨さまぢやなア。

時平　ハツ、おのれは七むづかしい、アタ猪口才な事知つて居るなア。シタガ、大内の格式、何かの事は、わいらが知つた事ぢやない。何も角も存じて居る、この右大辨に向つて慮外な奴が。

べく　ムウ、そんなら大内の事、何もかも知つてござるぢやな。

時平　知れた事サ。

べく　そんならちよつと尋ねませう。あの花頂山と云ふ額は、紫宸殿にかゝつてござりまするが、淸涼殿にかゝつてござりまするかな。

時平　ヤ。

べく　イエイナ、花頂山といふ額は、どちらにかゝつてござりまするとお尋ね申しまする事でござりまする。

時平　サア、その額は。

べく　その額は。

時平　紫宸殿に。

べく　エヽ、なんと。

時平　イヤサ、淸涼殿にかゝつてある。それがなんとした。

べく　コレイナア、花頂山の額は、都知恩院の山門にかゝつてあるわいな。

時平　ハア。

平馬　さほどまで大内の儀を存じて居るからは、あの右大辨樣も見知つて居るか。

べく　イヤ、どうやらあなたのお顏を見れば、前方お目にかゝつたやうにもあり。

時平　オヽ、殿上の交はりで、見たこともあらうな。さうか。

べく　イエ／＼、殿上の交はりではない。慥かこなさんは、大宮の宰相樣の御家來下部も下部、とつと下部の奴どの。

時平　さう吐かせば、もう赦されぬ。
ト切りかける。
べく　ドツコイ。
ト時平を少し立廻りあつて時平を當てる。
平馬　女、勅使に手向ひするか。
ト切りかける。おべく、白刃にて受けとめ
べく　こりや、なんとさつしやる。
平馬　勅使に敵對ふに依つて免さぬ。
ト又切りかける。立廻りのうちに時平起き上がる。
べく　ありや勅使ではない。似せ者。
平馬　似せ者とは、何を以て吐かすぞ。
ト時平、平馬、兩方より切りかける。立廻りのうちに時平が公家の臺落ちる。おべく、時平が腕を捻ち上げ
べく　なんと、これでも似せ者ではあるまいかな。察するところコリヤ平馬どの、こなたとこの奴が企み、サア、有やうに云はぬか。
時平　アイタヽヽ、成る程／＼申しませう。この企らみの段々は。
ト云はうとする。平馬、時平が首切る。
べく　ヤア、詮議のあるこの似せ公家、何ゆゑ手にかけて殺しやつた。
平馬　此奴、勅使に似せてうせ居つた曲者ぢやに依つて、殺したが、この平馬が誤まりか。
べく　母さん、油斷なされるな。あの醫者樣、勅使と平馬が一つになつて、龜千代どのをも追ひ出し、後ではお前も殺し、平馬、其方がこの家を一呑みにする企みであらうがな。
桂壽　ヤア、そんなら龜千代をも追ひ出させ、帶刀をもあの如く腹切らせ、後ではこの母も殺し、平馬、おのれが高安の家を横領する企みか。
平馬　ア、コレ後室樣、全く左樣な企み致さぬ證據には、御綸旨は、お前に渡してあるぢやござりませぬか。
べく　イヤ／＼母樣、油斷なされな。平馬が謀叛と云ふ證據は、コレこの一通。
ト最前拾ひし狀を出し見せる。
平馬　ヤア、それは。
ト取りに行く。おべく、平馬を突き退け
べく　イヤ、それほどに、聞きたくば讀んで聞かさう。
漢林　その狀はおれが。
ト取らうとする。同じく突き退け

べく　如何にもこの狀は、醫者の漢林齋より平馬への內通紙面。母樣、これをお聞きなされませ。

ト讀む。

一書中にて申し遣はし候ふ、兼ね〲仰せつけられ候ふ金ゑきの油の灯火にて、人の影を映し候へば、老人の子は影映らざる事、奇妙にて御座候ふ、然れども天竺の子滿菓と申す物の實を取り、守りに掛けさせ置き候へば、老人の子にても、右の灯火に影法師あり〱と映り申し候ふ。この手段を巡らし、若君を大殿の子にて、亡き者になさるべく候ふ、委細貴面に申し談ずべく候ふ以上、月日。」

ト讀み

上の名書きは大鳥平馬さま、漢林齋

ト名書きを讀むこなしにて、云ふけれども、狀の上書きには御存じさま漢林齋よりと書いてあるなり。

平馬　ヤア、その狀は、この平馬への書面ではない。大方漢林齋を、あの腹切てくたばつた、家老の帶刀が賴んだに依つて、てつきりと帶刀へ遣はした狀であらうがな。

べく　如何にも、よう知つてぢや。平馬も云ふ名書きはないが、御存じ樣、漢林齋と書いてある事を、こなさんの狀でもないに、どうして知つて居さつしやるな。

平馬　サア、それは。

べく　サア、御存じ樣へ漢林齋と、書いてある事を知つて居さつしやるが、平馬どの、こなたの狀ぢやと云ふ慥かな證據。わしを誠の阿房かと思うて、先刻の時、毒酒を呑まして、殺してしまひ、母樣お前も毒酒で殺す、平馬とあの醫者が企み。底を叩いてわしが聞いたからは、母樣、御油斷なされまするな。

平馬　さう惡事の底を見付けられたからは、おのれを。

ト平馬、漢林齋、切りかける。少しタテあつて、おべく、平馬が刀を取つて、漢林齋に突ッかけ

べく　サア、醫者どの、手向ひすると、この刀を鋒先へ貫くが、なんとぢや。

ト立廻りあつて氣味よく殺す。

平馬　斯う何もかも企みが顯はれた上は、後室も里の娘も、一包めにしまうて取る。觀念せい。

ト切りかける。帶刀、起き上がり、平馬を取つて投げ、縛る。

平馬　ヤア、おのれは蘇生したか。こりやどうぢや。

帶刀　女房久野谷、大儀であつた。

べく　こちの人。
帶刀　思ひの儘に
べく　巧う行きました。
　ト龜千代を圍ふ。
平馬　さては夫婦の奴等が、智略に乘せられたか。エヽ、無念なア。
帶刀　おれが女房は、都で馴染んで、見知らぬを幸ひに、平馬、おのれが企みを見出さう爲に、似せ者の勅使に腹を切つて見せた、正證は後室の手飼ひの、この猫ぢや。
　ト懷中より猫の死骸を出し見せる。
桂壽　ヤア、娘、其方は兼てより、あの帶刀と、夫婦になつて居やつたかいの。
べく　アイ、母さん、喜んで下さんせ。わたしが帶刀どのと夫婦になつて居るからは、お前ももう惡事を企まずとも、高安の家の系圖も、御綸旨も、龜千代さまに渡して下さんせ。
桂壽　イヤ〳〵、高安の家の系圖は、何時の頃よりか見えぬ。
帶刀　妹、兼て云ひつけた系圖は。
浪戸　お前の云ひつけさしやんした、お家の系圖は、兼ねてこの歌助に盜ませて置きました。ソレ、歌助、系圖は。
歌助　密かに盜み取り、これにござりまする。
　ト出す。
べく　サア、系圖は若君のお手に入る。これから母さん、ちやつと御綸旨を若君樣へ渡して下さんせ。
桂壽　イヤ、そりやならぬ。
べく　なぜかえ。
桂壽　あの龜千代は、おれが爲には繼子。ほんの娘の其方に綸旨を遣つて、この高安を讓りたい望みぢやわいの。
べく　モシ〳〵、後室樣、お前の家を讓りたいと思はしやんす里の娘御は、もうこの世にではないわいな。
桂壽　ヤア、そりや又どうして。
べく　コレ〳〵お種、後室樣の里の娘御を連れまして來て逢はせましてたも。
たね　アイ〳〵。
　トお種、奥より、風呂敷包み持ち出て、桂壽院が側へ直し
これがお前のお娘で、誠のおべくさんでござんすわいな。

ト風呂敷開く。女の切り首あり。
べく　めでたう親子の名乘りをさしやんせいな。
桂壽　ヤア、そんならおれが子の里の娘の、これが首か。
ト首に取りつき泣く。
べく　ハア初めての對面に、いかにお力落しでござりまするなア。
桂壽　こりや、何者が殺したぞいやい。
帶刀　里の娘御を殺したはこの帶刀。先刻迎ひの侍ひ、野川久太夫と云ふ奴、この所へ立歸りしに依つて、某が手にかけたれば、この事を今まで後室樣にも御存じない筈。若君に御供して歸る折柄、途中にてこなたの里の娘御を、久太夫がお伴ひ歸るを、手段を以て奪ひ取り、和州牡丹の巖谷と云ふ所にて、得心の上にてこの如く、我が手にかけて首打ちましたれば、惡人の娘でも、日本一の孝行者、せめて首にしてなりと、母樣に對面さしてくれいとの願ひでござつた。
べく　それゆゑに、わたしが下女のお種に、風呂敷にて割掛けさせ、わしはこの首のおべくと云ふ名を借つて、爰へ入込んだも、後室樣、お前の惡心を直し、死んだお人の未來の迷ひを、晴らさう爲でござんすわいなう。サアちやつと御綸旨を、若君樣へ渡しまして下さんせいなう。
桂壽　さう聞くからは、この御綸旨を龜千代丸へ、なんの渡さうぞいやい。
ト桂壽院、綸旨を引裂かうとする。
皆々　ア、コレ、それを。
べく　大事ない〳〵。引裂きたくば、なんぼなりと引裂かしやんせ。誠の綸旨は爰にあるわいな。
ト出す。
桂壽　ムム、そんならそれが、誠の綸旨で、こりや似せ物か。
べく　似せも似せ、眞赤いな、そりや似せ物。
桂壽　エヽ、忌々しい。
ト捨てる。
桂壽　ソレ、此方へおこしをれ。
べく　これ遣つて堪るものか。
おこし居れ。
桂壽　ト揉み合ふ。無理に後室に取られた思ひ入れ。後室取つて戴き
これ遣つてよいものか。

ト云ふうち、後室が捨てた綸旨を、おべく、取り

べく　エヽ、忝ない。

ト戴く。

桂壽　そりや、なんで戴く。

べく　誠の綸旨ぢやに依つて、エヽ、有り難い。

ト又戴き

これ取らうばつかりぢやわいなう。

桂壽　そんならこれは。

べく　開けて見しやんせ。

ト後室明けて

桂壽　なんぢや、淸林信女。これは。

べく　そりや、こなさんの里の子、おべくさんの戒名。

桂壽　エヽ、忌々しい。

べく　佛壇にでも貼つて、回向してやらしやんせ。

桂壽　モウおのれを

トおべくにかゝる。おべく、逃げる。歌助、凜々しく取つて押へる。

平馬　モウおのれを。

ト帶刀へかゝる。立廻りあつて、取つて押へ、刀突きつける。

べく　コレ、こちの人、家を騒がす大惡人なれど、寶は出る、龜千代さまは御代にお出なさる。めでたい折柄、殊さら顔見世の事なれば、命は助けて。

帶刀　それ〳〵、二の替りまでは命は助けた。

べく　いよ〳〵この上ながら。

帶刀　ずいと御贔屓をお賴み申し上げます。

幕

切幕　鍛冶屋の場

役名——石上三太夫 實ハ 石津高右衞門。三上隼人。手間取り、武兵衞。同、小助。同、彌次郎。お針、お縫。一子、梅松。一子、竹松。濡れて淡助 實ハ 貝塚彌源次春永。

造り物、二重舞臺、三間の間、赤壁、暖簾口、橋がかりの方、鍛冶屋見世。鞴場あり、舞臺先に井戸、片釣瓶据ゑあり、男三人、盥にかゝり居る。お縫、お針の風體にて、縫ひ物をして居る。子役二人、寢腹這ひ遊び居る。相槌の音する。この見得にて、幕

明く。

武兵　なんと、小助も彌次郎も、一服しよまいか。親方三太夫さまは、今朝から留守。こちとらが世の中ぢやと思ひの外な仕事の出來ばえ。肩も腰も堪るものぢやない。サア〳〵、一服いたさう〳〵。

小助　イヤモウ、烏の啼かぬ事はあれど、わしらが休む間と云ふは、鞴祭りばかりぢや。此やうに精出すも、親方のお火焼に、あつき食をふんだんにしてやらうと、當がなうては働らかぬてや。

彌次　何を吐かすやら。大枚の給金かいて、牙のやうな飯喰はして置かしやるは、高が使はう爲ぢやわいやい。

兩人　ても、堅うやり居つた。

彌次　コレ、お縫さん、お前もちと休まんせ。親方の氣に入らうと思うて　きつい精の出しやうでごんすの。

ぬひ　イヤモウ、こなさん達のやうに、蔭日向のない奉公人使はしやんす旦那様は、大抵の仕合せぢやござんせん。わしも隨分負けまいと精出すけれど、何を云うても女子の手業、埓の明く事ぢやござんせん。

小助　こちとらの仕事も、膝頭で、はか行きのする事ぢやごんせんてや。

彌次　それ〳〵、ほんの下手の横好き、肩のいる程、精出してもあかぬ事でごんす。

武兵　イヤ、それはさうとお縫さん、お前さんは、きつい手利きぢやげな。これまでお針は、あれ、これ見えれど親方の氣に入らいで、つひに二日と勤めるお針はないが、こなさんがひよいと見えてから、あれもお縫、これもお縫と、きつい縫はしたがりやう。但し又、お前の綻びを縫うてもらやさんせんか。

ぬひ　何を好い加減な事ばつかり。其やうに嬲つて下んするな。わしがやうに不調法な者がお針するも、どうぞして皆さんの氣に入つて、長う目をかけて下さんすやうにと、大抵の心遣ひぢやござんせんわいなア。

ト云ふうち。兩人の子役、せり合ひ居て

竹松　アレ〳〵、母様、わしが持遊びを、梅松が取つたわいなう。

梅松　イヤ〳〵　この人形は、おれがのぢや〳〵。

ト摑み合ふ。お縫、取りさゝへ

ぬひ　これはしたり竹松、何をせり合ふぞ。梅松さん、堪忍して下さりませや。

梅松　イヤ〳〵、わしを敲き居つた。堪忍せぬ〳〵。

ト泣く。

ぬひ　お前は賢い子ぢや。あの竹松は、小母が叱つて置く程に、堪忍して、二人ながら仲好うして、遊んで居て下さんせ。後にこの小母が、好い物を上げう程に、必らず仲好うしませうぞや。

梅松　そんなら好い物下さるか。

ぬひ　オヽ、好い物やりましよ。竹松も無理云やんなや。

竹松　わしにも好い物下んせや。

ぬひ　オヽ、遣りませうとも、賢い子ぢや。父さんのお歸りまで、二人ながらちやつと奥へ行て遊ばんせや。

ト菓子を遣る。

梅松　サア、竹松もおぢや。奥で遊ばう。

ト二人の子役、喜び奥へ入る。

ぬひ　必らず喧嘩しよまいぞ。怪我して下さんすな。それはさうと、この三太夫さまは、わしに留守を任して置いて、出やしやんしたは今朝の事、もう戻つて下さんしさうなもの。お屋敷の御用ぢやとあるからは、なんぞ大切な打ち物の誂へゆゑ、隙のいるのか。こなさん方は、なんと思はしやんすぞ。

武兵　ほんに、怪しからぬ隙のいりやう。小助、彌次郎、一走り迎ひに行て來ぬか。

小助　オツと、こんでる。皆まで云うな。我れら一走り行て來ましよ。

ぬひ　そんなら大儀ながら、迎ひに行て下さんせ。

小助　ハテ、主命なりや、せう事がない。口に使はる身ぞ辛らや。ドリヤ、一走り行て來うか。

ト門口へ出て、向うを見て

小助　ヤア、向うから戻らしやるは、慥かに親方三太夫さまぢやが、武兵衞、彌次郎、アレ〱。

武兵　旦那どのが、侍ひになつて戻らつしやるわい。

兩人　ドレ〱。

ト兩人、表へ出て

ほんに侍ひぢや。ハテ、仔細らしい顏をして戻られるは、お縫さん、ちやつと出て、あれを見やんせ。

ぬひ　何を又、とつけもない。そんな事云はずと、ちとそこらを片付けて下さんせ。ドレ、わしもソロ〱仕事片付けうか。

ト唄になり、お縫、其所らを片付け、箒を持ち、掃く。向うより、石上三太夫、衣裳羽織にて出かけ戻る。三人の男ども、不思議な顏してキヨロリと見て居る。三

三太　太夫、内へ入り
戻つたぞよ……ヤイ、わいらは何をキョロ〳〵して居る。お縫、いま戻つた。
ぬひ　ホウ、三太夫さま、お歸りなされましたか。
三太　オヽ、いま歸つた。今日は世話であらう。して、梅松は何れに居るぞ。機嫌ようして居つたかの。
ぬひ　アイ、たらしつ賺かしつして、いま奥で竹松を相手に、機嫌よう遊んで居てゞござんす。いかうお隙がいつたゆゑ、待ち兼ねましてござんしたが。
　ト三太夫が大小を見て
ヤア、お前のこの姿は。
三太　ホウ、俄かに武士に取立てられて、この大小。なんと好い侍ひにならうがの。
ぬひ　ても、それはめでたさうな事でござりますが、マア、その譯は、どうでござんすぞいなア。
三太　今日伊吹山熊太郎どのより、身共に對面いたしたき儀あり、急ぎ來れよとのお使ひ、定めて打ち物の誂らへであらうと思ひ、何事にもせよ金儲けと、取る物も取り敢へず、彼の屋敷へ行て、鍛冶の三太夫御意に依つて推參仕りましたと披露するや否、大勢の侍ひ、捕つたやらんと身共を取卷く、元より科の覺えなければ、憚る事なし。マア、何科あつて狼藉千萬と、云ふ間も待たぬ痩せ侍ひ、捕つたとかゝる。昔習うた兵法が役に立ち、二三人も頭轉倒と投げたと思や。
　トこの間、仕方話し。
ぬひ　その後は、なんとでござんした。
三太　所へ奥より熊太郎が、蚤取り眼でズッと出て、皆引け引け、ヤイ三太夫、汝を呼び寄せたは餘の儀でない。其方が妹、木辻の傾城、三浦と聞く、その三浦事は、當家の聟、高安藏之助が思ひ者。兩人が仲に誕生いたせし男子ある筈。其方兄弟の縁を以て、右兩人より預け置きしとの風聞。養育いたし居るか。それゆゑ隱すに於ては汝が爲にならん。サ、返答聞かう。どうぢやと尋ねられ
ぬひ　して、返答は、なんとさしやんした。
三太　如何にも、三浦と申すは私しが眞實の妹め。成る程、その倅は預かつて居りまするると、眞直ぐに云うたれば、オヽ、出かした〳〵。藏之助事、出國の砌り、當家の御寶盜み取り行くへ知れず、すりや家國の敵、その敵の胤なれば、その餓鬼とても生け置いては、後日の妨げ、首打つて渡せばよし、異議に及ぶと其方諸とも、縛り首

の相伴さすると、退引きならぬ刀の矢襖。
ト仕方話しする。
ぬひ　アノ、そんなら梅松さまは、藏之助さまのお胤でござんすに依つて、それでお首を。
三太　打つて差上げませうと、請合うて立歸つた。
ぬひ　エ、。
三太　脊に腹は替へられぬ。コレ見や、その褒美とあつて、武士に取立てられ、即ちこの大小。なんと、人の行くへと川の瀬は、定め難ない出世でないか。
ぬひ　すりやアノ、頑是もない梅松さまのお命を。
三太　酉の上刻までに、首打つ約束。
ぬひ　ハツ。
ト泣き落す。
三太　ハテサテ、高が子悴が命一つが、この三太夫が立身の種。これがほんの、小の蟲を殺し、大の蟲を生ける道理。なんと皆の者聞いたか。主人の三太夫が身の立身。其方達も喜ぶであらうな。
小助　イヤモウ、此やうなめでたい事はござりません。
彌次　私しども丶槌を止めにして、足輕になりとなされて下さりませ。

三太　オ、わいらも今日より武士の家來ぢやと心得、出世が致したくば忠を勵め。
皆々　畏まりましてござりまする。
三太　早速ながら、其方達が手始めに、云ひつける用事があるぞ。
皆々　ハイ〱。
ト側へ寄る。
三太　追ツつけ熊太郎どの丶家來、三上隼人と云ふ者、首受取りの使者に來る筈ぢや。この隼人と云ふ奴、只の者ならぬ面魂ひと、兼ねて聞き及ぶ。善惡心得ねば、なかなか油斷ならず、其方達兩人、この下屋に忍び居て、折を窺ひ、隼人めを刺し留めい。
小助　畏まつてはござりまするが、下屋に忍び居りましては、盲目も同然、心元なう存じまする。
三太　その合圖は、コリヤ武兵衞、其方は奏者の役目。あの丶もの丶と隙取らせ、折よき時分を考へて、奧を叩け。
ト舞臺を打ち
この所を窺ひ居て、下屋より鎗玉に。なんと合點いたしたか。
トこの間、お縫、ウロ〱、氣味の惡い思ひ入れあ

り。
三人 心得ました。
三太 最早來るに間もあるまい。右の用意いたせ。三人ともぬかるな。
三人 ハッ。
三太 早く〱。
ト三人の男、奥へ入る。同じくお縫も行かうとする。
三太 コレお縫、待ちや。其方にも云ひつける用がある。奥へ行かずと爰に居や。
ぬひ アイ、なんぞ御用がござんすかえ。
三太 ある段ぢやない。マア、下に居や。
トお縫、下に怖々、思ひ入れして居る。
その用と云ふはの、別の事ぢやない。其方に尋ねたい事もあり、また頼みたい用もある。なんであらうとも、この三太夫が問ふ事、有やうに云うて聞かしや。ア、、どうやら請けの悪い顔つきぢや。
ぬひ アノ三太夫さまとした事が、堅苦しい物の云ひやう。お主も同然のお前の仰しやる事、なんの背きませうぞ。
三太 それはマア忝ない。

ぬひ そしてマア、尋ねたいとは、なんでござんす。
三太 其方の連れ添ふ男の名は、なんと云ふぞ。
ぬひ 何事かと思へば、そつけもない事ばつかり。わたしには男もなし、一人身のかたじけなさ。どなたでもすかすかと、針仕事さへ頼みに來りや、例へ夜が明けて戻つても、誰が叱る者もなし、大抵氣樂な事ぢやござんせん。イヤモウ、持たうより氣樂に暮らせとやらでござんすわいなア。
三太 噓ばつかり。その一人身の其方が又、どうして、あの竹松と云ふ子な出來たぞ。
ぬひ、アイ、六年以前に連合ひに別れましてござんすわいなア。
ト泣く。
三太 ムウ、それで讀めた。若い女子の後家立て、今に男を持たんとは、ハテ、心中な女房ぢやなア。おれもやもめ、若い、その艶々した女中を賴んで置くのを、氣遣ひに思うたが、それ聞いて落ちついた。そんなら、いよいよ賴まれて下んせや。
ぬひ アイ、手に合うた仕立て物なら、云ひつけて下さりませ。

三太　イヤモ、手に合つた事の段ぢやない、願うたり叶うたり、ほんの開いた口へ餅より安い仕事ぢやてに。
ぬひ　假かに侍ひとならしやんした事ぢやに依つて、これまでとは違ひ、小袖の仕立てもむづかしからうに依つて、定めて、その事を誂らへさしやんすのかえ。
三太　オヽ、成る程、さうぢや。縫ひやうも誂らへたし、次手に寸尺も見てもらひたいでごんす。
ぬひ　そりやお前、仕立て物を合はして見たら、大概知れてござんす。
三太　ハテサテ早合點な。町人の時の物を型にしては、道が濟まん。コレ、この着て居る着物の寸尺を、手本にしてもらひたい。ちよつと見て下んせ。
ト舌たろう云ふ。とお縫、三太夫が小袖をあちこちと見る。三太夫、しやち張つて居て見せるこなし。
三太　こちらへ廻つて、褄を見てもらひたい。
トお縫、前の方へ來る。その手を握り
次手に爰も見てもらひたい。
ト手を引ッ張りこなし。コレ滅相なと振り放し、逃げうとする。お縫が褄を捉へ引戻し
なんの大事が。男のあることなんぢやなし、これまで合はして見よう合はして見ようと思うては居たれど、男があると心得て、遠慮して日を延ばした。いま聞けば、誰れが叱り手のないこなさん。幸ひあたりに人もなし、殊におれはやもめ住居の鍛冶屋、相槌がなうては思ふ儘に仕事も出けず、湯加減してもどこやらが行屆かず、遂に鍛冶屋も取措いて、今日からの假か侍ひ、武士の女房にや君がなる、なるかならぬの一口商ひ。コレ、君よ、寸尺合はして下んせなう。
トいろ／＼しなだれる。
ぬひ　エヽ、そつけもない事ばつかり。人が來ると惡い程に、ちやつと放して下さんせ。
三太　大事ない／＼。ちよつと爰へ一針してもらひたい。
ト抱きつく。
ぬひ　てんがうせずと放さんせんか。聲を立てるぞえ。
三太　ハテサテ、泣いても笑うても、おれが家。その手間で、好い返事を頼むワ／＼。
トお縫、振り放し逃げうとする。付け廻しあつて、お
ぬひ、アレ／＼と云うて逃げ廻る。好き所にて又捉へ打こかす。所へ橋がゝりより「伊吹山熊太郎どののお使者」と云ふ。三太夫、この聲にて思はずたろむ

をおつひ打かへし、逃げて入る。三太夫、エ、忌々しいと云うて進はへて奥へ入る。橋がゝりより、三上隼人、上下衣裳にて出かけ、門口に立ち

隼人　頼みませう……誰ぞ頼みたい。

ト奥より、武兵衞、ハイ〳〵と出る。

武兵　どなたでござりまする。

ト表へ行て隼人を見て、腰を屈める。

隼人　石上三太夫どの宅は、これでござるかな。

武兵　ハイ、成る程、これでござりまする。マア〳〵、お通り下さりませ。

ト隼人、靜々內へ入り、上座に直る。

武兵　マア、あなた樣は、どれからお出でなされましたな。

隼人　拙者事は、伊吹山熊太郎どの身內、三上隼人と云ふ者でおぢやる。して、其方は。

武兵　私しは愛な手間取り、イヤサ、某は石上三太夫が家來、花より團子兵衞が弟、多勢に武兵衞と申す者でござりまする。

隼人　ハヽヽヽ、これは氣の輕い御奏者でござるの。して、三太夫どのは、お宿に居召さるか。

武兵　ハイ、主人三太夫、お出での樣子申さん事、口上に取紛れ、延引仕りました。暫らくお待ち下されませい。

隼人　イヤ〳〵、三太夫どのにお目にかゝらぬ先に、先づあなた方へ御挨拶申さねばならぬ。憚りながら各々樣方へ申し上げまする。

ト顏見世の口上になる。此うち、段々あつて、幾年も幾年この舞臺を放れませぬやうにト扇にて舞臺を叩くト下家より隼人が左の方へ鎗の穗先ズツと出る。恟りして、この鎗を品よく摑み、また口上にかゝる。ト又右の方へ鎗を出す。同じく鹽首捉まへて

只今御覽の通り、私しを突かう〳〵と、下家より窺ひまするゆゑ、お頼みの口上を止めさせまする。何卒各々樣のお取立を以て、御贔屓を請け、此方より突き當てまするやうに、お頼み申し上げまする。

ト左右の鎗を引上げる。ト下家より、小助、彌次郎、さうはさせぬと飛び上がり、鎗引ッたくり又突ッかくるを見得よく兩人を取つて投げる。武兵衞、同じく取つてかゝるを投げ飛ばす。ト最前より三太夫、出かけこの體を見て居て

三太　もうよい。下がれ〳〵。

ト三人ともに入る。

ホウ、これは隼人さまでござりまするかな。長途の所、お使者御苦勞千萬に存じまする。先づ〳〵あれへお通り下されませ。

ト隼人、上へ直る。

隼人　ムウ、其許が石上三太夫どのでござるかな。

三太　左樣でござりまする。未だお近付きではござらねども、今日手前へお出での樣子は、先達て承り、お待ち居りましてござります。

隼人　熊太郎さまより御意を蒙むり參つたが、某に何ゆゑあつて只今の狼藉。察するところ、今日御前に於て、お請合ひ申されたる一儀、妹の緣に引かされ、子悴が命を庇ひ、役目に立つ身共を、今の如くの狼藉よな。ハヽヽヽ熊太郎さまは仰せ出されたる事、二度變ぜぬ御氣性、もし三太夫二心に極まらば、其方諸ともに首打つて立歸れとの御上意。サア、返答聞かう。三太夫、なんとぢや。

三太　これは御尤もの御疑ひ。先刻御前にてお請合ひ申し上げ、殊にその恩賞と思し召し、貧しき私し、御家來になされ、御褒美のお詞、何しに御意を背きませうぞ。ちつともお氣遣ひ下されまするな。

隼人　さほどに思ふ其方が、何ゆゑ又狼藉は致させしぞ。

三太　全く狼藉でござりませぬ。今日熊太郎さま仰せ出されには、其方事、魂ひを見込み、家來に取立てくれる。この者もまつた三上隼人と云ふ者、横目の爲に差越す。この者も新參の事なれば、互ひに心を一致にして忠義を盡してくれよとのお賴み。その相役の其許。只今お目にかゝるが始めて。御器量の程を疑ひ、弟子どもに申しつけ、只今の仕合せ。天晴れの御手練、驚ろき入りましてござりまする。

隼人　ムウ、すりや某が嗜なみを

三太　見ませう爲の今の粗忽、眞平御免下されませう。

隼人　左樣とは存ぜず、近頃面目なき不調法。お笑ひを請けまする。

三太　なか〳〵お賴もしう存じまする。

兩人　ハヽヽ。

ト橋がゝりより男一人出て

小助　申し〳〵、三上隼人と云うて、お使者がこれへ見えますが、お逢ひなされまするか。

三太　ナニ、三上隼人と云ふ使者が見えたか。

小助　左樣でござりまする。

三太　アノ隼人。
ト不思議なこなし。
隼人さま、アノ又隼人とは。
ト隼人、三太夫、顏見合せ思ひ入れして
何にもせよ、お通りなされいと云へ。
小助　畏まりました。
ト橋がゝりへ入る。
兩人　ハテ心得ぬ。
ト橋がゝりより、三上隼人、上下衣裳にて出かける。
三太夫出迎ひ
三太　これはお使者、御苦勞に存じまする。先づ〳〵お通り下されませい。
ト三上隼人、上座へ直る。三太夫、手をつかへ
三太　卽ち石上三太夫、私しでござりまする。
隼人　ムウ、拙者事は伊吹山熊太郎殿の身内、三上隼人と申す者でござる。今日御前に於て、其方、殿の仰せつけられたる趣き、早速お請け申されたる段、殿にも滿足に思し召し、大事は小事より事起るとあれば、一時も早く拙者に罷り越し、酉の上刻限に首受取り立歸れとの御意、其許にも御苦勞に存ずる。

三太　委細承知仕りましてござりまする、と申したいが、何とも呑み込まぬ二口のお使者。是非一方は似せ者。殊に口上の次第と云ひ、家名まで同樣の騙り事。何れが似せ、何れが誠と判らぬうちは、滅多に首は渡されぬ。兩人のお使者、鎬の詰まらぬ其うちに、マア、出直してお出でなされい。
後隼　ムウ。すりや身共より先へ、使者と僞はり、來りし者あるとな。
前隼　伊吹山熊太郎どの身内、三上隼人とは身共。殿の御用を承り、先達てこれに扣へ居るに、うぬは又、何者に賴まれ、身が名を騙り、使者呼はり。こな紛れ者めが。
後隼　ハヽヽ、大騙りめが、吐かしたり。伊吹山熊太郎屋敷に於て、隱れなきこの隼人之助。騙る日もあらうに、同日同刻の騙り事。察するところ藏之助めが、一家の奴輩に賴まれてうせたに極まつた。有やうに白狀しをらう。
前隼　ハヽヽ、盜人猛々しう僞はつても叶はぬ事ぢや。尋常に白狀いたせ。異議に及ぶと骨を拉いで云はさすが、よい時分ぢや、云うてしまへ。
後隼　ヤア、うぬ、脊骨を斷つて白狀させうか。

兩人　イヤ、こな大騙りめが。

ト反り打ち立ちかゝる。三太夫、中へ入り

三太　イヤ、御兩人とも、先づお扣へなされう。いま爰でまる所は命の瀬戸際。水かけ論。云ひくろめても、くら烏を鷺に爭うて、云ひ勝つても亦、云ひ負けても、つゞまらぬはこの三太夫。會得せぬうちは、滅多に首は渡されぬ。

後隼　ぢやに依つて、騙りの詮議しぬくのサ。

前隼　白いか黒いが極まらば、首受取つて歸るぞよ。

三太　そりや知れた事。しつかりとした證據があらば、約束の通り首渡さう。サ、證據があるか。

兩人　サ、それは。

三太　サ、その證據になるべき物は、身が帶せしこの大小。

兩人　ムウ、その大小を證據とは。

三太　マア、一人づゝ、この大小見覺えあるか、立寄つて見さつしやれ。

ト三太夫、帶せし刀を鞘口差出す。前の隼人、立寄つて見る。

前隼　ムウ、鍔は南蠻、目貫は金の鹿の子渡し、緣頭は菊にませ垣。

三太　この刀の拵らへ覺えてか。

前隼　サア、いま云ふ通りの拵らへぢやワ。

三太　この拵らへを御存じなりや、其許が隼人どのに違ひはない。

前隼　如何にも、身共が隼人之助に違ひなくば、首受取らう。

三太　とてもの事に、中心の銘が承りたい。

ト前の隼人、刀を手に取り、檢めうとする。三太夫、扣へて

矢張り其まゝ。

前隼　アノ、此まゝ中心の銘を指せか。

三太　如何にもその通り。

前隼　サア、それでは。

三太　サア、承らう。

前隼　サア、それは。

三太　サア。

前隼　サア。

三太　サア〳〵、なんとでござるぞ。

後隼　その大小こそ、殿熊太郎さまのお差替へ、中心は見

ずとも備前の長船。なんと違ひはあるまいがな。
三太　如何にも相違ない。すりや、其許が隼人之助どので
ござるよな。
ト前の隼人、思ひ入れあり
後隼　すりや、疑ひは晴れ申したか。
三太　割符の合うたる今の一言。熊太郎さまの御家來に違
ひござらぬ。ヤア、大騙りめ。何者に頼まれた。
後隼　眞直ぐに白狀せよ。
前隼　サア、その儀は。
三太　踏みつけて繩かけうか。
ト兩人立ちかゝり、反り打つ。前の隼人、兩人を見得
よく利き腕押へ
前隼　コレ〳〵待つた、騙りでないぞ。仔細がある。必ら
す急くまい。早まるまいぞ。
三太　騙りでないとは、まざ〳〵しき僞はり。云ひ譯あら
ば早く吐かせ。
ト前の隼人、下へ飛び下り、上下衣裳脱ぎ捨てる。下
は奴の形にてうづくまる。
兩人　サア、云ひ譯聞かう。サア、どうぢや。
前隼　下郎め事は、殿熊太郎さまのお側去らず、濡れて淡
助と申す、お草履摑みでごわりまする。渡り奉公の悲な
さ、彼の高安の若殿、藏之助どの打惚れ召された、木辻
の傾城三浦が腹より、誕生せし若子ある事よく存じ、何
がな熊太郎さまへの御奉公にと、彼の悴、この家三太夫
どの預かり居らるゝ事、具さに注進いたせしゆゑ、今日
のこの仕儀。討たうと請合つた三太夫どのは、妹の緣、
まつた首受取りのお役目は、それなる隼人さま。その餓
鬼が顏お見知りないゆゑ、その儀心元なく思し召し、熊
太郎さま下郎めに、横目の爲に罷り越し、實否を糺し、
首打たせよとの御意。また、隼人之助さまの御名を騙つ
て入込みしは、兩人の心を探り見んが爲、飼ひ犬に手を
喰はれまいと、下郎めが今日の役目。さてこそ推參仕
りましてごわりまする。
隼人　何とも吞み込めぬ云ひ開き。何にもせよ、繩かけて
詮議のある奴。
三太　イヤ〳〵、先づ〳〵お扣へあられませう。とくと糺
した上での儀。ヤア、今云ふを聞けば、この三太夫が心
を疑ひ、熊太郎さまよりの横目とある。役目にはそれ
それの作法のある者。下郎の身として首實檢などゝ、片
腹痛い役目呼はり。何とも吞み込まん一言。法式存じて

參つたかな。
淡助　法があるやらなんだやら存ぜねども、殿樣よりの御意、畏まつてごわりまするど、直ぐさま爰へ北側の、違ひない〱奴の役目。釣り髭ならぬコレ、このお墨付を押開いて御覽なされいサ。
　ト墨付を差出し見せる。隼人、見て
隼人　こりや殿のお袖判。
三太　すりや相違ござらぬとな。
淡助　なんとこれでも云ひ分が、芥子程でもあらば、批判を打つて御覽候へ〱。
　ト墨付をひけらかす。何れも思ひ入れあり、所へお縫奥より出て、子役を連れ出て、淡助と顔見合せ
ぬひ　ヤア、お前はこちの人。
　ト寄らうとする。
淡助　イヤ、コレ〱、粗相云ふまい。拙者は熊太郎さまの家來、濡れて淡助と云ふ下郎。すりや、爰の者でないぞ。ナ、他所の者を此方の人などゝは、粗相千萬な女中ではあるぞ。
ぬひ　それでもお前は。
淡助　サア〱、爰らあたりが、他人だらけのこの場所へ、出過ぎては爲にならぬ。お主の爲にナ、合點が行たか。
三太　ヤア、お主の爲とは誰が事ぞ。
淡助　サ、お主の爲とは御主人、サ、御主人の熊太郎さまより、御意を請けて參つたる下郎。あの女が紛らはしき悴を連れ出て、身替りなどゝ思ふか。この淡助は横目の役、生顔と死顔は、相恰が替るなどゝ、古めかしき身替り事を、たべるやうな奴でないと申すのでござりまするが、但し三太夫どのも、あの女と馴れ合つての事かな。
　トお縫、思ひ入れして納まる。三太夫、双方へ目を配り居て
三太　ムウ、すりやこの女が連れたるこの悴を、身替りにせうかとの疑ひにな。
淡助　如何にも。
三太　この女はこの頃より、手前に雇ひ置いたる、縫物師のお縫と云ふ者ぢやが、彼れが立振舞ひを見るところに、なか〱針仕事に雇はれ歩く女とは思はれぬゆゑ、色に事寄せ男を問へど、一人身とばかり云うて、身共に心を置く心體。いま淡助の推量に違はぬ、疑はしき女が

底意。この三太夫、あの女と一緒でないと云ふ面晴れに、思ひ付いたる仔細もあれば、隼人さまには今暫らく御休息下されませい。

隼人　成る程、刻限まではまだ間もあれば、鐘を合圖に待ち申さう。

三太　然らば奥の離れ座敷へ。

皆々　先づお通り下されませい。

ト唄になり入る。合ひ方。三太夫、思ひ入れして、菓子盆を取寄せ

三太　コリヤ、お縫、その竹松を爰へ連れておぢや。

ぬひ　アイ。

ト行きかねる思ひ入れ。

三太　用がある。連れて來い。

ぬひ　アイ、この子をなんとなさりますぞ、なんにもこの子の知りやつた事ぢやござんせんわいなア。

三太　ハテ、連れて來いと云ふに、早く連れて來いサ。

ぬひ　アイ。

ト怖々連れて行く。

三太　コリヤ、坊よ。何も怖い事はない程に、小父が側へ來い。好い物やる。

ト竹松、三太夫が側へ寄る。

オヽ、賢い者ぢやなア。

竹松　小父樣、なんぞ下さるか。

三太　オヽ、やろとも〳〵。コリヤ、この菓子が欲しいか。

竹松　欲しいわいなう。

ぬひ　又そりやどうした、さもしい事ぢや。

三太　コレサ、其やうに叱るな。大事ない〳〵。この菓子が欲しくば、この小父が云ふ事をよく聞けよ。

竹松　アイ。

三太　オヽ、賢い者ぢや。われが父はどれぢや。何所に居るぞ。名は何と云ふ。それ云や。

竹松　知らぬわいなう。

三太　そりやどうぢや。サア、賢い者ぢや。ちやつと云へやい。

ト此うち、三太夫、菓子を喰うて見せる。

旨い菓子ぢや。欲しくば早う云へ。サヽア、どうぢや。

竹松　知らぬ程に菓子下され。

三太　知らぬ。

竹松　サア、菓子下され。

三太　エヽ、死太い奴の。親が親ならこの子悴まで、おんなじやうに土死太い。おのれがやうな子悴めには、菓子の代りに喰はす物がある。どう盗人めが。

ト煙管にて頭を酷く叩く。お縫、これはと支へに行くを突き飛ばし當て金を舞臺へ打込み、竹松を縛りつける。お縫、マア待つてと寄るを淡助、引留め支へる。三太夫、鞴を取寄せ、そろ〳〵火を起す拵らへして、足にて鞴を吹く。此うちに極印を燒く。始終合ひ方。

三太　サア、餓鬼め、うぬが父は何れに居て、名は何と云ふ。有やうに吐かせ。われ云はぬと、この燒金を、うぬが面へヂッと云はす。熱い目せぬうち、早く吐かさぬか。どうぢや〳〵。

竹松　もう怺えて下されいなう。

三太　オヽ、堪忍してやりませう。サヽ、キリ〳〵吐かせ。

ぬひ　そりやあんまり胴慾な。なんの科もないその子、元より腹の中で別れた父親、なんのその子が知りませう。知らぬが定。頑是もない竹松を責めうより、親のわたしを責めてなりと、殺してなりとして下さんせ。アヽ、いおらしい、知らぬ事がどう云はれう。エヽ、あんまり酷い、胴慾でござんすわいなア。

三太　ハヽヽ、うぬがその根性を見習うて、此奴までが土死太い。親の代りにこの餓鬼が名代。サア、吐かせ、吐さぬと、斯うして云はすぞ。

竹松　熱いわいなう〳〵。

ト三太夫、燒金を額の先、手の先へ、ちよつ〳〵と突きつける。お縫、見兼ねて淡助を突き退け側へ寄る。淡助、又留める。

三太　熱くば云へ。

竹松　堪忍しやいなう。

ぬひ　もうどうも怺えられぬ。いつそ有やうに。

淡助　コリヤ〳〵女中、うろたへまい。其方も武士の

三太　ヤ、なんと。

淡助　サア、三太夫どのは武士、その武士の家に勤めるからは、うろたへて粗忽な事を云うては、この場の明りが立たぬ。ぢやに依つて、うろたへまい〳〵と、申す事でござりまする。

三太　ムウ、ハヽヽ、其方は深切な者ぢやなア。コリヤお縫、この餓鬼を責めるのは、この三太夫が好まぬ事ぢや。おれを恨むな。奥にけつかるおれが、妹めが子の梅松の身替りに、この竹松を立てやうかと疑うた、淡助が

主人への忠節。その切なる心を思ひ廻して、この餓鬼が面に紛れない、この金印の印を付けて、何所に置いても取違へぬ爲のこの成敗。なんと淡助、其方は本望であらうがな。

淡助　サア、それはな。

三太　但し又、似せ首受取り、腹切る氣か。

淡助　サア左樣では。

三太　左樣でなくば、この餓鬼を責め苛なんで、其方が疑ひ晴らさせう。サア、觀念ひろげ。

ト燒金にて當てかける。淡助、見兼ね、その手をしつかり取る。立廻りにて、

三太　ヤア、淡助、こりや詮議の邪魔するのか。

淡助　イヤ、邪魔は仕らん。あまり手緩いなされ方。少と淡助めが代らうと存じて。

三太　すりや、其方が責めるぢやまで。

淡助　如何にも、責めてお目にかけませう。

ト燒き金を引ッたくる。

三太　サア、目通りで責めて見せい。

淡助　アノお目通りで。

三太　くどい……早く〱。

淡助　ナイ。

ト鞴にかゝる。お縫、淡助が手に取りつき

ぬひ　コレ、こちの、サ、こちのこの子を、こなさんの手にかけて責めるとは、そりやあんまりな。

淡助　サ、何があんまり。負うた子よりも抱へた子を持つて、泣かぬ親はなけれども、その大切な抱へた子の爲ぢやと、思ひ諦めて、吠えな。泣くな。

トしいをりと兩人沈む。

三太　サア、早く責めい。

ト三太夫、莨のむ。

淡助　サア、竹松とやら、今この燒き金を、其方がこの柔かい體に當てるわい。二度と父にも母にも逢はれぬぞよ。その熱い苦しい目をせぬうちに、われが父が名を云へ。サ、早う云へ。どうぢや。

竹松　知らぬ。怺えて下されいなう。

淡助　古へ此花咲耶姫の御子、火々出見の尊は、誠を以て火難を遁がれ給ふと聞く。其方もその尊に引替へて、父なきが誠ならば、この鞴の火焔遁がれよ。不便ながらも今が絶體絶命。是非に及ばぬ。

ト竹松に燒き金を突きつける思ひ入れして、我が膝へ

當てる。竹松、アレ〳〵と泣く。淡助、苦しきこなし。お縫もあせり、思ひ入れする。三太夫、好い氣味顏に見て居る。

三太　淡助、白狀させたか、どうぢや。

淡助　御覽の通り、最前よりいろ〳〵責めますれども、知らぬとばかり申して、正氣を取失ひ、しかと樣子相知れませぬ。この上は手を替へ品を替へ、水責めに仕り、問ひ落してお手に入れませう。この女諸ともに、暫らくの間、この淡助めにお預け下されませい。

三太　イヤ〳〵、責めるが好い慰み。また身共が責めかけうか。

ト また輔にかゝるを突き退ける。

三太　ヤア、淡助、こりや何とする。

淡助　イヤ、何とも仕りませんてや。

三太　何ともせん者が、今のはなんぢや。

淡助　今のでござるか。ありやお前のお爲を存じて、ちよつとばかり出かけましたのでござりまする。

三太　爲とは又、どうして身が爲ぢや。

淡加　詮議のかゝつた兩人の者、無益に責めて相果てなば、何を捉へて御詮議なさるゝな。

三太　サア、それは。

淡助　ぢやに依つて、淡助めが手を替へて、問ひ落さうと申したが、誤まりでござるかな。

三太　其所へ心が付かなんだ。下郎なれども今日の横目役。粗忽があれば其方が身の上。兩人ともに其方に預ける。責め苛なんで白狀させい。身共は奥で待つて居る。必らずキッと預けたぞよ。

淡助　畏まつてござりまする。

ト 唄になり、三太夫、奥へ入る。兩人殘り、吐息つき竹松を解き介抱する。

ぬひ　こちの人。

ト 淡助、袖で口を塞ぐ。

淡助　聲が高い。靜かに〳〵。

ト 小聲にて思ひ入れあり

ぬひ　イエ〳〵、こればつかりは云はねばならぬ。お前はマア六年以前に、武者修行に立つと國を出やしやんして、ようも〳〵便りをして下さんせなんだなア。大方わたしに愛想が盡きて、置去りになつたのかと、お前のお行くへ尋ねん爲、ほんに願かけぬ神樣はござんせぬ。あんまり胴慾なお心と、恨みてばつかり居りましたが、今日爰

で思ひがけなうお目にかゝつたは、まだしも盡きせぬ縁か。御息災なお顏を見たゆゑか、その嬉しさにめで、なんにも云ひませぬ。してマア、淺ましいこの姿。どう云ふ事で此やうな、下郎奉公なされてござんすぞいなア。

ト泣く。

淡助　オヽ、その不審は尤も。さぞ恨みて居たであらう。その譯と云ふは、若殿藏之助さま御出國遊ばされ、後にて所々方々と探すれども、お行くへ知れず。伊吹山のお屋敷は、惡人輩の企みに依つて、大殿樣も御流浪。これ皆若殿の御出國より起りし事。天が下にござらば二度御代に奉らん事あるまじと、津々浦々まで渡り奉公人となつて入込みしゆゑ、若殿の御安否も知れ、身共が忠義も立つたるぞ。女房ども、喜んでたも。

ぬひ　そりやマア、お手柄でござんした。それに又、あの大惡人の熊太郎へ、何ゆゑ一味して下さります。

淡助　これとても、彼れらが惡事の底を探り見ん、計略ぢやわやい。して其方が、この家へ入込み居る仔細は。

ぬひ　藏之助さまのお胤、梅松さま、この家の三太夫預かり居る事心元なく、お針となつて見え隱れのお伽。もしもの事あらば、この子が身替りの心當でござんす。

淡助　その事は案じなぢやが、してこの子は、こりやどうぞ。

ぬひ　アイ、お前の出やしやんした後で產んだ、わたしが子でござんす。

淡助　すりや、その節、五月ぢやと云うたが、その子が此やうになつたか。

ぬひ　アイ、さうぢやわいなア。

淡助　ても、親は無うても子は育つぢやなア。

ぬひ　日頃其方の逢ひたがりやつた父樣ぢや。ちやつと挨拶をしや。

竹松　父樣、よう戾つて下さつた。

淡助　オヽ出かした。よう云うたなア。

ト抱き上げうとする所へ、隼人、最前より窺ひ居て

隼人　ヤア、樣子は聞いた。繩かけて注進する。

ト立ちかゝるを引ッ外して取つて伏せ

淡助　コリヤ女房ども。梅松さまが心元ない。爰に構はず、奧へ行け。

ぬひ　心得ました。

三太　トお縫、奥へ入る。隼人、起き上がり、切りかけるを、立廻りにて隼人を淡助刺し殺す。と奥にて人音するゆゑ、死骸を前なる井戸へ打込み、血の零れたを水にて流すこなしある所へ、三太夫出かけ、顔見合せ、淡助、悔りの思ひ入れして、素知らぬ體にて居る。
淡助、其方は爰に何して居るぞ。

淡助　エ、。

三太　何して居たぞ。

淡助　アノ私しは。

三太　私しは何して居た。

淡助　アイ、それ〳〵、ナニ、アノ釣瓶で、オ、ソレ、水責めの水の用意を仕掛けうと存じて。

三太　アノ、水責めか。

淡助　アイ、左樣でござります。

三太　ハ、、、幸ひ〳〵、最前あの子倅めにかゝつて、鞴でいから手を汚した。淡助。

淡助　ナイ。

三太　大儀ながら、一釣瓶水が欲しい。汲んでくれ。

淡助　アノ、この水をな。

三太　如何にも、掛けてもらひたい。

淡助　ハイ。
　ト汲み兼ねる。

三太　但し、否か。

淡助　否ではござらねども。

三太　アヽ、人を使へば苦を使ふ。ドレ。
　ト井戸にかゝるを、淡助、品よく引留め、汲まさぬ思ひ入れ。

三太　コリヤ、なんとするぞ。

淡助　イヤ、汲んで上げませうと存じて。

三太　汲むか。

淡助　ナイ。

三太　サア、汲め。

淡助　ナイ。

三太　サア。

淡助　サア〳〵〳〵。
　ト淡助、釣瓶にかゝり、思ひ入れして下ろす。ト三太夫、切らうとする。ちやつと留める。また汲みにかゝる。拔打ちに切りかけるを、立廻りにて釣瓶で受け留め、いろ〳〵あつて、見得にてしやんと留める。ト奥にて水氣立つ。

三太　ハレ心得ぬ。今の水氣。正しく古戰場の氣火に似て、血の凝つたる所の陰火。この井の中に。

ト立廻りになる。

淡助　稀代の珍事は時日の凶事。先づ汝が俗姓聞かう。

三太　さう云ふぬが俗姓から。

ト付け廻しになり、互ひに俗姓々々と睨み合ひ、また打ち合す。

淡助　サア、吐かせ。

三太　オヽ、何を隱さう身共が事は、伊吹山の館に由緣のある、熊太郎を虜になして、家國をしてやらんと兼ての大望。身が本名は石津高右衞門と云ふ者ぢや。

淡助　オヽ、それ聞くからは、もうよい／＼。藏之助さまの身内、貝塚彌源次春永が繩かける。覺悟せい。

トまた立廻りあつて、三太夫を追ひ込む所へ、お縫出て、彌源次どの／＼と呼び廻る所へ、鍛冶屋の手間取り三人出て、やらぬと取卷く。これより相槌のタテあつて追ひ込む所へ、侍ひ大勢出て、忍び込む。奥より淡助、大童にて、見得よき形にて、いろ／＼タテあつて追ひ込む。三太夫出る。淡助、立歸り

淡助　ヤア、高右衞門、覺悟せい。

ト「オ、合點ぢや」と切り結び、三太夫に繩かける所へ、お縫何れも落合ひ

ぬひ　ヤア、こちの人、怪我はござんせなんだか。

淡助　オヽ、氣遣ひすな。して、負うた子も抱いた子も。

ぬひ　健にござんす。

淡助　敵は亡ぶる。めでたい／＼。これより直さまお國入り。

皆々　お立ち／＼。

ト打出し。

寶來山金礎（終り）

卷頭「御攝勸進帳」初演紋番付

花櫓橘系圖

花櫓橘系圖

寛政十年、市村座の顔見世狂言で、作者は金井由輔である。市村座は長いこと休座して、控へ櫓の桐長桐が、代つて興行して居たのだが、この時久しぶりに復興して、華々しい顔見世興行を打つたところから、名題もその意味を祝つてあるので、太平記の世界を選んだのも、市村座の紋の橘に由縁のある爲であらう。顔見世としては割合に整つた、面白い狂言だ。序幕の「暫く」を天の岩戸の趣向にしたのも、同じく復興の意を寓したのであらうが、なか／＼の名案である。切幕の角力の淨瑠璃も、當時は有名なものであつた。

役割は左の通りである。

村上彦四郎義照。妻鹿孫三郎長宗。大森彦七盛長（市川男女藏）衛士藤六實ハ和田新兵衛正高。兒島三郎高德（二世坂東三津五郎）下部郷内實ハ志貴源八正武。戸野の大彌太（嵐三八）傾城島守の袖。彦四郎妹夕榮（瀨川菊四郎）淵邊伊賀守景純（坂東又太郎）多治見四郎次郎國長。長非前助實ハ名張八郞利種（尾上雷助）和田新左衛門正幸。女乞食お吉（中村歌七）小見山次郎行緐。武隈松内（嵐豊前）河野次郎信重（大谷連藏）舟田軍藤胤季。唐崎松八（坂東幾三郎）陶山七郎貞政。女乞食お秀（中村熊藏）爪生權藤盛淸（嵐愛藏）朝山兵藏時澄。鐘掛松平（市川善藏）名越平藏定國。曾根松藏（坂田八藏）平賀三郎光俊（嵐富五郎）五大院宗貰（坂田時藏）奥陸判官時英。手代佐兵衛（嵐七五郎）平賀女房尾の原（中村富瀧）多治見妹若竹（小佐川七藏）彌三郎妹楓（坂東富治）篠村源吾（市川桝次郎）同妹夏菊（瀨川三代藏）湯淺孫六入道成佛。八瀨藤内（中島勘左衛門）須田次郎秀恒（桐ヶ谷紋藏）高橋九郎宗重。奴下馬平（松本國五郎）應塔の君（市川濱藏）仲居お縫（瀨川雄次郎）新兵衛妻樗。高德妹初霜（松本米三郎）足利治部大輔尊氏。町抱へ、千本の松實ハ相模次郎時行。杉本佐兵衛實ハ長崎勘解由左衛門（尾上松助）正行妻櫻井。十津川のお靜（三世瀨川菊之丞）座頭多賀都實ハ土岐十郎賴定。若重八津兵衛實ハ楠帶刀正行。小烏賣り次郎助實ハ脇屋次郎義助（三世市川八百藏）新田左衛門佐義晴。下男與四郎實ハ恩地左五郎正秀（中村傳九郎）

花櫓橘系圖

第一番目三建目　二階堂ケ谷の場

大薩摩連中

役名――應塔の君。足利治部大輔尊氏。渕邊伊賀守景純。新田左衞門佐義晴。和田新兵衞妻、楫。多治見四郎次郎國長。傾城、島守の袖。湯淺孫六入道成佛。高橋九郎宗重。五大院十郎宗貫。名越平藏定國。瓜生權藤成淸。船田軍藤胤季。須田治郎秀恒。小見山次郎行景。朝山平藏時澄。河野八郎信重。陶山七郎貞政。村上彥四郎義照。

本舞臺。三間の間、一面の岩組み、天の岩戸と見せたる土の牢。蔦葛生ひ茂り、左右の柱、松の大樹、右土の牢に大きなる注連繩を一杯に張り、すべて鎌倉の二階堂ケ谷の景色。この飾りよろしく幕明く。

ト神樂を碎いたる鳴り物になり、花道より高橋九郎宗重、先に、上下衣裳にて、榊の枝を擔ぎて出て來る。次に五大院の十郎宗貫、日蔭の葛を三方に載せ、持つて出て來る。次に名越平藏定國、弓を擔ぎ出て來る。次に瓜生權藤成淸、鉾を擔ぎ出る。次に船田軍藤胤季、誂らへの柄杓を擔ぎ出て來る。東の花道より須田次郎秀恒先に、上下衣裳にて幣を擔ぎ出て來る。次に小見山次郎行景、誂らへの枝を擔ぎ出る。次に朝山平藏時澄、誂らへの劒を持ち出る。次に河野八郎信重、篠竹を擔ぎ出て來る。次に陶山七郎貞政、神水を入れたる桶を擔ぎ出る。五大院宗貫より後、殘らず衣裳の上へ白張を引ッ掛け、烏帽子にて、右の人數、十種の樂器と野鷄と白鷄を、片手に一羽づつ抱へ、双方一緒に出て來り、花道に並よく並び、よろしく納まる。

宗重　尊氏公の官位を祝し、天の岩戸の神樂月。先づ第一番は榊にて、天竺にては波羅陀木。高橋九郎宗重が、持參なしたる神祇の一具。

秀恒　さて二番目の官幣は、變らぬ松の常世まで、長啼鷄と諸ともに、須田次郎秀恒が、君を壽く獻げ物。

宗貫　また三番目は日蔭の葛、五大院の十郎宗貫が、持參

の一品。

行景　四番は神の御杖にて、小見山次郎行景なり。

定國　五番は弓も引き方と、名越平藏定國が、當り外さぬ當り的。

時澄　さて六番目は劍にて、鞘に納まる時津風、朝山平藏時澄なり。

成淸　七番目には鉾々の、饅頭ならで瓜生權藤、成淸が持參の一物。

信重　八番目は篠竹の、割つて見せたいその心は、どうとも河野八郎信重。

胤季　九番は杓に汲み込んで、外へ洩らさぬ大入りは、湊も榮ふ船田軍藤胤季。

貞政　さて十番の納まりは、桶に入つたる神水の、淸さを汲んで陶山七郎、貞政が持參なり。

宗重　合せて十種の神いさめ。

秀恒　尊氏公の御位を、仰がん爲に我れ〳〵が

宗秀　これまで持參。

皆々　仕つてござりまする。

ト大薩摩淨瑠璃。

〽面白や、天の岩戸を寫すなる、神の昔を今爰に、鎌倉山の二階堂、宮を籠めたる尊氏の、衣冠の形相威あつて猛く、千早振るなる有樣は、今日顏見世の神樂月。

ト直ぐに尊氏の出御と呼ぶ。これにて天王立ちに神樂を受けたる鳴り物になり、岩臺の上に足利治部大輔尊氏、金冠白衣にて、左の手に錦の旗を引ッ摑み、右に笏を振り上げたる見得。こなたに淵邊伊賀守景純、赤ッ面、上下、高股立ちにて、尊氏に長柄を翳し掛けて居る。新田左衞門佐義晴、尊氏が持つたる旗の裾を扣へ居る。下の方に和田新兵衞の妻㮶、千早を掛げたる巫女の形にて、四手切り掛けし榊の枝を掲げて居る。この見得よろしく、一面にセリ上がる。此うち花道の人數、殘らず舞臺へ並よく居並ぶ。鳴り物打上げる。よき程に仕丁大勢後へ並ぶ。

尊氏　誠や、萬點の螢火は、太陽の光に敵せず。

景純　日を招く魯陽が勢ひにも、おさ〳〵劣らぬ君の御威勢。

義晴　月明らかならんとすれど、黒雲これを覆ひ殘星光りを奪はるゝの譬へ。

㮶　いま足利將軍尊氏、鎌倉山に鷹狩の歸るさ。梅ケ谷にて須田高橋が、捕へ來りしとある應塔の君。この尊氏

に手向ひ立て。その身に報つて土の牢、糺明の折に幸ひ、この二階堂ケ谷を天の岩戸に象り、神の御末を映すなる。日月打つたる錦の旗、金冠白衣も君を學び、一天四海を掌握は、項羽が推して覇王となりし、この場の吉左右、喜べ景純。

皆々　只々おめでたう存じ奉ります。

景純　仰せの通りこの淵邊も、久し振りでのお目見得は、赤ッ面なる猿田彥。岩戸に准らふ土の牢、應塔の君を糺明は、これ南朝の常闇と、北朝の御威勢は、朝日を輝かす日月の御旗へ、ちよつかいを、さツ掛けたのを、誰れかと思へば、脇屋次郎義助が弟、新田義晴、べんなごまでが同じやうに、なぜ邪魔をひろぐヱ、。

義晴　ヤア、勿體なきこの振舞ひ、天照します神孫を、受嗣ぎたまふ應塔の君。荒くれ武士の計らひにて、土の獄屋の御苦しみ、見るもいぶせき我れ／＼が、胸も迫りし常闇同然。

椢　日月の御旗を奪ひ、應塔の君さまを、獄屋へ押籠め奉る、身の程知らぬ出立ちも、鈿女の命に准らへて、巫女が袖振る神いさめ。岩戸を開き宮樣を、お助け申さん、義晴さま。

義晴　云ふにや及ぶ。それより先づ、日月のその御旗。

ト引取らうとするを、尊氏振り切る。伊賀守、義晴を引退ける。立廻りあつて

尊氏　ヤア、不敵なる兩人が振舞ひ。麿が手に入る日月の旗、うぬに渡していゝものか。新田足利確執となつて後、楠正成は湊川の泡と消え、義貞は北國の雪に、その名を埋んだる、馬鹿大將に緣ある義晴、刃向ひ立ては及ばぬ事、叶はぬ事だ。

景純　いま鎌倉に權威を振ひ、草木も靡く尊氏公。追ッつけ四海掌握の、前祝ひの神いさめ。

宗重　それなればこそ我れ／＼も、冠裝束引ッ張つて、差詰め君の右大臣、だから大藏卿の大將。

秀恒　花の遣り手や若い者、山吹色より山鳩の、御意がよければ下地が好き、通ひ車は少將の、官位で押して色男。

宗貫　檢非違使よりは劒菱の、酒に目のないその證據は、喰ひ倒れと人も呼ぶ。

行景　此方は下戶なら大納言、小豆餅やら種持ちやら、處斑は猫間の中將。

定國　鼠啼きして中納言、彼の在原の豆男、豆に添うたる七色の、茶漬は鳴子の一杯盛り。

時澄　二杯三杯五位六位、質屋の藏へ沖の石、乾く間もなき歌枕。
成清　三十一文字は彌宜神主、枕相手の鍋取り公家。
信重　手綱提げたらちん〱の、野鴨と見せた締鳥は、これ殺生の關白なり。
胤季　關白よりは椀白に、壽命長袖榮華の樂しみ。
貞政　追ツつけ君の位山、千秋萬歳この上も、なう。
ト長く引く。
景純　大べら坊め。只々君の御政德、恐悦至極に
皆々　存じ奉ります。
尊氏　如何にも汝等が申す如く、日月の旗手に入る上は、月卿雲客切り從へ、安座なすは瞬くうち。命惜しくば新田義晴、この場に於て降參しろ。
義晴　ヤア、降參とは穢らはしい。推して官位の冠裝束、事を糺さば朝敵の尊氏どの。應塔の君さまを謀叛などとは、此方より其方に報ふ天の罰。
梢　女でこそあれ、和田新兵衛が妻の梢、宮樣のお命を、助け申してその御旗。サア、尋常に渡し召されい。
景純　なにを。
義晴　でも。
皆々　小癪な事を。
ト何れもキッとなる。この時下座バタ〱にて、湯淺孫六入道成佛、けいせい島守の袖を引立て出て來る。後より多治見四郎次郎國長、追ひ駈け出て來て、舞臺よき所にて立廻りあつて、キッと見得。
景純　ヤア、貴殿は孫六入道。
義晴　四郎次郎國長ならずや。
梢　お前は先刻の。
島守　サア、お前に別れてこの手籠め、思ひがけない義晴さま。
孫六　死太い女郎め。兼ねてより我が君の御執心ある、島守の袖、お手に入れんと引立てるを、妨げなす四郎次郎、君の御前だ、座が高い、とつとゝ爰を下がるまいか。
國長　イヽヤ下がらぬ。この場の樣子、何れもと云ひ尊氏公、金冠白衣の出立ちは、何とも以てその意を得ぬ。
義晴　それゆゑにこそ義晴が、心を碎く日月の旗と云ひ
梢　應塔の君は、アレあの土牢へ、押籠めの御身となられたわいなア。
國長　すりや、君樣を。
ト立ちかゝらうとするを、皆々突据ゑ

皆々　寄りやァがるな。

ト取巻く。尊氏、これを見て

尊氏　出かしたり孫六入道、尊氏がこの日頃、心をかけし島守の袖。幸ひの折柄、口説き落して手に入れよ。

孫六　すりや、この場にて。

尊氏　得心せずば戀の仇、義晴始め妨げなす、四郎次郎國長と云ひ、和田の女房楫始め、四人の首をぶッ放せ。

義晴　すりや、義晴に繋がる妹脊。

島守　戀の恨みを目前に

楫　楫と云ひ

國長　この國長。

景純　御心に從ふか。

孫六　幕下に附くか。

尊氏　二つに一つが生死の境。

景純　サア、返答は。

皆々　どうだエ、。

義晴　すりや、手ざす事もならぬか。

三人　義晴さま。

義晴　國長。

四人　エヽ、殘念なア。

ト無念の思ひ入れ。

尊氏　ヤア、小癪なる命知らず。人の花と詠めさするもむやくしい。並べて置いて首を刎ねる。その太刀取りは淵邊を始め、孫六入道須田高橋、また土の牢へ押籠め置きし、應塔の君をこれへ引出せ。者ども、岩戸を押ッ開け。

八人　すりや、應塔の君と云ひ

四人　四人の太刀取り我れ／＼に。

尊氏　急いで皆々用意しろ。

皆々　委細、畏まつてござります。

ト三保になり、尊氏は眼を配つてこなし。上の方に義晴、島守の袖、楫、國長、これを引据ゑて、景純、先に、宗重、秀恒、孫六入道、太刀拔き翳して後に立つ。殘る八人、岩戸の左右に分れて立ちかゝりたる見得。

景純　何れもよろしくあつて
上意に依つて應塔の君。

八人　君の仇なる新田義晴。

宗重　妨げなす楫始め

秀恒　御心に背く島守の袖。

孫六　多治見四郎次郎國長。

景仕　尊氏公の嚴命を受け、四人の細首目前に、牢居の扉

を
皆々 ドリヤ。
ト八人、牢へ手を掛ける。四人、並よく刀を振り上げる。向う揚げ幕にて
義照 暫らく。
皆々 イヤア。
尊氏 待て〳〵。いま足利尊氏が下知に依つて、岩戸に象る土の牢、打込め置いたる應塔の君と云ひ、四人の奴等が首を刎ねる、折に臨んで
景住 あの揚げ幕から大音に
三人 暫らくと聲を掛けたは。
皆々 何奴だエ、。
義照 暫らく。
皆々 暫らくとは。
義照 暫らく〳〵〳〵〳〵。
ト皆々向うを見てキッと思ひ入れ。
〽勇ましや、勇力まさに手力雄、今ぞ日の出の角髪、村上彦四郎義照は。
ト人寄せになり、義照出る。
〽一陽嘉儀を壽きし、三升の素袍掛け烏帽子、名に橘の揚げ幕を、切つて放せしその矢聲、あたりを睨んで立つたるは、勇々しかりける次第なり。
ト花道中程、吉例の處に留まる。
皆々 どつこい。
景純 合點のゆかぬ事だはえ。いま我が君尊氏公の下知に依つて、四人の首をぶッ放さんとする所へ、暫らくと聲を掛け、のたくりつん出た角前髮。そもそ先づうぬア
皆々 何奴だエ、。
ト義照こなしあつて
義照 遠からん者は音羽屋に聞け、近くば寄つてめでたくも、改まつたる櫓幕、これ門前に市村の、願ひの風が葺屋町、花橘の座頭に、許しを受けたる三升株、柿の素袍に納豆烏帽子、黑い常闇同然に、この手力雄の前髪が、岩戸を取つて明らけき、神の御末の顔見世は、面も白き鼠木戸、ちとたちくらの繁昌は、大黑柱の冬構へ、竈ひ拂ひの託宣に、お前を見れば松植ゑて、重ね扇の二つ引、尊氏どのゝ我まゝに、坂東武士の赤ッ面、疱瘡神の前立ちめら、惡魔の守は爰から出ます荒事師、親代々の筋隈は、事も愚かや畏れある、應塔の君樣が、股肱耳目と呼ばれたる、村上彦四郎義照。力量の店請けは張良樊噲、

請け人は諸葛孔明趙雲に、關羽左衛門が厄介者、太平樂の巻き物は、これぞお江戸の花櫓、橘系圖の暫らくと、ホ、敬つて白す。

皆々　どつこい。

尊氏　待て〳〵。いま暫らくと聲を掛けて、のさばり出た小僧を見れば、應塔の君が茶の給仕をする、村上彦四郎義照だな。あぐらも切れぬ分際で、尊氏が下知を暫らくとは、食過ぎたかぶッ囀りめ。ひいの蟲の出ぬ先に、丁稚相應、灰吹の掃除でもしろ。見るも目の毒、穢らはしい。誰れかある、塵取へ捨てゝしまへ。

四人　畏まつてござります。

景純　サア、我が君の御意が出た程に、何れも、あの若衆を引立てようではござらぬか。

宗重　成る程、それがようござる。この引立ては、差詰め新參の手柄始め、入道のお手柄が、見たい〳〵。

孫六　然らば、アノ、引立てに拙者が。

皆々　サア〳〵、早くお出でなされい〳〵。

孫六　こりやア飛んだ事だ。シタガ、何れものお見出しにあづかつたこの入道、ようござる。拙者が引立て、お目にかけう。とは云ふものゝ、久しく上方に居たに依つて惡態もなまけて弱く見えにやアえゝが。なんでも强みに張込まうとは思ふが、引立ての勝手を忘れて、どうかコレ氣味が惡い。

宗重　ハテサテ、卑怯な入道どの。なんでも持ち前の江戸ぜりふで、行かつしやい〳〵。

孫六　イカサマ、皮切りが大切だ。思ひ切つてやらかすべい。

皆々　サア、お手柄の程が、見たい〳〵。

孫六　見物さつしやい。ドリヤ〳〵。

ト義照が側へ來て

丁稚め、立てやい。

義照　うぬは見馴れぬづく入だが、何處から出た芋掘り坊主だ。

孫六　不便や此奴は知らないな。知らずば云つて聞かすべい。足利將軍尊氏公のお氣に入り、湯淺孫六入道成佛とは、おれが事だワ。

義照　なんだ成佛だ。そりやアいゝ覺悟だ。引立ては叶はぬ程に、成佛して消えろ。

孫六　イヽヤ消えない白無垢の、丸括け帶は芳町客、坊主頭に若衆の出合ひ、下に置かれぬ二階笠、ちよつぴり

酒の勘左衞門、赤いは日の出の色若衆、この入道がお寐間の伽。いま引立てる。其處を立て。

義照　ハヽヽヽ、うぬらに靡く前髪だと思やアがるか。羽根ッぱたきをひろがずとも、早く其處を飛び去るまいか。

孫六　なんだ。おれに飛び去れ。

義照　ハテ知れた事だ。うぬが名の烏から出た勘左衞門。

孫六　ナニ、烏とは。

義照　オヽ、鵜の眞似せずと、早くすッ込め。

孫六　さう吐かしやア、うぬ。

ト手を振り上げる。

義照　なにを。

ト睨みつける。これにて入道手をすッ込め

孫六　東雲告ぐる明烏。カア／＼／＼。

ト袖を羽根のやうにして飛びながら舞臺へ來る。

宗重　なんの事だ。飴賣りぢやアあるめえし。

皆々　嗜まつしやい／＼。

宗貫　イヤモウ、彼奴、大抵の奴ではござらぬ。所詮一人では行くまい。

定國　然らば一緒に我れ／＼も

皆々　連れ男子もようござらう。

孫六　其處が彼の多勢に無勢、大勢寄つて一時も早く、引立てるが、君への忠義。行かつしやい／＼。

行景　行かいでなんと致さう。一人ではちと氣味が惡い。大勢でござれば、何れも氣を丈夫に持つて、サア／＼參らう。

皆々　ドリヤ／＼。

ト宗貫先に、行景、定國、時澄、胤季、貞政、花道へ並び

立てやい。

義照　なんだ、此奴等は。白張を引張つて、何處の神主、宮雀だ。

宗貫　雀とは慮外な奴。尊氏公の上意にて、引立てる我れ我れ、細言云はずと

皆々　立てやい。

義照　うぬらが手際で立つやうな、村上ぢやアねえぞ。御幣擔ぎの禰宜めら。

皆々　處をおいらが

義照　かしましいわえ。

ト睨みつける。何れもこれにて

皆々　鹿島浦にはなんな。

ト皆々かしましく踊りながら舞臺へ來る。

景純　最前から見るところ、推參なる素丁稚め、尊氏公のお目障りだ。其處を立去らぬが最後、この淵邊伊賀守が新參の奉公始めに引ッ立てるが、惡くじくねると、首と胴との放れ際。命惜しくば其まゝに、とつとゝ消えてなくなるまいか。

義照　此奴はせりふに、ちつと身があるわえ。立てと吐かすに依つて、望みの通り立つ上は、後へ寄らぬ。先づコレお神輿を持たずとも、おれが其處へ行くが最後、片ッ端から命の安賣り。外科醫者へ人を遣れ。頭の缺けの用心しろ。さらば其處へ行くべいか。

トとひよになり、本舞臺へ來る。このせりふのうち、イヤア〳〵と驚ろくせりふ、見合せよろしく、爰にてアリヤ〳〵にて、義照、素袍の上を跳ね、皆々を圍ひ、よろしく立廻りあつて、キッと見得。

皆々　どつこい。

義晴　ヤア、義照、お來やつたか。

島守　ほんにマア、どうなる事かと案じて居たに

桐　村上さんのござんす上は

國長　我れ〳〵も安堵。一時も早く宮樣を

義照　サア〳〵、呑み込んで居る程に、落ちついてござりませござりませ。

景純　ヤア、緩怠なり村上。尊氏公の御前も恐れず、立ちはだかつて尾籠の振舞ひ、早く其處を退るまいか。

義照　ハヽヽヽ、お髭の塵取る追從侍ひ。うぬには構はぬ。尊氏どのに。

トまた立ちかゝる。尊氏笏を振り上げ、キッと見得。

尊氏　ヤア、小童の分として、大人そばへの徒らを、取上ぐるには足らねども、應塔の君と云ひ、四人の奴等を庇ひ立てするが最後、引ッ摑んで捻り殺すぞ。

義照　その廣言は後へ廻して、太政大臣に經上がりながら、あはよくば一天四海を掌にせんと金冠白衣。殊にちらりと見擱つた、日月打つたる錦の旗、この村上が受取るべい。

尊氏　小癪なり義照。それこそ鷹の摑んだ餌を、小雀が狙ふに等し。刃向ひ立てをなすものならば、立ち所に蹴殺してくれん。觀念なせ。

義照　ヤア、片腹痛い。義照が見入つた御旗。慮外無禮も主人の爲。手を突ッ込んでその御旗。

ト立ちかゝり、尊氏キッと睨みつける。ドロ〳〵にて
義照、タヂ〳〵となる。皆々見て

皆々　なんと、君の御威勢を見たか。

景純　所詮叶はぬ。及ばぬ事だ。

義照　さては裝束の官位と云ひ、日月の御旗の恐れ、それを押へる天孫の、應塔の君を今目前に。

ト立廻りにて、義照皆々を跳ねのけ、正面の岩戸を取のけ、差上げてキッと見得。この內に應塔の君、白無垢、丸括け清流しにて、經机を扣へ、燈火の下に法華經を書寫して居る見得。皆々キッとなつて

皆々　これは。

四人　ヤア、あなた樣は。

應塔　雲隱れにし天の岩戶、書寫なす經文思はずも、日影を照らす有樣は。

義照　畏れながら手力雄の、命となつて村上が、土の牢屋の巖石を、打ち碎いたる戶隱山。

四人　一時も早く。

五人　イザ〳〵これへ。

ト立役皆々立ちかゝつて、應塔の君を舞臺先へ連れて來る。尊氏見て

尊氏　ヤア〳〵、重ね〴〵憎くき義照が力立て。アレ、伊賀守、よきに計らへ。

景純　ハア。義照うぬを。

トかゝる。義照取つて引きのけ、君の持つて居る經文を取り

義照　刃向ひ立ての淵邊より、假に出立ちの似せ官位。君の書寫し給ふ、經卷の奇特を以て、官位も旗も今目前。

ト立ちかゝる。景純支へるを引きのけ、尊氏が懷中へ手を差込んで、錦の旗を引出し、それとかゝるを經文にて打ち据ゑる。少しドロ〳〵にて、兩人キッとこなし。

皆々　これは。

義照　君の書寫し給ふ經文の威德に依つて、再び手に入る錦の御旗。應塔の君へ、イザ。

ト渡す。應塔の君、取つて押戴き、懷中する。景純・かゝるを義晴隔てゝ、各々立廻りよろしくあつて

應塔　村上が働らきにて。再び手に入る錦の旗。

義照　めでたく一つ〆めませう。

ト立役皆々手を打つ。

宗重　此方も一つ〆めようか。

皆々　よい〳〵〳〵。

ト敵役皆々手を打つ。

景純　おきやアがれ。べら坊め。大切なあの御旗を。

尊氏　淵邊控へい。

景純　ぢやと申して。

尊氏　ハテ、女童を相手にして、無益の爭ひ、其まゝに錦の旗、子供に花と打措いて、吉例の祝儀に遣はす。命冥加な蛆虫めら。

義照　イカサマ、こりやア斯うありさうなもの。此方もめでたいこの幕に、重ねての參會には

景純　首を洗つて待つて居ろ。

義照　然らば君を始めとして、お供して立歸るが、云ひ分があるか。

皆々　云ひ分は。

義照　どうだ。

皆々　ない。

義照　ハヽヽヽ。然らば此まゝ、お立ちあられませう。

景純　ソリヤ。

ト爰にて

義照　尊氏公。

尊氏　童め。

義照　なんと。

皆々　さらば。

ト三重のうち、景純、義照、立廻り、皆々立ちかゝるを義照、吉例の通り、大太刀の先へ首を貫ぬき、花道の角にてキッと見得。三重、下がり葉にて、鷹塔の君先に、義晴、島守の袖、柵、國長。義照この後に附いて花道へかゝる。舞臺は岩臺の上に尊氏、こなたに景純、敵役皆々後に引ッ張り、この見得よろしくあつて

幕

第一番目四建目　如意輪堂の場

役名――鷹塔の君。和田新左衛門正幸。八瀬藤内。長崎勘解由左衛門。有馬の湯女、お宮實ハ正高女房柵。新田左衛門佐義晴。傾城、島守の袖。仲居、お縫。平賀三郎光俊。須田次郎秀恒。五大院の十郎宗貫。瓜生權藤盛淸。鄕士、藤六實ハ和田新兵衞正高。戸野の大彌太。座頭、多賀都實ハ土岐十郎賴定。楠帶刀正行。

本舞臺、三間の間、一面の板松。後ろ黒幕。下の方に稲村二つ三つ。この側に榜示杭、六つ田領と書いてあり。上の方よき所に藁葺きにて誂らへの番小屋。すべて物凄き道具よろしく、幕の内より和田新左衛門正幸、老けたる拵らへ、打ッ裂き野袴大小の形。足駄がけにて蛇返しの太刀を抜き持ち、打ちかけて居る。八瀬藤内、中間、赤合羽、竹の子笠の形にて、同じく抜き合せ、受け太刀になつて居る見得。この側に菊水の紋ついたる箱提灯、この上に小蛇顯はれ、空中に動搖して居る。雨車の音、薄ドロ〳〵にて幕明く。

ト兩人、立廻りあつて

正幸　心得ぬ下郎。わりや何者に頼まれて、楠正行の迎ひと僞はり、和田新左衛門正幸を、騙し討とは不敵の振舞ひ。サア、有やうに吐かすまいか。

藤内　成る程、首尾よく仕負ふせれば、大分の金になる仕事。その蛇返しの名劍が欲しさに、楠どのゝ名を借りて、誘き出したら此方のものだ。覺悟しろ。

正幸　ヤア、不敵な奴。和田累代傳へ持つたるこの一腰。望む曲者。觀念なせ。

藤内　細言云はずと、くたばつてしまへ。

トまた切りつける。禪のツトメになり、上の番小屋より長崎勘解由左衛門、三度笠、大小白股引、木綿の坊主合羽、旅侍ひの形にて、番小屋の窓を明け、これをキッと見る。始終薄ドロ〳〵。藤内正幸、立廻りよろしく、とゞ藤内危ふくなる。番小屋の元へ付いて來る。勘解由、思ひ入れあつて、正幸を後より一太刀切る。正幸振り返つて

正幸　ヤア、盜賊の荷擔人よな。何人ありとも和田新左衛門、うぬら如きに。

ト又かゝるを勘解由、よろしく立廻りに蹴倒し、額にて藤内に敎へる。藤内心得て止めを刺す。勘解由、此うち蛇返しの太刀を取つて、とつくりと見て鞘へ納める。薄ドロ〳〵止んで小蛇消える。花道より中間、赤合羽、竹の子笠、箱提灯を提げて出る。後より柵、着流し、抱へ帶の形、足駄がけ、蛇の目のさし傘にて出て來る。勘解由、これを見て、思ひ入れあつて、蛇返しを藤内に渡し、逃げろとこなし。藤内、合點して領づき、これを見て東の花道へ入る。勘解由、稲村の蔭

柵　に窺ふ。柵、花道の角へ來て
合點のゆかぬ。楠帶刀正行どのより、舅御樣を俄か
のお迎ひ。心ならねば後追うて、來る事は來ても吉野の
山道。アヽ、お怪我でもなければよいが。

供男　左樣でござります。路々聞いた、犬の七啼。

柵　エヽ、氣にかゝる。
ト思案して
とても陣所へ女子の自ら。オヽ、さうぢや。
ト供に囁やく。

供男　ネイ〳〵。心得てござります。
ト合羽を脱いで渡す。柵、赤合羽を着て、提灯を提げ

柵　コリヤ、其方はわしに構はず、今宵の樣子、夫新兵
衞どのへ、一時も早う。

供男　ヘイ、左樣なら、これより直ぐに。
ト行かうとする。

柵　コリヤ、關屋の町で、衞士の藤六どのと尋ねて行け。

供男　畏まつてござる。
ト引返して花道へ入る。柵、本舞臺へ來て、思はず正
幸が死骸に躓づき

柵　オヽ、怖。
ト飛び退きながら提灯を上げ、とつくりと見て
ヤヽヽ、こりやコレ舅御、新左衞門さま。
ト側にある提灯に目を付け
こりや楠が迎ひの提灯。
ト勘解由、そろ〳〵花道へ行く。柵見て
さてこそ曲者。
ト提灯を上げる。勘解由、礫を打つ。柵、身を開き、
立廻りの見得よろしく、ごん〳〵にて勘解由、向うへ
入る。柵、キツと思ひ入れ。チヨン〳〵にて、この道
具廻る。

本舞臺。正面三間の間、誂らへの觀音堂、高欄階
好みの通りに仕立て、左右に褄戸。西東の狐格子を
半蔀に上げ、伊豫簾に緣を取りたる御簾、一面に懸
け渡し、軒口に如意輪堂と書いたる横額。上の大柱
松の立ち木。下の方に陣小屋。これに大中黒と菊水
の紋ついたる幕を打廻し、すべて吉野の奥、辻堂を
御所に仕立てし道具よろしく、幕の内より眞中に塵
塔の君、壺折り衣裳、膝行車に乘り、この側に新田
義晴、羽織衣裳大小、白張の上ばかり懸けたる形に

て、長柄の日傘を翳し掛けて居る。上の方に鳥守の袖、傾城の形にて、禿二人。お縫、赤前垂れ、仲居の形にて、車の綱を引いて居る。下の方に須田次郎秀恒、五大院の十郎宗貫、瓜生權藤盛清、何れも上下衣裳にて、平賀三郎光俊これを留めて居る。三絃入りの下がり葉にて道具とまる。

應塔　三日月の鹽湯に映る影なれば、片割れなせる七日七日に。

義晴　田村の君の御歌も、いま我が君のお身の上。温泉の療養とあれど、この程通ふ一めぐり。

鳥守　車の綱手引き方に、繋がる縁の義晴さま、馴れては賤しいわたしらまで、恐れ多い御介抱。

ぬひ　ソレイナア、時世とて禿仲居が、お腰添へやらお供やら。遙かの山路お疲れを、おいとひ申しますわいなア。

義晴　ナニサマ、有馬の名湯を、麓へ移す御養生。一つはお氣の結ぼれも、御欝散の爲の廓の花。

應塔　吉野の花より又格別。物云ふ花を取寄せしは、左衞門義晴が物好き。

秀恒　その物好きを遙々と、慕うて參つた足利の使者。君これに御座あるは幸ひ。

宗盛　直ぐに謁見仕らう。

ト立ちかゝるを、平賀三郎よろしく留めて

光俊　イヽヤならたい、無法の一言。假の御所と云ひながら、奏者の案内もなく足利の我まゝ。我が君の御座近く、慮外であらう、退り召されい。

宗貫　何をヂタバタ、慮外咎め。

秀恒　支へ立てすると須田の次郎が、鎌倉の土産にぶツ切るぞ。

光俊　陣中の使ひには猶以て、互ひに恥ある禮義を忘れ、無禮いたさば手は見せぬぞ。

ト双方立ちかゝるを、向うにて

正高　お歸り。

皆々　なんと。

正高　かんこうと啼くや吉野の山烏、頭も白く面白の世や。

ト大拍子入りの神樂になり、花道より衞士藤六、實は和田新兵衞正高、木綿やつし白張、粕烏帽子の形にて、金燈籠を提げて出て來る。

子守勝手の明神へ、御代參の歸るさ。承はれば鎌倉の、お歷々方お入りの樣子。くわんこうと啼く山烏。定めて和睦のお使ひと、おめでたい儀にござります。

義晴　イ、ヤ藤六、樣子は知らず、武骨を爭ふ鎌倉武士。さては尊氏南朝を、又も窺ふ使節よな。

正高　戰場は格別、陣中と云ひ、殊に御所の端近く、是非の爭ひ、お扣へなされい。

宗貫　扣へますまい。義晴どの、いつぞや鎌倉梅ケ谷で、虜となし奉りし應塔の君。

盛清　村上彦四郎義照に、奪ひ返されて尊氏公、一時に雌雄を決せん爲、鎌倉の先陣十萬餘騎、四條畷へ攻め上る。

秀恒　新田楠の狼狽武士、面出しせぬは隱れたか。但しこの頃樣子を聞けば、土の牢での憂き難儀、腰膝立たぬ病となつて、有馬の名湯取寄せて、養生召さるゝ噂とりどり。

宗貫　いつ出陣の當もなく、長陣の遠慮手短かに、吉野の御所へ攻め寄さうか。

盛清　楠正行出陣するか。矢合せの時刻承はれと、使者に立つたる我れ〳〵三人。

秀恒　その御返答は

三人　如何でござる。承はらう。

　トきつと云ふ。皆々顏を見合せ思ひ入れ。

義晴　如何にもその事敵方より、催促なくとも味方の評定。

光俊　正行さまの御所存あつてか、出陣怠るその上に、應塔の君のこの御不例。

島縫　恨むに詮なき味方の難儀。

義晴　即時の返答、何とも當惑。

三人　ハテ、臆病の寄合ひだな。

　トせゝら笑ふ。向うにて

大彌　イヤ、その返答、淸忠の雜掌、それへ參つて申し上げう。

　ト大拍子の神樂になり、花道より戸野の大彌太、褞袍の上へ麻上下、大小の形、刀の柄へ貳升樽を結び付け、ツカ〳〵出て來る。

これやこなたへ御免奈良漬、酒臭いは持つて生れた捻ぢ上戶、一杯機嫌で云ふではないが、新田、楠、兩將ありながら、尊氏兄弟四條畷へ押出して來た、大軍に聞き怖ぢしての落ちつき顏。これでは濟まぬと坊門宰相淸忠どのが、おれを使ひに楠帶刀の陣まで參つた。返答聞いての戾り足、追ツつけ出仕いたさうと、口には云へど、なかなか梃でも動かぬ楠正行。鎌倉のお使者、立歸つて、この通り、御返事なさるがよい。

　ト云ふ。義晴見て

義晴　ハテ、淸忠には、人も多いに敵方への返答、戸野の大彌太、變つた事を申して來たな。

大彌　云はつしやるな。おれだと云つて、熊野十津川の住人、戸野の兵衛が惣領息子、勘當請けてこの態でも、見事勤める淸忠の雜掌。いでと云つたら馬にも乘る。弓の引きやうも存じて居る。

正高　そりや賴もしい、その面ざし、どうやら熊野生れとは、**いつ**ぞや鎌倉梅ヶ谷で。

三人　なんと。

ト愕り、正高を見て思ひ入れ。正高、こなしあつて

正高　但しはわしがうろ覺えか。

大彌　イヽヤ、覺えの仕丁と仕丁。

正高　そんならその時。

大彌　思ひも依らぬ。

正高　爰にて貴樣に出逢ふとは

大彌　ハテ、腐れ付いた

兩人　緣だなア。

トちつとこなし。義晴これに目を付け

義晴　衛士の藤六、ハテ變つた……イヤ、其方達が身元詮議はせぬ。敵方への返答いま暫らく、正行が出仕の折を待つて。

宗貫　すりや、我れ〳〵を正行に。

秀恒　ハテ、對面は此方の望み。吉野内裏の股肱の臣。

應塔　楠正行出仕まで、奥で休息。禿ども、鷹が寢所へ車を引け。

禿兩　畏まりました。サア、皆さん。

ぬひ　義晴さまも君樣の、お伽がてらに太夫さん。

鳥守　それ〳〵、正行さまの深い御思案聞くまでは

光俊　委細畏まりましてござります。

秀恒　然らば御兩所。

宗盛　秀恒どの。

義晴　御車、奥へ。

縫皆　イザマア、お越しあられませう。

ト管絃になり、義晴先にお袖、お縫、禿兩人、綱を引いて、應塔の君は車の儘、光俊、これに付いて、秀恒、宗貫、盛淸、こなしあつて皆々奥へ入る。後合ひ方。正高、大彌太殘つて

大彌　とても叶はぬ南朝の衰へ。楠三軍の勇あるとも、足利どのは今天下に、誰れを恐れぬ武將となつて、又その上に上なき位まで望めども、叶はぬ日月の御旗、彼の村

上の無敵者が、君諸とも奪ひ返して、今に在所も定かならず。察するところ正行が臆病の心底

ト云はうとして、正高を見て

イヤ、おれとした事が、楠贔屓が、そこら爰らにあらうも知れぬのに、ツカ〳〵と由ない事の問はず語り。ドリヤ、宰相の待ち兼て居られう。寢酒の相手に罷らうか。

ト行かうとする。

正高　待たつしやい。こなさんの問はず語りを聞いた者は衞士の藤六おれ一人。清忠どのゝ密事に走つたのと思はれるのも、痛くない腹を探られて、どうやら此方も氣味が悪い。なんと物は相談だ。方を付けてござるまいか。

大彌　ハテ、新らしい。一大事を聞かれたおれより、聞いたお主に呼び留められて、思案に落ちぬ。して、どうしたら方が付かう。

正高　ハテお定まり。すつぱりとやらつしやい。

ト首筋を撫でてこなし。

大彌　ハヽヽヽヽ、心底見えたと有りふれた、臺詞で番へて問ひ落し、おれが懷中を探さうで。イヤ、その手はマア受けまい。

正高　イヤ、さうでない。一通り譯を云はねば、疑ひは尤も。

ト裂いたる、未來記の半分を出し

こりや、さる所で拾つて來た、未來記とやら云ふ大切な巻き物。おいらが持つては猫に小判。殊に半分引破れて、斯うしてあれば紙屑同然。サア、すつぱりと首にして、後腹病めずに持つて行きやれ。

大彌　でも大丈夫。密事を聞いて首打てと云ふを、此方から助けてやれば枷かけて、殺さにやならぬ味方仕掛け。

ト思案して、正高が前へ一腰を投げ出し

サア、さつぱりとやらかしてくりやれ。

ト首筋を撫でゝこなし。

正高　フム、尤も。互ひにどちらぞ方を付けて、繼ぎ合せれば滿足な未來記……おやが、藤六、望みにない。

大彌　して又なんで鎌倉の、梅ケ谷での出合ひ頭。

正高　外に尋ねる望みがある。

大彌　なんと。

正高　恥を云はねば理が聞えぬ。有やうは楠正行に恨みあつて、斯く入込んだ某、本意の手引きが頼みたい。

大彌　ハテ、思ひがけもない。底意は知らず京鎌倉、敵も味方も正行が、武勇を恐れて日を送る、その大敵の正行

を。
正高　あはやと思へど口惜しや。攝河泉の主、苟めにも騎馬乘り物にて歩行なせば、近寄る事も叶はぬ正行。今日の出仕の折に幸ひ、坊門の宰相清忠卿の、威勢を借りて本意の時節。今宵のうちを過さぬ所存。
大彌　出來た。此方も疫病の、神に手引きの敵討。
正高　二言と云はず頼まれりやア
大彌　男の金打。
ト一腰を取つて、騙し討に切りつける。正高、掻い潜つて立廻りよろしく、この刀を打ち落し、直ぐに大彌太が胸元へさしつけ
正高　頼むに承引なきものならば、この場は立たせぬ、たつた一突き。
大彌　ヤレ早まるな。和田新左衞門が悴、同苗新兵衞。
正高　ナ、、、なんと。
大彌　知るまいと思ふか。和田家に代々傳はる蛇返しの名劍、夜前六ッ田の松原にて、奪ひ取られしのみならず、新左衞門もその場の横死。敵は楠正行よな。
正高　不慮を討たれし父の仇。腸を斷つ和田新兵衞。
大彌　手引きしてやらう。刃物を引け。

ト正高、刃を引く。大彌太、懐中より未來記を出し片し〳〵に連續せぬ、この未來記にしつくり合ふ。今宵の本意、敵の手引き。
正高　チエ、、忝ない。我れとても、首尾よく本意を遂げた上は、破れを償ふこの未來記。
ト押開き
人皇九十五代に當つて、天下一度亂れて安からず。この時東魚來つて四海を吞む。
ト讀む。正武も押開き
大彌　日西天に沒する事三百七十餘ケ日、西鳥來つて東魚を喰ふ。猿猴の如くなるもの天下を掠むる事三十餘年。
ト向う揚げ幕にて
正行　大凶變じて一元に歸す。
兩人　なんと。
ト向うをキッと見る。「楠正行出仕」と呼ぶ。三味線入りの樂になり、楠帶刀正行、立て髪上下衣裳、大小にて、三方に願書を載せ、これを携へて出て來る。大彌太、思ひ入れあつて、正高へ一腰を渡す。正高キッとこなしあつて、ツカ〳〵と花道の方へ行く。正行入れ替り、これをキッと見て

正行　御垣守り、衞士の焚く火のそれならで、思ひありげに下郎の振舞ひ……正行が迎ひか。
正高　ヘイ。
ト思ひ入れ。大彌太もこなし。
正行　さこそ〳〵。案内いたせ。
トまた鳴り物になり、悠々と本舞臺へ來る。正高、是非なく立戻り、付いて來て、後より立ちかゝろ。正行キッと思ひ入れ。大彌太、ちやつと正高を引きのけ
大彌　早いぞ〳〵。折が惡い。
正行　心得ぬ大彌太。何が早い。折が惡い。
大彌　イヤサア、早いと申したは、正行どのゝ出仕、存じたよりは
正行　早い出仕に迎ひの衞士。どうか一癖。
大彌　イヤ、氣轉者でござる。打ちは早いぞ、手引きの時節。
正行　ナニ、手引きとは。
正高　イヤ、お迎ひの手引き、坂口まで
正行　それで只今
正高　藤六が粗忽。
正行　ハテサテ、ひやいな。

兩人　フヽ。
正行　ハヽ。
三人　フヽ、ハヽヽヽヽ。
トこなし。奥より新田義晴、先に島守の袖、お縫、平賀光俊出て來て
義晴　珍らしや正行どの、御所勞の由、先づ以て推しての御出仕、山路の御歩行、君命もだし難しとは雖も、御苦勞千萬に存じ奉る。
正行　これは〳〵義晴どの。正行よりは君樣の御容體、如何お渡り遊ばされまするな。
義晴　イヤ、日を追うて御全快……とは云へ、未だ御歩行とても。
島守　いつに變らぬお手車、御殿の内もいたしらを、杖にやうやう起伏しの、お伽も弱い女業、足ぬひ日に增し御身のお物思ひ。今も今とて鎌倉より、足利方の御使者とやら。
光俊　四條畷の御出陣、催促の斷わり兩三度。
義晴　敵の嘲り、南朝の御大事。正行どのゝ御所存はな。
正行　ナニサマ、兼ねて足利兄弟、住吉天王寺に屯ろをなし、吉野へ攻め寄するの結構。折惡しく應塔の君の御不

例。典藥の頭和氣法橋も、配劑叶はぬ秘法のお藥。幸ひ今宵は三ヶ月の、願ひ晴れても正行が心願。

ト心苦しく思案の思ひ入れあつて、願書を引寄せ

こりやコレ、勅勘受けし土岐の十郎賴定と云ふ者、正行へ送りし願ひの密事。とは云へ、日頃臆病のたわけ、まさかの時は……ハテ、忠臣は世に無きものぢやなア。

ト思ひ入れ、大彌太、前へ出て

大彌　ハテ、耳寄りな正行どの、土岐の賴定が願ひとは。

正行　清忠の雜掌、戸野の大彌太。其方が尋ねて何に致すぞ。

大彌　云はつしやるな。あの賴定は、六波羅へ返り忠した、土岐の藏人賴員が弟。願ひと聞けば何事か。

正行　イヤ、御謀叛の顯はれしは、賴員が不忠ばかりでない。これ天道の然らしむるところ。さればこそ、大權聖者の未來記に、日西天に沒する事、三百七十餘ヶ日、西鳥來つて東魚を喰ふと、人皇九十五代に當つて、未來記の勘文、一つとして治亂興廢、違はぬ不思議。

ト正高も前へ出て

正高　然らば英智の正行さまへ、下郎に解せぬ未來記の、所々お尋ね申さう……天下一度亂れて主安からず、東魚來つて四海を呑むとは。

正行　フム、そちや只今の衞士、小癪なる問ひ事。東魚は即ち關の東、在鎌倉に奢りを極め、四海を盜む相模入道。

義晴　西鳥東魚を喰ふとは。

正行　新田義貞お味方して、稻村ヶ崎廿四丁、時の間に干潟となし、高時を討つこれ西鳥。

大彌　フム。さう聞けば文盲な、おれにも解る天下の治亂。次手に問はう。日、西天に沒するとは。

正行　それぞ先帝、隱岐國へ移らせ給ひて、凡そ三百七十餘ヶ日、實に猿猴の如くなる足利尊氏、いま日本を掌握して、打ち靡けたる關東勢。四條畷へ軍馬を揃へ、推出せし程ならば、正行如きが何萬騎、馳せ向ふとも何として、及ばぬ軍慮に心氣の疲れ。所勞と申すも有やうは、これに當惑いたしたのでござる。

皆々　すりや、正行の御心底。

正行　先づ〱出陣どころでなし。

正高　ハテ、世間では鬼神でも、恐れ戰のく楠どの。

義晴　南朝一期の御大事も

大彌　見ると聞くとは大きな相違。

鳥縫　餘所に出陣なされぬとな。

光俊　餘りと云へば正行さま。
正行　何と致さう。せう事がござらぬ。
皆々　ホイ。
　ト當惑の思ひ入れ。
義晴　して、勅勘の十郎賴定。何か願ひの、その願書は。
　ト寄るを正行、突きのけ、直ぐに願書を寸々に引裂き捨て
正行　イヤ、これとても不覺の勅勘。今さら益なき身の願ひ。敵當山へ寄せ來らば、明日を知らぬ命の內。只樂しみは色と酒。義晴どのにもその心で、島守の袖を陣中へ、召し置かれての御欝散。如意輪堂の抹香臭い、客殿をさへ御所と爲す。宮も藁屋も隔てぬ世に、幸ひ廓の仲居ども。君をいさめの、酒にせい〳〵。
義晴　すりや、正行どのには尊氏が、東國の數萬騎を前に置いて
正行　後を見せぬが酒の德。閨の組打ち屛風の夜着、熱燗の計策なら、某先陣仕らう。
義晴　慮外ながら義晴が、正行どのへ諫言は、釋迦へ經かも存ぜねど、先帝御旗揚げの仰せより、楠新田は車の兩輪、深くも樂しみ思し召す。

袖縫　その大將の正行さま。
光俊　如何に傾むく南朝の、御運衰へ給へばとて
正高　出陣なければ違勅の罪。
大彌　淸忠どのも方々の催促。如何おしやる楠正行。
　ト正行こなしあつて
正行　さう詰められては帶刀正行。如何にも出陣仕らう。
義袖　アノ、御出陣なされうとや。
正行　明日とも云はず今宵のうち。コリヤ、仲居ども、用意せい。
皆々　ナニ、出陣に廓の仲居とは。
正行　ハテ、門出の笑ひ、傾城と組打ち、どうござらう。
義晴　すりや、正行の本心は。
正行　廓の酒の下稽古、禿仲居に酌取らせ、夜とともに御前の無禮講。
義晴　その駈引きは島守の袖。義晴、合ひ仕らう。
袖縫　そんなら皆さん、御寢所へ。
光俊　光俊もお太鼓持ちませう。
正行　すりや打揃うて、一入の樂しみ。
正高　一寸先は闇の夜と、衞士もお庭の溫め酒。
大彌　お主相應、おれ相應、林間で一杯引ッ掛けよう。

正行　然らば義晴どの。
義晴　正行どの。
正行　酒に致さう。遊女ども、唄へ〳〵。
ト好みの唄になり、正行先に正高へ目を付け、義晴、島守の袖、お縫、光俊、これに付いて奥へ入る。正高大彌太顏見合せ
正高　ハテ、聞いたよりは他愛なしの楠正行。今日の出仕は天運に、叶ふ願ひの大祥吉辰。
大彌　イヤ迂濶に近寄つて、事顯はれては二度の後悔。
正高　面體とくと見知らんものと、最前思はず立寄りしに、武に逞ましき憤怒の相。
大彌　それに今又あのたわけ。
兩人　こりや思案せにやならぬわえ。
ト兩人キッと思ひ入れあつて、大彌太、顏にて知らせる。正高、これにて下の陣小屋へ忍ぶ。大彌太、下座へ入る。あと合ひ方、時の鐘になり、花道より、有馬の湯女兵衞のお宮、着流し前垂れ庭下駄、誂らへの湯女の形にて、練りの浴衣を抱へ、湯柄杓を持ち出て來て
みや　いま鳴る鐘は、如意輪堂の時の勤め。思はぬ夜前の騷動より、兵衞の宮と假名して、有馬の湯女に姿を替へ、入込む手段も夫の爲。何とぞ敵正行を。
トあたりを見廻し、思ひ入れあつて
折よく夫婦本望の、時節を窺ふこの假御所。應塔の君さま御惱みの、お風呂の御用と入込んだも、夫と一つ願ひの品。エ、コレ、どうぞ藤六どのに、ちよつと逢ひたいものぢやなア。
トうろ〳〵窺ふ。下座にて人音するゆゑ、ちやつと下の方へ小隱れする。直ぐに下座より秀恒、盛清、宗貫出て來て
秀恒　とくと樣子を見屆けたところ、島守の袖に現を拔かす新田義晴、彼奴等に氣遣ひはないが、兎角手強い楠正行。
宗貫　それサ、大半河内勢も。味方に引込み置く上は、尊氏公の益々御利運。
盛清　その上味方の强味となるは、坊門宰相淸忠の內通。
秀恒　我れ〳〵今日矢合せの、使者と僞はり入込んだも、當山の要害とくと窺ひ、四條畷へ通路の手段。どうぞ首尾よく大彌太を呼び出して、何かの密事も話した上。
トあたりを見廻す。この時お宮、フッと出て、これを

立ち聞く。秀恒、お宮を見て
ヤア、わりやア。
宗貫　爰らに見馴れぬ下司女。
みや　ハイ、私しは、有馬の湯女でござります。
宗盛　なんだ、湯女だ。
秀恒　後でなんぞ、見たか聞いたか。
ト立ちかゝる。お宮、これを聞いて、ウヂ／＼花道へ
逃げる。
盛清　逃ぐるは曲者。待ちやアがれ。
ト引ッ捉へる。
みや　ハイ。
ト慄ふを宗貫も立ちかゝつて
宗貫　ヤイ女め、見たか聞いたか。有やうに云へ。
みや　ハイサア……わたしは、たつた今。
秀恒　様子は聞かぬと抜けさせない。地獄落しの廿日鼠、
覺悟極めてそこへ出ろ。
みや　ハイ／＼、鳥の地獄、虫の地獄と申しますも、有馬
のうちにはござります。
盛清　なんだ、此奴は氣狂ひのやうな。大分取のぼせてう
せるわい。

みや　ハイ、のぼせ一通りは一の湯、二の湯は痞へによう
利きます。
秀恒　エヽ、べら坊め。温泉の話しを聞きはしない。
宗貫　おいらが密事を嗅がれては、捨て置かれぬと云ふ事
よ。
ト　お宮、こなしあつて、そこらを嗅ぎ廻す。
盛清　エヽ、體の匂ひぢやアない。密事を嗅いだかと云ふ
事よ。
ト　お宮　耳を敎へながら
みや　お恥かしい事ながら、わたしや聞えませぬわいなア。
三人　なんだ、聾か。
みや　兵衛の坊でござります。
秀恒　そりやア、有馬の宿の名だワ。
盛清　秀恒どの、此奴は氣遣ひのない、ちくらがまやでご
ざるわえ。
秀恒　イカサマ、餘ッぽど遠方でござる。
みや　九里には近う覺えます。
宗盛　おきやアがれ。それも横ぞつぽうだ。ハヽヽヽ。
秀恒　イヽヤ、油斷をさつしやるな。聾の早耳、捨て置い
て、もしや後日の妨げともならぬ身用心。

宗貫　成る程、此まゝそびいて、是非を云はせず。ナア權
藤。
盛淸　蘆の川へ人知れず
秀恒　女め、キリ〳〵
三人　うしやアがれ、エ、。
ト秀恒先に、盛淸、宗貫、お宮を引立て花道へかゝる。
てんつゝになり、向うより田舍座頭多賀都、木綿やつ
し麻袴にて、杖を突き出て來て、秀恒に突き當る。
秀恒　ヤイ、この盲目は、目を開けて步け。思ひがけなく
悔りさせるワ。
多賀　オイタシ、これは御免となる。コレ、目明きどの、
如意輪堂は右か左か。
秀恒　べら坊め、それを敎へる暇がない。
多賀　ハテ、愛嬌のある聲音かな。ヤ、待てよ。さう云は
つしやるは、須田の次郎さまではござりませぬか。
秀恒　ほんに多賀都、よく來たなア。
多賀　よく來たではござらぬ。盲人の山坂、サア〳〵、手
を引いて、案内して下さい〳〵。
秀恒　時も時、無理な奴だ。コレ、いづれも、面倒ながら、
戾してくりやれ〳〵。

ト又てんつゝになり、秀恒、多賀都が杖を引き、盛淸、
宗貫、お宮を連れて本舞臺へ戾つて
ソレ、大道だ。靜かにやつた。
多賀　オツと合點。
ト大股にて躓づく。秀恒に舞臺を連れて廻り
秀恒　ソリヤお座敷だ。其處に居たり。
ト多賀都、下駄を脫いで杖を通し、探り持つて坐りな
がら
多賀　爰らが例への中座敷、どなたぞお賴み申しませう。
ハイ、多賀都でござります。
宗貫　ても、うそ汚ない乞食盲目。
盛淸　秀恒どの、此奴は何でござる。
秀恒　さればサ。どう云ふ仔細は知らず、楠正行へ奉公が
したいと此奴が望み。鼓の破れ皮でも、捨てぬは良醫の
心掛けと、泣き男まで扶持いたす、高慢臭いあの正行。
宗盛　多賀都とやら、奉公するか。
多賀　イヤモウ、どうぞあなた方のお世話で、正行さまへ
有りつきさへ致せば、檢校勾當になりましたよりは。
秀恒　喜べ。秀恒が取持つてくれる。その代りには足利家
へ、なんぞ奉公になりさうな事を。

多賀　それは呑み込んで居ります。時に、ちつとも早く正行さまへ、お目見得いたしたいものでござります。

秀恒　オヽ、目見得を致させてやらう。

ト困つた思ひ入れにて

コレ〳〵御兩所。早急にどうぞ思案はござるまいか。

宗貫　思案と云つて盲目の奉公。

盛清　もし正行が承引なくば。

秀恒　ハテ、その時は素手の孫左。ぼツ返すとも高が盲人。

多賀　ア、申し、滅相な。お前方も、折角吉野の山坂を、探り廻つて呼び寄せて

秀恒　オヽサ、案じるな。奉公させるも此方も目算。

ト案内する。此うちお宮、逃げようとする。

どつこい、女め、身動きはさせない。

トこちらへ引摺ゑる。この時お宮、多賀都へ轉げかゝる。多賀都、悔りして、無性に撫で廻して見る。

みや　エヽ、氣味の悪い、どう盲目め。

多賀　どう盲目とは御慇懃な。どうか手籠りは女中。滅法界に大きな聲の。モシ、お前は正行さまのお腰元か、お末の衆か。

ト探り寄つて手を捉へる。

みや　エヽ、何するのぢや。手を取つて何やら云ふは、座頭の癖に、こりやわしを、てんがう云うて嬲るのぢやな。

多賀　これは如何な事。人さまも見てござる。そんな卑劣な座頭ではごんせぬ。

みや　アレ、まだいなう。晩にごんせと云ひくさる。ニヽ、甜め過ぎた腹の立つ。

トつんとする。多賀都、呆れて

多賀　ひよんな事を云ふ女中。此奴、狐にでもつまゝれはせぬか。

みや　なにを。耳は聞えいでも色顏で……ようおのれに嬲られうぞ。

多賀　ア、道理こそ。つんか〳〵。

みや　つん〳〵通る、盲目が杖突いて通る。

多賀　イヤ、此奴は聾の癖に、盲目々々と笑ひ居るな。

みや　なんぢや。あやまつたと云ふか。

多賀　なんのおのれにあやまらう。コリヤ阿房よ。かな聾のおべかやアい。

ト辭儀して見せる。

みや　オヽ、あやまるか〳〵。さうもあるまい。そんならわしも、キツと三つ指であやまつてやらう。

ト多賀都が頭を足にて踏む。

多賀　エヽ、正直な奴ぢや。手を突いてあやまり居る。

みや　アレ、有り難いと云うて喜び居る。

多賀　知らぬが極楽大たわけ。

ト お宮、入れ替り、多賀都、無性に上の方へ辞儀をする。お宮、紙撚を拵らへ

みや　鼻の先なる歌がるた。こゝらに居るが見えぬか。

ト鼻の先をちよつと突つく。多賀都、嚔をして

多賀　エヽ、業腹な。また嬲り居るか。

ト杖を斜に構へる。此うち始終秀恒は、お宮に心を付けるこなし。

みや　ヤア、盲目め、兵法ぢや。おのれ、寄つたら鑓玉ぢやぞ。

ト腕捲りして突き出す。多賀都、愕りして

多賀　ヤア、長道具でかゝり居るか。

ト慄へ出す。

みや　エヽ、臆病な盲目ぢやなア。

多賀　コレ、寄るまいぞ〳〵。成る程、わしは生れ付いて刃物と聞けば身にこたへ、怖う覚える臆病未練。

みや　その又こなたが、正行さまへ。

秀恒　奉公望みと聞き耳立つる女め。われも似せ聾か。

みや　エヽ。

秀恒　怪しい女め。うぬもこりや。

三人　疑ひ晴れぬ奴だわえ。

ト立ちかゝる。多賀都、ちやつと入れ替つて、お宮を囲ひ

多賀　イヤ、この詮議は奉公始め、わしが仕抜いて見せませう。

秀恒　面白い。似せ聾めを

宗盛　盲目のわれが

多賀　キツと捌いて見せませう。これが即ち正行さまへの御奉公。

みや　望んでござるこなさんも。

宗盛　何か一癖。

秀恒　女も曲者。

ト立廻りあつて

多賀　兎角は互ひの身の上を

宗盛　爰で包まず。

秀恒　許さぬ詮議。

みや　湯女の身の上。

多賀　座頭の世渡り。
みや　問ふも
多賀　語るも
兩人　緣ぢやなア。
　トこれより出囃子の拍子舞ひ。多賀都、お宮よろしく
〽白玉と見れば露さへうなづく姿、元は誠の水鏡、見向けば直ぐに見向かれて、それを勤めの操草、浮氣も實も全盛の、有馬の谷の朝ごみに、いなのさゝ事無理云うて、相の押への杯に、手元時酒中とつて、丸う納めた口舌の派手を、結ぶが直ぐに緣の糸、堅い固めぢやないかいな。
みや　サア、その廓の口舌から、世話になるのを姉と呼ぶ。憂を語るを妹と、兄弟分の端となる。
多賀　橋がなければ渡られぬ。浮世座頭も肩癖を、揉んで捻つて出入りの按摩。
みや　つい內證へも花魁の、待ち人當るは法印さん。
多賀　お針髮結ひ料理番、茶屋の內儀は又從妹。
みや　妹聟は花川戶、助六さんの相方に、揚卷さんは乳兄弟。
多賀　高尾は姪で。
みや　薄雲は。

多賀　叔母の在所の里子の在所。
〽野道山道舟路なんども、これさ〳〵、杖を力につくづく見れば、斯く仙臺の座頭の坊、花の都へつんのぼらんと、心ぞ〳〵道すがら、名所や故鄕歌枕、梅に初音もあゝ聞くばかり、月は冴えても白根の雪の、ほんに冷たい胸の內、憎やなうさて皆人每に、垣間見なんどと云はれても、われが心は、ずんとよい氣の〳〵、よい氣のかをり、君に逢ふ夜はてんとおてんと堪らぬ、此方よれ枕、交す誓ひもはや山葛。
引くや帶屋に信濃屋の、お半がかね親寄り親の、保名が後家は白子女郞。
みや　眉毛濡らして逢坂の、關の小萬はお洒落の留め袖。
多賀　ふりさけ見立ての大格子、茶屋は合圖の裏梯子。
みや　エ、何をお前の色は、コレ、わしがよう知つて居る。云はうかえ。
多賀　誰れであらうな。
みや　オ、笑止。
多賀　ハテ、戀なればこそ闇にも行く。
みや　月の河岸から、コレ申し。
〽さまは三夜の三ヶ月さまよ、宵にちらりと見て見ぬ振

りも、手拭深き厚化粧、莫蓙を片手の抱へ帶。
〽小褄ほら〳〵足曳の、山下駄の音ちんがらこ、ちんがらちんがら石に躓づきや、かつくりそつくりすつくりがつくり、そつくり主に逢ひたしころんで、膝頭をちゝちつともそつとも大事ない、寒さいとはぬ柳蔭、聲は聞いても見ぬ戀に、月さへ迷ふ闇路とは、知らぬ振りしてどうぞいの。
〽ほんに小腹が橘屋、どりや宿許へ歸りましよ。
みや　コレ、待つた。
〽ふつとお前に逢うてから、遣る瀬ない程やれこりやなア、忘れもやらぬ思ひとは、疾に知つてゞあらうのに、おゝさ〳〵、しんぐい〳〵、知れたら解けて草枕、替る替るその中に、盡す誠は君ならで、誰れにか見せん梅の花、匂ひ可愛き恨み言。
多賀　アヽ、その手で行く我れではごんせぬ。朝から晩まで按摩けんぴき。並大抵な事かいなア。
〽朝の六ッから夜は更けるまで、按摩けんびきさりとはさりとは、ひねろ、十四けいこの小座頭が、見えもせぬ癖見習つて、癪を押すなら七九のあたり、三味を彈こなら三下り、お醫者さんやら藝者やら、さりとは〳〵忝ない。こちや知らぬえ、浮かれ〳〵て面白や。
〽咲くやこの花、花の吹雪がひら〳〵〳〵、扇の風に招けば招く、大寄せ人を幾重に葺屋町、西も東も棧敷の梅木、早咲きかけて勝色見する繁榮は、花さへ實さへ橘の、榮え久しき今日の顏見世。
ト兩人所作よろしくあつて納まる。この切れに多賀都、守り袋を落す。大彌太、ツカ〳〵出て
大彌　何か怪しいこの守。
秀恒　座頭の素性も大方ソレ。
ト寄るを、義晴、奥より出て、兩人を突き退け、立廻りあつて直ぐに側なる般若櫃へ、多賀都を打込み、守り袋を取上ぐる。
秀恒　それを。
ト寄るを突き廻し
義晴　軍令正しき足利の使者。御所に間近く何おしやる。
秀恒　イヤサ、怪しき二人が詮議。
義晴　他人は賴まぬ御所の宿直。
ト　お宮に繩をかけて
大彌太、其方に預ける女、よもや違背はあるまいがや。
大彌　ナニ、この女を大彌太に。

義晴　楠帶刀正行を、敵と狙ふ藤六が妻。

秀恒　なんと。

義晴　ハテ、手引きして討たしてやりやれ。

みや　すりや、私しを藤六が

義晴　夫妻と存じて情の縄目。

みや　チエ、、口惜しい義晴さま。夫が本意の助太刀と、入込む甲斐もこの縄目。それをあなたのお情とは。

義晴　勝負は互ひの運次第。藤六如何に逸るとも、過ちさせぬ當座の人質。

大彌　如何にも名乘つて勝負まで、この大彌太が預かつた。

秀恒　我れ〳〵とても使節の返答。

義晴　それも暫らく三ケ月の、山の端さして入る頃まで。

秀恒　ハテ、便々と公家侍ひ、京都は兎角氣が長い。

宗貫　せう事がない打捨てゝ、歸られもせぬ大事の使者。

盛清　矢合せの時刻開き切つて、罷り歸るがようござる。

大彌　そんなら此まゝ、今暫らく。

三人　使者の返答。

みや　本意の時節。

義晴　ハテマア、行きやれ。

大彌　女、來い。

ト合ひ方になり、大彌太、不精々々にお宮を引立て、秀恒、宗貫、盛清、これに續いて奥へ入る。矢張り合ひ方にて、義晴、守り袋を開き

義晴　延慶三年酉の八月三日、酉の刻、誕生の男子。

ト此うち多賀都、般若櫃より出て

多賀　殿樣、必らずその守、外へ渡さず正行さまへ、お屆けなされて下さりませ。

義晴　多賀都とやら、この守に、記せし年は其方が。

多賀　正行さまへ御奉公、望んで參つた身の願ひ。

義晴　さては覺悟の。

多賀　モシ……密かに。

ト兩人、思ひ入れあつて

義晴　包むに及ばぬ身の上語れ。

多賀　ヘイ。

トこなしあつて、下へ來て下に居る。

どなた樣かは存じませぬが、とくとの樣子御存じで、お尋ねあれば是非に及ばず、申し上げるも恥かしい。私しも元故ある武士、兄が不忠と身の不覺、勅勘を蒙むり剰さへ、照る日の罪で盲目とまで、成り下がつたる因果は目前。されども天道捨てさせ給はず、その惠みにや應塔

の君さま、戰場の御苦勞數積つて、足腰立たぬ御惱の様子。和氣法橋の御藥に、酉の年度の揃ひし、男の子の生血を取つて、三日月の影を映して用ゆる時は、忽ち御惱平癒と聞き、嬉しさにやう／＼と、偽手を求めて正行さまへ、不忠をお詫びの御奉公。口惜しや土岐藏人賴員が弟、十郎賴定とも云はれし身が、鎌倉武士にも阿ねり諂ひ、今の懺悔の身の上話し。必らず御沙汰下されますな。

ト思ひ入れで云ふ。義晴、つくづく聞いて

義晴　さてこそ兼ねて噂に聞く、臆病未練に弓矢を捨て、勅勘受けし世の嘲り。十郎賴定にてありしよなア。

賴定　面目もなき卑怯の病。せめて命の御用にも。

義晴　氣遣ひあるな。某こそ新田左衛門佐義晴、正行に代つて足下の願ひ、執成し申さん。喜ばれよ。

賴定　すりやこの處へ君樣が。

秀恒　如何にも供奉は島守の袖。我が君これへお供いたせ。

ト誂らへの合ひ方になり、島守の袖、以前の車に乘つたる應塔の君を引いて出る。お縫、光俊これに付いて出て來て

島守　人も惜し、人も恨めし味氣なく、世を思し召すお心より、お物思ひの日を追ひて、重らせ給ふ御惱み。

ぬひ　側に見る目の痛はしさ。

光俊　昔は四時に法水の、佛緣に示し／＼て

義晴　今は南朝三軍を、しろしめさるゝ我が君が。

應塔　足腰立たぬ業病も、悔むに甲斐なき前世の宿緣。

義晴　そのお嘆きを晴らさん爲、恐れ多くも盲人の、推して望みし御奉公。多賀都、勅勘御免なるぞ。心よう三世のお目見得いたせ。

ト賴定よろしくこなしあつて摺り寄り

賴定　ハ、ア、冥加なや畏れ多や。人がましくも不具の身に、義晴さまの御情。すりや、應塔の君さまには。

ト近寄つて車を探り

チエ、、痛はしや御殿の内も、御步行ならぬ御姿。まだも目かいの叶はぬ一德、見奉らばそもやそも、なんと身も世もあられませう。望みは叶ふこの上に、娑婆に殘さん願ひはない。一時も早く秘法のお藥、御用意よくばササ、、義晴さま。

ト合ひ方變り、賴定、思ひ切つて合掌する。義晴、拔刀を提げて立ちかゝる。

義晴　王土に住めば草も木も、不便や賴定、諺に云ふ小の虫。

賴定　南無阿彌陀佛。

ト覺悟の體。應塔の宮、これを見て

應塔　留めよ人々。如何に麿が相煩らふ、病に此まゝ果つればとて、人は天地のみたまもの。

島守　山に棲む鳥、野に鳴く虫、夕朝の身を貪り、死を恐るゝは世の慣ひ。

義晴　あれ聞いたか多賀都、生ある物は鳥獸すら、惜しませ給ふ御仁德。

ぬひ　まして目かいは叶はずとも

島守　佛體受けし人の命。

ト兩方より寄るを、義晴、額にて押へる。賴定こなしあつて

賴定　エヽ、愚圖々々とその御未練。折角思ひ切つた身も生れ付いたる臆病の、卑怯な病の起らぬうち。

義晴　とは思へども百年の

光俊　これも人の子むざ／＼と、大根蕪を切るやうに

島守　如何にお藥なればとて

ぬい　餘りと云へば

兩人　敢へない命。

ト皆々ホロリと思ひ入れ

賴定　ア、申し、死なぬ先より其やうに、取亂されては後れが來て、どうか持病の臆病心。

義晴　忠義亂すな、只一刀に。

ト振り上ぐる。この太刀音に賴定、恟りして飛び退き

賴定　ア、情ない。もう、死ぬるのでござりますか。

トぶる／＼慄へる

義晴　多賀都、未練な不覺の病。

トまた立ちかゝるを、あちこちと逃げ廻り

賴定　モシ／＼、待つて下さりませ。堪えて見ても體に冷汗。なんたる事か刃物と聞いても、身の毛が立つて恐ろしい。どうぞ御思案御料簡の、つく事ならば今暫らく。

義晴　ヤア、卑怯なり其方も、世にある時は十郎賴定。

賴定　サ、侍ひの身の成り果。これでは餘り腑甲斐ない、おのれやれと、くよ／＼悔んだこの年月。酉の年度の揃ひし男、御惱の藥になると聞き、嬉しや不忠の身のお詫びと、思ひ立つたが精一杯。覺悟極めて爰へ來て、刃の下へ直るまでは、どうやら斯うやら侍ひの、襤褸も亂さずやッつけたが、見えぬ目にさへ太刀風の、ゾッと慄へが止みませぬ。なんたる因果の臆病やまひ。全く命は惜しみませぬ。覺悟極めて居りまする。

トおど〳〵慄うて逃げ出す。光俊これに立ち塞がり
光俊　ヤア、腑甲斐ない魂ひ。この期に及び、例へ逃げても天の責め。
義晴　我が君のお役に立て。
頼定　サ、、その覺悟で今までは、思ひ切つても心の未練。
義晴　勅勘の身の有り難き、君命あらば後々末代。
光俊　臆病不忠の名を取るか。
頼定　サ、それは。
義晴　但し最後を淸くして、忠義に穢さぬ名を殘すか。
頼定　サア、それは。
義晴　サア。
頼定　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
義晴　今こそ南方無垢世界、忠義を土産に佛果を得よ。
トきりつける。
頼定　アレエ。
ト逃げ廻り、正面の御簾の內へ駈け込む。義晴、御簾の前へ立ちかゝつて
義晴　愚かや多賀都。義晴が忠義に替へぬ汝が命。
ト追ひ駈けようとする。

應塔　ヤレ待て義晴、我れゆゑに、科なき者の命を絕つ、不便の多賀都、過ちすな。
ぬひ　申し義晴さま、我が君のお情餘るあのお詞。
島守　ぢやと申しても御煩らひ、平癒なさば彼れも忠義。
光俊　我れも忠義に非道の刃。頼定觀念
義晴　トまた立ちかゝる。內にて「エイ」と太刀音する。
皆々　これは。
ト御簾の內にて
正行　騷がれな方々。和氣法橋が秘法のお藥、正行調進仕らう。
皆々　なんと。
ト管絃になり、正面の御簾卷き上げる。この內に正行、上下衣裳、拔刀、白銀の器に血汐を湛えたるを抱へ、吹替への頼定、その側に倒れて居る。鼓の合ひ方。
正行　有り難や今月今宵、不思議に求むる秘法の藥。和氣法橋が敎へし配劑、酉の年月揃ひし男子の、血汐に浸す三日の月、不具も癒る忠義の死は、十郞頼定にてありしよなア。
義晴　心は健氣の十郞頼定、生れ付いたる臆病も、忠義に

全き最期の一念。

光俊 念ならお藥、正行どの、お手に入りし上からは

正行 今宵神明の影を映し、お藥調合。イザ我が君。

ト義晴取つて應塔の君へ渡す。

應塔 計らざりき我が業病、平癒なすも臣等が忠義。

ト此の前より高見へ三日月を引出す。應塔の君、血汐の器に此の影を映し、こなしにて服む。ドロ〳〵になり、ウムと悶絶する。

皆々 ヤア、我が君の、此の體は。

ト介抱のうち下座より秀恒、宗貫、盛清出て

三人 放心なしたる御大將。

ト立ちかゝるを、矢張り薄ドロ〳〵にて應塔の君、すつくと立ち上がり、宗貫、成淸を見事に取つて投げ、起き上がつてかゝるを、直ぐ當てる。

秀恒 さては賴定が血汐にて、病は平癒なしたるか。

應塔 今ぞ神心朗らかに、病惱忘るゝ五體の自在。挫腰忽ち昔に返る。アラ嬉しや、喜ばしやなア。

トきつと見得、秀恒、悔りして

秀恒 ハテ、妙藥もあるものだなア。

ト思ひ入れ。正行、秀恒を見て

正行 足利の使者須田次郎、正行が返答、よつく聞け。

秀恒 なんと。

正行 尊氏兄弟大軍の卒し、四條畷へ登りし事、疾より聞けど帶刀正行、今日まで出陣怠りしも、應塔の君の御病惱、明暮れ祈りし甲斐あつて、今こそ勇む誠の出陣。

ト假屋の內より新兵衞正高、お宮、一腰差し窺ひ出て

正宮 恨めしや。楠正行、覺悟。

ト立ちかゝるを義晴、光俊、立廻りにて留める。

正行 すりや、和田新兵衞正高、某を敵と心得、大彌太が手引きにて、又も入込みしよな。

ト奧より大彌太出て

大彌 名乘らぬ卑怯は楠正行。サア、尋常に勝負召されい。

正行 ヤア、卑怯と蔑する某に、大彌太如きを手引きとして、此の正行を討たんなんどと、あざとき新兵衞。左樣な事で、見事本意は遂げられまい。

ト正高を目掛け、小柄を手裏劍に打つ。大彌太思ひ入れ。正高其まゝ握り

正高 これも卑怯の騙し討か。

正行 イヽヤ、敵の證據の小柄。

みや 敵は目前正行どの。

正宮　それに證據の小柄とは。
正行　サア、その小柄は、夜前六ツ田の松原にて、拾うて得させし杉の本、ナ、勘當なせし楠が家來、サア、杉の本で拾ひ得させしその小柄。
義晴　敵の證據はあるまいが。
正高　フウ、楠の家來杉の本。
みや　しかも六ツ田の松原にて。
ト兩人思案する。
大彌　敵の證據は蛇返しの名劍。拔けば忽ち小蛇顯はれ
秀恒　世にも稀れなる稀代の一腰。
正高　それに證據のこの小柄。
義晴　正行どのゝ所持あつて、其方が爲には蛇返しより、百倍勝つた天晴れの名劍。
大彌　すりや、正行を今日まで。
正宮　敵と心得、不覺の慮外。
正行　コリヤ、忠士は孝子の門より出づる。四條畷へ正行も、出陣の門出、陣觸れせよ。
ト硯を取つて、如意輪堂の壁へ一首を書く。
皆々　これは。
ト島守の袖、お宮、立ちかゝつてこなし。正高、これを見て
正高　歸らじと、かねて思へば梓弓。
正行　なき數に入る、名をぞとゞむる。
秀正　さては正行。
正行　めでたう出陣。
ト奥にて「エイ〳〵オウ」と鬨の聲を合せる。皆々立廻りよろしく、ドン〳〵早めにて、

幕

第一番目五建目　大原雑魚寢祭の場

役名――妻鹿孫三郎長宗。反魂丹賣り、長井藤助實ハ名張八郎利種。鹿草兵馬。下部、宿入り下馬平。杉本佐兵衞。町抱へ、千本の松。女乞食、お高。同、お秀。同、お吉。篠村源吾。下部、鄉內實ハ志貴源八正武。正行女房、櫻井。賤の女、十津川のお靜。脇屋次郎義助。兒島三郎高德。

本舞臺、三間の間、眞中に朱の鳥居、江文大明神と書いたる額を掛け、左右玉垣、見事に石燈籠見合せ、

東の大臣柱、松の大樹、よき所に石の手水鉢、下に蛇井出村と記したる榜示杭、西の見付け柱の側、水茶のかゝり、長床几を据ゑ、すべて雑魚寝神社の道具よろしく、幕の内より上手の床几に六波羅の侍ひ鹿草兵馬、深編笠、打ッ裂き羽織、野袴、大小の形にて腰を掛けて居る。こなたに宿入り下馬平、中間の形にて扣へ居る。下の床几に兒島備後三郎高徳、同じく深編笠、羽織袴、大小の形にて、煙草盆を扣へ居る。この後に乗り物を据ゑ、篠村酒吾、着付け袴の形にて、高股立ちを取り、付き添ひ居る。ズッと下の方に下部鑾内、奴の形にて鑓を擔げ、つくばうて居る。舞臺眞中に反魂丹賣り長井藤助、着付け野袴、襷掛けにて、反魂丹の荷を飾り、若い者、奴の形にて居合拔きの模樣。これを仕出し大勢、立ち並んで見物して居る。この見得、宮神樂にて賑やかに幕明く。

藤助　東西々々、只今お目通りにて、遣つてお目に掛ける男、一道七藝の上盛り、兵法の奥の手、小太刀の極意でござる。

若者　なか〳〵左樣でござい。手前親方が鍛錬いたされしは、吉岡憲法より傳へし一流でござる。

藤助　お立合ひの中にも、事をかしく思し召すお方もござらうが、併し、所替れば品も替る。浪花の蘆も伊勢の濱荻。お笑ひ草にこれから弟子めが、彼の棒の一手をお目にかけませう。

若者　なか〳〵左樣でござい。

藤助　先づ棒に取つては、表が六本、裏が六本、中の極意が七十四本、合せてこれ八十六本。西國三十三所を象りし順禮棒。ふだらくや岸打つ波と聞く時は、並大抵の奴めではござりませぬ。

若者　なか〳〵左樣でござい。棒に取つても、さま〴〵ござる。握り拳で打つのがそつぼう、蕎麥で遣ふが麪棒にて、足らぬがべら坊、栃面棒、豆腐はさるぼう、叩くは六尺棒、突棒刺叉ことじの早業、上を拂へば沈んで受ける。とつちんちりつと〳〵。

ト棒を張り廻して踊る。

藤助　大べら坊め。サア〳〵、後へ寄つて御見物なされい。只今奴めが致した通りでは、まさかの時に役に立たぬ。と申した通りでは、劍術を渡世に致すかと思し召さうが、さうではない。この居合ひ刀は、拙者が家の目印、酒屋

のさか囃子、味噌屋のせつかいも同じ事。江戸表には淺草お藏前、御當地にて披露めまする。越中富山反魂丹、殊に霜月十五日、當社江文大明神へ、御參詣を當に御披露申し上げ、處方の齒磨、口中一切の療治、搖ぐ齒を据ゑ虫喰ひ齒の痛みを据ゑ、入れ齒拔け齒は望み次第、手拍子で齒を拔く。足拍子で首を拔く。コレ、この太刀を斯う持つたところが、長短のいちみと云つて、長いは長し短かいは短かし、長いが勝ちにも定まらず、短かいとて負けはせぬ。惣じて居合ひはこの如く、差した處が居合ひ、拔けば卽ち兵法でござる。

若者　なか〳〵左樣でござい。男は氣で食へ、奴は酢で食へ。アレあの如く拔身を振り上げて、待ち掛けるが彼の鞍馬流と云つて、時に取つての拙者は牛若。

藤助　拙者は辨慶でござる。あの奴に太刀を渡しまして、拙者は棒で參る。この棒で、あの小太刀を叩き落さうとすると、却つて此方がしてやられる。例へば餌を以て魚を釣る道理。爰を切れと云はぬばかりに、ツカ〳〵と寄る。うまい所と云ふが切つてかゝる。橫に開いて身を交す。打ちかけた太刀なれば引かねばならぬを、そこを附け込んで爰を突くが膽潰し。又うつかりと見せかけると、向うの敵が眞二つと切つてかゝる。身を捻つて小手落し。拔身はガラリと落ちる。取らんと馳せ寄るところを、眞向眉間眼つぶし。その下が鼻つぶし。ちよつと下がるが食ひつぶし。マア、この位な物でござる。

ト此うち始終立廻りよろしくあつて

サア、これからが反魂丹、齒磨の披露でござる。

トまた宮神樂になる。藤助、若い者、反魂丹齒磨を披露めて居る。此うち向うより妻鹿孫三郎長宗、着流し大小、浪人者の拵らへ、藁にて根を包みし紅葉を持ち、編笠をかぶり出て來て、舞臺に立ちどまる。藤助これに構はず

さて、これからは、ちと放れをお目にかけませう。只今奴が積みました二つの三方、上にて五尺三寸の大太刀を差いたる儘ですらりと拔く。蜘蛛の巢搦み小手返し、眞向一文字にヤツと打つて參る。この早業を三方の上にて仕る。

仕出　所望だ〳〵。

藤助　只今拍子に乘つて。

ト思ひ入れして上がれぬこなし。

ハヽア、今日はそよ風で、三方が搖ぎますやうにござれ

ば、とつくりと見定めまして、ヤツトウヤツトウ。

ト上がれぬこなし。

仕出　どうだ〳〵。

トこの事幾度もあり、トヾ三方を踏み毀して轉げる。仕出し皆々見て皆々笑ふ。その間に若い者、賣溜めの錢を盜む。

ソレ、野郎が錢を盜むぞ〳〵。

若者　なか〳〵、左樣でござい。

藤助　此奴、うぬ。

ト棒振り上げて追ひ駈ける。若い者、逃げ廻る。見物も騷ぐ。此うち宮神樂にて、若い者逃げるを、藤助追ひ駈けて下座へ入る。仕出し立ち騷ぐ。このこみ合ひに孫三郎長宗、下馬平に行き當り、下馬平が腰の物の柄頭、ぽつきと折れる。兩人キツと思ひ入れ。皆々見て

仕出　ハア、あの中間の柄頭が、折れて落ちた。ハヽヽヽ、ハヽヽ。

ト笑ひながら、捨ぜりふにて仕出し皆々下座へ入る。兵馬、高徳これに目を付け、家來もヂツとして居る。兵馬、高徳の方を見ながら、こなしあつて

兵馬　下馬平、わりや柄頭を折られたぞよ。

下馬　ネイ。

ト落ちたる柄頭を拾ひ上げ、孫三郎、モヂ〳〵こなし。下馬平、思ひ入れあつて

見れば蓮ツ葉を引ツかぶつて、何處の素浪人かは知らないが、一合取つても武士の祿を食む宿入り下馬平。大勢の中で怪我とは云へど、柄頭折られた恥辱は主人と云ひ、あれにもお歷々の御見物。有やうはまツこの通りの、本刀の恥を云はねば理が聞えぬと、一人の母が病氣、藥代に賣り代なし。

ト孫三郎こなしあつて、編笠を取り

孫三　これは〳〵、どなたの御家來かは存じませぬが、御尤もなるお詞なれど、人群集と云ひ出合ひ頭、思はぬ粗相の不調法。幾重にもお詫び申す。

ト此うち兵馬、料簡するなと顏で知らせる。下馬平、呑み込み

下馬　イヤ〳〵、料簡ならない〳〵。他聞と云ひ主人の手前、浪人しても貴樣は兩腰、その差添を借り受けて、この座を去らず打ち果す奴が思案。覺悟極めて返事をしろ

孫三　すりや、どうあつてもこの場にて。

卜こなし。この時兵馬、編笠を取つて

兵馬　出かした下馬平、うい奴だ。差添を借りるまでもない。某が用立てくれう程に、今の恥辱を雪いで見せろ。

下馬　畏まつてごわります。

孫三　サア〳〵、そのお腹立ちは御尤も、武士の身は相身互ひ、打ち果す儀を、臆して申すではござらぬが、柄頭の折れたのを、恥辱とは小さい〳〵。必らず氣にはかけられな。見ればこなたは徒歩中間、帶刀いたす某も、浪人の活計に迫り、二腰のうち肝心の拙者が刀、武士の魂ひ、これをお見やれ。

卜刀を拔く。木太刀ゆゑ悔り。何れもこなし。

下馬　イヤア、その刀は木刀。

孫三　サ、まッこの通り、大恥を顯はすが、この場の云ひ譯。姓名は明かさねども、お主の爲に家重代、武士たる者が魂ひを、賣り代なして木刀で、人を騙すの人外も、これ皆主人を貢ぎの爲。今開けばこなさんも母御の藥料、賣り代なしたる一腰も、この場の恥は亂れ燒。明かす互ひの木刀は、忠と孝との直ぐ燒刃。拙者は帶刀恥は倍増し。ともに顯はす恥辱は、まッ斯う。

卜木刀を折つて投げ捨て

なんとこれでは、料簡なりさうなものでござる。

下馬　イカサマ、恥はそれで五分〳〵。料簡せずばなるまいかい。

兵馬　コリヤ〳〵下馬平、いま其方が料簡すれば、打ち果さうと云つた詞が立たぬ。エヽ、なにか、こりや其方は無腰、あの者の差添に恐れて、それで料簡する心か。

下馬　イヤ、全く以て。

兵馬　然らば差添を用立てくれん。これを持つて打ち果せ。

卜我が差添を拔いて渡す。下馬平、受取る。此うち高徳、源吾に囁き、鼻紙を出して、矢立にて何やら書き、思ひ入れ。下馬平こなしあつて

下馬　成る程、仰しやればそこもある。一旦打ち果さうと云ひかけたこの場の出合ひ、主人の差添借用いたし、尋常に立合ひますべい。

孫三　これは又、憚りながら、御大身には似合はぬ一言。お召仕ひの料簡あるを、推して事をお好みなさるは、何とやら合點が參らぬ。

兵馬　默らつしやい。武士の家來が恥辱を掻いたを、默つて見ては居られない。そりやア腰拔け武士のする事だ。下馬平、後れを取らばくたばり損ひ。幸ひの手錬試し。四

の五の云はせずと、立合へ〳〵。
孫三　左樣御意なされば是非に及ばぬ。兎は云ふものゝ、今にも主人世に出でなば、お馬の先で捨てる命。些細な事には捨て憎い。ぢやに依つて、自他ともお詫び。
下馬　イヽヤならない、主從ともに世になしものと云へば、慥かに新出か楠の、由緣と見て立合ふのだ。
孫三　なか〳〵以て。
下馬　覺えなくとも云ひかけた、奴が望み武士の意地。サア、尋常に立合ふまいか。
孫三　そこを幾重にも御料簡。
下馬　さう吐かしやア面倒な。此方からぶツかけようか。
孫三　サ、それは。
下馬　但しは拔くか。
孫三　サア。
下馬　ぶツかけうか。
孫三　サア。
下馬　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
下馬　いつその事に。
ト引拔いて切りかける。孫三郎、搔い潜つて突き廻す。

この立廻りの中へ、高德、ツカ〳〵と寄つて、下馬平を取つて投げる。兵馬、立ちかゝるを、ちよつと拂ひ、編笠を取つて、しやんと、見得。
三人　これは。
高德　兩人のこの場の趣意、よつく見屆け是非を付けんと、中へ分け入る出合ひ頭、これ又怪我にて下馬平とやら、今の振舞ひ氣の毒ながら、武士の奉公勤むる其方。下部とは云ひながら、器量骨柄天晴れの者。知り人ではござらねども、主人にもさぞ滿足。併しながら、大功を立てんと思はゞ、些細な疵を顧みず、僅かの恥に命を捨て、この處にて打ち果すは、矢張り犬死、主人へ不忠。下部たる身の一腰まで、賣り代なしたは、何の爲と云うたではないか。この場に於て打ち果し、實の事にもあれ噓にもあれ、病の床のその母へ、其方が孝立つか。
下馬　イヤサ、その儀は。
高德　辨まへもなき御家來は、御家來とも思はうか、腰を押さるゝ御主人樣。
ト兵馬と顏見合せ
なんと左樣ではござらぬかな。
トこれにて兵馬、理に迫つたるこなしにて

兵馬　イヤサ……何とござらうやら。
　ト赤面。
高徳　ハ、、、、。イヤナニ御浪人。何れの御家人かは知らねども、我れと我が恥を願ひし身を、全うせんとの再三の詫び。大切なる主人の爲に、役に立たねばならぬ體と、堪え忍ばるゝその風情。大家冤徑に遊ばずとは、これなるをや申すべき。驚ろき入つて感心いたした。さるに依つて見るに忍びず、仲裁ちに入り申した。その料簡の付けやうは、源吾、申しつけた物、これへ。
源吾　畏まつてござります。
　ト合ひ方になり、挾み箱より差替への大小を出し、高徳が前へ持ち來る。郷内は矢張り鑓を擔げ居眠つて居る。各々こなし。源吾、下へ下がつて
仰せに從ひお差替へ、持參仕つてござれども、兩人への御挨拶。すりや、その大小にて
高徳　如何にも。某が計らひは、下馬平とやら申す下部、腰が明いては見苦しさに、事に及びしこの爭論。差し古したる拵らへながら、某がこの差替へにて、双方の腰を塞ぎ、互ひに料簡あるならば、如何ばかり祝着ならんか。兩人、如何に。

　ト刀を孫三郎、差添を下馬平へ突きつける。
孫三　ハッ、見ますればお歷々。どなたかは存ぜねども、物數ならぬ拙者めを、御實意の御意と云ひ、有り難き御裁配。我れに於て違背はなけれど、何とやらあの者が。
下馬　へイ、下郎めが木太刀を折つたが、仕合せとなつて、ても結構なお差添。これを下し置かれる上は、料簡と申したけれど、御主人様が。
兵馬　ハテサテ下馬平、そりや何を申す。どなたかは存ぜねども、其方が親孝行の次第まで、氣を付けての御意見と云ひ、見兼ねての御挨拶、聞き屆けぬは却つて無禮。主從となるからは、弓も引き方、其方に引けを取らすまいと存じての腰押し。理の斯うしたは非の百倍。料簡つけてこの場は此まゝ。
下馬　お供仕るでござりませう。
高徳　御得心とござれは、拙者も安堵。仔細ござつて忍びの社參。互ひに名乘らぬ姓名も、御緣ござらば又重ねて。
兵馬　然らば此まゝ。
高徳　お侍ひ。
兵馬　下馬平、參れ。
下馬　ネイ。

ト大拍子になり、兵馬先に、下馬平こなしあつて下座へ入る。高徳、後見送り

高徳　ナニ御浪人、わざと御名は承はらぬ。必らずともに主人の忠義、忘れぬやうに、御合點かな……源吾、參れ。

源吾　ハアッ。

ト行かうとする。孫三郎、高徳か裾を扣へ

孫三　先づ暫らく。下し賜はる一腰も、深き心を籠められたる、武士の魂ひ忠義の名作。とてもの事に御姓名を。

高徳　人の姓名を聞かんと思はゞ、我が姓名を名乘るが本文。

孫三　成る程これは御尤も。我が姓名は……オヽ、それそれ。

ト合ひ方になり、孫三郎、持つて出たる紅葉の植木を、高徳が前に置き

憚りながら拙者が姓名、云はず語らぬ紅葉の謎、とくと御判讀下されい。

高徳　フウ、紅葉の靑葉も紅葉すれば、園生に植ゑて隱れなき、その姓名は。今は鬻して藁しべに、その根を包む姓名は、とくと承知のその上にて、身が名は刀の身に替へて、讓り與へし備前長光。

孫三　然らば刀の銘に粧ひ、備前とあれば、そりや兒島の。

高徳　コリヤ。サ、鐺詰まりし御浪人、志しのその一腰、紅葉の見榮えも……年たけて又越すべきと思ひきや、命なりけり小夜の中山。

孫三　命なりけり。

高徳　さやの中山。

ト孫三郎、思ひ入れあつて、鞘へ目を付け

孫三　さやの中山。

ト拔いて見る。一通落ちる。直ぐに取上げ

これは。

高徳　他見無用。

鄕內　その一通を。

ト立ちかゝるを、源吾押へて

源吾　鄕內、お供。

高徳　重ねて逢はう。

ト唄になり、高徳こなしあつて、鷹揚に鳥居の內へ入る。源吾、後に付き、鄕內も思ひ入れあつて鑓を擔げ、孫三郎へ目をつけて、皆々鳥居の內へ入る。後に孫三郎一人殘りてこなしあつて

孫三　今の詞の端と云ひ、鞘に籠めたるこの一通。疾より

我れをそれと知り、忠義の道を忘るなとは、疑ひもなき官軍方。何にもせよこの一通。

ト あたりへ心を附け、開き見て

ナニ〳〵「新田兄弟楠の一族、生死の程を尋ね求め、某方へ知らされべく候ふ。妻乞ふ鹿へ、備後三郎」……さては今の侍ひこそ、新田方へ心を運ぶ、高徳どのであつたよなア。さるにても我が面體、知つたる上のこの密書。妻乞ふ鹿は妻鹿、我が本名。

ト 云はうとして、あたりを見廻し

忝ない。

ト 一通を戴き懷中して、ツイと下座へ入る。これより華やかなる出の唄に宮神樂を交ぜたる誂らへの鳴り物になり、花道より町抱へ千本の松、仕事師の拵らへよろしく、革足袋股引、革羽織にて、片端折りに紮げ、八津兵衛娘お菊を、肩車に乘せて出て來る。このお菊、唐子鬘、大振り袖の着付け、裲襠を引摺る程に仕立てたる、祝ひの衣裳よろしく、この後より櫻井、やつし前帶、抱へ凛々しく、世話女房の形にて、手に風車を持ち出て來る。次に佐兵衞、着付け、袷羽織、一本差しにて、土産物の飴袋を提げ、その後より德松、丁稚の拵らへにて、甲斐絹の袱紗包みを持ち、供して出て來る。その後より女乞食お高、お秀、お吉、手拭をかぶり、拾ぜりふやかましく付いて出て來る。直ぐに皆皆本舞臺へ並よく並ぶ。

三人　下さりましな〳〵。

德松　此奴らは、やかましい奴等でござるわえ。先刻から付くな〳〵と云ふに。しつこく付いて來ても、出ないぞ出ないぞ〳〵。

たか　オヤ〳〵、この丁稚どのは、形よりは大きな聲でござるわえ。なんぼ付くな〳〵と云はしつても、めでたいお祝ひのお寶樣だ。こんな時貰はにやア、わしらが鼻の下が干上がりやすわな。

きち　それ〳〵、見れば美しいお内儀さんに、生寫しのお孃さん、御器量と云ひ、お七つのお祝ひさうな。聞えぬ振りをなされずと、大勢ぢやァござりやせん。三人の中へたつぷりと、お祝ひなされて下さりやしな。

ひで　御繁昌のお手代樣の、默つてござる事はない。乞食も身祝ひと申しますりやア、早く戴いて歸りたうござりますわな。

三人　下さりやしな〳〵。

トロ々に云ふ。

佐兵　これはしたり、やかましい奴等でござる。お娘御のお祝ひなれば、遣るまいものでもないが、まだ明神様へ御参詣もない先から、ザワ／＼と云はずとも、下向を待て待て。

たか　ホヽヽヽ、下向を待ても久しいものサ。よく物を積つても御覧じやせ。今日は霜月十五日、お祝ひはあなた方ばかりぢやござりやせん。御祝儀を下さりや、又外を貰ひに行く、忙がしい日でござりやす。そんな間に合せを仰しやらずと、下さる物なら下さるがようござりやすわな。

ひで　ほんに、御人體にもお似合ひなさらぬ事だぞ。どうして下さりやすな／＼。

トやかましく云ふ。此うち櫻井、佐兵衛の袖を引いて、早う遣れと云ふ仕方。佐兵衛、頭を振る。これを見て千本の松、お菊を肩より下ろし、床几へ腰を掛けさせ、櫻井が側へ寄つて、おれが呑み込んで居ると云ふ仕方。此うち三人はいろ／＼捨ぜりふにて、やかましく云ふ。千本の松、佐兵衛と入れ替つて

松　ヤイ／＼、乞食を乞食と云つたら、腹が立つか知らないが、恐らく洛中洛外で、名を賣つた千本の松さまが、お馬に雇はれたお祝ひだぞ。お手代衆が下向に遣らうと云はつしやるを、四の五の吐かすと、遣らうと云ふを知つても、おれが遣らねえ。何處ぞへ早く消えてしまへしまへ。

たか　なんだ消えてしまへ。幽靈ぢやアあるめいし、なんぼこなさんが、町抱への松であらうが、杉であらうが、貰ふのが此方の商賣。其方が名を賣つて居れば、此方も鼻缺けのお高と云つて、祝儀不祝儀に敗けを取つた女子ぢやアござりやせんぞ。

ひで　それ／＼、わしも腦天のお秀と云つて、葬禮ござれ祝儀ござれ、嫁入聟入養子弘め、ほんにこれまで貰はぬ事は、ござんせぬわいなう。

きち　同じ乞食仲間でも、わしは京女郎のお吉と云つて色ゆゑ今のこの態も、貰はにや宿へは歸られぬ。古いせりふを新らしく

三人　下さりやしな／＼。

松　此奴が／＼。イケしつこく吐かしやアがると、三人ともに擲り殺すぞ。

ト握り拳を振り上げる。三人惻り、逃げのく。佐兵衛、

徳松、兩方より松を留めて

兩人　ア、コレ、短氣な。靜まらつしやい〳〵。

佐兵　腹の立つも尤もぢやが、高が乞食物貰ひ、怪我があつては惡い程に、マア〳〵、靜まらつしやい〳〵。

櫻井　成る程、佐兵衞の云やる通り、めでたいお菊が今日の祝ひ日。持ち合せで濟む事なら、よいやうに譯を付けて、早う明神樣へお參り申したいわいなう。

松　サア、其やうに氣を弱く云はつしやるゆゑ、付け上がつてたわ言。一度がせうど、あの骨箱を叩ッ碎いて。

トまた立ちかゝるを、佐兵衞留めて

佐兵　ハテ、お内儀樣も、あのやうに云うてなれば、この佐兵衞がよいやうにする程に、此方へござい〳〵。

ト松を引きのけ、懷中より百錢を出し、紙に包んで

エヽ、コレ、云ひやうが云ひやうだに依つて、遣り憎い祝儀なれど、お祝ひに免じてくれる程に、キリキリと持つて行け。

ト抛り出す。お高、取上げ見て

たか　そんなら何かえ。御繁昌のお祝ひ樣が、これ見や、三人の中へたつたころりサ。

ひで　一人前が三十二文の相場だ。

きち　なんのこつたな〳〵。そればかりの目腐れ錢を貰はうと思つて、息せい張つて聲を枯らしやアしねえわな。よしにしな〳〵。

たか　とても下さるなら、もちつと御料簡なされて

三人　下さいやしな〳〵。

松　此奴らが〳〵、うぬらを相手にするは、かつたいに棒打ちと思つて、慈悲をすりやア付け上がつて、まだまだ吐かす顎骨。これからは祝儀より、この棒を喰はすべい。

トそこらにある反魂丹賣りの、棒を取つて振り上げる。これに恐れて乞食三人、下座の方へ逃げて入る。松、追ひ駈けようとするを、櫻井よろしく留めて

櫻井　ア、コレイナア、もうよいわいなう〳〵。

徳松　ほんに口程にもない。みんな逃げてしまふ奴サ。

佐兵　イヤモウ、流石のおれも、彼奴等が口には叶はぬわえ。

松　サア、それだに依つて重ねての見せしめ。この棒を喰はさうと思つたに、なぜお前留めなさる。

櫻井　サア、それはさうであらうけれど、高が袖乞ひ物貰ひ、逃げて去んだら儘にして、怖がつて居るあのお菊、

早うお宮へ參らせたいわいなう。

佐兵　それサ、先刻にからお菊さんも、退屈であらうし、あの形では窮屈で堪るまい。宮參りを早くしまつて、支度は社內の料理茶屋で、打寛ろいで祝ひの酒。

松　イカサマ、グッと一杯盛ッ切り、茶碗酒から付け込んで、この日頃千本の、返事を松が願ひ事。今日は是非とも、ナア、內儀さん。

櫻井　又そんな事。今日は大事の宮參り。娘お菊を一時も早う。

松　でも、云ひかゝつた男の意地。

佐兵　ハテ、それもこれも爰は途中。云はず語らずこの佐兵衞も、呑み込み姿と出かけて居る。

德松　この德松も、早く支度を、呑み込んだわえ。

佐兵　ハ、、、、意地の穢ない奴ではござるワ。

德松　でも、わつちやア近饑ゑサ。

松　此方も待たれぬ近饑ゑ。ちよつと爰でかすり縞。

ト櫻井に抱きつくを突きのけて

櫻井　エ、、阿房らしい。何するのぢやぞいな。

松　ほんにおれとした事が、お菊さんと取違へて、馬鹿な奴サ。サア來なさい。

トお菊を又肩車に乘せる。

櫻井　ホ、、、、あの人とした事が。

きく　お母さんも一緒に早う。

櫻井　オ、、行きますわいなう。

德松　そんなら申し、お內儀さん、支度を早く。

佐兵　まだ吐かすか。

松　サア、ござりませ。

ト大拍子になり、松先に櫻井、佐兵衞、德松も付いて鳥居の內へ入る。直ぐに下座バタ／＼にて、兵馬、藤助が襟首を持つて引摺つて出て來る。

兵馬　サア、素町人め、今押隱した物を、早く其處へ出せ。

藤助　これは又迷惑千萬な。何がお目に留まつたかは存じませぬが、商賣物の反魂丹、齒磨楊枝の外より、所持いたさぬ長井藤助。出せ／＼と仰しやるは、何を出すのでござります。

兵馬　ヤア、恍けても恍けさせぬ。この兵馬が黑い眼で、見嚙つた錦の袋。察するところ其方も、只の藥賣りぢやアあるまい。

藤助　すりやアノ錦の。

トこなし。

兵馬　なんと違ひはあるまいがな。
藤助　それで合點が參りました。錦の袋と仰しやるからは、大方私しが守り袋でござりませう。
兵馬　なんと吐かす。
藤助　サア、これは何でござります。私しが商賣は、繁華な所を見立てまして、居合ひ拔きの放れ業。怪我過ちを致さぬやうに、信心いたす神樣の、守り袋でござります。
兵馬　ハヽヽヽヽ、口賢く云ひ拔けても、守り袋としては仰山過ぎるワ。して、われが信心するは何神だ。
藤助　アイヤ、その神樣は。
兵馬　へヽ、早速に名は知るまい。神は九善の上を越す、王は十善、慥かに綸旨。
藤助　ヤ、なんと。
兵馬　守り袋に違ひなくば、今爰でおれに見せろ。
藤助　イヤサ、その儀は。
兵馬　見せぬは僞わり。われが懷中。
ト手を差込む。藤助、振り切り、この立廻りの中へ、孫三郎、ツカ〳〵と出て、兵馬を引きのけ、キッと見得。藤助、見るより悯りして
藤助　ヤア、其許は。
孫三　コリヤ、知らぬぞ。ついぞ逢うた事もない、居合ひ拔きの藤助とやら。そこらあたりに氣を附けて、一眼二早速兵法の、極意を知らぬ流石は町人。ハテサテ粗相千萬な。
兵馬　なんだ此奴は、詮議の妨げをする。誰れだと思へば先刻の浪人、性懲りもなく出しや張つて、合點のゆかぬ詞の端々。さてはうぬらは、一つ穴の狐だな。
孫三　これは〳〵、全く以て、近付き知り人でござらぬが、見掛けましたところが、何やらお侍ひ樣へ、慮外いたしたと存ずるから、お詫び致して遣はさうと存じまして、それゆゑお留め申しましてござる。
兵馬　ハテサテ、いらざる差出口。最前も最前とて、いづれやらの侍ひが、挨拶したばつかりで、助かつたその命。人の事より我が身を思ひ、邪魔せずと、そこ退け。
孫三　して又彼れへ御詮議とは、何やうの儀でござりまするな。
兵馬　何と云うたら噂に聞く、君より楠へ送るところの、官軍一味催促の、綸旨と見たゆゑ詮議するのだ。
孫三　フゥ。して、あなた樣は。
兵馬　六波羅の侍ひ、鹿草兵馬龍宗と云ふ者。新田楠の落

人を、詮議の爲の身が役目、それだに依つて。

ト立ちかゝるを又留めて

孫三　先づ／＼お待ち下さりませう。左樣承はつては、御尤もと存じますれど、憚りながらお目鏡が、違うたやうに存じまする。

兵馬　そりや又、なぜ。

孫三　ハテサテ、略承はりますれば、四條畷の合戰に、官軍方は敗北、新田義助兄弟を始めとして、楠正行主從とも討死仕り、君にも八才の宮諸とも、行くへ知れぬと、承はれば、綸旨とやらもあつて益なく、さのみ御詮議にも及ばぬ儀。殊に彼れめは賣藥賣りの町人、左樣な物を所持いたさう筈がない。ぢやに依つて、お目違ひと申すのが、よも誤まりでござるまい。

藤助　成る程、御浪人のお詞の通り、その日暮らしの藥賣り、綸旨とやら、しんしとやら、夢に見た事もござりませぬ。お疑ひを晴らされて、此まゝ宿元へお歸しなされて下さりませ。

兵馬　ハヽヽヽヽ、どう云へば斯う云ふと、居合ひ拔きが詞の受け太刀。さう吐かすが誠なら、われが懷中を改めさせろ。

藤助　その儀はどうも。

兵馬　ならぬと云へば怪しい一品。身が手を下ろして

ト孫三郎を引きのけ、藤助にかゝる。この立廻りに、兵馬が懷中より一通落ちる。孫三郎見付け、取上げて

孫三　「鹿草兵馬どのへ、淵邊伊賀守。」

兵馬　それを。

ト手ばしかく取つて懷中する。

孫三　合點のゆかぬその一書。

ト差出す手を拂ひのけて

兵馬　イヤ、こりや淵邊どのより落人を、詮議の文通だ。

孫三　然らばちよつとその文言。

兵馬　わいらに見せて堪るものか。

藤助　左樣ならば此方も、滅多に見せられぬ守り袋の神道祕密。

兵馬　すりや、懷中の詮議をすれば。

孫三　お侍ひの御懷中、今の一通、宛名の文言、引出して讀み上げませうか。

兵馬　イヤサ、そりやア。

孫三　乘りかゝつた拙者が挨拶。彼れが詮議を此まゝに、お見遁がし下さらば、此方も見遁がす詮議は五分々々。

但し慮外を顧みず、理不盡の仕らうか。
兵馬 サア、そりやア。
孫三 お見遁がし下されうや。
三人 サア〳〵〳〵。
孫三 何とでござるな。
兵馬 よいワ。せう事がない。望みの通り、この場は此まま、守り袋にしてやる程に、後日の詮議を待つてけつかれ。
孫三 重ね〴〵の御不肖も、御承知とござれば彼れが仕合せ、拙者が大慶。長居は恐れ、長井藤助。
藤助 お暇申すでござりませう。
兵馬 とは云ふものゝ。
ト立ちかゝるを留めて
孫三 お侍ひ様。
ト兵馬、こなしあつて
兵馬 さらばだ。
ト大拍子になり、兵馬、心を殘し下座へ入る。後に孫三郎、藤助こなしあつて
藤助 孫三郎どの。
孫三 コレ。

ト合ひ方になり、兩人、あたりを窺ひ、こなしあつて
思ひも依らぬ利種どのゝその姿。さては官軍催促の、御所存と見えまする。
藤助 仰せの通り、四條畷の合戰より、脇屋次郎義助さま御兄弟と云ひ、楠の一族討死とも聞き、又は亂軍を遁がれて、官軍催促とも、とり〴〵の世の風說。それゆゑに斯くの如く、姿をやつす名張八郎。何卒再び南朝の御代となさんず我が心願。
孫三 ホヽウ、頼もしきその心底。某とても同腹中。只心ならぬは八才の若宮、何れに忍ばせ給ふやと、御行くへを探らん爲、繁華の土地をそこ爰と、面を包み浪人出立ち。今日思はずも備前の國の住人、備後三郎高德に出合ひ、それと明かして名乘らねども、院の庄の櫻木に、志しを殘されたる、絕句の割符に違はぬ宮方。最前の詞にては、八才の宮匿まひあるに違ひなし。その儀は少しも氣遣ひあるな。
藤助 委細の樣子承はり、我れもその儀は少しく安氣。さりながら、今日鹿草兵馬に見咎められし錦の袋は、忝なくも君の宸筆。新田楠へ下されし、尊氏追伐の御綸旨。
ト懷中より、錦の袋に包みし綸旨を出して見せる。こ

の時、下座より女乞食お高、出かゝつてこれを見る。孫三郎、扇子に受取り、押戴くこなしあつて

孫三　誠にこれこそ大切なる、軍勢催促の一品。どう云ふ仔細で其許の、守護いたさるゝ。様子は如何に。

藤助　即ち四條畷の合戰、亂軍となるその砌り、楠帶刀正行どの、我れを密かに招ぎ寄せ、事に及ばゝこの一戰、討死も計られず、もし敗軍となるならば、この綸旨を大切に、再び味方を狩り集め、義兵を擧ぐる種なりと、我が忠心を見込み給ひ、預け賜はるその御綸旨。未前を察する正行どの。案の如く味方の敗北。それより軍中遁がれ出で、斯く姿をやつし居るも、新田どの楠どのゝ、生死を訊さん爲ばかり。

孫三　我れもその事覺束なく、心を碎く折に幸ひ、廻り逢うたる八郞どの。この上とても油斷なく、綸旨の守護を大切に、何卒新田楠の、在所を求め義兵の旗揚げ。

ト また綸旨を藤助へ渡す。藤助受取り、懷中して

藤助　心は矢竹に逸れども、討死が實ならば、いつ旗揚げの期もあらんと、殘念に存じます。

孫三　ヤア、腑甲斐なきその一言。新田楠なきとても、今はひそまる官軍方、狩り催ほして追ッつけ旗揚げ。兎角大事はその御綸旨。大切に、合點か。

藤助　心得ました。然らば此まゝ互ひに別れて。吉左右相待つ。

孫三　先づそれまでは、居合ひ抜きの長井藤助。

藤助　世を忍ぶ御浪人。重ねてお目にかゝりませう。

ト 立別れようとする。この時お高、藤助を突き廻して

たか　コレ長井さん、マア待つて下さんせいなア。

藤助　フウ、見れば女の物貰ひ。待てとは何ぞ用があるか。

たか　アイ、用も用、並大抵の用ぢやごんせぬ。今日は霜月十五日、生子這子の祝ひゆゑ、物貰ひの日と思ひの外、貰ひの實入りもなかつたが、今ちよつと見た錦の守、祝ひの子より丈夫な代物、大勢ではなし、たつた一人、ずつしりお金を、取らして遣つて下さりやしな。

ト これにて孫三郎、八郞と顏見合せこなしあつて

藤助　すりや、最前より御浪人と。

たか　サイナア、何やら面白いお話しの樣子、聞いたに依つて、おねだり申すのでござりやすわな。

孫三　すりや、今の大事を。フム。

たか　なんの事でござりやすな。大事か小事か、わしらが聞いちやア、根ッから解らない筋だ。お金さへ下さりや

ア、何もお案じなされるこつちやアござりやせん。下さりやしな〳〵。

孫三　如何にも望みの合力くれう。これへ參れ〳〵。

たか　ハイ〳〵、それは有り難うござりやす。大方何でもズッシリとした、お祝ひでござりやせう。

ト云ひながら孫三郎の側へ來て

して、その御合力は、どんな事でござりやすな。

トお高を引きつける。お高、振り拂ふを孫三郎、立ち身に引立て、グッと締め殺す。此うち、掠めたる大拍子。八郎これを見て

藤助　大事を聞いたるその女。

孫三　蛙は口ゆゑ。

藤助　して、その死骸は。

孫三　跡構はずと、綸旨の恐れ。早く〳〵。

ト顔で行けと云ふ仕方。

藤助　然らば重ねて。

トこなしあつて、ツイと下座へ入る。孫三郎、お高をとつくりと締め殺し、首筋を取つて死骸を何處ぞへ隠さうと云ふ思ひ入れして、あたりを見廻すうち、鳥居の内より女乞食お秀、お吉兩人、出合ひ頭にこれを見て愕りして

兩人　こりやアお侍ひ樣。わしらが仲間のお高を、どうさつしやります〳〵。

ト聲を掛けられ、孫三郎、愕りして

孫三　イヤサ、これは。

ト手を放す。お高、バッタリ轉ける。兩人立ちかゝつて

兩人　ヤア〳〵、お高が死んだわいの〳〵。

ひで　エヽ、そんならお侍ひ樣が殺したのぢやな〳〵。

孫三　イヤサ、全く以て。

きち　そんなら又、なんで手籠めにさつしやつたのぢや。こりやアこの分では免されぬわいの。

兩人　ヤレ、人殺しぢや〳〵。

トやかましく喚く。孫三郎困つて、兩方を捨ぜりふにて押へ付け

孫三　サ、尤もだ〳〵が、武士に向つてその女、合力願ふ身を以て、雜言過言のその上に、理不盡の働らき。路次の妨げ、振り拂つた怪我の拍子に、氣絶なしたは持病の癪か。眩暈の起つたものか。とくと療治を加へなば、蘇生いたすは定のもの。掛り合つたる身が不肖、見捨てに

もなるまい。

ト懷中の紙入れより、包み金を出し

持ち合せの療治代、其方達も朋輩のよしみ。介抱いたして遣はせい。

ト抛つて遣る。

ひで　すりや、このお金で。

孫三　よきに計らへ。

ト行かうとするを、兩人、兩方より留めて

ひで　措かつしやい〳〵。病にかづけて目腐り金、どこも冷え固まり、息の根は止まつて居るに、エヽ、こりやアなんだの、刃物で殺しちやア、直ぐに侍ひと知れるに依つて、締めたのぢやな〳〵。

きち　コレ、よく物を積つても見さつしやい。古い奴だが人の命は、錢金で買はれるものぢやアござりやせんよ。なんぼ侍ひだと云つて、科のない者を殺して、濟みやすかな〳〵。

孫三　ハテサテ、わいらも聞分けの惡い。毛頭手に掛けた覺えがないが、ほんの怪我のはずみと云ふもの。大方卒中と云ふのであらう程に、わいらも諦らめい〳〵。

ひで　イヤ〳〵、さうはならない〳〵。所詮爰でわつぱさつぱ云つたとて、役に立たない事だ。頭の所へ連れて行つて、理非を付けてもらふがいゝ。

きち　サア〳〵、來さつしやいな〳〵。

ト孫三郎を引立てる。

孫三　すりや、どうあつても料簡ならぬか。

兩人　知れた事だわな〳〵。

孫三　さう云へば是非がない。こりや、毒喰はゞ皿ぢやわえ。

トこなし。

兩人　面倒な。歩ばつしやい。

ト引立てる。腦天のお秀を、孫三郎見事に取つて投げる。京女郎のお吉、うぬをとかゝるを引きつける。立廻り。大拍子になり、下座の方より佐兵衛出て來て、これを見付け、お吉兩人を引きのけて孫三郎を留め

佐兵　マア〳〵お待ちなされませ。見れば帶刀のお侍ひさうなが、物貰ひの惡口を、御立腹の筋と見えまする。左樣ならば、料簡なされて遣はされい。

孫三　これは何人かは存ぜねども、御推量の通りでござる。

佐兵　左樣でござりませうとも。コリヤ、わいらはどうしたものぢや。いつもの事とは云ひながら、人を見て物を

云へ。町人とは違ふ、お侍ひだぞ。氣の利かない奴等だ。嗜なめ〳〵。

ひで　なんだ嗜なめ。どうしてこれが嗜なまれるものだ。見ればこなさんは、先刻に逢つた馴染みの顔。滅多に挨拶さしつたら、飛ッ沫がかゝらうによ。

兩人　すッ込んで居なさい〳〵。

佐兵　此奴が〳〵、さう云ふ惡口を吐かすゆゑ、今のやうな手酷い目に遭ふではないか。來合せた不肖に留めてやるぞ。有り難いとは思はいで、飛ッ沫がかゝらうとは、そりやどう云ふ飛ッ沫だ。譯を云へ〳〵。

きち　オヽ、聞かつしやらいでも云はにやアならない。あの侍ひは、人殺しだよ〳〵。

佐兵　ナニ、人殺しとは、どう云ふ譯で。

ひで　サ、聞かつしやりませ。わしらが仲間のお高を、科もないに、締め殺したわな〳〵。

佐兵　ヤヽヽ、なんと。

きち　この死骸が慥かな證據サ。

　トお高が死骸を引出して見せる。佐兵衛、立寄り見て

佐兵　成る程、こりやアお高とやらが死骸。

　ト思ひ入れ。

ひで　なんと、どうでござりやす。なんでもこのお高を締め殺したりやア、深い様子があるお侍ひだと思ふに依つて、詮議をすれば、病だの卒中だのと、刀の威光に極めつけても、威しを食ふやうな、脳天のお秀ぢやござりやせんよ。

きち　マア、なんでも目腐れ金で扱ひをつけるが究竟。それだに依つて親方の所へ、連れて行かうと云ふが誤まりでござんすか。

ひで　なんぼ氣が強くつても、女の事なら力づくにやア叶ひやせん。理で勝ちやす。アイ、こんな大それた事を、僅かの金で濟ましては、仲間へ聞えても立ちやせん。

きち　それとも又、こなさんが挨拶で、譯の立つ事なら、仕上げを見たうござんす。サア、譯が立つかえ。立てゝ下さんせ。

兩人　どうぢやいなア。

　ト佐兵衛を兩方より極めつける。此せりふのうち、佐兵衛ホロ〳〵泣き出す。こなしあつてこの止りに

佐兵　ハアヽヽヽ。

　トお高が死骸の側へ泣き倒れる。孫三郎これを見て、合點のゆかぬこなし。お吉、お秀、佐兵衛が側へ立ち

かゝつて

ひで　コレ、佐兵衞さんとやら、いま思ひ出したやうに、お高が死骸へ取りついて、なんでマア其やうに

兩人　泣かしやんす。

　　　トこれにて佐兵衞、しやくり上げるこなしあつて、涙を拭ひ

佐兵　さても〳〵情ない。此やうな悲しい事が、又と世界にあるものか。今までは隱して居たが、何を隱さうこのお高は、この佐兵衞が妹ぢやわいなう。

兩人　イヤア。

　　　ト惘り。孫三郎、思ひ入れ

佐兵　斯うばかりでは合點がゆくまい。親の名は云はれねども、譯あつて身上しまひ、親子兄弟散り〳〵になつてわしはやう〳〵傳手を求め、どうやら斯うやら手代奉公。所にしかも後の月、内儀の供して祇園參り、四條河原で思はずも、行き合つた妹お高。見れば姿も袖乞ひの、淺ましい姿を見て、飛び立つ心も主人と云ひ、あたりの人目をいとふゆゑ、知らず顏にてその場を別れ、或る夜密かに尋ね逢ひ、樣子を聞けば落ちぶれて、今は袖乞ひ物貰ひと、聞いた時のおれが心。推量してさ下れい。便りのない一人の妹。どうぞして足を洗うて遣はしたいと思へども、此方も主持ち、早急に思案も出來ず。氣遣ひするな、追ツつけ人間にしてやる程に、この末どこで逢はうとも、知らぬ顏と云ひ含めたも親の恥、包むに餘る悲しさも、親は泣寄り、先刻の時、ちよつと逢つたが兄弟の、長い別れであつたわいやい。

　　　トいろ〳〵愁ひのこなしにて泣き落す。兩人これを聞いて

ひで　ほんにマア、知らぬ事とて、そんならこのお高は、あなたの妹御でござりましたか。

きち　さう聞いては猶の事、こりやその分には濟まぬぞえ。濟まぬぞえ。

ひで　お前もマア、男のやうでもない。相手は眼前知つてなれば、敵を取つておやりなさんせ。コレ

兩人　泣いて居る所ぢやござんすまいがな。

　　　ト極める。佐兵衞、思ひ入れあつて泪を拂ひ

佐兵　さうだ〳〵、よく云つた。これがほんの負うた子に、敎へられて淺瀨とやら。

　　　トこなしあつて氣を替へ、孫三郎が側へ來て

イヤナニ御浪人、ちよつとお目にかゝりたい。

孫三　すりや、身共に。

ト孫三郎、思ひ入れあつて、佐兵衞が側へ居直り

して、その仔細は。

佐兵　ハテ、問はずと知れた今の樣子。町人と成り下がつても、以前は矢ッ張り武士の果。さるに依つて、平常肌身を放さぬ一腰、親の形見とこの通り、腰に帶した武士の魂ひ。こなさんとても侍ひ。この分ぢやア濟みますまい。マア、どうせうと思はつしやる。

孫三　どうと云つたら不慮の災難、最前から見るところにあの物貰ひを妹と、泪を流して愁傷の體。よもや嘘にはは泣かれまい。まこと親身の妹なら、仇を晴らすも刀の手前。斯うなるからは是非に及ばぬ。卑怯未練に隱さずとも、云うて聞かする、その女、願ひある身の一大事、立聞きしたはその身の不運。如何にも身共が手にかけた。

秀吉　ソレ、見たかな。

孫三　其許も武士の果とござれば、尋常に相手にならう……とサ、角を立つるは以前の事。深い願ひは相互ひ。此方も浪人、爰が談合。時節を待つ其許の、今のすぎはひ。その町人の心になつて、こりや料簡が出來さうな事でござるぞや。

佐兵　面白い。侍ひなればこそ刀が魂ひ。町人の魂ひは算盤の利慾に轉げ、妹が命よりも、二番目は金づく。扱かつてくれろと云ふのか。

孫三　如何にも、定業と諦らめて、香奠の弔ひ金、些少なれども只今は、浪人の心に任せず、所持いたした用意金。何卒これで。

ト懷中より小判五兩出して、扇に載せて佐兵衞が前に置く。

佐兵　すりや、この金、妹が弔ひ金は、たつた五兩。

孫三　御受納なされて下されうや。

ひでア、申し／＼佐兵衞どのとやら、先刻にも金の扱ひ、現在物貰ひのわしらさへ、料簡つけぬ目腐れ金、現在血を分けた、お妹御の弔ひ金なら、しつかりしやんと帶を締めた金でなけりやア、濟まされさうもないものでございやすぞえ。

秀吉　もつと氣張んなさい／＼。

佐兵　其方達が云ふ通り、定めのない人の命の相場。僅か五兩や三兩の金で、面を張られちやア、算盤の桁が違ふ。こりやア矢ッ張り町人をやめて、侍ひと眞劍づく。勝負をせずばなりますまい。

トきつと云ふ。

孫三　すりや、弔ひ金が不足ゆゑ。

佐兵　どこまでも武士の意地。それも又、固まつた金とござれば……町家の手代二一天作、天秤の引けを取らぬが勘定づく。

孫三　でも、大枚の金と云うては。

佐兵　無ければ侍ひ、刀の手前。

孫三　ぢやと云つて。

佐兵　町人になりませうか。

孫三　イヤサ、それは。

佐兵　侍ひにならうか。

孫三　サ、それは。

佐兵　町人か。

孫三　サア。

佐兵　侍ひか。

孫三　サア。

佐兵　サア。

孫三　サア／＼

佐兵　海とも山とも、方を付きやれな。

　ト孫三郎、思ひ入れあつて

孫三　なんとせう、せう事がない。力づくにも才覺にも、急に出來ぬは浮世の金事。マア、それよりは手短かく武士の表を立て、運に任せて互ひの勝負。

佐兵　こんな事もあらうかと、譲り受けた刀の切れ味。試して見るも又一興。

孫三　すりや、金づくと命づく。

佐兵　この場で勝負をする心か。

孫三　武士の詞に二言はない。然らば以前は兎も角も、手の内と云ひ町人の、錆び刀では切られまい。

佐兵　フ、、、ハ、、、、、錆び刀とは慮外な一言。先刻にも云ふ通り、親の譲りの一腰と、肌身離さぬこの業物。

　ト腰に差したる刀を突きつけて見せる。孫三郎、この刀に目を付け、こなしあつて

孫三　ハテ心得ぬ。その拵らへをよく見れば、兼ねて噂に聞き及ぶ、和田新左衛門が所持の一腰。慥かにその名は蛇返しの名作。

　ト手をかける。佐兵衛、悔りして振り拂ひ、一腰を隠してキッとこなし。

佐兵　イヽヤ、こりやア、身が家に傳はつた相州物。廣い

世界に同じ拵らへ。さりながら、和田が重器と見知つた浪人、さては新田の

孫三　何がどうした。

佐兵　イヤサ、似た、ナ、似た拵らへもあるものだ。滅多な事を云ふまいぞ。

孫三　然らばそれもそれにして、望みの立合ひ、妹の、敵と名乘つて討たれてくれう。サ、拔け。切らぬか。打ちかけぬか。但し又此方から、返り討にぶッ放さうか。

佐兵　イヤサ、そりやア。

孫三　サ、拔かぬか。但し後れたか。サア／＼／＼。

ト佐兵衞が側へ詰め寄せ、キッとなつて

よもその刀は拔かれまい。

ト極める。佐兵衞こなしあつて

佐兵　金にせう。

孫三　なんと。

佐兵　武士と云つたはほんの人前。なんの妹の一人や二人、殊に乞食物貰ひ、あつても益ない兄妹。くたばつたはその身の仕合せ。此方の德と云ふものだ。五兩でも三兩でも、當分ぼつぼに溫まるが、マア、當世であらうわえ。

ひで　オヤ／＼／＼、この人は飛んだ事を云ふ人だ。今まで泣いたり笑つたり、金づくぢやア濟まさないと、武士らしい事を云ふかと思へば、また金に轉げて出て、此ままに濟ます料簡。

きち　その上に口汚なく、乞食々々と澤山さうに云つて、乞食や袖乞ひに劣つた、氣臆れのからくり的。

ひで　忽ち變る手拍子は、雷門の大通だの。

佐兵　サア、その大通になつて、金で濟ますが德用向。今の五兩が申し請けたい。

孫三　イヤ、そりやアマアなるまい。

佐兵　なぜ／＼。

孫三　侍ひが詞を下げ、一旦詫びたを聞入れず。眞劍づくになつたらば、もう

佐兵　此方から料簡ならない、サ、そこをどうぞ不肖して、今の金を下さらば、はし折り鏡の一人の妹、どうぞ弔らつて遣はしたうござります。ひよんな處へ來合せて、犬死になると思へば、不便なやら可哀やら、熱い泪が零れますわいなう。

秀吉　アレ／＼、また泣き出したワ。

孫三　ハテ、調法な泪の出所。氣狂ひの沙汰を取措いて、尋常に勝負をせい。

佐兵　なんのマア、勝負どころでござりませうぞ。
孫三　その白化けも合點の、劍の出所その一腰。
ト取りにかゝろ。佐兵衛振り拂ふ。この立廻り、以前より、櫻井出かゝり、よき程に中に分け入り、佐兵衛を引きのけ、孫三郎を留めて、キッとこなし。
櫻井　マア／＼待つた。
孫三　ヤア、其許は。
秀吉　ほんに先刻のお内儀さん。
ト佐兵衛見て
佐兵　ハア、、、。
ト泣き落す。櫻井これを見て
櫻井　ほんに其方の泣き上手は、昔に變らぬ今の體裁。何もかも聞きました。その物貰ひの女中を、妹とは大きな僞はり、不慮の死も時の災難、わしが挨拶する程に、朋輩のよしみ二人の女中、これでよきやうに、取置いたがよいわいなう。
ト袱紗包みの金を拋つて遣る。お秀、取上げ
ひで　すりや、このお金で。
櫻井　早う／＼。
きち　又もや御意の變らぬうち、そんならお秀、二人して。

兩人　取り置きまするでござりませう。
ト合ひ方になり、お秀、お吉、お高が死骸を抱へ持つて下座へ入ろ。孫三郎こなしあつて
孫三　これはマア、思ひも依らぬ所にて、お目にかゝりし櫻井どの、お姿と云ひ町人出立ち。あの者を泣き上手とあるからは、さては噂に聞き及びし、正成公に仕へたる
佐兵　杉本佐兵衛めでござります。
孫三　すりや、杉本佐兵衛か……ハテナア。
櫻井　して、あなたは今以て、夫正行始め、新田御兄弟の生死の程も。
孫三　相知れぬゆゑ斯くの姿、まだも頼みは今日計らず、承はつた宮のお行くへ。
櫻井　ア、申し、鵜の目鷹の目、爰は途中。折を見合せ、わたしらが隱れ家、コレ申し。
ト囁く。孫三郎呑み込み
孫三　成る程承知。さはさりながら、今の一腰。
櫻井　ハテ、それもわたしに任せて、先づ／＼社内へ。
孫三　イカサマ、聞き及びたる雜魚寢の神社、通夜も一興。然らば此まゝ。
佐兵　すりや、浪人も。

ト立ちかゝるを櫻井押へて

櫻井　慮外な。控へい。

孫三　お別れ申す。

ト唄になり、孫三郎こなしあつて下座へ入る。後に佐兵衞、思ひ入れあつて

佐兵　イヤア、櫻井さま、何やら今の侍ひと、頷いたり囁いたり、なぜわしに隱さつしやります。その上、これまで逢うた事のないあの浪人、名は何と云ひます。この佐兵衞を隔てさつしやるは、聞えませぬぞえ〳〵。

櫻井　聞えぬとは其方が事。舅御と云ひ正行どのゝ勘當受けて、行くへの知れぬ其方が、どうしてマア、あのお方を見知らうぞ。それに分けて三歳四歳、國を離れて都の町、四條畷の合戰に、正行どのは討死とも、又は長らへござるとも、とり〴〵の世の風說。尋ねんにも女子の身、殊にお菊と云ふ足手纏ひに絡まれて、世を忍ぶ町家の後家。便り少なう思ふ折柄、フッと出逢うた其方の身の上、先非を悔いて勘當の、詫びを願ふは幸ひと、夫の生死を聞くまでは、杖柱とも賴む其方。それにマア、あらう事か、泣き上手を幸ひに、元手にして、强請り騙りの惡心は、如何なる事か。もう今日は許されぬ。今日爰で勘當する程に、何處へなりとも勝手に行きや。

佐兵　フウ、すりや佐兵衞が性根を見込み、御勘當なさるるとや。ハア……泣き上手を止めました。如何にも勘當請けますべい。なんのこつた、途方もねえこつちや。自らの女房だと思ふに依つて、廻り逢うたを幸ひに、力になつてやらうと思ふを、志しも裏はらなら、此方も忠義の裏はらだ。南朝の敗軍に、くたばつた新田楠、世になし者に望みはない。これからは又、六波羅へ取入つて、立身出世の身となつて、宮軍の奴等が吠え面を、高見から見物すべいか。ハテサテ、笑止な奴等でござるわえ。

ト云ひ捨て、下座へ行かうとするを、櫻井キッと留め

櫻井　佐兵衞待て。勘當すれば主でなく、家來でもなければ、今の惡口は、聞き遁がしにしてやりもせうが、聞捨てならぬは今聞いた、肌身離さぬ其方の一腰。この櫻井に渡して行きや。

佐兵　ハヽヽヽ、仔細あつて手に入る名作。女の手業に、どうして〳〵、無駄を云はずと、其處を放しな。

櫻井　さう云やれば金輪際。望みかゝつたその一腰。わしが斯うして。

ト手を掛ける。振り切る。宮神樂になり、立廻りよろ

しく、トヾ佐兵衞、櫻井を當て、鳥居の内へツイと入る。櫻井心附き、追ひかけようとする。出合ひ頭に下座の方より、千本の松出て來て、櫻井に行き當り

松　お内儀さん、爰に居なすつたか。

櫻井　ヤア、松どのかいなう。

松　ほんに、好い所で逢ひましたなう。

櫻井　エヽ、そこどころぢやないわいなう。

ト云ひ捨て行かうとするを、松、留めて

松　コレサ、マア〱、待ちなさいな〱。あの社内の料理茶屋で、樂しんで居るうちに、お前の姿が見えぬに依つて、こりやア手水に行きなすつたと、待てども〱歸んなさらねえ。そこであの丁稚の德松に、お菊さんを預け、遊ばせて居るその隙に、來て見りやア追駈けくら。相手は誰れか知らねえが、御心が揉めるぞえ〱。

櫻井　また久しいてんがう口。そんな事ではなけれども、ちつと外に樣子があつて。

松　サア、そのちつと外の樣子が嫌だて。なぜと云ひなさい。色は思案の外と云ふぢやアねえかえ。殊に聞けば御亭主は他國稼ぎ、三年四年戻られぬと聞けば、なんぼ辛抱强い女でも、あの娘御ばかり抱いては居なさるまい。外に抱かれ手があるかは知らねえが、疾からわしが付けつ廻しつ、出入り場の旦那衆をしくじる程有頂天になつて居るは、大概お前も推量して、くんなすつたがよいわな。今日のやうな首尾が、又とお前あるものぢやアないぞえ。どうしてくんなさるな〱。

ト櫻井が手を取つて、しなだれるこなし。

櫻井　サア、其やうに云うて下さんすこなさんの志し、なんの悪う思ひませうぞ。嬉しいは嬉しいが、貞女兩夫に見えぬ敎へ。娘に敎へる身を以て、そんな徒らがなりませうか。この事ばかりは、どうぞ免して下さんせいなア。

松　フウ、そんなら何かえ。これ程にわッつ口說いつ賴んでも

櫻井　サア、また折もござんせうわいなア。

松　措きやれな〱。なんのこつたえ。千本の松さまと云つちやアナ、仕事師仲間でも、ついぞこれまで誤まつた事のねえ男だよ。色竈だと思ふに依つて、口を垂れりやア付け上がつて、なんだ嫌だえ。嫌だも凄まじいわい。斯う云ひかゝつちやア、嫌でも應でも撲り倒しても、抱いて寐るワ。

ト握り拳を振り上げる。櫻井、悔りして

櫻井　ア、コレ。
松　と云ふのは嘘よ。どうして色戀が、張込みで行くものかな。そりやアわしも知つて居る程に、コレ、拜むわな拜むわな。
ト無理に引寄せ抱きつく。櫻井、振り切る。立廻りの中へ、徳松、お菊を負うて出て來る。この中へ分け入る。
徳松　ごつてい〳〵。見付けたぞ。ほうやれな〳〵。
松　大べら坊め、何を吐かしやアがる。
櫻井　ほんにお菊、待ち兼ねて居やつたであらうの。
きく　お母さん、もう去にたいわいなう。
徳松　オヽ、去にませう〳〵。これから直ぐに大儀ながら。徳松、内まで負うて行てたもや。
徳松　そりやア合點、承知の幕。その代りに饅頭だぞえ。
松　よう食ひたがる奴でござるわえ。惡い處へ來やアがつて、うぬの食ひ氣より、此方の色氣を、微塵にしやアがつたな。お菊さんはおれが負つて行つて、居催促は古いに依つて、居ざい口説だ。サア、お菊さん、來なさい。
ト抱きにかゝる所へ、下座より下馬平走り出て來て
下馬　町抱への千本の松とは、其方か。

松　成る程、如何にもわたしでござります。
下馬　然らば御主人兵馬さまが、内々御用とあれば、社內の茶屋へ早く參れ。
松　此方に覺えぬお侍ひ樣が、御用とあれば、參るまいものでもござりませぬが、ちつと只今これに、しかゝつた用事がござりますれば。
下馬　ハテサテ、此方は急御用。同道いたせとある事なれば、身共と一緒に、參れ〳〵。
松　でも、私しは、ちつと爰に。
下馬　ハテサテ、身と一緒に來いと云ふに。
ト捨ぜりふやかましく、下馬平、松が手を取りて、無理に引立て、下座へ入る。
徳松　なんの事だ。とんと氣狂ひの沙汰だ。
櫻井　もう暮れるに間もあるまい。邪魔を拂うた上からは、一時も早う。
徳松　お內儀さん。
櫻井　徳松、おぢや。
ト行かうとする。この前より後へ篠村源吾、中間二人、陸尺を連れ出て居て、この時
源吾　ソリヤ。

皆々　動くな。
ト中間二人、左右より取卷く。櫻井、徳松惆りして
櫻井　こりや、なんとなされまするな。
源吾　何とするとは落人の、新田方の由緣と見て、主人の
屋敷へ引立つるワ。
皆々　キリ〳〵うせう。
櫻井　アヽ、コレ申し、全く左樣な者ではござりませぬ。
御覽の通り、町家住居のすぎはひも、娘が七つの祝ひ日
ゆゑ、明神樣へ參詣の、下向を急ぐ黃昏時。新田方との
お目違ひ。何とぞ此まゝお免しなされ、お歸しなされて
下さりませい。
源吾　ヤア、その願ひ、叶はぬ〳〵。云ひ譯あらば屋敷へ
參り、殿の御前で申し開け。
櫻井　すりや、どうあつても我れ〳〵を。
源吾　急いで早く。
皆々　うせう。
ト中間立ちかゝつて、徳松が負つて居るお菊を引取る。
それはト寄る櫻井を、源吾、捉へて無理に乘り物へ入
れ、戸を引立てる。手早に陸尺、舁き上げる。徳松、
逃げようとするを、中間引きつける。この立廻り、混
雜なるやうに手早くあつて
源吾　乘り物早う。
皆々　ハアヽ。
ト合ひ方になり、この乘り物を先に中間二人、徳松を
引立て、足早に向うへ入る。源吾殘つて見送るうち、
鳥居の內より備後三郎高德、編笠を手に持ち出て來て、
源吾と顏見合せ、こなしあつて
高德　出かした源吾。
源吾　まんまと首尾よう。
高德　コリヤ、供いたせ。
ト三重になり、高德、思ひ入れあつて、編笠をかむり、
源吾付いて鷹揚に向うへ入る。ト下座の方バタ〳〵に
て、松、手拭を肩に掛け、逃げて出て來る。後より鹿
草兵馬、下馬平、追ひ驅け出て來て、舞臺にて追ひ廻
し、松、眞中に、兵馬下手に、下馬平左右に挾んで、
柄に手を掛け
下馬　動きやアがるな〳〵。
松　ヘイ〳〵、滅多な事をなされますな。
ト下に居て、兩方へ心遣ひ。
兵馬　コリヤ〳〵下馬平、聊爾せずとも、とつくりと得心

の致させたがよい。

下馬　でも、お旦那のお頼みを、請込まぬ逃げ足ゆゑ、是非に及ばず、只今の仕合せ。

兵馬　サア、千本の松とやら、いま某が頼む一大事、聞き屆けてこの役目。仕負ふせるものならば、その身の立身、活計歡樂、大名に取立てくれる。

下馬　但し、否とじくねると、首と胴との生別れ。とつくりと臍の下へ、魂ひを落ちつけて、お旦那のお頼みを承はるか、どうだ。

松　ア、申し〳〵、何のお頼みかは知らないが、身に叶つた事ならば、聞くまいものでもない程に、必らず、拔かつしやりますな〳〵。

兵馬　ハ、、、、。流石は町人。滅多に切つて堪るものか。

松　それでマア落ちついた。して、お頼みと仰しやるはな。

兵馬　頼みと云つて外でもない。先つ頃、四條畷の合戰に敗軍なしたる南朝方。北朝の勝利となれども、新田楠の一族、生死の程も定かならず、行くへの知れぬ、八才の君を守り立て、義兵の企てある風聞。然るにこの程、承はれば、備前の國の住人、備後の三郎高德と云ふ者、南朝とも北朝とも偏らず、當地に閑居。我が子として匿まひあるは、八才の君に疑ひなしと、六波羅へ注進の者あつて、いま評議眞最中。

下馬　その高德と云ふ者を、お旦那始め身共らも、面體知らぬその上に、八才の君は猶の事、誰れも見知りし者がない。其うちに六波羅の侍ひ、氏家中務の次官重國見知りあり、折惡しく在國にて病氣の屆け。その重國に面體恰好、よく似たる其方と、六波羅どのゝ詮議に依つて、上使の役目をお頼みなさるゝ。なんと面白い相談であらうがな。

松　エ、、そんなら、なんでござりやすね。エ、、引摘んで云つて見やうならば、その南朝とやら三朝とやら、どうやら聞いたやうな名だが。

下馬　何を吐かす。

松　ハテ、せかせいやすな。その南朝方の、八才の君とやらを匿まつて居る、備後三郎とやら、琉球とやらが、屋敷へ行つてその首を、引拔いてくればいゝぢやアごんせぬか。

兵馬　オ、サ、筋はさうだが、さう荒氣では行かぬ。上使となつて入込めば、大概知れる館の樣子。其方が承知す

れば、身が邸へ連れ歸り、密談の上申しつける。大切なこの役目、合點がいたな。

松　ようござりやす。やつて見やせう。併し、差しつけぬ大小衣服。こいつは稽古ものだわえ。

下馬　何もかも主人のお指圖。致へを受けてやりかけろ。

松　申し、又その備後の三郎とやらが、匿まはぬと云つた時には。

兵馬　それはぬからぬ兼ねての手配り。美作の國、杉坂の院の庄の櫻木へ、天勾箋の絶句を殘し、志しを通ずる手蹟。何者とも知れざれども、將にこれこそ高德ならんと、詮議一致いたせしゆゑ、その手蹟も殘しあるワ。

松　そんならそれも片付けたと云ふものか。して、わしに似たと云ふ、その人の名は、何とやら云ふね。

兵馬　ハテ知れた事。氏家中務次官重國。

松　とんだ長い名だね。日の短かい時は云はれさうもない名だ。なんでも我が名だに依つて、こいつをとつくり覺えにやアならねえ。これを覺えるには、カウト。オツとよし／＼。百人一首の法性寺入道に譬へて置くべい。

兵馬　イカサマ、呑み込みのよい。その機轉では、隨分役目は上首尾々々々。

下馬　猶も詳しきその仔細。お屋敷にてとつくりと

兵馬　爰は途中、人や聞く。萬事は館で、松とやら

松　お供いたすでござりませう。

兵馬　下馬平は又後へ殘り、居合ひ抜きが所持の一品、手に入れて立歸れ。

下馬　その儀はちつとも、お氣遣ひなされますな。

兵馬　然らば一緒に。

下馬　お旦那樣。

松　コレ、どうぞ巧く行けばいゝが。

兵馬　ハヽヽヽ。

松　サア、お先へござらつし。

ト大拍子になり、兵馬先に松、後に付いて足早に向うへ入る。下馬平、後を見送り

下馬　マア／＼、これで一方は片付いた。

ト下座の方、人音するゆゑ、下馬平こなしあつて、ちよつと小隠れする。此うち長非藤助、以前の形にて出て來て、思ひ入れあつて

藤助　最前思はず見咎められしこの綸旨、折よくも孫三郎に出合ひ、無難に事は納まれども、心ならざる守護の役目。最早落日。この場は早く……ソレ。

ト懷中して行かうとする。下馬平、ツカ〳〵と出て突き廻し、向うに立つて

下馬　マア、やる事はならない。

藤助　見れば覺えの奴さん、日も暮れたれば居合ひ拔き、商ひしまつて歸るのを、なぜやらぬとは仰しやりますな。

下馬　ハ、、、、此奴、恍けた奴でござるわえ。お旦那の御意を受け、われがぽつぽにしまつてある、綸旨を奴が受取るのだ。細言云はずと其處へ出せ。

藤助　さう聞いちやア、いつまでも、居合ひ拔きになつちやア居られねえ。たつて道の邪魔にすれば、眞劍づくで通つて見せう。片寄つて通さつしやい。

下馬　さうばれて出るからは、奴豆腐の手料理に、唐辛子の血を見せて、引ッかける茶碗酒、德利と思案をして、冷酒よりは觀念しろ。

藤助　ハ、、、、口中の閉いた儘、用事もないに留め立てして、刃の齒磨反魂丹、魂ひ返すその文字も、返らぬ冥途の旅商ひ。居合ひを拔くと忽ちに、その首がれん飛びだぞ。

下馬　無駄口云はずと、綸旨を渡せ。

藤助　そこ退け。

下馬　渡せ。

藤助　退け。

下馬　面倒な。

ト取りにかゝる。振り解く。立廻りよろしく、トゞ、拔き合せて切り結ぶ。キッと見得。これにて大拍子になり、手ばしこき立廻りあつて、互ひに同士討ちになる仕組みよろしく、兩方傷きになり、綸旨を奪ひ合ふ。よき程に下座の方より、鄕內、以前の奴の形にて、鎗を擔げ出て來て、後に窺ひこなしあつて、眞中よりこの綸旨を、ちよいと取るゆゑ、それをト寄るを、落ちてある刀を手早く取上げ、左右へ浴せる。これにて捨て鐘、忍び三重になり、鄕內、につたりと笑つて、綸旨を戴き、懷中して鎗を取上げ、ツカ〳〵と花道の角まで來り、こなしあつて

鄕內　南無三、お供に遲れたわえ。

トごんと捨て鐘。これをキッカケに、鄕內、しやんと鎗を擔げ、足早に向うへ入る。始終忍び三重にて、下座の方より孫三郎、小提灯をともし出て來り、藤助の死骸に躓づく。これにて藤助、起き上がり、切りつける。孫三郎搔い潛つて捉へ、提灯にて顏を見、恟りし

て
孫三　ヤア、こなたは名張八郎どの。
八郎　さう云ふ聲は長宗どの。大切なる綸旨を。ウム。
　トばつたり轉けて死ぬ。孫三郎、いろ／＼あつて
孫三　コレ、八郎利種どの。さては最早縡切れたか。今の一言、綸旨とあれば、さては敵の手へ……ホイ。
　ト當惑。この前より佐兵衛、出かゝり居て、この孫三郎が提灯を打ち落し、行かうとする。立廻りに孫三郎、佐兵衛が刀の鐺をしつかと捉へ
ヤア、灯を消したは正に曲者。綸旨を奪ひ取つたも、其方に極まつたわえ。
　トこなし。佐兵衛、物をも云はずに、振り切り行かうとする。孫三郎、引きのけて、立廻りに、一腰を引拔き切りつける。佐兵衛、あしらひ兼ねて、是非なく一腰を引拔き、手ばしこき立廻りにて、兩人キッと見得。これにて大ドロ／＼、雷序を打込む。この途端、手水鉢へ、誂へのくちなは出て、水を呑む遣ひ方。鳥居の左右へ狐火顯はれる。この灯にて孫三郎、佐兵衛、顔見合せてキッと見得。
孫三　ハテ心得ぬ。いま曲者を一討ちと、切りつける、受け太刀の、光りと共に明らけく、顯はれ渡る狐火の、灯を見れば覺えある、顔は違はぬ劍の出所。
佐兵　和田新左衛門が重器にて、蛇返しと名けたる、劍の德に拔き放せば、小蛇來つて守護なすと、兼ねては聞けど見るは眼前。
孫三　爰は所も大原野、江文大明神と名け、祀るは宇賀の御魂、奇瑞を現はす蛇井出村。
佐兵　その昔、この村の大淵と云ふ地に、大蛇棲んで人民を惱ます。
孫三　その折柄は男女とも、恐れ戰き逃げ集まる。思はず妹脊の語らひなす。これぞ雜魚寢の始めにて、大原の物語り。
佐兵　割符を合す蛇返しの、劍の奇特に。
孫三　神慮の奇瑞、不思議もあれば
兩人　あるものぢやなア。
　ト大ドロ／＼、佐兵衛刀をしやんと納める。これにて小蛇、狐火消えて、ドロ／＼止む。佐兵衛、氣を替へ、行かうとするを、孫三郎引めて
孫三　マア、杉本佐兵衛とやら。いま目の前に見た不思議の、蛇返しの一腰を所持するからは、先つ頃、六ツ田松

原に於て、和田新左衞門を手にかけ、劍を奪ひし曲者は、其方であらうがな。

佐兵 イヽヤ知らない覺えない。故あつて手に入る名作、所持するは武士の嗜なみ。わいらが知つた事ぢやアない。

孫三 そんならそれもそれにして、その一腰が貰ひたい。

佐兵 何がなんと。

孫三 尋常に此方へ渡せ。

佐兵 小積な一言。そこ退け。

孫三 是非渡さずば、手を引いて

ト佐兵衞が刀へ手を掛ける。佐兵衞、刎ねのける。立ち廻り。手早く鳥居の前に兩人、立ち別れてキッと見得。これにて大拍子を打込み、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の廻廊。奥深に、少し高足にして飾りつけよろしく、この廻廊に女乞食京女郎のお吉、神主寢て居る。巡禮親仁、臑天のお秀と寢ろ。その外若い者二三人、思ひつきの仕出しにて、雜魚寢暗闇の景色。この眞中に脇屋次郎義助、自墮落に帶を締め直して居る。こなたに十津川のお靜、田舍娘の拵らへにて、振り袖帶どけにて、髱を直して居る。この見得、捨て鐘、合ひ方にて道具とまる。

トお靜も形をつくろひ、帶を締めろうち、義助、とつくりと支度して、側にある一腰を差し、菅笠を持つてお靜に囁き、平舞臺へ下りて來る。これにてお靜もあたりを憚ろこなしにて、差足にソロ〳〵と平舞臺へ下り、義助が側へ探り寄つて袖を扣へ、恥かしき思ひ入れあつて

しづ いづくのお方か知らねども、妹脊の緣を結ぶからは、もう、わたしが一生の殿御と思うて居るけれど、田舍生れの不束者、どう云うてよからうやら。必らず變つて下さりますなえ。

義助 オヽ、そりや我れとても同じ事。暗うて互ひの顏は知れねども、褄外れと云ひ、聲音と云ひ、なか〳〵以て鄙の生れとは思はぬ。不思議の緣も雜魚寢の通夜。結ぶ神の證據には、御名も江文の戀の橋、渡りおふせし嬉しさを、推量なされて下さんせいなア。

しづ いま別れても巡り合ふ、時節を必らず待つて居や。

義助 エヽ、忝なうござります。

しづ ト義助が手を持ち添へて、ちよつと拜む。これをキッカケに大バタ〳〵、大拍子になり、花道より佐兵衞、

逸散に逃げて出るを、孫三郎、後より追ひ駈け出て、舞臺中を追ひ廻す。この騒ぎに驚ろき、義助、お靜を振り切り、下座へ逃げて入る。お靜、本意なきこなしにて、義助が後を追うて入る。此うち廻廊に臥したる面々、物音に立騒ぎ、お秀は笈摺を着て、葛籠を脊負ひ、巡禮親仁はお秀が女帶を締める。神主は尻を紮げて、其處にある黒木賣りの心。お吉は神主の衣裳を引ッかけ烏帽子を冠る。この慌て方、思ひ／＼によろしく。始終大拍子にて、佐兵衛を孫三郎追ひ駈け下座へ入る。仕出しもこの中へ交り、花道と下座へ散り／＼に別れて入る。ト舞臺靜まる。また合ひ方、捨て鐘に變り、下座の方より義助逃げ出るを、お靜、追ひ駈け出て來て裾を扣へ

しづ　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。願ひある身と仰しやつて、お名をお包みなさるゝは、御尤もに存じますれど、お顔も知らずお名も知らず、何を便りに又の逢瀬。お情受けた大事の殿御。わたしやモウ／＼、お名殘惜しう存じますわいなア。

義助　サヽ、その志しは忝ないけれど、世を忍ぶこの身の上。縁さへあれば又逢はるゝ。心休めに後日の證據、これを力に待つて居や。

ト一腰の割り笄を出し、お靜に渡す。お靜、探り見て

しづ　こりや、何でござりますえ。

義助　それこそ、我が帶せし一腰の割り笄。模様はめでたい子の日松に、行く末祝ふ十羽鶴。

しづ　松は常磐の色變へぬ。誓ひの證據は千代かけて、二世も三世も比翼の鶴。

義助　連理の枝葉も榮ふる小松。縁と月日を待つて居や。

しづ　エヽ、お嬉しうござりまする。

トこの時又バタ／＼にて、佐兵衛を孫三郎追ひ駈け出る。これに驚ろき義助、お靜も廻廊へ逃げ上がる。舞臺兩人、手ばしかく立廻りて、兩方一度に引拔いて切り結ぶ。大ドロ／＼にて、舞臺先へ小蛇顯はれる。これにて兩人、タヂ／＼と後退りして、キッと見得、雷序の頭。狐火顯はれる。お靜、この灯に蛇を見付け

しづ　オヽ、怖。

ト義助にひつたり抱きつく。孫三郎、佐兵衛、刀を持ち替へ、キッと見得。この途端よろしく拍子

幕

第一番目大詰

備後三郎館の場

役名――八才の若君。兒島三郎高德。同妹、初霜。多治見國長妹、若竹。篠原源吾妹、夏菊。彌三郎妹、楓。平賀三郎女房、尾の原。篠原源吾。河野六郎信重。唐崎の松八。曾根の松藏。鐘掛の松平。武隈の松内。奴、鄕內實ハ志貴源八正武。氏家中務次官重國實ハ町抱へ千本の松本名相模次郎時行。正行女房、櫻井。同娘、お菊。若黨、八津兵衞實ハ楠帶刀正行。

本舞臺、三間の間、一面の二重舞臺、正面金襖、左右の出入り口。綟子張りの障子。東の大臣柱、紅梅の大樹、人登るやうにして、西の柱際に倚井筒、柴垣植込みの模樣よろしく、紅白の菊のあしらひ、すべて高德の屋敷の道具結構に仕立て、渡り拍子にて幕明く。

ト直ぐに向う揚げ幕の内にて

女四　女房呼んだら、可愛い殿さん〳〵。

トこれにて三味線摺り鉦入りの鳴り物になり、向うより國長妹若竹、先に、源吾妹夏菊、彌三郎妹楓、平賀三郎女房尾の原、いづれも廣袖、さゝげ付け、鴈木に釘抜きの紋を付けたろ、黑の奴衣裳、對の形にて、めい〳〵水打ち手桶を持ち、出て來て、花道に並よく並ぶ。

若竹　今日改まる顏見世は、しかも芝居の正月にて、春は上野や飛鳥山。さては都に嵐山。花に露打つ水奴。

夏菊　さて又夏の凉しさは、蟬も雀も浮るゝ程、戀風戰ぐ船遊び、これも緣ある水奴。

楓　水や空、空や水とも見えわかず、通ひて澄める月影は、秋の最中と夕月の、月に鏡の双面。

尾原　師走の月も恐ろしと、淸少納言の口吟み、枕草紙や長枕。

若竹　その床入りの新枕。

夏菊　嬉しい逢瀨に嬉しい壽き。

楓　祝ふ妹脊の水遊び。

尾原　皆さん一緒に

若楓　女房呼んだら。

夏尾　可愛い殿さん。
四人　女房呼んだら、可愛い殿さん。
ト鳴り物の拍子に合せて、皆々本舞臺へ來る。此うち奧より、備後三郎妹初霜、振り袖裲襠衣裳にて、八才の君、さゝげ付き廣袖着流し、衣裳、烏帽子にて、初霜に手を引かれ出て來る。女形これを見て皆々扣へる。初霜こなしあつて
初霜　オヽ、皆の衆の賑はしや。奴出立ちの水祝ひは、兄上を祝しての壽き。お歸りあつてお聞きあらば、さぞお喜びであらうわいなア。
若竹　これは〳〵、初霜さまの有り難いお詞。御主人の備後三郎さまには、六波羅よりお召しとあつて、御他行のお留守。
夏菊　また新らしい奧樣は、吉田への御參詣、大切な君樣の御機嫌に入るやうと、皆さんと云ひ合せてのこの姿、ほんにマア、有り難いお目見得
四人　致しまする。
八才　皆の者、大儀々々。コレ初霜、高德が歸りやつたら、先刻の事を、よいやうに賴むぞや。
初霜　その事は必らずともに、お案じなされぬがようござります。今日は卽ちあなた樣の兄宮樣、應塔の君さまの、御命日とござりますれば、追善供養も六波羅の聞えを憚り、兼ねては高德と申し合せ、鎭火の祭りと申し立て、家中の子供に踊の稽古も、文月の盆踊り、亡き魂祀る精靈會の、心は御供養、表は又神事に擬らへ、兼ねてより用意いたしてござります。
八才　オヽ、それは嬉しいわいなう。
初霜　これに居りまする女中の面々は、忠臣の妻女なれば、お心措きはなけれども、世を忍ぶ御身の上。世間への聞えは、高德が悴と申し立てござりますれば、憚りながらそのお心で、お出で遊ばすがようござりますぞえ。
八才　オヽ、そりや合點して居るわいやい。
初霜　オヽ、お出かしなされました。兄高德を六波羅よりのお召しも、もしや若君のお身の上かと、心ならぬ事ぢやわいなう。
楓　イエ〳〵、さうぢやござりますまい。この間から味方に付けの、奉公せいのと、度々の御使者。それを嫌ふて主取りは否ぢやと、御閑居同然のお屋敷へ、六波羅よりのお召しは、矢ッ張り味方してくれいとの、御催促と見えますわいなア。

初霜　サア、自らもその事であらうと思へど、樣子を聞かぬ其うちは案じらるゝ。兄上よりお供して付いて行きやつた、新參の若黨八津兵衞、早う戻つてくれたがよいと、わたしやモウ、その事ばかりが

ト云ひがかつて心付き、ちやつとこなしあつて

尾原　ホヽヽヽ、ほんにあなたは、左樣でござりませう。イヤ又、あの新參の八津兵衞どの、男振りなら氣立てなら。それに引替へ郷内め、なんとマア、憎らしい人ぢやアござりませぬか。

初霜　サイナウ、マア聞いてたも。昨日も奥庭の掃除の折柄、緣先でわしを捉へて、嫌らしい事ばつかり。憎うて憎うてならなんだわいなう。

若竹　そんな時は、兄上樣へ仰しやつて、酷い目に遭はすがようござります。ナア、皆さん。

皆々　ほんに、さうぢやわいなア。

トこのせりふの留り、向う揚げ幕にて「下がれ〱」とやかましく云ふ。これを初霜聞いて

初霜　アレ〱、何やら物騷がしい人聲。其方衆は君樣のお供して、奥の一間へ行きや。

四人　畏まりましてござります。

八才　そんなら皆の者。

四人　サア、お出で遊ばしませい。

ト唄になり、八才の君を連れて若竹、夏菊、楓、尾の原、皆々奥へ入る。初霜殘る。これにててんつゝになり、向うより唐崎の松八、曾根の松藏、鐘掛の松平、武隈の松内、風呂敷包み、何れも簑笠、百姓の拵らへにて、鍬鋤を擔げ出て來る。後より二人の門番、棒を突き、下がれ〱とやかましく云つて出て來て、直ぐに舞臺へ來る。

門番　下がれ〱。

四人　ハイ〱、お願ひでござります〱。

初霜　コリヤ〱、騷がしい。何事ぢや。

門一　ハア、イヤ、この百姓どもが、斷わりなしに御門をツカ〱通りますゆゑ、制しましての儀でござります。

初霜　何事かは知らねども、願ひとあれば苦しうない程に自らに任せて、其方達は休息せい。

松八　ソレ見たかな。ちつとさうもござるまいて。一體百姓は國の寳、滅多に安くなるものではないてなア。

松藏　さうとも〱。なんぼ侍ひが軍をして、切ッつはッつも、食はにやアならぬ程ではないか。

松平　それを名けて兵糧米。譬へに内裏女郎も食はにやアたゝぬ。その米を作る百姓。滅多に下がつて堪るものか。

松內　これから上がつて殿樣に、直ぐにお願ひ申さにやならぬ。譯はさま〲。して、又あなたは。

四人　どなた樣でござりまする。

初霜　成る程〲、自ら事は備後三郎高德が妹、初霜と云ふ者ぢやわいの。

松八　エヽ、左樣ならこのお屋敷の、殿樣のお妹御さまでござりますか。さうとは存ぜず、先刻にからの慮外の段段。

四人　ハイ〲、眞平御免下されませう。

ト平伏する。

初霜　なんのマアヽ大事ないわいなう。いま其方達が云ふ通り、百姓は國の寶、粗末にならぬ其方達が、願ひと云ふは何事ぢや。

松八　サアヽ其お願ひと申しますは、畑の盜賊境論、水場砂場の田地の爭ひ、下で濟まぬ事となり、六波羅さまへ申しても、一向にお取上げがござりませぬ。

松藏　そこで組合の者と相談いたしましたところが、南朝とも北朝とも片付かぬお殿樣、お慈悲深いと承はりますと云ひ

松平　殊に今日このお屋敷へ、六波羅より御上使が立つと、取沙汰を承はりましたゆゑ、幸ひな事と存じまして、お願ひに上がりましてござります。

松內　何卒この樣子を、憚りながらお執成し下されませうならば、ヘイ〲、有り難うござります。

初霜　願ひの樣子は、自らが聞いたとて解らぬ事。兄上高德さまも、六波羅のお召しにて、お留守といへど、お歸りに間もあるまい。して、其方達の村所は。

四人　ハイ、卽ち殿樣の御領分の、百姓どもでござりまする。

初霜　左樣なら次へ立ち、お歸りを待つたがよい。お執成しは自らが、よいやうに申し上げてやる程に、マア、暫らく休息しや。

松內　これはマア、結構なお詞にあづかります。そんなら次に扣へまして、殿樣のお歸りを、お待ち申すでござりませう。

初霜　この初霜もお歸りを、お待ち請けの用意しませう。

四人　左樣なら、お許しを受けまして

初霜　マア暫し、次へ立ちや。

ト唄になり、初霜は奥、四人の百姓は皆々下座へ入ると、向うにて「奥樣の御下向」と呼ぶ。これにて三味線入りの本神樂になり、本舞臺梅の枝へ、河野次郎信重、忍びの形にて、種ヶ島を持ち、ヌッと出る。此うち花道より櫻井、裲襠衣裳。奥方の拵らへにて出て來る。後より篠村源吾、麻上下、高股立ちにて、白木の臺にお札を載せて持ち、付き添ひ出て、花道のよき所にて櫻井、忍びに目を附け、キッとこなし。これを見て信重、ためらふ。鳴り物かすめる。

櫻井　さなきだに、夫の武運長久と、神樂ヶ岡へ社參の歸り、諸木に先だち早咲きの、梅の梢に鶯ならで、羽根づくろひをよく見れば、阿房烏の黒出立ち。闇にも啼いて大膽な。命知らずのたわけ鳥。

源吾　それかあらぬか小筒の曲者。篠村源吾が引ッ捕へて。

櫻井　ハテ、立騒がずと、靜かにおぢや。

ト右のうち鳴り物にて舞臺へかゝる。此うち信重、梢を飛び下り花道へかゝる。櫻井、源吾の持つて居る白木の臺を取つて、ツカ／＼と舞臺へかゝり、信重に突きつける。これにてヂリ／＼押戻し、よき所にて信重、櫻井を引きのけ、行かうとする。立廻りよろしく

源吾、搦めい。

源吾　ハッ。

ト引きつける。立廻りよろしく、源吾、信重が種ヶ島を打ち落し、手ばしかく引敷き、下げ緒にて括し上げる。櫻井これを見て

櫻井　オヽ、出かしやつた／＼。とても事に忍びの樣子糺明して白狀さしや。

源吾　畏まつてござります……サア曲者め、何ゆゑあつて御主人の、お屋敷へ忍び込んだ。殊に小筒の飛び道具、深い仔細が無くては叶はぬ。眞直ぐに白狀せい。

信重　ハヽヽヽヽ、命を元手に請合つたおれが働らき。白狀しろと云つたとて、つい應と云ひさうな、忍びとは違つて居るぞ。斯う云つたら古い格で、刀の鐺を縫目の責めか。そんな事ぢやア白狀せぬ。云はない知らない、知らないぞ。

源吾　白狀せぬとてこの源吾が、云はせずに置くものか。望みの通り鐺の糺明。

ト刀を拔いて鐺にてきめ

サア、これでも白狀しをらぬか。

トこじ廻す。

信重　アイタヽヽヽ、知らねえ〱。
源吾　死太い曲者、知らずば斯う。
ト また手酷くこじる。信重、堪えられぬ思ひ入れ
信重　アイヽヽヽ、これサ、白狀するよ〱。
源吾　白狀するとあれば、緩めてくれる。
ト 刀を拔き
サア、白狀せい。
信重　如何にも白狀しますべい。併し、口ではまだ〱云はうより、おれが懷中に、白狀の白を取つて、狀があるワ。
源吾　ナニ、密書とは。
ト云ひながら、信重の懷中へ手を差込んで、一通を引出し
誠に奧樣。イザ、御覽あられませう。
ト 櫻井へ渡す。櫻井、取つて披き見て愕り。
櫻井　この文體を見れば、高德館に八才の君さま、匿まひあるかないかを見極め、告げ知らせよとの文言。宛名はなけれど詮議の手がゝり。その曲者は其まゝに、奧庭へ引据ゑ置きや。
源吾　ハツ。曲者立たう。

信重　久しいやつサ。
ト向うにて、「一殿の御歸館」と呼ぶ。
櫻井　我が夫の御歸館とあれば、大事の囚人。
源吾　とくと拷問。
櫻井　マア、それまでは。
源吾　暫らく奧へ。
櫻井　源吾おぢや。
ト唄になり、櫻井先に、源吾、信重を引立て、こなしあつて奧へ入る。大ドロ〱にて紫の雲棚引く。これにて誂らへの鳴り物になり、向うより高德、結構なる上下衣裳にて出て來る。次に八津兵衞、若黨の拵らへにて、高股立ちを取り出て來る。その後より鄕內、奴の拵らへよろしく、替へ草履を摑み、付き添ひ出て來て、よき程にこの二三人、雲氣に目を付け、花道に並よく並び、キツとこなしあつて
高德　ハテ心得ぬ雲の振舞ひ。傳へ聞く漢の高祖、芒陽小澤の間に隱るゝと雖も、其あたりには常に紫雲棚引くと聞く。
八津　まつた神寶の上には、常に紫雲棚引くと聞く。
鄕內　晉の張華もこの紫雲に依つて、龍水大河の劍を得た

り。

高德　もと山川の氣を含み、地中より登つて雲となる。

八津　雲は陰なりと雖も、登つて陽の極となる。

鄕內　潛龍も三冬に蟄して、その陽の來るを待つ。

高德　いま高德が歸館の折柄、我が家の軒に棚引く紫雲。

八津　雲の上なる神寶の、埋れあるべき知らせなるや。

鄕內　但しは又、上なき公達、隱れ住むべき奇瑞なるや。

高德　凶事か。

八津　吉事か。

鄕內　何にもせよ。

高德　稀代な雲の

三人　有樣ぢやなア。

トどろ〳〵にて紫雲消える。三人こなしあつて

高德　最前より承はれば、若黨八津兵衞、下部の鄕內、いま棚引きし紫雲の吉凶、それかこれかの判斷は、下部に似合はぬ。ハテ、賴もしい心根ぢやなア。

八津　これは〳〵、殿樣のお譽めのお詞にあづかり、冥加至極と、有り難き仕合せでござります。なか〳〵以て私し風情、雲か虹やら煙やら、一向差別はござりませぬ。殿樣の御學問、素讀遊ばすその端々、時々聞いた耳學問。これがほんの勸學院の、雀でがなござりませう。

高德　イヤそウ、例へ下樣に奉公するとも、武士たる者の心掛けは、さうなうては叶はぬところ。奴の鄕內、其方は又、どう云ふ所で雲の判斷。樣子が聞きたい。どうぢやどうぢや。

鄕內　これは又、お尋ねにあづかり、迷惑千萬な儀でござります。下郎めが存じまするは、其やうなむづかしい儀ではござりませぬ。國元の濱邊住居、漁師どもが打寄りまして、今のやうな雲が出ますると、これは明日は鰯が取れる、漁がきくと喜びまするを、子供のうちから聞き覺え、見馴れましての問はず語り。面目次第もござりませぬ。

高德　兩人が雲の見分け、善惡二つは月に村雲。

兩人　エ。

トこなし。

高德　兩人、參れ。

ト右の鳴り物にて高德先に、八津兵衞、鄕內、本舞臺に出て、高德はズツと上手に坐る。八津兵衞心得、煙草盆を差置き、鄕內諸とも下へ下がつて扣へる。高德、煙管を取上げ、煙草つけながら、こなしあつて

さて〳〵今日は、六波羅のお召しで、殊の外退屈いたした。其方達も、さぞ窮屈であつたであらうな。

八津　イヤモウ、拙者どもは御奉公と存じますれば、窮屈な儀もござりませぬが、あなた様はお勤めのお身でもなし、思ひがけない御用の筋で、御退屈は御尤もに存じます。

郷内　憚りながらお尋ね申しませうは、樂隱居同然に、引籠つてござるあなた様を、六波羅よりのお召しとは、何やうの儀でござりましたな。

高德　サ、聞いてくれ。南朝とも北朝とも、片寄らぬこの高德に、八才の若君を匿まひあると洛中の取沙汰、一向覺えのない事ゆゑ、やう〳〵云ひ拔けては戻つたが、なんとマア、六波羅の威勢ぢやとて、これは無理ではあるまいか。其方達は如何思ふぞ。

八津　イヤモウ、それは申さずとも、六波羅の御難題。ほんのこれが無實の災難と申すもの。兎角、サ、人の口には戸が立てられぬとは、よく申したものでござります。

郷内　コレサ〳〵、八津兵衞どの、御意に入るやうに、お座なりは止めにしたがよい。どちらの贔屓するでもないが、この郷内は、六波羅さまのお疑ひを、御尤ものやうに思ふわえ。

八津　そりや又、なぜ。

郷内　なぜとは知れた事、殿樣の若旦那、お年も丁度八才の、ナ、サア、君さまであらうと、世間で思ふは皆尤も。殊に奥樣はなし、斯う云ふおいらまで思ふのサ。

高德　イカサマ、輕薄のない郷内が今の詞。左樣な疑ひ受けやうと存じて、われ達も知る通り、一兩日以前國許より、身が奥を呼び寄せたも、悴が世話を頼まうばつかり。イヤ又、女房もあつて無いと、不自由なものだて。

八津　イカサマ、これは御意の通りでござります。この八津兵衞は新參と申し、お引廻しをお願ひ申さねばならぬ奥樣。折もござらばお目見得の儀を、偏へに願ひ奉ります。

高德　成る程、其方が事は、奥にも話し置いたれば、折を見て目見得の致ささうわえ。

八津　それは有り難う存じまする。

郷内　この郷内もお目見得の上、奥樣始めお旦那へ、お勸め申さねばならぬと申す譯は、先達て北朝方より高德を、味方にしたいと最前のお使者。定めし深い御賢慮もござりませうが、四條畷の合戰に、勝ち誇つたる北朝方。こ

りやお味方となるゝが、よからうやうに、憚りながら
この下郎めは存じまする。

八津　コレ〳〵鄕內、そりや惡いお勸めだ。なんぼ北朝は
勝ち軍でも、ほんに子供に花とやら。一旦の勝は勝にあ
らず、始終の勝こそ肝要なれ。今は潜まり隱るゝとも、
旗を擧げるは知れた事、なりや、南朝へお味方なさるが
上分別と、恐れながら八津兵衞めは存じまする。

鄕內　ヤイ〳〵、そりや何を云ふ。南朝方が旗を擧げる。
コレヤイ、わりや知らないか。四條畷の合戰に、官軍方
の賴みに思ふ、新田義助兄弟を始め、楠正行主從とも、
討死したと云ふ事は、誰れ知らぬ者もないワ。殊に以て
肝心の八才の君までも、根を斷つて葉を枯らす、北朝の
今の威勢。どうしてこれに勝たれるものだ。それだに依
つてお旦那を、北朝方へお勸め申すワ。

八津　ハ、、、、、なんぼわれが息精張つても、お旦那は
南朝方へ、この八津兵衞がお味方さすワ。

鄕內　さう聞いちやア此方も意地。どこまでも北朝へお味
方さすワ。

八津　イ、ヤ、南朝方だ。

鄕內　イ、ヤ、北朝方だ。

八津　南朝だ。

鄕內　北朝だ。

八津　そんならわれが。

鄕內　アノ、うぬが。

八津　そりや又どうして。

鄕內　オ、、斯うして。

ト八津兵衞が胸倉を取る。八津兵衞、振り解き、立廻
りにて鄕內が裾を掻く。鄕內べつたりと下に居る。八
津兵衞、足下にかけんとする。これにて薄ドロ〳〵に
て、八津兵衞、たぢろぎ、五體の竦むこなし。鄕內も
心付き、懷中へ思ひ入れ。高德これに目を付け三人キ
ツとこなしあつて

八津　これは。

トこの時向うにて「上使」と呼ぶ。高德キツと向うを
見て

高德　上使とあれば兩人とも、爭ひやめてお出迎ひ。

ト兩人こなしあつて居住ひを正し

兩人　畏まつてござります。

ト又「上使」と呼ぶ。これにて太皷謠になり、氏家中
務の次官重國、立烏帽子大紋にて、搾らへよろしく首

桶を抱へ出て來て、花道よき所に留まる。舞臺は高德出迎ひのこなし。八津兵衞、鄉內は下の方に平伏して居る。引張りよろしくあつて

重國　六波羅の嚴命を蒙むり、上使に向ひし某は、氏家中務の次官重國と申す者。以後はお見知り下されい。

高德　これは〳〵、お役目とは申しながら、御苦勞千萬。拙者即ち當家の主、備後の三郎高德。見苦しくは候へども、イザ先づこれへ

兩人　お通りあられませう。

重國　許し召されい。

ト矢張り太鼓謠の切れにて、重國、鷹揚に上座へ通り、床几にかゝる。高德、こなたに思ひ入れあつて

高德　仔細ござつて主取り致さず、浪人同然の高德へ、六波羅よりの御上使とは、何ともその意を得ぬ事ども。とくと樣子が承はりたい。

重國　お尋ねなくとも上使の趣き、云はねばならぬその仔細は、今朝六波羅へ貴殿の招かれ、お尋ねありし八才の君、匿まはれし覺えなきとあつて、退散の後評議の上、猶も實否を糺さん爲、上使の役目を蒙むる某。殊に又、承はれば、御子息もござる由。得ては我が子と人目に見せ、匿はるゝもある。斯くなれば、座敷の樣子も臨檢いたし、八才の君と見るならば、首討つて立歸れと、即ち用意のこの首桶。上意の返答、如何でござるな。

高德　何事かと存じたに、事新らしきお尋ね。先程も六波羅にて、申し開き致せし如く、八才の君を匿まひまする心底ならば、とくより南朝へ味方仕り、今頃は軍務催促に、斯やう致しては居られぬところ。重國どのとやらにも、とくと御勘辨下されい。

重國　すりや、どうあつても八才の君は。

高德　匿まひました覺えはござらぬ。

ト重國、こなしあつて

重國　ハテナア。

トこのとまり下座の方より、松平、松藏、松八、松內、以前の百姓にて、ワヤ〳〵と出て來て、下手に直り

四人　お願ひでござります〳〵。

鄉內　ヤア、ザワ〳〵と喧ましい。あれに六波羅よりの御上使もお入り。場所を辨まへぬ土民めら。下がれ〳〵。

松平　アヽ、申し〳〵、その御上使樣のお入りを幸ひ、お屋敷の殿樣と、三つ鼎のお願ひ。

松八　其やうにお叱りなされずとも、とも〴〵にお執成し

を

四人　お頼み申し上げまする〳〵。

郷內　まだ〳〵吐かす。叶はぬ事だ。ならぬ事だぞ。

八津　コレサ〳〵郷內、御前と云ひ、上使のお入り。其やうに荒立てずと、願ひとあれば取次ぎ致し、理非を糺すが卽ち仁政。マア〳〵、扣へて居やれ〳〵。

郷內　ハテ、よく四文と出る奴だぞ。

高德　イカサマ、八津兵衞が申す通り、願ひとあれば御上使の御免を蒙むり、承はり遣はしても苦しうもござるまい。これへと申せ。

八津　ヤイ〳〵百姓ども、有り難い殿樣の御意、それへ出て願ひの樣子を、申し上げい〳〵。

松平　それは有り難うござります。サア〳〵、松八どの、貴樣から云はつしやい〳〵。

松八　マア、こなたから云はつしやりませ。

松平　そんなら皆の衆、おれから云ひますぞや……ハイハイ、御免なされませう。私しどもは御領分の百姓。お願ひと申しまするは、これまで年々田畑の作物、米を作れば米を盜み、麥を作れば青麥のうちから苅り取る。その外畑の大根人參、盜む程に〳〵、御年貢も滯りまして、お役人樣にお咎めを請けまするも、皆盜賊の業と申して、捉へやうにも百姓の鋤鍬より外、遣ひ付けぬヤットウ、千方盡きての今度のお願ひ。

松六　私しも同じ御領分の百姓。持ち前の田に水の手が惡うござりまして、夏が來るといつでも干上がる。ところに隣村の境目にある、澤山な堀がござります。其處でいつでもその水を、汲み込まうと致しますれば、これは此方の領分に付いた堀ぢやに依つて、汲ます事はならぬと、云ひ募つた所が、いつでも口論。ある水でござりますれば、どうぞ無難に兩方から、使はれまするやうに、お捌きをお願ひ申しまする。

松藏　さて又、私しのお願ひと申しまするは、憚りながら村でもちつと、人に知られた宅も藏も幾戸前、坪の廻りは木萱草木、盜人の用心には、至極堅固な家作りでござりますところ、この程大きな盜賊に逢ひ、着類手道具金子は勿論、盜まれた大泥坊。何處から入つたと存じますれば、裏の流しを見切りました堀を乘り越え、打ち碎いたる樣子。なんでも徒黨がござりますれば、御詮議よりは殿樣へ、お屆け申しませうと、存じましてのこのお願ひ。

松内　さて、どんじりに扣へましたは、村ではちつと小口もきゝ、小口の出入りは捌いて遣はす私しも、とんと困つたは、この宮でござります。

ト風呂敷包みの小宮を出して

これは畠守りの稲荷の小宮でござりますが、隣り在所の和氣村と、此方の村と兩方の、境目にある稲荷様、宮に似合はず爰程明地があるを、其方のぢや此方のぢやと、云ひ上がつてのお上沙汰。此方の畑へ入込んであれば、勝手ぢやと思ひの外、あつちに覺えた奴があつて、ありやア此方のに相違ない、慥かな證據は扉の内に、書いてあると吐かしたゆゑ、戻つて明けて見ましたれば、コレこの通り扉の内に、和氣村と書いてあれば、持つて出たら丸負け。領分の百姓が引けを取つては、殿様のお名も穢れます事ぢやに依つて、このお智慧がお借り申したいお願ひ。我れ〳〵が申す事、お聞き届け下されませうならば、

四人　ハイ〳〵、有り難う存じまする。

高德　其方達が願ひ、一々聞き届けた。その捌きやう、智慧工風は、幸ひかな、最前雲の判斷にて、見届け置いたる八津兵衞、鄕内。百姓どもが願ひの一々。工風の付けて遣はせい。

八津　すりや、アノ、拙者に。

鄕内　この下郎めに。

高德　兩人が取捌き、見物なすも又一興。御上使のお慰み。

重國　イカサマ、最前より承はるところ、百姓どもが願ひにて、上使の役目も暫らく蟄し、事を計らふこの重國。御家來の器量試し。こりや面白い事でござらう。

高德　御上使のお許し。急いで早く。

兩人　すりや、どうござつても。

高德　見たい〳〵。

八津　ヘイ。

鄕内　なんとせう、主と病ひ、盲目蛇に怖ぢずとやら。この鄕内が捌いてやるべい。左様なら、御免下されませう。

ト舞臺先へ出て、こなしあつて袖を廣げ、咳拂ひなして

イヤ、ナニ、百姓やい。

四人　ハア〳〵。

ト四人とも平伏する。

鄕内　いま其方達が願ひを聞けば、田畑の作物、居宅の盗賊、水筋小宮は境目の爭ひ、ナニそれしきに思案工風も

いるものか。作物を盗まれまいと思ふなら、村中で云ひ合せて、所々に番屋をしつらひ、その盗賊と見るならば、鉦や太鼓を合圖にして、大勢寄せたら多勢に無勢、ツイ引ッ捕へてくる〳〵卷き、拷問して同類を、白狀させたら糸筋は、同じしにせの夜働らき。なんとこれが手短かな、取捌きであらうがな。

松八　して、又私しが水筋のお願ひ。

松内　小宮の譯は、どう致しませうな。

鄕内　それは深い思案に及ばぬ。堀の水を汲み込むには、兩方ともに和談いたし、明日は此方明後日はと、隔日に致しなば、口論は出來ぬ道理。又その小宮に和氣村と記しあらば、削り落して此方の、村名に書き換へ置くならば、知つた者の少ない小宮、ついそれなりに勝公事は向うの證據を其まゝに、此方の證據に引繰り返す、頓智機轉の取捌き。よもや批判はなるまいがな。

八津　ハ、、、ハ、、、ハ、、、。

ト無性に笑ひ出す。鄕内これを見て

鄕内　ヤイ〳〵八津兵衞、うぬは何がをかしくて、其やうに笑やアがるのだ。

八津　これが又、をかしくなくつてどうするものだ。如何に殿樣の御意が出たとて、御上使の御前も構はす、下郎の身として高上がり、鹿爪らしく云ひ並べた、思案工風はみんな素股。默つて居やうと思つたが、御領分の百姓が、引けになつては殿の疵。あんまり馬鹿な捌きゆゑ、をかしくなつて笑ふのだ。

鄕内　此奴が〳〵、云はして置けば途方もない、御託宣をまき出したな。おれが云ふのを素股だと吐かすが、うぬが捌きが聞きたいワ。

八津　オ、サ、急くな。云うて聞かす。御領分の百姓から、願ひ出でたる一部始終、聞いた上にて八津兵衞が、思案工風は先づ斯うだ。最初田畑の作物を、年々盗まれた物いり、村方困窮を思ひやりなく、人夫をかけ番小屋を設らひ、鉦太鼓叩き立てたら、盗人がナニうか〳〵と來るものだ。これがマア、一番の工風違ひの始まりだワ。

鄕内　して、又、われが工風と云ふは。

八津　これまでにある格な、鳥おどしの藁人形、細工と見せて、小氣轉の、利いた力もある奴を、案山子と見せて畑に立たせ、足場よき所に、僅か二人か三人づつ、隱れ潜んで窺はゞ、藁人形の案山子と思ひ、心許して盗人が來たと見たら合圖の鳴子、鳥おどしより盗人おどし、

この工風では仕損ずまい。
ト松平、ハタと手を打つて
松平　したり、また上のあるものだな。
郷內　おきやアがれ、べら坊め。よいワ、その工風で畑泥坊は捕まへやうが、內福を見込み徒黨して、忍ぶ盜賊は、どうして又搦め捕る。
八津　それこそ聞いた盜人の、巧い仕事に味を得て、所は變らぬ圍ひの塀。前に塀のあるこそ幸ひ、下地の塀に二重塀、時分はよしと込み入る處を、引き綱てうと切つて放たば、釣つたる塀と諸ともに、盜賊どもが前なる塀、ずる〳〵と濡れ鼠。何人あつても皆殺し。これが居ながら盜賊殺し。
松藏　天晴れ、御工風分りました。
郷內　そんなら水の爭ひは。
八津　隣り村に付けたる堀、例へ一旦和談をしても、水の增減定まりなく、此方に當るその日ばかり、水の自由になるならば、忽ち口論喧嘩の元。そこを計つて人知れず、堤の下に樋を仕掛け、段々とあの合口へ、繼き樋にて取るならば、知らぬが佛の隣り村、表は變らず油を乘せ、愛敬流さば事無難に、濡れ手で粟稗麥大豆、五穀豐に百姓豐年。なんとさうではあるまいか。
松八　イヤモウ、段々恐れ入りましてござります。
郷內　そんならそれはそれにして、いま一種殘したる、宮に記した境論、この智慧工風ばかりは、郷內には叶ふまい。
八津　イヽヤ、それも工風が違つた。
郷內　そりや又、どうして。
八津　望みならば捌いて見せうか。
トこの時重國、こなしあつて
重國　八津兵衞とやら、先づ扣へい。
八津　ハッ。
ト扣へる。重國、八津兵衞に目を付け
重國　最前から見聞くところ、郷內が工風とは、裏拔けなる若黨八津兵衞。今の捌きを軍慮に取れば、湊川にて最期を遂げし、楠正成が千早赤坂、金剛山に譽れを殘す、城攻めの、工風に似たる智慧の海。深間に入つて淺きを知る。下郎に似合はぬ、ハテ、奧床しい男ぢやなア。
八津　これは〳〵主人高德の申しつけにて、取捌き申すは恐れ多い。智慧を振ひ出して思案の工風も、お耳にとまりお譽めのお詞。身に取つて、大慶至極に存じ奉ります。

重國　その取捌きのいま一種、其方を止めたは百姓どもが、願ひ出した目當の的は高德どの、目前家來に取捌かせ、知らぬ顏してござつたら、領分の聞えと云ひ、宮と云ふ名で一工風、お捌きが見たうござる。
高德　然らばこの高德に。
重國　八才の宮を匿はぬとあるならば、あの宮を捌かつしやい。
高德　委細畏まつてござります。
ト合ひ方になり、高德こなしあつて、眞中へ居直り
鄉內、その宮これへ持て。
鄉內　ネイ。
ト其處にある宮を、高德が側に置く。高德ちよつと見て
高德　イヤ、ナニ鄉內、其方が工風の捌き。今一應申して見よ。
鄉內　なんの、別にむづかしい事ではござりませぬ。この扉に書いてある、和氣村の文字を削り、御領分の村名に、書き替へて置いたならば、勝公事になりさうなものでござります。
高德　成る程、料紙を持て。

鄉內　畏まりました。
ト始終合ひ方にて、鄉內、蒔繪の硯箱を持つて來て、高德が側に置く。高德心得、內にある小刀にて、宮の扉へ記したる、和氣村の文字をこそげ落す。重國、これに目を付けて居る。ト、高德、筆を取つて、削つたる後へ又「和氣村」と書く。鄉內これを見て
ア、申し、殿樣、憚りながら私しが工風とは、相違いたしてござります。削つた後へ又元の、和氣村とお書きなされましたは、思し召しあつての儀でござりますかな。
高德　如何にも。いま其方が申す通り、削り落せし後へ、領分の村名を書けば、此方にて書き替へたに極まつて、拵らへ事と人の誹り。斯やう致して役所へ持ち出で、あの者が申さうには、所の古い者に尋ねますれば、この稻荷は此方の宮、上道村と扉の內に、書いてある筈でござると云ひ上げれば、上道村と書いてあつたを、あつちが削つて和氣村と、書き直したに疑ひかゝり、此方の理分となる道理。合點がいたであらうがな。
鄉內　そんなら矢ッ張り鄉內が、工風と云ふは鼻の先、誠にこれがほんの猿智慧。三筋足らざる不調法。恐れ入りましてござります。

八津　イヤ、殿樣は殿樣だけあつて、とんとお智慧が別と見える。ドレ〳〵、眞平御免なされませ。
ト高德が側へ來て、右の小宮を取上げ
お智慧と云ひ、御手蹟も見事さうに見えまする。御上使樣にはとつくりと、これを御覽遊ばしませい。
ト右の宮を重國へ渡して下へ下がる。重國、宮の文字をキッと見て
重國　いま高德が取捌く、宮に記せし和氣村の、文字の筆法、手蹟の手鑑。三郎を取巻け。
四人　ハッ。
ト四人の百姓一時に簑笠を取捨てる。下には凛々しき捕り手の形、手ばしかくバラ〳〵と高德を取卷く。
腕廻せ。
ト十手を振り上げる。皆々驚ろき
三人　これは。
重國　なんと膽が潰れた事か。六波羅に於て、八才の君匿まひし、覺えなきと爭ふとも、先つ頃杉坂にて、君へ志しを達せんと、院の庄の櫻木に、天勾踐を空しくする事勿れ、時に范蠡なきにしも非ずと、五言の絶句に割符を合す。この和氣村の同筆にて、南朝へ心を運び、八才の君を匿まひあるに、疑ひなき證據の筆蹟、云ひ譯あるや。
高德　イヤ、その儀は。
重國　搦め捕つて拷問せうか。
高德　サア。
重國　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
重國　返答ぶて、高德。
四人　どうだ。
トきつと詰める。高德こなしあつて
高德　深き手段に乘せられし、手鑑の云ひ譯なく、是非に及ばず今の白狀。御推量に違ひなく、八才の君、高德、匿まひ奉つてござります。
四人　さてこそなア。
八津　すりや、八才の若君を、アノ、御主人が。
ト鄕内と顏見合せ
兩人　ハテナア。
重國　白狀の上は八才の君、首討つてお渡し召されい。
高德　斯くなる上は是非に及ばず、御首を賜はらんか、改めて高德が、御上使へ一つのお願ひ。か〻る事とは知り給はず、幼なきお心にも、御連枝への御孝心深く、即ち

今月今日こそ、淵邊が手に落命ありし、應塔の君の御命日。供養を寫す魂魄、歌舞の菩薩の盆踊り、松坂ならで死出の坂、揃ふ手拍子幼な子の、賽の河原に擬らへて、音頭を合圖に我が太刀取り。暫らくの御猶豫を、偏へに願ひ奉る。

重國　すりや、盆踊りの追善供養。聞き屆けて暫らく休息。

八津　思ひがけなき若君のお身の上。供養の踊り御主人の

鄕内　胸の踊に介錯の、手拍子定めて

高德　雀の　稱名。

四人　マア、それまでは。

重國　高德、案内。

高德　御上使様。

兩人　先づ入らせられませう。

ト管絃になり、重國、先に高德、首桶を抱へ、四人左右を取卷き、チリ〳〵と奥へ入る。八津兵衛、鄕内こなしあつて、思案の心意氣にて、下座の方へ入る。後へ鄕内一人殘り、思ひ入れあつて

鄕内　六波羅の上使と云ひ、高德が心底探らん爲に、八津兵衛と云ひ募つた拍子に乘つて、すんでの事にこの綸旨を。

ト　ちよつと懷中より出して、見物に見せ

危ない事であつた。なんでもあの若黨めも、只の下郎ぢやアないわえ。

ト思ひ入れ。此うち下座より信重、ソロ〳〵出て來る

信重　諏訪五郎どの。

鄕内　聲が高い。

ト合ひ方になり、兩人あたりを窺ひ

兼ねてより六波羅へ一味の某。八才の君を匿まつた様子。今日只今高德が、白狀に及んだワ。

信重　拙者も實否を糺せよと、兵馬さまの仰せを受け、入込んで思はずも、高德が女房に見付けられ、かゝつた繩を、どうやら斯うやら摺り切つて、爰まで逃げて參りましたて。

鄕内　出來た〳〵。この上は八才の君の落着次第、兼ねての手段。コリヤ。

ト囁く。此うち二重舞臺へ初霜出かゝつて見る。

信重　すりや、この井筒はまさかの拔け道。マア、それまでは忍んで様子を。

鄕内　必らずともに、油斷いたすな。

信重　畏まつてござります。

郷内　忍べ。
信重　ハア。
ト始終合ひ方。信重、柱際の柴垣の蔭へ忍び込む。郷内これを見て頷づき、奥へ行かうとして、初霜と顏見合せ悄り。
郷内　ヤア、あなたは初霜さまではござりませぬか。
初霜　其方は郷内、あのけたゝましい顔わいなう。
郷内　サア、私しがこのけたゝましい顔は、なんでござります。オヽ、それ〳〵、思ふ事、色外に顯はるゝとは、ハテ、よく云つたものだわえ。
初霜　そりや又、なぜにや。
郷内　なぜとは初霜さま。ちよつとこれへお出で下されませ。
初霜　來いとはなんぞ、用があるかや。
郷内　用も用、ちと内々の用でござれば、近う寄つて申さねばならぬ。御苦勞さまながら、ちよつと〳〵。
トこれにて初霜、二重舞臺より下りて、郷内が側へ來て
初霜　してマア、わしへの用とは、どんな事ぢや。
郷内　サア、その用と云ふはね。

トあたりを見る事あつて
マア、ちよつとこんなものナ。
ト初霜に抱きつく事、いろ〳〵あつて、振り放し
初霜　エヽ、何しやるぞいの。慮外な事しやると、兄さんへ告げるぞや。
郷内　ハテ、いつも〳〵愛想のない云ひやう。奴が、色外に顯はるゝと云つたは爰。けたゝましい顔をさすも、みんなお前から起つた事だ。古いが一丁とぼさせておくれ。幸ひあたりに遠慮もなし、爰で會津の蠟燭とは、おれが生蠟の屆いたところ。それをびんしやん〳〵とは、あんまりだらうによ。
初霜　エヽ、知らぬわいなう。
ト奥へ逃げようとする。郷内、初霜が振り袖を取つて扣へる。此うち後へ櫻井出かける。初霜はこれを知らずに
郷内　どつこい〳〵、斯う云ふ首尾を逃がして堪るものか。また振り袖の初物で、七十五日の命取り。コレ、拜むわな〳〵。
ト始終合ひ方にて無理に引寄せる。初霜嫌がる事いろいろあつて、トヾ郷内抱きついて無體をするを、櫻井

寄つて引分ける。これにて三人顏見合せ
ヤア、あなたは奥様。
初霜　ほんにマア、よい所へ來て下さんしたなア。
櫻井　よい所やら惡い所やら、昨日今日國元から、屋敷へ來たわしゆゑ勝手が知れず、家來にも逢はねば、誰れとも知らねど、噂に聞いた、そんなら其方は、鄕內とやら云ふ我が殿の、お草履取りぢやの。
鄕內　成る程、御推量の通り。お旦那のお草履取り。お話しを聞いたばかり、お目見得を願ふ折柄、お詞にあづかり、有り難う存じまする。
櫻井　味な所へ來かゝつて、見ても見ぬ振り。不義は屋敷の法度と云ふ事。そちやよう合點であらうの。
鄕內　成る程、その儀は隨分、承知いたして居りまする。
櫻井　承知とあれば、次へ行きや。
鄕內　でも、私しは、ちつと爰に。
櫻井　これにとは初霜どのを、無理に手籠めの詮議をせうか。
鄕內　イヤサ、その儀は。
櫻井　サア、云はぬはわしが目見得の寸志。部屋へ行て休息しや。
鄕內　でも、これが肝心の。
櫻井　詮議をせうか。
鄕內　アイヤ、もうそれには及びませぬ。
櫻井　そんなら早う、次へ行きや。
鄕內　ヘイ〱、參ります〱。エヽ、コレ、折角うまくやりかけた所を、よい事には寸善尺魔と、惡い所へ
　ト櫻井を見て
奥様、これにお出で遊ばしませう。
　ト合ひ方になる、鄕內、櫻井へこなしあつて、不承不承に下座へ入る。櫻井、初霜、後に殘り思ひ入れあつて
初霜　ほんにマア、よい所へ來て下さんした。お前の身の上、兄上高德さまが、國に殘した女房とは、現在の妹さへ、知らぬ樣子も深い譯、あつての事と思へども、物堅い兄上樣の仰せを受け、姉さんと間に合せては居るものの、どう云ふ譯でござんすえ。
櫻井　成る程、お前の合點ゆかぬは尤も。これには深い樣子あれど、明けて云ふには折もござんせう。それにつけても娘のお菊、さぞかしお前の、いかいお世話でござんせうなア。

初霜　ナンノイナア。その愛らしさ。家中の子供と打寄つて、機嫌よう遊んでなれば、必らずお案じなされぬが、ようござんすわいなア。

ト　この時奥にて

重國　高德どのは何れにござる。高德どの〳〵。

初霜　ありや慥か御上使の聲。

櫻井　お前は奥へ。早う〳〵。

初霜　そんならわたしは。

ト　奥へ行かうとして、櫻井に囁き

ぢやわいなア。

櫻井　そんなら、あの井筒は拔け道。

初霜　ア、、コレ。

櫻井　行かしやんせ。

ト　合ひ方にて初霜こなしあつて、ツイと奥へ入る。櫻井、思ひ入れあつて、井筒の側へ立寄る。この時二重舞臺へ、重國、以前の形にて出て來る。櫻井これを知らず、ソロ〳〵行つて井筒を覗かうとする。この時

重國　それにござるは、高德どの〻奥方さうな。

ト　聲かけられて、櫻井悄り、ちよつと見て

櫻井　これは〳〵、どなた樣かと存じますれば、六波羅の御上使樣、思ひがけなう、有り難いお目見得致しまする。

ト　手を突いて頭を下げる。

重國　さては最前話しに聞いた、國元より呼び迎へられた、高德どの〻國の花。人に知らさぬ隱し妻、風俗なら、物腰なら、器量もさぞと思はる〻。とくと拜見いたしたく、苦しうない。顏を上げさつしやい〳〵。

櫻井　ホヽヽヽ、これは又、御上使樣の御嬲り。高德の妻とは云へど、備前の國の田舍生れ、都は花の京詞、譬へて見れば深山木の、色も香もなき不束者。お顏合すも、お恥かしう存じまする。

重國　それ〳〵、その口元なら聲音なら、どうやら覺えの。

櫻井　さう仰しやればわたしも又、どうやら聞いた

ト　この時、重國の顏をキッと見る。重國も櫻井をヂッと見て、兩人悄り、こなしあつて

ヤア、お前は。

重國　こなさんは。

櫻井　御上使樣と思ひの外

重國　奥方と思つたも

櫻井　顏を合せてよく見れば

重國　町家の嬶アが裲襠姿。

櫻井　素袍烏帽子の町抱へ。
重國　猿が人眞似。
櫻井　烏が鵜の眞似。
重國　變つた形に
櫻井　變つた出合ひ。
重國　不思議な緣も
兩人　あるものぢやなア。
ト兩人こなし。
重國　こりやモウ、上使どころぢやアないわえ。
トこれを聞いて、櫻井もこなしあつて
櫻井　さうぢや。
ト奥へ行かうとする。松、大紋を剝れのけ、ツカ〳〵と下りて、櫻井が裲襠を捉へ
松　やる事はならねえ。待つてもらはう〳〵。
櫻井　待てとはなんぞ、用があるかえ。
松　なんだ、用があるか。あのマア、白々しい顏わいの。あそこの藏の建前だの、爰の內の根繼だのと、騷がしい仕事の片手間、あの內儀さんは何が好きであらう。下戸か上戸か酒か餅かと、心遣ひの藪酒手、それからやうやう釣かけて入込み、度々口說いてもあせつても、男の他國を云ひ立て、貞女立てを云ふものが、ちやんと爰の女房になる。よくおれに鼻を明かせたの。これぢやァ濟まない。男が立たない。サア、たつた今、否とも應とも、返事をしろ〳〵。
櫻井　サア、成る程、さう思はんすりや、腹も立たうが、わしが爰の女房になつて居るも、深い樣子のある事。この譯も、今と云つては、どうも云はれぬ程にな。この事ばかりは、堪忍して下さんせいなア。
松　イヤ、堪忍ならない〳〵。この頃も娘の祝ひと、大原の鳥居先、口說き殘しの算用するのだ。これから又、否でも應でも高德が女房だと云やア、腕づくで貰つて見せるワ。なんのこつたえ。途方もねえ。
ト其處にある手拭掛けの手拭を取つて、手早く捻り、烏帽子の上より鉢卷する。櫻井見て
櫻井　お前もマア、なんぢやいなア。聲山立てゝ阿房らしい。爰は何所ぢやと思はしやんす。
松　何所だ彼所だも大事ないわえ。コレ、よく物を積つても見ろ。われにかッ惚れたそも〳〵から、地形に大抵骨を折つてな、追ッつけ胴突き思ふ存分、木遣り唄と鎹をかひ、十の階子を九つまで、登り詰めたおれが色を、

人に取られちやア、仕事の仲間へ面が立たない。これから奧へ踏み込んで、高德に貰つて見せるワ。
ト櫻井を引退け、奧へ行かうとする。櫻井留める。この立廻りのうち、後へ鄕內、德利に茶碗を持ち、出かかつてこれを見る。兩人これを知らずに
櫻井　マア〳〵、待たしやんせいなア。例へお前が腕づくとやらで、高德どのに貰はしやんしても、肝心のわたしが得心せぬぞえ。それにマア、わつぱさつぱと、一人氣を揉ましやんしても、ほんに緣の下の舞ひとやら、笑止に思うて留める程に、止しにさしやんしたがよいわいなア。
松　エヽ、アノ、爰な中ッ腹めが。うぬ、さう叱らすと、おれが爰で仕樣があるぞよ。
櫻井　ホヽヽヽ、こりやをかしいわいなア。手に入つた女房顏、仕樣があるとて、どうしようと思はしやんすぞ。
松　どうと云つたら、うぬをおれが斯うするワ。
ト踏みのめさうとする。袴の裾の長きに困る思ひ入れ。エヽ、小自烈てえ。こんな股引が何處にあるものだ。
櫻井　ようござんす。こなさんに又、さう手籠めになつて居る譯がないに依つて、わしも又、斯うするわいなア。

松　ト側にある煙草盆と、煙管を取つて打ちつける。此奴が〳〵、男に向つて投打ちをひろぐな。氣狂ひめが。
櫻井　アイ、氣狂ひも、一人は物に狂はぬわいなア。
松　さう吐かしやア、もう堪忍の破れかぶれ。うぬをおれが斯うするワ。
トまた蹴倒さうとする。袴の裾に絡まり、ばつたり轉ける。櫻井はそこにある物を見合せ、打ちつける。松、大紋大肌脫ぎになり、そこにある鍬を振り上げる。この揉み合ひの中に鄕內分け入る。兩方を捨ぜりふにて留める事。三人、夫婦喧嘩のやうによろ〳〵あつて
鄕內　マア〳〵、二人ながら、待たつしやい〳〵。
松　イヤ〳〵、留めさつしやんな〳〵。
櫻井　構はんすないなア〳〵。
鄕內　サア、よいてや〳〵。斯う見たところが、聞かずと知れた夫婦喧嘩。同じ長屋で居ながら、どうマア見て居られるものだ。投打ちは世帶の損。二人ながら料簡して、先づ鎭まらつしやい〳〵。
ト兩方を宥める。

松　よい所へ來さしやつた。マア、おれが理窟が無理か聞いて下さい。例へ向うはどうあると儘よ。なんでも女房ぢやと思つて居るに依り、一番組や二番組の、仲間の奴等へも話して、おれがぞつこんあの女に、ほ組とれ組の事は、誰れ知らぬものもない所に、いま聞きやア爰の亭主の、下歯になつたと聞いちやア、この千本の松さんが面が立たない。そこでこの出入りの方を付けて、女房にせうと云へば、男に向つて投打ちをしますわな。そこでこの通りだわな。なんとこれぢやア、腹が立たずに居られまいがな。

郷内　成る程、さう聞いちやア、みんなこなたのが、尤もだ尤もだ。

櫻井　尤もか理窟か、わたしが云ふ事聞いて下さんせ。わしはあのやうに云うてぢやけれどな、まだ女房になつたと云ふのでもござんせぬ。それにしつから口說かしやんすゆゑ、否ぢやと云へば、奥へ行て貰うて見せると、女子を捕へて、ぶち打擲をさしやんすゆゑ、賣詞に買ひ詞と、まんざら嚇しを食うて居るやうな女でもござんせぬ。それぢやに依つて手向ひしたが、なんとわたしが誤まりかえ。よもや無理ぢやござんすまいがな。

郷内　サア〳〵、尤もだ〳〵が、そこが女と云ふものは、男には負けうち。來合せたが不肖。おれが挨拶する程に、マア〳〵、機嫌直したがようごんす〳〵。幸ひ爰に持ち合せのこなから酒。筒茶碗の杯事。何もかもおれが貰つて、仲直りだ〳〵。サア〳〵御亭主、もう何にも云ふ事はない。一つ呑んで內儀へ、さゝつしやい〳〵。

トこれにて松、肌を入れ鉢卷を取つて、直ぐにその手拭を肩に引ッかけ、割り膝をして

松　こりやアモウ、大きにお世話になりやす。ナニサ、わしも女房の惡ざう杢ざう、云ひたい事はねえが、あんまり口が過ぎるに依つて、地金を顯はしたものサ。ハヽヽヽ。

郷內　イヤモウ、兎角町內に事無かれと、御亭主が折れて出れば、內儀も云ひ分がない筈。もう、何にも云はないがようごんすぞえ。

櫻井　ナンノイナア、あの人さへその氣なら、折角の御挨拶、それを聞かぬと云ふやうな、筋の解らぬわたしでもござんせぬ。この上はよいやうに、お前をお頼み申しますわいなア。

郷內　マア、それで片付いたと云ふもんだ。そんなら御亭

松　主から、始めさつしやい〳〵。こりやア慮外でごんす。そんならわつさりと、一つやらかしやせう。
ト茶碗酒を取上げる。郷内、徳利よりつぐ。松、グツと呑んで、舌打ちをしながら
郷内　モシ、こりやア飛んだいゝ酒だね。こりやア川岸の山形サ。ハヽヽヽ。サア〳〵内儀、受けさつしやい〳〵。
ト茶碗を櫻井の方へ遣る。櫻井取上げ
櫻井　ほんに、思はぬ御厄介をかけまして、お恥かしうござんすわいなア。
郷内　ナニサ、心安い仲で遠慮する事はない。一つ呑めな呑めな。
トつぐ。櫻井よろしく受けて呑み干し
櫻井　もうお前、納めなさんせいなア。
郷内　そんならこれで、二人ながら杯は預かります。これで仲直りは濟んだと云ふもの。一つ〆めませうか。
松　ようごんせう。
三人　しやん〳〵。
郷内　もう一つせい。
三人　しやん〳〵〳〵。
松　祝うて三度。
三人　しや〳〵〳〵のしやん。ハヽヽヽ。
ト三人笑ひながら顔を見合せ、思ひ〳〵にキッとこなしあつて
松　女が戀慕に我れを忘れ、云ひつけた下ざま詞。
櫻井　拍子に乘つて自らまで。
郷内　夫婦喧嘩の取違へ。奴部屋の扱ひも
松　立身すれば六波羅の侍ひ。
櫻井　樣子あつて高德が妻。
郷内　下郎が無禮は
松　上使が免す。
櫻井　免さぬ主の高上がり。郷内、下がりや。
ト郷内を取つて下へ引き廻す。この拍子に郷内が懷中より、袱紗に包みし白骨落ちる。櫻井目早く見付け
櫻井　その髑髏は。
ト取りにかゝる。郷内ちやつと懷中して
郷内　アイヤ、奧樣。
櫻井　今のは。
ト行かうとするを、松、上手へ引きのけ、郷内に目を

付け

松　郷内、控へい。

櫻井　御上使様。

ト立ちかゝる。松、眞中に隔てる。これにて氣を變へ

後程、お目にかゝりませう。

ト唄になり、この三人引張りよろしく、櫻井心を殘して奥へ入る。後に兩人こなしあつて

松　心得ぬ奴の郷内。下部に似合はぬ今の一品。所持いたしたる仔細はどうだ。

郷内　御上使様のお目にとまり、肌身離さぬ白骨の、仔細を申し上げたいが、腰拔け武士の六波羅侍ひ。滅多にうかとは云ひ憎い。

松　何がなんと。

ト郷内思ひ入れあつて松を引き廻し、懐中の髑髏を持つて散々に打つ。松、掻い潜つて髑髏の手を持ち添へ、兩人キッと見得

待て郷内。下司下郎の身を以つて、打擲のみか某を、腰拔け武士との雑言過言。様子に依つて重國が、一刀の下に命を斷つ。仔細を語れ。ナ、、、なんとだ。

ト郷内を突きのけ、立ち身になつてきめる。郷内其まま松が側へどつかと座し

郷内　チエ、、見下げ果てた龜壽丸どの。

松　ヤ、なんと。

ト兩人こなしあつて、草笛入りの合ひ方になり、郷内思ひ入れあつて

郷内　いま打擲せしこの髑髏は、御父君相摸入道高時公。變り果てたる御姿を、思ひ出せば情なや、元亨の戰ひに新田左中將義貞、小手差原より打ち向ひ、坂東の八平氏、武藏の七黨一手になり、稻麻竹葦と取圍まれ、詮方盡きたるその日の軍。

松　その物語りは我れとても、噂に聞いたる星月夜、鎌倉山の谷七郷、敵ならぬ所もなく、味方の討死爰かしこ、親に別れ子に離れ、或ひは兄弟刺し違ふ、亂軍の切り拔けて、やう〳〵遁がれ父高時、東勝寺へと引退く。

郷内　その折柄我が親たる、諏訪左馬之助を密かに召され、最早叶はぬ味方の敗軍、何卒汝は我が悴の、龜壽丸を連れ立つて、時節を待つて父が欝憤、晴らさせくれよと宣ふ間も、早押寄する敵軍に、是非も及ばぬ御切腹。敵に御首渡さずと、直ぐに其まゝ御介錯。泪と首を押包み、君を誘ひやう〳〵と、信濃路指して身退き、御成長のそ

の後は、又も主從散々に、御行くへも知らざれば、尋ね求めしこの年月。父も程なくこの世を去る。教への詞に從つて、主人の形見と後日の證據、肌身離さぬこの髑髏、その折柄は御幼稚にて、君は見忘れ給ふとも、幼な顏に覺えあり、龜壽どのであらうがな。

松　ホウ〳〵、胸に覺えしその合戰こそ、無念の腸。すりや、これこそは最期ありし、父の髑髏とや。

鄕内　如何にも。

松　ドレ。

ト白骨を取つてキッと見て、無念のこなし。

鄕内　その御憤りに引替へて、六波羅の幕下に屬し、恨みを含む所存もなく、剩さへ色に迷ひ、今の女に戀慕の樣子。見るに忍びず勿體なくも、家來の身として御主人を打擲なしたる白骨は、卽ち御父高時公の、御折檻と思し召され、京鎌倉を一時に、打ち亡して三つ鱗の、旗を四海に翻へす御所存はござらぬか。エヽ、お情ない。

松　して、其方は。

鄕内　卽ち君を守り育てし、諏訪左馬之助が一子、同苗五郞盛高、疑はしくばその髑髏に、君の血汐を注ぎかけ、親子の證據を試み給へ。

松　誠に、ドリヤ。

ト管絃になり、兩人こなしあつて、鄕内、白骨を持つで差出す。松、小さ刀の小柄を拔いて腕を捲り、是を突き立て、髑髏へ血汐をしたむ。仕掛けにて、髑髏へ血汐浸み込む模樣。兩人見て

鄕内　ソレ〳〵、血筋の證據は目前に、髑髏に浸み込む骨肉同胞。

松　疑ひもなき父の白骨。我れも又、其方が、疑ひ晴らすその一品、立寄つてこれを見よ。

ト懷中より連判狀を出して見せる。鄕内これにて白骨を松に渡し、連判狀を取替へ、開き見て

鄕内　こりやコレ、一味徒黨の連判狀。

松　サア、その姓名を記したる、その連判狀に一味の血判。

鄕内　天晴れ若君。

松　コリヤ。

ト抑へる。この時、奥にて人音する。兩人、思ひ入れあつて

萬事は密かに、鄕内。

鄕内　御上使樣。

松　奥へ參れ。

ト唄になり、松、錫杖を懐中して鷹揚に入る。郷内は連判狀を内懐へ納め、後に付いて奥へ入る。と下座の方より八津兵衛逃げて出るを、初霜先に若竹、夏菊、楓、尾の原追ひ駈け出て、舞臺を一遍追ひ廻し、よき程に

初霜　ソレ、留めてたもいなう。

四人　逃がす事はならぬぞ〳〵。

ト四人の女形、八津兵衛が向うへ立つて隔てる。八津兵衛、モヂ〳〵して居る。

八津　こりやアお女中方、八津兵衛めを、何となされます。

若竹　何とするとは、初霜どのゝ仰せ。

夏菊　例へ無理な事仰しやつても、お主の御意は背かれまい。

楓　ちやつと早う、お側へ行て

尾原　御用の品を

四人　聞かつしやれいなう。

八津　ヘイ、聞きます〳〵。承はらいで何と致しませう。あなたはお主樣。私しは御家來、御用を承はるが役目でござれば、何なりとも、ヘイ〳〵、仰せつけ下さりませう。

初霜　コレ、又わしを嫌がらすやうな事ばつかり。その主從が否ぢやに依つて、ならう事なら、どうせい斯うせいと、云うてくれたがよいわいなう。

八津　これは又勿體ない。左樣な事を申したら、この口が未申、罰の當るは知れた事。オヽ、怖やの〳〵。

初霜　そんなら嘘かや。先度、水屋を掃除の時、閨の内で云やつた事は、ありや嘘かや。

八津　モシ〳〵、嘘の眞のと、女中方も聞いてござりますぞ。

初霜　隨分聞いても大事ない。今までは隱して居たが、今日と云ふ今日打明けて頼んだからは、わしが味方、爰に遠慮はないわいなう。

八津　フウ、そんならあなた方に。

四人　イヨ、色事師さま〳〵。

八津　これは又、迷惑千萬な。

初霜　そんなら何かや。わしが此やうに云ふのが、其方は迷惑かいなう。

八津　イヤサ、左樣ではござりませねど。

若竹　左樣でなくばあのやうに、焦れてござる初霜さま。

夏菊　わしらもとも〳〵取持つ程に、色よい返事を
四人　さしやんせいなア。
八津　ぢやと申して、物堅いお旦那と云ひ、現在お主のお妹御、ひよつとお耳に入る時は、この首がツイころり。臺座の光をしまふ詮索。それをマア御意見せうとはせいで、とも〳〵取持つ女中方。悪いぞえ〳〵。この御用ばつかりは、餘人へ仰せつけて、私しは、部屋へおやりなされて下さりませ。
初霜　アレ、あんな事云うて居やるわいなう。
楓　ほんに、きつい石部金吉。
尾原　こりや一通りでは、行きませぬわいなア。
初霜　ぢやと云うて、どうしたらよからうぞいなア。
若竹　どうと云うたら、ナ、申し。
　ト自害の眞似をして教へる。
初霜　ほんに、それ〳〵、女子の口から恥かしい事、云ひ出して叶はぬからは、とても望みのない身の上。いつその事に。
　ト八津兵衛が刀の柄に手を掛ける。八津兵衛、留めずに
八津　死なつしやりませ〳〵。
初霜　ヤ。
八津　古い仕組みを食ふやうな、色事師とは肌が違ひます。
初霜　こりやマア、なんとせうぞいなア。
夏菊　何と云うたらわたしらも、持ち扱かうた若黨どの。
四人　外に思案はござりませぬ。
八津　サア、その思案の外だに依つて、此方から新らしく、主と家來のせりふをのけて、初霜さま、これへ來なさい。
初霜　そんなら行ても、大事ないかや。
八津　ナニ、大事があるものか。この八津兵衛だとて、木竹ぢやアあるまいし、隨分と好物の旨い据ゑ膳、有やうは、箸を取る氣でござんすて。
楓　皆さん、風が變つたぞえ。
八津　變つた風は戀風に
初霜　靡く心の
八津　柳腰。
初霜　いとしい
八津　可愛い
初霜　こちの人。
八津　おらが嬶よ。
初霜　オヽ、嬉しい。

ト初霜、八津兵衞に抱きつく。四人の女形、これを見て顔を背ける。この前より後へ、高德、羽織衣裳にて出かゝり、この時

高德　不義者見付けた。そこ動くな。

ト皆悔り

八津　ヤア、あなたはお旦那樣。

初霜　兄上樣。

四人　すりや、最前からの

高德　樣子は殘らず見屆けた。不義は邸の法度と云ひ、高德が目にかゝつては、其まゝには差置かれぬ。

八津　エヽ。

高德　妹は妹とも思はうが、不屆きなる八津兵衞。主の妹に疵を付けたる大膽者。兩人ともにこれへ參れ。重ねて置いて四つにする。

ト云ふ。兩人悔りする。高德、氣を變へ

と云ふは噓ぢや。コリヤ、女夫にしてやるわい。

初霜　エヽヽ、そんならアノ、八津兵衞と。

高德　はし折り鏡の妹が、思ひ込んだ戀男。八津兵衞、不肖ながら、妻に致してはくれまいか。

八津　これは〳〵、只今のお詞。不義者見付けたと仰しやつた時は、南無三方と命を投げ出し、覺悟極めた八津兵衞に、初霜さまを女房にせいとは、夢に牡丹餅、明けた口へ、持ちかけられて二度悔り。よもや誠とは存じられませぬ。

高德　すりや、其方は高德を、僞はり者と思ふぢやまで。

八津　なか〳〵左樣ではござらねども、よう思うても御覽じませ。誰れござりませう、備前の國の住人、備後三郎高德さまのお妹御と、下司下郎の八津兵衞が、なんと夫婦になられませう。それこそは提灯に釣り鐘、この儀は眞平御容赦下されませう。

初霜　コレ〳〵八津兵衞、そりや何云やるぞいなう。今まで人目を包んで居たも、有やうは物堅い兄上樣の手前があるゆゑ。その兄樣がお許しなされ、女夫にして遣はさうとあるは、ほんにうろたへた出雲の神さんも、御存じはあるまい。ナウ皆の衆。

若竹　左樣でござります。冥加ない殿樣のお詞。お請け申すが

四人　よいわいなア。

八津　でも、お月樣と泥龜、石龜が自團駄。及ばぬ事〳〵。

高德　すりや、某が詞を背くぢやまで。

八津　イヤ、左樣ではござりませねど。
高德　どもなら應と云うてやれ。コリヤ、戀に上下の隔てはないわえ。
八津　左樣に事をお分けなされて、冥加に餘るお指圖を、もどきまするは却つて不忠。
高德　すりや、聞屆けるか。
八津　兎も角も、仕るでござりませう。
若竹　サア、相談がなつたと云ふもの。初霜さまも、お嬉しうござりませう。
初霜　推量して下されいなう。
高德　先づこれで高德も、安堵したと云ふものぢや。取敢へず祝言の杯。オヽ、幸ひ〳〵。かゝるめでたき折柄なれば、奥を呼び出し、八津兵衞に。目見得を致させてくれう。
初霜　ほんに、それがようござりまする。次手にわたしが事も話して、姉さんにお喜ばせ申しませうわいなア。
高德　それがよい〳〵。
四人　そんなら奥樣を、お招ぎ申しませうかいな。
トこの時奥にて
櫻井　イヤ〳〵、それへ參りませう。

ト合ひ方になり、奥より櫻井、出て來る。これにて八津兵衞。下へ下がつて扣へる。櫻井はこれに構はず、高德が側にこなしあつて
何やら御用の樣子と存じまして、參りましてござりまする。
高德　オヽ、よくぞ〳〵。イヤ、外の事でもない。ちよつと最前、其方にも話した通り、もう獨り身でも置かれぬ妹、幸ひの事があつて、新參の若黨、八津兵衞と申す者と女夫になして遣はすつもり。喜んでやりやれ〳〵。
櫻井　それはマア、めでたい事でござりまする。大方これは下地から、譯のあつたと云ふやうな事でござりませうかな。
高德　マア、そんなものぢやて。
櫻井　それは合うたり叶うたり。初霜さん、さぞ嬉しうござんせうな。
初霜　姉さんの手前、恥かしい事ながら、わたしが心の嬉しさを、御推量なされて下さりませ。
櫻井　オヽ、そりやその筈の事いなア。
高德　そこで、幸ひの折柄なれば、其方に八津兵衞を近付きにしてやらうと思うて、それで呼び出したのぢや。逢

うてやつてくりやれ〳〵。

初霜　コレ八津兵衛、姉さんが逢うてやらうと仰しやる程
に

四人　お目見得したがよいわいなう。

八津　これは〳〵、有り難い殿樣のお取持ちと申し、未だ
お目見得は仕りませぬ奥樣、初霜さまの儀をお叱りもな
く、お召出しにあづかり、冥加至極、有り難う存じます
る。

ト兩手を突いて平伏する。

櫻井　そんならアノ、八津兵衛と云ふは其方か。ほんに初
めて逢ひますなう。斯うなるからは、表向きは主從、內
證はわしが爲にも、外ならぬ妹聟。隨分ともに、仲よう
して下されや。

八津　イヤモウ、重ね〳〵の御厚恩。數ならぬ拙者、矢張
り御家來と思し召し、どう致せ斯う致せと、殿樣へのお
引廻し、そこは又奥樣のよからうやうに、この末ともお
指圖の程を、偏へに

ト云ひながら櫻井と顏見合せ、兩人大きに恟りして

櫻井　ヤア、お前は。

八津　其方は。

高德　コリヤ〳〵八津兵衛、奥も近付きか。

八津　アイヤ、お近付きになるは只今が初めて。でもマア
……有り難いお目見得の仕ります。

櫻井　ほんにマア、思ひがけないと云はうか……サア、思
ひがけない新參の若黨も、あんまりの事で、サア、あん
まりめでたい事で、なんぢややら、譯が知れませぬわい
なア。

高德　なんの譯の知れぬ事があらう。これ程知れた譯はな
い。初霜と八津兵衛を、女夫に致す內祝言、ちよつと杯
を致さう。銚子を持て〳〵。

四人　ハイ〳〵、畏まりました。

ト女形皆々立ちかゝつて、舞臺先へ銚子杯を直し、扣
へて居る。

高德　コリヤ〳〵八津兵衛、許す程に、近う參れ〳〵。

八津　ヘイ。

ト少し前へ出る。櫻井、顏で杯するなと云ふこなし。
八津兵衛、モヂ〳〵と困る思ひ入れ。初霜、無性に嬉
しきこなし、高德、思ひ入れあつて

高德　サア〳〵初霜、祝言の杯はお定まり。其方飮んで八
津兵衛へさしやれ。

初霜　アイ〳〵、畏まりましてござります。
四人　ドレ、お酌いたしませうか。
　ト立ちかゝるを高德留めて
高德　イヤ〳〵、待て〳〵。この酌は餘人にはさせ憎い。大事のおれが妹が、一世一代の事ぢやに依つて、大儀ながら奧、其方酌をしてはくれまいか。
櫻井　エヽ。
高德　何も其やうに、悔りする事ではない。但しは否か。
櫻井　イエ、左樣ではござりませねど。
高德　左樣でなくば、ついでやりやれ。
初霜　左樣ならば、御慮外ながら。
　ト杯を取上げる。高德つげと云ふ仕形。櫻井、不精不精取上げ、八津兵衞が方を見ながらつぐ。
高德　ソレ〳〵、こぼれるわいの〳〵。
　ト此うち初霜、杯を干して
初霜　そんならアノ、この杯は。
高德　八津兵衞にさしやれ〳〵。
八津　然らば慮外も顧みませず。
櫻井　アノ、この杯を其方が。
八津　主人の御意、御頂戴仕らう。
　ト杯を取上げる。
高德　ソレ、奧、ついでやりやれ。
櫻井　イエ〳〵、こりや止しに致しませうわいの。
高德　そりや又、なぜ〳〵。
櫻井　よう積つても御覽じませ。主が家來に酌をすると云ふやうな事が、あるものでござりまするか。八津兵衞も八津兵衞、なんぼ主の云ひつけぢやとて、ようマア、その杯が受けられた事ぢやわいの。モウ〳〵、この杯事は止めに致しませう〳〵。
高德　これはどう致したものぢや。折角めでたい座敷が不興になるわえ。つげと云うたら早くつげ。八津兵衞も、受けい〳〵。
　ト氣色ばうて云ふゆゑ、櫻井是非なく銚子を取上げる。八津兵衞も杯を持つて
八津　これは近頃、憚りさまでござりまする。
櫻井　知らぬわいなう。
　ト腹立ちさうにちよつとつぐ眞似をする。八津兵衞呑み干す。
高德　マア、これで座敷は濟んだと云ふもの。これからは色直し。初霜は奧へ行て、ナ、日の暮れるのを待つて居

やれサ。
四人　わたしらは又、お寐間の用意でも致しませう。
初霜　そんならお詞に隨ひまして、わたしは奥へ參ります る程に、コレ八津兵衞、必らずともに、待つて居るぞや。
四人　マア、お出でなされませい。
ト唄になり、初霜、八津兵衞、思ひ入れあつて、女形四人附添ひ奥へ入る。櫻井、ムツとして居る。八津兵衞も迷惑なるこなし。高德、思ひ入れあつて
高德　あのマア、妹めが嬉しさうな顏と云ふものが。さほどに戀は切なるものか。この高德なぞは生れついて、左樣な儀に出會うた事がないゆゑ、朋輩にも頑な者と見てのけられ、色里の風儀などは、一向に不案內。斯う見たところが若黨八津兵衞、妹を手に入れた手際では、定めし戀の傳授を覺えて居やうな。
八津　これは又御迷惑。田舍生れのむくつけ者。傾城傾國色里の風儀、なか〳〵以て存じませうやうがございませぬ。
櫻井　イエ〳〵、ありや嘘でございます。見掛けから無性らしうて、色里は愚か、例へ町でも屋敷でも、好き嫌ひはあるまいと、サア、わたしは存じますわいなア。
高德　サア、身共もさう思ふて。せめて色里の話でも聞いて、納得が致したい程に、隱さずとも八津兵衞、話し居れ〳〵。
八津　左樣御意なされば、何を隱しませう。私しも國元に居る節は、女郎の一つも求めた身分。彼の吉田の兼好が、色好まぬ男子は玉の杯、底なきに例へしも、尤もに存じまする。
高德　さうあらう〳〵。してマア、色里の樣子は、どのやうな事ぢやぞ。
八津　サア、お望みゆゑ、お話しは致しませうが、只口ばかりでは譯が知れ憎うございます。幸ひ奥樣を、あなたの相方の傾城に致しまして、お前樣は大盡客。仕方話しはどうでございませう。
櫻井　ほんに、こりやよからうわいなア。その大盡客を袖にして、間夫とやらを拵らへて、互ひに積る……仕方話しが見たいわいなア。
高德　そんならなんとマア、この高德を廓の大盡。それは近頃迷惑な事ぢや。免してくれ〳〵。
八津　ハテ、知らぬ所は私しが、憚りながらお指圖いたせば、マア、その大盡の形代ぢやと思し召しませ。なんぞ

斯う置き頭巾になりさうなものが。

トあたりを見廻し、そこにある紫の袱紗を見付け

幸ひな物がござります。この袱紗を斯う疊んで。

ト恰好よく疊み、高德が頭へ載せ

さて、斯う致して、手は扇を斯うお持ちなされませ。

ト高德に扇を逆さまに持たせ

歩きやうは、すらり／＼と、斯やうに致すのでござります。

ト左手を張り臂にして、右に扇を振つて、鹿爪らしく仕形を敎へる。高德、八津兵衞が通りにして

高德　そんならアノ、斯うか／＼。

八津　マア／＼、左樣でござります。さて又奧樣は、小褄をしやんと斯う取つて、外八文字にすらり／＼と、斯う歩むのでござります。

ト傾城の道中をして見せる。

櫻井　そんなら、アノ、斯う褄を持つて。

ト八津兵衞が通りをして

斯う歩むのかいなう。

八津　きついもの／＼。マア、これで廓の景色になつたと云ふもの。さらばお話し申しませうか。

ト好みの合ひ方になり、三人よろしくあつて

さて、私しが身の上を、お話し申すもお恥かしい事ながら、あるとあらゆる色狂ひ。廓通ひの派手姿。花を遣り手が格子先、鼻に扇のそめき唄。

櫻井　浮氣らしいは殿御の癖、夜每に替る仇枕、嫌なお客と寢る時は、氷の地獄火の車、夜着や布團も劍の山、ほんに辛いものぢやげな。

高德　一双の玉手、千人の枕、半點の朱唇、萬客甞む。ハテ、淺ましい境界ぢやてな。

櫻井　サア、其うちに間夫が出來、もう何年で年が明ければ、どうして斯うしてと、秋の日も長う覺え、夏の夜も長々と、一人寢る夜の床の內、互ひに變るな變らじと、度重なればいとしうなり

八津　通ふ程に戯る程に、後は野となれ山となれ、つい勘當の破れ紙子、身を滅ぼすも女ゆゑ。傾城の誠と、玉子の角はないものでござります。

高德　イカサマ、傾城の文字は城を傾むく。例へ良將たりとも、女には迷ふものぢやて。

櫻井　イエ／＼、さうばかりでもござんせぬ。傾城は噓づくものと、一途に思ふはきつい野暮。この人ならではと

思ふが最後、末の約束二世三世、女夫になるを樂しみに、辛い月日も送るではないかいなア。
八津　サア、その心ならよけれども、ナ、外に增す花、ナ、增す花のある時は、去るものは日々に疎しと、思ひ出しもしやせまいぞえ。
櫻井　アレ、又あんな憎體口。そんなら心の落ちつくやうに、指切り髮切り入れ黑子、起證誓紙もあるわいなア。
高德　フウ、そこが彼の武士道では、血判などと云ふ所ぢやな。
八津　イヤ、又それも勤めの慣ひ。手練手管の古狸。滅多にその手は食へぬ〳〵。
高德　マア〳〵、その手練手管と云ふは謀り事、同斷のやうに聞えるが、さうか〳〵。
八津　左樣でござります。その手管に化かされて、今宵も通ふ明日の夜も、藝者幇間に彈き唄はせ、一寸先は闇の夜と、戲れ遊び面白さ。
高德　イカサマ、彼の孔明が櫓に登り、琴曲を催ほせし、その爪音も、これには如かずと押寄する、
櫻井　お敵もとんと腰拔かせ、お前のやうな好い殿御は、ほんに唐にもござんすまい。氣立てが粹で落ち付いて、風俗なら物腰なら、どつこに一つ云ひ分ないと、口に任せて乘せかくれば
八津　誠と心得有頂天。田も遣ろ畔も遣り放し、遣ひ果して二分はさて措き、二文も殘らぬ節季の苦しみ。
高德　その苦しみを補が、軍法に取つて云はゞ、ナア、八つ兵衞、油流しの心地であらう。
八津　サア、お聞きなされませ。その油にたらし込まれ、物見花見はまだな事、芝居見物船遊山。
櫻井　取る程取つたその後は、ぽんと突き出す月夜に釜、流しの穴に落ちたる心。
高德　彼の釣り塀の軍法に
八津　乘せられた馬鹿らしさ。殘るは反古の狀文。腹が立つても脊が立つても、云ふ程恥を顯はす道理。
高德　藁人形を誠と思ひ、敗軍せしも、この理に同じ。
櫻井　それも誰れゆゑ身一人の
八津　果は廊下で立ちながら、口から口へ袖屛風。
高德　フウ、繼ぎ樋の工風、これで解る。
櫻井　いづれ妹脊の變らぬは、鳥が敎へしさゞめ事。
八津　彼の粹方の金言に、京の女郞に長崎の衣裳、江戸の張りを持たせた上、大坂の揚屋で遊びたいとは、よう云

うて置きましたではござらぬか。

高徳　イカサマ、色里の話し。いづれ花がなければならぬ。イヤ、花と云へば其方達も知る通り、御上使の御入來。お慰みの爲にもなれば、幸ひ庭前に盛りの菊、高徳が流儀の活け方、奥は花活け八津兵衞は、枝を手折つて參れ。

八櫻　畏まりましてござりまする。

ト合ひ方になり、櫻井は誂らへの花活けに、水差を持つて來て、舞臺先へ置く。八津兵衞は此うち菊の花を手折り、有り合せの杯、花鋏と一緒に載せ、高徳が前に置く。兩人、左右にこなしあつて

八津　仰せに從ひ菊の咲分け。

櫻井　有り合せたるこの花活け。

八櫻　持參いたしましてござりまする。

高徳　然らば奥は花活けへ、水を差しやれ。

櫻井　畏まりました。

ト水差の水を花活けへつぐうち

高徳　また八津兵衞は、手折り參りしその菊の、活けよいやうに枝を下ろせ。

八津　畏まりました。

ト菊の枝を取上げ、花鋏にて花形を見合せ、下ろさうとする。

高徳　アイヤ、その枝は惡からう。

八津　して、いづれの枝を切りませうな。

高徳　小枝を切れ。

トこの詞に心付き

櫻井　エ。

高徳　イヤサ、菊の小枝を切れと云ふ事。

八津　フウ、菊の小枝と仰つしやるからは。

櫻井　そんなら娘の

ト高徳、手早く刀を拔いて、花活けを丁と切る。兩人見て

八櫻　これは。

高徳　女房、去つた。

櫻井　エ、。

高徳　いま切り捨てし花活けの、水は、再び戻るまい。

八津　すりや、それを御推察あつて

高徳　八津兵衞、其方にも暇をくれた。

櫻井　アノ、夫婦の緣も

八津　主從の

高徳　二世三世を今爰に、覆水盆に歸らず。こぼれし水に

菊水の
八櫻　エ。
高德　落花の菊は活けられまい。
櫻井　すりやアノ、小菊を切つて
八津　御上使の御もてなし。
高德　花もの云はず懷に、替へ袱紗ある杜若。
櫻井　似せ紫も八ツ橋の
八津　蜘蛛手に迷ふ
高德　三河の名所。
櫻井　八ツと
八津　八ツとに
高德　八津兵衞。
八櫻　殿樣。
高德　思案の致せ。
ト唄になり、こなしあつて奥へ入る。後に櫻井、高德が入るを待ち兼れ、八津兵衞が側へツカ〳〵と行て
櫻井　こちの人、よう健で居て下さんした。逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなア。
八津　オヽ、道理だ〳〵。其方も無事で、此やうな喜ばしい事はない。どう云ふ仔細でこの屋敷の、高德が妻とはなつて居たぞ。
櫻井　サア、聞いて下さんせ。四年以前にお前に別れ、娘お菊を育てるうち、四條畷の合戰破れ、楠帶刀正行も、討死したと聞いた時の、わたしが心の悲しさを、推量して下さんせ。女子の身の便りなく、どうか斯うかと思ふうち、とり〴〵人の噂を聞けば、正行は長らへて、再び義兵を擧ぐるとの、世の取沙汰も定かならず。わざと町家に身を潜め、お前の便りを待つうちに、月日に關守なく娘のお菊、七つの祝ひも心ばかり、不思議に逢うたる杉本佐兵衞、心憎き事あつて、勘當せし折も折、雜魚寢祉の鳥居先、娘お菊諸ともに、囚はれとなり來て見れば、この屋敷の高德どの、表は包めど內心は、宮方へ一味にて、八才の君を我が子として匿まふに、女房なくては人の疑ひ。先づ斯う〳〵と互ひの心、打明けて頼み合ひ、便りを待つた甲斐あつて、云ひ合はさねどこの所で、廻り合うたは夫婦の緣。盡きぬ嬉しさ忝なさ。喜ぶものゝ情ない、四歲五歲女房子を、振り捨てゝ便りもせぬとは、あんまりでござんする。聞えぬわいなア〳〵、聞えませぬわいなア。
ト取りついて泣く。八津兵衞の正行もこなしあつて

正行　その恨みは尤もながら、我れも其方に別れてより、吉野の御所に時節を窺ひ、四條畷の合戰に、討死せしと僞はつて、新田義助と心を合せ、忍び〳〵に軍勢催促。然るにこの若君を匿まひ置くと聞いたる上は、顔見知らぬを幸ひに、入込んだる若薰出立ち。夫婦の者が種々樣々、苦勞若患もお主の爲。免してくれい、女房櫻井。

櫻井　樣子を聞いて恨みはなけれど、たつた一つの恨みと云ふは、初霜どのと先刻の體裁。如何に殿御の高下ぢやとて、女房の事も思はず、色狂ひとは聞えませぬ。

正行　サア、それも只一筋に聞いたなら、腹も立たうがこれとても、八才の若君と云ひ、高德が心底を、探らん爲の一つの手段。

櫻井　さう云はしやんすりや、高德どの〻今の詞。わしやお前の身の上を、それと覺つて今の時、菊の小枝を切れとある。菊の小枝は娘のお菊。

正行　卽ち母が懷ろに、替へ袱紗ある杜若、八才の若君さまを八ツ橋に擬らへて、三河とかけて身替りの、切れとの謎のこの小菊。

ト そこにある菊の小枝を取上げて見せる。櫻井、受取り見て

櫻井　サア、そのお身替りに事を謀る、上使と云ふはお菊が祝ひに、雇うて連れた覺えの者。六波羅へ召し出され、俄か立身。もし見定めたその時は、どうせうと思はしやんすぞ。

正行　ハテ、その時は、運を天に任せて置くも、生顔と死顔と、相恰の變るを頼み、殊に又、踊りの子供に打交つて眼を晦ます、對の衣裳。奥で着せ替へ踊りの庭。

ト泣き落す。正行も頭を振り始終合ひ方。此うち奥よりお菊、五建目の形にて出て來て、櫻井に取りつき

きく　母樣、爰にかいなア。

櫻井　ヤア、其方はお菊、コレ申し、娘が。

ト云はうとするを消して

正行　コリヤ、名乘れば親子の恩愛、未練殘さず髮形、奥で密かに、心得たか。

櫻井　ぢやと云うて、この愛らしいを見るにつけ、行く末壽く髮形も

正行　變る浮世の夢幻し、莊子が胡蝶の舞ひの袖。

櫻井　踊り衣裳は經帷子。

正行　賽の河原に集まる子供。

櫻井　それは六道、これは又
正行　七つの祝ひも八才の
櫻井　御身替りも今日の今。
正行　逢ふと其まゝ一世の別れ。
櫻井　思へば思ひ廻す程。
正行　契りも薄き親と子の
櫻井　果敢ない緣で
兩人　あつたなア。
ト顔見合せ、ヂッと泣く。これにて踊り地になり、兩人キッと心付き
正行　ありや、踊りの刻限。
櫻井　そんなら、これが。
正行　コリヤ。來い。
ト右の鳴り物にて、正行先に櫻井、お菊を連れてツイと下座へ走り入る。と地へ取り、音頭になり
〽ヤア、これも都の一踊り、幼な遊びの着連れて連れて、仕出し踊りが所望ぢやが、合點か。
子供　オヽ、サテ合點ぢや。
ト矢張り踊り地にて子供九人、何れも誂らへの形、踊り衣裳にて紫の頬冠り、しをらしき仕立てにて、掛け聲よろしく拍子に合せ、踊りながら出て來て、舞臺へ殘らず並よく並ぶ。この時奥より初霜出て
初霜　家中に育つ幼なき者。打揃うて大儀々々。
子一　仰せつけられたる、若殿樣のお慰み。
子二　友達衆と、申し合せの踊り振。
皆々　用意さしてござりまする。
ト皆々下に居て、手を突く。この時正面の襖を開き、松、矢張り立烏帽子大紋にて出て、こなしあつて
松　約束の踊りの刻限、用意よくば首をぶて。
初霜　これは／＼御上使樣には、さぞかし御退屈にござりませう。兄高德も若樣へ、踊り出立ちの御覺悟。只今これへ。とてもの事に今暫らく、御容赦願ひ上げまする。
松　便々といつまでも、待つては居られぬ。上使檢使の二役、早くしろと云ひ傳へろ。
初霜　畏りましてござります。
ト此うち下座にて
正行　仰せに從ひ八才の若君、お供いたすでござりませう。
ト管絃になり、下座の方より正行、お菊を連れて出て來て、舞臺の眞中にお菊を立たせ、下へ下がつて手を突き

ハッ、御上使樣へ申し上げます。主人高德の申しつけにて、お供いたせし八才の若君。折惡しく主人の持病、餘り延引仕るは、御上使の御立腹と、常々より若君の御機嫌に、叶ひましたる若黨八津兵衞、御名代と申すは恐れ、太刀取り萬端、御內意の承はり、お叱りも顧みず、罷り出でましてござりまする。

松　この場になつて心得ぬ、高德が病氣。云はずと知れた虛病であらう。

初霜　アイヤ、憚りながら兄の持病は、私しが存じて居ります。いつとなく起る眩暈。ほんに困つたものでござりまする。

松　人間は病の器、病氣なら病氣にして、何れにも八才の君、首にして立歸れば、身が役目は立つと云ふもの。見所のある若黨八津兵衞。然らば早く首を刎ねろ。

正行　委細畏まつてござりまする。先達てよりお願ひの通り、兄宮の御追福、盆踊りを其まゝに、爰に寫して精靈會。

初霜　お命とても亡き魂の、世の盛衰とは云ひながら、勿體ない、尊とき君も賤の姿。

きく　オヽ、覺悟は極めて居るわいやい。

正行　ハテ、畏き君の御有樣。

松　早くぶて。

初霜　八津兵衞、用意の

正行　音頭々々。

トまた下座の地へ取り

〽これも泪の一踊り、死出の山々越えたえ。

トこれより又太鼓地にて、子供殘らず舞臺先へ立ち並び、眞中にお菊交り、よき程にヤットナアととまる。爰にて神輿昇く。踊り唄一くさりあつて程よく

松　早くぶたぬか。

正行　ハア、南無阿彌。

ト覺悟極めてお菊へ立ちかゝる。この時櫻井、ツカツカと出て、正行が柄の手を留める。

櫻井　マア〱待つて下さんせ……アイヤ、待つてたも、八津兵衞、勿體なくも朝夕に、お馴染みとなつた若君樣、もう、これがこの世の御名殘り。夫高德に成り替り、少しは覺えし踊りの音頭、七月の十六日は佛の慈悲、奈落の底の罪人も、苛責の火も休ませて、充滿其願如法涼風と、唄ひ踊つて遊べども、

正行　十七日の曉は、奈落に苦しむと、盂蘭盆經に說かれ

たり。踊るは翁の夢のうち。この曙は死出の山。御母君三位の局、御產あつて御覽あらば、その悲しみは如何ばかり。八才の若君も、さぞ父戀し

櫻井　母戀し〳〵。

ト立ちかゝるを

正行　コリヤ。

ト押へる。櫻井、淚聲にて

櫻井　啼くは冥途の鳥かえ。

〽冥途の旅へ行く鳥を、娑婆に殘れる親鳥の、淚に絞る袖の露、消えし昔の物語り、踊り子衆も諸ともに、聞いて諦らめ給へとて、語るも同じ淚かや。

ト始終踊り地生け殺しにて、この踊りのうち正行、お菊を切らうと立ちかゝる。櫻井支へる。松、眼を付ける。初霜は心遣ひの引張りよろしくあつて

初霜　古へ多田の滿仲の、夢幻しの世を觀じ、乙の若君美女御前、墨の衣に染めて染まらぬ御怒り。

正行　美女が首討て仲光と、主命遁がれん方もなく切れとあるもお主なり、切り奉るもお主なり。

ト拔きかける。

櫻井　ア、コレ。

松　ト留める。松、こなしあつて時刻が移る。早く切れ。

正行　今ぞ思ひの切り所。

櫻井　すりや、どうあつても。

松　早く切れ。

正行　是非に及ばぬ。

ト正行、引拔いて振り上ぐる。櫻井留める。踊り地の早めにて、この刀に驚ろき、子供殘らず下座へ逃げ込む。トヾ正行、櫻井を引きのける。初霜立ちかゝり、櫻井を隔てる。この時、松、ツカ〳〵下りて正行を突き廻して、お菊を引ッ捉へて

松　この身替りは食ふまいワ。

正櫻　ヤ、、、なんと。

松　フ、、、、ハ、、、、。知るまいと思ふか。踊り衣裳に頰冠り、對の出立ちに紛らして、一杯食はす八才の、宮は宮でも宮參り、しかも背中に大原の、江文の社で覺えのある、祝ひの餓鬼であらうがな。

櫻井　イヤサ、それは。

松　高德が女房顏、合點のゆかぬ八津兵衞と、頷づき合つて身替りとは、仲光もどきの押ッかぶせと、黑い眼で

睨んで置いたワ。サア、誠の君を討つて渡すまいか。
正行　イヤサ、その儀は。
松　但しは踏み込んで詮議せうか。
櫻井　サア、それは。
松　サア。
正櫻　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
松　返答は、どうだ。
　トこの時奥にて「エイ」と首討つ音して
高徳　八才の若君の御首、打ち奉つてござりまする。
松　なんと。
　ト管絃になり、舞臺は立廻りに、櫻井、お菊を引取る。初霜、正行、下へ下がつて心得ぬこなし。松、上手にためらふ。此うち奥より高德、上下衣裳に改め、首桶を抱へ出て、松が前へ据ゑ、こなしあつて
高徳　六波羅の御上意とは申しながら、神の御末の若君を、討ち奉るは勿體なく、高徳病氣を僞はつて、彼れらにとくと申し付け、御身替りの模樣したれど、御上使の御目鏡にて、斯く顯はるれば是非に及ばす、恐れながら若君の、御首賜はる上からは、とくと御實驗下されませう。
松　ハヽヽヽ、さうなくては叶はぬ筈だ。誠八才の君の、首討つたとあるからは、上使を僞はるその科は、後日の裁許と後へ廻し、君の首から受取らう。
櫻井　すりや、お匿まひなされたる、誠の八才の若君さま。
正行　御首賜はり、御持參とな。
高徳　なか〳〵。
初霜　すりや、兄上が。
高徳　太刀取り致した。
三人　エヽヽ。
高徳　一時も早く御實驗。
松　云ふにや及ぶ。ドリヤ。
　ト松、こなしあつて首桶を引寄せる。いづれも合點のゆかぬこなしにて窺ふ。トヾ、松、首桶の蓋取のける。内に短册ばかりあるゆゑ悔りして
ヤ、こりや八才の君の首と思ひの外、薄墨の短册。
高徳　それこそは若君の御直筆に、記されたる一首の御詠歌。
正櫻　すりや、その短册に。
松　つくづくと思ひ暮らして入相の、鐘を聞くにも父ぞ戀しき。

高德　一首と書いて一つの首。八才の若君の御首。イザ、お受取りあられませう。
松　ヤア、重々なる慮外の高德。一度ならず二度ならず、上使を騙かる上からは。
ト拔きかける。この時正行、ツカ〳〵と寄つて、高德を引きのけ、松をキッと留めて
正行　御上使樣の劍の舞ひ、高德に成り替り、ちくとんばかり下郎めが、お相手になりませうか。
松　何がどうした。
正行　一つの首と御主人の手に、歌の一首は忝なくも、竹の園生の御身にも、御孝心籠められて、寂滅爲樂入相の、鐘を聞くにも戀しきと、父君を慕はせ給ふ、八才の御詠吟。御宸筆同然のお筆。イザ、受取つて歸り召されい。
松　面倒な。誠の首を。
ト首補の短册を松へ突きつけろ。これにて薄ドロ〳〵。松、俄かに五體竦み苦しむこなし。皆々キッとなつて
正行　ハテ心得ぬ。君の直筆、この短册を差しつくれば忽ちに、五體苦しむ御上使樣。
櫻井　神の御末の御筆は、穢れを忌み給ふ。素性は知れた重國さま。

初霜　但しは又懷中に、穢れをいとふ一品ありや。
高德　ナニ八津兵衞、とくと詮議を。心得たか。
正行　合點のゆかぬこの懷中。
ト松が懷中へ手を差込んで、最前の血に染みたる髑髏を引出す。松、それとかゝろ。立廻りよろしく、この時、高德、上手に短册を取上げろ。松を眞中に、櫻井、正行、左右に別れて、初霜もろともに、並みよろしく、ドロ〳〵止まつてキッと見得。
さてこそ血に染むこの髑髏、大切に所持するからは、本名なくては叶はぬ御上使。サア、尋常に名乘つた〳〵。
松　イヽヤ、名乘る覺えはない。以前は町家に千本の松、今は六波羅の見出しにあづかり、氏家中務の次官重國。これより外に名は持たない。その白骨は親の形見。下郎が手には觸れさせ憎い。此方へ渡すまいか。
正行　サア、その親の筐の白骨ゆゑ、父も戀しき若君の、御製に同じ心と見て、詮議の種のこの髑髏。滅多には渡されぬ。
松　さう吐かしやア、重國が。
ト取りにかゝろ。櫻井支へろ。この立廻りのうち、下座バタ〳〵にて、信重逃げて出るを、源吾、追ひ駈け

出て、立廻り手ばしかく、下手に信重を取つて引敷き、
舞臺の立廻り、これと一緒に程よくとまつて見得。

初霜　ヤア、其方は篠村源吾。

櫻井　見れば最前自らが、神樂ケ岡より下向の折柄、捕へさせたるその曲者。まだ白狀に及ばぬ樣子。幸ひの所、密書の宛名、白狀させい。

源吾　奧樣の仰せに隨ひ、奧庭の松ケ枝に、紀明の隙を窺ひ、逃げ出したるを見付けしゆゑ、只今斯くの仕合せ。サア曲者め、斯うなつたからば最早叶はぬ。あれ樣の御前に於て、密書の宛名を白狀いたせ。

信重　いつまで云つても同じ事だ。知らない〳〵〳〵ぞ。

源吾　達て白狀いたさねば、御前に於て眞二つ。

ト引拔いて振り上げる。信重愕りして

信重　ア、、コレサ〳〵、なるたけは白狀せまいと思つたが、命に替へる寶はない。何を隱さうあの密書は、兵馬さまと云ひ合せ、八才の君を失はんとの拵らへ事。

源吾　して、その宛名は。

トこの時、松、ポンと信重の首を切る。これをキッカケに遠責めになる。

松　あの寄せ大鼓は。

高德　兼ねての手配り、最早遁がれぬ。

櫻井　尋常に本名を明かした上

初霜　覺悟して繩かゝりや。

松　小癪な一言。うぬら一々首を列べろ。觀念ひろげ。

ト切つて行く。立廻りよろしく、皆々二重舞臺へ上がり、眞中松、左右に高德、正行、櫻井、平舞臺の上手に初霜、下手に源吾、各々よろしく、キッと見得にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の網代塀、飾りつけ綺麗に、始終遠責めにて道具納まる。

ト下座の方大バタ〳〵にて、松八、松平、松藏、松内、右四人以前の捕り手にて、紅襦袢、襷がけ、これを相手に初霜、襷掛け鉢卷、凛々しき形にて、薙刀を搔込み出て來て、舞臺立廻りよろしく、初霜を眞中に、左右に取卷き、キッとなつて

松内　重國さまの上意を受け、疾より入込む我れ〳〵が、百姓出たちを引替へて、女と見たゆゑ一番に、思ふ心の武隈松内。

松八　これも同じく役者にて、色に目のない唐崎松八。

松藏　一つ捕り手と出かけたは、ちよつと添ひ寢の曾根の
　松藏。
松平　四つ手に組んで睦言も、早東雲の鐘掛松平。サア、
　尋常に
四人　靡くまいか。
初霜　女子と思うて嬲りかけ、手に入れ顔の憎體口、滅多
にお手には相生の、習ひ覺えの小薙刀。ならば手柄に搦
めて見や。
松内　武藝自慢に刃向はゞ、色氣を去つて、ソリヤ。
四人　覺悟。
ト切つてかゝる。初霜、薙刀にて左右へ拂ひ、立廻り
あつて「どつこい」と見得。これより大小入りの賑や
かなる鳴り物にて、初霜四人を相手に華々しきタテあ
つて、右網代塀の前に見得よくとまる。これにて道具
ぶん廻す。
本舞臺、三間の間、眞中に九尺の亭屋體。上げ障子
綺麗。左右は茨垣、石燈籠など見合せ、植込みの模
樣よろしく、爰に松、胴丸網襦袢、小手臑當、凜々
しき形にて、眞中に刀を構へ立ち身。左右に若竹、

夏菊、楓、尾ノ原、肌を脱ぎかけ、襷鉢巻にて、各
各十手を振り上げ取卷いて居る。この見得。遠寄せ
にて道具とまる。
ト直ぐに舞臺先へ立廻つて
四人　動かしやんすな。
松　こりやアうぬらア、なんの眞似だ。
若竹　知れた事。奥樣の仰せを受けて、口說き落してお手
に入れんと、濡れにかゝつたこの春雨。
夏菊　一汗搔いて閨の友、扇子の戀風受けたい夏菊。
楓　紅葉彩る誓紙の誓ひ、命に掛けてこの楓。
尾原　雪より先にしつぼりと、解けて逢ふ夜のこの尾の原。
若竹　サア、尋常に
四人　靡かんせいなア。
松　我れを取卷き遠寄せは、力者を以て搦めん手段、し
や小癪なり一々に、首を並べて立退かんと、用意の出立
ちも案の外、女童に取卷かせしは、我れを蔑する高德が
計らひ。見參遂げて、イデ物見せん。覺悟ひろげ。
ト切つて行く。女形皆々立廻つて、向うへ逃げ込む。
こなたより源吾、種ケ島を構へ
源吾　觀念。

ト筒先を差向ける。松、振り返つてキッと見て、筒先を除ける。源吾付け込む。立廻りちよつとあつて松、種ヶ島を打ち落す。取りに來る源吾をポンと切つてこなし。此うち始終遠寄せ。松、落ちたる種ヶ島を持つて、ツカ／＼と花道へかゝる。よき程に正面の上げ障子の内にて

正行　ヤア／＼、朝敵たる高時が嫡男。相模次郎時行、マアマア待て。

松　なんと。

トちよん／＼にて障子上がる。内に甲胄出立ちにて、鎧櫃に腰を掛けて居る。松、これを見るより手早く火蓋を切る。煙硝にて鎧兜、パラ／＼と落ちて、藁人形になる。松、これを見て恟りして、ツカ／＼と本舞臺へ立戻り、キッとなつて

さては楠が軍略に、置いたるは藁人形の子供遊び。遠目にそれと見違へて、あつたら火蓋を殘念々々。さるにても、小賢く、かゝる手段に計りしは。

ト奥にて

正行　父楠が智略を其まゝ、帶刀正行。

高徳　備後の三郎高徳。

正高　見參々々。

トつゝかけになり、正行、長上下に改め、三方に金の采を載せ、高徳諸ともツカ／＼と出て、左右に立つてキッと見得。

松　さてこそ推量に違ひなく、若黨八津兵衞と僞はつたは、正行であつたよなア。

正行　最早遁がれぬ尋常に、相模次郎時行と、本名明かして繩掛れ。

松　小癪な一言、この重國を相模次郎時行と、見極めたる證據があるか。

高徳　それこそは、高徳が妻と見せたは僞はりにて

正行　女房櫻井、志貴源八。

正徳　急いでこれへ。

ト向う揚げ幕にて

櫻源　畏まりました。

ト又ツツカケになり、花道より櫻井、裲襠を脫ぎ襷鉢卷凛々しき形にて、三方に綸旨を載せ持つて出る。後より若竹、夏菊、楓、尾の原、以前の形にて一腰を搔込み出て來る。その後より志貴源八正武、陣笠、鎧雑兵の形にて、旗竿に菊水の旗を押立て、皆々花道に並

松　よく並ぶ。松、これを見てギョッとして
　さては高德が妻と見せしは、正行が女房。諏訪五郎
と偽はりしも、廻し者であつたよなア。

櫻井　オヽ、推量に違ひなく、高德どのゝ指圖にて、八才
の若君を守護なすうち、名乘り合うたる夫正行。まつた
この綸旨こそ計らずも、源八が手に入つたる御宸筆。

正武　この源八も湊川にて、正成公の御最期より、仰せを
受けて爰かしこ、尋ね求めし正行さま。面體知らねば同
じ屋敷、互ひに包む身の上も、明かし合うたる主從の、
三世の機緣盡きずして、お役に立つた一つの手段。何ぞ
の役に立つべいと、討死なしたる高時が、髑髏を兼ねて
所持したが、禍ひ三年今日の今、謀り事に用ひたる、血
汐の證據に本名明かし、我れに渡せし連判狀。相模次郎
時行と、あり〳〵顯はす上からは、隱しても隱されまい。
一杯食はせた狂言も、敵役から新らしき、その橘の立役
に、引繰り返つた櫓幕。なんと膽が潰れべいが。

正行　なんと時行、かゝる證據のある上は

高德　蘇秦張儀が辯あるとも、云ひ拔けられぬ謀叛の餘類。

正行　サア、尋常に〳〵

皆々　覺悟々々。

松　小賢しくも計りしよなア。よい〳〵、例へば手段に
乘るとても、うぬらが匿まふ八才の君、先達て入込ませ
し、四人の者に虜にさせたワ。

正行　ハヽヽヽ、それとてもいすかの嘴、一々首を並べ
た上、御安體なる若君に、お目見得させん。

高德　妹初霜、急いで早く供奉いたせ。

初霜　畏まりました。

ト天王立ちになり、上げ障子上がる。内に、初霜、裲
襠の形にて、八才の君を抱き、立ち身。こなたにお菊
扣へ居る。松、見て

松　これも手段に落入つたか。エヽ、殘念な。今こそ名
乘る我が本名、耳をさらつてよつく聞け。四海に羽搏つ
大鵬と、一天下に威を振ひし、北條九代の猛將、高時入
道宗鑑が嫡子、相模次郎時行とは、おれが事だワ。

皆々　さてこそなア。

時行　斯く名乘る上からは、楠始め幕下に付け。

正行　ヤア、例へ敵に翼あるとも、斯く取卷けば籠中の鳥。
命取らんは易けれども、再興の新櫓。

櫻井　氏を顯はす楠が、花橘の香を留めて

高德　智を以て顯はす上は

初霜　仁を以てこの場は助け

高徳　勇を顯はす戰ひは、後日の戰場。

櫻井　マア、それまでは此まゝに

時行　うぬらの首は、うぬらに預けた。

正行　次郎時行。

時行　方々。

皆々　さらば。

ト和歌になり立廻りよろしく、上手に正行、櫻井、時行、眞中に高徳、正武。初霜は屋體に其まゝ、女形殘らず並よく、この見得然るべくあつて

正行　これより二番目始まり。

ト打込みにてよろしく

幕

第二番目序幕　十津川宿の場

役名＝杉本佐兵衞　實ハ長崎勘解由左衞門爲基。時行妹、萬壽姫。道者、那智兵衞實ハ和田新兵衞正高。同女房、楠。八瀨藤內。下人、與四郎實ハ恩地左五郎正秀。十津川のお籍。六十六部、了然實ハ妻鹿孫三郎長宗。

本舞臺、三間の間、藁葺きの二重舞臺、一面に雪つけあり。上の方、一間の障子屋體、眞中に納戸口、下座の方、仕掛けの雪丸め。下の方見切りに藪疊み、人の出入りあり。この續きに茶棚の屋體を拵ゑ、正面に般若面を掛く。但し仕掛けあり。すべて熊野海道離れ家の體。幕の內より杉本佐兵衞、木綿やつし袖無し羽織、淺黃の頭巾にて、鬮の繩を持ち居る。那智兵衞、木綿やつし手甲脚絆、笈摺を掛け、藁苞を脊負ひ、これも鬮の繩を持つて居る。熊野道者の仕出し大勢、思ひ／＼の拵らへよろしく、左右に別れ、聟入りの方だ／＼、嫁の方だ／＼と、双方口々に喧ましく云うて居る。この見得、在鄉唄にて幕明く。

佐兵　サア／＼、聟入りは此方へ來たり。聟の鬮だ／＼。

那智　嫁は此方だ。サア、嫁の鬮だ／＼。

ト兩人無性に綱を振り廻して居る。

仕一　なんと皆の衆、聟入りでも嫁取りでも、めい／＼思はるゝ方で片付けて引かつせい。

大勢　合點だ〳〵。
佐兵　サア、思はくが解つたら、信を取つて引かつせい。聟入りは爰だ〳〵。
那智　嫁取りの鬮は爰から出ます。信心の方は綱を引いて、御緣を結ばれませう。
佐兵　オツと待つてもらはう。見れば順禮どのさうだが、わしが聟の鬮を始めたら、おッかぶせに嫁の鬮を始めさしつたが、どう云ふ譯でごんすな。
那智　イヤモウ、譯と云つたら、わしが妹、兩親の菩提の爲、兄弟連れの西國順禮、大慈大悲の妹だから、觀音の引合せで、好い緣を結びたいと思つて、嫁の鬮を始めたのサ。
佐兵　イカサマ、こいつは好い思ひ付きだ。幸ひこの佐兵衞も獨身だ。いま鬮を引いて、女房に貰ひたいものだ。
那智　そりやア遠慮のない事だ。鬮を引いて女房に持つたがよいのサ。おれもまだ獨り身だから。聟入りの鬮を引きたいものでござる。
佐兵　それも遠慮もない事だ。互ひに鬮と相引きとするがよい。
那智　こりやア面白い談合だ。そんなら鬮を始めうかえ。

大勢　早く出さつしやい〳〵。
那智　嫁の鬮だ。引いたり〳〵。
ト兩方、綱を投げ出す。大勢立ちかゝり
仕一　評判の般若面の娘、當らせ給へ〳〵。
仕二　此方は嫁取り順禮娘、當らせ給へ〳〵。南無おむす大菩薩。
トめい〳〵奪ひ合つて、兩方ともに鬮を取る。
那智　わしもその鬮引くのだ〳〵。
ト及び腰に、佐兵衞が鬮を一筋取る。
佐兵　オツと餘りの者には、ふだらくや順禮娘を引くのだ引くのだ。
ト同じく及び腰に那智兵衞が鬮を取る。
那智　惡方果報は其方の信心次第。サア、よくば引いたり引いたり。
佐兵　ソレ、放すぞ。
ト双方扣へし綱を放す。めい〳〵分銅のなき綱を持ち
大勢　南無三、お娘を逃がした〳〵。
仕一　娘の分銅は何處だ。
仕二　聟の分銅は何處だ。
ト口々に喧ましく云ふと、佐兵衞、那智兵衞、めいめ

い分銅の付いたる綱を持ち

佐兵　占めた〳〵、嫁を取つた〳〵。

那智　サア、花聟だぞ〳〵。

仕一　アレ、見さつしやい。聟入りと嫁入りとを、替へ替へにしをつた。

仕二　こいつはイカサマだも知れない。

大勢　それ〳〵。

仕二　したり、般若面の娘だから、やきもち燒きであらう。

仕三　イヤモウ、燒かれても煮られても、あの娘なら

大勢　エヽ、羨やましい事だ。

ト云ひ〳〵下座と向うへ仕出し別れて入る。

那智　なんと、お互ひに縁起も好し

佐兵　顔見世早々から、玉に當ると云ふは

那智　今日からは小舅なり、姫同士。

佐兵　娘を取るやら

那智　聟入りやら

佐兵　めでたい盡しの今日の出合ひ。

那智　祝うて一つ〆めませう。

ト手を打つ。

兩人　ハヽヽヽヽ。

佐兵　時に聟どの、云はねえ事は聞えねえが、此方の娘は般若面の娘と云つちやア、近國近在までも評判の器量だから、ずつしりとした持參がなけりやアならないが、承知かな。

那智　それをぬかつてよいものか。聞き及んだ敷き金の聟取り。コレ見さつせい。この藁苞に、ずつしりと持つて居るのサ。

佐兵　それを聞いて落ちついた。

那智　時に、そのお娘を、見たいものだね。

佐兵　ハテ、さう急き込まないものだ。いま水を汲みに行つたから、戻るでごんせう……して、此方の嫁御は何處に居ますな。

那智　サア、聟どのゝ極まるまで、爰にケロリとして居ちやアてれると云うて、向うの辻堂に待つて居ますよ。

佐兵　どうぞ早く、本尊を拜みたいね。

那智　承知々々。ドレ、戸帳を開きませうか。

ト向うを見て

オヽイ〳〵。

ト招ぐ。てんつゝになり、柵、木綿やつし、手甲、脚絆、笈摺、菅笠を持ち出て、直ぐに舞臺に來て

柵　兄さん、嗜なましやんせ。つい呼び出すと云うて置いて、久しう待たして置かしやんしたぞいなア。

那智　堪忍しろ〳〵。おれに如才はなけれども、聟どのがやう〳〵今極まつたから、つい遲くなつた。

トこちらへ來て

さて聟どの、戸帳が上がつた。近う寄つて拜まつしやい拜まつしやい。

ト柵を教へる。佐兵衛、柵を見て

佐兵　シタリ、見事。こりやア感應守りの一の富を取つた心持ちだ。早く爰へ呼びねえ〳〵。

那智　先づ評判がようて忝ない。サア〳〵妹、聟どのゝ側へ、早く行け〳〵。

柵　オヽ、忙しない。まだ近付きでもないお方の側へ、馴れ〳〵しう行かれるものかいな。

那智　ハテ、呑み込みの惡い者だ。近付きでなくつても、モウ、今夜から抱かれて寐にやアならないに、側へ行く位の事を、案じて居て詰まるものか。早く來い〳〵。

ト無理に手を取り、佐兵衛が側へ突きやる。柵、恥かしきこなし。佐兵衛、いろ〳〵思ひ入れ。柵、モヂモヂして居るゆゑ、那智兵衛、もどかしきこなしにて

那智　ソレ、聟どのへ、御挨拶々々々。

ト柵こなしあつて

柵　不束な田舍者、お氣には叶ふまいけれど、この上ながらお見捨てなく、いつまでも可愛がつて下さんせえ。

佐兵　勿體ない。その美しいお前を見捨てゝよいものか。可愛がると云つちやア、夜晝の分ちはねえ。寢所から出ても引ツつき詰めにして、朝飯から取り膳にして、何でも生きた聖天さまと云ふものサ。

那智　先づこれでおれも安堵した……サア、此方の嫁御は遲いこつたね。

佐兵　さればモウ、歸りさうなものだが。

ト向うを見て

聟どの〳〵、自慢の娘が、向うから、戻つて來ましたぞ來ましたぞ。

那智　ドレ〳〵……イヤア、さらば我れも色どりかけうか。

ト景色取るこなしあつて、出の鳴り物になり、向うより般若面の水茶屋お靜、振り袖やつし、前垂れ襷、下駄掛け、茶見世の娘の拵らへ、下男與四郎、木綿やつし胸前垂れ、下男の拵らへにて、菊之丞とある手桶を差荷ひ出て、花道よき所にて

與四　お靜さん、さう先肩がひよろついては、後が重くなつて、堪るものぢやアねえ。腰を据ゑて歩きなさいよ。

しづ　あの人の無理ばかり云やるわいの。雪道で下駄は重くなるし、そして、あんまり其方が、たんと水を入りやつたに依つて、肩が痛うてならぬわいの。

與四　何を嘘らしい。なんぼたんと入れたとて、痛いわいなうも凄まじい。

しづ　なんの阿房らしい。そんな事は知らぬわいの。

與四　その入れる事を知らぬお前が、昨夜風呂場でコレ與四郎、早く入れて欲しいわいなう。入れて〳〵と云ひなさつた。

しづ　あのマア憎てらしい。其やうな事云やると、水掛けるぞや。

與四　オツと堪忍。糠袋の事であつた。ハヽヽヽヽ。

しづ　ホヽヽ、ようおどけばかり云ふ人ではあるわいの。

與四　先づ御機嫌が直つたと云ふものだ。サア、この勢ひに參りやせう。

　　ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、手桶を下ろし

しづ　オヽ、辛ど。

與四　ハイ、只今歸りました。

佐兵　オヽ與四郎。妹も歸つたか。

與四　やう〳〵今歸りました。何が雪道で辷るのと、お靜さんが入れてたも〳〵と仰しやりまして。

佐兵　ナニ、味に入れてくれ〳〵と云つた。そりや何を入れた。

　　ト與四郎、お靜が方を見て、モヂ〳〵して

與四　ハイ、水の事でござります。ハヽヽヽ。イヤモウ、兎角雪道で口が辷つて、飛んだ事を云はうと致しました。

佐兵　妹、お主に喜ばせる事がある。爰へ來い〳〵。

しづ　兄さん、わたしに喜ばす事とはえ。

佐兵　サア、その喜ばすと云ふは、常々おれが請合うて、逢はせてやらうと云うた、大原で別れた戀人が、聟入りに見えたわいの。

しづ　エヽ、なんと云はしやんす。そんなら兼ね〴〵、逢はしてやらうと云はしやんした、大原で別れた、いとしい殿御が、お見えなされたかえ。

佐兵　なんと嬉しからうが。

しづ　サア、嬉しいは嬉しいが、お顔を見るは今が始め。どうやら改まつて。

ト恥かしきこなし。

佐兵　ハテ、氣の弱い。ナニ恥かしい事があるものだ。聟どのも待ち兼ねてだ。早く行け〳〵。

ト お靜、モヂ〳〵して居る。與四郎は此うち、本火にて茶の下を焚いて居る。

那智　小舅、どうだ〳〵。

佐兵　首尾は上々。併し、少々恥かしい心持ちだ。なんとどんなものか。ちよつと見な〳〵。

ト 那智兵衞、見ぬ振りにて、お靜を見る思ひ入れ、よろしくあつて

那智　小舅々々、云ひ分なし〳〵。

佐兵　代物は誂らへ向きだて。

那智　イヤモウ、恰好から器量なら、濱村屋に生寫しサ。

佐兵　これでは敷金も惜しくはあるまい。

那智　勿論の事〳〵。

佐兵　やきもち位は頓着はあるまい。

那智　勿論の事〳〵。

佐兵　縫ひ針仕事はきつい嫌ひだが、頓着はあるまい。

那智　勿論の事〳〵。

佐兵　飯を炊く事も嫌ひだが、頓着はあるまい。

那智　勿論の事〳〵。

佐兵　寢床も此方で取つて遣つて、毎晩按摩も取らねばならぬが、頓着はあるまい。

那智　勿論の事〳〵。

佐兵　それさへ極めれば、祝言の一段になつた。サア妹、早く來ねえか〳〵。

ト お靜、矢張りモヂ〳〵して居る。

ムウ、聞えた〳〵。こりやァ現在、兄の仲人だから、恥かしいも尤もだ。よい〳〵。

ト 柵が側へ來て

女房ども、早速ながら頼みたい。おれが妹の祝言だ。おれが仲人では恥かしいと見えるから、お主は女同志だ。近付きになりながら、仲人をしてくりやれ。

柵　そりやァマア、めでたい事でござんすなア、どうで妹御さんには、近付きにならねばならぬが、その妹御の聟どのは、どなたでござんすえ。

佐兵　ハテ、知れた事、聟どのはお主が兄貴サ。

ト 柵、悔りして

柵　エヽ、アノ兄さんと。

佐兵　なんだ、キヨト〳〵しい。その顏はなんだ。

橘　あんまりで物が云はれぬわいなア。
佐兵　なんの、兄貴が女房を持つが、さう何も不思議な事でもない。サア、早くしや〳〵。
橘　イヽエ、否でござんす。
佐兵　ナニ、否だ。
橘　アイ、否も否、大抵や大方の否ぢやござんせぬ。
　トぴんとする。佐兵衛、合點のゆかぬこなしにて
佐兵　ハヽア、此奴、仲人は蟲が嫌ふと見えるわえ。大事の女房に癪を發させてはならぬ。
　トお靜が側へ來て
妹、おらアズッとこちらへ來て、見えぬやうにして居るから、早く聟どのゝ側へ行きや〳〵。
しづ　サア、行くは行くがな。此方へ向いて居やしやんすかえ。
佐兵　イヤ、聟どのは、あちら向いてた〳〵。
　ト佐兵衛、顏にてあちら向けとして見せる。那智兵衛、呑み込んであちら向く。
お前がズッと此方へ來て、わたしが方を見る事はならぬぞえ。
　トこのせりふにて、ソロ〳〵後すざりして、那智兵衛が方に寄る。
佐兵　合點だ〳〵。
しづ　わたしが云ふ事聞かぬやうに、耳を塞いで居やしやんせえ。
佐兵　呑み込んだ〳〵。
　ト耳に手を當てる。那智兵衛、折々こちら向いてお靜を見る。佐兵衛、あちら向けと、顏にてして見せる。この模様幾度もあるべし。
しづ　目も塞いで居やしやんせえ。
佐兵　斯うか〳〵。
　ト兩手にて目を隱す。
しづ　それでは云ふ事が、聞えるわいなア。
佐兵　オッと、斯うか〳〵。
　ト耳へ指を入れ、目と一所に押へる。お靜、これより段々那智兵衛が側へ來て、こちら向き、ヂッとこなし。那智兵衛少し氣後れのこなしにて、モヂ〳〵する。橘は、つん〳〵とあちら向き、拗ねて居る。與四郎、最前より、腹の立つ思ひ入れにて、滅多無性に火吹竹にて火を吹いて居る。お靜こなしあつて
しづ　申し、あなたは、なぜ物を仰しやつて下さりませぬ

ぞいなア。

那智　物は疾から云ひたいけれど、初會から口開いたら、氣の利いた風な奴ぢやと、お前に笑はれうと思うて。

しづ　そりやあなた聞えませぬ。いつぞや都で不思議な逢瀨、この世は愚か未來までもと、思ふ間もなう本意ない別れ。力ないやら悲しいやら、泣いて暮らせし長の年月、御無事なお顏見るやうにと、祈りし神の御利生にて、廻り逢うたるわたしが嬉しさ。推量なされて下さりませいなア。

ト泣く。那智兵衞、合點のゆかぬ思ひ入れにて

那智　それはマア、御笑止千萬な儀でござりまする。

しづ　ソレ、其やうに餘外々々しいお詞、お恨めしう存じまする。

ト那智兵衞、合點のゆかぬゆゑ、佐兵衞が方を見る。佐兵衞、よい加減に挨拶しろと、仕方して見せる。那智兵衞呑み込み

那智　今日は冷たい物が、たんと降りましてござりまする。

ト眞面目に云ふ。與四郎、打盤にて、糊刷毛物を打つて居る。

しづ　ほんにわたしは片時も、あなたの事を忘れた事はござりませねど、定めてあなたはその夜の事、お忘れなされたでござりませうな。

ト佐兵衞、いろ／＼あせる思ひ入れ。那智兵衞、モヂモヂして

那智　ハイ、どうかお見外れ申しましてござりまする。

ト佐兵衞、ぢれて、忘れはせぬと云へと、仕方して見せる。那智兵衞呑み込み

エヽ、成る程／＼、飯食ふ事とお前の事は、片時も忘れた事はござりませぬ。

ト佐兵衞、これにて落ちつくこなし。與四郎。いろいろ腹の立つ思ひ入れ。

しづ　あなた、それが御眞實なら、また逢ふ上の筐をと、取交したる貝の片し。お見せなされて下さりませいなア。

ト那智兵衞、これに當惑して、また佐兵衞が方を見る。佐兵衞もこれには困りしこなしにて、頭を掻いて居るゆゑに、那智兵衞、ウロ／＼する。

那智　サア、その取交した物は

しづ　その片しは。

那智　鼠にでも引かれたか知らぬ。

しづ　そりやマア、なんの事ぢやぞいなア。

那智　有やうは、とんと知らぬのサ。
しづ　エ。
那智　最前から間に合せの返答はして居たが、そのマア都で逢うたの筐だのと、一つも此方に覺えのない。いま突出しの花聟サ。
しづ　エヽ、兄さん、こりやアマア何の事ぢやぞいなア。如何に殿御の顏を知らぬと云つて、あんまりな嘘の吐きやう。胴慾でござんすわいなア。
佐兵　ハテ、現在抱かれて寐る、お主でさへそれだもの。ましておらア、思ひ違ひは有うちや
しづ　ぢやと云うて、恥かしい。姫御前の樣々と、問はず語り、面目なうござんすわいなア。
ト逃げようとする。那智兵衞留めて
那智　オツと、お前を逃がして詰まるものか。大枚の敷金を持つて來たからは、祝言せにやア男が立たない。マアマア待ちなさい。
しづ　イヽエ、例へどのやうな事があつても、外の殿御を持つ事は否でござんす。爰放して下さんせいなア。
那智　イヤ放さぬ。たつた今だ。お前の方から嚙みつくやうに云つて置いて、如何に男の引違ひだと云つて、せめて門口立てなといきなさい。あんまりだ。
佐兵　さうだ〳〵。ひだるい時にまづい物なしと、サア、なるべく辛抱するがよい。
しづ　エヽ、阿房らしい。否ぢやわいなア。
那智　否でも應でも斯うなつたら、もう、堪らねえ。
ト無理に抱きつく、この時、與四郎、那智兵衞を引きのけ、眞中へ入つて
與四　さう巧くはなるまい。
那智　わりやアなんだ。
與四　おらア聟だ。
那智　ナニ、聟だ。
與四　オヽよ。
那智　そりやア誰れが聟だ。
與四　このお娘の。
那智　イヤア。
ト愕りする。
佐兵　ヤイ〳〵與四郎、大事の聟どのを差措き、わりやアなぜ邪魔をするのだ。
與四　コレ、旦那どの、イヤサ、佐兵衞さま、おれを差措き、外に聟を取つて濟むか。おれを遣ふ時なんと云はし

つた。行く〳〵はお靜が聟にするから、給金なしに飯も炊け。風呂も焚け、茶も沸かせ、掃除もしろ、按摩も取れ、水も汲め、洗濯物から糊つけ物、女の事まで請合うて、此やうに働らくは何の爲。このお靜さんを女房に持ちたいばつかり。それになんだ、外に聟を取らうとは、今までおれに無駄働らきをさせるのか。金輪際、外に聟を取らせる事は、おれがさせぬぞ。

那智　サア〳〵、これは只事ぢやないわえ。

佐兵　ハテ、よいわいの。何事もおれが呑み込んで居るから、默つて居たがよい。

與四　イヽヤ、默つて居られぬ。お靜さんの、鹽梅をほつかり食はれ、おれには食はせまい。

那智　コレサ〳〵、ありやアどう云ふ譯だ。

佐兵　ハテ、いゝのサ〳〵。何もかも、おれが呑み込んで居るのサ。

しづ　ほんに今までは、何を云うてもわしが云ふ事は、心よう聞いてたもると思へば、そんなら其方も。

與四　面目次第もねえ。

しづ　コウレ。

那智　サア〳〵、こりやアうつかりとして居たら、祝言が何處へ轉宅せうも知れねえ。

ト　お靜が側へ來て

サア〳〵お娘、邪魔の入らないうちに、祝言してしまふがよい。此方へ來な〳〵。

ト手を取りにかゝる。與四郎、引きのけ

與四　イヤ、祝言はならない。

那智　なぜならない。

與四　知れた事だ。先約の聟樣だ。給金を元手に入れて居る戀聟だ。おれに引ッついてくんな。

ト　お靜に引ッつく。

那智　おきやアがれ。此方は給金位ぢやア濟まねえ。大枚の敷金を持つて來た花聟だ。祝言財産が餘ッぽど重い。おれに引ッつきな〳〵。

ト　體を摺りつける。お靜、煩さきこなし。

柵　こりやア又、あんまりぢやぞえ〳〵。さう見せ付けたら此方も又、負けては居ぬ。こちの人、引ッついて下さんせ。

ト　佐兵衞が側へ引ッつく。佐兵衞、嬉しきこなしにて

佐兵　こりやア有り難い。早くつげ〳〵。

ト　茶碗を持ち、德利を柵が前に置く。那智兵衞、柵を

見て腹の立つこなし。

那智　見せつけるな〳〵。いよ〳〵忌々しくなつた。お娘、おれに引ッつきな〳〵。

與四　お靜さん、おれが方へ引ッつきな〳〵。

ト體を摺りつける。

しづ　お前方も、あんまり好い加減に、嬲つて下さんせなア。

那與　ハテ、さう云はずと、引ッつきな〳〵。

ト無性に摺りつける。お靜、腹立てる。

桐　サア、此方も引ッつくぞ〳〵。

ト佐兵衛に引ッつく。

佐兵　サア、おつぎなさい〳〵。

ト茶碗に受ける。桐、那智兵衛を見ながら滅多につぐ。佐兵衛、無性に續けて呑む。

しづ　こんな所に居やうより、ちやつと奥へ行かうわいなア。

ト立つて行かうとする。與四郎留めて

與四　全體、お前を爰へ置くからだ。此方へ來なさい來なさい。

ト手を取り、行かうとする。那智兵衛同じく手を取り

那智　さうはさせねえ。此方へ來な〳〵。

ト下座の方へ連れ行く。

與四　イヤ、此方だ〳〵。

ト下の方へ引寄せる。那智兵衛また引ッ張る。双方右のせりふにて、引ッ張る事幾度もあり、トヾ、よき程にてお靜、兩人を引放して

しづ　オヽ、辛氣。

トついと奥へ走り入る。兩人これを知らず、互ひに手を引ッ張り合ふ。トヾ草臥れたこなしにて、兩人べつたりと下に居て

那與　お靜さん、お前も又あんまりだ。

トこの拍子に互ひに顔見合せ

與四　なんの事だ。

ト那智兵衛を突き飛ばして奥へ入る。

那智　飛んだ目に遭はせ居つた。

ト此うち佐兵衛、醉うたるこなしにて、ふう〳〵眠る。桐、思ひ入れあつて

桐　こちの人。

那智　ヤ。

ト双方一度に顔見合せ、桐、恟りして

柵　兄さん、お前ぢやないわいなア。
那智　成る程、おれはお主の兄であつたな。
佐兵　なんだか怪しいな。
柵　何がいなア。
佐兵　イヤサア、味に醉うたと云ふ事よ。
　ト三人よろしく思ひ入れあつて
那智　すりやア、今の端た酒に。
柵　醉はしやんしたかえ。
佐兵　イヤモウ、醉うたと思へば醉うても居る。醉はぬと思へば
那智　本性か。
佐兵　マア、そんなものサ。
柵　ハテ、得手勝手な酒呑みぢやなア。
佐兵　これは〳〵、結構なお譽めのお詞、有り難う存じ奉る。などとやつたものよ。
柵　すりや、矢ツ張り醉うて居やしやんすのぢやなア。
那智　酒の醉ひ本性違はず、妹聟どのへ其方が手土產の一品、杉の本にて拾ひしとあるからは、佐兵衞どのへ、ナ、合點か。
　トこなし。柵、思ひ入れあつて

柵　心得ました。
　ト合ひ方になり、柵、懷中より一番目にて、正行より和田新兵衞に渡したる小柄を出し
こちの人、いよ〳〵本性でござんすかえ。
佐兵　奥方の申し分だが、あの位な酒に碎けて堪るものか。生眞面目々々々々。
柵　ムウ、本性なら、わたしが嫁入つた手土產、これを見て下さんせ。
　ト小柄を差出す。
佐兵　ナニ、手土產だ。そりやア御叮嚀だね。さらば拜見いたさうか。
　ト小柄を手に取上げ
この小柄は。
　トぎつくり思ひ入れ
柵　銘は國長、赤銅に祐乘が作の三日月。
那智　慥かに覺えの秋の野に伏す、猪の床の眠りを覺まし、二世の固めのその小柄。しつかりと落手召されい。
柵　こちの人、なんと好い手土產ござんせうがな。
　ト双方より詰め寄る。佐兵衞、思ひ入れあつて
佐兵　イヽヤ、好くねえ。

柵　なんと。
佐兵　根ッから好くねえ嫁御の手土産、なぜと云つて見たがいゝ。おれは高で水茶屋の亭主だ。ハイ、ネ、その水茶屋の亭主が、結構な小柄を貰つて何にするものか。そこで好くねえなどとやつたものよ。御免なされ〳〵。
ト酔うたるこなし。
柵　すりや、この小柄は、望みにはござんせぬとな。
佐兵　イヤモウ、小柄より、二合半酒が有り難いのサ。兎角砕けにやア面白くねえ。
ト柵へしなだれる。柵、こなしあつて
柵　こりやお前、酔が廻つたぞえ。
佐兵　新枕の濟むまで、滅多に酔つて詰まるものか。
ト始終巻き舌にて云ふ。
那智　例へ酔うても本性に、忽ち戻る持つ人の魂ひ。酔醒ましのこの良藥、小舅どの、望みにないか。
柵　こちの人、どうでござんすぞいなア。
佐兵　どうと云つたら嬶衆、早く寢さしてくれぬか、どうぢやい〳〵。
ト引寄せて抱きつく。
柵　エヽ、こりや何するのぢやぞいなア。
ト振り放す。
佐兵　何するとは、男が女房に抱きつくを、外から何とぞ云ふ人があるか。
柵　エ。
トぎつくり思ひ入れ。
佐兵　イヤサ、どこぞそこらに、腹立てる奴があるか。
柵　サア、それはな。
佐兵　よもや腹は立たれまい。
ト那智兵衞、柵、こなし。佐兵衞、氣を變へ
なんと兄貴、そんなものぢやアごんせぬか。
那智　イカサマ、煮て食ふか燒いて食ふか、女房は男の儘。
佐兵　すりやア、いま目の前で抱いて寐ても
那智　何ともないのサ。
佐兵　アノ、抱いて寐ても。
那智　それ程の、野暮な兄貴でもねえのサ。
佐兵　面白い。サア、嬶、寐よう。
柵　エヽ。
佐兵　エヽとは。兄貴は粹なり、遠慮はない。サア、いま爰で、しつぽりと抱かれて寐やう。
ト無理に引寄せ、嫌らしくする。那智兵衞こなし。柵

もよろしくあつて

梱　サア、寐るは寐るけれど、ナ、なんぢやわいなア。オヽ、さうでござんす。なんぼ粹な兄さんでも、差合ひと云ふ事がござんす。爰で寐ようより、奥でしつぽり寐るわいなア。

佐兵　ムウ、すりや、現在夫の、イヤサ、現在兄貴の前ぢやに依つて、奥で寐ようと云ふのか。

梱　アイ。

佐兵　こりやア、さうありさうなものだ。

ト那智兵衞へ心意氣。那智兵衞もこなしあつて

那智　ハテ、かけ構はぬ事を、いらぬ遠慮な。

佐兵　ハテ、白化けた兄弟。イヤサ、兄弟の差合ひもあれば、女夫の固めは奥の納戸にて、女房ども。

梱　こちの人。

佐兵　兄弟、後に逢ひませう。

ト唄になり、思ひ入れあつて佐兵衞、奥へ入る。後へ兩人殘りこなしあつて

梱　新兵衞どの。

那智　女房、佐兵衞が今の詞の端々。

梱　どうやら二人が身の上を

那智　探る底意は慥かに父の

梱　敵とあれば。

ト奥へ行かうとするを、那智兵衞留めて

那智　コリヤ、急く所ではない。とくと實否を訊した上。

梱　すりや、それまでは。

那智　妹。

梱　兄さん。

那智　奥へ來い。

ト唄になり、ツイと兩人、奥へ入る。暮れ六ツの鐘鳴る。雪、頻りに降り出す。誂らへの六部の出の鳴り物になり、向うより廻國修行者了然、六部の拵らへ、笈を脊負ひ、錫杖を突き、靜々出て、花道よき所にて四方を見渡し

了然　雪、閭郊の徑を埋め、烟忽ち孤邑を求む。所は正に紀伊の國、名草に隣る野守の一つ家。行き疲れたる雪の夜の、雪を防ぎの假の宿。假の渡世を佛の導き。十方世界無東西。泊り求めて一夜さの、他生の緣を結ばうか。

ト矢張り右の鳴り物にて、靜々と舞臺へ來ると、西の方松の雪パッと散り、烏數多立つ。了然これをキッと見て

野に伏兵ある時は、歸雁行を亂す。時は黄昏、諸鳥塒に歸るべきを、前後亂して立去りしは、ムウ、正しくあの藪蔭に、曲者忍ぶに極まつたわえ。

ト思ひ入れあつて、木蔭へ寄ると、合ひ方になり、松の雪又パッと散ると、八瀬藤内、白き忍びの形、白頭巾同じ手甲股引きの形にて、松ヶ枝に現はれる。了然こなし。藤内、ソロ〳〵下りて

藤内　主人勘解由左衛門爲基の隱れ家は、名草を越える廣野の一つ家。

トこの家を見て

慥かにこの家。ソレ。

ト這ひ込まうとする。了然ズッと寄り、錫杖に引返し

了然　曲者待て。

ト引廻す。藤内、了然をキッと見て

藤内　わりやア、慥かに和州にて

了然　不思議に逢うた天竺浪人。

藤内　大事を知つたうぬ。生けては置かぬ。

トまた切つてかゝり立廻り。程よく錫杖にてポンと當てろ。藤内ウンと轉ける。この拍子に呼子を落す。了然拾ひ上げ思ひ入れあつて

了然　彼奴が主人と口走つたは、この家の主、本名爲基。すりや、その時新左衛門を仕留めしは、正しく。

ト思ひ入れあつて、戸口に寄せ、呼子を吹く。奥より佐兵衛ツカ〳〵と出て、あたりを思ひ入れあつて、戸口から

佐兵　合圖の呼子は、藤内か。

ト戸口を明ける。了然、ちやんと鉦を叩く。佐兵衛悔りして

了然　思ひがけない松蟲の音。わりやア誰れだ。

大乘妙典の志し、諸國を廻る六部の修行者。一夜の宿が申し受けたい。

佐兵　イヽヤ、宿はしない。所の法で獨り旅を泊る事は、堅い法度だ。

了然　ハヽヽヽ、仙法修行の六十六部、只の旅人とは格別。是非とも報謝にあづかりたい。

佐兵　ハテ、ならない。次の村へ行つて頼まつしやい。

了然　イカサマ、掟とあるを、達てとも云はれまい。なんとせう。和州六ッ田のあたりまで行かずばなるまい。

ト佐兵衛ギョッと思ひ入れあつて

佐兵　修行者、待たつせえ。

了然　なんぞ用がござるか。
佐兵　お宿、報謝いたしたい。
了然　ヤ、なんと。
佐兵　和州六ツ田までは、凡そこれより六十里。日暮れて急ぐ修行者の、足元が笑止な。
了然　すりや、それゆゑに今宵一夜。
佐兵　報謝いたすも佛の忌日。
了然　寢込みをすつぱり。
佐兵　ヤ、なんと。
了然　その手もあるのサ。
佐兵　未然を流石は疵持つ足。すりや、その夜の一部始終、詳しく知つたは
了然　空行く月と、某ばかり。
佐兵　すりや、今日の只今まで。
了然　口外せざるは身共が寸志。
佐兵　なんの由緣も慥かに返禮。
了然　露の宿りに引替へて
佐兵　暮れの伏屋もせめての報恩。
了然　これも他生の
佐兵　御遠慮なう。

了然　然らば一夜を
佐兵　明日までゆつくり
了然　何かの話しを
兩人　致さうか。
ト合ひ方になり、了然、上へ通り、笈を下ろし、こなしあつて
了然　早速ながら御亭主へ、御相談の上、お預け申したい品がござる。
佐兵　ムウ、預けたいとは。
了然　只今、お目にかけう。
トあたりを見廻し、思ひ入れあつて笈を開く。中より時行娘萬壽姬、振り袖着流し、姬の拵らへにて出る。佐兵衞見て
佐兵　すりや、預けたいと云はつしやる一品は。
了然　これでござる。
佐兵　して、この女は。
了然　拾ひました。
佐兵　ナニ、拾つたとは。
了然　攝津の國岸野の村境、日暮れて通る森蔭の、月洩る光りに女の姿、正しく狐狸の妖怪と、引ツ捉へてよくよ

く見れば、他生にあらず、斯くの如き美少女。しかも健か。仔細あらんと尋ぬれども、皆目の啞と見え、云はず語らず不通の難病。ナ、爰が談合。この病を本腹させ、速かに物云はせなば、立身の蔓にもなりさうなこの一品。なんと御亭主、一分別、枕を砕いて見さつしやらぬか。

ト佐兵衞、思ひ入れあつて

佐兵　如何にも面白さうな談合。併し、差當つてこの難病、本腹させる妙藥は。

ト思案する。

了然　イヤ、一應でこの良藥は、思案に落ちまい。

佐兵　成る程、とつくりと胸に手を置き、今宵中に良藥を

了然　掘り當てれば互ひの立身。

佐兵　國の七つや十四五は

了然　匙の加減の

佐兵　配劑ばかり。

了然　互ひの工風は

佐兵　夜明けるまで。

了然　然らば御亭主。

佐兵　修行者どの。

了然　御馳走にあづかりませう。

ト唄になり、思ひ入れあつて、了然、障子屋體の中へ入る。佐兵衞殘り

佐兵　我が一大事を知つたる修行者。生け置いては後日の妨げ。騙し寄せて討つて捨てるか、我が病の根を斷つ良藥。

ト萬壽姬を見て

その良藥で思ひ出した。この啞を本腹させなば、互ひの立身となるべき女と、預けたる彼奴が心底。ハテ、どうあるな。

トきつと思案する。萬壽姬、素知らぬ顏にて居る。この時、藤內、フト心付きたるこなしにて

藤內　大事を知つたる曲者。うぬ。

ト滅多に切り立て、心付き

南無三、曲者を取逃がしたか。エヽ、口惜しい。

ト無念のこなし、この物音にて

佐兵　それに居るは何者だ。

藤內　さ云ふ聲は、御主人爲基公。

トこれにて佐兵衞、高灯りで藤內をとつくり見て

佐兵　八瀨藤內、無事であつたか。

藤內　ハツ、御主人にも御健勝の御高顏の体を拜し、如何

ばかり大慶至極に存じ奉ります。

佐兵　いつぞや和州六ッ田に於て、和田新左衞門をぶッ殺し、蛇返しの劍、まんまと奪ひ取つたるところ、俄かの人音、見咎められては一大事と、劍は汝に預けし儘、その場を立退き、其方が便りを相待ち居つたわやい。

藤内　拙者とてもその場よりお別れ申し、河州山州に身を忍び、主人の在所尋ぬるところ、蛇返しの詮議嚴しく、何卒早く劍をお手渡し申さんと、心砕きし甲斐あつて、今日只今巡り逢ひし藤内が喜び。御推察下さりませう。

佐兵　して、預け置いたる蛇返しの劍は。

藤内　即ちこれに。イザ、お受取り下さりませう。

ト袋入りの劍を渡す。佐兵衞取つて

佐兵　出かした〱。この劍を以て人を懷け、古主入道高時の、恨みを散ぜん兼ねての大望。大願成就近きにあり。併し今日この家へ、入込みし順禮兄弟。彼奴こそ和田新左衞門が忰夫婦と、睨んだ眼に相違はない。この蛇返し、身が所持するは危ない危ない。ムウ、ソレ、屈竟の雪こかし。藤内、合點か。

藤内　心得ました。

ト蛇返しを雪こかしの中へ程よく隱す。了然ちよつとこれを見て入る。

よろしく計らひましてござります。

佐兵　ムウ、それでよい。

藤内　して、御大望の根城の繩張り、御工風は如何でござりまするな。

佐兵　その儀も兼ねて計らひ置く。當所待乳山を切り開き、岩田川の流れを引受け、素破と云はゞ岩城の、森の樹木を伐り倒し、人馬の足を惱ますには屈竟の地理。先達て語らひ置きし者どもに申しつけ置く。汝これより彼の岩城に立越え、繩張り萬端入用金、今宵のうちに送り遣はすと、通達いたせ。

藤内　畏まつてござりまする。

佐兵　必らず人に見咎められぬやうに、早く行け。

藤内　ハツ。

ト時の鐘にて、藤内、向うへ走り入る。佐兵衞これを見送つて

佐兵　これも好し。

トこの時フト萬壽姫を見て

見りやア、まだ其處に居たな。物が云へねえものだから、われが事は忘れて居た。ハヽヽ。コレ〱よく聞けよ。

われが今、素性を殘らず云つてくれると、立身出世の種にもなる事だ程に、有やうに云つて聞かせろ〳〵。

ト萬壽姫、構はず向うを見て居る。佐兵衞、つく〴〵見て

ア、何を云つても片手使ひだ。ハテ、困つたものだ。この病を治する良藥。

トちよつと思案して

イヤ〳〵、廻りくどい立身より、古主相撲入道高時公の弔ひ軍、見所のあるあの修行者、味方に付けるが上分別。ソレ。

ト奥へ行かうとする。

萬壽　そりや惡からう。

ト佐兵衞ギックリとまり、あたりを見て

佐兵　いま物を云つたは女の聲だが、あたりに誰れも女は居ず、よもや唖娘が物も云ひもせまいし。

萬壽　イヤ、留めたは自ら。

佐兵　ヤア、わりやア物が云へるな。さては最前よりの一大事、唖と思つて油斷の口外。聞き知つたれば生けちやア置かねえ。覺悟しろ。

ト刀押ッ取り切りかける。

萬壽　主人に向ひ無禮の刃向ひ。長崎勘解由、逸まるな。

佐兵　年來包む我が實名を知ると云ひ、主人と名乘るその仔細は。

萬壽　尤もの不審。自らは其方が古主、相撲入道が娘萬壽と云ふ者。

佐兵　すりや、噂に聞きし萬壽姫さまなるか。

トあたりを見、萬壽姫を上座へ直し

ハ、ア。

ト平伏して

存じ寄らざる亡君の、忘れ形見の姫君樣。先刻より無禮の段々、眞平御免下さりませう。さるにても合點參らぬは、お大切の御身にて、修行者に伴はれ、この邊土へ、お越しありしその仔細は。

萬壽　父上の弔ひ軍と、兄次郎時行さま、御旗揚げに勝利を失ひ、家の子郎黨散り〳〵ばら〳〵。剩さへ兄上の、御行くへとても定かならず、爰や彼處と尋ぬるうちも敵の中、やう〳〵忍び岸野の里、行き暮れて居た所へ、あの修行者に見咎められ、情をかけて素性を問へど、分明ならぬ人心と、樣子を探る作り病。其方も誠の病と思ひ、油斷に思はず身の大事を、語るを聞けば味方の一人。常

常兄上のお話ありし、長崎勘解由左衞門爲基。この上ながら日蔭の自ら。必らずともに見捨てぬやうに、頼むぞや。

佐兵　ハヽア、有り難き姫君のお詞。我が年來の大望、何卒兄君時行公と合體なし、亡君の弔ひ軍と、忍び〳〵に軍勢催促。お氣遣ひなされまするな。兄上の御行くへ、草を分つてお尋ね申し、追ッつけ御代に逢はせませう。お心安く思し召し下さりませう。

萬壽　主從とは云ひながら、初めて逢ひし其方の忠義、嬉しうござるぞや。

佐兵　御家來の拙者に、お禮には及びませぬ。萬事は後程。暫しのうち、あの押入れ。

萬壽　そんなら爲基。

佐兵　イザ、お越しあられませう。

ト萬壽を押入れに入れる。了然ちよつと見る。

ドリヤ、寢酒でも引ッかけうか。

ト唄になり、ツイと奥へ入る。了然、そろ〳〵出て來て、佐兵衞が隱したる劍を取り、思ひ入れあつて火吹竹を取替へ、蛇返しをちよつと戴き、元の所へツイと入る。と雪頻りに降り出す。奥よりお靜、好みの下着の形にて、行燈を提げて出て來て

しづ　ほんになんぢやゝら、今日程知らぬ人が來て、アタ嫌らしい女房の祝言のと、アタ聞きともない情ない、由ない事に今日の日を、昨日の儘の寢亂れ髮。仇に暮らしてのけたわいなア。兄さんの來ぬうちに、ドレ、髮を梳き上げうか。

ト櫛箱、鏡立てを直し、髮梳きにかゝる。

獨吟〽花も雪も拂へば淸き袂かな。ほんに昔の昔の事よ、我が待つ人も我れを待ちけん。いつぞや都で假の契りに、一夜の枕交せし殿御。いづくの誰れとも白む夜を、待たで別れし仇枕。お顏も知らねばお名も知らず、たゞ烏羽玉の雲水の、後を慕ふ心にて、當途も波に浮寐鳥。

トこの唄の切れに時の鐘鳴る。お靜少し驚きし思ひ入れにて

〽鴛鴦のおとりに物思ひ寐の、氷る襖に啼く音もさぞな。さなきだに心も遠き夜半の鐘。

〽聞くも淋しき獨り寢の、枕に響く霰の音も、もしやといつそせきかねて。

ト右文句のうち、お靜、段々後の髮の筋を立てにかゝ

ろ。此うち、與四郎出かゝり、お靜に寄り添ひたき心にて、いろ〳〵思ひ入れあつて、よき所にて合せ鏡をツッと取り、お靜が後へ當てがふ。お靜知らず、髮の筋を立つて居る。續きの唄

〽氷る泪の氷柱より、辛き命は惜しからねども、戀しき人に罪深く、思はぬ事の悲しさに、捨てた憂、捨てた浮世の山葛。

トこの文句一杯に、兩人よろしくある。唄のとまりに兩人顏見合せ

與四郎、悔りしたわいなう。

與四　なんとお靜さん、氣の利いた今の仕打ち。どんなものだえ。

しづ　サイナウ、其方の氣の利く百分一、氣を利かして來てくれたら、罰が當るぢやあるまいし。

與四　お前も空の星を數へるやうな、男に焦れて辛苦せうよりは、わしが思ひを叶へてくれたがよいわいなう。

しづ　エヽ、こちやそんな面白い心ぢやないわいの。

與四　そんなら、どのやうに口說いても。

しづ　貞女は兩夫に見えずとやら。

與四　面白い。もう今までの下人の與四郎では口說かねえ。さつぱりと主從の緣を切つて、否と云へば命づく。馴れねえ役で口說からわえ。

ト大胡坐になる。此うち柵出かけ居て

柵　その戀は、わたしが取持ちませう。

與四　ムウ、こりやア最前の順禮どの。

しづ　この戀を取持たうとはえ。

柵　どうやら若い達引の、波風立たぬこの場の納まり。觀音薩埵の佛力で、丸う行くまいものでもござんせぬ。

與四　すりや、お主がこの戀を。

柵　つい一言で濟む事も、口先でちよつぼくさ。十言に及べば叶ふと云ふ、文字に當りの人前も、さて斯う〳〵と女子同士、話せば話す鸚鵡石、アイと云ふ、ナ、ついアイと口說けば落ちる瀧津瀨の、淀まぬ辯舌さら〳〵と、埒を明日まで待たせはせぬ。わたしに任せて置かしやんせいなア。

しづ　ア、コレ、滅多な事、請合つて下さんすなえ。

柵　ハテ、案じさつしやんすな。一寸延びれば尋とやら、ナ、サア、廣い世界に狹い戀する戀の癖。あの人ならで外にないと、二心なき一筋の、心の糸目とつくりと。

與四　結ぶの神を思ひの外、ほんのこれが結ぶの佛。

樒　順禮功德に色好い返事。
與四　紀三井寺だと、待つて居やうか。
　ト唄になり、思ひ入れあつて、與四郎、奥へ入る。樒、後見送り溜息して
樒　なんと、これで閾へが下りたでござんせうな。
しづ　お前のお庇で落ちついたわいなア。
　トこの時、那智兵衞出かけ居て
那智　イヤ、滅多に落ちつかれまい。
しづ　お前は最前の
那智　敷金の花聟、女中、この戀を、どうぞ取持つてもらひたい。
樒　エヽ、アノ、現在の女房の、わたしに……イヤ、現在の妹に。
那智　如何にも。
樒　そりや又、あんまり。
那智　あんまりでも針立てでも、利目の見えねえ嫁の病症。配劑がしてもらひたい。
樒　否でござんす。
那智　なんと。
樒　よう思うても見やしやんせ。なんぼ阿房な女房でも、現在夫の取持ちを、しさうなものか、ならうかいなア。
那智　そりや誰れが夫の取持ち。
樒　エ。
那智　其方が夫はこの家の主。この取持ちはこの家の主が。
樒　サア、それはな。
那智　かけ構ひないおれが取持ち、なぜならねえ。
樒　サア、それは、丁度お前の內儀さんが、今のやうに腹立てゝござんせうと、推察の名代悋氣。さう云ふ慥かな內儀さんのある取持ちは、えゝせまいわいなア。
　ト此うち了然、出かけ居て
了然　悋氣嫉妬に氣遣ひない。世を捨てた六十六部、お靜女郎の戀の取持ち、お賴み申さう。
しづ　ついに見馴れぬ修行者さん。
樒　わたしに戀を取持てとな。
那智　一戒破れて、五戒を穢す六部の身で
了然　見染めたが煩惱心。六部の五體は本石でもござらぬわサ。
那智　ハテ、戀は曲者ぢやなア。
　ト思ひ入れ。
了然　なんと女中、賴まれて下されうか。

櫓　成る程、品に依つたら、賴まれまいものでござんせぬが、お前の心底見ぬうちは、ナア、お靜さん。

しづ　イエ、わたしは。

ト云ふを消して

櫓　イヤサ、お前の心も、その通りでござんせうがな。

しづ　なんのマア、わたしは。

櫓　ハテ、さうでござんせう。何事もわたしが胸に、ナ、わたしが胸に思ふ通り、心底の見えぬうちは、急に返事はならぬでござんせうがな。

トいろ／＼呑み込ませる。お靜、やう／＼呑み込みし思ひ入れにて

しづ　成る程、そんな事ぢやさうでござんす。

了然　すりや、心底さへ見えたなら。

櫓　そりや、お前の願ひの通り。

了然　否應なしに女房だぞ。

櫓　して、お前の心底は。

了然　指切り髮切り、起證誓紙は、野暮らしくてをかしくあるめえ。

櫓　イヽエ、一圖に登り詰めし戀峠。矢ッ張り野暮な心中が、ようござんせうわいなア。

了然　すりや、古めかしい誓紙を書けか。

櫓　イヽエ、すつぱりとその指を。

了然　アノ、指をか。

櫓　後とも云はず今爰で。

ト木枕を前に出して

早う見たうござんする。

了然　是非がない。心中見せろ。

ト懷中より、蛇返しの劍を取出し、拔き放すと、ドロドロにて小蛇顯はれる。お靜、驚ろき飛びのく。那智兵衞、櫓、キッと思ひ入れ。了然も驚ろき、ちやつと劍を納め、懷中する。小蛇、劍とともに懷中に消える。

櫓　今のは慥か、小蛇の形。

那智　正しく蛇返しの、奇瑞は爰に。

ト了然が懷中へ手をかける。了然、その手を取つて

了然　こりやア、何をするのだ。

那智　小蛇の正體。

那智　見ようと思うて。

ト兩人又かゝるを立廻りあつて、三人見得になり

了然　聊爾召さるな、御兩所。

那智　イヽヤ、合點のゆかぬ六部の懷中。

了然　すりや、いま顯はれし蛇の形か。
那智　此方に詮議の一條。
柵　ぢやに依つて、その懷中。
了然　御詮議には及ばない。いま顯はれし蛇の姿は。
那智　蛇の姿は。
了然　サ、あの蛇ゆゑに、この六部でござる。
ト那智兵衞、柵、思ひ入れあつて
那智　ハテナア。
ト合ひ方。
了然　各々の手前、面目もなき因果話し、一通りお聞き下されい。元來身共が生國は、津州脇の濱、六年以前相果てたる女房、生れついて嫉妬深く、理解を説いても因果を説いても、聞き入れなき女の一圖。死んでも夫に別れじと、常々云つた一念殘り、固まりし恐ろしさ。何れも聞かつしやい。死したる夜より今の如く、我が身を去らず付け纒ふ、嫉妬の怨念。かゝる妻と緣組みしは、この身の前世の因果と思ひ、二人が佛果願まん爲、さてこそ諸國修行の六部、懺悔語るも罪亡ぼし。各々、御回向なされて下されい。
ト唱名する。此うちお靜思ひ入れあり。那智兵衞、柵思ひ入れあつて
那智　ハテ、恐ろしい話しも、あればあるものだね。
柵　ほんに女房の心では、夫大事と思ふからは、無理な心ではござんせぬわいなア。
那智　イカサマ、其やうな譯がなくては、六部にもなられますまい。
了然　御推量下されい。マア、掻摘んだお話しは斯くの通り。今宵は不思議の御一宿、夜とともに詳しうお話し申さう。
那智　然らば奧でお待ち申さう。ナニ女中、して、戀の取持ちはどうさつしやる。
柵　サイナア、今の話しで、肝心の戀爭ひは何處へやら。
了然　拙者も昔思ひ出し、どうか身内が恐ろしくて、オヽ、否の／＼。もう戀事は、さつぱりと止め／＼。
柵　あの通りでござんす程に、お前も蛇の取りつかぬうち、色事はさつぱりと止めてしまうたがよからうぞえ。
那智　イカサマ、現在の因果話し。
柵　小蛇の正體。
ト柵、了然の懷中へ心意氣あり。那智兵衞とめて
那智　コリヤ、女の嫉妬は恐ろしいものぢやねえか。

栴　ト栴、氣を變へ
これからわたしも奥へ行て、新らしい男に引ッつい
て居やうか。

那智　我れらも戀を置炬燵に、轉寐と出かけようか。
ト唄になり、那智兵衛、障子屋體、栴は納戸口へ入る。
了然は珠數を繰つて居る。此うちお靜、こなしあつて

しづ　ほんにいとしい六部さんの身の上、殊にお國は津の
國とやら、所の名までもわたしが故鄕、國を出てから積
る年月、思ひ出すも泪の種。父さん母さんは死なしやん
す。たつた一人の兄さんありと聞いたばかり、お顏も知
らず國の亂れに、討死でもなされしかと、思へば果敢な
い身の上でござんすわいなア。
ト此うち了然思ひ入れあつて

了然　ムウ、國所も某に同じ身の上話し。もし其方が幼
名は、お種とは云はなんだか。

しづ　お前は、よう御存じでござんすなア。

了然　父は幸內、母の名は、おとせと云うたか。

しづ　アイ、その通りでござんすわいなア。

了然　卽ち身共も幼名は。

しづ　助市と云ひましたかえ。

了然　如何にも幼名は助市。

しづ　そんならお前は眞實の、兄さんでござんしたかいな
ア。

了然　母の形見の目元の黒子。

しづ　見れば見る程死なしやんした、父さんに生寫し。

了然　妹。

しづ　兄さん。

了然　よう健で居つたなア。

しづ　よう御無事で、居て下さんしたナア。
ト泣く。了然もちよつと愁ひのこなしあつて

了然　ア、昔思へば其方は、乳房に育つ三才の東西子、某
は十五才、家出して南朝の見出しにあづかり、國の安否
も亂軍に隔たり、親人の生死も知らず、計らず汝に廻り
合ひ、兄が喜び、妹、推量してくれいやい。して、其方
がこの處に、住居いたす仔細は何と。

しづ　お二人に後れてから、お前を尋ね國を出で、都大原
に一夜を明かすその夜の戲れ、雜魚寐とやらで神前に、
遠近人の寄集ひ、誰れともなしに手に觸り、逢うたは笈
の兎もかうも、情の枕は交せしが、降つて沸いたるその
夜の騷動、皆散り〴〵に明け行く空、かなたこなたとそ

の人を、尋ね紀の路の旅の空。この家の兄樣、樣子を尋ねしその上で、心當りがあるなれば、逢はせてやらうとその日から、假の兄樣妹と、ひよつと呼ばれつ今日が日まで、仇に暮らして居りましたわいなア。

了然　ムウ、すりや顏も知らず名も知らず、再び尋ぬる蔓があるか。

しづ　せめて便りはその時に、下さんしたこの笄の片し。

ト袱紗包みの笄の片しを出して見せる。

了然　ムウ、こりや正しく。

しづ　心當りがござんすかえ。

了然　如何にも、まんざら覺えのないでもねえ。

しづ　どうぞマア、早う逢はるゝやうに、好い思案がないかいなア。

了然　氣遣ひ致すな。再び逢はす思案は胸に。

しづ　兄さんの氣の長い。こちや早う聞きたいわいなア。

ト此うち榊、那智兵衞、兩方より立ち聞いて居る。

了然　某一旦、南朝の臣下となるも、その大將のたくりやうを計りし上、その一方の良將と……ハテ、よく徒らな緣を組んだなア。

しづ　そしてお前の、お主さんと云はしやんすは。

了然　官軍の大將、新田左中將義貞公。

しづ　して、お前の今の名は。

了然　妻鹿孫三郎長宗。

トこの時、那智兵衞、榊、兩方より出て

那智　初めて聞きし修行者どの、實名孫三郎長宗どのであつたよな。

了然　如何にも拙者、長宗でござる。

那智　貴殿いよ／＼長宗どのに極まれば、因果話しは正しく僞はり。審かしきは小蛇の出現。

了然　包まずとお明かしあれ。

那智　長宗どの。

了然　尤もの御不審、因果話しは當座の僞はり、まこと小蛇の正體はこれにござる。

ト懷中より蛇返しの劍を出す。

那智　すりや、その劍が。

了然　和田家の重寶、蛇返しの一振り。亡父の形見、新兵衞どの、慥かに落手いたされい。

ト那智兵衞が前に置く。那智兵衞、取つてとくと見て

那智　誠に蛇返しの劍。して、貴殿の手に入りし仔細、長宗どの、お聞かせなされて下されい。

了然　曲者あつて亡父を害し、その一振りを奪ひ立退き、計らず某、その曲者に巡り合ひ、隠し置いたるその劍を、奪ひ返せし長宗が寸志ばかり。

那智　して、某を和田新兵衛と、推察ありしは。

了然　最前密かに拔放せば、忽ち現ずる小蛇の形。その時貴殿兩人の、眼差しに察したり。まつたその劍の在所知れたる上は、御夫婦の本望も、如何で今宵を過し申さん。

那智　ムウ、今宵を過さぬ本望とは、さてこそ敵はこの家の主。

櫓　何時ぞや吉野の御所にて、正行さまの小柄の謎、杉の下にて拾ひしとあるからは。

那智　取りも直さず杉本佐兵衞に、疑ひない。女房ども。

櫓　こちの人。

ト兩人凛々しく奥へ行かうとする。與四郎、脱ぎかけ、大小にて出て

與四　待つた御兩所、逸まるまい。

那智　其方はこの家の下人、忠義立てして主人を庇へば、立ち所にたつた一討ち。

與四　イヤ、杉本づれの家來とは穢らはしい。忝なくも南朝の忠臣、楠多門兵衞正成が舊臣、恩地左五郎正秀サ。

那智　ムウ、その又恩地正秀が、何ゆゑ佐兵衞が下人となり、倶に天の戴かざる、父の敵を留め召さるな。

與四　杉本と改名し、先年正成公に仕へしは、治亂を謀る彼れが計略。

了然　まこと彼れが俗性は、いつぞや亡びし長崎勘解由左衞門爲基サ。

與四　我れ年來下人となつて窺ふところ、忍び〳〵に諸武士を語らひ、相摸入道が弔ひ軍、一揆を起す彼れが結搆。迂濶に寄らば忍びの多勢、危ない〳〵。色目を隠し騙し寄り、尋常に勝負召され。

那智　この上はお指圖の通り、事を計つて本望遂げん。

しづ　兄さん、わたしが願ひの叶ふ思案の一つは。

了然　何事も奥の一間で、云うて聞かさう。

與四　然らば御夫婦。

櫓　恩地どの。

那智　長宗どの。

しづ　申し、間數隔てぬ奥の寢所。

了然　謀り事は密なるを善しとする。

那智　首尾よく本望達するまでは

櫓　矢ツ張りわたしは女順禮。

與四　下人の與四郎。
了然　敷金の花聟どの。
那智　そんなら此まゝ。
しづ　御案内いたしませう。
ト唄になり、お靜、了然、障子屋體へ入る。與四郎、那智兵衛、柵、納戸へ入る。ト藪垣より同じ出立ちの忍び一人出て、あたりを窺ひ松の枝へ行き、礫を打つ。松の雪散る。これを合圖に同じ出立ちの白具の忍び八人ばかり出て、ソロ〳〵内へ入る。各々窺ひ、並よく並ぶ。
忍皆　雪。
ト合ひ詞を云つて扣へる。内より
佐兵　オイ〳〵、其處へ行くぞ〳〵。
ト云ひ〳〵出て來て
ヤレ〳〵、ぐつすりとやつてのけた。こりやア大分更けたと見えるわえ。
ト皆々を見て、表へ出ろと仕方する。皆々呑み込み、表へ出て扣へる。佐兵衛、思ひ入れあつてズッと出て
一味の方々、火急の用事か。
忍び　先達つて仰せ付けられし、待乳山繩張り入用金、今宵中に下し置かるゝやう、一統願ひ奉ります。
佐兵　如何にも、夜明くるまでには、キッと調達いたしくれう。それまでは藪蔭に忍び居て、身が詞を合圖に、切つて出る手配り、一統に申し渡せ。
皆々　畏まつてございまする。
佐兵　早行け。
ト忍び皆々、ハッと藪蔭へ入る。佐兵衛、思ひ入れあつて
差當り繩張りの入用金。ハテナア。
トきつと手を組み、思案する。那智兵衛、幕明きの藁苞を持つて出て
那智　その金子、用立てませうか。
佐兵　ヤ。
トぎよつとする。
那智　祝言の濟まぬうちは、敷金でも小舅の儘にはならぬ。是非金が所望とあらば、この金で賣つてもらひたいものがある。
佐兵　そりや何を。
那智　蛇返しの一振りを。
佐兵　ヤ、なんと。

ト きつとなる。

那智　價いとはぬ藁苞の、塵まで添へて五百兩、耳を揃へし山吹の、花聟が所望の一振り。小舅どの、キリ〳〵出して賣らつしやい。

佐兵　イヽヤ、知らねえ。

那智　なんと。

佐兵　蛇返しとやら蹴返しとやら、所持した覺えはないわえ。

那智　ヤア、卑怯なり杉本佐兵衞。いつぞや和州六ッ田に於て、實父新左衞門を手にかけ立退く事、知るまいと思ふか。

佐兵　イヽヤ、知らねえ。劍は元より新左衞門を、討つた覺え毛頭ない。

ト 此うち桐、出かけ居て

桐　その覺えないお方が、最前嫁入りに事寄せ、土産と名付けて渡せし小柄、一目見るより顏色の、忽ち變ぜし面の血色。

那智　それと睨んで推しての聟入り。

桐　叶はぬ處ぢや、尋常に

那智　イザ、立ち上つて

那桐　勝負〳〵。

ト 双方より詰めかける。

佐兵　ハテ、小賢しく覺りしよな。よいワ、包まずと云つて聞かさう。故あつて汝が父、新左衞門をぶッ殺し、蛇返しの一振りは、疾に身共がしてやつた。なんと欲しいか、返して遣らうか……イヤ、欲しさうな面構へだ。ムムヽハヽヽヽヽ。なんぼわいらが欲しがつても、遣る事はならない。さう思つてうしやァがれ。

那智　家に傳はる蛇返しは、拔けば小蛇の姿を顯はす。奇々妙々の奇瑞の一振り。再び手に入り、爰にあるワ。

ト 出して見せる。佐兵衞、心得ぬこなし。この前より藤内、窺ひ居て、この時ズッと入り

藤内　その劍を此方へ渡せ。

ト 取りにかゝる。那智兵衞。立廻り、どつこいと兩人見得になり

佐兵　待て藤内、心得ぬ。劍の在所、改めて見ろ。

藤内　畏まりました。

ト 走り寄り、雪こかしをポンと割る。中より火吹竹出る。

藤内　ヤア〳〵、こアりや蛇返しが、火吹竹になつてしま

つた。
佐兵　小賢しくも摺替へたな。
　ト此の時了然出て
了然　如何にも汝が非道を挫かん爲、身が摺替へて、劍は元へ返してくれた。
那智　劍再び手に入る上は、父の敵。
櫓　舅の仇。
那智　尋常に
那櫓　勝負々々。
　ト詰め寄せる。
藤内　何を小積な。
　ト反り打つて、那智兵衞へ詰め寄せる。
佐兵　コリヤ〳〵藤内、其方は我れに構はず、最前申し付けた手配り。早く行け。
藤内　でも、御主人を。
佐兵　ハテ、氣遣ひない。例へ百人二百人、押ッ取巻くとも、鯨を突つく蚯蚓ども。構はずと早く〳〵。
　トこれにて藤内、ツイと藪蔭へ入る。
佐兵　サア、これからはうぬら、敵討の勝負を致してくれる。併し、敵討には法がある。うぬら、返り討ちにぶッ放し、この後枕を高く寢る。覺悟して前へ直れ。
　ト身構へする。この時與四郎出て
與四　イヤ、例へ返り討にするにもせよ、枕は高く寢られまい。
佐兵　阿房め、何をほざく。
與四　杉本佐兵衞とは世を忍ぶ假の名、誠は長崎勘解由左衞門爲基であらうがな。
佐兵　ヤア、何がなんと。
與四　我れ年來下人となつて、お靜に戀慕と見せたるも、彼れに取入り汝が俗姓、知らん爲であつたわえ。
佐兵　ヤア、覺えない爲基呼はり。取措け〳〵。
與四　違てあらがへば、云はせる仕樣は爰にある。
　ト押入れより萬壽姬を引出し
サア、まこと爲基でなくば、この女、いま目前で刺し殺せ。
佐兵　ヤ、なんと。
了然　その女こそ先年亡びし、相摸入道高時が娘萬壽姬。
與四　汝が爲には主人の片割れ。
了然　刺し殺して云ひ譯あるか。
那智　未練の杉本。勝負をせぬか。

與四　白狀するか。
了然　刺し殺すか。
那智　勝負をするか。
佐兵　サア。
四人　サア。
佐兵　サア。
皆々　サア〳〵〳〵〳〵。
四人　返答は、どうだ。
ト四人、詰め寄る。佐兵衞當惑のこなし。此うち萬壽
姬、思ひ入れあつて
萬壽　さうぢや。
ト懷劍にて自害する。佐兵衞、驚ろき
佐兵　こりや、姬君、何ゆゑの御生害でござりまする。
萬壽　とても自らある上は、敵の手に生捕られ、人質とな
つては其方の大望の妨げ。由ない自らが來たゆゑに今の
手詰め。自らに心臆せず、一旦この場を切り拔け、兄上
に廻り合ひ、父の恨みを晴らしてたも。
佐兵　流石は時行公のお妹、お出かしなされた。一時も早
く未來の父御に御對面、臣が忠義をお傳へ下され。
萬壽　そんなら爲基、さらばでござる。
佐兵　南無阿彌陀佛。
萬壽　南無阿彌陀佛。
ト苦しみ、バッタリ倒れる。佐兵衞、愁ひの思ひ入れ
あつて
サア、主人の娘御最期の上は、爲基が死物狂ひだ。何奴
でも此奴でも冥途の供、覺悟してそれへ直れ。
了然　ホヽウ、流石の爲基、よく名乘つた。及ばぬ謀叛の
一味徒黨。一々に白狀々々。
佐兵　ヤア、それをうぬらに聞かさうか。徒黨の軍勢見せ
てくれん。藤內參れ。
藤內　ハッ。
ト下の藪蔭より、忍び大勢、以前の白裝束、拔身にて、
藤內付き添ひ、バラ〳〵と出て、皆々を取卷く。
那了　何を小積な。
ト遠寄せ打ちかける。忍び、藤內は與四郎に切つてか
かる。那智兵衞、柵、佐兵衞と切り結ぶ。與四郎皆々
を對手に、向うに追つて入る。那智兵衞、柵、佐兵衞
と切り結びながら奥へ入る。ト障子屋體より、お靜走
り出て
しづ　申し兄さん、最前お前が戀しい殿御に、逢はるゝ思

案があると云はしやんしたが、その思案は、どうでござんすぞいな。

了然　その思案と云ふは、戸野の大彌太、近頃無禮講と名付け、諸武士を集むるとの風聞。正しく盜み取つたる錦の御旗を持つて、叛逆の企てと覺ゆる。この實否を糺さんには、白拍子と姿を變へ、大彌太が館へ入込み、お旗のある所を見屆けなば、汝が尋ぬる夫にも、廻り逢ふべき時節到來。首尾よく役目仕負はせよ。

しづ　成る程、お前の詞に違ひなくば、命に替へてもこの役目、仕負ほせて見せませう。

了然　とは云へ其方はその姿にて、白拍子とは云はれまい。

しづ　ほんにさうでござんすわいなア。

ト當惑すると、奧より佐兵衞、襷鉢卷にて、那智兵衞、柳、同じく凜々しき形にて、切り結び出て、タテよろしくあつて、とゞ三人見得になり

那智　叶はぬ腕立て。未練な奴の。

トこの時、與四郎、藤内と切り結び出て、立廻り。同じくキッと見得になり

佐兵　コリヤ藤内、運盡き某討たれなば、西國へ、押渡り、兼ねて語らふ味方を集め、某が弔ひ軍、船路を越ゆる往來切手。

ト正面に掛けたる般若面に、手裏劍を打つ。般若面バッタリ落ちる。この途端に船切手出る。藤内、取らんとする。了然引廻し、見事に投げる。與四郎、其まゝ見事に押へる。お靜、般若の面を取上げ、思ひ入れあつて

しづ　オヽ、ソレ、敵地へ入込む女の大膽、心の鬼を面に顯はし、道成寺の俤を、其まゝ假の白拍子。

了然　天晴れ早速。

トお靜面を持ち

しづ　兄さん、おさらば。

了然　早く行け。

那柳　爲甚觀念。

ト兩人、佐兵衞を圍ふ。佐兵衞見得。與四郎、立廻りにて藤内を切り倒す。了然、お靜を見送る。お靜、面を持ち、凜々しく向うへ走り入る。各々引ッ張りよろしく

幕

二番目大切

戸野大彌太館の場

淨瑠璃「戀相撲閨取組」富本連中

役名——戸野の大彌太。芦邊の田鶴六。汐滿玉平。片男の浪八。和歌の浦助。十津川のお靜。大森彦七盛長。小鳥賣り、次郎助實ハ脇屋次郎義助。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、一面の伊豫簾。正面に無禮講と書いたる高札を建て、左右の柱、紅葉の大樹、舞臺先へ一面に、紅葉の吊り枝を下げ、すべて戸野の大彌太館の體。道具飾りつけよろしく、簾の内より蘆邊の田鶴六。冠束帶。汐滿玉平、仕丁姿にて、双方、肌を脱ぎ、荒繩を首にかけ、首引きをして居る。こなたに片男の浪八、同じく公家の形にて、大杯にて酒を呑んで居る。和歌の浦助、仕丁姿にて、皷を打つて居る。下手に仕丁二三人、麻上下の肌を脱ぎかけ、棒振ち、腕押し、思ひ〳〵に騷いで居る。この見得、天王立ちに狐釣りの合ひ方、賑やかに幕明く。

皆々　イヨ〳〵、きついもの〳〵。

田鶴　イヤ又、荒波どのは、音に聞えし力者程あつて、なかなか我れ〳〵が及ばぬ儀でござる。

玉平　イヤ〳〵、貴殿の首引き、餘ツぽど巧者に見えまする。

浦助　イヤ又、鳴り物に取つては、恐らく身共に續くものはあるまい。

玉平　ハテ、きつい手褒めでござるな。

皆々　ハヽヽヽヽ。

田鶴　なんとこれからこの家の主、戸野の大彌太どのを相手にして、拳酒と仕らうではござらぬか。

皆々　イカサマ、こりやアようござらう。

浪八　なんでも今日は呑み次第、食ひ次第、遊び次第の無禮講。我れ〳〵も斯くの如く、ついに見馴れぬ冠裝束、思ひ〳〵の奢り遊び。

玉平　全くこれも大彌太どのゝ、武威を見する爲でござらう。

田鶴　イヤ〳〵、何れも、一途に左樣ばかり心得召さるな。今日無禮講と名け、各々この屋敷へ召寄せられしは、他聞を憚る謀り事。誠は兼ねて謀し合せし大彌太どのゝ大

望、首尾よく參れば我れ〳〵も一國の主。

浦助　立身出世の大評定、寶の山へ入ると思ひ、各々にも喜び召されい。

浪八　承はれば、今日無禮講を幸ひに、美しい舞子が參つて居るとの事。これはなんでも堅い詮議のその後で、風流の今様とは、彼の鎧櫃に笑ひ本を入れる格でござらう。

玉平　ナニサマ、窮屈を散ずる大彌太どのゝ計らひ。して、軍評定の刻限はな。

田鶴　ヤレ、聲が高い。子の刻を過るまでは、琴三味線の大騒ぎ。

浦助　冠烏帽子の舞ひ踊り。

浪八　一寸先は闇の夜と、そこで戯れ。

皆々　遊べ。

ト踊三味線になり、皆々踊り騒いで下座へ入る。これにて頭取、役人觸れ口上よろしくあつて、左様に納まり、直ぐに前彈きになり、チヨン〳〵のキツカケにて正面の簾を巻き上げる。宮本連中居並び、これより淨瑠璃。

〽白露を、おのが心のさま〴〵に、紅葉に置けば紅の、色香爭ふ取なりは、烏帽子水干華やかに、女とも見え男舞ひ、賓に面白き無禮講。

ト誂らへの鳴り物になり、眞中にお靜、衣裳振り袖に烏帽子水干、男舞ひの拵らへよろしく、中啓を持つて立ち身。東の方に大彌太、羽織衣裳大小にて、誂らへの大杯を抱へたる見得。西の方に大森彦七盛長、赤ッ面、羽織衣裳、大小、酒桶を頬杖に突いて居る。この三人見得よろしく、一面にセリ上がる。

〽世は濁めり、我れ獨りこそ濁り酒、醉へば寐るにて候ふの、水は流れの白拍子、兄の詞にやつすなる、妻戀ふ鹿や紅葉狩、顔に照りそふ赤ッ面、君に大森大彌太が、百手を碎きし戀の闘、いづれ色ある風情なり。

大彌　紅葉聲乾鹿林啼。

盛長　林間煖酒紅葉焚。

しづ　もみぢ葉を分けつゝ行けば錦着て、家に歸ると人や見るらん。

大彌　人の見る目も思惑も、いとはぬ今日の無禮講。大杯も大彌太が、グツと呑み込む酒機嫌。

盛長　下戸ならぬこそ男舞ひ、姿形も華やかに、美しい歯の黒髪に、大象ならで繋がる一座大森が、これも許しの無禮講。

しづ　無禮慮外もお召しに依つて、舞子姿も紅葉を、分けて故郷へ錦の旗。

大彌　ヤ、なんと。

しづ　故郷へ歸る舞ひの袖。

盛長　その白拍子の

大盛　始まりは。

〽問はれて我れも白拍子、その始まりを聞く時は、知るも知らぬも白川の、雲井に高き御秘藏は、島の千歳、和歌の前、しかも白齒の振り袖も、白綾に白鷺を、白糸に縫はせつゝ、白き水干立烏帽子、白き扇の手を盡し、拍子を揃つて舞ひけるより、白拍子とは名けたり。

〽さてはさまもその時の、千歳樂や萬歳の、嬌と見えて愛敬ありける新玉の、年立返る朝には、可愛らしうてさむらひける。

トこの振りのうち大彌太、お靜に抱きつくを、盛長、引きのけて抱きつく事あり、お靜、兎角大彌太が、懷中を見たき模樣の立廻り、よろしくあつて

しづ　エヽ、なんぢやいなア。

大彌　なんぢやとは知れた事。この大彌太が思ひつきの無禮講だに依つて、そこで抱きついたものよ。

しづ　そんなら、アノわたしに。

盛長　惚れたと云ふはこの大森、今日の無禮講を幸ひに、入込んだ舞子の姿。

しづ　エ。

盛長　サア、その舞振りと云ひ器量と云ひ、ぞつこん首たけ。ヘヽ、嫌な奴の。

大彌　イヽヤ惚れたはおれが先。藝子々々も內證は、三味線枕と、賴むワ〳〵。

しづ　ホヽヽ、こりやをかしいわいなア。女子さへ見やしやんすと、惚れた〳〵は殿御の癖。わたしは一人、相手は二人、眞實誠を見たなれば、色よい返事も敵味方。

盛長　南朝方へ傾むくか。

大彌　また北朝方へ從ふか。

しづ　北と南の戀角力。交す枕の。

ト三人、立廻りよろしくあつて

三人　土俵入り。

〽抑々角力の始まりは、垂仁帝のその昔、戀の手取りに取組んで、緣を結ぶの神さんは、出雲に當麻の狀文に、和らぐ文字や大和なる、三輪や山本杉はやし、酒ならござれいつとても、野見の宿禰や好きの道、色は元より目

顏でも、知れそなものと大彌太が、取りつく袂振り放し、君に大關大森が、抱きつく國の士俵入り、さうはさせぬと引分くる、行司娘の化粧紙、團扇に靡く戀風の、ほんに心があるわいな。

ト いづれも振りあつて

兩人　サア〳〵、返事はどうだ〳〵。

しづ　サイナア、今も云ふ通り、口説くはお二人、この身は一人。かゝる例しは津の國の、生田の川のその昔。

大彌　爭ふ戀の難題に、飛び居る鳥の頭を射る。

盛長　こなたも負けず的當つる、首尾に迷ひし古事を

しづ　爰に引いたる角力の勝負。なんでも勝たしやんしたお方に、靡くが戀の返事。

大彌　面白い。そんなら爰で兩人が

盛長　戀爭ひは角力の勝負。

しづ　行司は卽ちこのお靜。

大彌　抱いて寢るのが勝ち角力。

盛長　獨り寢るのが負け角力。

しづ　北と南の取組みに

大彌　勝つも

盛長　負けるも

しづ　この場の勝負。

大彌　イザ。

盛長　イザ。

三人　イザ。

ト 白囃子になり、大彌太、盛長、羽織衣裳を脫ぎ捨て、丸裸になつてキッと見得、お靜、烏帽子水干を取退け、扇を持つて眞中に行司の見得。兩人は四股を踏んで兩方構へる。お靜、こなしあつて

しづ　北の關は大彌太さん〳〵……南の關は大森さん、互ひに見合うて。

兩人　合點だ。

〽爭ふ戀の關角力、やつと組みつく力士立ち、鴫の羽返し向うづき、アリヤ〳〵、コリヤ〳〵、殘つた殘つた、その睦言の口舌にも、ぴんとひぢりし腕どり、櫓四つかひふつゝりと、ひねり褄取りアイタ、、。勝櫓、引すて脊負ひ投げ嬉しさは、いとし柳の腰車、ちん〳〵鴨の入れ首や、アリヤ〳〵、コリヤ〳〵、差す手引く手に大彌太を、投げ出したる川津がけ、大手を廣げ大森が、ふんしがつたる有樣は、目覺ましくも又潔よし。

ト この文句のうち、盛長、大彌太は角力の取組み、お靜は中へ入つて、いろ〳〵仕組みあつて、トヾ、大彌太を盛長取つて投げる。この立廻りよろしく

しづ 勝角力は、大森さん〳〵。

大彌 エヽ、忌々しい。そんならおれが戀は叶はぬか。

盛長 約束の角力の勝負、おれが勝つた上からは、最早相手はあるまいがな。

次郎 イヤ、そのお相手、これに一人罷りある。

盛長 なんと。

ト 淨瑠璃。

〽室に咲く、梅の早咲き鶯の、初音の鳥や鳥賣りが、色香商ふ妹脊鳥。

ト 摺り鉦入りの合ひ方になり、向うより小鳥賣り次郎助、やつし鳥賣りの拵らへにて、誂らへの鳥籠を擔げ出て來る。

〽角力に寄せて鶺鴒の、比翼の翼嬉しくも、羽風戀風吹き越して、塒尋ぬる花鳥の、世にも音にも通ひ樽、酒に引かれてこうえふの、紅葉の庭へ來りける。

ト 本舞臺へ來る。此うち大彌太、盛長、羽織衣裳を着て

盛長 待て〳〵。この大森が勝ち角力、相手にならうと聲をかけて出た奴を見れば

大彌 角力取りかと思ひの外、商人出立ちの小鳥賣り。

しづ そんならこなさんが相手になつて、戀の勝負をさしやんす氣かえ。

次郎 これは迷惑。左樣な事ではござりませぬが、承はれば今日、このお屋敷で、無禮講と名け、武士町人の分ちなく、お庭へお許しと承はりまして、思ふ存分商ひをと心掛けて參つた鳥賣り。

盛長 それに又、角力の相手にならうと聲をかけたは。

次郎 ハテ、お前も上つ方にお似合ひなされぬ。大內では角力取りの事を、小鳥使ひと申すではござりませぬか。

盛長 如何にもさうだ。

次郎 サア、ぢやに依つて、小鳥使ひのこの鳥賣り。角力取りと云ふ聲もあれば、鳥を澤山賣りつけて、御酒のお相手にでもならうと存じまして、御遠慮も顧みず、參つたところが無禮講。なんと仰つしやり分はござりますまいがな。

大彌 此奴、なか〳〵話せる奴だわえ。そんなら又、此方もわれに賴む事がある。

次郎　して、お頼みと仰つしやるは。
大彌　外でもない、爰に居るこの女を、取持つてくれろくれろ。
次郎　滅相な事を仰しやります。知りもせぬお方に早急に、マア、そんな事が云はるゝものでござりまするか。
盛長　ドッコイ〳〵。さうは拔けさせぬ。我が角力を小鳥使ひと、物識り自慢の鸚鵡返し。戀の取持ちをする事を、花鳥の使ひと云ふぞよ。
次郎　サア、それはな。
盛長　ぢやに依つて、あの女を、おれに取持て〳〵。
大彌　イヽヤ、おれに取持て。
盛長　おれだ。
大彌　イヤ、おれだよ。
　ト爭ふをお靜、留めて
しづ　アヽ、コレイナア。お二人ともに其やうに、いくら爭はしやんしても、ちと深い樣子があつて、殿御の肌は觸れぬ心願。この戀ばかりはフッツリと。
大彌　イヽヤ、思ひ切られない。なんで又男の肌。
盛長　觸れぬと云ふ仔細聞きたい。
しづ　サア、それはな。

兩人　サア〳〵、どうぢや。
次郎　アヽ申し、其やうに木折りでは、參らぬが戀の意地。そこを今の鸚鵡返し、私が取持つて、詞の花鳥、仲人役。
兩人　そんならわれが
しづ　アノお前が
次郎　ハテ、商賣の取持ち心。
〽仲人役は花鳥の、取持ち娘はほつとり者、飛び立つ心を鳥資りが、それを見てとり〳〵に、下行く水を汲分けて、表を戀の仇つきは、ほんに嬉しい鳥を刺いて見さいな。一つ比翼の鳥の跡、二つ文してめでたくかしく、三つ耳づく耳に口、四つよい仲睦じく、刺いてくれうと思うたる、心の竹に取持ちは、戀の返事をつい爰で、ちよいと刺いて押取つた。
　ト振りよろしくあつて納まり
次郎　サア、先づこれで大方に、色好い返事をする氣でも、あの子一人に二人の戀。こりやアなんでも神文起證、誓紙か心中を、見せた上では叶ふ戀。
兩人　そんなら二人が心中を
しづ　見たいと云ふは、慥かにこの
　ト大彌太が懷中へ手をかけろ。振り放して

大彌　合點のゆかぬは舞子のお靜。大彌太が懷へ、一度ならず二度三度、手を掛けて何とする。
しづ　サア、これはな。
大彌　これは。
しづ　矢ツ張りこれも心中の
盛長　誓ひを爰に
次郎　六十餘州。
しづ　八百や萬の
ト四人、立廻りよろしくあつて
四人　神おろし。
トこれにて大小入りの振りになる。
〽そんも／＼、わしは首たけ、こなさんに、惚れて可愛の、いの字の伊勢の、いかいたわけの手管の大甚、末社末社の末社坊主が、月讀み日讀み障りなく、心のたけを云ふに曰くの數々は、ほんに一萬虛空藏、戀の根本二神の、敎へ給ひし濡れ繁昌、色に打込む國々は、先づ山城の祇園町、戀に身を賣る稻荷前、我が友狐大甚狐、人にも神にも粹不粹、譯のよい加茂、後詰めたがる愛宕山、長床坊の長柱、貴船は木屋町のぼさんす、男山には新八幡、鼻毛千本朱雀野全盛、名も高き家に登りつめたる、揚屋に最初の天王寺、聖德諸譯も吉野に座持つ、御見なりたや大和の客さん、出羽の國には黒羽のよね衆、白歯の振り袖ちよつとあなたへ、鹿島かいどり伊達こき召して、六十餘州の神々達も、色で固めた女夫の誓ひ、これが結ぶの神おろし、敬つて申すとしやべりける。
トこれにて四人、よろしく振り事あつて納まる。
次郎　先づ、これでお二人の誓ひは立つた。これからは床入りの、上十五日は大森さまとやら。下十五日は大彌太さま。今宵は差詰め御亭主役。お取持ちは彥七さま。奧へござつて、首尾を待つて下さりませ。
盛長　そんならおれが、今宵の取持ち。
大彌　床入りはこの大彌太。うまい／＼。
しづ　ぢやと云うて、わたしはどうも。
次郎　ハテ、云はず語らず互ひの胸に、心底明かすは今宵のうち。
しづ　そんならどうでも、大彌太さん。
ト立ちかゝる。次郎、引きのける。この拍子にお靜が懷より、袱紗包みの割り笄落ちる。次郎助、目早く取上げて
次郎　この笄は。

しづ　ア、、それを。

トちやつと取つて懐中する。次郎助もこなし。

大彌　どうでも合點の。

ト立ちかゝるを盛長引きのけ

盛長　ハテ、奥でゆつくり呑み直さう。

大彌　そんなら一緒に。

盛長　マア、ござれサ。

ト誂らへの獨吟になり、大彌太、お靜へ立ちかゝるを、次郎助はお靜を押へる。盛長は大彌太を連れて、心を殘し奥へ入る。後にお靜、次郎助と顏見合せ、あちら向く。次郎助これを見て、お靜が側へ寄る。これまでに唄切れて合ひ方になる。

次郎　イヤ、モシ女中さん。今の樣子と云ひ、斯う見たところが、この屋敷のお腰元、お端下でもあるまいが、お前はマア、何處からござんした振り袖さんぢやえ。

しづ　アイ、わたしや今日このお屋敷の、無禮講に雇はれた、舞子でござんすわいなア。

次郎　その舞子が今のやうに、口說く二人へ返事をせぬは。

しづ　サア、それはな。わたしや男が嫌ひぢやわいなア。

次郎　ムウ、男が嫌ひ……ハテ、似た事もあるもの。わしも生れついて、女子はとんと嫌ひでごんす。

しづ　そりや又、なぜにえ。

次郎　サア、その譯は過ぎし頃、大原の雜魚寢の社に旅枕、その時フツと思はずも、側に臥したる振り袖の、他生の緣の暗紛れ、結ぶ妹脊のその人に、心中立ての女嫌ひ。

しづ　エ、、そんならアノ雜魚寢の夜。

次郎　また逢ふ時の證據にと、差した刀の割り笄、その片しはコレ、爰に。

ト懐中より、袱紗に包みし笄を出して見せる。

しづ　ほんに違はぬ笄の、わたしが男嫌ひと云ふも、云はず語らす心の割り符。肌身離さずコレ爰に。

ト懐中より、以前の割り笄を出して見せる。

次郎　誠にそれこそ身が所持の、刀に添へたる割り笄。

しづ　過ぎし霜月十五日、打交りたる雜魚寢通夜。

次郎　互ひに顏も名も知らず、つい轉び寢の肱枕。

しづ　また逢ふまでの證據にと、下さんしたこの笄。

次郎　ドレ。

トお靜の持つて居る割り笄を取つて合せて見る。

次郎　そんならその夜の模樣は小松に千羽鶴。しつくりと合ふからは

ト互ひに顏見合せ、こなしあつて

しづ　オヽ、恥かし。

ト振り袖にて顏を隱す。

〽嬉し恥かし振り袖に、包むに餘る戀の端、渡りおほせて大原の、折を江文の神さんが、結ばしやんした緣の帶、解いてほどいて互ひの心、云はず語らず笄の、割り符は今日の憂き曇り、花待ち得たる妹と脊も、それ覺えてかその常磐木の、變らぬ色を子の日の松に、千歲の末の末までも、鶴は比翼の二世三世、必らず變り給ふなと、取る手もたゆき女夫の固め、ぢつと引寄せ引締むる、顏も上氣に紅葉して、ついくる／＼と引廻す、屛風は戀の隱れ里。

トこの文句のうち互ひに色模樣よろしく、トヾ、次郎助、お靜を引寄せる。お靜、ひつたりと抱きつく。この途端に屛風引廻す。これより捨て鉦、好みの合ひ方になり、下座の方より田鶴六、浪八、玉平、浦助、幕明きの形にて出て來る。こなしあつて

浪八　無禮講に事寄せて、我れ／＼が今日の熟談。

玉平　大彌太さまの詞に從ひ、詮議の鳥賣り、慥かに新田が弟義助。

浦助　舞子となつて入込んだるも、南朝方の由緣の奴。

田鶴　寢鳥を刺すより巧い仕事。引摺り出して、心得たか。

三人　合點だ。

〽やゝ更け渡る小夜風と、共に館も物騷がしく、とりどり捕手の形を顯はし、屛風の內の鳥賣りを、遁がさずやらぬと押取卷く。

トこの淨瑠璃にて四人一度に、上着を取つて四天の形になり、屛風の內より次郎助を引出す。次郎助、以前の大杯と鼓を持ち、醉うたるこなし

四人　動くな。

次郎　こりやア鳥賣りを、何となされまする。

田鶴　ヤア、鳥賣りとは僞はり、新田義貞が弟。

治八　脇屋次郎義助、尋常に腕

四人　廻せやい。

次郎　なんぢや脇ぢや。脇と仕手とは能狂言。鼓の音色、大杯。

四人　なんと。

次郎　サア、色に出でたる色樣の。

〽錦彩る紅葉ばの、林間ならで酒の燗、押への手許もつれ酒、あなたへさらり、こなたへさらり、さらり／＼

さら〳〵さつと淺ましや、我れながら、無明の酒の醉ひ心地。

トよろしくあつて

田鶴　所を、うぬ。

ト兩方より拔きかけるを、鼓と杯にてしつかと留める。

次郞　ハテ、仰山な亭主振り。酒が廻つて千鳥足、小鼓は女房、大鼓は男二人、寢させて上から夜着を、ぽんぽんぽん。

玉浦　うぬ。

トかゝるを左右へ、見事に取つて投げ、醉うたる思ひ入れ。

田鶴　ヤア、酒醉ひ本性違はず、義助と、サア

四人　名乘るまいか。

次郞　なんと助ける。ハテ、理不盡な酒の相手、その李夫人は唐土の美女。

四人　なんと。

〽李夫人の俤を、暫らく爰に招ぐべしとて、九花帳の内にして、反魂香を炷き給ふ。

トこの謠の鳴り物にて、次郞助、四人を相手に立廻りよろしくあつて、トヾ、四人、下座の方へ逃げるを、

次郞助引拔き追つて入る。これよりコイヤイになり、大彌太、ウソ〳〵出で來て、あたりを見廻し、こなしあつて

大彌　あの鳥賣りめを詮議のうち、おれが戀人、爰で締め鳥、幸ひの寢所と云ひ、慥かに隱れ屛風の內。舞子のお靜を、ドリヤ。

ト立寄つて屛風を開く。內に盛長、薄衣を冠り、お靜を負うたる大森、本行の見得。大彌太、見るより悄りして

ヤア、わりやア大森彥七。

盛長　お靜としつぽり思ひの丈、晴らさうとする所へ、理不盡な大彌太、惡いぞよ。

大彌　そりやア此方が云ふ事だ。上十五日と定めた先約、今夜はおれが抱いて寢るワ。

トお靜が手を取ろ。盛長、負うたまゝ振り拂ふ。立廻り。大彌太また來ろ所を、お靜、薄衣を上げる。般若の面。大彌太、これを見て悄りこなし。

イヤア、舞子のお靜と思ひの外、角の生えたる般若の形相。

ト盛長も悄り思ひ入れあつて

盛長　ヤ。
　ト振仰のき
誠に、今までやごとなき、芙蓉のかんばせ引替へて
大彌　鬼女の面を顯はせしは
　ト皷唄になり
〽龍門原上の土に骸は埋むとも、名をば埋まず楠が、仇も恨みも今爰に、引競べたる梓弓。
　トお靜よろしくあつて、盛長、脊より下ろす。この時、面落ちる。大彌太、盛長、立ちかゝつて
兩人　怪しき靜がこの振舞ひ。
しづ　イヽヤ、靜ぢやない。
兩人　なんと。
〽思ひ出せば口惜しや、頃は建武の戰ひに、湊川にて泡沫の、あはれ忠義もいたづらに、人は武夫三芳野や、花の魁け楠が、最期由々しき物語り。
盛長　さては楠正成が亡靈、お靜が姿　苟めに
大彌　詞を交す軍の次第。
　ト乘り地になり
〽矢種惜しまず差詰め引詰め。
盛長　北より南へ追ひ靡け

大彌　東を西へ駈け通り
〽須磨の上野の朝風に、山吹流しの旗指物、颯と靡かせ待つ所に。
盛長　吉良石堂の宗徒の郎黨
大彌　弓手馬手より
兩人　むんづと組む。
　ト大彌太、盛長かゝる。立廻り
しづ　しや、物々しと兩手を伸べ
〽合はぬ敵をば馳せ散らし、寄つて向ふを掻き首捩ぢ首、七度合うて七度別る。戰ひ疲れて見えければ、
正成今はこれまでと。
〽一叢茂る在家に駈入り、人は最期の念に依つて。
善惡の生を引くと云へり。
〽九界の間正成が、何顏もあら無念や。
只七生まで生き替り、朝敵怨敵亡ぼさん。
〽云ふ聲ともに諸肌脱ぎ、氷の刃を一文字に、腹に突き立て引廻せば、恩顧の一族十六人、我れも〳〵と刺し違へ、同じ枕に臥したりし、日本無双の名士の最期、その怨念の今目前、怒り立つたる紅葉の林。
　トよろしく立廻りあつて

盛長　ヤア、愚かなり正成。いま盛長が太刀風に、怨敵退散。立去れ〳〵。
　ト切り拂ふ。
大彌　ヤレ待て盛長、たよはき女に過ちすな。死靈を落すは屈竟のこの守。
　ト懐中より袱紗に包みし錦の旗を出し
楠正成、立去れ〳〵。
〽打立てられて楠が、忿怒の姿忽ちに、跡なく去つて陽炎の、現か夢か怪しけれ。
　トこの淨瑠璃にて、大彌太、旗にて打ち据ゑる。お靜、苦しむこなしにて、振り袖にて顏を隱す。此うち後へ次郎助出かゝり居る。
盛長　すりや楠の靈魂の、立ち去つたるも守の奇特。
大彌　なんと不思議であらうがな。
　トきつと見得。この時次郎助、大彌太の持つて居る旗を、ちよいと取つて
次郎　これを取らうばつかりだ。
大彌　ヤ、、、わりやア最前の
次郎　鳥賣りと云ふは僞はり、誠は新田義貞が弟、脇屋次部義助。
しづ　お手に入つたる錦の御旗
盛長　なんと膽が潰れるか。
大彌　ヤ、、、すりや楠が亡魂と見せたは。
盛長　みんな此方の云ひ合せ。この大森も邪まの、北朝を見限つて、南朝へ味方だワ。
しづ　舞子となつて入込みしも、御旗の詮議の爲ばかり、まこと我れこそは、妻鹿孫三郎が妹お靜。
次郎　不思議にもこの所にて、名乘り合うたる妹脊の緣。
　サア、尋常に
三人　腕廻せ。
大彌　エヽ、殘念や口惜しや。戀慕に迷うて計らはれし、その返報。者ども、ソリヤ。
〽聲に從ひばら〳〵〳〵、切つてかゝれば義助が、拂ふ太刀風戀風に、紅葉彩る梢の錦、寶も手に入る嗚呼忠臣、楠氏の旗に菊水の、譽れを代々に殘しける。
　トこの淨瑠璃にて、下座より田鶴六先に浪八、玉平、浦助、バラ〳〵出て切り結ぶ。義助、盛長、切り拂ひ、入り亂れになつて、上手に義助、錦の旗を守護する。盛長、大彌太を眞中に、お靜、隔てる。立廻り。四人、後に並よく詰め寄せたる見得よろしく

皆々　どつこい。

義助　先づ今日はこれぎり。

打出し

花櫓橋系圖（終り）

「花櫓橘系圖」初演紋番附

蝶花形戀聟源氏

(てふはながたこひむこげんじ)

蝶(てふ)花(はな)形(がた)戀(こひ)聟(むこ)源(げん)氏(じ)

文化二年河原崎座の顏見世狂言である。この時の紋番附には明らかに文化二年丙寅歳と書いてはあるが、これはどうしても俳優の連名が前後符合しないのである。併し、番附の刷方が餘りに明瞭であるから、今は疑ひを殘して置く。狂言作者は木村園夫と福森久助であつた。

いつでも、中村市村の兩座は立派な顏觸れを揃へるが、木挽町の方は、折々俳優が集まり兼ねる。それは地理の關係で、木挽町へ行くのを俳優が嫌がる關係もあつた。この時も、他の兩座で剩された俳優を揃へて、無理から揃へて一座を組織したのであるが、餘りに無人なので、京坂から二三の新顏を呼んで開場したのである。併し非常に淋しかつた。如何にも無人で困つた事は、脚本の上にあり〳〵現はれてゐる。華やかな顏見世興行にも、斯うした淋しい脚本が出た事があるのだ。さうした意味からでも、ちよつと捨て難い。殊に『義家奥州攻』の世界は顏見世の中にも少ないので、殊に收錄したのである。無人なるがゆゑに、女形の常世が、座頭同樣に巾を利かしてゐる所が、よく窺へる次第である。

役割は左の通りであつた。

安倍宗任。奴鐵平(澤村東藏)金の八郎爲時。新羅三郎義光)嵐秀之助)蘆名次官國連。隱居妙山(松本國五郎)大宅三郎光任(市川重藏)權の太夫景成。源の賴義(山科四郎十郎)濡衣の願山坊。加藤右馬之丞。石倉角之進(桐山紋次)須賀川九郎範純(市川門藏)鼠婆ア。韋駄天雲平。築地の善好(坂東彥左衛門)景成娘千枝(小佐川松三)傾城逢州 實ハ貞任娘千代童姬。侍女卷篠。お光妹お袖(小佐川七藏)勝田次官成信。大道寺一學。立引五郎(市川荒五郎)安倍貞任。淸原眞人武則(中山來助)水仙賣り難波のお露 實ハ鴛鴦の精。匡房息女歌綾姬。妹お仲 實ハ貞方娘淺香姬(中村慶子)鉢植賣り田畑村の八右衛門 實ハ鴛鴦の精。八幡太郎義家。金毘舍人之助惟滿。出羽城之助重成(澤村源之助)貞任妻雄島。釣舟屋お光 實ハ善知鳥文次妻安方(小佐川常世)

蝶花形戀聟源氏

第一番目三建目　男山八幡の場

役名――金の八郎爲時。勝田次郎成信。權の太夫景成。須賀川九郎範純。見通しの鼠婆ア。濡れ衣の願山坊。足輕、軍平 實ハ蘆名の次官國連。朱雀の刎平。右白狐竹平。左青龍平。玄武の龜平。大宅三郎光任。忍び、雲夜叉。景成娘、千枝。成信妹。初霜。

本舞臺、三間の間、廻廊、段幕を張り、石燈籠、手水鉢などよろしく、左右の大柱、枝葉茂りたる松の木、すべて男山八幡の境内。爰に、願山、毬栗坊主、鼠布子、黑衣の玉襷、麥藁笠をかむり、高足駄を穿き、白木の箱を抱へ居る。菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を持ち、この坊主を支へ居る。この見得、バタバタ、神樂の鳴り物にて、幕明く。

願山　こりやアうぬらは、何とするのだ、

侍一　神事の庭へ怪しい出立ち。

侍二　其所一寸も動くまいぞ。

ト立廻りに棒を蹴倒し、兩人をちよつと當て

願山　ごくにも立たぬわさび卸ろしめら。誰れあらう、無宿山放埒寺の、濡衣願山さまと云ふ尊い淸僧に向つて及ばぬ事だぞ。

ト云ひながら懷中より錦の袋に入りし院宣を取出し、まんまと手に入るこの一品。範純どのへ差上げて、褒美はずつしり。うまい〳〵。

ト白木の箱諸とも懷中する。兩人起き上がり

兩人　曲者。

トかゝる。願山、飛び退りて二品を其所へ置く。

願山　アヽ、モシ〳〵、何も怪しい者ぢやござりませぬ。愚僧がお出入りのお屋敷樣から、賴まれました御祈禱のお札、供物でござります。イザ改めて、相違がなくば、わしを通さしつて下さりませ。

侍一　如何にも、改めた上にて兎も角も。

兩人　ドレ。

ト立寄り、二品を取らうとする。願山、兩人が股へ手を入れて痛める。兩人、顏をしかめて苦しがり
ア、コレ、息がはずむ。どうする〳〵。
ト云ふを構はず、グッとしめる。兩人、七轉八倒して苦しみ、見事に一度に宙返りして死ぬ。願山、見て
願山　ア、、、蛙は口から。雉子も啼かずば打たれまいもの。ア、、無益の殺生。南無阿彌陀佛々々々々々。
ト二品へ立寄る。ドロ〳〵にて五體痺れる。これにてフッと我が兩手に心付き。
ハ、ア、これぢやな。併し、顏見世早々、大きんが手に入るとは、耳寄りぢやわえ。
ト手水鉢にて手を洗ひ、嗽ひなどして、九字を切り、今の二品を取上げる。下座にて、人音するゆゑ。ちやつと懷中へ入れ
ト思ひ入れあつて下座へ入る。「神事の始まり」と呼び神樂にて、願山、入りしまふと、また呼びありて、正面の段幕を切り落す。千枝、初霜、振り袖着流しの上へ狩衣、金の烏帽子を着て、銀張りの汐汲み桶をかたげて、所作の鳴り物にて、兩人見得よく舞臺先へ押出す。
範純どのゝ見えるまで、神職の緣の下にて……さうだ。
千枝　立別れ、稻葉の山の峯ならで、お召しに應じ今爰へ來つゝ馴れにし狩衣。
初霜　まつ年月のお取立て、替らぬ色の男山、男なりけりこの姿。
千枝　いつ〳〵までも小佐川の、流れは盡きぬ俤と
初霜　中山々の御贔屓を、偏へに願ひ
兩人　上げまする。
トお目見得、ちよつと辭儀して
さればとよ。
ト唄のかゝり、所作の鳴り物になり、兩人、華々しき所作ありて、めでたけれと納まる。向うにて「須賀川九郎範純參詣」と呼び。太鼓謠になり、花道より、範純、百日鬘、長上下の形。軍平、足輕の形にて、神酒三方を持ち出て、花道にとまる。下座より、大宅三郎、長奴にて出て、千枝、初霜、三人出迎ひ
千枝　只今御參詣。
初霜　御代參として須賀川九郎範純さま。
三郎　遊ばされましたかな。
範純　今一陽の時を得て、南枝始めて開く頃、身不肖なれ

ども九郎範純、君命に依つて當社八幡への參籠。

軍平　お供にくッつく某は、範純さまのお氣に入り、新參ながら當社の固め、物數岩沼軍平と申す、足輕でござりまする。

範純　殊さら景成の息女、千枝どの、勝田の妹初霜どのには、神事今樣の役目。まつた添へ人にて大宅の三郎どの、奴出立ちも一興々々。何れもお役目御苦勞に存ずる。

三郎　然らば景成の社參まで、範純どのにも、イザ先づこれへ。

千枝　お通りあられませう。

範純　御免下されい。

トまた太皷謠にて、範純、上へ通り、床几にかゝる。軍平、下に扣へ、千枝、初霜、三郎、並よく居並ぶ。

早速ながら權の太夫景成には、最早神拜召されてござるかな。

千枝　アイヤ、父景成には、我が君義家公、何か御用の筋ござりまして、今朝未明に登城いたし、未だこれへは參りませぬやうにござります。

範純　すりや、景成には。

ト思ひ入れあつて

主命々々とお云やるが、當社神酒頂戴の役目は、景成と某。今朝登城おしやつても、直にこれへ參らねば、相濟まぬ役目。心得難き景成の遲參。

軍平　左樣でござります。お家にあつては三浦の平太夫、鎌倉權の太夫、人も知つたる兩執權。これは聞えた銘々の役目を、疎かになさるゝは、景成さまには、お年の加減と見えますわえ。ハヽヽヽ。

三郎　ヤア、陪臣の岩沼軍平、詞が過ぎる。扣へて居られい。

軍平　イヽヤ、扣へますまい。此方の主人は、御用繁き御中にも、斯樣に參籠あるを、遲參召さるゝゆゑ、陪臣でも云ふ事は云ひますワ。

三郎　なにを。

軍平　ムウ。

トきつとなる。

範純　コリヤ〳〵、軍平扣へい。

軍平　でも。

範純　ハテ、慮外であらうぞ。

ト思ひ入れにて云ふ。

軍平　へ、イ。

ト抑へる。

初霜　兄成信にも、追ッつけ社參。景成さまも御同道でがなござりませう。九郎さまにも暫らくがうち

千枝　お待ちなされて下さりませい。

範純　如何にも〳〵。ナニ軍平、申しつけたる警固の下部は、如何いたしした。

軍平　仰せの通り、觸れ置きましてござりまする。

ト花道へ向ひ

ヤア〳〵、お供の行列、警固の固め、合點か。

ト向うにて

四人　オ、サテ合點だ。

ト渡り拍子になり、花道より、朱雀の刎平、右白狐竹平、左青龍平、玄武の龜平、一對の捻切り奴にて、鳥毛の鎗を持ち出て來り、四人、花道に見得よく並び

刎平　仰せに從ひ未明から、頭も尻も寒晒し、一番鷄の聲に連れ、眞先かけし朱雀の刎平。

竹平　受取つたりやその次は、三年振りの返り咲き、梅に緣ある右白狐竹平。

龍平　我れらは新米二合半、升で量つた色奴、行列揃へてつん出たる、ドッコイソッコイ左青龍平。

龜平　さてどん尻の押へには、お先揃へのお先者、論より證據玄武の龜平。

刎平　皆々これまで

四人　相詰めましてござりまする。

トばら〳〵と本舞臺へ來る。

三郎　範純公の思し付き、揃ひの看板某も、今日一日は仲間入り。サア〳〵、これで寬ろぎ召されい。

範純　成る程、光任の詞の如く、貴殿も、今日は下部同然、あいらと一緒に酒盛りでもするがよい。ア、日頃から物堅い、權の太夫に引替へて、あでやかな千枝の君。常常目顏で知らす、範純が心の內、なんと思し召してござるな。

ト千枝が手を取る。

軍平　イカサマ、美しい花の色達。この軍平めも、あなた樣に。

ト初霜に抱きつく。

初霜　ア、コレ、何しやるぞいの。

千枝　ア、モシ、左樣な事は存じませぬわいなア。

範純　何をするとは曲がない。そもじには恥かしながら、

新參なれども、當時出頭の範純、返事はならぬか、但し
は嫌か。
千枝　サア、それぢやと申しましても。
範純　エヽ、なんの恥かしい事がある者だ。嫌だとあれば
無理往生。
ト引寄せにかゝる。軍平も初霜に取りつき、しなだれ
る。三郎、見て引分け
三郎　お役柄にも似合はぬ主從。
範純　今日一日は下部の光任。何が似合はぬ。
三郎　サア、それは。
軍平　扣へて居さつしやいな。
トこの時、千枝、懷中より一通を落す。範純、取上げ
見て
範純　こりやアなんだ。
ト千枝、ちやつと取り、懷中する。
名宛の知れぬその一書。イザ、開封なして。
千枝　イエ／＼、これは父上へ、屆けまする大切な書き
物。
範純　見せぬからは、さては痴話文。
千枝　どうしてそんな。

範純　そんなら某、開き見ようか。
千枝　サア、それは。
軍平　イデ私しが。
初霜　イエ／＼、何か存じませぬが、大事の書面。例へ範
純さまにもせよ、御覽なされて仰せ譯は。
範純　見せぬは曲事。それだに依つて。
トまた取らうとするを
千枝　この書き物は、大江の匡房さまより、我が君樣へお
上げなされまする、御書翰でござりまするゆゑ、あなた
樣へお目にかけます事は、なりませぬわいなア。
トきつとなる。範純、軍平、思ひ入れ。
軍平　大江の匡房卿より、義家公へお上げなさるゝ御內意
とな。
範純　兼ねて匡房卿の息女歌綾姬、義家公にお心あるとの
儀。すりや矢ッ張り痴話文。さては千枝どのには、その
仲立ち召さるゝな。
千枝　イエ、全く以て。
範純　そんなら見ようか。
千枝　サア、それは。
範純　サア。

兩人　サア〳〵。
範純　面倒な。軍平、計らへ。
軍平　畏まつてござりまする。
　ト向う揚げ幕にて
景成　方々待つた。
範軍　なんと。
景成　鎌倉權の太夫景成、只今參籠いたしてござる。
　ト大拍子になり、花道より、景成、老けたる拵らへ、上下大小にて、三方に額を載せ持ち出る。侍ひ兩人付き添ひ出て、直ぐに本舞臺へ來る。
範純　こりやア權の太夫景成どの。
軍平　只今御社參
奴四　なされましたかな。
景成　範純どのにはお早い御社參。昨日仰せ渡されには、今日巳の刻、某貴殿同道にて、參籠いたせよとの君命。然るに昨夜、急に御用の筋ござつて、罷り出よとの儀。それゆゑ今曉寅の刻に、御殿へ上がり、戻ると貴公のお出で相待つところ、その儀なく、如何の遲參と存ぜしところ、早お出でと家來の口上。取る物も取り敢へず、御武運長久祈願の額、持參いたして參る道すがら、あれにて見請けしところ、成信の妹御初霜どの、拙者が娘千枝を捉へ、爭論の樣子。こりや如何の譯でござるな。
初霜　サア、それは、アノ千枝さんの持つてお出でなさした狀を。
千枝　コレ、ア、、モシエ。
　ト思ひ入れ、景成、頷き
景成　ヘエン〳〵、ア、なにか、娘が所持いたし居る書狀の事か。
初霜　左樣でござりまする。
千枝　サア、匡房さまより
　ト云はうとするを
景成　ハテ、何をツベコベ。女賢しうて牛賣り損ふと、扣へて居れ……。兼ねて我が君義家公、歌道にお心寄せられ、さるに依つて衣川の一戰にも、歌に免じて敵將貞任を見遁がし給ひし寛仁大度。上を學ぶ下として、女童を捉へ。
　ト範純へこなしありて
こりや範純にも、歌道御執心にて、御覽なされたいとお云やるのでござらうがな。
範純　歌か連歌か存ぜぬが、何か色めく忍摺り。もしや陸

奥。

景成　アイヤ、色紙は雲形、大内模様。殊に我が君のお歌の點削、まだ御披見もなきうちに、餘人へ見せるは主人へ恐れ。殊さら今静謐に治まるといへど、武士たる者は心がけ、矢の根を磨く暇なければ、即ち娘千枝へ仰せつけられしと、兼ねて景成承はる。萬一御書に過ちあらば、他役の其許、仰せ分けられればしござるかな。

範純　サア、そりやア。

景成　斯様な場所に、長居いたすは女儀の不覺、初霜諸とも、娘にも役目終らばこの座は立ちやれ。

千枝　左様なら父上様。

初霜　御兩所様。

三郎　ドリヤ、御一緒に參るでござらう。

ト合ひ方になり、三人、奥へ入る。範純、軍平、見送る。

景成　然らば範純どの、參詣仕らうではござらぬか。

ト時の鐘。

範純　最早巳の刻。御同道仕らう。

軍平　イザ、お入りあられませう。

ト範純、神酒を持ち、景成、額を持ち、軍平、侍ひ付き下座へ入る。矢張り大拍子の神樂にて

例平　ヤレ／＼、草臥れた／＼。

竹平　ドリヤ、一服やらかすべいか。

龍平　此うち、ちつと樂をせうか。

龜平　それがいゝ／＼。寝轉べ／＼。

ト四人、胡坐をかき、摺火打ちにて莨のみ居る。テンツヽになり、鼠婆ア、やつし婆アにて、本を包んだ小風呂敷を持ち出て來る。足輕兩人、棒を持ち

足輕　下がれ／＼。

ト出て來て、花道にて

鼠婆　なんのこつたな。このおさぶ達は、下がれ／＼と、南風をくらつた魚ぢやアあるまいし。わしやア今日この八幡様に、御神事があると聞いたゆゑ、錢儲けをしようと思つて來た婆アサ。大勢ぢやござりやせん。通してやつて下はりまし。

足一　ヤア、ならぬ／＼。大切な神事の庭先。

足二　賤しい老女め。

兩人　下がらぬか／＼。

ト立ちかゝる。

鼠婆　おきやアがんなさい。わしは乞食ぢやアないよ。忝

なくも歌占ひの鼠婆アと云ふ阿母様だ。今日この所へござる、須賀川九郎さまに用があつて來た。わしよりお前方、早く下がんなさい〳〵。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。四人、見て

四人　なんだ、喧ましい。どうしたのだ〳〵。

足一　今日御神事のお庭先へ、ツカ〳〵通りまするゆゑ、差止めましたところ、須賀川九郎さまに御用があつて、參つたと申し、なか〳〵我れ〳〵どもの申す事を聞きませぬ。片意地な婆アめ。

兩人　下がらぬか〳〵。

刎平　なんと云ふ。おらが旦那に用があつて、來たと云ふのか。

鼠婆　左様サ、範純さまに、ちつと用がありサ。

竹平　そんならおいらが、爰で吟味するから、貴様方は詰所へ行かつしやるがよい。

兩人　そんなら、よいやうにお頼み申します。

ト引返し入る。

龍平　時に婆アどん、おらが旦那に、なんの用だ。

鼠婆　なんの用か、逢へば直に解ります。わしやア斯う見えても、見通しの鼠婆アと云つて、歌占ひサ。

竹平　なんだ、歌占ひだと云ふのか。

鼠婆　左様サ。

刎平　そんならおいらが旦那へ、その通り云ふから、爰にちつとのうち待つて居るがよい。

ト四人、下座へ行く。

鼠婆　アイ〳〵、奴さん、早くしておくんなさいよ。

ト其所らを見て居る。合ひ方になり、下座より千枝、初霜、出て來る。四人の奴も後より出る。

千枝　いま話しのあつた歌占ひの婆様とは、お前の事かいな。

鼠婆　アイ、わつちサ。お前方、なんぞ見て欲しいかえ。

初霜　サア、わたしらが願ひの、どうぞ叶ふやうに。

鼠婆　オツと、それでよし〳〵。もう何も云ひなさんな。サア、これからなんでもお前方の好きな歌を、一首づゝ百人一首のうちで、上の句でも、下の句でも云つて見なさい。

千初　そんなら歌を、何なりと云ふのかえ。

鼠婆　左様サ。

ト包みより、本とめど木を出し、投げて居る。

千枝　時鳥、啼きつる方を眺むれば……これでよいかえ。

鼠婆　よし〳〵、時鳥啼きつる方を眺むればとは……時鳥は高く飛ぶ鳥。こりやお前は、雲の上と云ふやうな、位の高いお人から、何か頼まれなさんしたが、その返事がまだ屆かぬと云ふ占ひぢやわいなう。

千枝　ほんに、よう當つたわいなア。

初霜　サア、その返事が、近々にござんせうか。それ見て下さんせえ。

鼠婆　サア、今の下の句は、只有明の月ぞ殘れると云ふから、この月のうちには好い便りがござりますわいなア。

初霜　ほんに見通しぢやわいなア。

竹平　なんだか姐さん達が、無性に當つた〳〵と云ふが、ドレ、おれも一番見てもらはうか。

刎平　歌はなんだ。流行り唄かそゝり唄か。

ト鼠婆ア、本を見て、指を繰りなぞして

鼠婆　もうよし〳〵。先づお前のは

ト算木を投つて見て

宇治の川霧たえ〴〵に……ア、、これはむづかしい。昨夜なんでも盆茣蓙ぐるみ、取る氣で張りかけたところ、皆たえ〴〵と負けてしまはしやんしたの。

竹平　きついものだ。大當りだ。

刎平　おれはどうだ〳〵。

鼠婆　サア、お前のはその下の句。顯はれ渡るぜゝの網代木。あぢにもつれて錢は種なし、他所の婦アと色をして御亭主に見つかつた事があらうわいの。

刎平　こいつは嚴しいものだ。

龍龜　おいらも見てもらはう〳〵、

トわや〳〵云ふ。此うち、千枝、初霜、入る。

鼠婆　ア、コレ、其やうにワヤ〳〵云ふと、歌がこぐらかつて占ひが揉めるから、先づ順々にして、お初穗を先へ出すがよい。

龜平　なんだ前錢だ。

龍平　とんだ見世が出たな。

鼠婆　さうせぬと、錢を取りはぐりますワ。イヤ、今の姐樣達はどうした。まだ錢を取らない。エ、、この折助めらが、あんまり喧ましく云ふうち、ツイ逃がしたか。

竹平　なんだこの婆アめ、折助だ。

鼠婆　云つたがどうした。

龜平　おきやアがれ、はッつけ婆アめ。

ト打つてかゝる。

鼠婆　たわ言を吐くと、股倉へひつぱさんで、もゝんぢい

に食ひつかせるぞ。
トわや〳〵摑み合ひになる。トヾ鼠婆アを突き倒し、四人一度に下座へ逃げて入る。鼠婆ア、起き上がり、
オヽ、痛い〳〵。とんだ目に遭つた、錢も取らずに折助めにかゝつて、大きな損をした。忌々しい。
ト足腰を擦り
これがほんの、陰陽師、身の上知らずだ。
ト神樂になり、鼠婆ア、今の四人が後を追ふ心にて同じく下座へ入る。ト薄ドロ〳〵、樂になり、日覆より誂らへの雲氣下りる。花道より、勝田の次郎成信、上下大小の形にて出て、この雲を見て、花道にて見得。

成信　ハテ、心得ぬ。時は今午の上刻、白晝盛んの折に臨み一順の雲起り、鳴動なすは、夜陰に等しき雲間の有樣。すべてこの雲起る時は、破軍星光を失ひ、武曲星は赫燿たりと聞き及ぶ。察するところ此あたりに、叛逆の族、身を竄し、折を窺ふ印なるか。四年振りにてお館へ、立戻つたる勝田の次郎成信が、奉公始めの宮詣り、何にもせよ、怪しき雲氣の有樣ぢやなア。
トどろ〳〵の樂やむ。雲消える。成信、本舞臺へ來ると、バツタリ音して、本神樂になり、廻廊の蔭より、雲夜叉、黑具、忍びの形にて、袋に入れし一腰を持ち、窺ひながら出る。成信、ちよつと小隱れする。

雲夜　範純どのに賴まれて、奪ひ取つたる小烏丸の一腰。
ト腰へ差し
忝ない……さうだ。
ト頷き、花道へ行かうとする。成信、ツツと出て

成信　待て。爰は所も男山、朱の玉垣奪はんと、淺紫の畫鳶。勝田の次郎成信が、目にかゝつたは百年目。その品置いて繩かゝれ。
ト引留める。

雲夜　ハヽヽヽ、吐かしたりほざいたり、見付けられたら命がけ。一足飛びのこの仕事。早く其所明け通せエ、。

成信　面倒な。盜賊。うぬら如きを物の數。覺悟なせ。

黑夜　くたばれ。
ト拔いて切りつけるを、手を捻ち上げ、取つて押へ、下げ緒にて直ぐに雲夜叉を縛り上げる。
エヽ、忌々しい。

成信　盜賊め、うせう。
ト時の太鼓になり、引立てゝ下座へ入る。チヨン〳〵と、この廻廊を引いて取る。

本舞臺、三間の間、綺麗なる障子屋體、沓脱ぎの石、下に柴垣、紅白の梅の盛り、好みの通りの道具に納まる。

ト下座より、願山坊主、以前の形にて二品を持ち、出て來り、あたりを窺ひ、こなしありて

願山　鈍純さまに頼まれて、盜み取つたるこの院宣。矢ッ張りおれが預かつて、氣ぶつさいな奴等をば、押片付ける此方の目論見。褒美の金と引替へて、重荷に小付けのこの連判。ア、コレ、何所ぞへ隱して置きたいものぢやが。

トあたりを見て

オヽ、あるぞ〳〵。

ト沓脱ぎの石を見付けて、重さうにこれを取り退け、白木の箱と院宣を隱さうとする。面白き合ひ方になり石の側より、蛙四五疋飛び出る。

人が見たら蛙になれ〳〵。

ト蛙を見て

イヤア、これサ、まだ早いワ。おれだワ〳〵。

トをかし味の振りにて、蛙を取らんとする。蛙飛ぶゆゑ、これを追ひかけ廻り、フッと二品を見て

おきやアがれ。矢ッ張り本の蛙だ。

ト二品を隱し、石を元のやうにして

この連判は金と引替へ。大切の物。

ト懷中へ入れ、ツイと下座へ入る。時計の音、合ひ方になり、障子開く。と景成、以前の形にて居る。下座より、鼠婆ア、ツカ〳〵と出て來る。

景成　老女待て。

鼠婆　ハイ〳〵、私しに御用でござりますか。

景成　其方は何者ぢや。

鼠婆　ハイ、私しは見通しと申しまする、歌占ひでござりまする。

景成　歌占ひとは珍らしい。近う參れ〳〵。

鼠婆　これはお殿樣、有り難うござります。

ト景成をつく〴〵見て

先づ見上げましたところが、御大家のお殿樣と、色に出にけり我が戀はと申す、上の句が浮みましてござりまする。

景成　ムウ。すりや、百人一首のうち、平の兼盛の歌か。

鼠婆　左樣でござりまする。物や思ふといろ〳〵と、お主

様の爲に御苦勞遊ばしましても、とんとお心の休まる間がござりませぬ。
景成　イカサマ、尤も。
鼠婆　それぢやに依つて、人の問ふまでと、お待ちなされませず、外に主取りをなされますが、こりやよろしうござりますわいな。
景成　フム。して、某に勸むる主人と云ふは何人。
鼠婆　サア、その御主人様には、好い御主人がござりまする。
景成　吾妻訛りの島爽か。
鼠婆　エ、。
景成　默らう。茲な慮外者めが。老女と思ひ免し置けば、權の大夫景成に向ひ、主取りせいと勸むる過言。何かは心企みのある奴。イデ某が。
ト下りようとして石へ足をかける。薄ドロドロにて景成、總身痺れしこなし。鼠婆ア、この間に立つて
鼠婆　ドリヤ、お臺所へでも參りませう。
ト下座へ入る。
景成　合點のゆかぬあの老女。最前物蔭より見るところ、須賀川九郎と親しき様子。引ッ捕へて糺明と、立寄らんとするに、放心なして見失ふ。さては邪法を行ふ曲者なるか。ハテナア。
ト奥にて
範純　權の太夫景成どの、九郎範純、御意得申さん。
ト管絃にて、範純、出て來る。景成、見て
景成　これは九郎どの、神酒頂戴の神拜相濟み、御歸宅ありしと存じの外、未だこれにお出でござりしな。
範純　如何にも。主用相濟み罷り歸るべき某、遲滯いたすは詮議の筋がござる。
景成　フム。御詮議とは、そりや何者。
範純　科人は勝田の次郎、詮議と申すは外でもござらぬ。即ち貴殿でござる。
景成　何がなんと。
トきつとなる。
範純　去んぬる頃、大江の匡房卿より、中將實方、申し下ろせし追討の院宣。兼ねて勝田の次郎預かり奉る。然るに紛失なし、申し譯には成信は、切腹なさんと覺悟を極めし様子。これ大それた科人。まつた詮議と申すは貴殿。預かりの小烏丸の名劍、最前神拜の砌り、神前に飾り置きしと承はる。範純拜見いたしたい。それにござらばお

見せ下されい。

ト景成、思ひ入れありて

景成　何事かと存ぜしところ、小烏丸の御劍、御覽なされたいとな。

範純　なか／＼。

景成　お心安い儀、隨分お目にかけませう。

範純　兩人立會ひの上檢分なせと、役目を蒙むりし須賀川九郎。私用でござらぬ、上使でござるぞ。

景成　ハツ。

ト平伏して

ヤア／＼、大宅の三郎、娘千枝、申しつけたる品をこれへ。

千三　委細畏まつてござりまする。

ト管絃になり、千枝、裲襠にて、長柄の銚子を持ち、三郎、上下衣裳に改め、三方へ面桶を載せ持ち出て來り、三郎、範純が側へ三方を直す。範純、一目見て

範純　こりやアなんでござる。

景成　それが即ち御上使への御饗應。

ト範純、ギックリ思ひ入れあり

範純　上使へ馳走に、持つて出た物を見りやア、むさい汚ないこの面桶。三郎、われは氣が狂つたか。

景成　アイヤ、その一品、範純どのにはお覺えがござらうがな。

範純　何がどうした。

ト下座にて

成信　盜賊め、立たう。

ト時の太鼓になり、成信、軍平。雲夜叉を引立て出る。範純、雲夜叉を見て、思ひ入れ。

景成どの、これにお出でござるか。最前當社へ參る道すがら、怪しき曲者、引ッ捕へましてござる。

軍平　御主人の云ひつけ、院宣紛失の越度につき、仰せを請けて付き添ふ軍平。その盜賊が院宣の盜人でござりますかな。

成信　イヤ、此奴は誠に晝鳶、高の知れた盜賊なれど、その賴み手を只今これにて、白狀いたさせん爲。サア、何者に賴まれた。それ吐かせ。

雲夜　知らない／＼。何もそんな覺えはないワ。

成信　吐かさにや、斯うして。

ト刀の鐺にてこち上げる。

雲夜　ア、、痛い／＼。白狀するから緩めて下さい。

成信　サア、早く吐かせ。
　ト縊める。雲夜叉、ばつたり轉ける。軍平、立寄つて引立て見て
軍平　ヤア、此奴はモウごねてしまひました。
成信　なんだと。
　ト立寄り見て
　ヤア、……詮議の種のこの盗賊、舌喰ひ切つて絲切れたか。ホイ。
景成　ナニ、盗賊は自殺なしたるとや。
成信　如何にも。さりながら、奪ひ返せしこの一振り。
　ト太刀を見せる。
景成　こりやコレ、小烏の御劒。
範純　ドレ。
　ト取上げ、袋より出して見て
　こりや奉納の木刀。アノこれが小烏丸の名劒か。
景成　サ、その儀は。
成信　ナニ、木刀とや。
　ト取上げ見て
　さては疾より入れ替へしよな。
軍平　口から高野と、科を重ぬる勝田の次郎、この軍平が。
　ト成信へかゝるを留め
成信　ドッコイ、まだ其方如きの自由にやならぬこの成信。斯う云ふ事もあらうかと、怪しき老女、景成どのと云ひ合せ、奥庭に搦め置いてござる。
範純　ナニ、老女を縛しめ置いたと云ふか。
成信　如何にも左様。
景成　些細な事にお構ひなく、お望みの小烏丸、御覧あつてお歸りなされい。娘の千枝は館へ戻り、申しつけたる事を、心得たか。
千枝　畏まりましてござりまする。
景成　まつた三郎には、武則どのへこの場の樣子を、一刻も早う。
三郎　心得てござる。イザ、千枝どの、御同道仕らう。
千枝　そんなら父上、次郎さま。
景成　早く行け。
千三　ハッ。
　ト三重になり、千枝、三郎、向うへ入る。
成信　サア、これからは成信が、景成どのに成り代り、御馳走申すは範純主從。どうやら風が變つた。落ちついて

居さつしやれ。
範純　望みかゝつた小烏丸、また院宣の行き道も
景成　白い黒いは今に知れます。待つてござれサ。
範軍　アノ、たつた今。
成信　ドリヤ、そろ〳〵御馳走にかゝらうかな。
ト股立ちを取る。軍平、範純へ目配せ。
範純　ムウ。
ト抜きかける。景成、扇にてちよつと留め、軍平は成信押へる模樣にて
景成　ハテマア、下にござりませサ。
トよちんと障子下がる。と軍平、成信、下座へ入る。引違へて、願山坊主、駈けて出て來り
願山　ア、コレ、邪魔な物を預かつて、置き所に困るわえ。
ト連判狀を其所へ置いて見たり、股倉へ入れたり、いろいろして居る。下座より、以前の奴四人出て來り
四人　願山坊、其所に居るか。
願山　エ、。
ト大きに愡りする。
剱平　何をそんなに愡りする。

願山　それぢやと云うて、アノ、人に物を云ふなら云ひやうもあるもの。ア、、愡りした〳〵。
ト胸を撫でる。
竹平　其やうに臆病では、わりや旦那の家來にはなられぬわえ。
四人　ハ、、、。
願山　イエ、なられます。斯う見えても、劍術柔術……併し、今にも侍ひになるのに、坊主ではをかしなものぢやて。
龍平　それ〳〵、それでてまへを、先づおいらが仲間へ入れて、奴にして使ふと旦那が云はつしやるから。
竹平　剃刀を持つて來た。サア、月代を剃つてやらう。
龜平　好い男になるがいゝ〳〵。
願山　それは忝ない。そんなら賴みます。
ト手水を使ふに番手桶を持ち來り、柄杓にて汲む。
龜平　剛氣に強い毛だ。
竹平　サア〳〵、やりかけべい〳〵。
ト竹平、願山が月代を剃る。願山、顏をしかめたり、いろ〳〵して、奴頭に剃りしまふ。
サア〳〵〳〵、よい〳〵。

三人　飛んだ好い男になつたわえ。

願山　そんならこれから又、色が出來るでござりませう。

ト水鏡にて見て、合せ鏡に柄杓振り上げ、頭へざつぷり。

オヽ冷たい。

ト頭撫で廻す。

四人　おきやアがれ。

刎平　これから先づ鎗の持ちやう、行列を覺えねばなるまい。

竹平　それ〳〵、お玄關前の投げ草履。

四人　敎へてやらう〳〵。

願山　そんならやりかけて見ませうか。

四人　やツつけろ〳〵。

ト行列の鳴り物になり、敎へろ。願山、いろ〳〵して出來ぬ思ひ入れ。

エヽ、不器用なべら坊だ。

ト突きこかす。懷中の連判落ちる。

そりやアなんだ。

ト寄るを、ちやつと懷中へ入れ

願山　ドリヤ、九郎さまにお目にかゝりませう。

 トついと奥へ入る。四人も捨ぜりふにて入る。障子の内にて

鼠婆　アヽコレ、どうさつしやります〳〵。

成信　サア、俗姓を名乘つた〳〵。

ト障子上がる。鼠婆アを成信引きつけ居る。上に範純、景成、居て

範純　老母を手籠めになすとても、外に名乘る名は持たない。

景成　ヤア、須賀川九郎範純と名乘り、入込みし紛れ者、疾よりそれと睨みしゆゑ。

成信　景成どのと云ひ合せ、餌にかゝつたる院宣小烏。

範純　斯うなるからは破れかぶれ、乞食の五郎太とは、おれが事だワ。

成信　イヤ〳〵、一通りの非人であるまい。何者に賴まれた。

軍平　オヽ、その賴み人は爰に居ますワ。

ト出て來る。

景成　足輕風情の身を以て、非人を語らふ謂れなし。爰へ出たのは自業自得。われも本名を名乘れ〳〵。

軍平　江戸部屋の軍平と云ふより、外の名はないワ。

成信　いつその事にこの婆アを。
　ト引立てる。鼠婆ア、懐劍を拔き
鼠婆　悴の五郎太、母に心殘さず働らけ〳〵。南無阿彌陀佛。
　ト自害と見せて、成信、景成へ突いてかゝる。成信、身をかはし、一刀に鼠婆アを切る。この血、石へかゝる。ドロ〳〵にて成信、タヂ〳〵となる。
成信　さてはその石面の下にこそ。
範純　それを。
　ト左右よりかゝるを突き廻し、手早く成信、石を退け、下より以前の二品を取出し、開き見て
成信　さてこそ院宣。
景成　この一品は。
　ト箱を打ち碎く。書き物出る。景成、取上げ見て、調伏の呪詛の文。願主は即ち
　ト讀まうとして思ひ入れ。
範純　なんと書いてある。
成信　景成成信。
　ト讀み
　ハヽヽ、あざとい猿智惠。

軍平　さては謀叛の企てに、院宣を隱し置いたな。
範純　小烏丸と木太刀と摺替へ、荷擔なしたる權の大夫。
軍平　なんと違ひはあるまいがな。
景成　愚かな愚人め、小烏丸の名劍は、假初めならぬ源家の御寶。即ち八幡宮の神藏へ秘め置き、即ち御神體と崇め置くは、この景成が計らひなるワ。
軍平　もうこの上は、兩人觀念。
　ト拔いてかゝる。成信支へる。
範純　さうだ。
　ト側なる神水の井戸へ飛び込む。
景成　さてこそ拔け道。
　ト成信、續いて入る。軍平やろまいとするを、景成、立廻りに留めて障子へ上がり
　サア、汝下部となりて入込むとも、誠は奧州の浪人、芦名の次官であらうがな。
軍平　斯くなる上は何をか包まん、汝等二人を罪に落し、同士討ちさせん計略。五郎太と云ひしは伊達の冠者。如何にも某こそ、芦名の次官國連なるわやい。
景成　さてこそ推量の通り。イデ繩打つて御前へ引く。覺悟なせ。

次官　何を小積な。

ト切りかける。景成も拔き合せ

景成　無道の國賊、命を絕つぞ。

ト切り結びながら兩人、下座へ入る。バタ〳〵にて、願山、連判狀を持ち駈けて出る。初霜、一腰差し、續いて出て

初霜　合點がゆかぬ修驗の僧。その一品、此方へ渡せ。

願山　女のいらざるほてでんがう。渡す事はならない。それとも心を入れ替へて、おれが女房にでもなる氣なら、ちよつと位は見せもせうかえ。

ト茶にして寄り添ふ。

初霜　この期に及び不敵の有り條。女子でこそあれ勝田の次郎が妹初霜。その品取らいで置かうか。

ト詰め寄せる。

願山　小積なふん張り。さう土性骨が廻つたら、おれ樣の引導で、浮かませてやらう。冥途へうせろ。

ト其所にある六尺棒にて打つてかゝる。初霜、身を開き、一腰を拔きかけ留め

兩人　どつこい。

ト誂らへの鳴り物になり、タテありて、初霜が拔身を願山もぎ取り、棒にてかゝる。連判落す。初霜、取つて駈け出すを、願山、慌てゝ棒を捨てゝ引戻し、鳴り物替つて、兩人、この連判を枷にはしこきタテ少しあつて、風の音になり、この連判、雲井遙かに吹き上がる。

願山　南無三、それを。

ト飛び上がる。段々吹き上げて向う棧敷へ引取り、初霜、邪魔するゆゑ、ちよつと當てア、これ、風々々。

ト追つて向うへ入る。初霜、心付き

初霜　いづくまでも。さうぢや。

ト早神樂になり、願山が後を追ひ、揚げ幕へ入る。チヨンチヨンと、この道具ぶん廻す。

本舞臺、本社の裏を見せる。寶藏、玉垣、境內の道具になる。トばつたり音して、壁を切り破り、本神樂になる。範純、四天の誂らへの形にて、鼠婆アが切り首を咥へ、拔き刀を提げ、小烏丸を腰に帶し出て

範純　景成成信二人の奴等が目を眩まし、奪ひ取つたる小烏の名劍。さりながら、本意なきは母の亡骸。寶の穢れ。

ト首を見て、ちよつと愁ひのこなしあり、首を埋め、小烏丸を持ち行かうとする。ト切り穴より成信、窺ひながら出て、この時範純が裾を捉へ

成信　芦名の次官が生ひ立てし、伊達の冠者範純、名劍渡して腕廻せ。

 トしつかり留める。範純、思ひ入れありて振り切る。

範純　又しても邪魔だてひろぐ勝田の次郎、其所退いて通せ。

成信　イヽヤならない。腕廻せ。

範純　なにを。

トきつと思ひ入れ。バタ／＼にて、軍平、景成、切り結びながら出て來り

景成　天命遁がれぬ叛逆人、汝が奪ひし小烏は、似せ物なるワ。

範純　何がどうした。

景成　誠の御劍は斯く云ふ景成。差添に仕込み、肌身離さず守護なし居るワ。

ト範純、小烏の中身を見て

範純　計る／＼と思ひしに、汝等が手段に乘つたか。殘念。

ト投げ捨てる。

成信　最早叶はぬ。腕廻せ。

軍平　もうこの上は死物狂ひ。死人の山だ。者ども、ソレ。

大勢　ハア。

トどん／＼になり、軍兵八人、バラ／＼と出て、弓矢を持ち、範純、軍平を取卷く。

範軍　こりや、どうだ。

景成　汝が伏せ置く同勢は、殘らず討取る上からは、サア速やかに縄かゝれ。

範純　母の弔ひ死人の山、切つて／＼切り拔ける。觀念。

成信　及ばぬ廣言、イデ某が。

景成　待つた。いま討取るは易けれども、云はゞ神事のこの庭先。御寶に恙なき上は、放し歸すが放生會。

成信　今は此まゝ別るゝとも。

軍平　また重ねての參會には

範純　うぬらが首は、うぬらに預けた。

ト立廻り。

皆々　ドツコイ。

ト皆々好き見得になり、賑やかなる鳴り物になりて、

この道具を又ぶん廻す。

本舞臺、一面の山幕、嶮岨の飾りつけになり、岩臺の上に金の八郎爲時、木樵にて、柿の頭巾、叶ひ升の衣裳、大鉞を擔ぎ居る見得にて、舞臺眞中へ押し出す。

ト風の音になり、以前の連判、中空に吹き舞ふ。爲時、これをキッと見上げ

爲時　ハテ心得ぬ。爰は所も男山、金の八郎爲時が、山巡りして遙々と、親はお江戸に魂ひを、殘して丁度六年振り。惠みも深きお取立て。お目見得なさんその折から、あれなる雲間に、アレ／＼／＼。

トこなしあつて

正しくあれこそ連判狀、手柄始めに爲時が、ソレ。

ト鉞にて叩き落し、連判を取上げ見る。上下より四人、人形仕立ての捕り手にて出て

捕一　金の八郎爲時、その連判を

四人　此方へ渡せ。

ト爲時、ヂロリと見やり

爲時　こりやア、わいらは何とする。

捕一　何とするとは知れた事。御馳走に出た我れ／＼は

捕二　うぬを生捕る四人づめ。

捕三　細言云はずと

四人　腕廻せエ、。

ト爲時、カラ／＼と笑ひ

爲時　ハヽヽ、吐かしたり才六めら。腕に覺えの爲時が、向島から受け繼いだ、力は御贔屓千人力。うぬら一々毆り殺すぞ。

範純　面倒な。ソレ。

爲時　なにを。

皆々　ドッコイ。

ト大太鼓入りのタテの鳴り物になり、四人を相手に華華しくタテありて、ト、松の木を根こぎにして、四人をなぐりたて、荒事存分ありて爲時、大鉞振り上げ立ち身。四人よろしく引ッ張り。片シャギリにて

幕

第一番目四建目　岩手山の場

役名──安倍貞任。同女房、雄島。

本舞臺、向う黑幕。上に松の枝、壺の石碑。正面、一面の藪疊。上の柱際に物さびたる辻堂。舞臺に蝶二三羽舞つて居る。時の鐘にて幕明く。

ト辻堂の內より女順禮雄島立出で、この蝶を見て舞臺へ下りる。蝶々を消す。

雄島　世の盛衰とは云ひながら

ト　あたりを見て

奧州五十四郡の棟梁たる、夫貞任どの、衣川の一戰より別れて丁度三歲あまり。娘千代童姬が在所を尋ね求めよと云ひつかりしが、今に在所も定かならず、もしも今にも夫に逢はゞ、何と云ひ譯せんものと、心遣ひの旅疲れ。あの辻堂にて思はずも、とろ〳〵と眠りのうち、今の胡蝶に引替へて、三韓攻めのその樣子。連綿たりし家筋も、先祖は異國三韓の胤なりと、常々夫貞任どのゝ詞。八幡太郎義家が爲に、漂泊したる我れ〳〵が、恨みは義家親子のうち。ハテ、心よからぬ夢であつたなア。

ト此せりふのうち、六部の合ひ方かすめて、見計らひよろしくあるべし。後より黑の捕り手三人、十手を持ち窺ひ居て

捕手　貞任に由緣の女め。

三人　腕廻せ。

ト取卷く。

雄島　この身の上を知られし上は、是非に及ばぬ。

ト仕込みを拔きて切り拂ふ。三人、烈しき立廻りあり、トゞ兩人、向うへ逃げて行くを、後より一人、順禮が隙を窺ひ引戾し、藪の方へ來ると、藪より白刃出て、この捕り手を突き通す。捕り手、アツと云うて倒れ死す。これにて雄島、思ひ入れあつて、身構へして窺ふ。矢張り今のかすめたる合ひ方に時の捨て鐘になり、藪疊を押し分け、貞任、錫杖に仕込みし刀を引提げ、笈を脊負ひ窺ひ出る。雄島、見て

雄島　ヤア、お前は。

貞任　コリヤ。

ト制し、本舞臺へ來る。

雄島　我が夫貞任どの、絕えて久しき別れでござんしたなア。

貞任　女房雄島、われも暫らくまどろむうち、あり〳〵夢見し三韓攻め。

ト口惜しきこなし。

雄島　そんならアノお前も。

ト思ひ入れ。

貞任　如何にも。我れ五十四郡の棟梁と雖も、義家が爲に衣川にて利を失ひ、時節を待つて旗上げなさんと、弟安倍の三郎宗任に、島の海の城郭を預け、遍歴なして徘徊なせしも、何卒父賴時の仇、八幡太郎義家を失はんと、坂戸の九郎に申しつけ、疾より館へ入込ませ置く。汝はこれより淸原の眞人武則に賴り、彼れが胸中計りし上、某に告げ知らせよ。

雄島　心得ましてござりまするが、お前に云ひ譯なきは、義理ある千代童姬が在所。

貞任　今に知れぬと申すのか。

雄島　左樣でござりますわいなア。

貞任　これとても今、執權たる眞人武則、その上出羽の郡領と云ふ、老功のゑせ者。加茂の次郎に付き添ひ居れば、姬が在所も知れるは治定。

ト懷中より袱紗に包みし一品を出し

これこそは、軍令催促の勘合の印。暫らく汝に預け置く。守護いたせ。

ト渡す。雄島、改め見て、しつかりと懷中して

雄島　しつかりと預かりましてござりまする。

ト貞任、エイと手裏劍を打つ。雄島、持つたる柄杓にて、しやんと請とめる。貞任、見て思ひ入れ。

もしや大事を仕損ぜんかと、それゆゑにこの

ト柄杓を見せる。

貞任　出かした女房。して、その小柄の目當は何國。

ト雄島、思ひ入れあつて

雄島　成る程。

ト上の松ヶ枝へ打ちつけると、黑の忍び一人飛んで下りるを、直ぐに貞任突き廻す。

忍び　覺悟。

ト雄島にかゝる。貞任、引廻し投げる。雄島、手早く當てる。忍び、見事に宙返りする。

貞任　これは。

ト雄島、柄杓を出し

雄島　順禮に、御報謝。

トよろしく拍子幕。幕引くと直ぐにシヤギリ。

第一番目五建目

義家館の場
武則館の場

役名——新羅三郎義光。淸原貞人武則。安倍次郎太夫貞任。飛脚、韋駄天雲平。傾城、奥州實ハ貞任娘千代童姫。加藤右馬之丞。出羽郡領助定。侍ひ、傳内。同、權内。同、眼内。奴、松平實ハ常磐五郎仲光。大道寺一學實ハ秩父十郎。神主、骨尾織部。賤機姫。忍び、鬼夜叉。源の賴義。女飛脚、お鷹實ハ貞任妻雄島。

本舞臺、三間の間、一面の廻廊、これに金燈籠など掛けてあり、物さびたる神垣、黄昏の景色、かすめたる神樂にて、幕明く。

トばつたりと音して、廻廊へ二ヶ所、白刃突き出す。

ト本神樂になり、貞任、忍び頭巾、忍びの形にて、旗の箱を持ち窺ひ出る。こなたより、一學、同じく忍び頭巾、黑具にて、錦の御旗を口に啣へ出て、兩人、思ひ入れあり、一學は旗を頂く。貞任は箱を開きて探り、中に旗なきゆゑ、思ひ入れありて、思はず兩方行き當り、ギックリとこなし。互ひにだんまりにて顔を隱す。立廻り。一學が持ち居る旗に手かゝりて、貞任、さてはと云ふ思ひ入れにて、箱を投げ捨て、思はず中よりサッと引裂き、左右へ別れ、兩人、まんまと手に入つたと思ふこなしにて、一學、貞任、頷き、その旗を懷中して、一學は南、貞任は北の花道へ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、向う黑幕。正面に石の鳥居。武隈明神の額を掛け、爰に代官、女の首なき死骸を檢め居る。村役人、弓張り提灯を持ち、百姓、侍ひ、棒突き、立ちかゝり、時の鐘にて、とまる。

代官　村役人、いよ〳〵この死骸、見知らぬに相違ないか。

村役　左樣でござりまする。

百姓　イヤハヤ、肝心の顔がござりませぬが、美しさうな女中。村中吟味仕りましたるところ、一向に覺えがござりませぬやうにござります。

代官　別してこの所は、武隈明神の鳥居先。此まゝには差

置かれぬ。明けなば早々吟味を遂げん。それまではこの所を人止めいたし、參る者を一々檢め、身寄りの方もあらば、その旨申し上げん。ソレ、家來ども、村役人、往來を固めい。

皆々　畏まりましてござりまする。

ト侍ひ、左右へ別れ、六尺棒にて圍ひ、往來を止める。村役人始め百姓、提灯にて守り居る。テンツヽになり、南の揚げ幕より、お鷹、女飛脚にて、脇差へ狀箱を結びつけ、これを擔ぎ、急ぎ出て來る。北の揚げ幕より雲平、飛脚にて、脇差へ狀箱を付け擔ぎ、ハイ／＼と出て來り、兩方一緒に本舞臺へ來る。

皆々　往來は叶はぬ。何者だ／＼。

たか　ハイ／＼、私しは白川のお館へ通りまする、飛脚の者でござります。

雲平　ヘイ／＼、私しはお屋敷へ參りまする、飛脚でござります。

代官　イヤ／＼、この所には橫死の者ありて、檢分相濟まぬうちは、往來は叶はぬ。

皆々　脇道へ廻れ／＼。

雲平　左樣ではござりませうが、此方は時限りの飛脚。一時違へば三里と五里も違ひまする。足の早い事を云ひ立てまする、韋駄天雲平と申す者。どうぞお通し下さりませう。

たか　ハイ／＼、お願ひ申し上げまする。私しも隼のお鷹と異名を取りました飛脚。時限りどころか、寸の間も延びましてはなりませぬ急ぎのお使ひ。何卒お通し下さりませうならば、有り難うござりまする。

代官　イヤ／＼、夜の明けるまでは叶はぬ／＼。

たか　ハテ、それは困つたものでござりまする。

雲平　イヤモウ、困り果てた所へ來かゝつて、イヤ、そんなら、アノ女中も、お飛脚かえ。

たか　アイ、さうでござんすわいなア。

雲平　成る程、女の飛脚とは珍らしいが、どうして／＼、おれが足には叶ふまい。そして道筋も、好く知つて居るか。

たか　イヤモウ、道筋なら知らぬ所は、ツイ一口聞くとその間に屆ける文通。殿方ならば屋敷町、女中の使ひは吳服町。初產ならばかいたい町、だら／＼急ぐは牛町と、氣轉と足の釣合ひでござんすわいなア。

雲平　成る程、好く達者に廻る口だ。その口で七色唐辛子

が賣らせて見たいわえ。それはさうと、どうぞお通しなされて下さりませ。

たか　只今申しまする通り、大切のお使ひ。どうぞお通しなされて

兩人　下さりませう。

代官　ヤア、ならぬと申すに。

侍ひ　くどい。退れ〳〵。

トこれにて兩人、ガツクリして

雲平　ハテ、どうしたらよからうなア。

ト思案する。

たか　イヤ申し奴さん、お前はどこへござんすのぢやえ。

雲平　おらア名社のお屋敷まで行く御用よ。

たか　エ、そ、わたしがたつた今、通つて來た所ぢやわいなア。

雲平　そして女中は、何所まで行かつしやる。

たか　ハイ、わたしは白川のお屋敷へ參りまする。

雲平　エ、モ、たつた今おれが通つて來た所だわえ。

トお鷹、思案して

たか　申し、奴さん、アノ、斯うしたらどうでござんせう。そのこなさんの持つてござんした御狀を、わたしが屆け、又わたしがこの御狀をこなさんが屆け、これから替へ替へにして、早う屆けてはどうでござんせうな。

ト雲平、手を打ち

雲平　イヤ、奇妙々々。文珠め〳〵。さうせう〳〵。

ト脇差狀箱を及び腰に出して

そして、この脇差も一緒に屆けるのだぞ。

たか　サア、わたしもこの腰の物を添へて、屆ける御狀でござりますわいはア。

雲平　それは丁度幸ひ。そんならそれを。

たか　ほんに逢うたり叶うたりぢやわいなア。ソレ御狀。

トお鷹、雲平、兩人取替へる。侍ひ矢張り棒にて圍ひ居る。

雲平　そんなら、ちつとも早う駈け出すべい。

たか　合點ぢやわいなア。

ト兩人、狀箱をかたげ、菅笠、小田原提灯を持ちて一度に

兩人　ハイ〳〵〳〵。

ト兩人、兩方の揚げ幕へ急ぎ入る。道具ぶん廻す。

本舞臺、正面、金襖、繧繝二重屋體、御殿の道具に

納まる。

トぬめりになり、花道より、腰元三人、赤前垂れ、肩に手拭を掛けて、酒瓶に花を澤山に入れ、これを花車にして、紅絹の紐にて引いて出て來る。後より、傾城奥州、少し醉うたるこなしにて出る。禿二人、莨盆、手文庫、持ち出る。この傾城に奴松平、長柄の傘をさしかけて出る。後より郡領、赤塗り、白髮鬘にて、長絹、法眼袴の形。右馬之丞、前髮鬘、上下衣裳にて付き添ひ、皆々花道に居並ぶ。下座より、傳内、權内、眼内、何れも上下衣裳にて出て舞臺に居並ぶ。

奥州　見渡せば、柳櫻に引替へて、なんぢややら堅くろしい殿達ばかり。これが梅は武夫とやらでおらうわいなア。

腰元　サア、わたしらも、日頃の行儀と事變り、郡領さまの仰せにて、若殿樣への宮仕へ。

右馬　仲居姿も時の興。好い慰みでござるわえ。

腰元　ソレイナア、お庭の梅の花盛り、それに色增す花車。

杉平　松の位のお供には、氣轉の利かぬ若い者。御用とあらば常磐の松平。

郡領　この郡領が思ひ付き、若殿新羅義光公、三日三夜の佇み續け。傾城の奥州をもてなしは、老いたる馬にはあらねども、お庭の内の道知るべ。

禿一　モシ、太夫さん。

禿二　危ないわいなア。

奥州　ナニ危ないえ。井の下の櫻あぶなし酒の醉。ホヽ、子供、來や。

禿二　アイ〳〵。

ト右の鳴り物にて、この人數本舞臺へ來る。郡領、上へ通る。皆々それ〳〵に住ふ。

傳内　出羽の郡領助定公、只今お詰めなされましたかな。

權内

郡領　若侍ひ達、見さつしやれ。年籠り寄つても、この郡領が今日の趣向は、アレあの瓶に酒を湛え、色達を集めてお泉水にて曲水の學び。こりやア遲々も及ぶまいと思ひます。

右馬　左樣でござる。流石はお家の御執權。

三人　御趣向、恐れ入りましてござりまする。

奥州　申し、皆さん、この殿樣は、いんまにお出でなさんせぬかいなア。

腰元　ほんに、それいなア。

郡領　成る程、酒になると、たわけのない若殿。コリヤ。
　ト思ひ入れあり
若侍ひ達、お迎へに行かずばなるまい。
三人　心得てござりまする。
　ト三人、股立ちを取り、追取り刀にて勢ひ込んで花道
揚げ幕へ入る。少しありて揚げ幕より、眼內、駈けて
出て、花道の中程へ見事に宙返りする。
皆々　これは。
　ト猩々の亂れになる。花道より、義光、長袴の下、小
さ刀の形にて、傳內、權內、兩人が腕を捻ぢ上げて、
醉うたるこなしにて出て來る。
右馬　若殿、只今
皆々　入らせられましたか。
　ト花道にて、立廻り、ちよつと扇にてあしらひ、三人
を見事に投げ、片手に傳內が手を持ち添へ、捻ぢ上げ
ながら本舞臺へ來り、傳內を突き放し、其所に醉うた
るこなしにて座す。
奥州　殿さん、醉は醒めましたかいなア。
義光　イヤモウ、思ひ思うた其方の酌。まだ〳〵一獻酌め
るわいの。

右馬　申し、若殿樣、今日は淸原の武則、何かお目見得い
たさんとの儀。定めてお身持ちの御諫言と見えまするて
な。
義光　イヤ、あの偏屈な武則、彼奴が來ぬうち、サア、太
夫、酌してたも〳〵。
　ト正體なきこなし。傳內、眼內、ちよつと引立てにか
かる。扇にて突き廻す。
サア、郡領、其方も一つ過しやいなう。
郡領　イヤモウ、御意とござらば下されうが、餘りお過し
あつては、今日お勅使院使への御挨拶、お心が亂れませ
うと、只それが案じられまするて。
義光　なんの〳〵……とは云ふものゝそれもさうかいの。
　ト扇を開き立ち上がる。ぬめた男の面憎やの唄になり、
爰にて義光、扇の手一曲ありて納まると眼內、白刃を
拔いて切りかけるを、もぎ取り
義光　醉覺めに冷やりと永の刃、欲しくば其方に
　ト白刃を投げ出し
振舞はうかい。
眼內　イエ、モウ、食べましたも同然でござります。
　ト怖々取り、鞘へ納める。バタ〳〵にて、向うより、

賴義　賴義、菖蒲革の足輕にて出て來り、花道に手を突き
　申し上げます。
郡領　何事ぢや。
賴義　ハッ、追ッつけこれへ御院使お出でなされまする
由。この儀申し達せよと、お役人中の仰せつけでござり
ます。
郡領　心得た……行け。
賴義　ハッ。
　ト引返し、向うへ入る。ト向うにて
呼び　武則出仕。
　ト呼ぶ。
郡領　ナニ、武則の
皆々　出仕とや。
　ト序の舞になり、花道より、武則、剃立て、上下衣裳
にて、三方に梅の枝に短册を付けたるを持ち、出て來
る。後より侍ひ二人付き添ひ出る。武則、直ぐに本舞
臺へ來て
武則　ハッ、若殿義光公、これにお渡りあられまするか。
義光　オヽ、また堅くろしい事云うて、座を滅入らすかい
の。

奥州　申し、武則さまとやら、あなたも其やうに、窮屈な
事をなされずと、殿樣のお相手にならしやんせいなア。
武則　これは奥州どのとやら、引取つての御挨拶、忝な
い。今日某出仕いたしたは、御諫言には參らぬ。
郡領　ムウ。して、何用ござつて、上がり召されたのだ。
　ト武則、右の梅の枝を出し
武則　御覽なされい、郡領どの。今を盛りのこの梅花、花
物云はねど、申すは櫻なれども、各國に開くこの梅ヶ枝、
鶯宿梅の古歌を付け、若殿の御酒のお肴。
義光　心あり氣な武則の詞。面白い、すりや某が放埒を
武則　何しにお諫め奉らん。大殿には御他國、まつた中將
樣より預かり奉る
　ト思ひ入れありて
賤機姫さまは、お行くへなうなり給ひ、殊に今日の院使
は御旗差上げよとの儀か。先達て下し置かれし、軍令催
促の勘合の印、この三つのお尋ねと推察仕り、御辛勞
もあらん、御氣欝の御酒宴。身不肖なれどもお家の執權、
斯く申す清原の眞人武則、院使勅使へ御返答は仕る。
依つて、君をお諫め申す儀は曾てござりませぬ。
郡領　成る程、お家の束ねも召さる眞人どの、郡領なぞの

及ばぬ事でござるて。

右馬　若年なれどもこの加藤右馬之丞、後學の爲、武則どのの勅答、承りたう存じまする。

武則　ハヽヽ、どれも／＼御發明なる各々方を差措き、斯樣に申す筋もござらねども、こりや主命と申すものでござるて。

義光　アヽコレ、また堅うなつて酒が呑めぬ。サア／＼武則、郡領、右馬之丞も太夫諸とも、所を替へて酒にせぬかい。

奥州　それ／＼、殿さんの仰せ。サア、皆さん。

松平　ヤレ／＼、先刻から、あんまりだんまりで、後にウトウト寐て居ましたが、また御酒と聞いて、目がはつきりとなりました。お腰元中、ソレ、お連れ申さつせい。

右馬　オヽ、ほんに松平、其方は久しく默つて居たなア。

松平　左樣でござります。

腰元　サア、殿樣、奥御殿へ。

皆々　先づ、入らせられませう。

義光　皆、こなたへ。

ト唄になり、義光を奥州介抱して、腰元皆々松平も付き、奥へ入る。禿付いて入る。

武則　武則には、これにて暫し寛ろぎ罷りある。郡領どのには御遠慮なく、君のお側へお越しなされい。

郡領　イヤモウ、老體の拙者、若殿の取持ちに、ホッと致してござる。右馬之丞にはお側に付き添ひてな。

ト思ひ入れして

御用を聞き召さるがようござらう。

右馬　成る程……左樣仕らう。

郡領　某は暫らく休息いたしたうござる。壯年の武則どの萬事よろしく頼み存ずる。

武則　ゆるりと御休息なされい。

郡領　長面、お來やれ。

右馬　先づ、ござりませう。

ト管絃になりて、郡領、先に右馬之丞も共に奥へ入る。武則、煙草盆引寄せ、長煙管にて煙草のみながらそこに落ちてありし袱紗包みを見つけ、取上げ見て思ひ入れあり

武則　こりや矢の根

トよく／＼見て

大鴈股に鍛へし矢の根、袱紗に何やら。

ト讀み見て

武則　フム、。
　ト思ひ入れありて懷中する。合ひ方になり、奧より奧州太夫出て來り
奧州　武則さん、あなたはまだ、これにお出でなさんしたかいなア。
武則　ホオ、奧州太夫、若殿には。
奧州　今すや〳〵と御寢なつてゞござんすわいなア。
武則　そもじはこれへ、何用あつてお出でたのぢや。
奧州　サア、わたしが爰へ參りんしたは。
武則　これへおぢやつたは。
奧州　サア、、アノ、お前樣をお迎ひに。
武則　それは近頃忝ない。某も此やうに、上下ためつけて堅う見せても、心はずんど戀知り、情知りぢや。コリヤ、太夫、ハテ、美しいものぢやなア。
　ト奧州太夫が手を取る。
奧州　いつにない、あのじやら〳〵と。
武則　イヤ、じやら〳〵でない。大眞實。
奧州　エ。
武則　其方に惚れた。
奧州　エ、アノ、わたしがやうな者に。
武則　この武則は未だ綵、定まる妻も持たぬゆゑ、ア、どうがなと思うて居たところ、迎ひに來たとは忝ない。
奧州　そりやお前、ほんの事でござりますかいなア。
武則　人は武士、武士の詞に二言はないわいの。
奧州　嬉しうござんす……が、どうしてマア。
武則　まだその上に、そもじに心中に、見せる物があるわいの。
奧州　アノ、わたしへの心中に。
　ト合點のゆかぬこなし。
武則　如何にも。
　ト今の矢の根の袱紗包みを出し
　外でもない。これぢや。
　ト奧州太夫、見て
奧州　ア、、そりや、わしが大事の
武則　ナニ、この品は、そもじのか。
奧州　エ
　ト思ひ入れ。
武則　この大鵰股の矢の根は、奧州の賊將、安倍の貞任と申す、叛逆人の用ゆる矢の根、南蠻鐵に黄金の交へ、鐵石をも射拔くと聞く。元より强弓の貞任、奧州の大守に

ならんと、我が娘を男子と僞り、千代童丸と名け、人を欺むきし天罰忽ちに巡り、この矢の根を添へて、その千代童とやらとも生別れ。それを所持なす奥州こそ、さては。

ト思ひ入れ。

奥州　イエ〳〵、そりや、わたしがのではござんせぬわいなア。

武則　でも、たつた今、わたしが大事の

奥州　サア、わたしが大事に思ふお客に、預かつて居りましたが、そのお客も、聞けば死なしやんしたと云ふ噂。なんのそれを仰山さうに、ホヽヽヽ。勤めの身は、これが苦界でござんすわいなア。

武則　成る程、さういふ事もあらん。これを所持なすと申せば朝敵貞任が餘類。役目の某、見遁がしにはならぬと、サア、云ふは男子の事。女子はさのみ咎めもあるまじ。何事とも武則が心。ナ、奥州、合點がいたか。

奥州　何かは知らず、粹なお詞。

武則　話しもあれば、身と一緒に。

奥州　そんなら奥へ。

武則　ドリヤ、手を取りませうか。

ト唄になり、武則、こなしありて、奥州太夫が手を引き、奥へ入る。と揚げ幕にて、下がれ〳〵と聲して、テンツヽになり、お鷹、狀箱を持ち出ろに、これを菖蒲革の侍ひ棒を突き、下がれ〳〵と云うて出て來る。此うちに源の賴義、侍ひに交り居る。

たか　ハテ、只今も申しまする通り、私しはこのお館へ、お使ひに參りました、飛脚でござります。

侍ひ　そんならアノ女の身で、飛脚をするのか。

たか　左樣でござりまする。この御狀を出羽の郡領さまへ、直々にお上げ申す、大切な御狀さうにござりまする。

ト奥より郡領、右馬之丞、傳內、權內、眼內、出る。

三人　騷がしい。何事だ〳〵。

侍ひ　この女が、郡領さまにお目にかゝりたいと申しまして、御門をツカ〳〵通りまするゆゑ、差留めましてござりまする。

右馬　なんと申す。郡領どのへ、女が用事があると申すか。

ト　お鷹を見て

郡領どのに逢ひたいと申す飛脚は、其方か。

たか　ハイ〳〵。左樣にござりまする。白川のお館から參

りました、飛脚でござりまする。
右馬　フム、郡領どのも、これにお出でなさる。その狀これへ。
たか　ハイ〳〵。
ト脇差とともに、狀箱を出し
あなたが、その郡領さまでござりまするか。
郡領　郡領は某。鳥の海の友久より、書翰の參る筈。即ちこれへ。
たか　ハイ〳〵、差上げまするでござりまする。
ト渡す。侍ひ、賴義も下座へ入る。
お覺えがござりまするかな。
郡領　如何にも。兼ねて友久と心を合せ。
トあたりへ思ひ入れして囁く。
右馬　そんなら兼ねての
ト云はうとするを
郡領　コリヤ。
ト制し、狀箱を明けて披き讀む。
ナニ〳〵「兼ねて申し合せし通り、この者儀至つて力強く、その上眼大きく、頰髭荒れ、逞き生れつきに候ふ間、彼の企ての通り、虎熊の大臣に仕立て、義光親子に勅使の不審よろしくお取計らひなさるべく候ふ。
ト讀み。お鷹を見て、恟りして、また狀を取り讀み直し
この者至つて力強く。
ト讀む。お鷹、強さうな身振りする。皆々この狀を引ツ張り見て
右馬　その上、眼大きく。
傳内　頰髭荒れ
ト讀みお鷹と見較べる。
權内　逞しき生れつき。
トお鷹と見較べる。
眼内　虎熊の大臣に仕立て
トお鷹と見較べる。お鷹、この度々に思ひ入れ。
郡領　義光親子に勅使の不審。
ト見較べて又繰返し
その上、眼大きく力強く
ト讀み
力と云ふものは、表面からは知れぬもの。眼大きくとしてあるが。
右馬　左やうサ、なんだか細い目元でござるて。

たか　アヽ、申し、大抵大きい眼ではござりませぬが、急ぎの道中、晝夜臥りませぬゆゑ、只今が眠りました所でござります。

郡領　ハテナア。イカサマ、時限りの書翰。晝夜寐ねば、その筈〳〵。

右馬　眠つて來るとは、成る程。

三人　逞ましい生れと見えまするわえ。

郡領　殊に大切なる密事ゆゑ、某が目覺えの一腰、それを證據に書狀の參る筈。

ト脇差を見て

相違ない。友久よりの密談ぢやわえ。

ト喜ぶ。

右馬　然らば、ちつとも早く、その用意いたさうではござらぬか。

郡領　如何にも〳〵。謀り事は密なるをよしとす。密かに密かに。

皆々　心得ました。

トばた〳〵にて侍ひ一人出て

侍ひ　御院使として大導寺一學さま、只今これへお出でゝござりまする。

ト云ひ捨てゝ引返す。

郡領　院使の來駕とあらば、武則は饗應の役目。我れは大臣に、この者を仕立てる用意。女、こなたへ。

たか　畏まりましてござりまする。

ト管絃になり、郡領、お鷹を連れて奥へ入る。と「院使のお入り」と呼び、大鼓謠になり、向うより大導寺一學、燕手、長上下にて出て來る。侍ひ附き出る。下座より義光、武則出迎ふ。一學、花道にとまる。皆々武則に引き添うて出迎ふ。

武則　院の御使者、御苦勞千萬。先づ〳〵これへ、お通り

皆々　あられませう。

一學　院の御所の命に依つて、罷り越したる大導寺一學。罷り通るでござらう。

ト矢張り太鼓謠にて上へ通る。

武則　館の主賴義儀は、先頃より所勞に依つて、名代として

義光　新羅三郎義光。

武則　陪臣ながら清原の眞人武則、お出迎へ仕りましてござりまする。

兩人　御諚の趣き、仰せ下されませう。

一學　今日某罷り越せしは、源頼義への御疑ひ。
義光　父頼義へお疑ひとはな。
一學　八幡太郎義家、衣川の一戰より、頼義父子武威に誇り、禁廷を蔑ろに致し、先達て中將實方より、お預けありし賤機姫は行き方を失ひ、まつた最前仰せ下りし勘合の印、其まゝに差留め、殊さら義家には、拜領の金龍の鎧へ矢柄を射通し、男山八幡へ奉納せしは、これ全く調伏の基と、逆鱗大方ならず、右三ヶ條の御不審、申し開きの筋あるや。返答承はらん。
武則　ハツ、何事かと存じ奉りしところ、存じ寄らざるお疑ひ。賤機姫さま事は、禁廷の御媒介にて、義家が舍弟加茂の次郎へ、婦妻に下し置かれ、某仰せを請けて、守護仕り罷りある。それを國遠などゝは存じも寄らず。まつた勘合の印の儀は、合戰鎮まりしとは申しながら、稍もすれば奥州の逆徒等、野心を起す。さるに依つて、王威を頭に戴き、朝敵に向はんと、即ち義家内兜に秘め置き候へば、凱陣次第、早速、叡覽に備へ奉らん。まつた金龍の鎧は、奥州追伐の折から、武州の大河鎧の爲に、頼義父子波濤を渡りしは、これ全く氏神八幡宮の神力、弓矢神ゆゑ奉納仕りましてござりまする。

一學　フム、口賢く流石は眞人武則。さりながら、それ尤もと立歸る一學ならず。賤機姫存命ならば、某に引合せ、その上勅答いたすべき筈。勘合の印は、義家凱陣まで申し延しも致しくれうが、金龍の鎧へ矢柄を射込みし云ひ譯は、ナ、なんとだ。
義光　アイヤ、舍兄義家、金龍の鎧へ矢を射しは、先つ頃禁廷にて仰せ下りしゆゑ、止む事を得す矢柄を抜き取り金龍を除いて射通しましたる事、ほど承り及んでござりまする。
一學　默らう、義光。僞はりと云ふは論より證據。
　ト花道に向ひ
一學が家來、その一品、これへ持て。
侍ひ　ハツ。
　ト侍ひ二人、具足櫃を持ち出る。また一人、首桶を持ち來り、武則が前へ直し扣へる。下座より源頼義出て同じく扣へる。
一學　義光、武則、疑はしくば、立寄つて改めい。
義武　ハツ。
　ト兩人、具足櫃を明ける。内より胴を射通したる鎧出る。義光、この矢を抜き取らうとするを

武則　イヤ、暫らく。弓勢強き義家公。射込み給ひしその鏑矢、拔き取り得ん事存じも寄らす、たゞ其まゝに。
義光　如何にも。
ト其まゝ裏をかいたる矢の根を見て
こりやコレ、矢柄。
ト思ひ入れ。
一學　八幡太郎源の義家と、姓名えりつけしその矢の根。なんとそれでも、調伏であるまいか。
兩人　サ、その儀は。
一學　云ひ譯あるか。
武武　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
一學　返答はなんとだ。
兩人　ホイ。
トばた〳〵にて向うより神主織部、白木の箱を抱へ走り出て、直ぐに本舞臺へ來り
織部　ハッ、一大事がござりまする。御注進申し上げまする。
右馬　其方は武隈明神の
三人　神主ぢやアないか。
織部　ハッ、當社明神の榊の元に、この品埋めござりましたるゆゑ、何なるかと開き見ましたるに、藁人形に四十四本の釘を打ち、願主武則と記しましたる、箱に書きつけがござりまする。
トそこへ出す。皆々思ひ入れ。右馬之丞見て
右馬　武則どの、お覺えが
敵皆　ござるかな
武則　佞人その理に暗しと、我が名を記し、呪詛調伏を致す、世界に阿房もござるまい。今に黑白相解りまするでござらう。ナニ神職、次へ參り、控へ居れ。
織部　へ、イ。
ト右馬之丞、皆々と顏見合せ、不承々々に奥へ入る。
一學　返答遲滯なさば、その旨言上しようかな。
頼義　イヤ、その御返答は源の頼義、直に申し開くでござらう。
トずつと立つて上へ來り、義光が上へ直り、床几にかゝる。一學悔り。皆々思ひ入れ。
敵皆　これは。
頼義　我れ禁命に依つて、四海の輔佐として、これ式の家にかゝはる一條、申し開かぬ事あるべきや。矢の根なき

鏑矢へ矢の根を仕込み、調伏の逆意なぞとは、事をかしや。抑々我が家の矢の根と云へば、唐土梯花女より傳來なし、雁股は用ひず、鍛冶に云ひつけ、形をば似すれど、雲泥の相違。疑はしくば、これを見られよ。

ト懐中より矢の根を出す。皆々思ひ入れ。

兼ねて寶藏は、出羽の郡領に預け置く。然るに我れ姿を替へ、さんぬる夜廻りの夜路中に、落しあつたるこの書面。卽ち形を似する鍛冶への注文。その時詮議と思ひしかど、打捨て置きしは心あつての事。最前それと存じながら、當惑の體になせしは眞人武則、出かしたなア。

武則　ハッ、仰せの如く、速やかに申し開きと存ぜしかど、とくと實否を糺せし上と、差控へしところ、御賢慮に叶ひ、有り難う存じ奉りまする。

一學　然らば、その器の返答は。

武則　ナニ、器とは。

ト首桶を明ける。錦の袖に女の切り首入れてあり

この首級のお尋ねとはな。

一學　賤機姫の首であらうがな。

賴義　なんと。

一學　とぼけまい。高位の衣に包みし首、面體をあばかれしは、禁廷の仲立ちを嫌ひ、人知れず殺害し、巷に捨てしに事極まる。云ひ譯あらば今爰へ、賤機姫を出して見せろ。

武則　サア、その儀は……ホイ……と申したらよからうが武則、左樣には申すまい。兼ねて虎熊の大臣、懇望の沙汰あるゆゑ、姫君この事を常にお嘆き。それゆゑ國遠と申し觸らし、姫君には御安泰でましまする。ヤア〳〵腰元ども、姫君をこれへ。

腰元　畏まりました。

ト琴唄になり、奥より賤機姫、廣振り袖の形。腰元二人、松平附いて出る。

皆々　これは。

武則　卽ち賤機姫、御院使一學どの、お見覺えもござらう。とくと御尊顔の拜し召されい。

一學　そんならアノ姫には。

ト思ひ入れ。

松平　下部の松平とは僞はり、誠は當家の忠臣、常磐五郎仲光と云ふ、姫君守護の役人でござりまする。

一學　ムウ。

ト思ひ入れ。奥にて

呼び　虎熊大臣お入り。
ト呼び、下がり葉になり、お鷹、金冠白衣、公家の形にて仕丁附いて出る。郡領附き添ひ出て
郡領　大臣のお入り。
皆々　ハア。
ト皆々平伏する。
郡領　イザ、大臣様には御諚の趣き、仰せ聞けられませう。
ト お鷹、困りし思ひ入れにて、うぢ／＼して
たか　アノ勅諚はの。
ト つかへる。
郡領　これサ、先刻仰せありし勘合の印。
たか　オヽ、如何にも、勘合の印を、許し遣はせとの御諚。
ト武則初め立役、思ひ入れ。敵役ハア／＼と氣を痛める。郡領、仕方にて、しやんとしろと云ふ思ひ入れ。お鷹、肘を張り、そこら中を見廻し、力んで居る。
賴義　虎熊の大臣には、ようこそ御出で。
たか　ナニ、オヽ、それ／＼、大臣とは、アノ兄弟の事か。
ト皆々冷々して焦れる。郡領、引取り

郡領　大臣には、何か御機嫌に違うた事があると見えまして、先程よりの御諚、一つとして仰せ足りぬは、こりや御饗應が薄かつたと存ずる。ナニ、右馬之丞、貴様も共共御饗應申すがよくござるぞ。
右馬　イヤハヤ、御機嫌が惡いとは、彼の逞ましい所でござらうサ。
武則　勘合の印の儀は、先刻御院使へ申し上げし通り、義家凱陣の上ならでは、御返答に及ばれず。郡領どの、何卒この儀よろしう。
たか　そんなら、その勘當の。
ト云ふを郡領、云ひ紛らかし
郡領　エヘン／＼。武則の詞、承知いたした。某よく／＼申すでござらう。
一學　勘合の印の返答聞くまでは、勅使諸共相待ち申さう。
賴義　然らば武則、饗應の間へ。
武則　イザ、お入りあられませう。
ト管絃になり、お鷹、一學先に、賴義、義光、賤機姫腰元、皆々入る。武則、こなしありて松平に囁き入る。合ひ方、皆々入り切ると、本神樂やうな鳴り物にて、

鬼夜　下の松ヶ枝へ振り出しにて鬼夜叉、忍びの形にて、種ヶ島を持ち出て窺ひ、舞臺へ飛び下り
鬼夜　新羅三郎義光が、預かるところの御正印、ぶつたくつてくれろと頼まれたこの仕事。邪魔になるのは眞人武則、手間隙いらず、これでどつさり。巧い〳〵。
ト奥へ行かうとする。人音するゆゑ、ちよつと小隱れすると、奥より郡領、右馬之丞、織部、出て來る。これを見て鬼夜叉も、そこへ出て
鬼夜　郡領さま。
郡領　鬼夜叉か。
鬼夜　仰せの通り、この所へ忍び入り、彼の一品を。
郡領　イヤモウ、その品は身が手に入つた。汝に申しつけるは淸原の武則。
鬼夜　この鐵砲で、たつた一打ち。
郡領　出かした。忍べ。
鬼夜　心得ました。
ト松ヶ枝に忍ぶ。郡領、懷中より御正印を出し
郡領　右馬之丞、あたりへ心を附け召され。
右馬　承知いたしてござる。
郡領　武隈の神職、骨尾織部、其方に預ける品は、即ちこれ。
ト渡す。
織部　これはな。
郡領　それこそ三郎義光が、預かるところの御正印。最前遊興に事寄せて奪ひ取つたれども、眞人武則めに見附けられては一大事。それゆゑ汝に預ける間、しつかりと守護いたせ。
織部　畏まつてござります。持ち歸り、御神體のあたりへ押隱せば、誰れも知り手はござりませぬ。
右馬　コレ〳〵、併し、神は見通しと云ふぞよ。
織部　何を仰しやります。
ト松平、出かゝり、頷いて又下座へ小隱れする。奥より腰元出て來り
腰元　申し、どなたにも大殿樣が召しまする。早うお出で遊ばしませい。
トこれに恟りして織部、あたふた御正印を隱す。
右馬　殿のお召しとござらば、郡領公。
郡領　イザ、罷らう。
ト合ひ方にて三人入る。織部殘り
織部　大切なこの品、ちつとも早う。さうだ。

ト行かうとする。松平、ズッと出て引きとめ、

松平　待て。わりやア・どこへ行く。

織部　見りやア見馴れぬ二合半。なんでおれを留めるのだ。

松平　大泥坊の粕禰宜め。歸るなら今、受取つたその品を、おれに渡して突ッ走れ。

織部　見嚙られたらまゝの皮。わいらに渡してつまるものか。

松平　面倒な。

ト取りにかゝる。やるまいと爭ひ、これを枷にして両人、摑み合ひになり、トゞ織部、松平を當てる。松平タヂ／＼と倒れる。織部、息の切れるこなしありて、今の品をどこぞへ隱さうと。いろ／＼見廻し、前土間の見物に向ひ

織部　どうぞちつとのうち、これを預かつておくんなさいまし。

ト土間へ落す。此うち松平、心附き起き上がるゆゑ、織部うろたへ、中の間の歩みを渡り逃げる。松平これを追ひ廻す。此うち武則、ツッと出て、いま織部が土間へ入れし品を取つて、見物へ見せて懐中し、硯箱の巻紙と入れ替へ、元のやうに土間へ置き、ちよつと小隱れする。織部逃げて來て、手早に土間より武則が吹き替へた巻紙を持つて、一散に向うへ入る。松平「いづくまでも」と追ひ駈け入る。武則後見送り

武則　ハ、、、。いかいたわけの。

トこのあたり勝手よき所に燭臺を直し置くと、松が枝より鬼夜叉、火蓋を切らうとする。武則、手裏劍打つ。鬼夜叉、飛び下り、矢庭に切つてかゝる。奥より郡領出て、同じく武則に切りかける。この立廻りに燭臺を切り折り、灯消ゆる。武則、身を開く。郡領、武則と思ひ

郡領　武則觀念。

ト鬼夜叉を大袈裟に切る。武則、附け聲して、ダア、と云ふ。郡領、してやつたりと思ひ、鬼夜叉に存分に止めを刺し

郡領が手の内、武則、肝にこたへたかな。

ト落ちつく。武則、これを透かし見て

武則　これもたわけぢや。

トこの聲に、郡領、恟りする。

ハ、、、、、。

ト よろしく。

拍子幕

本舞臺、三間の間、正面揚げ障子、向う彩色襖、上に一間の障子屋體、枝振りよき梅の盛り、手水鉢、萩垣よろしく飾りつけ、幕の内より右馬之丞、傳内、權内、眼内、前幕の形にて立ち並び、管絃にて幕明く。

右馬　なんと何れも、館の主武則が心、なんとも計り憎いではござらぬか。

傳内　仰せの如く、傾城の奥州を請け出し、夜晝分かぬ大酒盛り。

權内　まだその上に、大臣に仕立てたお鷹とやらまで引ッ込んで

眼内　琴三味線で出仕も怠り

三人　なんだか氣が知れませぬてな。

ト てんつゝになり、花道より雲平、以前の飛脚にて、狀箱を脇差に結びつけ、スタ／＼出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

雲平　モシ／＼、どなたぞちと、お頼み申しませう。

三人　其方は何者ぢや。

雲平　ヘイ、私しは雲平と申しまする。足の早い飛脚でござりまするが、この所に加藤右馬之丞さまと申すお方がお出でなされてござりまするか、それが承りたうござります。

右馬　なんと申す。加藤右馬之丞に逢ひたいと申すのか。

雲平　左樣でござります。急にお目にかゝりたうござります。

右馬　即ち右馬之丞は身共ぢや。して、いづれよりの使ひぢや。

雲平　あなたでござりますか。ヤレ／＼、嬉しや／＼。なんでも爰を先途と參じました。

ト 狀箱を脇差ともに出し

この御狀を御覽下されませう。

ト 右馬之丞、取つて明けて見て頷き

右馬　成る程／＼。和田左衞門より我れら方へ、書通の參る筈がござる。ヤレ／＼、遠路道中、大儀々々。

雲平　ヘイ／＼、有り難うござります。

傳内　何か右馬之丞どのには、御内意の筋と見えますわえ。

右馬　お聞きなされい。斯うでござる。各々の手前、なんとも恥かしながら、斯樣に見えましても、拙者大好色者でござる。
三人　ハテナア。
右馬　それゆゑ所々へ、妾の儀を相頼み置いてござる。和田左衞門へも相頼み置きましたゆゑ、定めてその儀でござらう。
　ト云ひながら、狀を明けて讀む。
ナニ〳〵「兼ねて貴殿お頼みなされ候ふ妾の儀
　ト讀み
それ御覽じろ。妾の儀と致してござる。
　ト嬉しがる。
三人　その後が承りたうござるてな。
　トまた狀を見て
右馬　妾の儀につき、この者遣はし申し候ふ。
　ト讀み
この者遣はしたと致してござる。
三人　何卒拜見、いたしたいな〳〵。
右馬　先づ急かずと、後をお聞きなされい……「この者遣はし申し候ふ、卽ち御覽の如く、瓜實顏に色白く、脊はすうわり柳腰。
眼内　エ、巧いな〳〵。
　ト傳内に抱きつく。
傳内　これは、何をしめさる。
右馬　脊はすうわり柳腰。
　トまた繰り返し
瓜實顏に色白く。
　トまた雲平を見ながら讀む。
貴殿思し召しの御注文の女子、定めてお心に叶ひ候ふ事と存じ候ふ、この者を抱いて寐て、毎晩々々、お樂しみなさるべく候ふ……右馬之丞どのへ、和田左衞門。
　ト讀み、雲平を見て、合點のゆかぬこなしにて、
アノ、この狀を持つて來たは、われか。
雲平　アイ、さうぢやわいなア。
　ト嫌らしい身振りする。
右馬　エ、情ない。
　トまた狀を見て
書き添へ申し入れ候ふ卽ち犨引出の印に、御覺えの一腰を添へ遣はし候ふ間、お心措きなく抱寐なさるべく候ふ以上……これは又、聞えぬ和田左衞門。どうしてこんな

者が、抱いて寢られるものか。アヽ、聞えぬ聞えぬ。
ト狀を持ちながら泣く。
傳内　御尤もでござる。御尤もでござる。
權内　併し、わざ〳〵寄越されたからは、又よい所もござらうわサ。
ト雲平、氣味惡さうに捻ぢ切つた尻を押へて、おど〳〵しながら
雲平　イヤ、こりやア、飛んだ事だ。
右馬　その上、我れら生れついて近眼ゆゑでござれば、奴でも松の木でも、斯うなつては堪りませぬ。
ト雲平を追ひ廻し、しがみつく。
雲平　アヽ、モシ〳〵、氣を鎭めて、お聞きなされませ。その狀は、違ひました〳〵。
皆々　ナニ、書面が相違いたしたとは。
雲平　お聞きなされませ。これを持つて參る道で、武隈明神の前に、人が切られて居りまして、人留めの所へ參りかゝりまするると、また向うから女の飛脚が參りまして、これも留められ、急ぎのお使ひ、どちらも手間取つては居られませぬゆゑ、思ひつきまして、狀箱を取替へて持つて來たのでござります。
トこれを聞き、皆々思ひ入れありて
右馬　なんぢや、女の飛脚と、狀箱を取替へたと申すか。
雲平　左樣でござります。
右馬　アヽ、それにて思ひ當つたわえ。昨日郡領どの方への書翰、持參なしたは女の飛脚。
ト雲平を見て
即ち各々も御存じの通り、虎熊の大臣に仕立てし所に、まんまとしくじり、即ちその女は武則めが、どうちよろまかしたか存ぜぬが、この館へ引入れましてござる。
三人　成る程、それで解りましたわえ。
右馬　この者見ました所が頰髭ありて眼大きく。
ト雲平、恥かしきこなし。
いま來ては、なんにもならぬわえ。
ト力を落す。
雲平　イエ、モシ〳〵、惡い事ならどこまでも仕兼ねぬ奴。なんぞ御用の筋もござらば、働らいてお目にかけますべい。
右馬　成る程、心逞ましくと致しござつたてな。
三人　左樣でござる。大丈夫と見えまする。
右馬　この上は、先刻より參り居らるゝ、大導寺一學どの

へ推擧なして、此方の味方に致すでござらう。

三人　それがようござる。

有馬　ナニ雲平、身と一緒に奥へ參れ。

雲平　畏まつてござります。

ト時の太鼓になり、有馬之丞、雲平、二人も附いて奥へ入る。

ト合ひ方になり、上の屋體より奥州太夫、以前の形にて、お鷹、裲襠にて出て來り、あたりを窺ひ

たか　この守りを持つて居やるからは、我が夫貞任どのと妾が仲に出來た、千代童であつたかいの。

トよく〳〵見て

幼なき時に別れても、見覺えのある其方の面差し。オヽマア、よう健で居てたもつたなう。

奥州　先程奥にて、あなたのお詞、どうやらわたしが母上と存じましたが、詳しいお話しを承り、お目もじ致しますとは、嬉しうござんす。母上様、お懐かしうござりましたわいなア。

トお鷹に取りつき、大泣き。

たか　コレ、聲が高い。この所は敵の館、心あり氣な主の武則。もし悟られて互ひの身の上。其方も成人したからは、これから母が附き添うて、陸奥の都と云はせん事、わしが心にあるわいなう。

奥州　さりながら、敵と知らず、義光どのに思はれて、まだその上に恥かしい憂き勤め。お目にかゝるも面目なく、殊に父上へ云ひ譯もござんせぬ。母様、おさらばでござりまする。

ト懐劍を持ちて自害せうとするを、お鷹あわてゝ留め

たか　なんのそれが恥かしい事、其方が義光どのに思はれてこそ、幸ひ折を見合せ

トあたりへこなしありて

ナ、サア、君傾城となるとても、再び雪ぐは越王の雪。あの梅が枝の花盛り、やがてめでたう父上諸とも、奥の内裏と仰がせうわいの。

ト鶯の笛、しめやかなる合ひ方になる。梅の枝へ鶯來り囀ずる。お鷹見て

誠に優しき鶯の聲、妻戀ふ雉子にあらねども、思はず妾で鶯宿梅、時至り梅花の開くる勢ひに、我が大望も成就なさん印しなるや。ハテ、心地よき鳥の音ぢやなア。

ト上の障子より大導寺一學立ち出で

一學　鶯の聲なかりせば世の中に、春の心は長閑けからま

じ。
ト立ち身にて、刀を突く。鶯を見て居る。
たか　ヤアあなたは御上使。
奥州　一學さま。
一學　オヽ、優しくも傾城奥州。今一人はこの度眞人武則、妾に召し抱へしお鷹とやら。女子は氏なうても玉の輿。歌の道に心がけなければならぬ。梅を眺めて樂しむとは、ハテ、しをらしい心ぢやなア。
ト鶯消ゆる。笛止む。
たか　これは又、賤より出ました私し。何も歌とやらの道は存じませぬが、武則さまの仰せにて、このお館にお出でなさるゝ、奥州どのゝ伽やら、何やらこれに居りましたのでござりまするわいなア。
奥州　ほんに、お恥かしうござんすわいなア。
一學　イヤ／＼、奥床しい。
ト思ひ入れ、奥にて
腰元　サア／＼、お姫樣、これへお出で遊ばしませい。
ト唄になり、正面の障子上がる。上に賤機姫、琴を前に置き、下に武則、上下衣裳にて煙草盆拘へ居る。後に腰元二人附き添ふ。

一學　これは眞人武則。
ト下り立ち、武則も下りて
武則　大導寺一學どの、お役目とは申しながら、御苦勞に存じまする。
一學　イヤモウ、退屈いたしてござる。早く勘合の印、まつた大臣へ返答は、それなる賤機姫の身の上。
武則　畏まつてはござれども、まだその先に一學どのへ、御覽に入れます物がござりまする。
一學　大切なる二種の、返答より先へ見せたい物とは。
武則　朝敵謀叛の安倍の貞任が在所。
一學　ヤ、なんと。
ト　お鷹、奥州太夫、一學も思ひ入れ。
武則　傾城奥州と申すは、貞任が娘千代童姫。
奥州　エヽ、どうしてマアわたしが。
武則　爭はれぬ證據と云ふは、即ちこの品。
ト前幕の矢の根を出し
陸奥武士の用ゆる雁股の矢の根、袱紗の裏には天喜三年九月五日誕生の悴。千代童と云ふ女子を男子に轉ぜし、筆は厨川次郎太夫、安倍の貞任と記し、その上、義光公へ贈りし守の裂れと同じき陸奥錦。これを所持なす傾

城こそ、正しく敵に由緣の者と、さてこそ館へ伴ひしは、拷問なして父貞任が、在所を白狀させん某が計らひ。

一學　成る程、それはようござらう。某も檢分いたさん。誰れかある、奥州が責め道具を持て。

ト下座にて

雲平　畏まつてござります

ト雲平、手桶、割り竹を持ち、出て來り

奉公初めに叩き役、ぶつて／＼ぶち据ゑて、白狀させてお目にかけませう。

武則　イヤ、拷問の役人は、それなるお鷹。

たか　エ、、アノ私しに。

武則　如何にも、某が妾に召し抱へし其方。身が詞は背かれまいがな。

ト　お鷹、ヂツとこなしありて

たか　委細畏まりましてござりまする。

武則　姫君にはお構ひなく、それにて琴の御一曲。

一學　サア、キリ／＼と拷問なせ。

雲平　畏まつてござりまする。

ト獨吟になり、賤機姫は琴を調べる。雲平、割り竹を持ち、立ちかゝる。お鷹、淚を隱し、傍への紅梅の枝を持ち、奥州太夫が後へ廻り

たか　申し、いづくのお方か知らねども、現在妾が

武一　ヤ。

たか　申し、浮世でござりますわいなア。

トまた獨吟になる。梅にて打つ。梅花散りかゝる。奥州太夫、身を惜しまず覺悟の思ひ入れ。

雲平　サア、眞直ぐに吐かしやアがれ。

ト割り竹にてむごく打つ。お鷹、心遣ひ。此うち武則一學、二重へ上がり、煙草のみ居る。腰元は下に來て姫に侍く。この獨吟のうち、雲平は打たうとするを、お鷹隔てゝ、我が身を楯にして、梅にて奥州太夫を打つ。いろ／＼こなしあるべし。トゞ賤機姫、琴彈きしまひ、獨吟切れる。

雲平　エ、、死太い女つちようめ。

ト打ち据ゑようとする。

一學　コリヤ、待て下郎。

雲平　何ゆゑお留めなされまするな。

一學　大切なる朝敵、貞任が娘、過ちあつて打ち殺さば、貞任が行くへ、いよ／＼知れぬと申すもの。なんと武則左樣ではござるまいか。

ト武則、思ひ入れあり

武則　仰せの通り。さりながら、最前から見まするところその身を惜しまず覺悟の體。こりや、なか〳〵白狀は致すまい。それとも又、御上使の一學どの、御賢慮もござらば、如何やうとも。

一學　なんの、白狀いたさぬと申すことがござらう。獄屋に引立て、手を替へ品を替へ、某が白狀いたさせ見ませうワ。

武則　アノ、おてまへ樣が。

一學　如何にも。

武則　ハテナア。

ト思ひ入れありて

お鷹、この一品は其方に預け置く。

ト矢の根を投げる。取上げ

たか　なんと仰しやります。この矢の根を私しへ。

武則　只今拷問の手際、見所あるゆゑ。

たか　それゆゑに。

武則　如何にも。

一學　然らば、千代童姫は某が糺明。ソレ、獄屋へ引け。

雲平　ハッ、心得てござる。立たう。

ト時の太鼓になり、打悄れたる奥州太夫を、雲平引立てゝ下座へ入る。

武則　然らば御上使。

一學　武則、後刻。

ト唄になりて、左右の障子しまる。お鷹殘る。合ひ方になる。お鷹こなしありて矢の根を見て

たか　心得ぬ武則の詞。この矢の根を自らへ。

ト思ひ入れありて

もしやこの身を

ト思ひ入れ。上下より捕り手四人出て窺ひ寄りて

四人　捕つた。

トかゝるを、手ばしかく左右に見事に投げて身構へして

たか　こりや何ゆゑにこの狼藉。

ト右馬之丞出て

右馬　合點のゆかぬ女、飛脚となりて書狀を取替へ、我れ我れが一大事を妨げし上からは、後日の邪魔、繩打つて館へ引く。覺悟なせ。

たか　ヤア、小賢しきその云ひ事。滅多に手に乘る女子ぢやない。妨げして怪我しやんな。

右馬　さう吐かしやア、先ツ斯う。
　ト切りかける。お鷹、懷劍にて突きかける。右馬之丞叶はず下座へ逃げて入る。捕り手又バラ〳〵と取卷く。
捕手　動くな。
たか　なにを。
　ト烈しき立廻りにて、四人を向うへ追ひ込む。下座より一學、奥州太夫を連れて出て來り
一學　ヤレ、雄島どの、待つた。
たか　なんと。
　トきつと思ひ入れ。一學、下へ來て、持つて出た鎧をそこへ置き、手を仕へ
一學　お見知りないは理り。某ことは貞任どの丶別腹の弟、鳥の海の城郭にて人となりし、松浦七郎時任と申す者でござりまする。
　トお鷹、思ひ入れ
前九年の戰ひに、八幡太郎義家が爲に討ち破られ、所々漂泊の其のうちに、出羽の郡領へ取入り、院使と僞はり勘合の印、御正印まで手に入れて、再び大義を思ひ立ち、旗上げなして、父賴時の追善戰せんものと思ふ折から、勿來の濱にて兄貞任どのにお目にかゝり、先づ斯くせよとの指圖に任せ、義家が留守を幸ひ、氣ぶつさいな武則、平太夫景成らを同士討ちさせんと、入込みし某。證據と申すは即ちこれ。
　ト四建目の錦の旗を出し
はや先達て錦の御旗は盜み取りしが、その夜何者とも知れぬ曲者、同じ出立ちに御旗を爭ひ、思はず中より引裂きしが、日の御方は即ち某が手に殘る。兼ねて父賴時、望むところの旗なれば、この御旗を眞先に立て、勝利を得ん事疑ひなく、千代童姫も難なく助け來りしからは、疑念を殘さす御心底、お明かしなされて下されい。
　ト旗を渡す。
たか　成る程、七郎時任どのと云ふ弟ありて、萬事の駈引き殘る方なく、諜し置きしと夫の文通。割符を合すこの御旗。よくも手に入れられしよな。
一學　まつたこの金龍の鎧は、その上、武州の大河を越えし奇瑞とあつて、男山正八幡へ奉納ありしを、密かに矢の根をしつらひ、これ禁庭を調伏と難題を申しかけ、その上天下に名だゝる重器なれば、安倍の一統、この鎧を掛け的に射通せしと、末代の亀鑑になさんと、二つの計

略。兼ねて一味の味方もござれば、某はこれより直さま彼の地へ馳せ越え、千代童姫は知る邊の方へ落し申さん。

たか　オヽ、殘る方なき時任どのゝ詞。妾も兼ねて島の海の友久、一揆起らば馳せつけなん。さりながら、女でこそあれこの雄島、敵何萬騎にて圍むとも、しや物の數とも思はんや。心がゝりはこの一品。

ト勘合の印を出す。

これこそは軍令催促の勘合の印。即ち時任どのへ。

ト勘合の印を渡す。一學、懷中より御正印を出し

一學　これこそは御正印。某再會なすまでは、姉上の雄島どのへ。

ト渡す。

たか　猶豫は油斷、七郎どの。

一學　心得ました。

ト捕り手一人出て

捕手　朝敵謀叛の二人の奴等。イデ

ト行くを一學、引返し、上へ投げる。お鷹、手ばしかく懷劍にて仕留め

たか　事構はずと、七郎どの。

一學　合點だ。

ト奥州先に七郎、鎧を抱へ、カケリの鳴り物にて、向うへ走り入る。お鷹、捕り手に止めを刺す。これにて道具ぶん廻す。

本舞臺、向う淺黄幕、一面の平舞臺、奥庭やうの飾りつけ。柴垣、種々の植込みよろしく、誂らへの通りにして、ゴン／＼にてとまる。

ト柴垣より雲平出て、窺ひこなしあつて、また元の垣へ忍ぶ。下座よりお鷹の雄島、衣裳着替へ、凛々しく小褄引上げ出て來て

雄島　心がゝりは娘千代童。折よくも七郎どのに渡す上は氣遣ひなし。今ぞ天運循環して、我れ／＼が運命開く時至れり。これより直ぐに御正印を以て、軍令狀となし、宗任その外安倍の一黨招き集め、夫と共に旗上げなさんは瞬くうち。

ト雲平、窺ひ出て

雲平　貞任が女房雄島。この雲平が生捕つて、鎌倉御所へ引いて行く。腕廻せ。

雄島　ヤア、雄島に向ひ慮外の廣言。物數ならねど夏の虫、

この懷劍の錆となりや。

雲平　やだアと吐かしやア、首にする。觀念

ト切つてかゝる。雄島懷劍にてあしらひ、兩人よろしく見得になり、三味線入り六段のやうな合ひ方になり、雄島、雲平を相手にタテあつて、トゞ雲平を切り倒して止めを刺し、こなしありて

雄島　それ〳〵。

ト領き、花道へかゝると、遠責めになる。雄島、思ひ入れありて、こなたへ來る。また遠責めになる。雄島こなしあつて花道の中程へ行く。ドンチャン烈しく、揚げ幕際にて合圖の狼煙、煙硝火パッと立つ。鳴り物近寄る。雄島、キッとなると、誂らへの引拔きの形になり、黑髮とけて誂らへの鬘になり、耳そばだてゝ、

ハテ、心得ぬ貝鉦太鼓。亂調に打ち立つるは。

トこなしありて

さては武則が計らひにて、この雄島を逃がすまじとの、手配りなるかや。

ト胸を据ゑて

しや事をかしや。何萬騎にて取圍むとも、何程の事あらんや。ハテ、小ざかしい。

ト思ひ入れ、矢張り遠寄せにて烈しく。雄島、悠々と花道へ行くと、向うより侍ひ二人、黑の四天にて鑓を持ち、窺ひながら出て、雄島が來る向うへパッタリと鑓を云はせ、穗先を揃へて立ち向ふ。雄島、騷がず、直ぐに本舞臺へ悠々と來る。下座より又同じく黑四天の侍ひ二人、鑓を持つて出て、雄島を四人にてヂリヂリと附けて來る。雄島、舞臺眞中にてキッと見得。

四人　動くな。

雄島　そこ退きや。

ト立廻り。四人一度に突きかくるを、鹽首を取つて拂ひ退け、よきキッカケにて

四人　どつこい。

ト誂らへの鳴り物になり、この四人を相手にして、雄島、鑓タテあるべし。トゞ四人を下座へ追ひ込むと、向うにて

賴義　朝敵謀叛の安倍の貞任が妻。

義光　大位を狙ふ逆意の雄島。

賴義　賴義。

義光　義光。

兩人　見參々々。

トツッかけになり、花道より源頼義、金の烏帽子、長絹、弓矢を持ち、義光、長上下にて、白旗を旗竿に立てゝこれを持ち、軍兵大勢、アリヤ〳〵の聲にて出て來り、本舞臺へ來る。

頼義　敵ながらも天晴れの雄島が振舞ひ。朝敵とは云ひながら、未だ旗上げなせしにもあらず。

義光　殊に女の腕立てなれば

頼義　その功に免じ、一方をゆるめ歸すは、頼義が寸志。

雄島　ヤア、源家の棟梁、望むところの頼義親子。女なれども陸奥五十四郡の大守、厨川の次郎大夫貞任が妻の雄島、情をかくべき謂れはなし。サア、速やかに、御親子ともに御勝負あれ。

ト臆せず詰めかける。待つた〳〵と下座より武則、三方に勘合の印を載せ、持ち出て來り

武則　ヤア雄島、汝何程逸るとも、情に刃向ふ刃はあるまじ。疑はしくばこれを見られよ。

雄島　ヤ、これや、コレ、七郎時任へ、渡し置いたる勘合の印。

武則　七郎時任と云ひしは、お家の忠臣秩父の十郎。計略を持つて故なく勘合の印は取り戻したれども、當家にあつて益なきは、陸奥の大守に贈りし御正印。安倍の血筋の千代童姫。それゆゑ最前渡せし矢の根。なんと心に徹しつらん。

ト雄島、思ひ入れ。バタ〳〵にて向うより一學、凛々しき形にて引返し出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

一學　謀叛の棟梁、貞任が妻の雄島、別腹の弟と欺むきしは、此方の計略。まんまと取返したる軍令催促になくて叶はぬ勘合の印。その返禮には千代童姫は、故なく奥州高館へ送り屆け、その上最前渡した御正印も、武則どのゝ寸志なるワ。

ト雄島、口惜しきこなしにて

雄島　エヽ、義理ある千代童を、助けんばかりに心引かれ、敵の計略にやみ〳〵落入りしか、殘念な。頼義始め武則義光が恩義にめでゝ、心ならずも再會まで。

武則　一先づこの場は立別れよ。

雄島　とは云ひながら。

頼義　何時なりとも貞任が、馳せ向はゞ勝負を決せん。

雄島　オヽ、此方とてもその通り、義家歸洛ある上は、推してこれより馳せ向はん。

武則　先づそれまでは

一學　この場は此まゝ。
雄島　立別れん。
ト下座より右馬之丞出て
右馬　朝敵の餘類覺悟なせ。
ト切つてかゝるを一學、取つて引敷く。
皆々　さらば。
ト片シャギリにて幕。直ぐに打込み。

第一番目大詰

鎌倉花ヶ谷の場
奥州外ヶ濱の場

淨瑠璃「色逢夜半の思羽」常磐津連中
役名――八幡太郎義家。大江匡房息女、歌綾姫。奴、鐵平 實ハ坂戸九郎則景。勿來の關平。玉江の蘆平。おたくの橋平。芦屋の松平。鉢植賣り、田畑村の八右衛門 實ハ外ヶ濱鴛鴦の精。花賣り、難波のおつゆ 實ハ外ヶ濱鴛鴦の精。賤機姫かしづき、卷條。漁師、沖藏。同、灘六。出羽城之助重成。善智鳥文次女房、安方。

本舞臺、三間の間、結構なる高足高欄附きの御簾御殿、下に段幕を張り、これに常磐津太夫連中三味線居並び、頭取出て口上ありて、淨瑠璃名題、役觸れ讀み幕明く、紅葉の吊り枝下ろす。
ト東西々々と直ぐ前彈きにかゝり、直ぐに淨瑠璃。
〽いとも畏き神の告げ、玄冬の天、靑陽を、あらはす梅の花ヶ谷、八幡どのゝ御威風、草木も靡く陸奥の、任國すぎて鎌倉の、爰に暫しは假り館、色のいの字に川端屋、よい仲と見て三つの花。
トせり出しの賑やかなる鳴り物になり、源義家、羽織衣裳にて、小さ刀の形に褥の上に乗り、大きなる杯を持ちて下に、歌綾姫、廣振り袖下げ髮、姫の形にて、短冊を持ち、眞中に立ち身。鐵平、好みの奴の形、白練りの白丁の上を掛け、熊手を持ち、側に竹の三つ股に銚子を掛け、紅葉の落葉を焚いて居る見得にて、三人セリ上がる。
義家　一花開けて色ありと、眺めに勝る庭前の、紅葉分けてこの鎌倉へは、初めて下りしこの義家。
歌綾　妾とてもその通り、初々しいお目見得も、お許し請けて來る事は來ても、不束なこの腰折れ。

鐵平　イヤ又、奴めは久し振りで、お目見得を、今度はちつと新らしく、衞士の焚く火の酒の燗。この紅葉の枝を折りくべて、出來た所は、なんとよいぢやござりませぬか。旦那、一つ召上がられませぬかえ。

歌綾　イヤナウ、それよりは先づ自らを。

ト見物へ思ひ入れして

あなた方へ。

義家　これは一興。どうしてマア、某が身の上さへ、まだろくろくに申し上げぬに、人の事が……こりや、鐵平を賴むがよい。

鐵平　これはしたり、どう致しまして私しが……と申して居つては果しがない。ようござりまする〳〵。あれに居りまするが、お馴染お取立ての澤村源之助。又これなるが、この度下りましたる中村慶子でござります。何卒不調法なる兩人、隅から隅まで顏見世のお禮申し上げまする。何卒當芝居に幾年も〳〵居りまするやうに、御贔屓をなされ下さりまして、その後では私しにも、ちつとばかり。イヤ、ちつとばかりではござりませぬ。豪勢に御贔屓を願ひ奉ります。

ト顏見世口上よろしくありて

歌綾　ヤレ〳〵、それで落ちついたわいなア。

義家　イヤ〳〵、まだこの義家は落ちつかぬ。この度禁庭御媒介ありし、中將實方の息女淺香姫、まつた軍令催促に、なうて叶はぬ勘合の印。この二種落着せぬうちは、落ちつかれぬぢや。

鐵平　エヽコレ、旦那があんな堅い事を仰しやるは、靡と云ふもの。そこらは構はず、ナ、合點か〳〵。

ト敎へる。

〽こぼるゝ露の愛嬌も、濡れて見たさの願ひより、初々しさに恥かしさ、ぢつと見ぬ振り見る振り袖の、それが合點のえゝこちらにも、強く見せたる梓弓、戀には矢竹心利き、仕方もなんぢやかぢられて、側でキヨロ〳〵せきんぼう、色濃き仲とぞ見えにける。

義家　時に旦那、あなた樣には、衣川の一戰には、何ゆゑ貞任とやらを、お遁がしなされましたな。

義家　衣川にて敵將貞任を助けしは、武士の情、弓矢の上。

鐵平　イエ〳〵、それはさうではござりますまい。鬼神と呼ばれし安倍の貞任。アヽ、こりや、所詮貞任には及ばぬと思し召して。

義家　それゆゑ助けしと思ふか。
鐵平　左樣でござります。それでなくば、その時のお話しが、承はりたうござります。
義家　その話しが聞きたいと申すか。
鐵平　どうぞ承はりたうござります。
義家　さもさうず、さもあらん。
ト扇を持ちて立ち上がり
〽それ衣川の城と云つぱ、さしも嶮岨の要害にて、萬夫は元より駿足の、馬蹄を立つべき所もなし。
ト鐵平立ち上がり
〽例へ敵勢何萬騎にて攻め來るとも、兼ねて期したる事なれば、遠き奴ばら人礫、勇猛必死のその勢ひ。
〽されば味方の軍略にて、遂にやす〳〵攻め破る、名に負ふ貞任詮方盡き、搦め手より拔け出でて、駒を早めて遁がれ行く。
義家　ナウ〳〵、貞任、年頃日頃の勇猛にも似ぬ振舞ひかな。義家が物云はん。返せ。
〽戻せ、暫し。暫しと呼びかくれば、貞任駒をきつと控へ。
年を經し、糸の亂れの苦しさに。

鐵平　衣の楯は綻びにけり。
〽糸の亂れと味方は散り〴〵、風に蜘蛛の子散らすが如く、矢叫びの聲、轡の音、天地に響きてすさまじき。
義家　かゝる忙しき中ながら、答への秀句は優美のものと、さてこそ助けし貞任が命。
〽實にや天地の氣を動かし、目にさへ見えぬ鬼神にも、哀れと思はす和歌の道、さてこそ文は武の德たり。また歌綾どのには、この義家を、なんとして。
歌綾　サア、それはな。
ト指を折りてこなし。
〽數へて見れば三歲後、都の春の花見月、人見ケ岡のその中で、ふつと見初めた中の院。云ひ寄る傳手も互ひの心、首尾野々宮の小柴垣、ひよんな障りがありす川、ついそれなりに大瀨さへ、なくて別れの嵐山、となせの瀧の音なしは、あんまり辛いぢやあるまいか。
鐵平　オッと、そこらは武家にならねば、ゆかぬ事でござります。
歌綾　武家になるとは、そりやどうするのぢやえ。
鐵平　何事も私しが、よいやうに致します。
ト紅葉の枝を大小のやうに、歌綾姫に差させ、花道へ

連れ行き、鐵平、振りを教へるこなし。歌綾姫、見て、

アヽコレ、そんな怠けた侍ひはござりませぬ。この通りにする。

歌綾　そんなら斯うかや。

鐵平　さうとも〳〵。もつとしやんと〳〵。

ト歌綾姫、しやんと丹前の振りになり、大小の合ひ方になると、本行の丹前の振りありりて、六法あり、本舞臺へ來り

歌綾　來いよ。

鐵平　ネイ。

トそこへ出て

〽おらが旦那は〳〵、お氣が弱うてお心好しで、くつきり剃出し、うつゝいもので、文の使ひや色のやりくり、なんでもかんでも心得たんぼぽ、おらが山の神は〳〵色が黑うて身が鮫肌で、夜は寢通し寢相が惡うて、宵にや齒ぎしり夜中にや鼾、なんでもかんでも、ちつとゝたんとゝやりばなし。

委細構はず、ソレそこで。

〽それ〳〵と押しやれば。

ト鐵平、無理に義家が側へ突きやる。義家に抱きつく。

鐵平も襠裲を引ッかぶる。

〽任せぬものは花に雨、月に村雲はるばると、奥の細道なにがしの、主の君の使ひとは、誰れしも三つ蔦まだ色づかぬ、戀の奴の可愛らし。

ト合ひ方になり、花道より卷絛、振り袖、着流しにて、綺麗なる鳥籠に鴛鴦の番ひ入れしを、紅葉の枝にかたげ、これを持ち出て、花道にて振り事。

〽しぐれ〳〵と誰が爲濡れて、人の思ひをこの身に荷ふ、さりとは〳〵物思ひ草、ほんにこの籠この籠の鳥、ならぬ戀ならやめたがましよ、すつきりすめぬおやないかいな、すめぬも道理顏紅葉、散りしくや紅葉踏みかけて、館間近くたどり來る。

鐵平　イヤア、どこからか美しい振り袖盛り。姐さん、お前はアノ、どこから來なさつたえ。

卷絛　アイ、わたしやこの館の殿樣、義家さまへお使ひに、都から參りましてござんすわいなア。

義家　ナニ、この義家への使ひとは。

ト卷絛、歌綾姫を見て、思ひ入れあり

卷絛　わたしはあなた樣のお迎ひに、姫君樣に成り代り、申し上げまするでござりませう。エヽマア、あなた樣は。

義家　如何にも、姫への返事延引せしも、軍慮の暇なく、それゆゑ思はず

巻篠　イエ〳〵、さう仰しやるは僞はり。定めて外に増す花が、ござりましての事でござりませう。今日は是非是非御返事を、お聞かせなされて下さりませいなア。

義家　サア、その返事は。

巻篠　ならぬと仰しやりまするか。

歌綾　その御返事とは、賤機姫さまとやらの御返事かえ。その御返事は、自らがならぬわいなう。

鐵平　イヤ〳〵、これは其やうに、兩方から爭つては、旦那も御返事が仕憎からうから、私しが好い智惠がござりまする〳〵。

歌綾　その智惠とは、どうするのぢやえ。

鐵平　サア、あのお姫様には、田舍の麥搗きや田植を、御存じでござりますかえ。また姐さんは馬の目利きが出來ますかえ。

歌綾　そりや又なぜにえ。

鐵平　ハテ、そこが智惠較べと云ふもの。どちらも知らぬ事をさせて見て、出來た方へ御返事をなさるが、よろしうござります。

義家　こりや、面白からうわいの。

鐵平　サア〳〵、お姫様から、やらかしたり〳〵。

　トこれにて歌綾姫、振りになる。

〽背戸に立つたは八文字さまの、田植仕舞うたら日は目が多い、晩にござらば椽のかげよ、お方どつから來やつた、茨の垣から出まつた、月に別れりや小手招き。

歌綾　オヽ、サテ〳〵。

〽小手招き。

鐵平　きついものだ〳〵。

　トそこへ出て、鐵平、振り事。

〽月の障りは手桶ばん、必らずやいのは明日の晩、夜番店番将棊盤、鼻は看板目は碁盤、後膳は掛け盤もみ襦袢、さりとは迷惑千萬な、厩の馬は豆の番、サア〳〵渡した其方の番。

　ト巻篠、馬士の振りにする。

〽駒は陸奥きり原や、牧の荒駒引連れて、白馬の節會は雲の上、加茂のはやしの競べ馬、鞭の拍子にめゆひの手綱、陰陽の鞭朝嵐、はこぶ伸び足しつとんしとしと八文字、さても見事なお葛籠馬よ、泊りかえ泊らんせ、坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、相の土山雨が降る、ほてつ腹めと

なまめかし。
鐵平　旦那、こりやア、兩方へ、お返事をなされずばなりますまい。
ト歌綾姬、義家に寄り添ひ。
歌綾　コレ、申し、義家さま。
〽今更そんな二道かけた、千筋百筋引く手の多い、伊勢の野飼ひの花薄、牛の角文字お前の御紋、戀のいろはの始まりに、書いてある字ぢやないかいな。それを慕うて都から、はる〲と來たこの身をば、炬燵蒲團のしま守りに、一人寐よとはあんまりな、まだお馴染もない皆樣の、つもらしやんすも恥かしけれど、歌の手爾波は父樣に、敎へてもらうて來たけれど、口も廻らぬ矢車の、當りせりふと云ふ事も、どう云うてよかろうやら、どうぞ敎へて下さんせ、やいの〱と手を合す、神や佛の利生より、おぼこ娘ぞ有り難き。
卷篠　申し、私しがお返事は、どう遊ばしまするぞいなア。
〽あちらへ引けば、こちらへも、袖にもつくる右左、かたへを隔てる鐵平が、心の內に一思案、それとは見す見す御簾の內、深き契となりぬらん。
ト屋體へ義家、歌綾姬を入れる。歌綾姬、オヽ、嬉しと抱きつく。チヨンと御簾下りる。卷篠、續いて行くを、鐵平留めて
鐵平　ドツコイ〱、やる事はならぬ。そもじにはこの鼻が、聞きたい事がある。
卷篠　聞きたいとは、なんの事でござんすぞえ。
鐵平　アノ、もう通つたかと云ふ事。
卷篠　通つたかとは、何がえ。
鐵平　サア、それはなによ。オヽ、それ〱、虛無僧を後手に縛つたやうな物が、通つたかと云ふ事。
卷篠　エヽ、なんの事やら知らぬわいなア。
鐵平　知らずばおれが敎へてやらう。
ト卷篠をそこへおつ轉ばす。卷篠、鐵平が手を喰ひつくゆゑ、これにて放す。卷篠、びんしやんとして奧へ入る。
オヽ、痛い〱。豪勢に喰ひつきやアがつた。コレ、娘娘。
ト鳥籠を見附け
コレ〱、爰に鳥が忘れてあるわえ。
ト云ひながら、籠を取上げ見て思ひ入れあり、
鴛鴦の番ひ、この鳥至つて執着ありて、戀慕の心深しと

聞く。

トそこにある長柄の銚子を持ち來り

この鳥の血汐を取つて、酒に交へ、大將義家が心を蕩かし、日頃の大望。こりや好い物が手に入つたわえ。

ト鴛鴦を出し、二羽ともに引ッ掴み、白刃を抜いて刺し通し、血汐を銚子へ入れうとする。薄ドロ〳〵になり、煙硝火パッと立つ。鐵平、うつとりとなりて、鳥を左右に投げて、バッタリと宙返りして悶絶する。

ト謠、摺り鉦入りの出の鳴り物になり、花道よりおつゆ、花賣りの拵らへ、手拭を頭へ巻き、袖なし羽織にて、いろ〳〵の花を入れし荷をかたげ出て、花道にて招く。八右衛門、淺黄頭巾、袖なし羽織にて、白股引、手甲の形、いろ〳〵鉢植の植木の荷を兩掛けにして、天秤棒を持ち出て來り、花道にとまる。

〽梅の難波の難波の梅の、好い花の顔、花のお江戸のお江戸の花の、好い男振り、つん〳〵連れ立つ商ひ上手、丁度似合ひの好い御縁日、八日は色の茅場町、俠ひ肌なら藥研堀、好いた水仙、冬至梅、早咲き椿、金目貫、さて鉢植は福壽草、ちつと捻つた男松、八つ手の花の山茶花も、外へはやらぬ御贔屓の、得意廻りと荷ひ來る。

ト本舞臺へ來る。下座より巻篠、出て來る。

つゆ　梅水仙、生花の御用はござりませぬか。

八右　アヽ、コレ〳〵まんがちな。先づわしから先へ商ひをせねばならぬ。鉢植植木の御用はござりませぬか。

つゆ　イエ〳〵、わたしが先へ商ひをせねばならぬわいなア。梅水仙、生花の御用はござりませぬか。

八右　イヤ〳〵、どうあつても、わしから先へ。

つゆ　イエ〳〵、わたしが先ぢやわいなア。

ト兩人爭ひ、顔見合せ

兩人　ハヽヽヽ。

八右　いかいたわけ。いつも連れ立つて歩く商人。後の先のと爭ふ事はなかつたわいの。

つゆ　さうぢやわいの。常々仲の好い二人。それゆゑ世間では、お前とわたしをば

ト思ひ入れ。

八右　大方色だと云ふであらう。

つゆ　イエ、女夫ぢやと云ふわいなア。

巻篠　モシ〳〵、お前方に頼みたい事があるわいな。

八右　ハイ〳〵。なんぞお召しなされて下さりまするか。

巻篠　イエ〳〵、そんな事ぢやない。わしやいつそ氣が揉

めるわいな／＼。
八右　ナニ、お氣が揉めるえ。そんなら私しが、御祈禱をして上げませう。
　ト花の枝を取り、錫杖にして持ち、神おろしになる。
〽あやまつて拂ひ勘定し奉る、そも／＼色に大峯參上、はじゆんの床入り逆のもめ、深間の奥に年を經て、洒落のけんぞく連れらるゝ、お共の天狗は誰れ／＼ぞ、八ツ下がりからブラ／＼と、ひるが嶽の次郎坊、内に飯綱はめらきぼう、何時でも長いと呪ひに、大山の伯耆坊、その外横川、平、白峯、いら高聲は高なり込んで、そゝり立てば、襖から一の覗き二の覗き、うらかべ谷に投げられて、ころり／＼とこけの行、難行苦界の御利益、必らずなくて叶はじと、出放題なし嘘でなし、愼しみ給へとしやべりける。
八右　サア／＼、これから嬶アどんの、お神樂々々。
つゆ　それぢやと云うて、わたしがマア。
八右　ハテ、お神樂の始まり／＼。
　ト神樂の鳴り物になり、おつゆにお多福の面を着せて、扇を持たせ、無理にそこへ出す。
〽やんもしろや荒神の、爰のお庭へ井戸掘れば水も湧き黄金の山を賑はひて、寶に松の葉の諸共に、末繁昌のめでたさよ。
〽千早ふる／＼鈴の音も、よしやしやんご／＼と彈く三味線の、色音も可愛の、機嫌直しの銚子さへ、お福女郎の癖として、色と酒とに浮かれ／＼て戀の世界や、さいつ押へつ押へつさいつ、さいつ杯の隈なき月を眺めけり。
　ト納まる。八右衞門、卷篠に寄り添ふを見て、おつゆ、八右衞門を連れて來て、
つゆ　エヽ、慈な惡性男。エヽ、なんぢやいなア。
〽わしを野暮ぢやと嘲なませ、其方の勝手をしようでの。おゝ、野暮にはつける藥食ひ、とき／＼風がにや氣が延びぬ、延びた鼻毛と云ふ事が、じやれが嵩じて喧嘩の種よ、どうでもしやと拗ね詞、花を爭ふ女夫島、恨みの筋とぞ見えにける。
　ト南方より關平、芦平、松平、橋平、紅絹襦袢の奴にて出て
四人　女め、動くな。
　ト卷篠を取卷く。八右衞門、おつゆ、柴垣へ入る。
卷篠　女子一人と思つて、こりやなんとしやるのぢや。
關平　なんとするとは知れた事。おらが仲間の鐵平が、ほ

の字の娘と聞いたゆゑ、取持ちに來た勿來の關平。
蘆平　玉江の蘆平。
橋平　おだくの橋平。
松平　蘆屋の松平。一番邪魔と
四人　つん出たのぢや。
卷篠　ホヽヽヽ、賤機姫のお使ひに、はる／＼と來たお轉婆者。ならば手柄に搦めて見や。
四人　その腰の根を、斯うして。
トかゝる。卷篠、四人を相手に所作ダテになり、面白き鳴り物にて、紅葉の花傘を二本開き、よろしく見得になる。
ト淨瑠璃。
〽神樂月、色ぢや／＼と菊すが嬉し、そりや何ゆゑに、紅葉見に行きや相合ひ駕籠よ、餘つぽど戀ではないかいな、そりや知れた事、ほんにそれ／＼、さうぢやいな、そりや知れた事、ほんにそれ／＼、さうぢやいな、離れぬ仲の縁ぢやもの。
トたて模様よろしく
〽とめて見たいは。
四人　ドツコイ、留めたぞ。

〽五尺の袖よ、留めて縫ふてふ又結ぶ、締めて見たいは黒襦子の、締めて解いて又結ぶ。
トどろ／＼になり、四人、一度に悶絶する。おつゆ、八右衛門出て、
八右　お家に逆臣ありて、君を弑し奉らんと計るゆゑ、義家公は姫君諸とも、裏道を落し參らせた。この場は我れ我れに
つゆ　お任せあつて、少しも早くお館へ。
卷篠　そんならアノ我が君樣は、謌綾さまと御一緒に。
八右　急いで早う。
卷篠　心得ました。
ト早三重になり、卷篠、小ぎりめに向うへ急ぎ入る。
鐵平出て、
鐵平　怪しい兩人。そこ動くな。
ト一腰拔いて切りかける。大ドロ／＼になり、鐵平、目くるめいて、ダヂ／＼となる。兩方へ煙硝火パツと立つと、舞臺兩花道へ浪板の打返しに、杜若の盛りセり上げる。八右衛門、おつゆ、すつくと立ちて誂らへの引拔きにて、女夫鴛鴦の形になる。
八右　坂戸の九郎則景。

つゆ　逢ひたかつたわいなう。

〽なう恨めしや我れ〳〵は、鏡影一双離れざる、契りの念慮水の月、鴛鴦一人は寐ねもせで、今日まで女夫なりし身を、煩惱菩提は人界の、法の道づれ我れ〳〵は、この世を去りし瞋恚のほむら、恨みの雲霧晴れやらぬ、思ひの思ひ羽劍の劍羽、思ひ知らさん思ひ知れ、流れの水音どう〳〵〳〵、梅花散り飛ぶ庭の面、冥々朦々爽々たり。

鐵平　さては最前、我が手にかけし鴛鴦なるか。妨げなすは及ばぬ事。イデ則影が一刀に。

トまた切りつける。立廻り。兩人、紅葉の枝を持ち、鐵平を苦しめ、ドロ〳〵。

〽ひらりと拔いて切りかくれば、拔けつ潜りつ比翼の羽風、眼を眩ましひら〳〵〳〵、流石の則景堪り得ず。

ト大ドロ〳〵になり、鐵平を連理引きに引き戻し、兩人花道へ行き、鴛鴦の振り存分あるべし。

〽殺生非道の報いは目前、かしこへ追うてはたぢ〳〵たぢ、あら有り難やと飛び上がり、行くを拂へば羽打つて支へ、名殘惜し鳥離れぬ緣、その執着も道を知る、別れ別れに。

ト段切りになり、太夫を消す。誂らへの岩臺に八右衛門、おつゆ、紅葉の枝を鐵杖のやうに持ち、鐵平を引きつける。

鐵平　鳥類の爲に惱まさるゝか。エヽ、口惜しいなア。

八右　今ぞ本望。

つゆ　我が夫鳥。

兩人　嬉しやなア。

トこの見得、大ドロ〳〵にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、上に誂らへの枝振りよき松の大樹。舞臺に波板、下の方に藪疊、卒都ヶ濱と書いたる榜示杭。所々に蘆茂り、舞臺に苫船一艘あり、時の鐘に波の音をかぶせたる鳴り物にて道具納まる。

ト花道より漁師三人、櫂を擔ぎ、出て來り

漁一　昔よりこの外ケ濱は、殺生禁斷とのお觸れがあつてなア。

漁二　それ〳〵、その古へは知らぬが、殺生は御法度。

漁三　それゆゑ御代官の城之助さまより、嚴しい云ひつけ。魚は勿論、鳥を獲る事はむづかしいなア。

漁一　それにこの頃毎夜々々、網を打つ奴があると濱中の噂。
漁二　あいらに網を打たれては、運上を出して商賣にするこちとらが大きな邪魔。
漁三　なんでも見當り次第、引ツ縛るがよいぞや。
漁一　サア／＼、濱手を一遍尋ねて歩くべい。來やれ。來やれ。
ト波の音にて、三人下座へ入る。薄ドロ／＼になり、燒酎火燃えて、松の枝へ袖を啣へし鴛鴦一羽、飛び來る。苫船の内より安方、竹笠に蓑を着て、松明を照らし出て、
安方　思ひ出せば一昔、我が夫文次どの、實方卿に仕へ申せし縁に依り、賤が伏屋に姫君を、お匿まひ申し、女子の身であられぬ漁り。殊にこの外ケ濱に、漁師の外は殺生ならぬと、城代よりのお觸れ。それ知りながら淺ましい、身のすぎはひ。これにつけても別れし夫、生死の程も定かならず、もしやこの世にござんすならば、この年月の憂さをも語り、共に侍き參らせんに、果敢ない浮世であるわいなア。
トまた薄ドロ／＼になり、燒酎火燃ゆる。松明にて松の枝を見て、
ありや鴛鴦さうな。端に何やら。
ト云ひ／＼見る。寢鳥になる。安方、舞臺へ下りて、聞き耳立てゝ、
ヤ、わたしを呼ばしやんすは、文次どのおやござんせんかえ……エ、、そんなら、なんと云はしやんす。そりやマア、どうして／＼。
ト駈け廻り、聲を知るべに尋ねるこなし。
夫婦は二世と聞きつるに、なぜに形を見せて下さんせぬ……エ、、、エ、、、。ヤア、人手にかゝつて死なしやんしたとか……オ、……ホイ。
ト泣き
道理こそ、その後別れて便りも聞かず……コレマア、ちよつと顔見せて下さんす事は、ならぬかいなう／＼。
ト泣き
ムウ、して、お前を殺したは何者……エ、、そりや云はれぬ……とは何ゆゑに云はしやんせぬ。女でこそあれ夫の敵。
トいろ／＼聞き耳立て
ナニ、敵は安倍の宗任どのとや。オ、、、。

トまた聞き耳して、
さうでござんせうとも／＼。常々荒々しいと聞いた、その宗任どの、今に敵を討つてお前に手向けまする程に、潔よう成佛して下さんせ……エヽ、ヽ、エ、ナニ、冥途の使ひ繫げれば、もう行かしやんすとかえ。
ト鴛鴦飛んで、啣へた袖をそこへ落し、消ゆる。
ヤヽヽ、もう聲の聞えぬは、行かしやんしたかいな行かしやんしたかいな。
トうろ／＼尋ね、フッと袖を見て取上げ
ヤヽ、こりやコレ、わたしが縫うた夫の片袖。
ト思ひ入れありて
これをわたしに渡さしやんしたは、片腕となつて、敵宗任を討つてくれと云はしやんす事でござんせう。
ト袖を抱へ、回向して、
この世の名は善知鳥文次どの、頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。
ト藪疊より沖藏、高札を持ち、出かゝり、こなたより灘六窺ひ出て、この時

沖藏　夜綱を打つはこの女。灘六、ソレ。

灘六　合點だ。

ト櫂にて打つてかゝる。

安方　夜綱を打ちし覺えはなけれど、何ゆゑわたしを。

沖藏　覺えないとは云はせない。あの船の内に網が入れてある上に、獲つた魚の籠まで見屆けたワ。

灘六　それゆゑ六藏を代官樣へ訴人にやつて、取逃がさぬやうに、つけて居たおいら二人。

沖藏　叶はぬ事だと繩にかゝれ。

安方　エヽ、すりや、あの船の
ト思ひ入れ。この時

兩人　うせう。

ト立ちかゝるを、沖藏を取つて藪疊へ投げる。灘六、櫂を持ちかゝるを、取つて當てる。灘六、ウンと水中へ倒れ込む。安方、胸撫で下ろし、今の片袖を懷中すると、時の鐘にて、向うより重成、百日鬘に黑小袖、朱鞘の大小にて、小田原提灯を提げて出て來り、舞臺を見て、提灯を隱し、窺ひ／＼來る。安方は心附かず、行かうとする。目先へ灯を出す。安方、恟りして、この提灯を打ち落す。重成、組み留めんとして安方が袖を控へる。安方、遁がれうとする拍子に、袖ちぎれて重成が手に殘る。安方は花道へこける。重成、思ひ入

れにて心意氣。安方は逝がれて花道へ入る。

重成　南無三、取逃がしたか。ホイ。

ト膝を打つ。拍子木の頭を打つ。

殘念な。

トこれをザキミにして、

拍子幕

第二番目　　釣舟屋の場

役名――金吾舍人之助惟滿。出羽城之助重成。娘、お仲實ハ寶方娘淺香姬。おみつ妹、お袖。家主、太郎兵衛。丁稚、勘太。石倉角之進。築地の善好。立引五郎。隱居、妙山。下女、おいろ。酒屋與吉。釣舟屋おみつ　實ハ善知鳥文次妻安方。安倍三郎太夫宗任。

本舞臺、三間の間、世話屋體、上に障子屋體、正面納戶口、赤壁書き落し、下に藪垣、藁葺きの門口、これに綱船、釣船と云ふ札掛けてあり、舞臺前に波板。軒口に氷柱、雪頻りに降り積りたる景色。幕の內よりお袖、振り袖、やつしにて前垂れがけ、俎板に向ひ料理をして居る。おいろ、下女の形にて軒口の雪を拂ひ居る。門口に太郞兵衛、家主の形にて傘をさし、立らかゝり居る。波の音、てんつゝにて幕明く。

そで　マア〳〵、この雪に太郎兵衛さま、此方へお入りなされませいなア。

太郎　イエ〳〵、さうしちやア居られませぬ。わしもこのお觸れを、長屋へ觸れて又、商賣にかゝらにやアなりませぬ。コレ、おいろ、今の事を、おみつどのが歸られたら、よく云つてくれろ。妹御も賴みましたぞや。

いろ　アイ〳〵、合點でござんすわいなア。

そで　姉さんが戾らしやつたなら、申しませうわいなア。それはさうと、アノ大家さん、お前に何か直しておもらひ申したい物があると、云うてでござんしたわいなア。

太郎　アノ何かえ、どこぞ漏ると云ふ所でもあるのかえ。

そで　イエ〳〵、棚とやらを吊つておもらひ申したいと、云うてゞござんしたわいなア。

太郎　そりや隨分心安い事。作料の取れる事なら、何時でもしてやりますよ。

そで　それ〳〵、据風呂桶の底が抜けて、根太が惡うなつて居ります。それも直して欲しうござんすわいなア。
太郎　何も今は忙しいから出直して、道具箱を持つて又來ませうわサ。
いろ　モシ、その次手に、わたしが鏡臺の葢を、ぶッつけて下さんせえ。
太郎　おきやアがれ。もう附け込む奴サ……ドリヤ、行つて來ませう。
ト花道へかゝろ。藪垣より犬一疋出て、太郎兵衞に狂ふ。
エ、、このぶちめは、無性にこすりつきやアがる。泥が附くわえ。退きやアがれ。
ト犬しぶたれる。
エ、、この畜生め。一緒にうしやアがれ。
ト空を見て
剛氣に積るわえ。
ト捨ぜりふにて犬を追ひながら向うへ入る。
そで　姉様は奧に居やしやんすのに、おいろとした事が。
いろ　ほんにさうだつけね。いつもの二番目には、向うから出なさるから、ツイ留守だと申しました。

兩人　オホ、、、。
トてんつゝになり、花道よりお仲、振り袖、やつし娘にて、傘下駄にて、一升德利を提げて出る。與吉、御用にて一緒に出て來り
なか　サア〳〵、この子とした事が、ちよつとこれをわしに持たせてから、わやくばかりして、何をして居やるぞいな。
與吉　アイ、わつちやア今のぶちと赤を嚙み合はして。
なか　其やうな事ぢやない。おみつさまが待つてあらう程に、早う行かうわいなア。
與吉　アイ〳〵。
トてんつゝにて内へ入る。
そで　お仲さん、戾らしやんしたかいなア。
いろ　さぞお寒うござんしたらう。オ、、與吉どんか。
與吉　アイ、これで二升參ります。
そで　サア、よい程に、あの奧へ行て、火にでもあたつて行かしやんせえ。
與吉　アイ〳〵、さうしやせう。
ト下へ入る。
いろ　時にマア、この勘太どんは、何をして居るなう。

そで　ソレイナア。
ト向うにて
勘太　ぶちや。オ、シキ。赤や、オ、シキ。
ト犬をけしかけながら、勘太、丁稚の形にて、神樂の鬼の面と、木劍を持ち出て來る。
そで　コレ〳〵、勘太、何をして居やるぞいの。
勘太　何もしやせぬが、あの鹿島樣の、十二神樂を見て來やした。
なか　それぢやものを、マア。
勘太　また同じやうに、お仲さんまで。わたしやアお內儀さんの使ひに行つたのだよ。
なか　おみつさんの使ひに行かしやんしたかえ。
勘太　さうサ。ちつとこれは極內々の事だが、用ありサ。あんまり鹿島樣の神樂が混んで、邪魔になると叱るゆゑ、ソツとコレ、この面と劍を引ツたくツて來る奴サ。
いろ　そんな事をしてもよいかえ。
勘太　よからうが惡からうが、大きにお世話。
いろ　エ、、その口を。
そで　コレイナア。なんの、あの勘太が云ふ事を。
なか　ハテ、取上げぬがよいわいなア。

勘太　ちつとさうもござるまい。
なか　さうして、そのおみつさまの御用は濟んだかや。
勘太　ほんにさうだつけ。
ト思ひ出し、大聲して
おかみさんえ〳〵。
ト呼ぶ。
いろ　ア、コレ、喧ましいわいな。
勘太　大きにお世話。おかみさんえ〳〵。
ト呼び立てる。奧にて
みつ　オイ〳〵。
トおみつ、半襟やつし、横帶、仇な女房の拵らへにて、醉うたるこなしにて出て來り
今わしを呼んだは、勘太、わが身か。
勘太　アイ、今に來ますぞえ〳〵。
みつ　オ、、それは好うしやつた。お仲さん、わたしや又醉うたわいな。
なか　其やうに酒を過しなさんして、お心持ちはようござんすかいなア。
みつ　なんの、この位な酒に。エ、イ。
ト醉うたるこなし。

コレ、お仲さん、ソレ、いつもの。
なか　なんでござんしたえ。
みつ　ひいやりと一口。ちよつと。
　ト お仲に雪を取つてくれと云ふ。お仲、盆に取つて來て、おみつにやる。おみつ、一口喰ひ、
オヽ、よい。氣がはつきりとなつたわいな。
　ト 雪頻りに降るを、おみつ見て、思ひ入れあり
アヽ、いま降る雪も、元見し雪に變らねど。
なか　エヽ。
　ト おみつ、氣を替へて紛らし
みつ　ちら／＼雪に濡れ鷺の。
　ト 鷺娘を一口謳ふ。
そで　ほんに、あなた樣には、醉ひの冷める、よいお藥があつたわいな。
なか　それ／＼、わたしが取つて來ようわいな。
いろ　わたしが葛籠も出して置いて、縁を大工さんにぶッつけてもらひませう。
そで　そんなら一緒に奥へ。
なか　おかみさん、ござんせいなア。
　ト 合ひ方になり、お仲、お袖、おいろ、奥へ入る。勘太、向うを見て
勘太　アレ／＼、おかみさんえ、今わたしが云つた侍ひが爰へ參ります。そして一人は隱居、もう一人は勇みだよ。
みつ　そんなら、ドリヤ、お客を待ちませうか。
　ト 唄になり、向うより石倉角之進、野暮なる侍ひの拵らへにて、傘をさし出て來る。門口へ來て、
角之　物もう。
勘太　ソリヤ、ぶざが來た／＼。
みつ　どなたか、此方へお入りなされませ。
角之　然らば推參いたさう。御免下されい。
　ト 入る。
先刻これなる勘太どのと、契約の仕り、南鐐一片の持つて、偕老同穴の語らひを仕らうと、罷り越しましてござる。即ち拙者は石倉角之進と申す者でござる。して、其許が、おみつどのとやらでござるかな。
みつ　左樣でござりまする。ようこそお出でなされました。先づ／＼、お煙草召上がりませ。
　ト 角之進、おみつをつく／＼眺め、
角之　ハヽア、美なるかな、艶なるかな。唐土の揚貴妃はいざ知らず、小野の小町か衣通姫か、王昭君が容貌にこ

そ、勝りはするとも劣りはせじ。ハッア、奇妙々々。
ト扇を開き、煽ぎ立てる。
みつ　私しがやうな不束な者でも、御酒のお伽になる事なら、お相手になされて下さりませ。
ト角之進が手を取る。角之進、ぞく／＼顫へ出し
角之　これは近頃祝着仕る。然らば直さまこの所で
ト立ちかゝるを
みつ　ア、モシ、アレ、勘太が見て居りまする。マア、あなたには、あの一間へお出でなされまして、御酒一つ。
角之　然らは一獻下された上、彼の同穴の語らひ。
みつ　ハイ／＼、承知でござりまする。
ト角之進、立ち上がり扇を開き、思ひ入れにてチャンと唄になる。角之進、おみつに見惚れながら奥へ入る。
勘太また向うを見て
勘太　アレ／＼、今度は勇みが來やす／＼。
トまた雪降つて來る。この唄にて向うより善好、たるみの股引、腹がけにて、半纏を頭へ引ッかぶり、手拭に小錢六百包み、提げて出て來り、門口より
善好　勘太やい。勘太は居るか／＼。
勘太　オ、、善好さんか。此方へ入りなさい。
善好　入つてもいゝか。
ト云ひながら入る。おみつを見て、
コレ、勘太、れこか。
ト勘太頷く。
剛氣だぜえ。いゝ年増だ。
みつ　モシ、此方へお出でなされませ。
善好　アイ。
ト下に居て見て、また畏まり、汗など拭き
なんだか、小ッ恥かしくなる奴サ。
勘太　エ、、なんのこつた。そんなにしよげる事はないわな。
善好　べら坊め、ナニおれがしよげるものかえ。
勘太　なんだ、べら坊めだ。
ト立ちかゝる。
善好　云つたがどうした。
ト握り拳を振り上げる。
みつ　ア、コレ、勘太、なんぢやぞいな。さうして又、お前も人に知られた藥地の善好さんぢやござんせぬか。それにマア、勘太を捕へて、なんぞ云ふ事があるなら、わたしに云うたがよいわいな。

ト手を取る。善好、ぐんにやりとして

善好　なにサ、わつちやア何も云ふ氣はないけれど。

みつ　云ふ氣がなくば、もつと此方へ寄らしやんせ。但しはお嫌かえ。

善好　なんの勿體ない。

ト勘太に指を六本出して見せ、

コレ、勘太、これでいゝかえ。

勘太　よしサ〳〵。

善好　そんなら早く勤めを下げたい。

みつ　サア、何もようござんすから、あの奥で、酒一つあがつてお出でなさんせ。わたしが今行くわいなア。

ト脊中を叩く。

善好　エヽ、畜生め、有り難い。

みつ　善好さん。

善好　待つて居るよ。

ト唄になり、奥へ入ろ。また雪降ろ。勘太、向うを見て、

勘太　ヤア、今度は隱居だ〳〵。

トこの唄にて向うより妙山、禪門の拵らへにて、下駄傘、杖を突き、とぼ〳〵と出て門口へ來り、

妙山　ちと物が問ひたうござる。このあたりに、釣船屋のおみつどのと申すがござるかな。

みつ　ハイ〳〵、これでござりまする。此方へお入れ申しや。

勘太　サア、隱居、入りやれ。

トぞんざいに云ふ。

みつ　コリヤ、そりや何を云ふのぢや。

勘太　なにサ、此奴は聾サ。

ト妙山、勘太を見て

妙山　これは先刻の勘太どの、おみつどのゝ宅はこれかな。

勘太　べら坊め、はッつけめ。

妙山　段々お世話でござつた。

ト入ろ。

勘太　かな聾のべら坊親仁。

ト云へども妙山、耳聞えぬゆゑ、目禮して座につく。

おみつ、立ちかゝり、手を取つて

みつ　サア〳〵、マア、これへお通りなされませ。

妙山　ア、〳〵、これはお世話になります。時にその、おみつどのとは其許かな。

みつ　左樣でござります。ようこそお出でなされました。

妙山　何を云はつしやる。近年はとんと耳が遠くなりまして、不自由でござる。
みつ　そんならあなたは、お耳が遠うござりますか。
妙山　ヤ、、、何と云はつしやる。目黒へは遠いか。これは又、とつてもつかぬ事を云ふ人ぢや。そりやハヤ心安うなつた上では、目黒へも亦、來年は成田の開帳へも連れ立つて行きまするワ。
みつ　そしてあなた、お年はお幾つでござります。
妙山　なんぢや、幾つ取る。そりやハヤ夜の長い時分には堪能するけれど、年の寄つた所爲かして、とんと宵のを忘れるぢやて。
みつ　何を仰しやりまするぞいな。
　ト妙山、紙入れより目鏡出しかける。勘太、茶を酌んで來り、
勘太　ソレ、爺い、喰へ。
　ト出す。
妙山　これは〳〵御叮嚀な、構はつしやるな。
　ト呑み
イヤモウ、年寄つても若くても、忘れられぬはこの道ばかり。朝起きると思ひ、寐ると思ひ、商賣の暇には思ひ出し、忘れられぬが人間の一生。たゞ何事も色と慾との世の中。めん〳〵の心がけ。よく〳〵聽聞なされ。
　トお文樣のやうに云ひ、今の茶碗を鈴にして叩き
ハ、、、。
みつ　左樣ならあなた、少しあれへお出でなされませ。
　ト仕方にて云ふ。
妙山　フ、、なにか、あそこでか。オ、、承知々々。サア、行きませう。
みつ　ソレ、勘太、連れ申して行きや。
勘太　アイ、エ、、世話なべら坊だ。サア來い。
　ト手を引く。
妙山　これは段々忝ならござる。
　ト合ひ方になり、勘太、妙山を連れて奥へ入る。時の鐘。おみつ、こなしありて暖簾口へ入る。また雪頻りに降り、出の唄になり、花道より太郎兵衞、以前の形にて、惟滿、やつし、しどけなき形にて、浴衣を上ッ張りにして、手拭を前へ挾み、大工の道具箱を脊負ひ、太郎兵衞と一緒に、大黒傘を相合ひにして出て、花道にて
惟滿　ア、モシ、ちつと待つて下さいまし。咽喉が締まつ

て一寸も歩かれませぬ。
太郎　エヽ、意氣地のない。
ト直してやる。
惟滿　時に、行く先はまだ、餘程ござりますかえ。
太郎　なにサ、あそこの內だ。サア、急がう〳〵。
ト此の唄にて門口へ來り
おいろは居ないか。おみつどのにはござるかな。
ト奧より
なか　アイ〳〵、
ト合ひ方になり、出て來る。
どなたさんでござんすえ。
太郎　わしやア家主の太郎兵衞だが、どこか造作普請があると云はつしやるから、道具箱を持たせて來ました。
なか　そんなら姉さんに、左樣申しませう。
太郎　おみつどのが內にござらば、まだ外に話しもある。
ト內へ入る。
コレ、その箱を此方へ入れて置かつしやい。
惟滿　ハイ〳〵。
ト入らうとして、道具箱門口へつかへるゆゑ、橫になつて、やう〳〵內へ入り
ヤレ〳〵、ほつと草臥れた〳〵。
ト腕を擦る。
太郎　姐御を呼ぶには及ばない。奧にならわしが行く。逢つて注文も聞きませう。
なか　さうなさんすが、ようござんすわいなア。
太郎　ドリヤ、逢つて來ませう。
ト暖簾口へ入る。お仲、惟滿を見て
なか　ヤア、あなたは舍人之助惟滿さま。
惟滿　思ひがけない淺香姬どの。
なか　お懷かしうござりましたわつなア。
ト取りつき泣く。
惟滿　その歎きは理りなれど、某とても漂泊の今の身の上。中將實方卿漂泊ありしも、某が父金吾中納言どの落命ありしも、これ皆、安倍の宗任が仕業。折もがなこの欝憤を晴らさんと、千々に心を碎き、思はず打絕え、その後は音信とても怠りしが、先づは堅固で何より祝着。
なか　サア、そのお詞を聞くにつけ、父上の漂泊より、我が隱れ家も宗任が、放火の爲に失はれ、憂き艱難の身の上に、捨てんばかりの悲しみを、この家の主、女子ながらも甲斐々々しく、これまで自らを養育なし、何卒あな

たのお行くへ求め、この身の願ひを叶へんと、云ひしを力に生き永らへ、いつか〳〵と暮らすうち、今日お目もじをすると云ふは、神佛の授へ綱。嬉し涙がこぼれまするわいなア。

惟滿　して、この家の主と云ふは。

なか　善知鳥文次が妻、安方と申す者。父上の御恩になりし事ありとて、それは〳〵頼もしい人。

惟滿　成る程、聞き及びたる善知鳥が妻の安方。折を見合せ一禮述べん。先づそれまではこの身の事は。

なか　サア、それはよう合點いたして居りまするわいなア。

ト奥にて

善好　嫌だ〳〵。

トこれにて兩人、ほぐれて住ふ。

とんだ奴おやァないか。爰の內ぢやァ魔性を取りやァがるな。

ト云ひ〳〵出て

おみつは居ないか〳〵。

トお仲を見て

そこに居たな。

ト抱きつかうとするを

なか　ア、コレ、なんぢやいなア。

善好　なんぢやいなアどころか、六百と云ふ冷たい錢を出して、何時まで待つて居るものか。コレ、お娘、爰へ來な。

トお仲を引寄せる。惟滿、大工道具の箱より手斧を出し、振り廻す。

ア、コレ、何をしやァがる。目鼻が危ないわえ。

ト惟滿をヂロ〳〵見て

なんだ此奴は。色の生ッ白い。てまへはなんだ。

惟滿　アノわしかえ。

なか　アイ、あなたはな。

善好　なんだよ。

なか　ありやわたしが、伯父さんぢやわいなア。

善好　なんだ伯父さんだ、とんだ若い伯父さんだな。そして、その伯父が、爰に何をして居る。この娘には、おれがちいと用がある。早く奥へ行け。

惟滿　イエ〳〵、行かれませぬ。

善好　なぜ行かれない。

惟滿　サア、行かれぬ譯は。

ト大工道具を見て、鐵鎚を出し

これでござります。
トとんと舞臺を叩く。
善好　それがどうした。
惟滿　サア、私しは大工、大工ぢやに依つて、爰へ棚を釣らねばなりませぬ。
ト板を持つて來て、バタ〳〵する。
善好　棚を釣るなら、もつと其方へ寄つて靜かにしろ。イケ騷々しい奴だ。
惟滿　靜かにしては商賣がなりませぬ。この位な事は、ちと御料簡なされませ。
トばた〳〵鐵鎚にて叩き立てたり、板を鉋にて削り、鉋屑を撒き散らす。
善好　コレエ〳〵、目へ入るワ。
惟滿　ソリヤ、鉋々。
ト板を振り廻す。
善好　エヽ、此奴は邪魔な奴だ。あんな奴に構はずと、お娘、此方へ來やな。
トお仲を連れて來ようとする。
惟滿　ソレ、手斧々々。
ト手斧を持つて、善好の首へ引ツかけろ。

善好　エヽ、コレ、何をしやアがる〳〵。
トお仲を放す。お仲、鉋屑を打ちつけろ。善好、これに困り、ウロ〳〵する。兩人囁き、奥へ入ると、奥より石倉角之進出て來り
角之　おみつどのは何れへ參られたな。
ト善好を見て
コリヤ〳〵、おてまへは御存じないか。
善好　喧ましいわえ。ナニおれが知るもんか。とんだ二本棒ぢやないか。
角之　なんと申す。身共を二本棒と申したな。
ト反りを打つ。
善好　オヽ、さう云つた。腹が立つなら、サア拔け。どうしてうぬらに、豆腐でも切れるものかえ。風ツぴいた氣紛れぢやアないか。
角之　重ね〳〵の雜言過言。もう料簡が罷りならぬ
ト下げ緒を取つて襷にして、目釘などしめし。
今討ち放す。それへ直れ。
善好　それへ直れもすさまじい。誰れだと思ふ。善好さまだぞ。
ト角之進、きつ刄廻す。奥より妙山、ウロ〳〵して出

る。おいろ、据風呂桶を持つて出ながら、この中へ入る。四人入り交りの摑み合ひのやうになる。奥より、
　お袖出て
そで　ア、コレ、危なうござんす。マア〳〵、御料簡なさんせいな。
善好　嫌だ〳〵。誰れが料簡するものか。この屋體骨へ蓮尺を附けて脊負つて行くワ。
角之　身共も斯様にうつけにされては、一分が立ち申さぬ。おみつが居らねば、わが身を中宿の出入りの者の方へ連れ行き、終日樂しまねばならぬ。來やれ。
妙山　なんだかとんと、口ばかり動いて、一つも解らぬ。
いろ　モシ〳〵、御隱居様、危なうござります〳〵。
善好　面倒な。この娘を連れて行くがよい。
角之　オヽ、それがよい。サア來い。
善好　ドリヤ、引ツ擔ぐべい。
　トお袖を引ツ立てようとする。てんつゝになり、花道より五郎、肴屋の形、下駄がけ、緋縮緬の丸絎け、腰提げの煙草入れ、肩へ手拭をかけ、打鉤に鰒を二三杯引ツかけ、提げて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、内へ入る。善好、角之進を取つて投げる。妙山、おいろ、邪魔になるゆゑ、そこにある据風呂桶を兩人が上へ引ツかぶせる。
そで　五郎さん、よい所へ來て下さんしたなア。
五郎　サア、おれもこの頃は忙しくつて、二三日姐御に逢はないゆゑ、雪は降るし、なんぞ取つて來ようかと思うたが、この降りでなんにもなく、やつとコレ、えて吉が三杯よ。
　ト提げた鰒を見せる。兩人起き上がり、五郎を見て
善好　なんだ此奴は。どこの野郎か知らないが、何時の間にうしやアがつて、なぜ爰へ投げやアがつた。
角之　コレ〳〵、それなる毒魚を持ちし男、挨拶もなく武士たる者を、何ゆゑ爰へ
兩人　投げたのだ。
五郎　喧ましいわえ、唐變木めら。女ばかりの内だと思つて、ア、何か、うぬらはこりやア、なんぞ足にでもせうと思つて、いたぶりにうしやアがつたな。そんな甘口な事で行くのぢやアないぞ。誰れだと思ふ、鹿島浦の達引、五郎さまだぞ。云ひ分があらば云つて見ろ。五分でも引くのぢやアない。ア、つがもない。
　ト兩人、氣味惡きこなしありて、うぢ〳〵する。

サア、どうだ。早く歸りやアがれ。
兩人 さう吐かしやア。
ト角之進、刀を拔いて切りかける。善好、掴みかゝるを、一度に毆り倒し、刀を引ッたくつて門口へ投げ、二人が襟首を取つて門口へ突き出し
一昨日うしやアがれ。
ト兩人、花道へこけて腰を痛め、顔を顰め、角之進、怖々刀を取つて腰へ差し、互ひに顔見合せ
角之 善好どの。
善好 角之進さま。
ト互ひに手を取り合ひ
兩人 ハア、、。
ト泣き落し
善好 顔見世の二番目は、いつもこんなもの。併し、只も引ッ込まれますまい。
角之 左樣でござる。なんぞ申さずばなりますまいかな。
善好 斯うもあらうか。
角之 なんと／＼。
善好 提げ錢で六百出したお開帳。
角之 もんじき樣に善好じ樣。

善好 何を云はつしやる。
ト兩人揚げ幕へ入る。
五郎 ハヽヽヽ、大べら坊め。時に姐御は奥か。
ト行かうとするを、
そで 五郎さん、コレマア、待ちなさんせいなア。
ト振り袖を持ち、恥かしきこなし。合ひ方になり
五郎 なんのこつた。小嫌らしい。そんな事は生れついて嫌ひなおれだが、どうした事かツイ
ト思ひ入れして
てめえと心安くなつて、どうやら姐御も、薄々は知つた樣子。
トあたりを見て
身の上の事までも隱さず、町人のおれを男と見て、頼もしく打明けて、相談をするあのおみつどの。素性を聞けば元は侍ひ。その娘のお袖なりや、もう斯う云ひ合せた上は、骨が舍利、劍の中へも飛び込む氣位。なんぞ相應の用があるなら、おれにさう云つたがいゝぞえ。
そで サア、そのお前の氣性を、姉さんにもよう知らしやんしたゆゑ、あのお仲さんの
ト云ふを

五郎　コレサ、人も聞かない問はず語り。外から漏れても壁に耳。滅多な事を云ふまいぞ。
そで　エ、嬉しうござんす。そんならちよつとアノ奥で。
五郎　アノ、今行くのか。
そで　エ、、なんぢやいなア。
五郎　ちつと氣恥かしいな。
　ト唄になり、お袖、五郎が手を取つて奥へ入る。と門口の際の切り穴より妙山、おいろ出て
いろ　申し、御隱居様、思ひがけない据風呂で、お前がいとしうなつたわいなア。
妙山　オ、、わしとてもその通り。どうやら耳が聞えて來たわいの。
　ト立たうとして
　ア、、腰が立たぬ／＼。
いろ　あの根太板の腐つたゆゑ、緣の下から爰へ拔けたは深い御緣。結ぶの神の引合せか。オ、嬉し。
　ト抱きつかうとして引き起し
　どうぞこれから、連れて退いて下さんせ。
妙山　おれもその心なれど、この足の立たぬでは、長右衞門とも出られまい。
いろ　わたしが好い思ひつきがあるわいなア。
　ト妙山を肩車に乘せる。妙山、肌を脱ぎ、後へ鉢卷する。曲馬の鳴り物になり、兩人、存分をかし味ありて向うへ入ると、合ひ方になる。奥よりおみつ出て、思ひ入れありて
みつ　思ひがけない金吾舍人之助さまのお出で。日頃よりお逢ひなされたいと、戀しう思し召す淺香さまのお喜びそれにつけても、何卒早う實方卿にも勅勘赦りて、御歸洛遊ばし、お二人を御世に出しましたいものぢやなア。
　ト薄ドロ／＼にて、門口の屋根へ雀數多群り囀る。と唐樂になり、花道より安倍宗任、燕手、羽織衣裳、大小にて、高足駄、蛇の目の傘をさして出て來り、この雀を見て、花道にて見得。おみつ、軒に目を附ける。矢張り雪頻りに降る。
　時ならぬ、この大雪に、軒に集まるむら雀。塒々を出る折ならで、友呼びつるゝその風情。
宗任　それ雪中の雀鳥、波濤に遊ぶと狂圓が傳へし詞。それに引替へ、あれなる屋上に群がる有様。
みつ　常に中將實方卿、孝鳥なりとて愛し給ふ。
宗任　左遷赦免の折もなく、此まゝ果てなば一念な、雀と

なりて、飯をはまんと云ひしと聞く。
みつ　もしや御身に凶事ある知らせか。
宗任　我れに意恨の殘せる印か。
みつ　何にもせよ
宗任　怪しき雀の
兩人　振舞ひぢやなア。
ト雀飛び去る。鳴り物止む。宗任、門口へ佇み
宗任　前後を忘ずる白雪に、行き惱み難儀に及ぶ。暫しの宿りが求めたい。
トおみつ、挨拶もなく、傍への白梅の枝を手折り來て、宗任が前へ出す。
宿りの無心申せしところ、有無の返答もなく、差出したるこの一枝。
ト思ひ入れありて
我が國の梅の花とは見つれども、大宮人は何と云ふらん。
みつ　我が國の梅の花とは見つれども、大宮人は何と云ふらん……何と云ふらん、この身のすぎはひ。身は白梅のやもめ住ひでござりまするわいなア。
ト宗任、こなしありて、
宗任　貧しき暮しを恥らひて、返答に梅花を以て。氣轉の女。奥床しい。
ト内を見て
渡世は漁師、漁りの様子。
みつ　お恥かしう存じまする。
ト合ひ方になる。宗任、悠々と内へ入る。上へ通る。
して、あなた樣は何れのお方樣にて、何れへお出で遊ばされまするのでござりまする。
宗任　奥州五十四郡の主、安倍の三郎太夫宗任。
トおみつ、思ひ入れ。
所用ありて罷り通る路次、この大雪に妨げられ、思はぬ世話になり、祝着々々。
ト奥より惟滿、淺香姫走り出て
兩人　ナニ、宗任とや。
ト云ふをおみつ押へて
みつ　コリヤお二人……イヤサ、二人ともにお客樣のお出でなされたに、不調法な。何をソワ〳〵。
ト思ひ入れして
ソレ、お茶お煙草盆を持ちや。
兩人　畏まりました。
ト合ひ方になり、惟滿、紫の袱紗に茶碗を載せ、これ

を持ち、宗任に差出す。淺香姫、煙草盆を直す。宗任、兩人をキッと見て、その煙管を取つて惟滿が持つたる茶碗を打ち落す。これはト寄る兩人が裾を掻いて、兩人を引寄せ

宗任　慮外者めが。

ト引きつけ、扇を持つて兩人ともに散々に打ち据ゑ

武士たる者の兩腰を、足下にかけし不屈き奴。今討ち放す奴なれど、主の持てなしに免じ、命助けた。以來をキッと愼しみ居らう。

ト突き放す。兩人、無念の思ひ入れ。おみつ、コレと制す。

惟滿　餘りと云へば無法の宗任。

淺香　汝が爲に左遷ありし、中將實方が末葉淺香。

惟滿　金吾舍人之助惟滿、日頃の鬱憤、サア、立ち上がつて

兩人　勝負々々。

宗任　ハヽヽヽ人の事より我が身の事。お尋ね者の舍人之助、淺香姫、名乘つて出たは夏の虫、此奴等二人を匿まふからは、主の女も只の奴ぢやアあるまい。三人ともに召捕つて、憂き目を見せる。覺悟なせ。

ト立ちかゝる。上の屋體より五郎、飛んで出て、矢庭にそこにある葛籠を引寄せ、惟滿をこの中へ入れる。

下郎め、何をしやアがる。

ト云ふも構はず

五郎　まつかせな。

ト葛籠を引ッ擔ぎ、一散に花道へ走り入る。宗任、手早く懷中の種ヶ島を出し、火入れの火を移し、五郎を狙ひ打つ。ドンと音して向うに煙硝火立つ。

宗任　南無三、撃ち漏らしたか。

トまた手早く玉藥を籠めて狙ひをつける。行列三重になり、花道より鐶菊の紋附きたる箱提灯を照らし、侍ひ二人、出羽城之助重成、上下衣裳にて蛇の目の傘をさし、足駄にて出る。宗任、火蓋を切る。重成、身をよける。ドンと鐵砲の音響き、提灯持ち供廻り、殘らずこの鐵砲に當り倒れる。尤も花道辷り込みの仕掛けなり。重成、死骸を除いて本舞臺へ來る。

みつ　ヤア、あなたはお歷々樣。

重成　この家の内に朝敵、安倍の三郎宗任籠り在る由、注進に依つて出羽城之助重成向うたり。

宗任　ナニ、出羽城之助とや。

重成　珍らしや宗任。鎌倉目代、斯く云ふ重成。上意を受けて向うたり。覺悟々々。

みつ　宗任どのは夫善知鳥の文次どのゝ敵。やはかこの場を逃がさうや。

ト懐劍を持ち、詰めかける。奥よりお袖、同じく懐劍を持ち出て詰めかくる。淺香姫も詰め寄る。

そで　兄さんの敵、怨めしい宗任どの。

重成　ヤア、宗任は天下の囚人。私しの敵討とは、叶はぬ事ぢやワ。

みつ　エゝ。

重成　達て敵がこの所にて討ちたくば、この片袖の詮議なさうか。

ト前の幕の片袖を出す。安方悔り思ひ入れ。

いつぞや某が領地、外ケ濱の沖にて、殺生禁斷の場所へ網を打ちし大罪人。その時某し行きかゝり、搦め捕らんと思ひしかど、わざと見逃し、後日の證據と取り置く片袖、なんと安方、覺えがあらうが。

みつ　サア、それは。

重成　よもや敵討ちはなるまいがな。

みつ　ハゝゝゝゝ、ハアゝ。

ト泣き落す。と宗任、淺香姫を引ッ立て、抜き刀を胸先へさしつけ

宗任　ジタバタひろぐと、淺香姫は芋刺しだぞ。

重成　ヤア、卑怯なる宗任、戰場に向ひ、人質取つて戰ひなすか。

宗任　サ、そりやア。

ト薄ドロ〳〵、寢鳥になり、前の流れへ水氣滿々と立ち昇り、差金の鴛鴦一羽飛び來り、今の袖の上に舞ふ。宗任、これにてウツトリとなり、思はず淺香姫が手をゆるめる。重成キッと見て

重成　ハテ、怪しや。非道の宗任、淺香姫を手籠めとなし、既に危ふきその折から、一羽の鴛鴦飛行なし、川水忽ち逆巻く有樣。

みつ　敵宗任忽然と、放心なせしは

ト思ひ入れありて

未來にござる文次どの、力を添へし奇瑞なるや。

重み　稀代のこの場の有樣ぢやなア。

ト宗任、眼を開き

宗任　ヤア、なんと我が手にかけし善知鳥文次、又もや來つて障化をなすか。立去れ〳〵。

ト切り拂ふ。燒酎火消ゆる。

重み　さてこそなア。

トばた／＼になる。花道より五郎、駈けて出て來り

五郎　舍人之助さまは、重成さまの計らひにて知るべの方へ落し參らせ、引返したる達引五郎。町人ながらも敵討ちの助太刀。叛逆人の安倍の宗任。サア、尋常に勝負勝負。

重成　ヤレ、早まるな若い者。今も申す通り、宗任は天下の科人。私しの敵討は今は叶はぬ。

女三　すりや、どうござりましても。

重成　某召捕りし上、公へ願ひを立て、申し下ろして得させんず。

宗任　ヤア、奇ッ怪なる重成が一言。エイ。

トそこにある鬼の面を手裏劍目潰しに打ちつける。重成、しつかりと受けとめ、傍らにある幕明きの木劍と持ち添へ

重成　こりや、コレ、神事に用ゆる鐘馗の劍と、惡鬼の面。取りも直さず朝敵宗任。即ち汝に得させ、黄巾の賊となし、この場を見遁がす重成が寸志。

ト奧より太郎兵衞、飛んで出て

太郎　お尋ね者の舍人之助、淺香姫、この家に匿まひ置くを、見遁がす城之助重成。イザこの事を注進する。待つて居ろ。

ト駈け出す。重成、鍵繩にて引き戻し、直ぐにポンと切り倒す。この血汐、前の流れへ傳はると、ドロ／＼になり、水氣立ち昇り、楊柳の笛を吹きあぐる。重成取つて

重成　これこそ金吾中納言、御秘藏ありし楊柳と名けし名笛。淺香姫へ。

ト渡す。宗任、立ちかゝり

宗任　日頃尋ぬる楊柳笛、イデ某が。

ト取りにかゝるを、重成しやんと留め

重成　はや宗任は落ちうせて、さまよふ者は黄巾の賊……宗任居らねば、敵は討たれまいがな。

五郎　御賢慮深き重成さま、お詞は背かれますまい。

みつ　見す／＼手に入る敵の宗任。

三人　エヽ、口惜しい。

宗任　戰場に向ふまで、重成、首は預けたぞ。

重成　云ふにや及ぶ。戰場々々。

ト皆々よろしく見得になり、宗任拔きかゝるを、

ドツコイ。

ト留めて、先づ今日はこれぎり。めでたく打出し。

幕

蝶花形戀聟源氏（終り）

戻橋脊御摂

戻橋脊御攝（もどりはしせなにごひいき）

文化十年、市村座の顔見世狂言で、世界は「前太平記」、作者は例の四世鶴屋南北、五十九歳の時の作である。この時は、江戸根生えの俳優、七代目市川團十郎が、若くはあるが初座頭の顔見世なので、南北も殊に馬力をかけて作をした。誠に華やかな大入りの興行であつた。慣例通り團十郎に、チヤンと七段を演らせるなど、顔見世脚本として完全なものと云へる。

二幕目の栗の木村に、馬琴の「青砥藤綱模稜案」の木曾のお六の櫛の件と、「四天王剿盗異錄」の谷底の件とを同時に借用して來て使つたのは、斯うした狂言には非常に珍らしい事である。

二番目にある切見世は、當時の玉の井の寫眞である。江戸の顔見世には「三日月おせん」といふ狂言があつて、度々上演されたが、これも切見世のスケツチ劇で、半四郎の家の物になつてゐたのを、この時は稍書きかへて、この時は五代目半四郎が、息子の粂三郎に、おせんの演出を敎へるといふ變つた趣向になつてゐる。

髭黒大臣(尾上松緑)又次娘お浦。園生の前 實ハ能勢判官娘三崎(市川團之助)常俊息女鶴の前。又次娘お栗。池田息女花園姫(松本よね三)大江郡領政平(中村歌藏)栗の木又次(澤村金平)伊豫太郎有信。醫者張臂道庵。馬士胴六 實ハ瀧夜叉(澤村四郎五郎)猪熊入道雷雲。女郎お蝶(市川栗藏)怪童丸(岩井松之助)菜島左少辨長連。見世物師善好。路地番喜之助(坂東善次)加藤豐後次郎忠正。篁國君 實ハ秦正文。賤の女白梅(坂東鶴十郎)物部平太有國。貸物屋金助(嵐新平)丹波太郎鬼住(大谷門三)多田滿仲。武藏五郎與世(市川門三郎)東條五郎景道。飛脚よい助(桐島儀右衛門)侍女關屋(山下萬作)常陸介平正盛。山鯨の權助(松本小次郎)源賴信。賤の女紅梅(吾妻藤藏)御厨七郎後連。大宅太郎光任(關三十郎)美女丸 實ハ保昌娘小式部。三日月おせん 實ハ純友娘九重姫(岩井粂三郎)野伏り襤褸の次郎 實ハ藤原保輔。茨木屋鬼の七五郎 實ハ伊賀壽太郎。山賤鐵藏 實ハ鬼同丸(五世松本幸四郎)田舍娘お岩 實ハ將門娘七綾姫。女房お綱 實ハ侍女笘屋。腰元此糸。足柄山の山姥(五世岩井半四郎)碓井荒太郎貞光。二の瀨源六近忠。蓑賣りの酒蒸しのおよし。三田源太郎廣綱 實ハ將軍太郎良門。肴賣り海老ざこの十 實ハ渡邊源次綱。源攝津守賴光。山賤斧右衛門 實ハ三田仕(七世市川團十郎)

戻橋脊御攝

第壹番目三建目

諸羽社の場
しばらくの場
花山古御所の場

役名——碓井荒太郎貞光。將軍太郎良門。伊豫太郎有信。袴垂保輔。髭黒の左大將、藤原道包。多田滿仲。河内冠者源頼信。右少辨長連。猪熊入道雷雲。三郎勝俊。常陸介平正盛。壬生の五郎 實ハ 鎚爪九郎國連。鬼住山平 實ハ 辻風さぶ六。頼信家來、橋立成春。舍人、當作。常俊悴、藤若。仲光悴、宇佐次郎信兼。加藤景俊次郎忠正。二の瀨近忠妹、深雪。仲光女房、閼屋。卜部季武妹、照葉、豊田小文次妹、初瀨。常俊妹、鶴の前。蜘蛛の精靈 實ハ 將門娘、七綾姫。

本舞臺、三間の間、朱塗の廻廊、上下紅葉の立ち樹、一面に紅葉の吊り枝、上の方御手洗、側に建て札。下の方立ち樹、後に振出し、眞中に曳き捨てし御所車、すべて諸羽の社、神垣の模様よろしく、爰に瀧夜叉、摑み立て前髪、廣袖やつし、黒股引、手ッ甲、丸括けにて、袋入りの劍を持ち、立ち身。これを三郎勝俊、上下、剃立て、衣裳大小にて、袴の股立ちを取り、右の劍を引き合ひ居る。上の方に女仕丁三人、いづれも着流しの上へ、白丁の肩を引ッ掛けたる形にて取巻き、下の方に捻切り奴四人、取巻き居る。この見得、幕の內、バタ〳〵。「アリヤ〳〵」の聲勇ましく、早神樂にて幕明く。

皆々　どつこい。

女一　この神垣も髭黒の、御所と唱ふる諸羽の社。

女二　殊にお勅使様のお入りといひ

女三　斯くわたしらが、尊敬いたす神の庭、怪しき出立のその男子。

勝俊　御主君頼光公、やまうの難を避けん爲、當神前に納め置く、源家重寶蜘蛛切りの一腰、盗んで駈け出す向う面、三郎勝俊の目にかゝつたる上からは

奴一　御劍渡して
奴四　繩にかゝれ。
瀧夜　へゝ、甘口にも並べたな。聊か望みあるゆゑに、向ひ町から遙々と、忍び今度の顏見世に、出世の蔓と物した劍、うぬらに渡していゝものか。邪魔立てせずと速かに、道押ッ開いて通すまいか。
勝俊　小癪な一言、一腰渡せ。
瀧夜　その廣言を。
勝俊　渡せ。
瀧夜　そこ退け。
勝俊　エヽ、面倒な。ソレ。
ト早めたる大拍子になり、奴四人かゝる。瀧夜叉ちよつと立廻り、奴等を一々蹴りのける。これにて四人下座へ逃げ込む。勝俊、刀を拔いて切りつける。兩人立廻り。瀧夜叉、勝俊を當て、劍を持つて花道へ入る。勝俊、心附き、こなしあつて
おのれ曲者、いづくまでも。
ト早神乘にて、瀧夜叉を追つて向うへ入る。かすめたる大拍子にて、三人思ひ入れ。
女一　ほんにマア、油斷のならぬあの曲者。それはさうとお二人さん、あの髭黒の左大將さまが、この岩倉に閉ぢ籠り、明神樣の庭先へ、假の內裏と唱へ、しかも、今日は周の正月とやら、日もよいゆゑに位に昇るとは、ありやマア、謀叛とやらぢやないかいなア。
女二　知れた事いなア。日頃から我まゝ者、京內の女子を捕へて來て、此やうなあられぬ形。
ト側にある竹熊手を取つて
高砂の尉を見たやうな、箒、熊手の朝清めも、ホツとするではござんせぬか。
女三　オヽ、また其やうな事云うて、お目玉を貰はぬやうにさんせ。そして、今日はまた賴信さまの御參詣、お勅使樣のお入りといひ、必らず粗相をせぬやうに、氣を附けなさんせいなア。
女一　それ〳〵、心附けるに如くはないなア。
ト向うを見て
アレ〳〵、向うへ見えるは、噂のある萬歲ぢやござんせぬか。
女三　オヽ、ほんに、それでござんす。早う爰へ呼ばうぢやござんせぬか。
女二　それがようござんせうわいなア。

三人　オ、イ〳〵。

ト出の鳴り物になり、花道より宇佐次郎、着流し、蔓柏の紋附いたる素袍の上を着、萬歳烏帽子をかぶり、中啓を持ち、後より藤若、袖なし羽織、白股引、才若の拵らへ、淺黄頭巾の上へ掛け烏帽子を着て、鼓を持ち、出て來り、兩人直ぐに本舞臺へ來て

宇佐　德若に御萬歳とは、市村の芝居も榮えてましんます。

藤若　御免の受けて才若と、ちよつと出船實船。

宇佐　帆も十分に顏見世の、替らぬ未熟を皆樣へ

藤若　とも〴〵願ふ神の庭、愛敬を新玉の

宇佐　年立ちかへる朝より

藤若　寶の風がふきや町。

宇佐　誠にめでたう

兩人　さむらひける。

トこれより地へ取り、兩人所作あつて、「めでたけれ」と納まる。向うにて

當作　下がれ〳〵〳〵。

トてんつゝになり、花道より當作、白丁の上ばかり、六尺棒を持ち出て來る。後より壬生の五郎又、褞袍、山岡頭巾、苧の脚絆を穿き、花盜人の形、紅梅の枝へ壬生の面を附け、出て來る。後より深雪、やつしの形、手甲、脚絆、草鞋がけにて、梅の花を挿したる藁苞を脊負ひ、女菅笠を持ち出て、花道にて

當作　ヤイ〳〵、此奴等は、これ程下がれと云ふに聞き入れず通るが、コリヤヤイ、爰を何處だと思ふ。諸羽の社とばかり思つたら當てが違ふぞ。今日よりは髭黒公の御所だ。見苦しい態をして、通す事はならぬぞ。

五郎　エヽ、やかましいわい。粕舍人め。

當作　なんと。

五郎　今こそ壬生の五郎又といつて、斯ういふ形になつては居れど、以前は樋爪の九郎國違といふ大名だ。下がれ下がれと追ひ下げられて、下がるものか。正盛どのに逢はぬうちは歸らぬ。構ふ事はない、通せ〳〵。

深雪　ハイ、私しも、今日この處へ賴信さまがお入りと承はりまして、お目にかゝらねばならぬ事がござりまして、やう〳〵と參りました者。お通しなされて下さりませ。

當作　イヽヤ、ならぬ。お二人共に御大身、ナニ、わいらがやうな者に御用があるものだ。通る事はならぬ。キリキリ下がれ〳〵。

ト立ちかゝる。

五郎　イヤ、どうあつても、上がる〳〵。

深雪　さうぢや、上がりませう〳〵。

當作　エヽ、下がれと云ふに、下がれ〳〵〳〵。

ト三人せり合ひながら、舞臺へ押して來る。女形三人立ちかゝり

三人　騷がしい。こりや何事ぢやぞいな。

當作　只今お鳥居先に相詰め居つたら、この二人の者が、見苦しい態をして、達て推參いたしますゆゑ、通す事はならぬと、それゆゑの儀でござります。

女一　女は格別、見れば怪しき賤の男が

女二　樣子は知らねど取分けて、淸めに淸むるこの神垣。

女三　お勅使樣のお入りといひ、この場へは叶ふまいわいな。

當作　あれ聞いたか。お大名の妹御でさへ、あの通りに衞士のお役目。ましてわいらがやうな匹夫下賤、この處へは叶はない〳〵。サア〳〵、キリ〳〵立ちやアがれ立ちやアがれ。

五郎　イヽヤ、どうあつても、正盛どのに逢はにやアならねえ。

深雪　それ〳〵、賴信さまに。

ト行きかゝる二人を、當作引退ける立廻り。五郎又、懷中より密書を落す。深雪これを見て取上げ正盛どのへ、袴垂。

五郎　それを。

ト引ツたくつて懷中する。

深雪　怪しき名宛のその密書、ちよつとわたしが

ト五郎又へかゝる。當作、邪魔をする。五郎又、深雪が藁苞へ手を掛け、中より文を引出し

五郎　ドツコイ〳〵、それをとは、勝手なとち女め。密書をわれが詮議すりやア、艷書の詮議はおれがするワ。

深雪　サ、それは。

ト思ひ入れ。

當作　艷書も密書も五分々々だ。双方ともに當作が

ト五郎又が懷より密書を引出す。深雪「ソレ」とかゝる。三人二通を奪ひ合ふ立廻り。よき所にて、いかいどろんになり、車の中より手を出して、二通を引ツたくる。

三人　ヤヽヽヽヽ。

ト愕りする。

五郎　イヤア。待て〳〵、折角手に入る今の艷書。

深雪　詮議の種の密書もろとも

當作　この車の物見から、例のどろんで引摺り込んだは
深雪　何は兎もあれ
三人　車の内を。
　ト　かゝらうとする。三人の女形、車を圍ふ。此うち以前の奴四人出て來て、三人を支へる。ちよつと立廻り。
女三　お勅使樣のこの御車。
女二　粗相があるとわたしらが
女一　仰せを蒙むる役目の越度。
深雪　すりや、この御車が
宇藤　お勅使樣とや。
五郎　お勅使でも、杓子でも大事ない。
深雪　大切なる二封のあの文。
當作　おれが出世の蔓にする。
　ト女形三人を振り切る。
五郎　ドリヤ。
　ト車へかゝる、内にて
雷雲　待て、え、。
皆々　なんと。
雷雲　待ちやアがれ、え、。
　ト流しになり、車の中より猪熊入道雷雲、鯰にて出て來り、舞臺へ飛び下り、キッと見得。
皆々　ヤア、お勅使樣と思ひの外
宇佐　猪熊入道雷雲さま。
藤若　今の二通の手紙といひ
五郎　何ゆゑあつて留めたのだ。
雷雲　へ、ン、古めかしくも留めて出でたる御不審を、申し開くや梅が香を、留めるも花の顔見世に、大入り木戸に客留める、敵役なら息の根を、留袖新造わかちなく、色ならござれ抱き留めて、吸ひ附け煙草の前留めに、現ぬかして通ふ神、めでたくかしことは文の留め。瓢簞かしくは鯰の留め。扇の留めの要石、ゆる〳〵大地をおッ留めた、鹿島の神の御前立ち、猪熊明神の御託宣と、ホ、敬つて曰す。
奴四　どつこい。
五郎　おきやアがれ。おれにやア根ッから解らねえ。
雷雲　オ、誰れだと思つたら、樋爪の九郎か。おれも返り新參ゆゑ、早く出たくつてならなんだが、桃栗三年くり藏も、これで三度目、出汐に困つて居る所へ、互ひに爭ふ密書と勘書。して、國連のその形は。
五郎　聞いてくりやれ。人間は、七轉び八起きと云ふが、

この國連は十度も轉んで、提灯屋とまで成り下がり、闇を歩いた事はないが轉び通し、まだ一度も起きた事がない。併し出世の手蔓にもなるその密書、サア／＼、早く返してくりやれ／＼。

深雪 ハイ／＼、私しも、どうぞそのお文を、お返しなされて下されませうならば、有り難うござりまする。

雷雲 オヽ、さう云ふは慥か、近忠が妹だな。鶴の前と頼信が戀を取持つて、だりむくつたといふ事だが、それにも懲りず、また文の使ひか。エヽ、玆な情知りめ。

五郎 コレ／＼、入道、なんぼお主が立役ぶつても、戀には疎き御面相、五百羅漢にある顔だぞ。

雷雲 おきやアがれ。

女一 左樣なら、あのお二人は、入道さまのお近附き。

女二 樋爪の九郎國連さま。

女三 二の瀬さまの妹御、深雪さんで

三人 ござんしたかいなア。

當作 さうとは知らず、最前から、大きに無禮を致しました。眞平御免下さりませう。

ト この時向う揚げ幕にて

呼び 正盛參詣。

五郎 ナニ、正盛の參詣とや。

深雪 正盛さまがお入りあつては、猶々今のあのお文。

五郎 おれも屆ける大事の密書。

深雪 早うこの場で、入道どの。

ト取りにかゝる。雷雲振り切り

雷雲 ドッコイ、頼信めを罪に取つて落す大事の艶書、われに渡して詰まるものか。

深雪 イヽヤ、是非とも私しが。

ト深雪、五郎又、雷雲が懷へかゝる立廻り。この中へ當作交り、ごつちやになりて、深雪、一通を間違へ取つて

さうぢや。

トつか／＼と花道へ行きかゝる。五郎又これを留める。また向うにて

呼び 正盛參詣。

ト三味線入りの大拍子になり、花道より正盛、撥鬢、上下衣裳にて出て來る。後より鬼住山平、菖蒲革羽織袴、足輕の拵らへにて出て來る。後より關屋、裲襠衣裳にて、梅の枝に短册を附け、三方に載せ持ち出る。後より照葉、裲襠にて、長柄の銚子。次に初瀬、同じ

く襠裲にて、三方に土器を載せ持ちて、花道にて行き合ふ。深雪、正盛と入れ替り、正盛「ソレ」と思ひ入れ。山平、深雪を片手に引据ゑ、キッとなる。

五郎　ヤア、いゝ所へ正盛どの。

雷雲　これは〳〵、常陸之介どの、お早い御出仕、御苦勞千萬。

正盛　その挨拶は私し事、今日お髭黒さまより上使の其許、兼ねて御存じある如く、二心なきこの正盛、願ひも叶ふ今日のお目見得、出仕の路次に砂踏み立て、慮外働らくこの女。

山平　引据ゑました下郎めも、二合半から仕出した謀叛、一六勝負の菖蒲革、涙氣のない鬼住山平。

關屋　兄仲光が名代に、不束なる身も顧みず、今日耑陽の御儀式に、お役目受けしこの關屋。

照葉　お許し請けて道すがら、お供いたせし私しは、卜部季武が妹照葉。

初瀨　豐田小文次が妹の、初瀨も供に有り難い、列につらなる身の冥加、お嬉しう存じまする。

藤若　正盛さまを始め

宇佐　何れも樣には、先づ〳〵これへ

三人　お通りあられませう。

正盛　山平參れ。

ト矢張り鳴り物にて、正盛先に、皆々舞臺へ來り、上の方に雷雲、正盛、關屋、その外よろしく住ふ。

五郎　イヤナニ、正盛どの、兼ねて貴殿と

正盛　ア、コレ。

ト思ひ入れ。

誰れかと思つたら常俊が悴藤若、宇佐次郎を始め女ども、この體は。

藤若　私し事は、この度髭黒公、この北岩倉へ御所をしつらひ、めでたき周の禮に慣ひ

宇佐　御儀式ありと承はり、藤若どのは才若、また拙者が萬歲も、髭黒公の齡ひ萬歲と、祝しまするその印。

女一　私しどもゝ朝淸めやら、お焚き木を運びますやら、仕附けも致さぬ衞士の役。

女二　御垣守りの篝、子の日の松も植ゑ替へる。

女三　白馬の節會のその時は、大方口取りにも、出まするでござりますわいなア。

藤若　父の申し附けとは云ひながら

宇佐　あられぬ體にてお目にかゝり、面目次第もござりま

せぬ。
正盛　なにサ〳〵、髭黒さまへ御味方の拙者、心遣ひ必らず無用。
宇佐　然らば、髭黒公の御前
藤若　偏へによろしく
正盛　執成し致すでござらう。
藤若　左樣なれば何れも樣。
宇佐　後ほどお目にかゝりませう。
ト管絃になり、藤若先に宇佐次郎、女仕丁三人、下座へ入る。
五郎　もう四文と出てもようござらう。ナニ、正盛どの、あの袴垂
ト云はうとする。
關屋　ヤア。
ト思ひ入れ。
正盛　ア、コレ、又しても、づばら〳〵と、嗜なみ召され。
五郎　ア、まだ悪いのか。おきやアがれ。イヤナニ、ものでござる。鶴の前より賴信へ送る艶書、この女が持つて居まするて。
關屋　すりや、鶴の前さまの

初瀨　アノ、艶書を。
當作　賴信さまへお手渡しと、姿を變へてこの所へ。
ト深雪を見て
初瀨　ヤア、お前は近忠さんの妹御。
照葉　ほんに、深雪さんぢやござんせぬか。
深雪　ア、モシ。
ト思ひ入れ。
雷雲　なんと、慥かに取持ちであらうがな。
深雪　アイヤ、左樣な事は
山平　ナニサ〳〵、隱しても、もう叶はない。ドレ、山平が
ト深雪を引附け、懷の艶書を引出す。此うち關屋立寄り、それをちよつと取って
關屋　こりやコレ、慥かに。
ト思ひ入れ。
皆々　その艶書を
ト皆々立ちかゝる。山平を關屋突き廻す。照葉、正盛を上へ引廻す。この時、正盛、懷より繫ぎ馬の旗を落す。關屋、手早く取上げ、こなしあつて
關屋　こりや、相馬の白旗。

正盛　それを。
皆々　なんと。
ト引取る拍子に、旗さら／＼と開く。關屋、引ッ張りで留める。此うち
當作　謀叛の張本正盛、うぬを。
トつか／＼と行く。山平突き廻す。
呼び　頼信參詣。
皆々　ナニ、頼信の參詣とや。
深雪　お入りあつては。
トつか／＼と花道の方へ行きかゝる。
當作　旗を證據に。
ト山平を振り切る。これにて山平、深雪おはへ立廻り。此うち當作、旗へ手をかける。正盛、拔討ちに當作をポンと切る。この血汐の穢れにて、大ドロ／＼になり、繋ぎ馬の脱け出し心にて黒雲立ち昇る。この時向うより頼信、若衆形、上下衣裳にて、島臺を持ち、後より成春、上下衣裳、大小にて蕗の臺を持ち、出て來る。深雪、山平、立廻りながら來るを、花道よき所にて、頼信、山平を捕へる。これにて深雪、思ひ入れあつて、ツカ／＼と舞臺へ立戻り、下の方へ扣へる。正盛、旗を持ちたるまま、關屋と入れ替り、血刀を差出す。五郎又、手拭にて白刃を押へる。双方途端よろしく見得。矢張りドロ／＼、小太鼓の樂になる。
正盛　ハテ、心得ぬ。いま下郎が血汐、この旗にかゝると等しく
雷雲　馬の形朦朧として、黒雲一むら立ち昇り
五郎　空にあり／＼現ずる七星。
頼信　かゝる例は、唐土西周の時に當つて、孟津牧野に星落ちて馬と化す。
山平　ムウ。
ト振り切つてかゝる。下へ引廻して引附ける。
成春　穆王これを愛し、鞭打ちて西天に到り
關屋　祇園精舍に釋迦如來、遺經を聞かれしとかや。
正盛　まつた我が朝、景行天皇の御宇、蝦夷神馬を奉る。帝夢むらく、この馬昇殿して星と化す。
ト山平、拂はうとするを押へ附ける。
傳へ聞けども、見るは始めて。
關屋　疑ひもなき相馬の重寶。
正盛　七星これを守護なすものか。
頼信　奇異なるこの場の、振舞ひぢやなア。

トどろ／＼打上げ、雲消える。正盛、ちやつと旗を取つて懐中する。關屋とちよつと立廻り。此うち頼信、山平立廻りながら、成春附いて、ツカ／＼と舞臺へ來り、皆々よろしく入れ替り、顔見合せ、思ひ入れ。

雷雲　河内の冠者頼信

正盛　何ゆゑ參詣召された。

頼信　ハツ、兄頼光はこの程所勞に冒され、引籠り居る時節を窺ひ、相馬の餘類良門を始め、盗賊の張本袴垂なんど申す者、此處彼處に徘徊なすと聞き及び、御所の警護暇なく、存じの外なるこの遲參。兼ねて髭黒公に心を運ぶこの頼信、急ぎのお召しは、心許なう存じまする。

雷雲　イヤ、髭黒公の上使には、わんぱく入道雷雲。餘の儀でもない、頼信の降參は、紛失の神璽を、手に入れん爲の僞はりならんとお疑ひ。誠隨身に相違なくば、家の重寶、蜘蛛切りの劍、まツた、乳繰り合つて居る、藤原の常俊が娘鶴の前を勸めて、差上げよとの仰せだワ。

頼信　こは改りたる御諚。蜘蛛切り丸は當社に納めござれば、差上げんないと易けれど、鶴の前ことは某の計らひにも

正盛　ならない筈。兼ね／＼頼信、不義して居らうがな。

頼信　ヤア、過言なる正盛どの。して又某、鶴の前と不義と申すには

正盛　證據の無い事云ふべきか。山平、その女に白狀させろ。

山平　心得ました。サア、女め。

ト成春、支へて

成春　待て、山平とやら、この女を何と致す。

山平　ハテ、知れた事、鶴の前と頼信が、取持ちをする女ゆゑ。

ト頼信、深雪を見て思ひ入れあつて

頼信　ヤア、そちや深雪、如何いたしてこの所へ。

成春　アイヤ、いよ／＼それに極まれば、人手は頼まぬ、成春が詮議する。サア、深雪どのとやら、しかと取持ちめされたか。よもやさうではあるまいがな。

トこなし。

關屋　イヤ、取持ちに相違ござりませぬ。

皆々　ヤ、、なんと。

關屋　證據といふはこの關屋。只今手に入るこの艶書。

皆々　ヤア／＼。

五郎　ちつと相違もござるまい。

雷雲　なんと慥かな證據であらうが。
正盛　サア、關屋、その艶書、この場に於て讀み上げい。
關屋　そのお詞までもなく、髭黒公お心掛け遊ばされし、
姫君の不義の艶書、讀まいで何と致しませう。
照葉　ぢやと云うて、現在の
初瀬　御主君の一大事。
關屋　サア、その大事のお主のこの艶書。
ト右の艶書を出し
讀まねばこの場が相濟みませぬ。
兩人　それぢやと云うて。
ト立ちかゝるを制して
關屋　ハテマア、お控へなされませいなア。
正盛　サア、キリ〳〵と讀み上げろ。
關屋　ハツ。
ト一封を手早く開き
ナニ〳〵「兼ね〴〵叡山に忍び居り候ふところ、今宵花山の古御所へ立越え、計略をめぐらし候ふに、右腹心の輩面會たまはるべく候ふ」。
皆々　ヤア、。
ト顔見合せ、恂り思ひ入れ。五郎又、山平、おこつくを、賴信支へろ。
成春　變つた艶書のあの文體、ハテナア。
雷雲　そんなら、先刻懷で
ト五郎又と顔見合せ、間違つたといふ思ひ入れ。
關屋　お望みなれば是非に及ばぬ、これなる文の名宛も讀みあげ、キッと詮議を致しませうか。
雷雲　イヤ、その詮議はなるまいがな。
賴信　そりやまた何ゆゑ。
雷雲　この艶書ゆゑ。
賴信　ヤア。
ト思ひ入れ。雷雲、文を出し見せろ。照葉、立ちかゝり見て
照葉　「賴信樣へ鶴の前」
ト讀む。皆々思ひ入れ。
雷雲　なんと詮議はなるまいがな。
關屋　エヽ、それゆゑに、大事の密書も反故同然。
成春　詮議もならぬか。エヽ、口惜しい。
五郎　イヤ、また敵役にも、荒神樣があればあるものだなア。
ト向う、バタ〳〵にて、勝俊、幕明きの形、刀箱を持

ち出て來て
勝俊　我が君これに御座ありしか。
賴信　三郎勝俊、あわたゞしい、何事ぢや。
勝俊　ハッ、寶藏に納めある蜘蛛切りの一腰、今朝盜賊入つて奪ひ取り、立退く所を支へしかども、彼奴もしれ者、跡晦ましてかいくれに。
皆々　ヤア、、、。
ト悄り、賴信思ひ入れ。
賴信　すりや、盜賊の爲に、大切な蜘蛛切りの一腰、奪ひ取られしとや。ホヽホイ。
勝俊　申し譯は拙者が腹。
ト刀へ手をかける。
ト照葉とめて
照葉　ア、イヤ、こりや、何ゆゑ切腹めさるのぢや。
勝俊　何ゆゑとは、お預かりの劍を奪はれ、何面目に長らへん。
照葉　して、切腹あれば、紛失の御劍が出ますするか。
勝俊　サアそれは
照葉　死は一旦にして易しとやら、必らずとも早まり給ふな。ナア、我が君樣。

賴信　勝俊が誤まりも、我が不覺ゆゑ。ハテ、是非に及ばぬ。
ト五郎又、山平、下の方にこれを見て居て
五郎　山平。
山平　お聞きなされたか。蜘蛛切り丸の紛失、申し譯には拙者が腹。
五郎　ドッコイ、死は一旦にして易し、ナア、我が君樣。……呑み込ませせりふか。有り難い。なんと正盛どの、甘口な狂言ぢやアござらぬか。
正盛　如何にも國連のお云やる通り、コリヤ、賴信・劍欲しさの拵らへ事だな。
賴信　イヤ、全く以て。
雷雲　そんなら劍を差上げるか。
賴信　でも、紛失いたせば
正盛　すりや、鶴の前を差上げるか。
賴信　サア、それは
雷雲　但し劍か。
賴信　サア
正盛　姫が入内か。
賴信　サア

皆々　サア〳〵

正盛　頼信返事は

皆々　ド、、どうだ。

ト向う揚幕にて

忠正　その御劍、加藤豐後の次郎忠正、差上げまするでございませう。

皆々　なんと。

侍ひ　立たう。

ト時の太鼓、早舞ひになり、花道より忠正、上下衣裳にて、幕明きの袋入りの劍を持ち出る。後より瀧夜叉、以前の形、大繩にかゝり、侍ひ二人、これを引立て出て、瀧夜叉を下の方へ引据ゑる。

頼信　次郎忠正、すりや紛失の蜘蛛切りの一腰、其方の手に入りしとや。

忠正　ハツ、今朝當此へ參詣の路次、面を隱せし怪しき奴、引ツ捉へて詮議なせば、劍の盜賊。何者に頼まれしと、拷問に掛けしところ、袴垂に頼まれしとやら、自身の白狀。イザ、御劍は。

ト劍を渡す。頼信取りて、ちよつと改めて

頼信　エヽ、忝ない。頼信未だ武運に盡きざる印。これも偏へに汝が働らき。過分々々。

正盛　して、その劍の盜賊といふは。

忠正　即ちこれへ引据ゑましてござります。

正盛　ムウ、すりや、彼れが劍の盜賊か。……ヤイ曲者、面を上げろ。

ト瀧夜叉、思ひ入れ。

すりや、いよ〳〵われが、アノ、袴垂に頼まれしとか。

山平　コレエ、、童め。袴垂といふは現在おれが

皆々　ヤ、、なんと。

山平　イヤサ、うぬが惡事を、サア、うぬが惡事をこの所で、キリ〳〵白狀しろ。

五郎　どうだ。

瀧夜　エヽ、ひちツくどい。斯うなるからは何か隱さう。おれが生れは丹波の國、餓鬼の頃から小盜みが好きで、たう〳〵親仁の勘當請け、それから影をくらま小僧、夜盜かつさき家尻切り、今ぢやア盜人の張本、袴垂の手下となり、蜘蛛切り丸をひん盜む大事の役目。首尾よくやつたと思ひの外、見咎められた上からは、切るとも突くとも勝手次第。ナニ、川へ落した雁首同然、早く方を附けてもらひたい。

雷雲　イヤ、盜賊の成敗は追つての事、先づ差當るその劍。
頼信　雷雲どの、御前よろしう。
ト差出す。關屋取次ぎ、正盛取つて
正盛　イヤ。この劍は似せ物であらうがな。
皆々　ヤア。
ト思ひ入れ。
忠正　この忠正がその座も去らず、奪ひ返せし一腰を、似せ物との疑ひは
頼信　何とも以てその意を得ぬ。正盛どのゝ御一言。して似せ物とは、何ぞ慥かな證據でもござるかな。
正盛　サア、その證據は。
山平　證據といふはこの辻風。
皆々　ナニ辻風とは。
山平　サア、辻風とは、オヽ、あの盜賊、みんな此奴が拵らへ事、この盜賊は僞はり者だ。
關屋　その盜賊が僞はりならば、最前手に入るこの密書。
ト出して
殊に名宛も袴垂、眞僞を糺して一々に、詮議を致しませうか。
山平　サア、そりやア。

忠正　これなる下部の詞の端々、どうやら怪しい。
ト思ひ入れ。
正盛　何がどうした。
頼信　蜘蛛切りのその一腰、お納めあるや。
成春　但し密書の趣きで
關屋　キッと詮議を致しませうか。
雷雲　密書を以て詮議すりやア、この艶書を髭黒公へ差上げようか。
立役　サアそれは。
敵役　サア。
立役　サア。
皆々　サア〳〵
ト忠正密書を取つて見て
忠正　然らば、これなる密書も
正盛　また此方の手に入りし
雷雲　これなる艶書も
頼信　この場に於て
關屋　双方ともに
忠雷　元へ納めて。
ト兩人、一通を投げ捨てる。密書を五郎又、艶書を關

屋取つて
頼信　この上は御兩所とも、御前よろしう。
正雷　執成し致すでござらう。
五郎　ヤレ〳〵、それで一方が方附いたが、まだ方附かぬは鶴の前。
忠正　見ればそぼろな形をして、高位の前を恐れぬ振舞ひ。そちや何者ぢや。
正盛　イヤナニ、あの者は、身共が推擧いたした、樋爪の九郎といふ者だ。以後見知つてくりやれ。して姫が事は。
忠正　鶴の前さまにも、兼ねて御諚を承はり、追ッつけこれへ。
正盛　ムウ、流石は忠正、萬事の手番ひ感心いたした。頼信には、ても好い家來を持ちやつたなア。
頼信　これは〳〵、お褒めの詞、面目を施しまする。
呼び　玉杯の刻限。
雷雲　ナニ、玉杯の刻限とや。
正盛　然らば御勅使。
雷雲　正盛、頼信。
皆々　先づ、入らせられませう。
　ト管絃になり、雷雲先に正盛、その外皆々入る。跡に
　頼信、忠正、瀧夜叉あたりへ思ひ入れあつて、瀧夜叉が繩を切る。合ひ方。
忠正　我が君樣。
頼信　次郎忠正。
瀧夜　まんまと首尾よく
忠正　謀り事について謀り事を行ふと、鬚黑左大將、正しく神璽の御寶を奪ひ、所持なす上からは、ナニ蜘蛛切りを望まんや。察するところ正盛が計らひ、殘亡の輩を集める企みと見えた。それゆゑに似せ物を授けて、手段を挫く、我が計らひ。
瀧夜　誠の劍は神前に、深く祕め置きましたれば、ちつともお氣遣ひはござりませぬ。
頼信　鬚黑に諂らふも、何卒故なく神璽の御寶、奪ひ返さん我が計らひ。必らずともに沙汰ばし致すな。
　ト下座より宇佐次郎、藤若出で來り
宇佐　我が君樣、お入りあらせられましたか。
藤若　頼信さまにはお早い御出仕、御苦勞さまに存じまする。
頼信　オヽ、これは常俊どのゝ御次男藤若どの、宇佐次郎にも今日の役目、さぞかし大儀々々。

宇佐　お詞身に餘り、有り難う存じまする。

ト向うより侍ひ、菖蒲革にて足早に出て來り、直ぐに舞臺へ來て

侍ひ　ハツ、忠正さまへ申し上げまする。

忠正　見れば鶴の前さまを警固の役人、あわたゞしい、何事ぢや。

侍ひ　姫君御社參の路次、一條戻り橋に於て、異形の變化夥しく現はれ、乘り物もろ共いづくへか、行き方かいくれ相知れませぬ。

ト皆々思ひ入れ。

忠正　ヤヽ、姫君の乘り物もろとも。

皆々　その行くへの知れぬとや。

忠正　さてはこの頃聞き及ぶ、變化の所爲なるか、ムウ。

ト思ひ入れ。

賴信　心得がたき妖怪の振舞ひ。何事も某が思ふ仔細あれば、其方は當社の北門に猶も相詰め、もし怪しき事あらば、早速に告げ知らせよ。

侍ひ　心得ました。

トつか〳〵と下座へ入る。

賴信　兼ねて某し察するところ、髭黑には鶴の前を入内させん爲、これなる藤若を、擒になさん手段も知れず。何は兎もあれ宇佐次郎には、藤若を同道いたし、これより丹波の笹山へ立越えてよからう。

宇佐　すりや、拙者はこの場より

忠正　イカサマこの儀、然るべう存じまする。

瀧夜　然らば次郎信兼どの、急ぎ用意いたされよ。

藤若　左樣ならば賴信さま。

賴信　信兼、萬事心附けい。

宇佐　ハツ。

ト此うち下の松の木に、忍び一人窺ふ。賴信、前の御手洗にて見附け、手裏劍を打つ。これにて忍び飛び下り

忍び　賴信觀念。

トかゝるを見事にポンと切つて捨てる。

宇藤　これは。

忠正　我が君樣。

賴信　兩人、參れ。

ト管絃になり、賴信先に兩人、奥へ入る。宇佐次郎、藤若殘る。下座より以前の奴出て來て

四人　動くな。

ト取巻く。宇佐次郎、藤若を圍ひ
藤若　こは心得ぬこの狼藉、何ゆゑあつて我れ／＼を
宇佐　動くな遣らぬと吐かすのだ。
奴一　何ゆゑとは、常俊が一子藤若、仲光が悴宇佐次郎。
奴二　引ッ捕へて人質と、正盛さまのお指圖請け
奴三　討手と云ふは大層だが、この袂へ入れて土産にする。
奴四　坊よ、小僧よ、ヤレ、いゝ子だ。キリ／＼腕を
四人　廻しやアがれ。
宇佐　やかましいワ、がらくためら。今までの市川と、違つて今度の顔見世は、世に成田屋の師匠も初の座頭株、今年は弟子も改めて、初荒事の手始めに、生けッ首を拔かれぬうち、盛砂もつて通しやアがれ、えゝ。
奴一　エヽ面倒な。捻り殺せ。
三人　合點だ。
トかゝる立廻り。大太鼓入りの鳴り物になり、よろしくあつて、宇佐次郎、奴を御所車の脇へ叩き附け、長柄の内へ抛り込む。
宇佐　藤若どのには、イザ／＼これへ。
ト藤若を車の内へ入れ、奴を牛にして
サア弱蟲めら、牛の力はあるまいが、四人一緒に車牛、おれに曳かれて、うしやがれ。
ト大太鼓のサラシになり、宇佐次郎、車を曳き、向うへ入る。あと時の鐘になつて、山平以前の形、袱紗包みの一巻を持ち出て、あたりへ思ひ入れ。
山平　正盛どのゝ計らひにて、此さぶ六が姿を變へて、今日爰に忍び込んだも、お頭の指圖に依つて、蜘蛛のこの一巻、首尾よく手に入り、忝ない。
ト懐中して思ひ入れあつて
殊に頭の袴垂どのも、この諸羽の社へ、今日忍び込まれる筈だが、少つとも早く逢ひたいものだが。
ト正盛この時出かゝり居て
正盛　辻風。
山平　正盛さま。
正盛　コリヤ。
ト時の鐘、あたりへ思ひ入れ。
袴垂より國連が持參の文通、今宵花山の古御所へ、會合するとの密書の趣き。して彼の一巻は。
山平　氣遣ひ召さるな。奪ひ取つて即ち爰に。
ト一巻を見せる。山颪しになり、向うより盗賊二人、黒四天の形にて、鋲打ちの乘り物を荒繩にてからげ、

一散に舁き出て、直ぐに舞臺へ來て下ろす。
これは。
ト思ひ入れ。
盜一　仰せに隨ひ、道に待ちうけ、鶴の前が乘り物ぐるめ
兩人　引ッ渫つて歸りました。
正盛　出かしたく。直ぐさまこれより奧殿へ。
兩人　心得ました。
ト下座へ舁いて入る。正盛うなづき、思ひ入れあつて
正盛　よいく。……この上は人知れず、忍ばせ置きたる
ト下の方へ礫を打つ。時の鐘になり、下の方より出て
人、誂らへの經櫃を荷ひ、黑四天の手下兩
手一　お指圖の通り、早速叡山へ忍び込み
手二　幸ひこれなる經櫃へ。
山平　すりや、此うちに袴垂。
正盛　コリヤ。この上は花山の御所へ。
山平　彼の地へ赴きこの一卷、頭へ手渡し致すでござらう。
正盛　辻風、急げ。
山平　心得ました。
ト一卷を懷中し、手下、經櫃を舁き上げようとする。
この時下座より五郎又、袋入りの劍を持ち出る。後よ
り忠正、股立ちにて、これを追ひ出て來り、よろしく
引据ゑる。
五郎　これこそ誠の蜘蛛切丸、われに渡して詰まるものか。
忠正　小積な。身の目にかゝるその劍、キリく渡せ。
ト立廻り。
正盛　すりや、誠の蜘蛛切丸とや。
五郎　それを。
トかゝるを立廻り。
山平　何は兎もあれ、古御所へ。
正盛　辻風、急げ。
忠正　怪しい經櫃、中改めて。
山平　なんと。
正盛　イヽヤ、經櫃よりはその一腰。
ト忠正が持ちたる劍へかゝる立廻り。山平振り切り、
この時瀧夜叉、この中へ入り、正盛を支へる。これに
て忠正、經櫃を押へる。
瀧夜　その經櫃こそ詮議もの、次郎忠正、改め召されい。
正盛　さてこそ劍の盜賊なりと、この正盛を欺きしわれ始
め、慮外ひろぐと手は見せぬぞ。
ト立廻りに正盛、懷中より旗を落す。忠正、山平が懷

より一卷を出す。

忠正　こりやコレ・蜘蛛の一卷。

瀧夜　慥か相馬の

ト山平手早く一卷を取るとて落す。ドロ〳〵にて蜘蛛一杯下り、右の旗を虛空へ卷き上げる。

忠正　ハテ心得ぬ、今の振舞ひ。

瀧夜　俄かに黑雲覆ひ下がり、旗の行くへを失ひしは。

正盛　陰陽を象りし相馬の重器、一つに寄するその時は、不思議ありと聞きつるが、ハテ、爭はれぬ。

忠正　何は兎もあれ、一卷を。

トかゝる。山平立廻り。五郞又心附き

五郞　その蜘蛛切を。

ト忠正にかゝる。山平と手下、經櫃を舁き上げる。忠正、五郞又を突き廻す。正盛、盜賊を振り拂ふ。此うち手下、經櫃を舁き、花道へかゝる。

忠正　一卷諸ともあの經櫃。

トきつとなる。この時深雪出て來り、この中へ入りて、正盛を支へる、此うち花道の人數は向うへ入る。

南無三、後を慕つて。

ト劍を腰へ差し、花道へ行きかゝる。

深雪　少つとも早う。

忠正　合點だ。

ト早めたる大拍子になりて、忠正向うへ入る。舞臺は五郞又、盜賊立廻り、正盛刀を拔きかゝるを、深雪キツと留める。この見得よろしく、チヨン〳〵〳〵チヨン。

幕

大拍子のツナギにて、直ぐにこの幕を引返す。

本舞臺、一面の岩組み、これに三間一ぱいの大御簾を下ろし、すべて北岩倉髭黑山莊の體。渡り拍子にて幕明く。

ト直ぐに向うより奴八人、一對黑雲に鬼の面の捻切り、虎斑の帶にて、誂らへの鎗を持ち、アリヤ〳〵の聲勇ましく、振つて出て來り、ヨンヤサと花道にとまり

奴一　代々替らぬ天正月、一番鳥も喜んで、渡り拍子の幕明きに、當り前なる一對の

奴二　奴が鎗振る下馬先の、鯡を肴に石五器で、グッと一ぱいあふツきり、捻切り端折りの一座は八人。

奴三　大座平日式日も、寒の師走もかん負けない、負けな

い氣丈の寒晒し。
奴四　晒しの手拭頬冠り、お供歸りを待ち兼ねて、ひやかす切り見世そゝり節。
奴五　武士とは云へど二合半、ぶん拔き釘拔き中拔きの、草履もしんの習ひあり。
奴六　蟻の思ひも天道の、お引合せを看板に、べつたり附けたねれけもの。
奴七　ねれたら持てこい、かい餅も、するがねい／＼內玄關、日向でやらかせ造り髭。
奴八　お髭の塵取り御機嫌取り、名を取り髪が新らしう、今日を晴れなる伊達道具。
奴一　勇みに勇んで
皆々　振り込むべいか。
トまた渡り拍子になり。皆々本舞臺へ來り、ヨイヤサと居並ぶ。この時下座より雷雲出て來り
雷雲　これは何れもつッ揃つて、いつも鳥毛といふ所を、誂らへの伊達道具、さぞ小道具は小言を云つた事であらう。併し見事な一對出立ち、御苦勞でござります。
ト時の太鼓になり、向うより仕丁四人、粕烏帽子、白丁の露を取り、弓矢を番ひ、後しさりに出て來ると、多田の滿仲、壺折指貫の形にて取圍まれ、賴信、關屋、成春、勝俊、以前の形にて出て來る。トまた仕丁四人、同じく弓矢を番ひ出る。後より右少辨長連、冠装束、公卿の形にて笏を取り、この人數、ヂリ／＼と本舞臺へ來り
仕丁　動くな。
雷雲　これは築島右少辨長連卿。
奴皆　只今參內あらせられましたか。
滿仲　さてこそ、髭黑左大將のこの山莊、內裏に等しく、參內などと唱ふるは、すりや、道包卿には噂に違はず
賴信　如何にも父の仰せに任せ、虚實を窺ひ見るところ
關屋　髭黑さまには、勿體なくも天下を望む
成勝　御企てでござりまする。
ト滿仲、思ひ入れ。
長連　それゆゑ禁廷守護の滿仲。うまい話しで乘せる氣で、見えたを幸ひ取圍ませたは、この長連が其方への寸志。
滿仲　ヤア、長連卿のお志し、滿仲少しも祝着ならず。仄かに取沙汰聞きしゆゑ、便宜に隨ひ道を述べ、髭黑公のお心を、正路に返し申さん爲、わざと來りし多田の滿仲、先づ何は兎もあれ道包卿へ。

正盛　ト立ちあがる。奥にて
滿仲お待ちやれ、正盛それにて面談いたさう。
ト管絃になり、正盛、三方へ大杯を乘せ、長柄の銚子を取り、出て來る。

滿仲　ヤヽ、正盛どのにもこの所に。

正盛　貴殿髭黒左大將へ、諫めを入れんとお云やれど、いつかな以て飜へらぬ、道包卿の御企て。それゆゑ我れも玉杯を、いま捧ぐるのその折から、貴殿も堅氣をお云やらずと、これより時のよろしきに、隨ひ召さるがマア當世。賴信とも〳〵勸め召され。

賴信　イヤ、父は兎もあれ、この賴信、などか惡意に隨ひ申さん。

關屋　御父君にも源家の棟梁、何とてお心惑はせられん。

滿仲　關屋が申すまでもなく、禁廷守護の役目を蒙むり、その朝敵に剩さへ、などか一味をなすべきや。

成春　賴光公へもこの趣き

勝俊　言上いたして

滿仲　直さま討手。

長連　すりや、お味方なさぬのみならず

正盛　直ぐに滿仲魁けして

雷雲　髭黒さまの

皆々　討手とな。

滿仲　この上は禁廷へ恐れ。賴信、參れ。

賴信　ハッ。
ト立ちあがる。

正盛　ソレ、取圍め。

皆々　動くな。
トまた仕丁、矢衾にて取り巻く。五人思ひ入れ。この時、御簾の內にて

髭黒　「大江山生野の道は便りぞと、天の橋立文見つるかな。」

三人　あの聲は

長連　髭黒公。

正盛　尾籠な振舞ひ。

皆々　そこ動くな。
ト大薩摩淨瑠璃になる。
〽まだ夜の內に有明の、月の都の岩倉に、既に九五の位山、鬼が城とも云ふやらん。
ト淨瑠璃切れると、御簾の內にて

侍臣　出御。

ト早下がり葉になり、正面の御簾を巻き上げると、眞中に髭黒の大將、酒呑童子の拵らへにて、高き岩の上に褥を敷き、枕に凭れ、團扇を持つて居る。上の方、物部平太有國、赤ッ面、上下衣裳、股立ちにて、鶴の前を引き附け居る。鶴の前、廣振り帶附きの形、下げ髪にて、髭黒に恐れ居る。荒川太郎景道、同じく赤ッ面、上下衣裳股立ちにて、大俎を引ッ抱へ居る。左右に照葉、初瀬、女仕丁三人、以前の形にて扣へる。この見得よろしく、皆々これを見て

三人　ヤ、左大將の

皆々　この體は。

ト不思議の思ひ入れ

有國　君の御前だ。滿仲始め

景道　賴信べんなご、そこ

兩人　下がれやい。

鶴の　ナニ、賴信さまとや。

ト思ひ入れ。賴信これを制す。

髭黒　我れ兼ねて大位を知らんの望みも、今一樣の時來つて、この山莊を內裏と定め、自から登る位山。たゞ口惜しきはこれまでに、人臣の身であつた髭黒。それゆゑ今日の天正月、即ち今日元旦に、誕生なせし心とし、乳味の替りは常々から、望める酒に基きて、酒呑童子と我が名を呼び、乘位に移れば天道へ、何か恐るゝ事あらじと、思ひ附いたるこの出立ち。これより直ぐに杯をめぐらし、裝束改め髭黒王、皆萬歲を唱へろやい。

正盛　誠に君の御代長久

長連　たゞ〳〵

皆々　おめでたう存じまする。

滿仲　アイヤ〳〵、憚りながら道包公、そりや、私しの思召し立ち。例へ嬰兒の名を繼ぎて、酒呑童子と呼ばるゝとも、主は替らぬ左大將、昔が今に至るまで

賴信　臣たる身より例しなし。

關屋　朝敵の名を受け給はぬうち、お心早う改められ

滿仲　朝廷輔佐の守りこそ

五人　たゞ願はしう存じまする。

有國　ヤア、默らつしやい。人も用ひぬ諫言立て、その偏屈を取措いて

景道　今日御乘位の我が君へ、お身方申せばその身も共々、日頃に增したる活計歡樂。

髭黒　又この童子が心を掛けし、常俊が娘鶴の前。麿が祝

ひの日に當り、爰へ捕はれ來りしこそ幸ひ、直さま今より閨の花。滿仲おことも諫言止め、臣下に下るや。ドヾ、どうぢや。

鶴の　數ならぬ身の自らを、思し召して下さりまする、お志しは嬉しけれども、お受けのならぬその譯は。

正盛　この賴信へ心中立てるか。

鶴の　ア、モシ。

ト心使ひ。

髭黑　ナニ、これなる姫と、あの賴信

正盛　不義に相違はござりませぬ。

髭黑　ムウ、それゆゑ麿が心には、……憎い女め。……して滿仲が返答なんと。

滿仲　そのお尋ねに及ぶべき。朝恩捨てゝ童子の仰せ、何とて隨ひ申さんや。

髭黑　詞をもどけば

有國　大罪人だぞ。

皆々　サ、それは

長連　但しは君に隨ふか。

皆々　サア、それは

皆々　サア／＼／＼。

敵皆　どうだ。

鶴滿　例へ如何なる憂き目に遭はうとも

賴信　その儀に於ては

ト覺悟の思ひ入れ。

正盛　ハテサテ、死太い。

長連　この上は我が君

有國　如何計らひ

五人　ませうな。

髭黑　麿、天下を知るの始め、詞をもどく不敵の奴等、其まゝに差措かれぬ。罰を加へて威勢の程を見知らせん。ナニ、正盛、我が愛臣たる、伊豫の太郎を呼び出せ。

正盛　ハツ。

ト花道の角へ來り

それに控へし伊豫の太郎有信、童子のお召し、急いでこれへ。

有信　畏まつてござります。

ト大小の合ひ方になり、向うより有信、赤ッ面、上下衣裳にて出て來り、花道にとまり

お召しに隨ひ、また今年、しやッ面見せも有り難い、馴染の芝居へ中一年、橘かをる揚げ幕を、お受けの聲と諸

ともに、伊豫太郎有信め、これまで罷り出ましてござりまする。
髭黒　呼び出せしは鶴の前、靡かぬのみか頼信と、不義ひろいだ科捨て置かれず。幸ひ杯めぐらす折柄、それにて姫を調味なせ。また滿仲始め二人の奴等、我が詞に背くの罪。景道、有國、常陸介、彼れらが首をぶち落せ。
女三　すりや、あなた方を
成勝　この所で
有信　イカサマ、仰せを背くの罪ある者、忽せの沙汰ござつては、君の御威勢輕きに似たり。恐れながら御諚の趣き、然るべう存じまする。
髭黒　然らば急ぎ用意いたせ。
有信　委細承知仕りましてござる。
有景　畏まつてござりまする。
ト三保になり、有信、股立ちを取り、上下の肌を脱ぎて、見事に舞臺へ振つて來る。此うち有國、景道、正盛、身拵らへして眞中へ大俎を直し、鶴の前を引据ゑ、上の方に有國、滿仲が後、下の方に景道、頼信が後。次に正盛、關屋の後。その次に女形立役、これを奴八人、仕丁取圍み、ズッと上の方の岩に髭黒、長連、雷雲、左右に隨ひ、此うち始終、アリヤ〳〵の掛け聲よろしく住ふ。
敵役　どこえ。
有信　何れも用意。
四人　仕つてござりまする。
髭黒　我れは今より雲の上、位に座する祝儀の式、女が肉を肴とし、杯のめぐらさん。長連、杯。
長連　ハ、ア。
ト長連、正盛の持つて出た大杯を髭黒に渡す。
髭黒　猪熊入道、酌を取れ。
雷雲　畏こまつてござりまする。
ト長柄の銚子を取上げる。
滿仲　天に風雨の憂ひあり
成春　月にも蝕の影暗き
頼信　酒呑童子の邪まに
關屋　我れ〳〵のみか、姫君まで
照葉　御痛はしき
初瀨　この場の仕儀。
成勝　味氣ない世の
皆々　有様ぢやなア。

髭黒　時刻が移る、急いで用意。
四人　ハア、。
有信　いま酒呑童子の嚴命を、御贔屓頭に蒙むつて、料極まりし鶴の前。
有國　違背の罪ある多田の滿仲。
景道　不義ひろいだる冠者賴信。
正盛　それに隱ふ仲光が女房。
有信　イデ、手料理と出かけべい。
ト大庖丁を持つ。
正盛　今が最後だ。
四人　觀念しろ、エ、。
ト酒を受け持ち
髭黒　ドリヤ、眺めようかなア。
ト大杯にて呑まうとする。有信は庖丁、三人は白刃を振り上げる。トこの時向う揚げ幕にて
貞光　しばらく。
皆々　イヤア、。
髭黒　待て〳〵、いま受け持ちし玉杯に
有信　罪ある四人を目の下にと、振り上げしその折から、どうやら聞いた聲音にて、暫くと云つたぞよ。

皆々　イヤア、。
有國　物馴れぬ赤ッ面は、直さま顫へが參つたやうだ。今の聲は何方でござつた。
景道　慥か筋向うの裏の方から、聞えたやうでござつたぞ。
髭黒　吉例とは云ひながら、耳を貫く今の一聲。
有信　しばらくと聲を掛けたは
皆々　何奴だ、エ、。
貞光　しばらく。
皆々　イヤサ。
有信　しばらくとは。
貞光　しばらく〳〵〳〵。
〽かゝる所へ、碓井の荒童貞光は。
ト大小人寄せになり、揚げ幕より貞光、お株の形にて勇ましく出て來り、花道いつもの所にて〆る。
〽今日ぞ萬里の大鵬にも、劣らぬ海老を一劍ねに、三升の紋の勢ひは、目覺しかりける次第なり。
トこの文句にてよろしく、花道吉例の所に住ふ。
皆々　どこえ。
髭黒　今この儀式と違背の奴原、罪を糺さんその所へ
有信　しばらくと聲をかけ、のめずりつん出たわつぱしめ。

そも先づうぬは

皆々　何奴だ、エ、。

有信　イヤサ

皆々　何奴だ、エ、。

　トこゝにて貞光（團十郎）自作のツラネあつて、「ホ、敬つて白す」と納まる。

皆々　どこえ。

髭黒　待て〳〵。いつもの暫くより、一際勝るその勢ひ。よく〳〵見れば馴染のわつぱし。今年はお江戸八百八町、お許し請けた座頭株、七代目の貞光だな。

有信　斯うあらうとは思つて居たれど、灸も度々据ゑる日には、あんまり熱くもないものゆゑ、暫くも續けて出逢へばさう怖くもあるまいと、思ひの外に今度の暫く。道理こそ今までより、一倍と肝にこたへた。

有國　おてまへさへそれだもの、我れ〳〵は猶以て

景道　道理で齒の根が合ひましなんだ。

正盛　こりや、如何いたしたらようござらう。

髭黒　如何と申して鬮が目障り。早くあつちへ、退けい退けい。

有信　ハア、。サア、何れも覺悟さつしやい。引立てよござるぞ。

皆々　イヤア、。

有信　彼方に座頭の株があれば、此方に引立ての株もござらう。長連卿、出なさい。

長連　コレサ〳〵、とんだことを云つたものだ。如何にも築地の親仁から、引立ての株は讓られたが、それは鯰の折の事。今では雲の上人なれば、引立ての儀は御免々々。

差詰め入道、行きやれ行きやれ。

雷雲　これは又、いらざるお指圖。愚僧も度々手懲りを致し

有國　ハテ、そんな事をお云やらずと、行きやれサ。

景道　頭役だ、行かつしやいな。

雷雲　同じやうに貴殿達まで……よい〳〵、仕方がござらぬ。童子樣の御前といひ、間違つて成田屋を追ひ出されると、度胸を据ゑて、引立てゝお目に掛けようか。

皆々　お手柄の程が、見たい〳〵。

雷雲　ドリヤ〳〵〳〵。

　ト花道へ來り

わつぱめ、立ちやいな。

貞光　ナニ、われが引立ての血祭り坊主か。名は何と云ふ

づく入だ。
雷雲　おれが名か。忝なくも、尊くも、酒呑童子のお側去らず。猪熊入道雷雲だワ。
貞光　なんだ、鰯に湯豆腐ふんだんだ……意地の穢ない坊主めだ。さうしてうぬは、引立てにうせたか。
雷雲　知れた事だワ、キリ〳〵立てやい。……と云ふやつも古うございますねえ。モシ親方、御覧じませ。また今年も鯰でございます。ちつとしつこいぢやアございませぬか。でもマア、あなたは取分けて、おめでたい顔見世ゆゑ、私しも喜び勇んで、木挽町からお供いたして参りましたが、モシ、そのあなた、ちつとばかりお願ひがございますて。
貞光　大分上すべりのした坊主だが、さうしてわれが願ひとは。
雷雲　サア、外の事でもございませぬが、あすこに居る悪人めらが、わたしを無理にお前さんの、引立てに寄越して、かぶらせようといふ皮肉でございまする。この皮肉に乗るが如何にも残念。そこであなたへ甘え申して、爰を少つとそちらの方へ、お寄りなすつて下さると、彼奴等も鼻が明き、わたしも音羽屋のお爺さんに、褒められるといふものサ。弟子一人お助けと思し召して、どうぞ聞分けておくんなさりましな。
貞光　ヤレ〳〵、長い事を吐かす奴だ。よいワ。それ程に云ふ事だから、如何にもめでたい顔見世ゆゑ、祝儀心にこの所を
雷雲　アイ〳〵。
貞光　道ある方へちつとばかり
雷雲　アイ〳〵。
貞光　立つてやらうと云ひたいが、否だ。酒落やアがるな、削り廻しめ。うぬ、ふざけると、橋本町の仲間へ入れて、おッかぶせの五百羅漢、呑代の建立に出すぞ。早く引ッ込め。
雷雲　ところを、おれが
貞光　なくならないか。
雷雲　ムウ、そんならば……呑代建立。
　ト五百羅漢のやうに云ひながら舞臺へ來る。
皆々　エ、、おかッしやいな。
奴一　サア〳〵、どうでもお櫃は廻るゆゑ、潔よくやらかしませう。
奴二　それ〳〵、とても遁がれッこはございますまい。皆

一綱にぶツかけませう。
六人　それがよい〳〵。
八人　アリヤ〳〵。
ト花道へ來り
奴一　素丁稚め、そこ
八人　立てやい。
貞光　今度は道者の江戸見物を見るやうに、大勢連れでうしやアがつたか。うぬらにも名があらう。一一戒名、そこでほざけ。
奴一　此奴は大分安くするな。事も愚かやわれ〳〵は、酒呑童子のお氣に入り、鬼瓦の鐵平といふやつこらさ。
奴二　次はその名も、鬼齒朶蚱平。
奴三　鬼念佛平。
奴四　鬼一口平。
奴五　鬼木立平。
奴六　鬼蓮毬平。
奴七　鬼打豆平。
奴八　さてどん尻は、鬼殺呑平といふ二合半、丁稚めそこを
八人　立てやい。

貞光　いづれも樣、あんな押しの強い事を申します。立つ事はいやだ。うぬら、なくなれ。なくなりやうが遲いと、睨み殺すぞ。
八人　さう吐かしやア
ト皆々手を振り上げろ。
貞光　どうしたと。
八人　構はぬ。
長連　こいつはよい。
正盛　コレサ。
ト此うち八人、捨ぜりふを云ひながら舞臺へ來ろ。
皆々　エヽ、らつちもない。
有信　最前から座頭ゆゑと容赦すれば、酒呑童子の御前をも憚らず、さま〴〵との慮外緩怠。この上は有信が、ドレ、引立てゝくれべいか。
貞光　イヤモウ、來るには及ばない。爰に居ちやア素袍の袖や太刀の鐺が、あなた方へ障るも無禮だ。如何にも爰を立つてやらう。併しおれが立つが最後、後と云つちやア一寸も寄らない。たつた今、そこへ行くぞ。
皆々　イヤア、。
貞光　發砲の用意しろ、エヽ。

皆々 イヤア、。
貞光 無明闇を買つて置け。
皆々 イヤア、。
貞光 さらば御輿を引立てべいか。
ト大小トヒヨになり、貞光舞臺へ來ろ、素袍の上を脱ぎ、皆々を千鳥にして眞中へ來り、鶴の前始め立役女形を圍ひ、有信と入れ替つて、しやんと見得。此うち、アリヤ〳〵の聲。
皆々 どこえ。
ト納まる。
滿仲 碓井の貞光、參つたか。
貞光 ハア、。
女皆 待つて居たわいなア。
鶴の いづれも樣も先程から、お待ち兼ねでござりました。
貞光 某參る上からは、氣遣ひな儀はござりませぬ。大船に乘つたと思つて、落ついてござりませ。……時に承はらうは、常俊卿の姫君、鶴の前さま、まつた主人滿仲を始め、なぜ手籠めにおしやるのだ。
有信 その譯は、おれが云つて聞かせべい。我が君酒呑童子、鶴の前にお心を掛けさせられ、それを否みし姫ゆゑに、違背の罪に行ふのだ。
貞光 して又主人滿仲公、賴信公といひ、關屋どのまで、なんで御首、賜はらんとなしたのだ。
有國 滿仲公ことは、我が君へお身方申さぬのみならず、諫言なせし越度に依り
景道 また賴信は鶴の前と、不義ひろいだ科、關屋めもその家來たる仲光が、女房たるゆゑ、共に殺害。
正盛 その家來たる仲光が、女房たるゆゑ、共に殺害。
皆々 皆仰せを背く罪人だワ。
貞光 イヽヤ、そりや髭黑どのゝ橫車といふものだ。どこからそんな空株を、買はしやつたかは知らないが、心を掛けた姫君が、隨はぬとて罪人呼ばはり。また道に正しき滿仲公、何故惡に與みなされん。賴信公を不義だと云へば、其方も不義の科。お首打つなら道包どのから、先へお首をぶち落さうか。
敵役 サア、そりやア
貞光 それこれのけて、位を望む、髭黑どのは大罪人。これにも返言ありや、なんと。
敵役 サ、そりやア
貞光 サア
敵役 サア〳〵

敵役　返答はどうだな。
貞光　誰れだと思ふ、エヽ、つがもない。貞光爰へ來たからには、うぬらが邪ま鬪いちやア居ない。先づ差當つて童子とやら、酒吞とやら、得手勝手な名をつッ附けた、髭黒どのゝ高上がりが、第一に氣に喰はない。ドレ、引き下ろして
ト髭黒へかゝらうとする。ドロ〳〵にて、貞光、五體すくむ思ひ入れ。皆々思ひ入れ。
皆々　これは。
敵役　我が君の御威勢見たか。
貞光　成る程見たが、きついものだ。その代りには、よい物の尻尾を、おれが見附けて置いた。
有信　そりや、アノ、どこに。
貞光　爰にあるワ。
ト髭黒の懐より、錦の神璽を引き出す。皆々「オヽオ」と思ひ入れ。
滿仲　それこそ紛失なしたる
頼信　神璽の御寶。
貞光　滿仲公より禁廷へ。
滿仲　心得た。
ト神璽を受取る。
貞光　これからは敵役の、惡事の根ざらひをしにやアならない。ナニ、川瀧屋のお爺、ちよつと逢ひたい。
有信　身共に逢ひたいとは、何の用だ。
貞光　外でもない、中納言常俊卿の重器、雄龍の印、お主がぽつぽにある筈だ。おれにくりやれ、てえ〳〵しませう。
有信　イヤ、おらアそんな物は知らない。
貞光　さう吐かしやア、斯うして。
ト有信を引据ゑ懐を探す。
有信　どうだ、あつたか。
貞光　ムウ、そんなら二人の船まぐろ、キリ〳〵と爰へ出せ。
有景　どうしておいらが、そんなものを。
貞光　知らずば爰へうしやアがれ。
ト二人を蹴り倒し、懐を探す。
ハテ、慥かに爰にと思ひしに。
髭黒　雄龍の印はあるまいがな。
貞光　イヤ、それも在りどころは知れた。
有信　して又そりやア

貞光　これなる中に。
　ト括り枕を引寄する。
髭黒　南無三、それを。
　ト出す手を振りのける。有信かゝるを突きのけて
貞光　寄りやアがると殴り殺すぞ。
　ト枕の中より印を出す。
鶴の　ヤヽ、それこそ父が家の御寶。
關屋　雄龍の印で
五人　ござりまする。
貞光　これ程爰にあるものを、これで二度だが、アヽつ
　がもねえ。イザ、姫君、お受取りあられませう。
　ト鶴の前へ渡す。
滿仲　神璽といひ
鶴の　雄龍の印
頼信　再び戻らせたまひしか。
關屋　さぞお喜びでござりませう。
三人　これといふも、貞光さんのお働らき。
滿仲　エヽ、有り難い。
　ト寶を押戴く。
貞光　寶は首尾よく戻り橋、御贔屓めでたき顔見世に、祝
　ひに一つ〆めませう。
立女　ヨイ〳〵〳〵。
有國　此方も一つ〆めませう。
敵役　ヨイ〳〵〳〵。
有信　エヽ、何を馬鹿らしい。……コレ、悪い所へ又して
　も、わッぱしめがうしやアがつて、此方の仕事をさゝほ
　うさ。この場は此まゝ別るゝとも、また重ねての參會に
　は
髭黒　要害堅き大江山、千丈ケ嶽に立て籠り、この禮はキ
　ッと云ふぞよ。
貞光　念には及ばぬ。例へ鐵城に籠るとも、貞光が鐵拳に、
　たつた一打ち。それまでうぬらの命は助け、いづれも方
　のお供して、いま立歸るが、何奴も此奴も、云ひ分はな
　いか。
敵役　云ひ分は
貞光　どうしたと。
敵役　ない。
貞光　然らば、イザお立ちあられませう。
　〽さらば〳〵といふ聲は、當世無双の英雄士、すさまじ
　かりける。

ト この淨瑠璃のうち、鶴の前先に雄龍の印を三方に載せ持ち、賴信、關屋、女形立役ついて花道へかゝる。

有信　ソリヤ。

ト これにて仕丁大勢「やらぬ」とかゝる。貞光、大太刀にて一薙ぎに切り倒す。皆々ぶつかぶりにて倒れる。此うち花道の人數は向うへ入る。貞光も其まゝ花道へ來る。

髭黑　碓井の貞光。

貞光　弱蟲めら。

皆々　さらば。

ト 貞光、白刄を擔ぎ、キッと見得。舞臺も見得。下がり葉になり、よろしく　幕

貞光、白刄を擔ぎし儘、向うへ入る。ト留めの拍子木につれ、直ぐに大拍子のツナギにて、この幕引ッ返す。

本舞臺、三間の間、雨落ちより三尺ほど下げて、高さ六尺ほどの二重舞臺、正面ちぎれ御簾、九尺の間へ掛け、御簾の縁、萠葱の地に紺にて瓜にあられの摺込み、左右とも毀れし狐格子、塗り高欄も古びたるが折れ碎け、所々に殘りし體。床下に草生ひ茂る。下手の床下出張りあり、西の横手に高欄古えたる體。東西、松生え茂り、吊り枝の松へ屋根の小口を見せ、床下の柱、軒口とも照葉或ひは蔓物からみし景色。一體花山の院古御所の體。山颪し、時の鐘にて幕明く。

ト 爰に前幕の經櫃を下ろし、山平、一卷を持つて、三人思ひ入れあつて

山平　爰ぞ花山のこの古御所、築地の崩れがあつたを幸ひ、追ひ附かれてはと駈け込んだが、よもや次郎忠正が、爰まではうせまいて。

手一　住み荒れたれど花山の古御所。

手二　築地を越えても、うせまいて。

山平　そんなら、わいらは氣を附けろ。持參の一卷この所で、錠捻ぢ切つて、親方へ。

手下　合點だ。

ト あたりへ思ひ入れ。山平この間に經櫃へ差寄り

山平　モシ、親方、これが彼の一卷、即ち爰に。

ト 錠を捻ぢ切りにかゝる。バタ／＼。人音する。

手下　アレ／＼人音。

山平　合點だ。

ト風の音、時の鐘になり、向うより忠正、一散に走り出て來る。舞臺の人數、經櫃を擔ぎ、逃げんとする。忠正、二人を投げのけ、經櫃を引き下ろし、キッと留めて

忠正　動きやアがるな、盜人めら、正しくうぬらは袴垂の手の者ども。この經櫃も詮議もの。先づ差當るは最前の一卷。此方へ渡せ。

山平　小癪な忠正、强盜多きその中、この辻風のさぶ六が、手にある一卷渡さうや。兩人ぬかるな。

手下　忠正、うぬを。

ト經櫃の棒にて打つてかゝる。忠正、棒を取り捨て、切り拂ふ。兩人、切り立てられ、這々逃げる。山平後より切つて行く。立廻つて見事に切り倒し、一卷を奪ひ取り、腰に差したる袋入りの太刀へ思ひ入れあつて

忠正　首尾よく手に入るこの一卷。殊にこれなる蜘蛛切丸、賴光公へ、オヽ、それよ。

ト行かうとする。薄ドロ〳〵になり、正面の御簾の内より、誂らへの蜘蛛の絲おびたゞしく出で、持ちたる一卷へまとふ思ひ入れ。

ハテ、心得ぬ古御所の御簾。月も朧、影さして纏ふは蜘蛛の

ト一卷を銜へ、刀へ手をかける。ドロ〳〵烈しく、御簾の内より誂らへの蜘蛛の絲出て、銜へし一卷拔かうとする刀へ纏ふ。立ちすくみの思ひ入れにて刀を拔き切り拂ふこなしよろしく、トゞ白刃を我が手に腹へ突込み、苦しむ。この蜘蛛、忠正が持ちたる刀を奪ひ取り、忠正が首を見事に切る。板返しにて一卷を持ちたる忠正の首出る。この途端ドロ〳〵打ちあげ、誂らへ凄き鳴り物。この時舁き捨てたる經櫃パッタリ音して四方へ割れる。中より袴垂保輔、百日、大褞袍、一本差し、手甲股引にて顯はれ出て、忠正に目を附ける途端に、下の方、床下より、將軍太郎良門、鉢鬘、着込み、行縢、附太刀、弓矢を持ちながら、重ね草鞋、望みの形にてスッと出て、下より見上げることよろしく、窺ひ〳〵絲にあがり、一卷を銜へし首へ兩方一度に手をかける。キッとなり立廻りよろしく、薄ドロ〳〵にて、首板返しにて、誂らへの大蜘蛛になり、一卷を銜へて御簾の内へ入る。兩人驚ろき行かうとして立廻り、御簾を引きちぎる。此うち一面に誂らへの蜘蛛の巢、

銀張り唐紙古び、よき所に蜘蛛の精靈、凄き下げ髪、白の着附、鼠地の十二單衣、いづれも蜘蛛の絲チラチラと見える模樣、色の變りし緋の袴、物凄き合ひ方。以前の一卷を開き、軒もる月にかざし立ち身、兩人恟りして左右より一卷へ手をかける。蜘蛛の精ちやつと一卷を隱す。よきキツカケにて鳴り物變り、三人だんまりの立廻り、トゞ蜘蛛の精の手へ一卷納まり下の方へ行く。尤もこの立廻り二重舞臺の上なり。袴垂、將軍太郎上の方へ行きて、落しある袋入りの刀を取上げ、兩人爭ふ。袴垂の手へ鞘は殘る。將軍太郎思はず白刃を拔く。直ぐにドロ〳〵。蜘蛛の精この劍に恐れし體にて、一卷を銜へ、九字を切る。思ひ入れ、兩人キツとなる。蜘蛛の精立ち身のまゝ、大ドロ〳〵にて直ぐに消える、兩人この體を見て恟りして左右へ別れる。これにキツと目を附け思ひ入れあつて、袴垂は白刃、將軍太郎は鞘を取らうとする、立廻りよろしくあつて

拍子　幕

幕引き附けると拍子木にならひ、花道よき所へ蜘蛛の精、派手なる振り袖、綸の帽子、金銀の扇を持ち、以前の一卷を銜へ、薄ドロ〳〵にてセリあがる。途端に東西棧敷へ紅白梅の盛りの水引を引き出す。蜘蛛の精セリ上げ、キツとゝまる。こなしあつて顔へ扇を當てる。誂らへの摺り鉦入りの賑やかなる唄になる途端に誂らへの胡蝶二羽、目先へ舞ふ。これに目を附け、扇にて拂ふ事などよろしく、揚げ幕の方へ舞ひ行く。蜘蛛の精これに目を附け、こなしあつて向うへ入る。知らせにつき、

シヤギリ

第壹番目四建目

幾野海道追分の場
笛吹峠嵐下ろしの場
栗の木村の場

役名══二の瀨村、源六。御厨七郎俊連。丹波太郎鬼住。栗の木村又次　實ハ海上刑部太郎。修驗者　實ハ大江郡領政平。百姓、五知右衞門。百姓、芝作。丹波太郎手下、勘太。見世物師、善幸。又次娘、おくり。鶴の前。お浦　實ハ刑部太郎娘、浦邊。

本舞臺、三間の間、一面の淺黃幕、上の方山の張り

物。正面好みの辻堂。下の方土窪の茶店。すべて丹波海道幾野追分道の體。幕の内よりおくり、やつし前垂れがけにて茶を汲んで居る。五知右衛門、芝作、百姓の形、大きなる斧を二つ、太繩を入れてこれをかたげ、茶を呑んで居る。善幸、木綿合羽旅の形にて腰を掛け居る。雲助二人、駕籠を下ろし、煙草をのんで居る。この見得、在郷唄にて幕明く。

くり　どなたもお早うござりました。

駕一　旦那、これからは石道だ。もう一丁場やりませうか。

駕二　丹波の笛吹峠、名代の難所でござります。

五知　イヤモウ、毎日歩きつけて居るわしさへ、大儀な道サ。

善幸　わしは折々上り下り、この在所の栗の木村、又次といふ人を尋ねるのサ。

くり　栗の木村はわたしが在所、父さんも今日は内にゆゑ、行てお逢ひなされませ。

駕一　栗の木村の又次どのは、この丹波の國で、片輪者ばかり集めて、京大坂や江戸の盛り場へ、見世物に賣つてやるが商賣。

善幸　わしは江戸の築地に居る見世物師だが、この栗の木村へ見世物の相談、冬のうちに來たのでござります。

芝作　わしらは、この山間の岩茸を取りに、この春に乘つて谷へ下りたりするが、珍らしい名も知れぬ、獸物などを見ることがござります。

善幸　珍らしいといへば、この間、どこやらから眞黒な馬が駈け歩いて、爰らあたりの田地田畑へ踏み込み、荒すとの事。

くり　その話しはわたしも聞きましたが、怖い事ぢやさうにござります。

芝作　ドレ、わしらは谷へ下りて、一精やりませう。

善幸　貴樣達も骨を折つた代りに、一杯づゝ呑ませやせう。

駕舁　そりやア、有り難うござります。

芝作　ドリヤ、わしらは谷へ行きませうか。

くり　そんならお早うお出でなされませ。

善幸　こりやア、お世話でござりました。

ト在郷唄になり、駕籠舁きは善幸を駕籠に乘せて下座へ入る。おくり殘り

くり　ほんに、姉樣が、この流れの布晒しにござんすが、今日はお天氣もよし、もう見えさうなものぢやわいな。

ト向うにて

勘太　ア丶、コレ〳〵、姐さん、料簡しなさい〳〵。
ト誂らへ摺り鉦入りの唄になり、向うよりお浦、前垂れがけにて手拭を冠り、盥に白布を入れて抱へ、片手に雲助の勘太を捻ち上げ、下駄をはいて出て来る。後より丹波太郎、三度飛脚、引廻し合羽、旅形にて、荷物を擔ぎ出て来る。勘太、花道にて
コレ〳〵姐さん、指が折れる、どうするのだ〳〵。
うら　どうの斯うのは知れた事、山家女と仇口の、古いせりふを洗濯の、見ず知らずではあるまいし、今年も替らぬお目見得に、あられもないとお叱りを、返り三河屋さまざまの、てんがうさんす雲助さん、必らず弄つて下さんすな。
ト勘太を取つて投げる。
太郎　コレ〳〵、その腹立ちはお前が尤も。彼奴が悪洒落を云つたもので、荷物を自身にこの通り、わしがかたげてお前に詫び事。マア、料簡してやつてくんなさい。
勘太　コレ、姐さん、おれが悪かつた。料簡してやつてくんなさい〳〵。
うら　それ見やしやんせ。ほんに男といふものは、女子に逢うては、脆いものぢやわいなア。
太郎　そんなら、それで料簡して
うら　この場は濟ましてあげようわいなア。
勘太　そんなら親方、マア、あちらへ。
太郎　たう〳〵爰まで擔がせ居つた。
ト唄の切れに三人、本舞臺へ来る。
くり　姉さん、布洗ひにござんしたか。何やら聲高に、あのお方はえ。
勘太　いつも上り下りさつしやる酒問屋の旦那サ。つい供をしてお前の姐御に、冗談を云つて腹を立てさせた。よいやうに頼みます。
くり　いつも〳〵、お前もマア、嗜なんだがよいわいなア。
太郎　ドレ〳〵、マア、一服のんで行きませう。
ト床几に腰をかける。
くり　姉さん、今江戸のお方がござんして、父さんを立場で待ち合してぢやわいなア。
うら　そんなら父さんに知らさずば、また腹立ちであらう程に、そのお方を連れましておぢやいなう。其うちわしや、見世番しながら布を洗ふ程に、早う行ておぢや。
くり　アイ〳〵。そんなら姉様、見世を頼んだぞえ。
ト在郷唄になり、おくり下座へ入る。向うより源六、

やつし旅形にて、澁紙包みと行李を、振割けにして出て來て

源六　オヽ、お前は早くござりました。草鞋を買つて居るうち、大きに遲れた。

太郎　イヤ、わしはどうで幾野在に寄り道があり、殘り多いが爰で別れます。

源六　イヤモウ、旅は道連れとやら、昨日から大きにお世話になりました。

太郎　アヽコレ、酒でもあれば飲んで別れたいが、姐さん、酒はあるまいか。

うら　アイ、酒はこの先で

ト太郎をよく／＼見て

ヤ、お前は

太郎　アイヤ、エヘン／＼。アヽまだこの先が難所と聞けば、なんと急いで漕ぎ附けようか。

勘太　それがようござります。

源六　左樣なら、もうお出でなされますか。

太郎　心が急けば別れます。アヽコレ、上りを急がぬと、ゆつくりとお浦さん、お前にも話しが。……イヤ、また重ねて。

源六　これはお名殘り多うござります。

うら　隨分御機嫌よう、お出でなされませ。

太郎　急いでござりませ。

勘太　サア／＼、やりませう。

ト在郷唄になり、丹波太郎、勘太、下座へ入る。源六こなしあつて

源六　ヤレ／＼、道連れに別れたら心細くなつた。併し、もう爰が追分ならば、僅かであらう。

ト煙草を吸ひ附けようとして

モシ、火を一つ入れて下さい。

うら　ハイ／＼、お火でござりますか。

ト火入れ取つて顏見合せ

お前はどうやら見たやうな。

源六　イカサマ、わしもこなたを。

うら　オヽ、ほんにそれ／＼、二の瀬村の源六さんぢやごさんせぬか。

源六　成る程、三年あと、在所に居た時分心易くした、又次どのゝ娘御お浦どの。ハテ、變つた所で逢ひました。

うら　マア／＼、お前も達者で、おめでたうござんす。

ト茶を酌んで、火入れに火など入れる。合ひ方。

源六　ヤレ〳〵、久し振りで逢ひました。見さつしやる通り山挊ぎで、旅をするにもこの通り、商賣道具を放さずに、先から先の旅暮らし。二年振りでこなたにも逢ひました。又次どのもお達者かえ。

うら　隨分達者で居ります。それは格別、今お前が連立つてござんしたお人は、ねんごろにしなさんすお方でござんすかえ。

源六　イヤ、あれは一昨日、但馬海道からフト道連れになつて、泊り〳〵も一人旅ゆゑ、世話になりましたが、どこの人だか、名も所も知りませぬ。

うら　エヽ。

源六　エヽ、とはえ。

うら　サイナア、お前はツイ道連れになつたばかりでござんすかえ。

源六　それがどうしました。

うら　コレイナア、ありや盜人でござんすわいな。

源六　エヽ。

うら　この海道筋で、ありや丹波太郎といふ、盜人の頭でござんすわいな。

源六　ムウ。そんなら彼奴は、盜人の頭でござるか。

うら　モシ、お前は金を持つては居なさんせぬか。

源六　エ。

うら　イヽエイナア、路銀ならば餘程の金、それを見込んで道連れになつて、附いて來たと思はるゝわいな。

　ト源六、思ひ入れあつて

源六　ムウ、怖い者でござります。護摩の灰が商賣の、目角に違ひござりませぬ。奉公挊ぎの爲辛抱して、拵らへた金がござります。

うら　そんならその金を見込んで、大方峠の山中に、お前をを待つて居るに違ひござんせぬぞえ。

源六　何を云つても多勢に無勢、大事な金を取られては大難儀。どうしたらようござりませう。

うら　モシ、そりや、斯うしなさんせ。その路銀を、わたしに預けて行きなさんせ。

源六　アノ、二百兩を。

うら　サア、さうすれば、もし大勢で取巻いても、金さへ持つてござんせにや、大事ないぢやござんせぬか。

源六　イカサマ。金さへ無けりや、どうするものだ。お前の云はしやる通り、預けませう。

　ト懐の財布より二百兩を出す。お浦受取り、手拭にて

包み

うら　ツイ道通りの旅人なら、心も附かず教へもせねど、二年振りで逢うたお前、見す〳〵難儀をそれなりに、捨てゝ置いては氣の毒なゆゑ、預りませうとは云うたれど、わたしも女、知つての通り、父樣の氣質なれば

　　ト髮にさしたろ笄を拔いて

この笄は譯あつて、親の讓りの大切な割り笄、頭の道具といふではなけれど、粗末にならぬ品ゆゑに、髮の飾りの身嗜なみ。これをお前に渡して置けば、いつ何時でもわたしが内へ、それを持つて、取りにお出でなされませいなア。

源六　ハテサテ、深切に教へて下さつたお浦どの。見ず知らずの人ではなし、こなさんの內さへ聞いて置けば、大事ござりませぬ。

うら　でも、どういふ事で、お前の來られぬその時は、この笄さへ寄越しなさんすりや、金は慥かに渡してあげるわいなア。

源六　成る程、さういふ事なら、この笄、わしが方へ預かりませう。して、お前の內といふは

うら　幾野の里の村續き、又次というて、栗の木のある放れ家。

源六　又次どのと尋ねませう。

　　ト七ッの鐘鳴る。

うら　もう、ありや七ツ。モシ、斯うしなさんせ。この麓から峠へかゝる、近道まで教へてあげうほどに、ちつとでも日の高いうちに行きなさんせ。

源六　それは重々忝なうござります。どうぞ近道を教へて下さりませ。

うら　そんなら、わたしと一緒に。

源六　案內して下さりますか。

うら　サア、ござんせいなア。

　　ト在鄕唄になり、兩人連れ立ち、下座へ入る。ト善幸出て來り、あたりを見廻し、思ひ入れあつて

善幸　いつぞや、都岩倉にて、梢にかゝりし相馬の白旗、不思議に我が手に入りたるも、栗の木又次と心を合せ、徒黨を集むる屈竟の一品なれど、馬の拔け出で空虛となれば、只の白旗。最前の話しといひ、なんでもこの旗へ黑馬を、戻したいものぢやが。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。

　　トこれに惘りして、白旗を、お浦が持つて出た洗濯盥

の中へ入れる。ト下座より、おくり一緒に民右衛門、
庄屋の形、百姓二人、ワヤ〱云うて出て來り
善幸　こりや、マア、皆の衆、何を騷がつしやります。
民右　何事とは、この間から噂のあつた黒馬、此方の村へ
　刎ね込みました。
皆々　イヤア、。
くり　コレイナア、わたしや怖いに依つて、皆さんと一緒
に、早う内へ去にたいわいなア。
民右　この庄屋が送つてやりませうから、皆の衆、道々氣
を附けて行きませう。
善幸　わしも後から行くに依つて、又次どのに、よく云つ
て下されや。
くり　アイ〱。そんなら後からお出でなさんせ。
皆々　サア〱、行きませう〱。
　トてんつゝになり、山颪し。この人數皆々向うへ入る、
　善幸殘り
善幸　ムウ、そんならいよ〱噂の黒馬、この旗から拔け
出たに違ひないわえ。
　トこの時、お浦出て來て、そこらを尋ねる。善幸が持
つて居る盥を見て

うら　滅相な、この盥を。
　ト持つて行かうとする。
善幸　ア、コレ〱、その盥をどこへ持つて行く。
うら　こりや、わたしのぢやわいな。
善幸　それでも、これは
うら　ハテ、何をしなさんすぞいな。
　ト爭ふ。大ドロ〱になり、向うより誂らへの黒馬一
散に走り出る。後より民右衛門、百姓皆々棒を持ち追
ひかけ出る。ドロ〱にてお浦、善幸爭ひの中へ入る。
皆々ワッと逃げる。善幸も皆々と一緒に逃げて入る。
お浦逃げるはずみに思はず手綱を踏まへる。馬とまる。
誂らへの鳴り物になり、正面の辻堂の扉を開き、御廚
の七郎俊連、五十日鬘、大小、武者修行の形にて出る。
この時三建目の黒雲下りる。兩人キッとこれを見て思
ひ入れ。矢張り薄ドロ〱。
俊連　葉公龍を好んで畫き、又は鏤めども、眞の天龍を見
て魂ひを失ふ。これ龍にて龍にあらざるものを好むとや
云はん。
うら　女の撚れる黒髮には、大象もよく繋ぐと、色に引か
るゝ佛の戒め。

俊連　それは方便、これは又、あればあるもの、これは稀代。
うら　形に影の駒の足、思はず爰に留まりしは
俊連　手綱は正に繋ぎ駒、魂ひ入れてその形、現はれ出でしと覺えたり。しるしは目前、爰に寫して。
ト懐より錦の袋に入れし鏡を出す。大ドロ／＼にて馬の上へ黒雲下りる、と馬は消える。お浦フッと盥の中を見る。白布に馬現はれる。
うら　ヤ、この白絹に自から、形を現はす繋ぎ馬。
俊連　ナニ、白絹とは。
トつか／＼とお浦が抱へし盥に手をかける。お浦振り拂ふと、俊連思ひ入れ。
うら　こりや、何としなさんす。
俊連　サ、それは。
ト誂らへの合ひ方になる。
うら　ついに見馴れぬ旅のお方。
俊連　イヤ、外でもない、今の様子、荒れたる馬の口綱を、踏み留めたお女中、御亭主の名が聞きたい。
うら　ほんに、マア、何の事かと思うたら、わたしに夫はござんせぬわいなア。
俊連　そんならこなたは、寡女か。
うら　それ聞かしやんすお前は
俊連　見らるゝ通りの遠國武士、山陰道に知るべを求め、仕官を望む身ながらも、武士も及ばぬ今の有様、女房に持ちたい。
うら　アノ、お侍ひ様が、賤山樵の娘を
俊連　大事ない。こなたさへ應と云や、侍ひやめて町人百姓。
うら　アノ、そんなら眞實それ程に。
俊連　嘘と思はゞ、いま爰で。
うら　心中見せうと云はしやんすも
俊連　古いと思はゞ、洗濯の、盥の内に
ト白旗に手をかける立廻り。俊連が懐より鏡を落す。お浦ちよつと取上げる。
うら　この鏡は。
ト引ッたくり俊連懐へ入れる、思ひ入れあつて
女房にならうわいな。
俊連　ヤ。
うら　お前の心が知れたに依つて
俊連　女房になる氣か。

うら　アイ。
俊連　して、こなたの住家は。
うら　この山續きの栗の木村、又次といふがわたしの父さん。
俊連　ムウ、聞き及んだる栗の木村。
うら　わたしが内へ
俊連　尋ね求めて
うら　必らずともに。
　ト俊連は盥、お浦は俊連の懐へ思ひ入れ。
待つて居るぞえ。
　ト時の鐘、唄になり、お浦盥を抱へ、向うへ入る。
俊連　ハテ、心得ぬ今の女。盥の中へ入れありしは、慥かに相馬の家の旗。我が所持なしたる名鏡の、奇特に消えて黒馬の、形は正に繋ぎ馬。
　ト懐より鏡を出し、思ひ入れあつて
女が在所は栗の木村、尋ね求めて今の白旗。とはいへ我が身のこの姿。ムウ。
　ト思ひ入れ。百姓一人出て
百姓　その名鏡を。
　ト取りにかゝる。立廻りにて、エイと當てる。思ひ入れあつて
俊連　幸ひこれなる狩人が。ムウ。うせう。
　ト思ひ入れ。時の鐘になり、俊連、百姓を引きとらへ入る。ゴン／＼にて、淺黄幕切つて落す。
本舞臺、一面岩組み、眞中に谷の蔭山道、下の方九十九折のやうにして、正面に小さき地藏堂、奥深に山組みの模樣よろしく、兩方に振りよき松の枝、蔦葛からみ、總て丹波の國笛吹峠谷間の模樣、時の鐘、山颪しにて道具とまる。
　ト右二重舞臺に駕籠舁き二人と胴六勘太、以前の形。丹波太郎、盗人の形にて、旅形の若い者を踏まへ、錦の袋に入りし蜘蛛切丸を持つて居る。
勘太　頭、息の根は
三人　とまりましたか。
太郎　此奴は慥かに源家の重寶蜘蛛切丸。頼親公へ渡せば一廉の金。
勘太　そんならこの劍が
太郎　この侍ひめは慥かに、藤原家の娘、鶴の前が供をして、うせた奴には違ひない。此奴が爰へうせるからは、

鶴の前もウロ〳〵と、この峠へかゝるは知れてある。コレ胴六、わりやア、この劒を都へ持ち行き、頼親どのへ手渡しするか、多田の館の尊國君に、慥かに手渡し、合點か。

ト渡す、胴六取つて

胴六　呑み込みました。して、頭には。

太郎　鶴の前が來るを待つて、爰で彼奴めを。

胴六　そんなら、頭。

太郎　早く行け。

胴六　合點だ。

ト蜘蛛切丸を持つて向うへ入る。始終時の鐘。

太郎　常後が娘の鶴の前、今一種の雄龍の印を所持なして、この道へかゝるは必定。爰へ來たなら合點か。

勘太　呑み込みました。

ト駕籠舁き、向うを見て

駕舁　アレ〳〵、慥かに女連れ。

太郎　日も暮れかゝれば丁度幸ひ。

勘太　巣を張つて彼奴等を

太郎　二人ともに來い。

ト時の鐘、合ひ方になり、太郎、勘太、駕籠舁き上の方へ入る。と向うより關屋、鶴の前、三建目の姫の拵らへにて、連れ立ち出て來る。

關屋　常々も申しまする通り、幾野の麓には、私しが知るべもござりますれば、これにお忍びなされまして、時節をお待ち遊ばしませ。

鶴の　いつぞや鎌倉にて、危い所をやう〳〵遁がれし、自らが身の上。頼信さまとも別れ〳〵、世を忍ぶ身の味氣なさ。この上ともに其方を力と思ふわいの。

關屋　お氣遣ひ遊ばしますな。女ながらも藤原仲光が妹、この關屋がお附き申して居るからは、やがてめでたう頼信さまと、御祝言させまするでござりませう。

ト時の鐘を打つ、月出る。

折悪しう日は暮れて、人里知れぬこの山中。月影をしるべに、サア、おひろひ遊ばしませ。

ト始終時の鐘にて、舞臺へ來て、二重舞臺へかゝる。

ト鶴の前、道の疲れに悩みし思ひ入れ。

鶴の　この程の心遣ひで、いから痞へが差込んで來たわいの。

トこの時後へ太郎、駕籠舁、勘太出かゝりて窺ひ、太郎段々に彈き合ふ。

關屋　折惡う藥はなし。どうしたものであらう。
太郎　旅のお女中、藥を進ぜませう。
關屋　これはマア、どなたか知らねども、御覽の通りの女連れ。左樣ならばお藥を。
太郎　オヽ、隨分やらう、その代り、其方の藥の萬金丹、しつかり持つた路用の貯へ、ありたけ此方へ渡してしまへ。
勘太　襞を立てゝもこの山中。
駕二　鶴の前に乳人關屋。
勘太　そびいて行けば、褒美はずつしり。
關屋　ムウ、すりや、我れ〳〵が身の上を、知つての上の狼藉よな。
太郎　爰へ來たのは地獄落し、叶はぬ事だと諦らめて、着て居る物から頭髮の道具、路用殘らず置いて行け。
關屋　ヤア、慮外な、盜賊ども。女と思ひ不敵の詞。近寄つたら、爲にならぬぞ。
太郎　四の五のと面倒な。ソレ、合點か。
兩人　合點だ。
　ト禪のツトメになり、鶴の前を引立てろ。關屋、引きのける立廻り。太郎、鶴の前を引ッ抱へ、連れて行く、關屋、やるまいと留める立廻り。一腰を拔いて駕籠舁きの眉間を切る。
勘太　ソリヤ、拔いたぞ。
　トこれより禪のツトメ烈しく、勘太は向うへ逃げて入る。駕籠舁き、關屋に打つてかゝる。關屋、鶴の前の手を引きながら、片手にて皆々を追ひまくり入る。ト太郎殘り
太郎　素手ではゆかぬあの女め。こりやア、おれが手を下ろして。
　ト思ひ入れあつて木蔭へ忍ぶ、トまた禪のツトメになり、上の方より關屋、駕籠舁き立廻りながら出て來て、ト〃駕籠舁きを切り倒し、がつくりとなる。鶴の前走り出でゝ取り附き
鶴の　コレ、關屋、心を慥かに持つてたもいなう。
　トいろ〳〵介抱する。關屋手負ひ苦しみ、いろ〳〵あつて
關屋　鶴の前樣、あなたにお怪我はござりませぬか。嬉しや、とは云ふものゝこの深手。モシ、大切なるこの雄龍の印、賴光公へ差上げて、再び常後公の勅勘を。
　ト百姓出て

百姓　雄龍の印、此方へ渡せ。

ト引ッたくりにかゝる。關屋、雄龍の印を口に銜へて百姓と立廻り、互ひに合打ちになる。兩人思はず二重舞臺より前の谷へ落ちる。鶴の前ウロ／＼。

鶴の　ア、コレ、關屋イなう／＼。手負の上に谷底へ。エ、どうしたらよかろうぞいなう。

トこの時太郎、後へ出て來て

太郎　女め、われが懷中にある雄龍の印、おれに渡せ。

鶴の　ヤア、、そんなら其方も

太郎　オ、、知れた事。雄龍の印を早く渡せ。

鶴の　イヤ／＼、大切な一品、其方達に渡さうか。

太郎　キリ／＼此方へ渡せ。

鶴の　イヽヤ、其方を。

ト懷劍にて突きかゝるを叩き落し、一かせ切る。

こりや、自らをも殺しやるかいの。

太郎　目にかゝつたる雄龍の印、持つてうせたが、おのれが寂滅。

鶴の　賴信さまにはお別れ申し、剩さへ盜賊の手にかゝり、爰で死ぬるか。エヽ、口惜しい。

太郎　こま言吐かずと。

ト切り倒し、懷を探し、いろ／＼あつて

ムウ、すりや、雄龍の印は、もう一人の女郎めが。

大勢　サア／＼、ござれ／＼。

ト向うにて聲する。

太郎　南無三。

ト東の方へ行かうとすると、東の揚げ幕にて

大勢　サア／＼、ござれ／＼。

トこれにて太郎、二重舞臺上の方へ入る。ト山颪し、時の鐘になり、向うより民右衞門、松明を持ち、五知右衞門、幕明きの形にて斧を持ち出る。跡より俊連、同じく百姓の形、打交り出て來る。東の方より芝作、同じく斧をかたげ、百姓大勢松明を持ち、この後より源六以前の形にて出て來る。兩方人數舞臺へ來て二重へあがり

芝作　これは五知右衞門どの、いま戻らしやりますか。

民右　この頃が物騷だに依つて、大勢で戻りました。

五知　芝作どのや、今の切合ひを見さしつたか。

衣作　あちらの山から見ましたが、どうしましたね。

庄屋　コレ／＼、爰らあたりは血だらけでござる。

皆々　ハア、、二人ながら谷へ落ちたと見えまする。

ト松明にて谷底を見る思ひ入れ。始終時の鐘。この時、中に交り居たる倭連、源六、そこらを見て

源六　何か奪ひ合うて谷底へ落ちた樣子。アレ〳〵、切合ひの音がします。

倭連　大方泥坊共の仕業でござらう。誰れなりと谷へ下りて、加勢してやつたらなア。

皆々　コレ〳〵、上り落ちまい、危ないぞや〳〵。

ト芝作と五知右衛門が持つてゐる斧を見て

倭連　モシ〳〵、お前方の持つてござるは、そりや斧ぢやござりませぬか。

五知　こりや、岩茸を取る時乘つて下りる、斧でござるわえ。

倭連　そんなら、それに乘つて、下へ下りたらどうでござりませう。

五知　なんでもこの間は、この峠へ追剝が蔓るとの事。下へ下りて追剝めを、ぶち殺すがようござる。

倭連　そんならその谷底へ誰れが見に行く。

皆々　わしらは氣味が惡うござる。

源六　イヤ、下へはわしが下りて見ませう。

倭連　ヤア、貴樣は。

源六　わしは笹山越えの狩人でござるが、この間京へ登る道で、盗人に附かれて、金を取られる所でござりました。どうぞわしをやつて下さりませ。

倭連　わしも、氷上郡へ歸る者でござるが、來かゝつての事なれば、わしをば谷底へ、やつて下さりませ。

芝作　コリヤ〳〵、斧も幸ひ二つあるに依つて、二人一緒に下りたがよい。

皆々　それがよい〳〵。

倭連　谷底は暗からう。火繩を貸して下さりませ。

庄屋　ソレ、火繩を貸しまする。

ト倭連に火繩を渡す。

源六　上からはその松明、下からは綱を引くを合圖に、引上げてもらひませう。

皆々　合點だ〳〵。

源六　お月樣も出てござるし、物の黒白も大概知れませう。

倭連　繩を引いたら上げる手筈。合點かや。

皆々　合點だ〳〵。

始終時の鐘にて、斧の綱の先を松の枝へ引きかけると、上より吹替への大綱を括り下ろす。これより斧を下ろし附け、倭連、鐵砲を持ち、源六兩人斧の中へ乘る。

皆々捨ぜりふよろしくあつて

俊連　しつかりと頼むぞや。

源六　合圖を忘れまいぞや。

皆々　合點だ〱。

ト少し繰り下ろす。

玉知　なんと、畚を下ろすなら、ワッサリと木遣りでやらかさうぢやないか。

皆々　よかろう〱。庄屋どの、音頭を頼みます、

民右　合點だ〱。……ヨイ〱ヨヤサノサ。

ト山颪し、謡らへの鳴り物になり、二重舞臺をセリあげると、畚は少し下へ下がる。鳴り物に附き皆々綱を繰り下ろす見得。畚の中なる俊連、源六は乘つたまゝに、静かに下へ下りる心。右鳴り物にて一面にセリあがる。よき程に山幕にて舞臺の人を隱す。右の鳴り物、谺の入りし合ひ方、始終山颪し。

源六　なんとマア、こなさんもわしも、替つた因縁でないか。一生に一度、馬か乘り物に乘る氣で居たが、畚に乘るとは夢々思はぬ。

俊連　イヤ、又これも話しの種。併しお前にこんな所で、始めて逢はうとは思ひがけない。この顔見世から、萬事お世話になるでござりませう。

源六　ナニサ、今まで隣り町や向ひ町で行き違つて、今度出合ひが互ひに初めて。友達の餘計になるのがわしが好き。なんでも心安くこれからしませう。

俊連　火繩があるが、マア、一服のまつしやりませ。

ト鐵砲の火繩を出す。

源六　イカサマ一服やりませう。ア、コレ、始めての出合ひに、中途でお茶さへ進ぜませぬ。

俊連　イヤモウ、それはお互ひでござります。いづれも様へもこの末とも、この芝居に重年したお禮を、申し上げたいにも此やうな形。高うはござりますれど、眞ッ平御免下さりませう。

源六　アレ〱、谷底が近いかして、水音がしますぞえ。

俊連　ほんに流れの音が聞える。もちつとであらう〱。

ト、チョン〱にて藤段々に引き上ぐる。舞臺前谷底をセリ上げる。爰に關屋、百姓を仕留めし心にて、袱紗包みを銜へて居る。この時谷蔭より源六、俊連、畚より下りて、思ひ入れあつて

兩人　ヤア、、慥か人影。

トこれにて、關屋の銜へたる印を源六取り、ちよつと

立廻りに、關屋を當てろ。
源六　こりや、コレ、慥かに雄龍の印。
俊連　それを。
ト取らうとする。
源六　アイヤ、こりやアおれが拾つたものだ。
俊連　でも、ちよつと。
ト取らうとするを振り拂ふ。この時俊連の懐より以前の鏡を落す。源六取上げ
源六　この一品は。
俊連　それを。
ト手早く取つて懐へ入れる。
源六　ムウ、氷上郡の百姓と、望んで下りし脊下ろし。谷の底より心の底、お主も只の百姓ではないわえ。
俊連　女が持つた一品を、取つて返さぬわれも又、落つれば同じ谷の底、見附けた物を、此方へ渡せ。
源六　イヽヤ、それよりわれが懐、錦の袋は慥かに鏡。
俊連　雄龍の印と見た目は違はぬ、それを此方へ。
源六　その鏡を。
ト俊連が懐へ手を入れる。やるまいと立廻り。山颪し誂らへの鳴り物になり、兩人切り結ぶと、キツカケにて月を隠す。忍び三重になり、これより兩人闇の模様よろしく、源六、俊連を目掛けて切つてかゝる。この時源六持つたる雄龍の印を落す。俊連取上げ、うまいといふ思ひ入れ。チヨンと月出る、兩人顔見合せ、トントンと後へ依つて脊へ手をかけ乗つて、白刃にて打ち合ひ、キツと見得。山颪し、大小の鳴り物にて、脊を段々引上げる。ト後の山を段々にセリ下げると、山の半腹の模様。兩人乗つたまゝのタテ、俊連雄龍の印を銜へたるを見て
源六　雄龍の印も、さてはおのれが。
俊連　何を小癪な。
トちよつと切り結び、トゞ俊連、白刃にて源六が乗つたる綱をポンと切る。ト源六それなりにドンと谷底へ落ちると、鳴り物やんで時の鐘、山颪し、忍び三重になる。ト俊連刀を納め、二種を持つて
思ひがけなく手に入りし雄龍の印、又この一品は照葉の鏡。二いろ共に、エヽ、忝ない。
トにつたり笑ふ。ドンと筒音して、鏡を持つたる俊連が利腕に當る。鏡を下へ取り落す。
南無三、鏡を谷底へ。ムウ。

ト腕を抱へながら下を見込む。鳴り物になり、谷と後の山を段々とセリ上げる。下より谷底をセリ上げる。源六、倭連が持つて下りたる鐵砲を持ち、關屋、筒音にて心附きし心にて、源六に切りかゝつてゐるを留めて居る思ひ入れ。この見得にてセリ上がる。キッと見得。

源六　コレ、うろたへまい、おれは旅人。

關屋　イヤ、盜賊。

ト切り附けるを受け留めながら顏見合せ

源六　ヤ、こなたは。

關屋　お前は。

トがつくりなる。百姓起き上がつて

百姓　女め。

ト切り附ける。身を交して百姓を一かせ切る。

源六　コレ、氣を慥かに。

ト關屋落入る。源六こなしあつて

ホイ。

ト百姓を下へ切り倒す。百姓見事にかへる。源六手を合せ、チョンと木の頭。源六憂ひのこなしよろしく

拍子幕

山颪し、時の鐘のツナギにて、この幕直ぐに引返す。

本舞臺、三間の間二重舞臺、上の方反古張りの障子、向う赤壁、正面の欄間に、宮のやうにしたるお札箱を掛け、いつもの所門口、藪疊、古井戸、上の方栗の木、すべて丹波の國栗の木村又次内の體。幕の内より又次、白髪親仁。善幸、前幕の形。おくり、娘にて地を彈き、子役の猿、袖なし羽織着て踊つて居る。皆々見て居る。門口に人足二人、菰包み、長持を置いて見て居る。賑やかなる鳴り物入りの合ひ方にて幕明く。

ト右の鳴り物にて、子役ちよつとしたる所作よろしくあつて納まる。皆々、ヤンヤヤンヤと囃すと、奥よりお浦、盆に茶を汲んで持つて出で

うら　どなたもお茶をあがりませいなア。

善幸　又次どの、この猿めはよく覺えましたの。

又次　イヤモウ、大抵骨を折つて仕込んだ事ぢやござらぬ。

くり　父樣。先刻にからあの衆が待つてぢやわいなう。

人足　又次どのや、見世物をこの中へ入れて、登せるとの事ゆゑ

同　菰包みにして持つて來ました。
善幸　御苦勞々々、此方へ人足を入れて下さりませ。
ト人足、長持を內へ舁き入れる、おくり、狀箱を出して、
くり　父さん、最前庄屋樣から、急にお觸れぢやといつて、持つてお出でゝござんすぞえ。
又次　何事か聞いて置いたか。
くり　イヽエ、むづかしい事ゆゑ覺えぬわいな。
うら　そりや、わたしも聞いて居ましたが、何やらお尋ね者とやらの事ぢやといなう。
ト又次狀箱を開け
又次　こりや、御廚の七郞が人相書。
うら　そんならそれが。
ト思ひ入れ。
又次　アイヤ、いつものお觸れ書。後にとつくり見よう。押入れへ入れて置きや。
うら　アイ〳〵。
ト取つて懷へ入れる。
善幸　又次どの、この丹波路へ入込んだら、引ッ縛つて
うら　エヽ。

善幸　イヤサ、引ッ縛つて置かぬと、この猿めもチッとしては居まい。
又次　それ〳〵、此奴にも飯なと喰せてやつたがよい。
善幸　人足の衆も、次手に馳走になつてござりませ。
又次　おくりよ、皆の衆にも馳走して、あの衆にも進ぜませい。
くり　アイ〳〵。そんならお客樣の
善幸　猿と一緖に、ドレ、御馳走になりませうか。
ト又次、善幸、おくり、人足、猿を連れて入る。お浦殘りて
うら　昨日思はず麓にて、手に入りし繫ぎ馬の旗。何卒御主人俊達さまへお渡し申し、父さんの不忠の詫びと思へども、これまでもお顏を見知らぬ、御主人の弟御、殊に常からあの父さんの氣質、今の樣子。
ト懷より狀箱を出し
こりや、慥かに繪姿。そんならこれが
ト向うにて
政平　サア〳〵、靜かに步ばつしやい。
トこれを聞いて、ちやつと思ひ入れあつて奧へ入る。
トてんつゝになり、向うより政平・鼠木綿やつし、修

驗者の拵らへ、偈箱を脊負ひ、お札を持ち出る。後より源六、修驗者の錫杖を杖にして、少し足の痛む思ひ入れにて、出て、花道にとまり

きつう草臥れたと見えますわいの。

源六　イヤ、少つとばかり足の爪を痛めましたが、お前の錫杖で大きに助かりました。

政平　それは難儀でござらう。尋ねさつしやる栗の木村又次といふは、あの家でござる。

源六　そんなら彼處でござりますか。

政平　わしもお札配りに行かねばならぬ。一緒にソロ〳〵とござりませ。サア、行きませう。

源六　それは幸ひでござりました。

政平　サア、そんなら一緒に。

ト矢張りてんつゝになり、兩人本舞臺へ來て

長樂寺でござります。又次どのはお宿かな。

トおくり、奥より出て來て

くり　オヽ、法印樣か。ようお出でなさりました。此方へお入りなされませ。

政平　オヽ、これはおくりどの、又次どのはお留守かな。

ト云ひ〳〵内へ入る。

くり　いま奥にお客があつて、挨拶してゞござります。

政平　イヤ、毎年冬至の星祭りに、お札を進ぜまするゆゑ、配りに來ました。

くり　これは有り難うござります。

ト門口の源六を見て

モシ、お供のお方なら、此方へ入らしやんせ。

政平　ア、イヤ、あの人は、この栗の木村又次どのを、お尋ねなさる人ゆゑ、爰まで一緒に來ました。

くり　そんなら此方へお入りなされいなア。

源六　アイ〳〵、御免なされませ。

ト内へ入り

私しはこの近在でござりますが、又次どのゝお娘御お浦どのに、ちつと用があつて參りました。

くり　そりや、わたしが姉樣。何の御用か知らねども、奥にぢや程に、呼んで來ませうかいな。

源六　イヤ、早急にも及びません。ゆるりとで大事ござりませぬ。

政平　イカサマ、草臥れてなら、ゆつくりと逢はつしやりませ。又次とのは奥でござりますか。

くり　アイ、商賣向きの用があつて、何やら談合してぢや

わいな。
政平　そんならこのお人と一緒に、奥に行つて逢ひませうか。
源六　お邪魔ながらわしも行つて、お目にかゝりませう。
くり　お二人ながら、わたしと一緒に。
政平　ドレ、奥へ行つて。
　ト此の時懷より手紙を落す。
源六　「政平どのへ鎗國。」
　ト政平、手早く取つて懷へ入れ
政平　ほんに、爰へもお札を配らにやならぬ。
源六　ドレ、そんなら奥へ。
政平　おくりどの。
くり　サア、お出でなされませいなア。
　ト三人思ひ入れ。唄になり、奥へ入る。と時の鐘になり、向うより丹波太郎、引廻しの合羽、裸の形にて、一本差し頰冠りにて、ウソ〳〵出て來て
太郎　エヽ、今日は寒い日ではある。それにこの間からまんの惡さ。折角この間但馬海道で、やぶ酒手を遣つて、附けて來た狩人めは、どこへやら見失ひ、自棄を起して呑み喰ひに、着て居る物は合羽一枚。裸で道中もならないゆゑ、あの勘太めを附けてやつたが、よく嗅ぎ出して來ればよいが、これがほんの、素人に迫ひ錢だ。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來ると、舞臺前井戸より、バッタリ音して、勘太、頰冠りにてヌッと出る。太郎悔りして
エヽ〳〵、悔りした。
　トよく〳〵見て
わりやア、岩脊の勘太か。
勘太　こなたの云ひ附けゆゑ、拔け道から忍んで爰へ。
太郎　そんならさうと斷わつて出たがよい　悔りしたわえ。して、樣子はどうだ。
勘太　とつくりと見て置きました。
太郎　そんなら又次を呼び出して
勘太　合點だ。
　ト懷より呼子を出し吹く。奥より又次、善幸出る。
又次　丹波太郎、この内へ附込んだに違ひない。
太郎　それで手下の勘太を先へ。
善幸　この權藤次も、昨日麓で、此方の娘お浦どのが、持つて歸つて、慥かに。
又次　そりやア、おれが氣取つて置いた。

太郎　この間但馬海道から來た狩人め、すつかり金を持つて居たを嗅ぎ附けて、昨夜見失つてしまつたが、其奴が慥かに。
勘太　この家に來たに違ひない。併し今は持つて居ない樣子。
又次　ムウ、金のはかし所も、今宵のうちには知れるであらう。兼ねて源氏へ心を運ぶ御厨七郎、搦め捕つて出せば、この身の仕合せ。
善幸　一筋道の栗の木村、是非とも爰へかゝらにやならぬ奴等。もし手に餘らば。
又次　イカサマ。
　トあたりを見廻し、源六が持つて來た鐵砲を見附け
幸ひな物がある。この鐵砲を合圖に、加勢の人數を集める手筈。首尾よくいつたらこの太鼓。
　ト上の方の栗の木へ太鼓を吊し
あゝして置いて打つを合圖に。
太郎　よし〳〵、太鼓が鳴れば加勢に及ぶ。
又次　鐵砲ならば取圍む、必らず手筈を
善幸　今宵のうちに。
勘太　呑み込みました。

　ト又次、太郎、勘太、上下へ別れて忍ぶ。
善幸　よし〳〵、手に餘ればあの鐵砲、首尾よくゆけばあの太鼓。それに附けてもあのお浦に逢つて、昨日の物を詮議したいものだが。
　トおくり、奥より出て
くり　父さん、法印さんが尋ねてぢやわいな、どこへござんしたぞえ。
　ト云ひ〳〵出る。善幸思ひ入れあつておくりに抱き附く。
ア、コレ、誰れさんぢやぞいなア、惡い事ばつかり。
善幸　誰れでもない。おれだ、善幸だ。
くり　何をしなさんすぞえ。其やうな事しやさんすと、父さんに告げるぞえ。
善幸　野暮な事を云ふものだ。爰の内へ見世物を、買ひ出しに來るのも有やうは、お前をおれが引ッ張りもの、丹波の國から生捕りとやらかしたいのだ。おれの云ふ事を聞いてくれないか。どうだ〳〵。
くり　エヽ、嫌らしい、そんな事、知らぬわいなア。
善幸　よし〳〵、さう云やいつその事、あの長持へさらひ込んで、連れて行くによ。

くり　エヽ、否ぢやわいなう。
ト逃げようとするを、有り合ふ長持へ入れようとする。
アレ、父さんいなア。
善幸　コレサ、默つて居な。
ト手拭にて縛り、長持の中へ入れ
ちつとの間、この中へ。
ト蓋をする。奥にて政平
政平　ヤレ〱、大きに馳走になりました。
トこれにて善幸、コソ〱と奥へ入る。奥より政平出
て來て、捨ぜりふ云ひながら、ソッと長持を明け、お
くりを出し、解いて
くり　ヤア、お前は
政平　コレ。
ト唄になり、おくりを連れ、政平奥へ入ると、合ひ方、
時の鐘にて、俊連、前幕の形にて、腕を抱へながら出
る。後より捕り手四人、十手を持ち、出て來て
俊連　軒に印のあの栗の木、放れ家とは、慥かにあの內。
捕手　捕つた。
トかゝる。俊連、利腕を抱へながら、片手にて立廻り
あつて、皆々を向うへ追ひ込み、舞臺へ來り、門口を
しやんと閉める。時の鐘、奥よりお浦出て、俊連を見
て
うら　ヤア、誰れさんでござんすぞいなア。
俊連　イヤ、わしは栗の木村又次どのといふを尋ねて來た。
うら　その又次といふは、わたしの父さんでござんすが、
ト顔を見合せ
ヤア、お前は
俊連　ヤ、さういふ其方は。
うら　モシ、爰がわたしの內でござんす。
俊連　すりや、アノこの家が。
うら　アイナア。そんなら昨日の仇口を、あじやらと思は
ず、いま爰へ。
俊連　やう〱尋ねて
うら　ハテ、ようお出でなされましたなア。
ト合ひ方になり、兩人思ひ入れ。
俊連　ヤレ〱、其方に逢うて、マア、落ちつきました。
うら　マア〱、ゆるりと落ちつきなさんせいなア。
ト煙草盆など持つて來る事あつて、俊連の形を、よく
よく見て
さうしてマア、見れば昨日の姿とは。違うたお前の形容。

俊連　ハテ、こなたの内へ來るからは、侍ひ止めてこの姿なんと誠の男であらうが。
うら　そりや、モウ、其やうに思うて下さんす。お心は嬉しうござんすが、モウ〳〵、これから女夫になつても、必らず替つて下さんすなえ。
俊連　ハテ、斯うなるからは、なんの替らうぞいなう。
うら　すりや、誠でござんすかえ。
俊連　何の僞りを云はうぞ。
　トあたりへ思ひ入れあつて
ムウ、山家にしては物好きな住居。併しながら、これからは、一精出してやつて見ねばなるまい。
うら　それはさうと、お前とわたしと、マア女夫になるからは、ほんの口先のどれ合ひ女夫、わたしの父さんは堅くるしい氣質ぢやに依つて、お前を仲人したといふやうな人がなければ、どうやらをかしいやうなが。
俊連　成る程、夫婦の固めは仲人が第一。
うら　誰れぞマア。……ほんによい事がござんす。わたしが前から心易うした、二の瀬村のこれも矢ッ張り、同じやうな山挊ぎのお人、源六さんといふお方が、先刻奥へ來て、ちよつと逢うたほどに、このお方を賴んで見ようわいなア。
俊連　こなたさへ承知なら、どうでもよい。
うら　そんならちやつと。
　ト納戸口へ向ひ
モシ、源六さん。ちやつと來て下さんせ〳〵。
源六　アイ〳〵。お浦どの、何の用でござんす。
　ト奥より出て來る。お浦、こちらへ連れて來て
うら　わたしやお前に賴みたい事がござんす。外でもないが、少つと外に云ひ約束した男があつて、夫に持ちたいと思ふけれど、知つて居なさんすあの父さんの氣質。仲人がなうては得心があるまいと思ふに依つて、どうぞお前、その仲人になつて下さんせぬか。
源六　そりや、心安くしたこなさんの事、隨分仲人もしませうが、して聟どのは。
うら　幸ひ、あそこに來てぢやわいな。
源六　そんなら知る人になりませう。
うら　さうして下さんせ。
　ト俊連の方へ來て
モシ、仲人を賴んで置いたわいな。サア、ちよつと逢うて、禮云うて下さんせ。

俊連　それは忝ない。マア〳〵、近附きになりませう。
　ト三人捨ぜりふにて顔を見合せ、恟りして
俊源　ヤアヽ、わりやアどうして爰へ。
うら　お前方は、知り人でござんすか。
兩人　ムウ。
　ト思ひ入れ、誂らへの合ひ方になる。
源六　慥かに昨夜谷底で
俊連　並んで下りた畚の繩、
　ト切る眞似をして
どつさり下へ眞逆さま。
源六　下から擊つた手ごたへは、肝のたばねの忽ちに
俊連　岩角、木の根に五體も碎け
源六　脊骨へかけて風穴を
俊連　脛腰立たず
源六　七轉八倒。それなりに。
　ト死んだといふ思ひ入れ。
俊連　冥土にあらぬ
源六　この娑婆で
俊連　思ひがけなく
源六　仲人役。

俊連　替つた緣で
兩人　あつたなア。
うら　ほんに、こりやマア、とんと分らぬわいなア。斯う出合ひなさんしたところは、お二人ともに、同じ世渡りの山挊ぎ。そんなら疾からお前方は
俊連　笹山越えの狩人。わりやアおれが落した物を、持つて居るであらうな。
源六　イヽヤ、知らぬが、氷上のお主も今の物、慥かに持つて居やうがの。
俊連　オヽ。……イヤ、知らぬ。もしおれが持つて居た時は
源六　此方へ貰はにやならぬぞよ。
俊連　殊に依つたら遣りもせうが、われが持つた一品も
源六　そんならわれが。
　ト兩方よりかゝる。源六は足、俊連は腕の痛む思ひ入れ
兩人　いつそ。
　ト山刀と杖にて、お浦をかきのけ、立ちかゝる。
うら　コレマア、何を
兩人　イヤ、その一品。

ト突きのけて、一腰を拔いて切りつける。兩人ちよつと立ちかゝる。お浦、有り合ふ修驗者の政平が持つて出た偈箱にて押へ

うら　コレマア、待たしやんせ。お二人ともにこの場の爭ひ。一人は殿御、一人は仲人、中に立つ身のわたしさへ、まだ祝言の杯も、濟まぬうちからこの爭ひ。喧嘩に花の花嫁が、預かるほどに、マア〳〵、お二人ともに色直し、濟んでの事になさんせいなア。

俊連　イカサマ、この場で云はれぬ昨夜の仕儀。

源六　互ひに惱みのこの體。

ト兩人痛む思ひ入れ。

俊連　迂闊に荒氣も出されまい。

源六　思案した上、兎も角も

うら　そんなら互ひに、マアこの場は

兩人　引いてやらう。

ト脇差を引いて納める。

うら　それでわたしも落ちついたわいなア。

源六　その落ちついた次手、わしも落ちつきたい昨日の事。お浦どの、こなたに預けた二百兩。

うら　アイ、そりや何時でも、預かつた物ぢやに依つて。

源六　わたしが印の笄は。

ト前幕の笄を出す。俊連ちよつと見て

俊連　模樣は色繪の番ひ獅子、その割り笄は。

うら　こりや、わたしが大事の笄。

俊連　そんならそれが

うら　アイ

源六　大事の品ゆゑ、大切に、預かつて居たこの笄、模樣はちよつと見て知つた。そんならお主が覺えの品か。

俊連　女に似合はぬ割り笄、替つた模樣といふ事サ。

源六　女房の物は御亭主の、內の道具も同じ事。幸ひわしが仲人の、印にちよつと拏引出。

ト手裏劍にて打つ。お浦、眞中にて受け留め

うら　わたしがキッと受け留めました。

源六　ハテ、女に稀れな。

俊連　さそくの手の內。

源六　仲人も喜び。

俊連　引出の品も

源六　持參の品も

うら　この場の仕儀も

兩人　昨夜の仕儀も。
ト鐵砲を打つた心、綱を切つた心をする。
うら　互ひにゆるりと
源六　此方へ取るか。
俊連　一つに取るか。
うら　預かつた品なれば
源六　その時こそは
俊連　一生懸命。
兩人　とはいふものゝ
ト寄らうとして痛む思ひ入れ。
うら　ハテマア、後まで。
兩人　ムウ。
ト寄らうとして
源六　仲人は開きませう。
ト唄になり、源六奥へ入る。
うら　合點の行かぬこの笄、どうしてお前は。
俊連　覺えがあるか。
ト懐から笄の片しを出す。お浦、引き合せ見て
うら　こりや、模樣も同じ番ひ獅子。
俊連　しつくり合ひしその笄、それを所持なし居るからは、
海上刑部太郎が娘、浦邊。
うら　この笄のかたしを揃へ、斯くまで御存じあるからは、さては御主人公連さまの弟御、御厨七郎。
俊連　コレ。
ト押へる。時の鐘、合ひ方、お浦、門口をさす。この時下の藪疊おし分け、又次窺ひ出て、門口に聞いて居る。
うら　思ひがけない御主人の弟御、御幼少より他國の御身、過ぎ去りたまひし公連さまの詞にて、親刑部は家來ながらも、由緒ある主從、妹脊の緣定まる印になる割り笄、あなたは東にお忍びと、風の便りにお顔も知らねば、詮方なくも噂で暮らせしこの年月。昨日麓で思はずも、お目にかかつたる路用の金、貢ぎの種と思ふゆゑ、印を渡して預かつたも、まさかの時の用意にと、親にも隱すわたしが心、夫婦の緣の番ひ獅子、盡きぬ印に思し召し、女房と思うて下さりませ。
俊連　廻り逢うたる女房浦邊、兄が由緒の緣なれど、不忠の刑部が娘の其方、迂濶に緣は結ばれぬ。
うら　すりや、我が親の悪心ゆゑ。
俊連　如何にも。我が兄六郎公連には、平親王へ諫めを入

れ、死したる主人を餘所になし、源家へ裏切りなしたる刑部。白旗の行くへは慥かに昨日の白布、探り求めんその爲に、便り來りしこの家の內、心知れざる汝が親、迂濶に足は止め憎い。

うら　すりや、折角廻り逢うても

俊連　旗の詮議は又次に逢うて。夫婦の緣もこれ限り。

ト行きかゝる。お浦留めながら

うら　待つて下さりませ。

俊連　未練な。

ト振り切るを立ちふさがつて

うら　成る程、緣を切りませう。

俊連　なんと。

うら　夫婦の緣に繋がれて、隱れ忍ばぬお前のお心、推量したゆゑ、わたしが方から緣切つて、匿まひたうござんす。

ト此せりふを聞いて、又次うなづき、また藪疊へ忍ぶ。

俊連　ムウ、すりや、緣切つた上この內へ。

うら　留めねばならぬその譯は、これ見て下さんせ。

ト幕明きの繪姿を出す。合ひ方替る。上の障子を明け、源六聞いて居る。

俊連　この繪姿は。

うら　これぢやに依つて、女房の方から緣切つて、匿まひたいわたしが心、推量して下さんせいなア。

俊連　ムウ、他人の女に匿まはれませう。

うら　そんなら合點がいた上で

俊連　如何にもこの家に身を忍び、親が本心定まらば

うら　お前の望みも叶うた上で

俊連　ムヽ。

うら　エヽ、有り難うござります。

ト顏見合せ、源六ピッシヤリ障子をさす。

俊連　ありや、最前の。

うら　モシ。

ト囁き、長持の蓋を明け俊連を入れ、思ひ入れあつてドレ、縫ひ物にでもかゝらうかいな。

ト唄になり奥へ入る。又次一本差し、ころ／＼出て脇差を拔き、長持の上を突かうとする。ト猿出て又次が袖を引き、物くれいの仕形する。

又次　エヽ、猿め、愕りさせたわい。

ト猿、袖を引ッ張り、邪魔をする。

忌々しい、また喰ひ物をねだるのか。

トまた突かうとする。猿袖を引く。
うら　サア〳〵、飯喰はしてやりませうぞや。
　トこれにて悄りして猿を抱へ
又次　エヽ、忌々しい畜生めぢやわい。
　ト始終合ひ方にて、又次、奥へ入る。ト長持の蓋を明け、俊連出て
俊連　今に始めぬ刑部が悪心、この身の大事。昨夜谷間で取落せし、鏡は慥かに彼奴が懐。その時我が手に奪ひ取りし、藤原家の雄龍の印、彼れを捕へて一詮議。
　ト勘太、後よりかゝつて
勘太　その印を。
　ト取らうとするを突き廻し、ポンと當て、勘太を長持の中へ入れる。
うら　サア〳〵、飯やりませう。
　ト俊連、思ひ入れあつて、門口の外へ出て藪畳へ忍ぶ。
　トお浦、飯櫃に膳を載せ出る。猿附いて出て來る。捨ぜりふ云ひながら長持の側へ來て
　何は無うても蟲休めに、これなりと。
　ト蓋を明けようとする時、又次、ツカ〳〵と出る。お浦ちやつとこちらへ來り

サア、飯やりませう。
　ト猿にあてがふ。又次、脇差にて長持を突かうとする。
　お浦悄り、此うち猿は膳を持ち奥へ入る。
うら　ア、コレ、父さん、何をしなさんすぞいなア。
又次　アイヤ、こりや、オヽ、それ〳〵、この中は恐ろしい獸類、生の物を生けては置き憎いゆゑ、突き殺して
うら　アヽ、コレイナア、この中には
又次　おれが代物、そこ退きやれ。
　トまた突かうとする。奥より善幸出て來り
善幸　ア、コレ〳〵、又次どの、さうせまいぞ〳〵。
又次　貴様は善幸、なんで邪魔する。
善幸　イヤ、この中には少つとおれが。……イヤサ、おれが商賣物だに依つて、殺しては悪からうといふ事サ。
うら　それ〳〵、お前の云ひなさんす通り、殺すといふは、マア、止めにするがようこざんす。
善幸　親仁どの、マア〳〵、待つてやらつしやいな。
又次　エヽ、何にも知らずに何を吐かす。べら坊め。
　ト善幸ムツとして
善幸　ナニ、べら坊だ。唐茄子親仁め、この長持はおれが物だ。滅多な事をすると料簡しないぞ、料簡しないぞ。

うら　ほんに、こりや、尤もでござんすわいなア。
善幸　エ、、長持はわれが物でも、この中に。イヤサ、中の代物はおれが物だ。
又次　そんなら代物の金を寄越すか。
善幸　サア、それは。
又次　金取らぬからは、矢ッ張りおれが代物だ。
ト長持へかゝる。
うら　買ひませう。
又次　ヤ。
うら　この長持、わたしに賣つて下さんせいなア。
又次　アノ、娘、われが金出して
うら　どうぞ賣つて下さんせ。
善幸　いつもはおれが買ふと云ふこの長持、娘のお浦が
又次　買ふと云ふなら、賣りもしようが、値段が高い、二百兩ぢや。
うら　そんなら、アノ二百兩に
又次　高いと思はゞよしにせい。
うら　買ひませうわいな。
又次　エ、、買はざアなるまい。併しその金は。
うら　明日ともいはず、いま爰で。

ト押入れより、手拭に包みし二百兩を出し
サア、受取つて下さんせ。
善幸　ヤア……、又次の娘が二百兩。
又次　よもやと思つたこの金は。
トこの時、奥より源六出て來り、金を取つて
源六　おれが金だ。
又善　ヤア、。
うら　ヤア、お前は。
源六　昨日預けた二百兩、お浦どの、大きにお世話でござりました。
ト懐へ入れる。
うら　そんならその金
源六　わしが金だに依つて、又次どの、この長持はおれが買ひませう。
又次　アノ、この長持を
源六　賣つて下さい。
うら　ア、、コレイナア、この長持は。……イエ〳〵、滅多に賣る事はならぬわいなア。
源六　ハテ、お浦どの、惡い合點だ。この長持の見世物を、おれが買うたらどなたでも、指でもさゝせる事ぢやアな

い。

又次　オヽ、賣つてやらう。

善幸　それぢやアおれが

源六　いゝ見世物、二百兩で値段が出來たら、ソレ、金よ。

又次　受取つた。

源六　サア、これからはこの中の化物を、おれが。

ト すらりと拔いて突かうとする。

善幸　ドッコイ、滅多にさうはならぬ。

ト 長持の上へ乘り

例へ賣つてもこの中には、見世物師の商賣道具の引ッ張りもの、中へ入れたは德利の三本足、蛇、蛙の見世物まで、入れてあるのがおれが商賣、一寸法師や三ッ目小僧は、穴から覗くか、目鏡で見るか、見世物屋の善幸は、男でごんす。

又次　エヽ、何を吐かす。

ト 引退ける。

源六　エヽ、面倒な。

ト 長持をグッと突く。

うら　ヤアヽヽ、長持を。……ハアヽ。

ト 泣き伏す。この時源六、懐から鏡を落す。善幸取上げ

善幸　こりや、コレ御鏡。

源六　それを。

ト 寄るを振り切つて

善幸　これで築地へ歸られる。

ト 引ッたくり、舞臺前の井戸へ飛び込む。源六續いて行かうとする。トこの時下の方より捕り手、バラ〱出て取卷き

四人　動くな。

ト 源六、思ひ入れあつて

源六　こりや、何となさりまする。

政平　奪國君の仰せを請け、大江の郡領政平が、承つて下知をなす。組子の者ども。

源六　ヤヽ、なんと。

ト 鼓の合ひ方になり、障子引拔くと、政平、衣裳上下にて、おくりを引きつけて居る。思ひがけない最前の修行者、この家の娘を擒となし、我れを取卷くその出立ち。

政平　朝敵餘類の六郎公連が弟七郎俊連、遁がれはあるまい。

源六　ムウ、覺えなき名の朝敵呼はり。斯く取巻きしは心得ぬ。
政平　覺えないとは卑怯な俊連、淡路守賴親には、鎮國君と謀叛の企て。汝味方に附かずんば、召捕つて來れとの下知サ。
又次　この家へ入込む其方こそ、公連が弟御廚七郎、政平公へ訴へて、取圍ませし上からは、本名明かし繩かゝるか。但し政平公へお味方するか。
政平　この家の主、栗の木村又次も、賴親どのへ味方の印。いま人質とせし娘、この政平が連れ行くからは違背はない。サア俊連、思案極めて返答せよ。ドヾどうた。
源六　イヤ、どこまでも覺えなき、朝敵の名を呼び立てすれば、政平どのと諸共に、賴親公の隱れ家へ。
政平　イカサマ、一應で明かさぬ本名、又次が娘と諸共に、身が陣屋へ引立て行かん。
源六　どこまでなりと勝手次第。
政平　ハテ、大丈夫なその魂ひ。味方になさば一方の旗頭。
又次　然らば大江の政平公。
捕手　お尋ねありし御廚七部、腕廻せ。
　ト源六にかゝるを突きのけ、政平、拔打ちにポンと切る。
皆々　これは。
政平　懇望なして連れ行く俊連、家來ながらも
又次　天晴れ御賢慮。
政平　者ども、警護。
三人　ハア、。
　ト乘り物を持ち出し、おくりを乘せようとする。
くり　今に始めぬ父さんの惡心、現在娘のわたしをも、人質として政平どのへ。
又次　一味の潔白、娘でも容赦は致さぬ
　ト乘り物へ入れ
拙者が義心。
政平　ハテ、小氣味のよい親仁めだわえ。
　ト唄になり、この人數向うへ入る。又次殘る。時の鐘の合ひ方になり、丹波太郎出て
太郎　いま奥で樣子を聞けば、今の奴めを無理無體、公連が弟にして、取巻かせたこなたの所存は。
又次　一癖ある奴ゆゑに、彼奴を擒に味方に附ける、手段はさま〴〵。娘といふも、ありや誠は、我が子にあらぬ取り替へ子。それはさうとお浦が隱した一品。

ト　お浦正氣を失ひ居るを引起し、活を入れる。
コリヤ、氣が附いたか。
ト　お浦、太郎、又次を見て
うら　是非に及ばぬ、お主の敵。
ト　有り合ふ山刀にて切りつける。又次留めて
又次　コリヤ、氣が違うたか。何するのぢや。
ト　捨ぜりふにてあしらひ、立廻り。長持の蓋を取る。中より勘太、肩先を突かれながら飛び出し
勘太　又次どの。
又次　すりや、この中と思ひの外。
勘太　俊連どのは疾にどこへか
うら　ヤア、、すりや、いつの間にやら。……エ、、忝ない。
ト　云ひさうにして、脇差を太郎が鼻の先へ出す。
太郎　エ、、コレ、鼻ッ面が危ない。
ト　又次、お浦を引据ゑ。
うら　コリヤ娘、わりやア繫ぎ馬の旗をどこへ隱した。俊連はどこへ逃がした。
うら　エ、。
ト　脇差を持つたまゝ此方へ來る。

太郎　コレ／＼、又次どの、お浦どのは、あの長持を突かれたので、狂人になつたのだ。
勘太　狂人だ／＼。
ト　お浦、思ひ入れ。
うら　オ、、狂人ぢや／＼／＼ぞ。
ト　これにて勘太逃げて入る。
又次　コリヤ、娘、旗はどこへ隱した。白旗は知らぬか。
ト　お浦、いよ／＼狂人の思ひ入れにて
うら　なんぢや、旗とは、知らぬかとは。……白刃ぢや白刃ぢや。
ト　脇差を持つたなり振り廻す。
又次　ア、、危ない／＼。
太郎　コレ、親仁どの、たうたう狂人になりました。
又次　白旗よりは差當る、俊連が詮議。
ト　行かうとするをお浦、留めようとする。
太郎　コレ、われは爰に。
ト　留める、又次ツイと奥へ入る。
ヤイ／＼、コリヤ、氣を鎭めんか。……エ、コレ、此奴はおれが女房にしようと思つたに。
ト　いろ／＼あつて

よい事があるわえ。狂人の水こぼさずといつて、どのやうに氣が狂つても、水に顏を映すと、直ぐ鎭まるといふ事。幸ひ爰に盥がある。

ト有り合ふ盥へ手桶の水を入れ

コレ、お浦、この水をヂッと持つて居ると、氣が鎭まる鎭まる。

ト無理に持たせ、太郎、お浦の顏を見て

オヽ、やう〳〵どうやら氣が鎭まつたやうだ。

ト笛の合ひ方になり、太郎思ひ入れあつて

さて又、これからは、又次が云ひ附けた合圖の鐵砲、ドンと打つと村中が取圍むとの事、太鼓を打てば圍みを開く。よし〳〵。

ト有り合ふ鐵砲を持つて出で、火繩へ火をうつさうとするを、お浦、盥の水を火繩へかける、太郎悔りして

こりや、狂人めが。

うら　アノ、水こぼしたのぢや。

太郎　エヽ、忌々しい。

ト　お浦に打つてかゝる。奥より以前の猿出で來て、太郎に掻き附く。

猿めが邪魔を

ト蹴りのける、猿は栗の木へ、ツカ〳〵と登り、太鼓を打つ。太郎悔りする。

ヤイ〳〵、それを打つて堪るものか。

トいろ〳〵あせる。お浦見て笑ひながら

うら　ヤア〳〵、太鼓を打て。猿々。

ト太郎、木の側へ行かうとするをお浦留める。これより猿叩く太鼓に、合ひ方を入れたる誂らへの鳴り物になり、兩人をかしき立廻りよろしく、トヾ鴨居に掛けたるお札箱を敲き落す。中より白旗出る。太郎取上げ

太郎　こりや、コレ白旗。政平公へ、さうだ。

ト引ッたくる眞中へ又次出で、旗を引ッとり、太郎をポンと切る。お浦、猿を抱き、うつかりして居る。

又次　この宮の中に匿しあつたは、疑ひもなき相馬の白旗。娘が狂氣を、旗の威德で。

トお浦の頭へ翳すと、お浦正氣になりし思ひ入れ。

うら　ヤアヽ、お前は父樣。

又次　娘、正氣になつたか。

うら　正氣になつたかとは。

又次　其方が隱せし御旗の威德。

うら　ヤアヽ、そんならいつの間に。

又次　我が手に入りしは、いま計らず、丹波太郎の爭ひに、思はず落せし箱の中、親子もこれまで包みしは、娘ながらも古主を思ふ其方が貞心。我れも今まで惡事と見せしも、政平を計らん今の拵らへ事。大事を知つたる丹波太郎、手に掛けたれば氣遣ひなし。
うち　そんならわたしが狂氣して、その白旗の威德で直つたかいなア。
　ト勘太後へ出て
勘太　さては又次は二心、この通り政平公へ。さらだ。
　ト駈け出す。舞臺前の井戸より白刃を出し、勘太をグッと突く。勘太苦しむ。バツタリ、誂らへの鳴り物になり、井戸より俊連、拔刀にて鏡を口に銜へ、ズッと出る。お浦見て
うら　ヤ、、あなたは七郎俊連さま。
俊連　兼ねて知つたるこの拔け道、刑部が本心疑はしく、心惑ひし某が、疑ひ晴れしのその白旗。
又次　すりや、某が忠義の心底、賢察あつてこれまでの
俊連　不忠は却つて忠義の刑部、今より味方を集むる我が存念。
又次　ハア、、有り難きお詞。年寄つたれど刑部太郎、これまで惡事と見せたるも、敵を欺むく我が本心。イデ、これよりは味方の手筈。
俊連　お家の重寶その白旗、又この御鏡まで手に入りしは、大望成就の吉瑞ならん。
　ト二種を又次に渡す。
又次　この二種さへ手に入らば、この刑部が心の安堵。丹波太郎、大儀であつた。
　ト太郎むつくりと起きて二種を取つて
太郎　この二品、政平どのへ。
　トついと奥へ入る。
うら　ヤア、、丹波太郎も
又次　死んだと見せたも皆嘘、口車に乘せて、一杯喰つた上からは、最早叶はぬ網代の魚だ。サア、尋常に覺悟召され。
俊連　計り事は一旦の利潤、汝を計るものは又汝に計らる。兼ねて知つたる惡事の刑部、さこそあらんと思ひしゆゑ、いま奪はれしは皆似せ物。
又次　ヤア。
うら　お前の忠心知つたゆゑ、狂氣となつて僞はりの、旗を誠の白旗と、正氣になつての拵らへ事。親を騙した不

又次　孝の罪、お主へ立てる忠義ぢやわいなア。

又次　さては、うぬらが拵らへ事。この上は俊連、うぬを。

ト俊連に切つてかゝるを、お浦、後より又次を一刀切ると、ドロ／＼になり、前舞臺石の下より繋ぎ駒の白旗、現はれ出て、栗の木へかゝる。舞臺前より水氣立ち、ドロ／＼、早めの合ひ方。

うら　血汐の穢れに立ち昇る、水氣と共に飛び去りしは

俊連　これまで行くへ知れざりし、正に相馬の繋ぎ馬。

うら　今目前にあり／＼と

俊連　不淨を禁じて、あの梢に、

うら　かゝる不思議も、御旗の威德。

俊連　實に爭はれぬ有樣ぢやなア。

トドロ／＼打ちあげ、水氣止む。お浦、白旗を俊連に渡す。

エヽ、忝ない。これも刑部の惡心悟り、裏の裏行く浦邊が働き、オヽ、出かした／＼。

ト又次、苦しみながら

又次　例へ此まゝ死するとも、七郎うぬは

ト行くを奥より、源六出て來り、又次の首を打つ。

源六　朝敵餘類の張本たる、刑部太郎は、斯くの如く、討ちたる上は御厨七郎、兄は忠義の六郎公連、性は善なり、速かに、今より源家に隨はれよ。

俊連　ホウ、元より兄は忠義に死し、名は朽ちやらぬ忠義の魂ひ、我れも源家に仕ふる心。

うら　そんならお前は、今日より源家へ。

俊連　仕へる印は白旗を、鏡もろとも賴光公へ。

ト源六へ渡す。

源六　政平が擒にせしは、常俊が娘鶴の前、彼れが企みに兼ねてより、入込み置きしを人質と、送りやつたる組子を退ぞけ、連れ歸つたる二の瀨の源六。

トおくり、奥より出て

くり　樣子を聞きし自らが身の上。小さい時より入替へ子と、知らず暮らせしこの月日、二の瀨の源六が物語り、

うら　それも矢ッ張り我が親の、企みと知らず、これまでも

くり　姉よ妹と親子の因み。

源六　忠義に返つて親を討つ、これぞ丹波の父打栗。

俊連　この白旗は賴光公へ、イザ、二の瀨どの。

源六　雄龍の印は藤原家へ、鶴の前が家土產に、送るは即ち賴光公より、仰せを受けたる、二の瀨の源六。

俊連　武に逞ましき頼光公へ、隨ふ我が名もゆかりある、浦邊の次郎季武と、今に改む忠義の一人。

うら　惡人ながらも現在の、親を殺した、この身の罪科。

ト自害する。後へ太郎出かけて

太郎　あの白旗を。

ト取りに行く。俊連引き廻す。

俊連　出來した浦邊。

うら　サア、その浦邊は忠義の果て。

源六　子に報うたる刑部が惡事。

太郎　うぬも一緒に。

ト俊連にかゝる。突き廻し、源六、太郎が首を切る。

源六　出世の門出。

うら　どうぞ未來は。

ト拜む。

俊連　女房。

ト云ひさうにして、首をポンと切る、木の頭、兩人顏見合せ、よろしく拍子

幕

第壹番目五建目　　市原野の場

役名━━女乞食、稻葉お芳。乞食頭、つゞれの次郎。大宅太郎光任。手下、胴六。飛脚、よい助。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、草壬手、東西蒲鉾乞食小屋、うしろ藪疊み。幕の內より野伏り四人、火を焚き居る。時の鐘、山颪にて幕明く。

乞一　もう日が暮れて、餘ッぽど過ぎたが、いゝ鳥がかゝりさうなものだな。

乞二　物貰ひの乞食をして、往來の鳥のかゝるのを、待つ事はないぢやアねえか。

乞三　イヤサ、この市原野に野伏りをして居て、島原や祇園近所へ、お剩りを貰ひに行くは大儀なものぢや。

乞四　そこで往來の鳥を待つのは、ひるてんではなくて、盜人と野伏りの兩天だ。

ト向うを見て

アレ見や。向うへ灯が見ゆるぞよ。

乞一　何だか知らないが、大方鳥であらう。

四人　隱れて居ろ〳〵。

ト東西へ別れて小隱れる、ト時の鐘、合ひ方になり、三度飛脚よい助、半纏、手甲、股引、大小、飛脚の形にて、狀箱を持ち、飛脚提灯を持ち出て來て

よい　丹波の田邊から、京都のあたりの館まで、日着きといふ大抵の道ではない。併し、もう市原野へ來れば今少しぢや。

ト本舞臺へ來り

オヽ、乞食どもが焚き火をした燃えさしと見える。あんまり寒い。一服のんで、あたつて行かう。

トあたりを見て筵の上へ上がり、刀を拔いてそこへ置き、煙草呑みながら火にあたつてゐる。向う、バタバタにて、胴六、四建目の形にて、蜘蛛切丸を持ち、走り出て來て、よい助に突き當り

胴六　アイタヽヽヽヽ。免さつしやい〳〵〳〵。

よい　何奴ぢや〳〵、何をするのぢや。

胴六　イヤ〳〵、わしはちつと追手のかゝるを、やう〳〵と遁げて來た者。それで突き當つたのぢや、料簡さつしやい〳〵。

よい　さういふ事なら料簡もしようが、一人では薄氣味悪いこの丹波口、それで恟りした。

胴六　もう追手もかゝるまい。ドレ〳〵、わしも一服のみながら、あたりませう。

トよい助の側へ行き、蜘蛛切丸をそこへ置いて火にあたる。此うち、後へ四人出て來て

四人　その火にあたるなら、酒手を置いて行きやれな。

よい　ヤアヽヽ。

ト始終時の鐘の合ひ方。

乞一　おいらは爰にゐる乞食だが、奈良の般若坂の、かつたい石と同じ事だ。

乞二　この火にあたるなら、おいらが仲間だ。

乞三　それだに依つて、仲間入りの酒手をば

乞四　眞裸になつて

四人　置いて行けといふのだ。

よい　そんなら、わいらは盜人ぢやな。

四人　盜人ぢやアない、お乞食樣だ。

胴六　でも、眞裸になれといふからは

よい　追剝ぎぢやな。

トきつとなる。この時胴六は、飛脚の刀。飛脚は胴六が持つて來た蜘蛛切丸を、取り違へ取つて立ち上がり

兩人　こいつは只は置かれないわい。
乞一　只は置かれぬと云つてどうする。オヽ、切るか。切られべい〳〵。
ト飛脚の側へ行く。
乞二　オヽ、おいらも切られべい。
ト同じく摺り寄る。
よい　身共を何と思ふ。
乞三　知れた事、飛脚だから金があらうと思つて
四人　それで酒手を貰はうと云ふのだ。
胴六　そんならその飛脚どのばかりで、おれは構ひはないか。
乞四　われも小附けだ、をかしな野郎、なんぞ持つて居るであらう。
乞一　いま開きやア、物した物があると云つたぞえ。
胴六　ヤア、。
ト悧りして劍を隱す。
よい　身は賴光公の足輕分の者で、丹後までお飛脚に參つたものぢや。噓でないといふ證據は、首に掛けてゐるこの狀箱の中、お墨附があるぞや。
四人　お墨附とはなんの事だ。

よい　源家の大將賴光公、御病氣なれど、謀叛の者を、討手の役を蒙むり給ひ、それで諸國の源家へ下知觸れのお墨附。鎭守府の印鑑の据つた書附け。まだそればかりでない、臣下は元より、源家へ因みの者へ渡されて、顏見知らぬとても、幕下の證據になる墨附ぢや。それより外に金はない。道中の遣ひ殘りの、端下錢より外はない。
四人　そんなら金は持たないな。
乞一　さうして二才野郎、わりやアなんだ。
胴六　おれは何を隱さう、丹波で物した物があつて、それで逃げて來たが、追手が來るから爰へ隱れて、寒いから焚き火にあたつて居たが、なんだ。
乞二　なんだもすさまじい。その物した物を此方へ寄越せ。
胴六　イヽヤ、知らない。
ト袖にて隱す。
乞三　なんだか隱すが、寄越しやアがれ。
胴六　知らないわえ。
ト逃げようとする。
乞四　飛脚、われを引ツ剝いで。
トよい助を捕へる立廻り。乞食の一と二は胴六を叩き廻す。禪のツトメになり、よい助は刀を拔いて切りま

くり、乞食の三四を下座へ追ひ駈けて入る。

乞一　うぬ、小泥坊と見たからは

乞二　只は遣らない、持つて居る刀を寄越せ。

胴六　イヽヤ、知らない。

ト三人立廻りにて、乞食の一、胴六の持つてゐる刀を引ツたくり下座へ入る。後より追ひ駈けて入る。引き違へて乞食の三と四を、よい助追ひ駈け出て來て

よい　うぬら、一々生けて置かうか。

兩人　なにを。

ト縫ぐるみにて打つてかゝる、ちよつと鳴り物になり、三人タテあつて、よい助、兩人を下座へ追ひ込む。思ひ入れあつて

よい　この市原野での盗人、不屆きな奴等、追ツつけ召捕らして一々拷問。併し、身は大切なるお墨附があれば、道を替へて

ト思ひ入れあつて、刀を納めようとして驚ろき

こりやコレ、身共が刀が違つた。なんぼ足輕でも、魂ひが取替つてはひよんなもの。

ト刀を納めて

併し、鞘も立派なれば、悪いのよりは増しか。アヽ、儘よ。

ト時の鐘になり、よい助、東の花道へ入る。

ト乞食四人、出て來り

四人　お頭、今のを聞かしやつたか。

ト時の鐘にて、上の小屋より次郎、つゞれ、野伏りの形にて出て

次郎　わいらもこれから頼光が館へ、兼ねて入込む用意の手蔓。……早く

四人　心得ました。

ト時の鐘にて向うへ入る。下の小屋よりお芳、女乞食、つゞれ、煙草をのみながら出て

よし　つゞれの次郎さん。

次郎　お芳ぽうか。

よし　今のは何ぞになりさうな事。

次郎　兼ねて望みの今の墨附。

よし　そんならわつちが追ひ駈けて。

ト行かうとする。

次郎　イヽヤ、大事ない。頼光の館へ忍んで墨附を

よし　盗むは手間隙いらねえが

次郎　忍び入るにはその形ぢやア

よし　ハテ、知れた事、何になりと。

次郎　そんならこれから

よし　ソレ、行きがけに駄賃場の

次郎　三條あたりで一仕事。

よし　なりたけ働らき

次郎　羂附を

よし　首尾よく盗んで

ト思ひ入れ。三味線入りの禪のツトメ。雨車になりて、お芳、風呂敷を肩にあふり、花道へかゝる。次郎見送る。向うより大宅太郎、ぶッ裂き羽織、野袴、下駄がけにて、傘をさし出て來て、花道にて行き合ひ摺れ違ふ。互ひに思ひ入れあつて、大宅太郎「さてこそ」といふ思ひ入れにて振り返る。お芳、風呂敷をかぶり、向うへ入る。太郎、本舞臺へ來り次郎と渡り合ひ、次郎、仕込みにて切りかゝらうとする。太郎、傘にて受け留め立廻りよろしく

幕

第壹番目六詰　攝津介賴光館の場　隅田川の場

役名──上使、三田源太廣國實ハ將軍太郎良門。煙草賣り、お芳。上使、三田源太廣國實ハ平井保輔。武作次郎信兼。坂戸九郎棄成。坂東太郎時義。奧女中、八十瀨。同、お國。同、東路。同、瀧野。權之頭與世。奴花平。同、咲平。家老、大宅太郎光任。鈴國君實ハ秦次郎正文。鯰坊主、猪熊入道雷雲。賴光奧方、園生の前實ハ能勢判官娘、三崎。賴光弟、美女丸實ハ保昌娘、小式部。田舍娘お岩實ハ將門娘、七綾姫。茨木屋鬼七。張臂道庵。鬼七女房、お綱。飛脚、よい助。船頭、八。海老雜魚の十。

本舞臺、三間の間、高足の二重、舞臺下の方、釘隱しとも鍍金の金物、見附け金襖、欄間とも殘らず桝の模樣。一面に簾上げ下ろし。東西紅白の梅の大樹。吊り枝、手洗鉢、すべて鎭守府將軍の館、住吉の神

事の體。幕の内より上の方二重屋體に、尊國君、褐式壹折の衣裳にて、床几にかゝり、雷雲、銘坊主にて、錦の衣裳を着たる抱子を懐へ入れ、片手に錫の瓶子を三方に載せて持つて居る。侍女三人、斉流しにて、三方に大杯を載せて、長柄の銚子を持ち、侍ひ四人、上下衣裳にて、三方に三つ組の桝を持つて居る。皆々立ちかゝり居る見得。下がり葉にて幕明く。

侍一　承はれば、今日は吉日に依つて、攝津介頼光公には、鎭守府に御任官あつて、津の國の大社たる

侍二　住吉大明神は氏神の事なれば、九月十三日は例年住吉寳の市、即ち桝の神事にて、多くの桝を商ふ。

侍三　この程は、我が君の、御所勞重らせ給ふに依つて、今日御祈念の爲、即ち桝の神事。

侍四　さるに依つて、お館の襖張り附けは、三桝の模樣、その御祝儀に依つて

四人　斯くの如く、銘々三桝を、獻上仕つてござりまする。

尊國　如何にも聞き及んだが、先達てより頼光が病氣とあれば

雷雲　それに、珍らしき住吉桝の神事あれば、その式を御上覽とあつて、勿體なくもこれまで御入り。猶も我が君御持參の神酒を供へ、頼光どのへ進ぜられんとの御諚。

尊國　分けて、今日閑生の前が招待は、定めて一子の事ならん。

雷雲　入道がぼつぼに入れて參つたこの子は、當京極通り藪の下を、君には夜分御通行の節、御不便とあつて拾はれ給ひ、御養育なされしが、聞けば頼光が一子にて、捨てしとの事。

女一　それをこなたへ、お貰ひ返しなされんと、北の方の思し召し

女二　それゆゑ今日、桝の神事を幸ひに、御招待申しましたのでござります。何は兎もあれ、我が君樣には

兩人　イザ、九獻召上がられませう。

尊國　イヽヤ、不馳走のその酒、呑みたくない。閭を呼び寄せ、閑生にも光任にも、出迎ひもなき無禮の者ども。ドレ、立歸らうか。

皆々　アイヤ、それでは。

ト向う揚げ幕にて

閑生　先づ〳〵お待ち下さりませう。

ト三味線入りの亂れになり、向うより園生の前、裲襠衣裳にて菊の花を持ち、後より咲平、花平、縮子奴にて、竹筒へ菊の花の生けたるを持ち出て來て、直ぐに舞臺へ來り

これは〳〵、尊國さまには、これにお出で遊ばされましたか。

尊國　園を招待いたして置いて、なぜ出迎ひ致さぬのぢや。

園生　成る程、恐れ入りましたる御諚ではござりますれど、菊亭よりのお入りと存じ、お出迎ひ致して、それゆゑ失禮、お赦し下されませう。

花平　わけて北の御方には、尊國さまの御覽に入れんと、菊亭のお庭にて、お手折りなされた菊を、これなる花筒へ。

咲平　菊とはいへど花はさま〳〵、黃金、平白、今出川、亂菊、猩々、風車、有栖川に禿菊。

兩人　イザ、御覽遊ばされませう。

ト尊國の前へ出す。

尊國　成る程、菊見もよからうが、枡の神事の見ものといひ、殊に源家の重寶、蜘蛛切、鬼切、二振りのうち、蜘蛛を退治せし蜘蛛切丸。さればこそ、その毒蟲殘つて、劍を所持なす者に恨みあつて、惱ますと聞き及ぶ。もしや、賴光その類にて、物の怪の業ならんか。餘り不思議の蜘蛛切丸、一見したい折柄に、招待されて、參つたわやい。

園生　その蜘蛛切丸の事は

ト思ひ入れあつて

成る程、御上覽に入れますでござりませう。

雷雲　して、君のお拾ひなされしこの嬰兒は。

園生　賴光と自らの中に、出生なしたる男子なれど、親に祟る人相あれば、一旦は捨て兒となし、それを拾ひ取れば、災ひを除くとあるゆゑ、京極通り藪の下へ捨てしを、取られしとあつて、それより館の騷動。

女一　その後お行くへを尋ぬれど知れず。承はれば尊國さまには、お拾ひあつてお寵愛あると承はり

女二　それゆゑお貰ひ返し申さん爲

侍一　枡の神事を幸ひに、御饗應は種々さま〳〵。

侍二　お能囃子の用意もござれば

侍三　御立腹を止められ

侍四　暫らくお待ち下さりませう。

ト尊國、思ひ入れあつて

尊國　すりや、差當る馳走には、この菊の花。
　ト菊を取上げ、思ひ入れ。
花咲　それが主人の只今の饗應。
尊國　一天四海の政事、斯う握つたる尊國が
四人　御謀叛の
園生　エ。
　ト思ひ入れ。
雷雲　其方に大事の嬰兒なれば、尊國さまにも御大事。
尊國　一子を囮に尊國が、兼ねての望みの麿が味方、頼光
　承知いたす心か。
園生　サ、それは。
雷雲　異議に及ばゞこの嬰兒を、おッ殺さうか。
園生　サ、それは
皆々　サア〳〵
尊國　どうだ。
　ト園生の前、思ひ入れあつて
園生　委細畏まりましてはござりますれど、夫頼光は病氣、
　執權大宅の太郎代參の留守なれば、歸りましたるその上
　にて。
雷雲　すりや、執權大宅の太郎が

尊國　歸り次第に返言を。
花平　先づそれまでは尊國さまの、御座改めて御饗應。
園生　御對顏所の上座にて
咲平　蜘蛛切丸を御上覽。
雷雲　いづれも案内。
皆々　イザ、尊國さまには
尊國　皆參れ、やい。
　ト管絃になり、尊國先に敵役四人、奧へ入る。
花咲　北の御方には、さぞお心遣ひでござりませう。
女一　斯樣な御事多い時には、お氣をお晴らしなさるがよ
　ろしうござりまする。
女二　煙草は、辛苦を忘れ草と申しますれば、先づ〳〵お
　煙草でも
兩人　召上がられませう。
　ト煙草盆を持つて來て差出す。てんつゝになり、向う
　よりお芳、やつし着流し、前垂れがけ、下駄を穿き、
　提げ箱の煙草賣りにて、これを足輕、麻の袴、股立ち
　にて、竹の杖を持ち、出て來て
足輕　下がれ〳〵、下がらぬか。
よし　お煙草はようござりまするか。

足輕　ヤイ〳〵、爰を何所だと思ふ。頼光公のお館だワ。
よし　その頼光さまのお館だから、商ひに來たが、こなさん、剛氣にやかましく云ひなさるの。
足輕　おれはお足輕で、お飛脚にも歩くが、お庭廻りを見廻りの者ぢやが、見馴れぬ者ぢやに依つて、下がれといふのぢや。
よし　エヽ、やかましいよ。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。侍女三人立ちかゝり
女一　コレ〳〵、お足輕衆、何事でござりまする。
足輕　慮外な女ゆゑ、お庭廻りの身が咎めてござる。
女二　お奧の事は私しどもにお任せあつて、お出でなされ。
足輕　左樣ならば、お次へ參つて
よし　お茶でもあがれ。
　ト笑ふ。合ひ方になり、足輕下手へ入る。
花平　見れば女子の商人さうな。
よし　アイ、わつちやア提げ箱の煙草屋嬶アサ。聞いておくれ。今の世の中ぢやア宿六より、わつちの商ひがまし。それだから長屋の評判記がようござりやす。その代り大抵ぢやアないのサ。義太夫本にもある通り、油引かずの松葉煙草は昔の事、今ぢや誰れも口が奢つて、國府酒むし丁子入り、龍王沼田根のかはら、きつい嬶アと云はれちやア、朝むく起きが日本橋、さかな川岸から新場をかけて、四日市、それから兩國葺屋町、樂屋表を見廻りて、てん〳〵舞に留場の衆がなぶるのを、よしてもくんな小夜嵐と、きめれば彼奴は中の字と、値は極まつても、わつちが煙草、三十二だがのむがいゝ。
　ト煙草を出していぢり〳〵
どうでおしやべりで新田や、菊煙草のやうに、和らかにやアいきやせん。五匁でも、十匁でも、どうぞ買つておくんなんし。大勢ぢやアござりやせん、たつた一人。……おきやアがれ、口がはしやいでお里が出て、アヽ咽喉が渇く。なんぞ一杯呑ませなさんせ。……オヽ、お茶もお湯もござりませぬか。
　トづッと園生の前の側へ行き、煙管を取つて煙草をのむ。
女兩　これはしたり、女中さん、あんまりお側へ。
よし　どうでわつちやア無闇ものゝ場知らずサ。
　ト簪で頭を掻いて居る。
園生　イヤ、苦しうない。たま〳〵商ひに來た女子、殊に氣さくらしい樣子、また慰みにもなりさうなものぢやわ

いの。

よし　また奥様は鷹揚なものだ。わつちらだといつて、まんざら腹からの乞食

　ト云はうとして、思ひ入れあつて

オツと、云はぬ事〳〵。

花平　ヤア、云はせて置けば、所をも辨まへぬ不屆きな女。

咲平　鎭守府のお館といひ、北の御方へ慮外。

兩人　キリ〳〵立たう。

　トお芳を引立てようとする。

よし　なんだ、お前方は。二合半にも足らない形をして、わつちを引き立てるのかえ。こいつはおつかない。シタガ、栴檀は二葉とやら。ア丶、頼もしい。

園生　腰元どもは知りやるまいが、「骸骨の上を粧ふ花見哉」とふ發句もあり、また風流は格別なものぢやなア。

よし　ソレ見なせえ。骸骨の上を粧ふとは、どんなに髮形を造つても、裸にすれば上つ方でも、こちとらでも同じといふ心。その筈でもあらうかえ。主さんでも、わつちらでも、三度喰ふ飯は三度。違つた事は身形ばかり。茲が今云ふ上を粧ふといふところだ。モシ、上へ着て居なさるは、なんといふ着物でござりやすえ。

　ト云ひ〳〵園生の前の側へ行き、裲襠をいぢつて見る。

女一　そりや、裲襠と申すもの。

よし　なんだ、裲襠え。ぶツかけなら蕎麥だけれど、こいつは喰はれもせず。

園生　どうやら其方は、裲襠が欲しさうな。

よし　イヽヤ、欲しくはないが、着て見てえね。

園生　大事ない、その裲襠を取らせい〳〵。

女二　畏まりました。

　ト側にある裲襠を取つてやる。

よし　こいつは有り難いね。北の方よりの下され物、有り難うお受け申しや。

　ト裲襠を取つて

ほんに、口を利いては損はいかねえ。

　ト着て、いろ〳〵我が姿を見る。

女一　これはしたり、如何にお許しなさればとて、北の方の召し物を、下樣の身で。

よし　なんだえ。なんぞといふと下樣だの、下村だのと、ほんに肌合の惡い手合ひだ。

園生　そりや、ハヤ、どうで、皆の者とは、墨附の惡い筈。

よし　エヽ。墨附の惡いといへば、なんぞ墨附といふ物が、お屋敷にありやすかえ。
園生　何によらす、我が君賴光公の下知書きに、鎭守府の印鑑の据つた大切なる物を、お墨附と云ふわいの。
よし　すりや、その墨附を。
　トきつと思ひ入れ。
園生　ハテ、變つた事に、念を入れる女ぢやなう。
よし　エ。
　トぎつくり氣を替へ
なにサ、墨附ぢやアござりやせぬ、煙草の火附きのいゝ惡い事サ。どうぞ買つておくんなんし。
花平　刻み煙草の商ひなら、大部屋へ連れて行かうか。
園生　その裲襠は其方に取らすほどに
咲平　おいらと一緒に大部屋へ。
よし　そんなら一緒に。
　ト裲襠を肩へかけ、提げ箱を持ち、立ち上がり
斯うした所は、猪牙から上がる船頭のやうだ。ホヽヽヽホヽ。とはいへ墨附。
園生　ヤ。
　トきつと思ひ入れ。

よし　お煙草はようございますか。
　ト唄になり、花平、咲平先にお芳下座へ入る。ト向うにて
呼び　御上使。
園生　ハテ、合點のゆかぬ不時の御上使。いづ方よりであらうぞいなア。
　ト太鼓謠になり、向うより平井の保輔、燕手、衣裳、長上下にて、小さ刀、上下の侍ひ二人刀を持ち、後より大宅の太郎光任、上下衣裳にて、三方にお札を載せ、持ち出て來て、花道にとまる。園生の前、思ひ入れあつて出迎へ
思ひがけない御上使ゆゑ、お出迎ひの用意もなく、折節居り合せし自らは、賴光が妻、園生の前。……見れば大宅の太郎には、御上使のお供いたしたの。
光任　イヤ、拙者ことは住吉桝の神事につきまして、仰せ附けられた五條の和歌三神への御代參、途中にてお目にかゝりしゆゑ、御上使の御案内。
保輔　某は、源家の臣下たる、渡邊の源次綱とは從弟同士、武藏の國三田の鄕にて、人となつたる、三田の源太廣綱と申す者。この度始めて多田の御所へ罷り登りしところ、

滿仲公より上使を蒙むり、只今伺候仕つてござります。

園生　すりや、聞き及ぶ三田の源太にてありしよな。臣下なれども御父、滿仲公の御上使とあれば

光任　先づ〳〵あれへ。

女兩　お通りあられませう。

ト太鼓謠になり、保輔、刀を取つて本舞臺の上へ廻る。

保輔　上使。

ト管絃になり

攝津介賴光には、禁廷守護の役目にありながら、病氣と披露し引込み居るは、將門純友の殘黨、謀叛の企てある由、賴光この討手を蒙むる上には、無くて叶はぬ名劒は、源家の重寶蜘蛛切鬼切、二振りの劒紛失なせしを、押籠めあるは、その難を遠ざけん爲の虛病ならんと、禁廷より御父滿仲公へのお疑ひ。直さま二振り受取り歸れとある上使の趣き、斯くの通りでござりまする。

光任　ナニ、二振りの御劒、受取り歸れとある御上使とな。

ト顏見合せ思ひ入れ。

園生　夫賴光こと、物の怪に犯され、いつぞやより所勞。この程は大切に依つて、枡の神事を勤むる程の事。

女一　我が君樣には、なか〳〵虛病などとは、世間の取沙汰。

光任　蜘蛛切、鬼切、紛失と申すも雜說。寶藏に祕めあれば、後刻差上げまするでござりませう。

保輔　それで廣綱、安堵いたしてござる。

ト園生保輔に目を附け

園生　して、廣綱には、武藏にて育ちしとあるが、もしや尋ぬる。

保輔　ハテ、異な事の御不審。

園生　ムウ、疑ひもなき

ト思ひ入れあつて。

これはしたり、御上使へ御饗應もなく、有り合ひました長柄の九獻を。

女二　差上げまするでござりませう。

ト長柄、杯を持ち行き

お肴もない、この御酒宴。

ト園生の前思ひ入れあつて

園生　イヤ、肴には、自らが古歌一首。

保輔　ヤ、なんと。

ト合ひ方になり、園生料紙硯を出し、短册を持ち

園生「岩の上に旅寢をすればいと寒し、苔の衣をわれにか

さなん。」
女一　北の方には日頃にも、お似合ひなされぬ、物堅いお心にて
女二　戀歌めいたる三十一文字。
園生　小野小町が石の上にて、僧正遍照に讀みやりし歌。
ト保輔の前へ短册を出す。保輔取上げ、思ひ入れあつて
保輔「岩の上に旅寢をすればいと寒し、苔の衣をわれにかさなん。」……すりや、これを肴に。
園生　御上使、これに。
ト唄になり、園生の前、思ひ入れあつて奥へ入る。保輔見送り
保輔　日頃物堅い北の方の今の様子、御酒の肴に古歌一首。
光任　拙者などは、軍學兵學は好みの道なれど、歌學はとんと不案内。
保輔　苔の衣をわれにかさなん。
ト思案する。
光任　併しながら、三日交歌せざれば、その智計りがたしと申す事。
保輔　その心をば
光任　發句に申せば「世の中を三日見ぬ間に櫻かな。」
保輔　ハテ、滑稽でござるな。
光任　苔の衣をわれにかさなん。
保輔　これを肴に
ト杯を取上げる。女二、酌をする。
ア、憎からぬ古歌ぢやなア。
ト管絃になり、保輔酒を呑む。光任、煙草をのんで居る。下座よりお芳出て來て
よし　ハテ、晝中でも、おつりきな仕事の出來るものだ。
ト云ひながら出るを、光任見て
光任　ヤイ〳〵。女、其方は。
女一　ありや、最前見えし女商人。
よし　提げ箱賣りの煙草屋嬶アサ。
ト保輔を見て
オヤ、次郎さん、爰へ來て居るの。
ト保輔、恟りして
保輔　わりやアお芳。
ト云はうとして
ヤイ〳〵、慮外な。上使に向つて馴れ〳〵しき。
ト云ふなといふこなし。

よし　馴れ〳〵しいもフサ〳〵しい。わつちやアお前を尋ねて居た。

光任　すりや、御上使の廣綱どのには。

女雨　賤しい女中にお近附きかえ。

保輔　イヽヤ、知らぬ。

よし　ナニ知らねえ。アノ、これでもかえ。

ト懐中より墨附を出してソツと見せる。

保輔　ヤア、そんなら首尾よく。

よし　ソレ、約束の墨附。

ト云はうとして、

墨黒にべつたり書いたこの文。

ト保輔きつとなり

保輔　まだ〳〵慮外な。

ト悪いと云ふこなし。

よし　慮外ながら、わつちでなけりやアこんな仕事は。

保輔　ヤア、その雑言を。

トつか〳〵とお芳の側へ行き、引ツ捕へ、墨附を取らうとする。

よし　エヽ、おきやアがんなせえ。

ト墨附を持つて逃げようとする。保輔引ツ捕へ、立廻る。風の音、トヒヨになつて、日覆より雁金群り、一羽下りて来て墨附を銜へ、直ぐに舞ひ上がる。両人驚ろく。光任これにキツと目を附け、思ひ入れ。

保輔　南無三。

よし　アノ、雁金に。オヽヽヽ。

ト保輔こなしあつて

保輔　無礼者めが。

ト引ツ捕へ、立廻りにお芳を切つて捨てる。

光任　武士へ慮外は切り捨てが大法。

ト向う揚げ幕にて

呼び　上使。

保輔　ハテ、心得ぬ。又候や御上使とは。

光任　某これに罷りあるに。

トお芳起き上がりて、又かゝるを、保輔、切り倒し、刀を納め、墨附を銜へし雁金を見て、ツカ〳〵と花道へ行く。

御上使のお出迎ひ。

ト皆々出迎ふ。

皆々　ハア、。

呼び　上使。

ト大皷謠になり、向うより將軍太郎良門、二役およしの早替り、燕手衣裳、保輔と同じ形、長上下にて出て來て、この雁を見て手早く手裏劍を打つ。雁金落ちる。保輔見て「ソレ」と中程へ來る。良門ツカ〳〵と行き、雁を取上げ、墨附を取つて懷中する。兩人顏見合せ、ギックリ思ひ入れ。此うち良門の後より、信兼、兼成、時義、花色に三桝繫ぎの長素袍、懸烏帽子、銘々扇を持ち、地謠の拵らへにて出る。奧より雷雲、以前の瓶子を持ち、後より八十瀨、お國、東路、瀧野、花色に三桝繫ぎの素袍の上ばかり、小結烏帽子にて、銘々笛、太皷、大皷、小皷を持ち、皆々よろしく出で迎ふ。

光任　先刻お入りありしは、多田の御所より上使として、この度始めての上京。

保輔　斯くいふ三田の源太廣綱でござる。

光任　して、只今お入りあられしは

皆々　いづれよりの御上使樣でござりまする。

良門　某ことは、多田の御所より、御父滿仲公の上使。

女雨　最前お入りの御上使樣も、多田の御所より。

光任　して、御家名は。

良門　當御所にてはお見知りなきは御尤も。武藏の國、三田の郷にて、人となつたる、三田の源太廣綱でござりまする。

保輔　ヤア。

ト　ぎよつとする。

光任　先に見えられました御上使も、今また御入來の御上使も、三田の源太廣綱どのとは、……ハテナア。

ト　心得ぬこなし。

八十　今日は、住吉寶の桝の、神事の御執行にて

くに　お奧のものを始めとして

東路　御殿殘らず打寄りて

瀧野　不調法なる私しどもが

信兼　四座の猿樂、能囃子。

兼成　御番組はそれ〴〵に

時義　皆住吉の謠ひもの。

八十　幸ひの折なれば、御上使樣への御饗應。笛の役目はこの八十瀨。

くに　お國は豐かに小皷の役。

東路　この東路は大皷。

瀧野　續く瀧野は太皷の役。

信兼　拙者どもは地謠ひに、武作次郎信兼。

兼成　坂戸の九郎兼成。

時義　坂東太郎時義。

皆々　囃子の役目、蒙むりましてござりまする。

雷玄　鷹國君より神事の御酒を、頼光どのへ進ぜられて、斯くの通り。

光任　何は兎もあれ、御上使の御兩所、先づ〳〵これへ。

保良　然らば。

ト管絃になり、皆々本舞臺へ通り、保輔良門は二重舞臺へズッと上の方へ通る。眞中に光任、囃子方は皆々二重舞臺に居ならぶ。

光任　して、御上使の趣きはな。

良門　上使の趣き、餘の儀にあらず。頼光には先達てより、病氣と披露し、引籠り居るは、源家の重寶蜘蛛切鬼切紛失に依つての事。承平の將門、天慶の純友、その殘黨の討手を蒙むり、なくて叶はぬ蜘蛛切鬼切。分けて一腰の名劍は、先年頼光公葛城山の蜘蛛を切つて、髭切を蜘蛛切と改む。然るにその蜘蛛の怨念殘りて、所持なす者を惱ますと聞く。右紛失の難を遠ざけん爲の虚病なりと、禁廷より御父滿仲公へのお疑ひ。早くも立越え、鬼切蜘蛛切受取り歸れよとの上使。

保輔　すりや、某が演舌の通り。

光任　先刻北の方のお請けありし、初めの源太廣綱どの丶、上使の趣き、同じ事。

良門　殊に武藏の同産にて

保輔　しかも同名。

光任　同所よりの御上使。何は兎もあれ、御饗應の能囃子。

皆々　ハア、。

ト薄ドロ〳〵にて、良門のかなたへ下り蜘蛛する。キッと見て

良門　又しても〳〵、刀に迷ふ蜘蛛の怨念。

保輔　さては。

ト思ひ入れ、チョンと保輔の前へ簾下りる。

良門　エ、。

ト扇にて拂ふ。

ト雷雲ムッとして

雷雲　ヤア、光任、猶豫いたせばよい事にして、鷹國さまの御酒を、頼光どのへ取次ぎせぬか。さなきに於ては、入道が直々に。

ト瓶子を持ち行かうとする。光任留めて

光任　心得ぬその御酒を、頼光公へ達て勸める入道が振舞

ひ。

雷雲　すりや、毒酒との疑ひか。是非ともこれを

　ト又行かうとする。良門、瓶子を引ッたくり、雷雲かゝるを、良門左に瓶子を持ち、右の手にて雷雲をポンと當てる。光任思ひ入れ。

光任　正に瓶子のその御酒は。

　ト行かうとする。

良門　鎭國君よりの下され物、疑ふ事はあるまいがな。

　ト右の手にて瓶子の口を押へる。この時中指、瓶子の口へ入る。驚ろきて

　ヤ、思はず瓶子の口、押ゆるに、我が指が口になつて拔けぬは、これはしたり、粗相な事を。

　ト瓶子へ入れし指の拔けぬ思ひ入れ。

皆々　ほんにマア、お氣の毒な。

　ト始終ドロ〳〵にて蜘蛛纏ふゆゑ、良門、瓶子にて蜘蛛を蔽く。良門ウンと悶絶する。皆々驚ろき

光任　ソレ、御介抱。

　ト侍女二人、良門の側へ行き、

兩人　申し御上使樣。

　ト介抱する。良門、兩人を拂ひ、スックと立つて、あたりを見て狂亂のこなしにて

良門　ハ、、、、、矢ッ張り瓶子の口が拔けぬワ。コレ、女子ども。

　ト鼓唄になり、舞臺の簾靜かに下りて來る。これより良門、狂亂の所作のかゝりになる。

〽亂れ心や解けやらぬ、千筋の絲のあやめも知らず〽闇路に結ぶさゝ蟹の、緣に引かるゝ小車の、廻る因果は物思ひ、よしやうつゝに夢の花、ちりてもわかぬ仇心、浮氣思へば笹船に、乘せてつれゆこもの、神崎へ〽やんれ白波うつや鼓の川柳、水に揉まれて、揉まれて水に、しめつゆるめつ音こそ入りけれ、しめて寢た夜の二人の中の子寶、爰に此花冬ごもり、春待つ花の懷に、乳房尋ねん月の影、わやくな空や時雨どき〽寺々の鐘もみだるゝに霜夜の嵐、鳥と鐘とに思ひもあろが、おゝ時知らぬ月夜鳥は、いつも鳴くしよんがえ、暫し留りてくれよかし、面白や〽しども中戶に伏しまろぶ、たゞ狂亂の有樣は、生體なくこそ見えにけれ。

　トよろしく振りあつて納まる。又、ドロ〳〵にて良門悶絶する。侍女二人同じく介抱する。

兩人　モシ、お上使樣、お心が附きましたか。

良門　ト良門、心附くこなし。又もや蜘蛛の念慮によつて、ハテ、殘念な。……矢ツ張り瓶子が離れぬか。

女二　御上使には御逆上と相見えまする。

良門　持病の眩暈、武士にあるまじき、面目次第もござらぬ。

ト又ドロ／＼にて蜘蛛まとひ居る。雷雲思ひ入れあつて

雷雲　その瓶子をば

ト良門にかゝる立廻りにて、瓶子開けて毒酒こぼれしこなしにて蜘蛛にかゝる。蜘蛛死するを見て、雷雲思ひ入れ。

光任　瓶子の酒のこぼるゝと、忽ち蜘蛛の死んだるは。正に毒酒。

ト良門、雷雲を取つて投げる。

雷雲　こりや、堪らぬ。

ト下座へ逃げて入る、合ひ方になり、保輔の前の簾一面に巻きあがる。良門、二重舞臺へ上がる。下座より美女丸、若衆方、長上下、振り袖衣裳にて、茶臺に茶碗を載せ、持つて良門の側へ行く。

美女　御上使樣には、お茶一つ召上がられませう。

ト良門、美女丸をキッと見て

良門　某は生れ附いたる女嫌ひ。その廣綱に派手やかなる、美少年のお茶の給仕。こりや、忝ないわい。

ト茶碗を取る。

美女　何をお弄りなされますやら。

良門　して、其方のお名は。

美女　頼光が弟、美女丸と申す者、お見知り置かれて下さりませう。

良門　これはしたり、この度始めてなれば、お顔見知らぬゆゑ、粗相申し上げてござる。眞平御免下さりませう。

トいろ／＼詫びする。此うち保輔おし默り居て

保輔　虎の斑は目に見ゆれど、人の斑は目に見えぬと、王位を出でゝ遠からぬ、源家の館へ似せ上使、御罰によつて、あの態。

良門　上使の眞僞を改むれば、先の上使のお詞を捕へて一詮議。

保輔　何がなんと。

ト左右方立ちかゝる。光任留めて

光任　その眞僞わからぬ御上使へ、お口取りの珍物、申し

付け物、これへ。
侍女　畏まつてござります。
　ト管絃になり、侍女皆々、結構なる高坏へ黄金を凄まじく積み上げ、持つて出て、保輔、良門の前へ直し
粗末なるお口取、御賞翫下さりませう。
　ト後へ下がる。
兩人　これは。
　ト思ひ入れ。
光任　武藏の方より上京の方々へは。
兩人　アノ、これが珍物。
光任　都に近き井手の玉川、古歌もあつて優風流、心は變らぬ都と鄙。併し井出の玉川、時ならぬ山吹の花、御覽に入れん爲。
良門　すりや、山吹と名を替へて、こがね花咲く黄金の
保輔　賄賂を以て上使の手前、償ふのか。
光任　イヤ、さにあらず。二人の上使、眞僞分らぬこの場の樣子。
兩人　何がなんと。
　ト光任、扇を取つて開き見て
コレ、御覽下されい。

　ト合ひ方になる。
保輔　その扇面は。
良門　立波の模樣。
光任　風吹けば沖津白浪たつた山、唐土には綠の林。
保輔　すりや、我れ／＼を、盜人、騙りと疑ふのか。
光任　誠源家の臣下なら、證據の割符が
良門　鎭守府の印鑑据りしお墨附。
　ト以前の墨附を出す。保輔思ひ入れ。光任取つて
光保　すりや、お墨附、これで疑ひ
良門　晴れたであらう。
光任　御覽に入れし扇の畫面はこの白波、それを囮に見出さん爲。夜前市原野を夜廻りの折柄、怪しき非人、彼奴曲者と知つたるゆゑ、詮議せんと思ひの外、傘引きさき隠れしは、慥かに上使の其お方。さては多くの金銀を、衒り取らん爲なるか。
兩人　エイ。
　ト金を礫に打つ。光任叩き落して
光任　こりや、黄金を礫に打つたは。
保輔　賄賂を取らねば盜賊の惡名もなし。

良門　元より廣綱僞はりならねば、志しは返し遣はす。
光任　すりや、黃金を
保輔　取らねば元の
良門　上使と
保輔　上使。
光任　然らば名劍、後程までに。
兩人　受取り申さう。
皆々　すりや、御上使樣には
兩人　これが勝手。
光任　然らば後刻、お目にかゝりませう。
ト唄になり、光任先に皆々奧へ入る。良門、保輔ばかり殘る。良門煙草盆を持ち、前へ出て
良門　御上使、ちよつと逢ひ申さう。
保輔　アノ、某に。
ト煙草盆を持ち前へ出る。合ひ方になり
出たが、なんだ。
良門　モシ、化けの皮が顯はれたらば、この廣綱が見遁がしてやる程に、早く歸れ〳〵。
保輔　今年始めて座頭だと思つて、大分大きな事を云ふな。歸つてよければ、おれより先へ、われ歸れ。

良門　正眞の廣綱が歸るにも及ばぬ。尤も去年までなら、こな樣の自由にもなるであらうが、今年は新らしく、成田の不動を請け人に賴んで、八百八町の旦那方へ、奉公始めの誠の廣綱。それだに依つて、われから歸れと云ふのだ。
保輔　惡い奴に逢つたわい。
トこなしあつて
さう云へば、引摺り出しても歸すぞよ。
良門　こりや、面白い。歸るまいと云つたらどうする。
保輔　知れた事、刀に掛けて。
ト刀を取上げる。
良門　われこそ刀で歸してくれうぞ。
ト拔きかゝる手を押へて
保輔　小癪な事を。
ト双方立ち上がる。てんつゝ、早舞ひになり、向うよりお岩、さら毛束れ髮、振り袖やつし、手甲、脚絆の田舍娘。これを中間、紺看板にて棒を持ち、附いで出て來る。
中間　ヤイ〳〵、在鄉者め。御殿へはならぬといふに。
いは　エヽ、何をやかましう云はしやんす。

トせり合ひながら舞臺へ來る。舞臺の兩人は立廻り。これを見て中間驚ろき

中間　ヤア、拔いたワ〳〵〳〵。

ト下座へ逃げて入る。お岩、怖々中へ入るを、引退け、また切り結ぶ。お岩、どうせうといふこなしにて、持つて出た笠にて押へ、三人キッと見得にて顏見合せ

兩人　エヽ、邪魔な女め。

いは　マア〳〵、待つて下さりませ。

ト留めるを引退け立廻り、薄ドロ〳〵にて、保輔の刀、ポッと折れる。三人驚ろき

保輔　正に名作。

ト若黨一人出て

若黨　慥かに蜘蛛切。

ト取らうとするを良門ポンと切つて捨てる。大ドロドロ。誂らへ三味線入りの小太鼓の樂になる、蜘蛛良門の刀へ纏ふ、三人キッと思ひ入れ。

良門　ハテ、心得ぬ。我が刀に血汐を注げば、忽ちに蜘蛛の群るは。

保輔　怪しき上使と察せしゆゑ、只一打ちと切りかけし、刀を打折り、血汐の穢れにこの騷動。

いは　わが脊子がくべき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞ひかねてより、聞き傳へたる劒の不思議。

良門　帶せし我れもこの奇特、始めて知つたる、ハテ、業物。

ト刀を見て思ひ入れ。

いは　さてはいつぞや葛城にて、討たれし蜘蛛の

良門　ヤ。

ト思ひ入れ。

保輔　それぞ慥かに蜘蛛切丸。

トきつとなる、良門手早く袖にて隱す。ドロ〳〵止む。蜘蛛消える。

良門　イヤ、これこそ我が重代。無銘なれども稀代の業物。誠の武士の所持いたす一腰、刀を淸めて。

ト刀を出す。お岩、柄杓にて手水鉢の水を掛け、手拭を取つて、刀に恐れしこなしにて良門に渡す。良門刀を拭く。保輔思ひ入れ、管絃になる、三人顏見合せ思ひ入れ。良門刀を鞘へ納めようとする。保輔思ひ入れあつて

保輔　その刀、暫らく。

ト保輔落ちたる我が刀の鞘を取つて

お替鞘、進上いたさう。
ト管絃になり、いけころし、保輔鞘を持ち、良門の側へ行く。お岩、これに目を附け、眞中にて後へ寄る。良門構はず刀を差出し居る。保輔刀をキッと見て、この鞘に刀しつくり合ふゆゑ、良門ギックリして思はず振り向く。保輔と顔見合せ思ひ入れ。此うちお岩窺ひ見て、この時こなしあつて、ちやつと又後へ寄る。
良門　すりや、身共が刀へ
保輔　手前の鞘が
いは　しつくり合うたは
保輔　さてはいつぞや諸羽の宮にて、密かに忍ぶ經櫃を、曲者あつて持ち行きしが、その行く先は花山の古御所、棲戸都も野嵐に、バラ〳〵と經櫃を、破つて出でし折も折、豐後の次郎が爭ひし、平親王將門が、持ち傳へたる蜘蛛の一巻。
良門　源家の蜘蛛切奪ひし樣子、死もの狂ひに蹴立てられ、木の葉は散つて、蓬々たる、茅萱の茂る荒れ御所の、忍ぶ下家も野の錦。
いは　千早ふるびし神の末、皇居も今は荒れ果てゝ、狐狸妖怪の外とては、誰れしも住まぬ隠れ家へ、打つ太刀音に驚ろきて
保輔　見れば肌の蜘蛛の巣に、豐後の次郎が横死に依つて
良門　思はず落せし一巻を、取らんとすれば、また曲者。
いは　これも落ちたる名劍と、その一巻を爭へども、事問ふものは山彦に、黑白も見えぬ眞の闇。
良門　百鬼夜行と疑ひし、氣高き美女が一巻を
保輔　爭ふ中にも奪ひしが
いは　猶も深夜に霧深く
良門　姿形は分らねど
保輔　さも腥さき風もろとも
良門　天地も裂ける動揺は
保輔　怪しき蜘蛛と
良門　誘ひし女は
兩人　慥かに妖怪。
いは　エ。
ト三人顔見合せ、お岩ギックリとなる。
兩人　さては。
トお岩へかゝる立廻り、一巻を落す。
保輔　この一巻は。
トお岩手早く取り、兩人拔きかけようとする。お岩眞

中にて一巻を開き、キツとなる。大ドロ〳〵、お岩其まゝセリ下がる。兩人驚ろき

良門　いよ〳〵怪しき女が振舞ひ。

保輔　蜘蛛切丸は、慥かにそれと。

ト寄らうとする。

良門　此方も怪しむ曲者が、鞘を證據に。

保輔　其方が刀に、しつくり合うたは、慥かに曲者。

良門　すりや、その時の

保輔　曲者

良門　同志で

兩人　あつたなア。

ト又ドロ〳〵にて下の方へお岩セリ上がる。

良門　これに附けても今の賤の女。

いは　わたしや、先刻にから爰に居ます。

兩人　すりや、それに居つたか。

ト思ひ入れ。

して、いづくの賤の女。

いは　在所は、下總猿島郡。

兩人　ヤ。

ト思ひ入れ。

いは　岩井の郷の者、尋ぬる人があつて。

保輔　然らば、暫らく某が、通達いたして遣はさう。

いは　それは嬉しうございます。どうぞ連れて行つて下さりませ。

保輔　賤の女を同道しては

ト行かうとするをお岩捕へろ。

ハテ、聞分けのない。

ト振り切る。保輔、懷の袱紗包みの岩井櫛を落す。

いは　エヽ、つれないお人。

トつんと此方を向く途端に、櫛を取上げ、合點のゆかぬこなし。

良門　まだこなたには聞きたい事もあれば、座席を改め、何かの事を。

保輔　そりや、此方にも、兼ねての望み。

良門　然らば當家の使者の間へ。

トお岩、思ひ入れあつて

いは　こちらにござんす御上使さん、ちつとあなたに。

保輔　そちや、外に尋ねる者があると申したではないか。

いは　イヽエ、矢ッ張りこの櫛。

ト云はうとして

どうぞ、待つて下さんせ。
保輔　アノ、某に。……ハテ、變つた尋ねもの。
良門　然らば、お先へ參るでござらう。
いは　どうぞ、さうして下さんせ。
保輔　先づそれまでは
良門　同じ家名の
保輔　上使と
良門　上使。
保輔　先づ〳〵、お先へ。
良門　後刻面談いたすでござらう。
　ト管絃になり、良門思ひ入れあつて、奥へ入る。お岩、
　保輔殘り、兩人思ひ入れあつて
保輔　最前より怪しき女と思ひの外、某を止めしは、仔細
　あつての事なるか。
いは　こりや、あなたのでござりまするか。
　ト拾ひし櫛を出す。
保輔　その岩井櫛は、某が懷中いたし居つたが
　ト懷を改める。
いは　たつた今、爰で拾ひました。
保輔　それは忝ない。こりや、大切の品。
　ト懷中する。
いは　それは大切と仰しやるからは
　ト懷より袱紗に包みし鍬形を出し
　これ、お覺えでござんすかえ。
　ト合ひ方になりて、保輔取上げ
保輔　こりや、黄金の鍬形。これを所持なし居るからは、
いは　わたしや、下總の國猿島郡で、岩井の鄕の賤の女で
　ござんす。
　ト中間、窺ひ出て
中間　ヤイ、女め。うぬ、案内もなく御門を通るゆゑ、咎
　めたれば逃げ廻つて、よくもお庭へ來たな。サア、出を
　らう〳〵。
　トお岩を引立てにかゝる。
いは　マア〳〵、待つて下さんせ、それどころではないわ
　いな。
中間　うぬ、御上使と馴れ〳〵しく物を云ふか、おれは聾
　ゆゑ、何も聞えぬワ。サア〳〵、來い。
　トまた引立てるを、保輔、中間を取つて押へ
保輔　コリヤ、女。某こそ武者修行と、世を僞はつて白波
　の

いは　アヽ、モシ、人や聞く、必らず密かに。
保輔　イヤ、此奴は聾。
いは　ほんに、さうでござんしたなア。
保輔　關八州を經廻るうち、しかも正月、鹿島なる
いは　常陸帶の神事にて、闇がりながら拜殿の、帶にて緣を結ぶの神。引合せにはその夜の雜魚寢、二世の誓ひと差櫛の、黃楊にはあらでわたしが在所の、一村ばかり、さした村名の岩井櫛。
保輔　我れも重代二世のしるしに、黃金の鍬形。
いは　下さんしたを大事にして、佛樣とも神樣とも、思うて朝夕願ひ事。
保輔　後の證據と持つて居たか。
いは　持たねばならぬ只一夜、淺き契りもわたしが百歲。
保輔　そりや、我れとても深き思ひに
いは　一度の契りに宿したる、お前の胤を月滿ちて
保輔　さすればその夜のさし汐に、まだ闇がりの常陸帶、神事と共に
いは　嬉しい雜魚寢の男はお前、それとも知らず、花山の院にて逢うたのは
保輔　二世の誓ひの我が妻と、知らぬその夜の怪しみは、蜘蛛の働らき、正に妖術、世にも不思議と思ひしが
いは　未來をかけた我が夫に、何をか隱さん大和なる、葛城山の女郞蜘蛛、その妖術をこの身に受けつぎ、皮肉に分け入る、千變萬化は我が自在。
保輔　女に稀れな頼もしき、その魂ひでいよ／＼安堵。定めてその身に大望は、察するところ叛逆の
いは　父はこの世を去つたれど、一度源家へ恨みをなし、その妄執を晴らさんと、女ながらも一念は
保輔　百萬騎にも勝つた不敵、諸國を一人覘ふうち
いは　この程思はず古御所にて、父の用ひし蜘蛛の、一卷を手に入れて、猶も妖術心のまゝ。
保輔　さすれば、おことが氏素性は
いは　云はぬは云ふに岩井櫛、あれを證據に。
　ト保輔キッと思ひ入れ。
保輔　さては相馬の
いは　內裏と聞くも恨めしく
保輔　父の仇を報はんと
いは　はる／＼登りし都にて
保輔　忍ぶその身の隱れ家は
いは　色をも捨てゝ枯れ／＼に

保輔　花山の御所にて思はずも
いは　逢うたは未來と
保輔　誓ひし女房。
いは　思へば盡きせぬ
　ト中間起きあがつて
中間　樣子は。
　トかゝるを保輔押へる。
　聞えぬ。
　ト中間が顔をくらはす。そこへ倒れる。お岩思ひ入れあり。
兩人　縁ぢやなア。
　トこの仕組みよろしく、　ひやうし　幕
　管絃のツナギにて、この幕引返す。
　本舞臺、三間の間、二重舞臺、東西の舞臺とも、竹の節欄間にて翠簾を下ろしあり。見附けに金襖、眞中二重舞臺に、園生の前、小打着、緋の袴にて琴を調べ居る。八十瀬、お國、東路、瀧野、腰元にて扣へる。舞臺前しがらみの池の方、梅の立ち木へ鶯來て囀り居る。誂らへの琴唄にて幕明く。

園生　鶯の朝毎には來つれどもと、梅の花に來る囀、風雅の常。今日神事に依つて、住吉の神へ捧げの琴の一曲、それを慕うて囀づるは、ハテ、しをらしい鳥ぢやなア。
瀧野　北の御方には、御奉納の一曲が、相濟みましてござりまするか。
八十　今日は思ひがけない御上使で、いろ／＼とのお心遣ひ。
くに　只今御奉納の一曲承はりましたが、面白い事でござりました。
園生　全體琴の組といふものは、源氏を主に入れたものぢやわいの。
四人　その源氏とやらは、色めいたものではござりませぬか。
園生　されば、源氏といふものは、箒木の森より六十帖を綴りしとあり、森の茂りの俤、ありなしの心、これ佛法の肝要。空形中の文字妙理、見る者の心に依つて、さまざまの違ひ。源氏を讀んで出家せし人、また家を滅せし人その數多し。其方衆も好色に心移らぬやう、愼みが第一ぢやぞや。

瀧野　ほんに、あなたのお側に御奉公いたしますれば
皆々　私しどもの仕合せでござりまする。
　ト東西の屋體にて
良門　谷水のせまき岩間に住み馴れて、さぞ廣澤の池の鴛鴦。
保輔　ちよつと〳〵に騙されて、もうかんざしはこればかり。
　ト合ひ方になり、舞臺前の池へ鴛鴦むらがる。東西の御簾上がる。上の方保輔、上下鉢卷にて、胡坐をかき、徳利と茶碗を置き、結構なる火鉢の上へ小鍋を掛け、煮て居る。下の方良門、矢張り長上下にて花盆に花を並べ、山茶花を活けて居る。
園生　左右の座敷は御上使樣。
八十　左樣でござりまする。御饗應はこれがよいとお好みにて、いろ〳〵花を、お取寄せなされてござりまする。
東路　御自身にお花を、お活けなされてござりまする。
瀧野　これはしたり、こちらの御上使樣は、如何にお好みなされぱとて
くに　御自身にお小鍋立てにて茶碗酒、そして鉢卷をなされて、怪しからぬ。

保輔　こりやアおれが當り前。上使々々といかめしくはするものゝ、武藏の三田で育ちたれば、二本差しでも組屋敷同然、時に依つては町の裏住み。そこでおれへの饗應は、七五三の料理より、よく〳〵好いた茶碗酒、葱に鮪のすつぽん煮、こいつは呑めるわい。
　ト酒を呑んで居る。
くに　アレ、御覽なされ。
園生　コリヤ〳〵、御上使樣へ、粗相申し上げまいぞ。
良門　ハテ、蓼喰ふ蟲も好き〴〵と、聞けば彼方の御上使は、饗應に茶碗酒。某は又、好きの道とは云ひながら、花を活けての樂しみ。併し、お庭先へ廣澤の池を取り入れて、あの鴛鴦の群れ居る樣は、ハテ、よい眺めではある。
　ト矢張り花を活けて居る。
八十　申し、御上使樣、お花の水を取つて參じませうか。
東路　お花の塵を掃除いたしませうか。
　ト立ちかゝる。良門驚ろき
良門　コリヤ〳〵、腰元ども。身共は女は大嫌ひ。必ず、寄るまいぞ〳〵。
東八　ハイ〳〵。

ト保輔、酒を呑んで居る。

保輔　斯う引きうけた所は、どうもたまらぬわい。

ト煙草をのむ。合ひ方替り、奥より美女丸、花盆に花挿しを載せて持つて出て、良門の前へ行き

美女　御上使様には、お花がいりませうと存じまして、お水を持つて參りましてござります。

良門　これは〳〵、美女丸には、仰せ附けられいで、御自身に花の水を、有り難うござりまする。サヽ、これへこれへ。

美女　左様なら、お側へ參つてもよろしうござりまするか。

良門　女儀と違うて、とんと苦しうござらぬ。

女四　アレマア、あんまりな御上使様。

ト美女丸、良門の前へ行き手を突き

美女　武士は武藝が第一でござりまするが、琴棊書畫の外、茶の湯、立花、私しは立花が習ひたうござりまする。何卒御指南下されませうならば

良門　これはしたり〳〵。マア、お手を上げられませう。隨分お心易い事でござる。先づお花にも眞行草がござつて、いろ〳〵に弄ぶもの、山茶花なら山茶花の眞を入れまして、斯うまた流れの枝を。

ト花にて敎へる。

美女　むづかしいものでござりまするが、面白いものでござりませうな。

良門　イヤ、また面白いのは

ト美女丸が顔をチッと見て

コレ、この水仙でござる。

ト花を取上げ

水仙の花の姿や若衆振りとは、古人の發句。

美女　エ。

良門　ハテ、憎からぬ。

ト美女丸の手を取り

水仙でござるなア。

美女　そんなら御指南なされて下さりまするか。

ト良門に寄り添ふ。此うち園生の前、腰元、そろ〳〵下の屋體際へ來り、樣子を聞く。保輔も立ち上がり聞いて居る。

良門　花の大事も、人の心と同じ事で、眞實の眞をよく定めて、外の枝へ段々目を附けるが身の粧ひ。その花のあでやかに、心も惚れて

美女　さればでござりまする、心の花が花に惚れ、花の心

が心に惚れるとやら申す事もござりますれば。

ト互ひに思ひ入れある。

良門　花は正面より見るものなれど

ト美女丸を後から引寄せ

斯う後から眞の添へ枝、後が大事。兎角根じめが肝心でござる。

美女　隨分承知でござりまする。

ト思ひ入れあつて良門へもたれる。

良門　根じめが極まれば、ちよつと水をつがねばならぬ。

ト美女丸、思ひ入れあつて

美女　それをつげと仰しやるは、斯うでござりまするか。

良門　こりや、モウ、花の傳授を許さねばならぬわい。

ト皆々悔りする。保輔ちやつと元の所へ來て、煙管にて火鉢を叩き立て、煙草をのむ。

女四　申し、北の御方樣。

闌生　皆の者、奧へ。

四人　ハイ、、、。

トこれより本管入り、雲上なる誂らへの合ひ方になり、腰元四人、下座へ入る。引き違へて光任出て來て、平舞臺にて

光任　北の御方には、御上使の御饗應、御苦勞に存じまする。

闌生　其方もさぞ心づかひ。ちと休息しやいなう。

光任　ハツ〳〵、休息も勝手で仕りましたが、先刻美女丸さまへ素讀を敎へかけましたが、どれへござつたやら。

闌生　美女丸は次の間の、御上使のお相手に。

光任　お慰みに素讀でござりますなら、拙者も參つてお相手に。

闌生　ア、コレ、行つては惡い。イヤ、それには及ばぬわいなう。

ト美女丸、思ひ入れあつて

美女　光任さま、私しはこれ御上使樣に、立花のお稽古いたして居りまする。

光任　それは一段の事でござりまする。

良門　好きより上手と、忽ち上達でござる。ハ、、、、、。

ト美女丸へ思ひ入れ。

光任　然らば、拙者も先刻の讀みさしを。

ト見臺の本を取り出し、煙草のみながら思ひ入れあつて

「皇極經書に曰く、日の月に望む時は月蝕し、月日を掩

ふ時は日蝕す、猶火と水の相剋す如し。茲を思へば何事も心に掛けるは愚痴の至り。人の心はさま〴〵にて、好き不好きのあるものぢやなア。

ト此うち園生の前、保輔の屍體の側へ來て、鴛鴦を見て

園生　申し御上使樣、池の面の鴛鴦は、可愛らしいぢやござりませぬか。

保輔　わしやア、鴛鴦より、矢ツ張り葱鳥、鎌倉川岸の鷄は旨いやつサ。

ト矢張り火鉢にて鍋燒きをして居る。

園生　喰もの丶事ではござりませぬ。あの池の鴛鴦のやうに。

ト保輔へ思ひ入れ。

光任　北の御方には、鴛鴦のお尋ねでござりますが、それは彼の唐土、宋の大夫釋明、その妻美にして、國色に名あり、康國これを奪うて宮に入る。

保輔　なんだか、チンプンカンだが、そいつは唐の間男だね。

光任　先づお聞きなされい。韓明甚だ恨みを含んで自殺す。その妻これを慕ひ共に死す。これを埋むるに一夜を經て連理木を生ず。また鳥となつてこれ鴛鴦なり。

保輔　ハテ、實深い鳥だな。道理で水の中を歩く時に、雌と雄とくツついて

園生　番ひ離れぬ比翼の鳥。

保輔　成る程、裏店の獨り者が酒くらふやうに、手酌でも旨くねえかえ。

園生　そんなら九獻のお相手に。

ト思ひ入れ。

光任　ヤ。

ト心得ぬこなし。

保輔　九獻や一升なくつてもよい。もうごんつく、取りにやつて、隣りの山の神や、嬶ア左衞門の氣取りになつて

園生　お相をするには、辛氣らしいこの緋の袴。

保輔　親方の葬ひより外、着た事のない上下も、ひツたくつて。

ト園生の前、緋の袴を取り、保輔、上下を取る。光任キツとなつて

光任　コリヤ〳〵、みさきには

ト云はうとして

その元亂れて末納まらずとありしが、北の方には苦々し

き、どうやら禮儀も打忘れて、酒は亂れの基と戒め。
園生　でも、御上使樣への御酒のお相手、どうで亂れにやならぬわえ。
ト思ひ入れ。保輔の側へ行く。
光任　御上使樣饗應とあれば、是非もなけれど、ハテ、情ない。
トぢつとなる。
保輔　これは〳〵、北の方には、あんまり恐れ入谷の鬼子母神、こいつは江戸の古い洒落サ。
ト園生の前、そこらを見て
園生　杯はどこにあるえ。
保輔　ナニ杯どころか、茶碗酒サ。
ト茶碗を出す。園生の前驚ろき
園生　アノ、この茶碗でお茶呑むやうに、九獻たべやるのかえ。
ト保輔、茶碗を敎へる。
保輔　爰の靑いところまで一杯つぐのを、靑つきりといふのサ。
園生　成る程、土器の內曇りのやうなものぢや。
保輔　ナニ、內ばかりぢやない。外も雪容のやうに曇つた

時は、鐵砲が命だ。それで呑むが、裏店のやりばなし暮しサ。
光任　我が君を打捨て置かれて、あの仕儀。……とは云へ、差當る御上使の事。ハテ、何としたらよからう。この屈託を紛らすには、好きの學問。
ト矢張り本を見ながら煙草をのんで居る。此うち美女丸、良門思ひ入れあつて
良門　斯う打解ける上からは、いよ〳〵兄弟の因み。
美女　そんならお前は。
ト菊の枝と梅を取る。
光任　成る程、花に喩へたる親子兄弟、禮儀が第一。
良門　活花の傳授といふは、萩を活けるに湯を使ふやうなもので、この手をちよつと溫めて
ト美女丸の懷へ手を入れる。
美女　アレ、こそばうござります。
ト良門、心得ぬこなしにて
良門　この乳は。
美女　ハイ、わたしや女でござります。
良門　ヤア、、、、、。
ト恟りする。美女丸、上下を脫いで

美女　保昌が娘小式部と申します者。いつぞや御主人、美女丸さま、御父満仲公のお怒りあつて、首討てとあるを、お身代りを立てゝ、その後山門へ御登山。わたしは子育ちがないとあつて、女を男にして、御主人より有り難い、美女丸さまの代りになし下され、御不便加へられて御養育。其やうに御丁寧に仰しやるものではござりませぬ。どうぞ未來をかけて。

ト良門に寄り添ふ。

良門　ハテ、さう聞いては、どうやら身共も。

保輔　隣りの長屋ぢやア、なんだか面白い話し合ひと見えるわい。

園生　なんであらうぞ。

トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。

光任　兼ねて保昌どのには、よい聟がねを尋ねて居られたが、思ひがけない小式部。御上使と不埒と思へど、茲を以て、詩經に曰く、桃の夭々たる、しん〳〵たるその花は、この子こゝに歸ぐ、桃の花の盛んなるを見て男女婚姻をなす、相共に和順してよろし。

良門　光任どのゝ金言を聞いては、女嫌ひも、好物にならねばならぬわい。

ト美女丸を引寄せる。

美女　アヽ、モシ、御上使樣、それではあんまり恐れ入ります。

園生　アレ、あの子が恐れ入ると云ふわいな。

ト走つて保輔の側へ行く。

光任　イヤ、申し、北の御方、小式部が如何なる貴人に對しましたか。きつう恐れ入りますな。

ト笑ふ。保輔思ひ入れあつて

保輔　ありやア、若衆ぢやアないか。

園生　イエ〳〵、美女丸と申す若衆にして置きますが、實は女子で

保輔　初物か、それでは恐れ入谷の

園生　鬼子母神さま程、子の出來さうなあの子の顏附き。

トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。

光任　聖人もこの子こゝに歸ぐと、陰陽の心を云はれたわえ。

良門　ハテ、珍らしい。七十五日の初物を。

美女　これは痛み入ります。

ト園生、悸りして、こちらへ來る。

園生　アレ、痛み入るといな〳〵。

光任　小式部が痛み入ると申しますのか。
園生　さうぢやわいの。
光任　子心にも、よく〳〵迷惑な事と見える。ハテ、氣の毒千萬な。
保輔　シタガ、そいつは痛み入りさうなもの。
美女　斯うなるからは、外に惡性はならぬぞえ。エヽ。
ト良門の腕へ喰ひつく。
こりや、齒形の附かぬは。
良門　ヤ。
ト隱す。美女丸また腕を捲り
美女　この痣は。
良門　コリヤ。
ト引廻して抱く。
園生　御上使も。
保輔　ドレ、お相伴。
ト園生の前、保輔に寄り添ふ。
良門　可愛の者やな〳〵。
ト東西の屋體へ御簾下りる。光任殘り
光任　ムウ。
ト思案する。時の鐘になり

みさきどのゝ心底といひ、小式部があの樣子、心あつての事か。ハテ、ナア。
トどろ〳〵にて上の屋體へ蜘蛛まとひ下りる。光任キッと見て
ハテ、心得ぬ。寸に延びたるあの蜘蛛の、あれへ纏ふは審かしく、これにつけても心ならぬは、この程都に徘徊なす怪しき女。葛城山の蜘蛛の術をその身にうけて行ふと聞く。正に先年亡びたる將門、純友の殘黨ならん。小賢しきとは思へども、神力勇者に勝つこと能はずの道理。ハテ、心憎き、蜘蛛の振舞ひぢやなア。
保輔　コリヤ、園生の前、心を附けい〳〵。
光任　あの聲は慥かに御上使。
ト薄ドロ〳〵にて御簾卷き揚げろ。園生の前、保輔に凭れ苦しみ居る。この前、下り蜘蛛する。保輔キッと見て
保輔　ハテ、心得ぬ。園生の前と枕交せしその折から、茫然となりしは。
園生　この蜘蛛が苦しめしか。
保輔　ハテ、恐ろしい。
トどろ〳〵、此うち襖を明けて窺ひ居たるお岩、この

屋體の方を見る。前にある鏡臺へ仕掛けにて、お岩の顏蜘蛛の姿に映る。保輔これを見て、
さてこそ、鏡へ蜘蛛の姿が。
トこちらを見る。お岩と顏見合せ、お岩、襖をピッシヤリしめる。
ムウ。
ト思ひ入れ、光任チッと考へ
光任　北の方のその有様は。
園生　御上使様が、あまり嬉しいお心ゆゑ、それにほださ れ、つい枕を交したわいなう。
ト光任キッとなり
光任　ハテ、是非もなき、戀は心の外ぢやなア。
保輔　園生の前が身共の心に隨ふ上は、茶碗酒の下様を止めにして
園生　今改めて。
ト千秋萬歳の謠、下座にて謳ふ。
三人　これは。
ト驚く。三味線入り小鼓の樂になり、保輔、園生の前、平舞臺へ下りる。下座より八十瀨、お國、東路、瀧野、三方に土器、島臺、蕗の臺、長柄、くはゐを、持ち出て來て
八十　我が君樣には御病氣ながら、何かの樣子をお聞きあつて
くに　お顏の似たるを幸ひに、北の方となつて計られしは、能勢の判官が娘御。
八十　みさきさんが、日頃尋ぬる云ひ號けの殿御は、今日の御上使にて
くに　酒に亂れて戀ひ慕ひしは、不義のやうには思へども、矢ッ張り貞心。
東路　早う御婚姻の調へ、三々九度の杯を
瀧野　取交せよと有り難い上意。
三人　早うお杯をなされませいな。
ト保輔園生の前の前へ直す。
園生　有り難い君の御上意にて、只今婚姻の杯事。頼光公の御所勞ゆゑ、入込む武士は心々と、それを計つて光任どのと云ひ合せ、お顏の似たる北の方となつて、勿體なくも何かの樣子を、窺うたのぢやわいなア。
光任　すりや、御上使が、こなたの云ひ號けであつたよな。
園生　それぢやに依つて、三々九度の杯を。
女三　早うなされませいなア。

ト相に相生の謡になり、園生の前、土器を取りあげる。
この時お岩、ツカ〳〵と出て、土器を取つて打割る。
皆々恟りして
ヤア、こなさんは見馴れぬ女中。
園生　一世一度、大事の婚姻の杯、割らしやんしたは
いは　腹が立つから。
皆々　エ、。
ト　お岩、保輔を捕へて
いは　お前、マア、なんでござんす。在所のわたしでも構はず、いとしいの、可愛いゝの、死んでも離れぬ女夫ぢやのと、約束して置いて、それにマア、畠ぜゝり、村の者から隣り村、誰れでも彼れでもお嫌ひなしの性悪さん。そしてマア、色さんといふは、結構な着物着飾り、美しい奥様。お内も結構、綺麗な夜着や蒲團着て、寐さつしやると思へば腹が立つ。なんぼ、わたしがこんな在所者ぢやというて、見替へられてどうせうぞいなア。
保輔　うぬ、一討。
ト抜きかける。
園生　モシ、めでたいこの場の事なれば、マア〳〵、お待ちなさんせいなア。
八十　何は兎もあれ、御上使様へ慮外な女中。
皆々　早う姿を下がらしやんせいなア。
保輔　三々九度の杯を、打割つたる不届き者。捨て置かれぬ女なれども、云はゞめでたき折なれば、免しくれうが、改めて婚姻の酌をしろ。
いは　エ、。
ト恟りする。
女皆　否なら、姿を下がらしやんせ。
いは　サア、それは。
女皆　謡ひものでも謳やるか。
いは　サア、それは
皆々　サア、〳〵、〳〵。
ト　お岩を引立て
キリ〳〵出て行かしやんせ。
ト　お岩泣く〳〵思ひ入れあつて立ちあがり
いは　ほんに、マア、なんの因果で都へ上り、辛い憂き目に逢ふぞいな。矢ッ張り在所で麦畠の、霜ふみつけが増しぢやもの。情ない身になつたわいなア。
ト誂らへの合ひ方になつて、お岩思ひ入れあつて、見返り〳〵花道へ行きかゝり、キッと思ひ入れ。バタバ

タと光任の側へ行き
モシ、捨てる神あれば助くる神、どうぞ色になつて下さんせ。
　ト光任、此うちチッとなつて居て
光任　これは又、不埒なる事を。
いは　但しはお否かえ。
光任　サア、それは
いは　さうぢやあらうが、どうぞ間に合せでも大事ない、色になつて下さんせ。
　ト此うち奥より、腰元三人出かゝり居て、この時
三人　イヤ、間に合せでない、ほんまの色を取持たう。
　ト合ひ方になる。
いは　エ、。
　ト悧りする。
腰一　最前から聞いて居れば、あんまりいとしい事でござんすが
腰二　云ひ交した男に見替へられたゆゑ、面當てに急に色が欲しいから
腰三　間に合せでも大事ないと云はしやんすが、眞實こなたに惚れて居る

　トお岩キッと思ひ入れあつて
いは　男があるとは、ほんの事かえ。
三人　なんの嘘を云はうぞいなう。
腰一　今日お入りの鷹國さまぢやわいの。
いは　エ、。
　ト思ひ入れ。
女六　どうして、マア、鷹國さまが。
腰一　ハテ、さう云うて騙して……苛めてな。
　ト思ひ入れ。お岩嬉しきこなし。
いは　さういふ事なら、憎い男へ面當てに、早う連れて行て下さんせいなア。
腰二　ハテ、忙しない。マア／＼待ちや。なんぼさう云つたとて、鷹國さまのおかみさんになる事。
腰三　そんな形でも行かれまい。なんぞ好い事がありさうなもの。
　トそこらを見て、十二單衣を見て
腰四　幸ひ／＼、爰にみさきさんのお召しなされた、十二單衣、これを着せて。
三人　お后樣にせう／＼。
　ト捨ぜりふにて、十二單衣をお岩へ着せて

それでこそ、尊國さまのお后樣。
いは　アイ、お后樣ぢや〳〵。
　ト そこらを見せ廻り、保輔へ思ひ入れあつて
お后樣でござんすわいなア。
保輔　ヤイ、女、某夫婦を恨むるは尤も。如何にも武者修行の砌り、われと云ひ交したに違ひないが、いま改めて緣切つた。
いは　エヽ。
保輔　二世の印と取交した岩井櫛、身重のわれと盡未來、緣切つた。
　ト 岩井櫛を投げてやる。お岩取つて
いは　ハア、。
　ト 時の太鼓になり、下屋體の内にて
良門　只今打ちしは五ツの太鼓。蜘蛛切、鬼切、受取り申さう。
　ト 管絃になり、簾巻き揚げる。内に良門、この時上の屋體より尊國君、以前の形にて出て扣へ居る。
光任　イヤ、仰せまでもなく、只今お渡し申さう。
　ト 園生の前、驚ろき
園生　アノ、二振りともに。

良保　我れ〳〵へ。
光任　お渡し申す、先ッこの通り。
　ト 刀を腹へ突ッ込む。ドロ〳〵にて、お岩慄ふ。皆々驚ろき
皆々　これは。
　ト 篠入りのやうな合ひ方となる。
光任　御推量の通り、二振りとも疾より紛失。
良保　すりや、申し譯に。
光任　光任が切腹、何卒滿仲公へお執成し……それにつけてもこの女、疑ひもなき將門が殘黨、最屈竟は、某が生れは辰の年月日時、蜘蛛の妖術行ふ者に、血汐を注げば忽ちに、妖術消ゆると承はれば、叛逆人の根を絶つ爲、また申し譯のこの切腹。
いは　すりや、光任が切腹に、我が妖術も消え失せしか。エヽ、口惜しい。
光任　忠死の魂ひ、まッこの通り。
　ト 腸を摑み出しお岩に打ちつける。大ドロ〳〵、焔立つて、お岩の懷より一卷拔け出て、お岩消える。光任、笛を搔いて落入る。園生の前こなし
三人　怪しき女。

ト奥へ入る。

園生　叛逆人の餘類とはいひながら、お腹の胎兒は夫の胤、義理ある女子を殺しては、夫へ立たぬ。あと追ひかけて、さうぢや。

ト同じく下座へ入る。

尊國　最前より樣子を聞くに、怪しき上使廣綱、是非一人は似せ者ならん。先づそれよりは何かの企て、一先づ當家を立歸らん。

良門　尊國どの、暫らくお待ちやれ。

尊國　何がなんと。

良門　若君を擒に、賴光公を味方に附け、四海を心の儘にせんとは、この廣綱が居ちやア、マア、ならない。殊に、最前入道が毒酒の計略。心憎い第一番。怪しいは、似せ上使のお身樣は、誰れに賴まれて來た。それを云つてしまはつしやい。

保輔　イヽヤ、知らないワ。

良門　大方さうであらうと思つた。市原野の野伏りども、早く參れ。

三人　心得ました。

トばた〳〵にて前幕の乞食三人走り出て來る。

保輔　ヤア、わいらは。

乞一　市原野の野伏り、骨箱の六。

乞二　こなたの手下の落葉の松。

乞三　とぶ板の八。

三人　サア、尋常に、本名を名乘らつしやい。

良門　斯うなつちやア是非がない。百年目だと、キリ〳〵云つてしまはつしやい。

保輔　エヽ、忌々しい。斯くなるからは何をか包まん。盜賊の張本、袴垂の平井保輔とはおれが事だ。

皆々　さてこそなア。

保輔　我れ盜賊を業となし、數萬の軍用金を集め、四海を握らんと思ひの外、二才野郎に見顯はされたか。チエ、ヽ。殘念や……と云つたらよからうが、マア、否だ。

良門　そりや、又なぜ。

保輔　コリヤ、お定まりのおれが惡黨は當り前。この袴垂は平井の保昌が弟なれば、源家恩顧の大忠臣、大宅の太郎が死したりとも、大磐石、實事師だワ。

良門　イヤア、。

ト恟り、思ひ入れ。

保輔　サア、御上使の化け損ひ、今年始めて座頭も、まだ

赤子の事なれど、お江戸隨一御贔屓を、頭にかむつた金冠り、その將門の殘黨、白狀させるは親仁が折檻。新板替つた今年の顏見世。ひツくり返して何れも樣、彼奴一番、〆めてお目にかけませう。ヤツトコトツチヤア、ウントコナア。

ト皷の合ひ方になり、保輔肌脫ぎ、股立ちを取り、吉例の見得。

良門　そんならわれが

保輔　なんと肝が潰れべい。

良門　チエ、

ト口惜しきこなし。

ト美女丸出て

美女　最早遁がれはござんまい。こなたの戀に迷うたれど、心中に事寄せて、肌に齒形の附かぬといひ、七つの痣のあるからは、將門の殘黨。枕交せし云ひ譯は、先ツこの通り。

ト懷劍にて自害する。良門首を討つ。遠寄せ。

良門　あの、遠寄せは。

保輔　汝を取卷く味方の手配り。最早叶はぬ、本名名乘れ。

良門　この上は、保輔觀念。

トどんちやん早めになり、良門立廻りあつて、上手の網代塀切り破り、飛び込む。續いて乞食三人入る。

皆々　曲者を取逃がしては

保輔　イヤ、氣遣ひない。八方を取卷き置きたれば。

尊國　もう、この上は保輔。

ト保輔へ拔いてかゝる。立廻りあつて

兩人　ドツコイ。

ト女形皆々長刀を持ち、この見得よろしく、チヨンチヨンにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、九尺高足の亭屋體、御簾かけあり、瓦屋根高欄、惣朱塗り、東西網代塀、紅葉の吊り枝、よき所に井筒、ドンチヤンにて道具納まる。

トばつたり音して誂らへ本神樂やうの鳴り物になり、東西の塀を切り破り、上の方良門、下の方お岩、以前の形、拔刀にて出て、キツと見得。始終遠寄せ。兩人窺ひ〳〵、脊中合せに行き當り、双方顏見合せ、「ヤア、」ト思ひ入れ。此うち切破りの穴より捕り手二人、四天の形にて出て窺ひ居る。兩人思ひ入れあつて

良門　姿形は變れども、そちや最前の

いは　御上使様か。
兩人　さてこそ。
ト か ゝ る。兩人立廻りに、白刃を摑み、兩人思ひ入れ
あつて
いは　白刃を恐れぬこの様子。
良門　疑の女とても、刀の立たぬは、さては不死身か。
捕手　捕つた。
ト か ゝ る を、引廻して立廻り。
良門　不死身の孫は稀にして
いは　もしや尋ぬる下總の、相馬内裏の、百官百司。
良門　平親王の謀叛も、大望空しく遂に滅亡。
ト立廻り。
いは　一門郎黨散り／＼に、せめて血筋の兄妹を、繫ぎ馬
の旗までも
良門　敵に奪はれ、その甲斐も、なき身の哀れ、幼き時
いは　顔見知らねば、これまでに
良門　仇に過せし年月も
いは　思ひ掛けなき
良門　不死身と
いは　不死身。

良門　すりや、疑ひもなき
いは　血筋の兄弟。
良門　姉者人。
いは　弟良門。
良門　七綾姫で
兩人　あつたよなア。
ト思ひ入れ。
捕手　捕つた。
ト か ゝ る を 切つて捨てる。ドロ／＼にて七星顯はれる。
キッと見得、小太鼓の樂になり
良門　ハテ、心得ぬ。虚危室壁、南方の宿星太白星、南に
たんだくなし
いは　客星中を貫く、これを易といふ、判斷なせば
良門　取りも直さず澤雷陽。
いは　今一陽の時を得て、旗揚げなさん吉瑞なるか。
良門　圭婁胃は西に當つてよく守れども
いは　男ゆゑには二道を思はず、却つて不孝の罪。
良門　鬼柳の星は北にして、しかも東の鋭きは
いは　敵に奇兵を用ゆるとも、アレ七曜の破軍を請け、戀
の敵のあの女。よも安穩で置くべきか。

トきつと空を見る。この時星一つ落ちる。大ドロ〳〵。兩人心得ぬこなし。

良門　分夜の七星この時に

いは　星の落ちたは、お腹の胎兒の

良門　ハテ、審かしい

兩人　事ぢやなア。

トどろ〳〵打上げ、遠寄せ。

良門　さてはこれまで土蜘蛛の

いは　その妖術も光任が、血汐の穢れに空しくなり

良門　されども、某兼ねてより、手に入れたりし源家の重寶蜘蛛切丸、これを囮に再び旗揚げ。

トつか〳〵と屋體へ上がる。捕り手二人かゝる。キッと押へ

いは　そんなら弟。

良門　姉者人。

ト兩人を下へドッと投げる。

いは　必らず吉左右。

良門　おさらば。

トちやんと御簾下りる。此うち始終立廻り。見事にお岩兩人を切り倒し、思ひ入れあつて、奥へ行かうとする。五人の女形、手襷、十手を持ち出て、お岩を取卷き

皆々　動かしやんすな。

いは　こりや、こなさん達、女子一人を大勢で、なんとさしやんす。

八十　なんとするとは知れた事、謀叛の張本將門が娘。

くに　賴光公を恨まんと、姿を替へて入込みし七綾姬。

東路　父は替れど朝敵の血筋。

瀧野　敵の末は根を絶つて葉を枯らすと、腹の餓鬼めも諸ともに

八十　誅せよとある我が君の御上意。

くに　お腹の胎兒は愛しけれど

東路　叶はぬ事と諦らめて

瀧野　サア、尋常に

皆々　覺悟さしやんせ。

いは　女子でこそあれ、將門が娘、やはか其方衆の手にあはうや。邪魔せずと、そこ退いて通すまいか。

八十　面倒な。皆さん、ソレ。

トどん〳〵になりて、立廻りよろしく、この人數を向うへ追ひ込み、お岩花道にとゞまり、キッと見得。跳

らへの獨吟になる。
〽冬の空、月の化粧の恐ろしき、露か霜かと振り袖の。
ト此うち八十瀬出て、窺ひ〳〵花道へ行く。
八十　捕つた。
トこれを見返り、キッとこなし。八十瀬打つて行く立廻りあつて、舞臺へ附け來り八十瀬をポンと當てる。
〽氷る刃のひらめける、悋氣に暗き闇の夜も、井筒の水の鐘冴えて、響く遠音に更くる冬の夜。
ト此うちお國、東路出て窺ふ。お岩井戸の水を片手にて汲み上げる。
くに　捕つた。
ト刃をヒラリと差しつける。水を一つ呑み、またお國、打つて行くを同じく立廻つて切り拂ひ、立廻りよろしくあつて、ドン〳〵になり、向うより女形殘らず以前の形にて立戻る。立廻りよろしく、此うち向うより、足輕實は權之頭興世走り出て
興世　七綾さま、これにござりましたか。
いは　そちや權之頭興世か。
興世　足輕となつて入込みしが、思ひがけなく手に入つたる鬼切丸。
ト出し
これを功に保輔さまへ、こなたの助命いたしたぞ。
いは　ナニ、七綾が命乞ひ。情に刃向ふ刃があらうか。エエ、忝ない。
ト刀を取る。
八十　ヤア、、鬼切といひ
くに　叛逆人の七綾を
東路　助けるは二心。
三人　ドレ、わたしらが
ト行きかゝる。お岩この一腰にて八十瀬を切つて捨てる。大ドロ〳〵、お岩、屋體へ上がる。皆々後へかゝる。
瀧野　こりや、コレ、臨月。
東路　慥かにお産。
ト兩人を見事に下へ取つて投げる。キッと見得。チョンと山幕切つて落す。
本舞臺一面の山幕になる。
ト矢張りドンチャンにて、下座より中間出て
中間　似せ聾となつて、世の中を知らぬ顏にて、やう〳〵

とお家の家督に、なくて叶はぬ印子の藥師。これを盜めば出世の種。うまい〳〵。

ト花平出て

花平　その尊像を。

トかゝるを、中間、棒にて振り拂ふ立廻り、花平、一腰拔いて切つて行く。中間、棒にてあしらふ。始終ドンチヤン。雷雲出て來て花平を支へる。

中間　ヤア、入道か。どうもあの子がならねえわな。

雷雲　爰構はずと。

中間　勿論。

ト早神樂になり、中間、箱を持ち、向うへ走り入る。咲平出て來て、雷雲を突き廻し

咲平　よく友達を馬鹿にしたな。

雷雲　馬鹿にやアしない。邪魔になるから支へるのだ。

花平　その替りには入道、うぬを。

トちよつと切つて行くを支へて

雷雲　こりやア、なんとするのだ。

花平　なんとするとは知れた事、お家の寶を奪ひ取つて、駈け出す曲者、捉へしを、うぬが邪魔して逃がしたからは

咲平　入道、うぬを引ッ捉へ、二本の足を投げ切つて、夜見世の辻賣り、大蛸に

花平　切つて酢蛸か櫻煮か、花々しくも顔見世の、花たち花が手料理で、雷雲うぬを切り刻み

咲平　二つ寶のある揃ひの奴、姿は假の下部でも、我が本名は白川の、文丸といふ源家の忠臣。

花平　我れも名乘れば源氏の郎黨、瀧夜叉といふ厄介若衆、

兩人　うで蛸入道、覺悟ひろげ。

雷雲　ヤレ、吐かしたり蛸盡し、うぬらを見越しのおれなれど、邪魔立てするが面倒さに、睨み殺してくれべいワ

咲平　さう云やア、うで蛸より

花平　水を浴びせて

兩人　寒氷り。

ト打つて行く。立廻りにて、雷雲、衣裳ぬげて裸になる。誂らへの賑やかなる鳴り物にて、雷雲相手に大ダテあつて、雷雲の髭を引ッ張り

二人　うしやアがれ、エヽ。

トさらしになりて向うへ入る。ドンチヤンにて山幕切つて落す。

本舞臺一面の高舞臺、正面淺黄幕、東西築地塀、この舞臺一面の萩垣、前面山幕、ドンチヤンにて納まる。

ト靜かなる遠寄せになり、良門、ツカ〳〵と向うより出て來る。捕り手、四天にて、後より鎗を持ち出て、花道にて突いてかゝる立廻り。本舞臺へかゝる。キッと見得。下座より、別の捕り手、四天にて鎗を持ち、双方より突いてかゝる。大太鼓入りの合ひ方になり、大ダテあつて向うへ皆々追ひ込む。花道にてキッと見得。よき程にエイと矢一つ來るを、良門引ッ摑み

良門　ヤア、小ざかしきへろ〳〵矢、殊に附きたる短册は。

……「將門は顳顬よりぞ射られけり、

ト下座にて

保輔　俵藤太が謀り事にて。」

良門　何がなんと。

保輔　ヤア〳〵、平の良門へ、平非の保輔、見參々々。

ト突ッかけ、ドンチヤンにて、保輔、弓矢を持ち、花平、咲平、軍平大勢、弓張りを持ち出て來る。良門本舞臺へ戻り、キッと見得。

最早遁がれぬ、良門と

皆々　名乘つた〳〵。

ト始終ドンチヤン。下座より尊國、肌脱ぎ拔刀にて、抱き子を抱へ、これに附いて腰元四人、長刀を持ち、出て來て

皆々　ヤア〳〵、强惡非道の尊國さま、覺悟々々。

尊國　ヤア、小ざかしき覺悟呼はり。餓鬼を囮に賴光を、味方に附けんと思ひしに、鶍の嘴となつたるか。エヽ、口惜しい。この上は源家の祟のこの餓鬼も、まッこの通り。

ト刺し殺す。

良門　ホヽウ、潔よし〳〵。斯くなる上はこの蜘蛛切。イザ、尊國どのへ。

ト刀を渡す。

尊國　云ふにや及ぶ。蜘蛛切丸手に入るからは、サア、良門と名乘らつしやい。

良門　なんと。

尊國　この名劍を取らう爲の、尊國さまだワ。

良門　それに又、賴光の一子を殺せしは

尊國　それこそ、其方が姉たる七綾が、出產なしたる赤ッ子だ。賴光が一子を取つたと云つたも嘘、尊國さまと云

つたも嘘、光任どのと云ひ合せ、うまく〳〵嵌つた平の良門。我れも名乘れは源家の郎黨、秦の次郎正文といふ者だワ。

トばた〳〵にて興世、鬼切丸を持ち出て來る。

興世　イザ、保輔さまへ鬼切丸、お渡し申し上げるからは、偏へに助命願ひ奉る。

保輔　心得申した。

ト取つて

サア、良門と名を名乘れ。

良門　イ、ヤ、知らない。

保輔　例へ實名包むとも、大宅の太郎が繫ぎ馬の、似せ物を授け計りしゆゑ、姉たる七綾、實心に立返り、權之頭が返り忠にて、紛失の鬼切丸まで、手に入つたからは、包まず本名

皆々　名乘つた〳〵。

良門　エ、口惜しやなァ。似せ上使となつて入込み、頼光を亡き者にせんと思ひしに、保輔めに見顯はされしか。今は何をか包まん。葛原の親王が五代の孫、常陸の大掾國香が弟、下總の國猿島郡に內裏を構へ、自ら號せし平親王、將門が一子、將軍太郎平の良門、目近く寄つて、

面體を、拜み奉れ、エ、。

皆々　さてこそなァ。

良門　斯くなる上は、例へ味方の五萬六萬、足手纏ひに何かせん。某一人が百萬騎、片ッ端から死人の山だ、觀念なせ。

皆々　何を小穎な。

保輔　ヤレ、待たれよ。いま討取るは安けれども、七綾が最後の願ひ、良門が、めでたき花の顏見世なれば、源家の御仁心にて、一旦この場は見遁がし遣はす。繫ぎ馬の白旗は、其方に得させん、イザ。

良門　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト渡す。良門取つて

良門　エ、有り難や、忝なや。この白旗の手に入る上は、時節を待つて再び旗揚げ。

保輔　先づそれまでは

良門　平井の保輔。

保輔　平の良門。

良門　方々

大勢　さらば。

良門　これより二番目の發端始まり左樣。

ト打込みになり、この人數皆々二重舞臺へ上がる。この打込みの鳴り物、誂らへの通りに替つて、この道具を後へ引きあげる。

鳴り物にて、屋體は段々と斜に引き込む。下に扣へし人數詰め寄つて後向きになる見得。その前通りへ山組をせり上げ、人數を隱す。この途端に屋體の前へ、鼠木綿に雪の降り來る景色を書きたる一杯の幕を切つて落す。舞臺前雨落ちへ浪板せり上げ、高梁前へ雪を置いたる吊り枝の柳を下げる。知らせに附き佃騒ぎの鳴り物に替り、舞臺へ雪をかむつたる屋根船、障子立て切り、蓑笠の船頭、後向きに東の方より棹さして乘込んでゐる見得、船納まる。

ト留めの拍子木にて船左右に開く。この途端に後の山組一度に返ると、雪の積りし三圍土手、浪除の杭、枯れ蘆、船附の雁木、後に石の鳥居、樹木たつぷりと雪積りたる體。途端に日覆より雪大分降つて來る。道具納まる。

ト船頭思ひ入れあつて、正面を向く。船頭の八にて、

八　船の中へ思ひ入れあつて

モシ、おかみさんえ。そんならわつちやア武藏屋へ行つて、お煙管を尋ねて參りますよ。モシ、暮れたら提灯は棚にありますよ。モシ、蠟燭は枕箱にありやすよ。ア、、コレ〳〵、酉の市の土產の熊手へ、雪が積つたワ積つたワ。ア、、寒い〳〵、よく降る雪だ。

ト下駄を引ッ下げ、向うの雁木へ飛ぶ。土手の上を通り、鼻唄を唄ひながら下座へ入る。此うち始終佃節、生ごろしあり。眞土山の入相の鐘鳴る。屋根船より海老ざこの十、勇み肌の拵らへにて走り出て、船頭八が跡を見て、

十　コレ〳〵、船頭や〳〵。……コレ、おれが土產の熊手を床の間へ忘れたから、取つて來てくれろよ……。市川屋の小僧や。忘れやアがると聞かねえぞ。ヨ、、エ、、べら坊に早い足だ。

ト後を見て居る。船の障子を明け、お綱、袖頭巾の女房にて顏を出し

つな　コレ、十さん、呼びなさんな。打ッちやつて置きねえよ。歸ると惡いわな。

十　それだつて、酉の市へ行つて、熊手を買つて來ねえ

のは、あんまり間抜けに見えるわな。
つな　わつちの土産があるから、いるなら持つて行きな。
十　お前、いるであらう。
つな　ナニ、なくつてもいゝわな。
十　宿六が小言を云はうぞえ。
つな　うッちやつて置きねえな。これがの。
ト拇指を見せて
十　何のかのと云ふと、今にお前の所へ行くよ。
いゝかえ。怖くはねえか。
つな　カウ、十さん、眞のこッたによ。
十　江戸ッ子だわな。
つな　嬉しいよ。
十　とんだ氣紛れだ。
ト佃になり、障子を立て、海老ざこの十、中へ入る。
よい助、三度笠、丸合羽にて、尊像の箱を風呂敷に包み、スタ〳〵出る。後より道庵、醫者の拵らへ、傘下駄にて出て來り
道庵　コレ〳〵、お飛脚、お前急ぎだといつて、千住まではどうで行けねえ。アレ〳〵、あの向う川岸に今戸といふ所がある。そこへ行つて、百姓宿と云つて泊りなさい。
よい　ア、、そんならその今戸とやらへ行つて泊らうが、一人でも泊めやうか。
道庵　泊めは泊めやうが、物騷だよ。
よい　ナニ、物騷だ。そいつが嫌だよ。
道庵　それだから斯うしなさい。お前のその大事の物を預けて、お前ばかり宿へ泊るがよい。
よい　成る程、それもいゝわえ。併し、おれが持つて居ては、別して金になる品ではないが、これは多田の家に、無くて叶はぬとやらいふ、藥師如來の印子とやらいふ佛だ。しかも、天竺から來たの。ア、、遠い所から來たの。
道庵　ア、、そんなら持つてござるは、その印子の尊像、アノ、藥師如來の
よい　左樣々々、茅場町ではない、天竺の藥師だ。
道庵　モシ、それをお前、ちつと拜ませさつしやらぬか。
よい　アノ、この佛樣をか。
道庵　左やうサ。その代りには大雪になつたら、わしが内へお前を泊めて進ぜるが、なんと拜ませては下さらぬか。
よい　そりやモウ、旅は道連れ、世は情とやら云ふ事もあるから、成る程、泊めてもらはうが、わしは都の者ゆゑ勝手が知れぬ。旅籠はいくらでござる。

道庵　なにサ、わしは醫者でござるから、宿賃はいりませぬ。寒からうと氣の毒に思ふから、只泊めまするワ。

よい　それは忝ない。さう深切に云つて下されば、拜ませいでは。サア〱、拜まつしやい〱。

道庵　これは忝ない。誠よき所へ通りかゝりまして、有り難い尊像を拜みまする。

よい　サア〱、拜まつしやりませ〱。

ト風呂敷に包みし白木の誂らへの箱を開き、内より赤地錦の袱紗に包みし廚子入りの尊像を出し、渡す。

道庵　エヽ、これが藥師樣かな。

よい　左樣〱。

道庵　成る程、これは包んだ袱紗も結構な錦だ。誠にこれは有り難さうな。

ト見ようとして、一目散に逃げんとする。よい助うろたへ

よい　泥坊〱。

ト道庵を捉へろ。

道庵　コレ、滅相な。わしや泥坊ぢやアねえ〱。

よい　そんなら、寄越さつしやい〱。

道庵　シタガ、今夜ばかり貸さつしやい。

よい　エヽ、どうして滅相な。大事の物だワ。

トせり合ふはずみに、箱の蓋も身も川へ落す。この二品、川を流れる。道庵、尊像を右の手で握り、揚げようとする。よい助も取りすがる立廻りに、よい助は土手より突き落され、川へはまる。此うち捨て鐘、道庵思ひ入れあつて

道庵　よくしたものだ、あの、野郎めは川へドンブリ、印子の佛はおれが物。ドレマア、爰で開帳して。

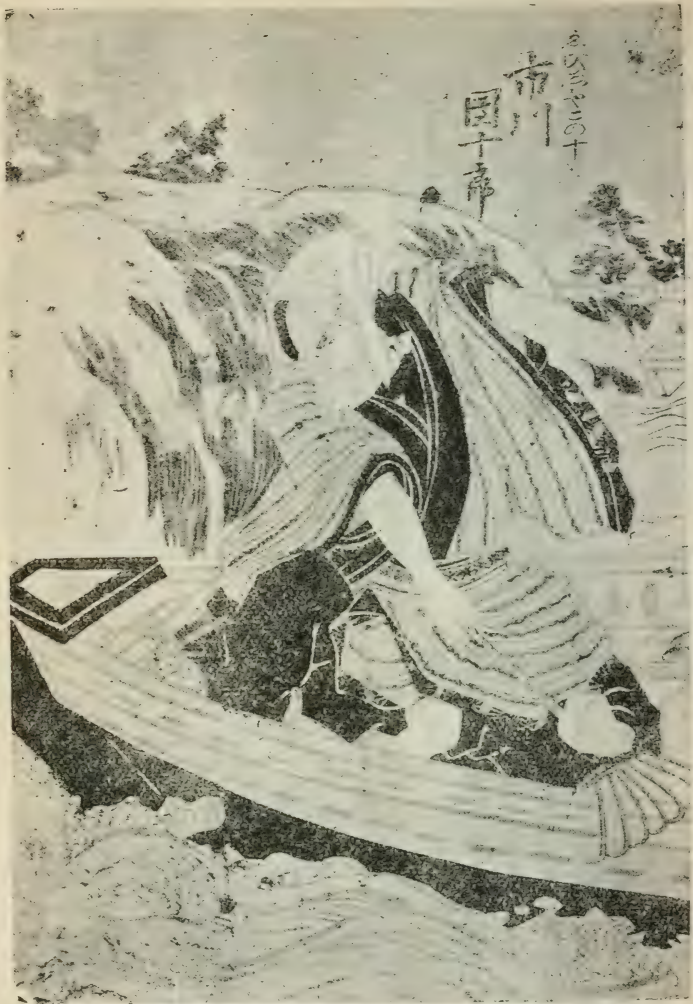
ト見ようとする。薄ドロ〱にて、握りしまゝ離れぬ思ひ入れいろ〱。

これはどうだ。おれが手へ藥師の尊像が吸ひ附いたか。……コレ、吸ひ附いたか〱〱。吸ひ附いたなら、これは蛸藥師樣か。コレ、離れさつしやい〱。ハテ、こいつ手古摺つた藥師だ。

トいろ〱離さうとする思ひ入れにて下座へ入る。矢張り佃節、土手の上より鬼七、ぱつち、半合羽、下駄、白張の傘、頭巾頰冠りにて出て來る。捨て鐘聞える。

鬼七　アヽ、コレ、長屋の手合ひはなぜ遲い。また喰ひ醉つて喧嘩でも始めにやアいゝが。どうでこの雪ぢやア、

初演の錦繪　五世岩井

半四郎のお綱　七世市川團十郎の十

今夜はずるけだ。みんなの來るまでに、船を呼んで置かう。……竹屋ア／＼。向う越しだア／＼。

ト呼ぶ事あつて

エヽ、雪のせゐか、聞えねえか知らん、

ト船を見て

アヽ、屋根船が居るワ。向うへ行くなら、便船したいものだが。

ト呼びかける心にて雁木へ下りかゝり、流れて居る箱の蓋を見附け

アヽ、なんだか板に書いた物が流れて來たワ。なんだ知らん。

トいろ／＼ありて、さしてゐる傘をすぼめて引寄せる。箱の身の方は、船の際を流れる。この時、船の内より海老ざこの十、出かゝり、捨ぜりふにて箱の流るゝを見て

十 アヽ、なんだ、何か流れて來たな。

ト竹熊手にて搔き寄せ引き揚げる。その時鬼七も箱の蓋を搔き寄せて取り揚げる。海老ざこの十、思ひ入れあつて

見覺えのあるこの箱は、こりやコレ、印子の

鬼七 藥師如來の尊像と。

ト蓋の文字を讀む、海老ざこの十これを開いて

十 ハヽ、割符の合つた

トお綱この時障子を明け

つな 十さん、寒いになんだな。

鬼七 ヤア、どうやら、嬶アが

ト見ようとする。お綱、障子をピツシヤリさす。海老ざこの十、手拭を冠る。この途端一度に木の頭、鬼七、箱を懷中して

ハテナア。

ト思ひ入れよろしく。ひやうし

幕

第二番目序幕　羅生門河岸切見世の場

役名――茨木屋鬼七 實ハ伊賀壽太郎。海老雜魚の十 實ハ渡邊綱。藪醫者、張臂道庵。貸物屋、金六。獸物屋、權助。鬼七女房、お綱 實ハ侍女苫屋。三月月お仙 實ハ純友息女、九重姫。路地番、喜之助。切見世女郎、お色。同、お蝶。同、お留。

本舞臺、三間の間、正面朝鮮矢來、左右に切見世の路地口、よき所に葭簀張りの山鯨に煮賣り見世、長床几を出し、すべて都東寺、羅生門河岸、雪積りし景色。爰に權助、もゝんじ屋にて、合羽を着たる中間を引ッ提へ居る。吉、富、兼、同じきほひにて立ちかゝり居る。喜之助、路地番の形にて鐵棒を持ち、これを留めて居る見得。雪チラ〳〵と降り、四つ竹節に通り神樂を打込む。

ト左右の路地より若い衆四五人、頰冠り下駄がけ、或は大笠をかぶりし大福餅屋、大笠をかぶりたる水屋など出入りする景色、舞臺の人數捨せりふあつて

權助　馱折助め、喰ひ逃げをさせるものか。動きやァがるな動きやがるな。

折助　ア、コレ〳〵、錢はあるわな。拂つたらよからう、放さつしやい〳〵。

喜之　モシ〳〵、權助さん、マア〳〵、錢を拂ふと云ふから、放さつしやいな〳〵。

權助　コレサ、喜之ぼう、てめえもいゝ事を云ふものだ、この折助めは、今日ばかりの事ぢやねえ。度々の事、必らず口を出さつしやるな〳〵。

喜之　そいつはいゝぶちものだの。

吉　ア、なにか、その折助が山鯨の喰ひ逃げか。小さな野郎だがイケ意地の汚ない間拔けだなア。

富　ナニ、間拔けな事があるものか。度々來て喰ひ逃げをするは、氣の利き過ぎたのだ。ナウ、さうぢやねえか。

兼　ほんに、イケ業晒しな折助だ。コレ、喜之ぼうや、こんな奴は長屋の子供の簪でも拔くものだ。面を覺えて置くがよい。

折助　ア、モシ〳〵、お前方も同じやうに、さう苛める事はねえわな。わしも雪降りのお使ひ、あんまり寒いから、そゝつた歸りに山鯨を六膳、酒を三合、當身の權助サ。

權助　おきやァがれ。權助とはおれが事だワ。どうで一文もあるまい、百五十の抵當に丸裸にしてやるべい。

ト立ちかゝる。

ト喜之助、これを留めて

喜之　コレサ〳〵、この雪の降るのに丸裸にして、この長屋の路地へ行き倒れになられちやア、路地番の厄介だ。扶持方棒でもふんだくつてやらつしやいな。

権助　ナニサ、癖になる、構はつしやるな。とは云ふもの
の、まさかさうもなるまいかえ。

吉　コレサ、権ばう、折助が着てゐる紙合羽でも、ふん
だくつてやるがよいわな。

権助　それもさうかえ。サア折助め、合羽を置いて行きや
アがれ。

折助　ア、、モシ、これを取られると、部屋頭に叱られま
す。堪忍して下さりませ。今度からキッと喰ひ逃げをし
ますまいよ〳〵。

富　エ、、業晒しな折助だ。

傘　脱いで行け〳〵。

権助　脱ぎやアがれ〳〵。

ト立ちかゝり、赤合羽を引ッたくる。皆々寄つて捨せ
りふにて、中間を花道の方へ突き飛ばす。

三人　エ、、一昨日うしやアがれ。

折助　覺えて居やアがれ。

三人　なにを、朴念仁め。

ト立ちかゝる。

折助　べらぼう、はッつけえ。

ト四つ竹節になり、向うへ逃げて入る。権助、合羽を
引ッたくつて

権助　籠襤褸に賣つても百五十にはならうか。

喜之　合點がいかねえの。

権助　取らねえには増しか。ドレ、葱でもこせえて置かう
か。

ト障子の内へ入る。皆々床几にこぞり寄つて捨ぜりふ。
また四つ竹節になり、向うよりお留、嬶についたる蔓、
木綿やつし、しみつたれな形にて、藥の通ひ箱を抱へ、
片ちんばの下駄、大丸の番傘をひろげ、車のやうに廻
しながら出る。後より金六、貸物屋にて、唐草の蒲團
三疊みばかり肩にかけ、番傘を提げ下駄がけ。お色、
お蝶、切り見世女郎の拵らへ、扱帶の形、朱鼻緒黒塗
りの足駄にて、垢摺りの附きたる手拭を持ち、錢湯の
歸り心。此うち雪小止みし體。捨せりふよろしく、直
ぐに本舞臺へ來る。

傘　カウ、みんな見や、いま湯から歸るやつサ。べら坊
に長い湯だの。

吉　裸參りの提灯が、聞いて呆れがねに來る。

いよ　エ、、吉さん、大分洒落が上がつたの。

吉　勿論サ。

傘　富公見さッし。この手合ひは湯屋でふやけたか、べら坊に脹れたやつサ。
てふ　打ッちやつて置きな、脹れてもいゝよ。
富　とんだ大福餅だ。
とめ　こし餡なら一つおくれな。
いろ　エヽ、この子はまた喰ひ物といふと、コレ、これに云ひ附けるよ。
ト小指を見せろ。
とめ　エヽ、さう云ふと留さんの、簪の理窟を云ひますよ。
いろ　云つて見や。只は置かねえぞ。それだから壻に附きやアがるワ。ざまア見やアがれ。
とめ　うッちやつて置きなせいョ。
いろ　エヽ、イケッ口を
ト立ちかゝろ。金六、喜之助留める。
金六　コレナ、お色さん、子供だわな。不承しねえな。この子もまだ年もいかねえものだ。藥を取つて來たら、早く行つて煎じて服むものだ。サアく、行きねえく。
てふ　コレく、小職のうちは、あの子達に可愛がられるが德だよ。あんまりつべこべ喋舌るもぢやアねえよ。ソシ、金六さん、その蒲團はどこへ持つて行く。
金六　こりやア、なにサ、中長屋のお常さんの客が、昨夜泊つての、今日またこの雪ぢやア歸られねえと云つて、今も幕の内を取りにやつて大じやれサ。蒲團が薄いといつて、三疊み借りに來たから持つて行くところサ。
てふ　エヽ、そりやア、アノ、いつもの烏丸から來る、吳服屋のおたきだよ。あの客は剛氣に、えてきちがあるよ。
傘　なんだ、烏丸だ、とんだ枇杷葉湯だ。
てふ　エヽ、おきねえな、あの客の眞似はならねえよ。
富　吳服屋の飯炊の眞似を、誰れがするものか。
いろ　コレ、さう云ひなさんな。來るたんびに廣さんの羽織が替るよ。
吉　そいつは見世の奴等の羽織を借りて來るのであらう。
二人　こいつは大笑ひだ。
いろ　借りてもようござりますヨウ。
三人　エヽ、なき蟲が熱くなるやつサ。ハヽヽヽ。
金六　ドリヤ、長屋へ置いて來ようか。
ト四つ竹の合ひ方になり、お留先に金六、蒲團をかつぎ、路地の內へ入ろ、この合ひ方にて、向うよりお仙、紅の板〆の肩入れせし一つ着、板〆の扱帶、五分長の襦袢、黑塗り朱鼻緒の足駄、笄にふすま袋をさげ、紅

の垢摺りの附きたる算盤絞りの手拭を下げて出て來る。後より海老ざこの十、肴屋の拵らへ、たろみの股引、足駄がけ、手拭を持ち、滋蛇の目の傘をさして出て來り、花道にて

十　コレナア、お仙ばう、主は湯へ行つたのか。べら坊に早い足だの。韋駄天の娘ぢやアあるまいし。ア、、此奴は飛脚の下齒になる氣だな。一時三里犬走り、股が摺れたら治丹坊を貼りねえ。

せん　エ、、措いてくんねえな。わつちやアいつも錢湯が早いが、今日はどうでも雪が降るせゐかして、ツイうつかりと長湯をしたの。それにマア、番頭のだりむくりが、顏見世を見に行くなら、わつちと一緒に行かうのなんのと、二つ三つ話すうち、雪の止むのを待つて居るやつサ。

十　得て湯屋の番頭にやア、角力の話しと、顏見世の評判。てめえ芝居を見たか。

せん　アイ、この中髮結のおしげさんと、中長屋の子供衆が連れになつてね。

十　葺屋町を見たか。

せん　アイ、暫くの幕からサ。

十　ア、、暫くは成田屋か。

せん　アイ、奇妙だよ。

十　久しいものサ。定めしあの眼玉で睨んだであらうよ。

せん　面白かつたよ。

十　なんだか、おいらは團十郎はきつい嫌ひサ。

せん　オヤ、江戸ッ子のやうにもねえ。

十　おへねえ氣紛れよ。ハ、、、、。ドリヤ、そこまで連れにならうか。

ト通り神樂になり、四つ竹節になつて、兩人本舞臺へ來る。

てふ　オヤ、お仙さん、わつちらは先へ來たよ。

せん　よく置去りにしなさつた。

喜之　モシ／＼、お仙さん、べら坊に長湯だの。さう云つてもまだ、わしが面よりは短かゝらうね。

三人　成る程、喜之助の面は夕顏だ。

喜之　措きなさいな。人そばえな。時に肴屋の十さん、この頃から長屋へ出るが、お仙さんは誠に美しい玉だね。

せん　エ、、無駄を。措きねえな。

十　イヤモウ、きつい評判よ。その上、この子は男嫌ひだと聞いたが、お仙ばう、主は男は。

せん　アイ、男嫌ひも氣が強いがね、どういふ事か、わつ

十　ちやア、男にひたつく事が剛的に否だな。
　そいつはいゝ氣前だの。時に喜之ぼうや、てめえあの店頭の鬼が娘アのお綱は、先度、切りを叩いたではないかえ。
喜之　さうサ、あのお綱さんは、ありやア先度の三日月お仙サ。前の牛四郎に似たと云つて、素敵に流行つた、二代目のお仙さんサ。この子は三代目のお仙さんサ。
十　てめえ、よく知つて居るな。
喜之　知らねえてわな。築地へ引ッ込んだ親父の彦左衛門が若い時分で、路地番をして居たものを。ほんに、その時はわしらは、まだ小僧ッ子の時分だ。
いろ　エヽ、厚かましい。去年厄年だといつて、大師河原へ月參りをしたぢやァねえか。
喜之　厄年だ。そりやア、二十五の厄だわな。
いろ　オヤ、四文錢で二十五か。
喜之　よしねえな、聞いた風な。
十　コレ、喜之助、そんならてめえ、親仁から二代目の路地番か。
喜之　さうサ。ほんの事だが、團十郎は七代目だが、築地は二代目サ。ちつと御由緒のある家柄サ。

十　成る程、面の長いのも二代目だな。
喜之　エヽ、措きなさいな。
　ト此うちかすめて通り神樂。
いろ　モシ〳〵、十さん、あの太神樂は、この雪の降るのに、なんで歩くのだえ。
十　ありやア、今日は冬至だからよ。
てふ　東寺とは、爰の羅生門のある所かえ。
十　ナニサ、唐の正月サ。
てふ　オヤ〳〵、唐にも正月があるかえ。
十　無くッてわな。
てふ　とんだ正月が唐にもあらうか。この洒落はどうだえ。
吉　エヽ、措きやアがれ。
十　時に喜之助や、おらアこの子の事について、ちつと話しがあるが、お主が親分の七五郎といふは、話しの出來る男か。
喜之　アイ、そりやアほんの事だが、解つた人サ。
十　成る程、近附きぢやアねえが、この羅生門河岸で、鬼と異名を取つた男、話しの出來ねえ事もあるめえ。外でもねえが、爰に居るお仙ぼうの事に附いて。
せん　エヽ、わつちが事に附いてとはえ。

十　ハテ、眞面目になるな。この頃からこの長屋へ、突出しの地もの同然。客を取るのも有やうは恥かしさうな始末會ひ。女嫌ひの海老ざこも、この女ならばと遂にない、味な心に信濃屋の、お仙ちやアねえお仙ばう。聞けば長屋の店頭、鬼が抱へといふゆゑに、ちつと話しがあつて來た。喜之助や、七ばうが内は、この長屋の何軒目だ。

喜之　アイ、奥から口へ二軒目サ。

十　どうで尋ねにやアならねえが、お仙ばう、ちつとてめえに話しがあるよ。

せん　アイ、身じめえにかゝるから、早く云ひねえ、なんだえ。

十　ハテ、あの手合ひが聞いて居るわな。

てふ　差しがあるなら、わつちは先へ行つて見世を張らう。ナウ、お色さん。

いろ　さうサ、お仙さん、後からお出でよ。

吉　おいらは山鯨で温まつて、ひやかすべい。

富兼　さうすべい〳〵。

喜之　そんなら十さん、お仙さんと二人殘つて

十　どうしたと。

喜之　きまりなんし。

ト四つ竹節になり、お色、お蝶、喜之助、路地へ入る。お仙、海老ざこの十吉、富、兼、山鯨の見世へ入る。お仙、海老ざこの十殘つて

せん　十さん、お前わつちへ用といふのは、あの事かえ。

十　オヽヨ、この中西の市の歸りがけに、雪に降られて榎木戸から、便船頼んだ屋根船で、其方の小指と呑み合つて、連れの手あひは二階へぶちあげ、跡は行火に四の蒲團、おつりきな話しになつたが、コレ、必らずてめえへお杉を頼むよ。

せん　そりやア、モウ、頼みなさる事なら、呑み込んぢやアあげようが、これに知れたらいゝかえ。

ト拇指を見せる。

十　ハテ、その時は又算段があるワ。コレ、てめえに含みを云つて置から、耳を貸さッし。

トお仙に囁く思ひ入れ。この時お仙が襟に掛けたる、荒磯錦の守り袋、ブラリと下がる。海老ざこの十囁くうち、この裂れを見附け、思ひ入れあつて切り見世女の三日月お仙が、襟に掛けたる掛け守は、世にも稀れなる荒磯錦、正しく伊豫の

せん　トお仙、驚ろき懐中する。
　エ。
十　ハテ、變つた裂れを
せん　もう話しは、これきりかえ。
十　必らず頼むよ。
せん　呑み込んだよ、十さん。
十　お仙ばう。
せん　廻つて來な。
　ト四つ竹節になり、路地の内へ入る。十、後を見送り
十　あの三日月を先にして、内の下齒を卷きあげる、そ
　れに附けても宮戸川、流れ寄つたるこの箱の、内なる品
　が
　ト前幕に取り得し白木の箱を懐より出す。
大屋　サア〳〵、急いでもらはう〳〵。
　ト向うの聲に思ひ入れ。
十　ドリヤ、仕掛けて見ようか。
　ト四つ竹になり、路地の内へ入る。直ぐにてんつゝ、通り神樂、雪降つて居る。向うより人足二人、絲立てをかけ雪の積つたる早桶を差擔ひ、大屋、やつし股引、草鞋、丸合羽を着て、編笠を冠り、施主の體にて、これに續いて、スタ〳〵と出て來る。舞臺へ來り
人足　モシ〳〵、お施主さん、どうやら繩が切れさうで、
　きら〳〵しますよ。
同　どうでも佛が川流れで、水腫れのせゐかして、剛氣
　に重たい。アレ〳〵、繩が切れさうだ〳〵。
大屋　ナニ、繩が切れさうだ。爰でマア佛をこぼしては、
　しんまつがし憎い。マア〳〵、山鯨の前へ下ろせ〳〵。
兩人　さうしませう〳〵。
　ト早桶を下ろすはずみに繩は切れる。
大屋　それ〳〵、繩が切れたワ〳〵。こゝでゆつくりと締
　め直すがよい。
人足　さうしやせう〳〵。モシ、大屋さん、爰らで繩を貰
　ひなさんし。
大屋　さうしませう〳〵。幸ひ爰の見世で貰ひませう。…
　…モシ〳〵、ちとお頼み申します〳〵。
權助　オイ〳〵、此方へお入りなさいまし。牡丹かえ、紅
　葉かえ。
　ト赤合羽を持ち出る。
大屋　イエ〳〵、繩を一つ下さい。いま爰の見世の前で早
　桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりました。早く繩を

下さい〳〵。

ト權助、腹を立て

權助　なんだ、人の見世の先へ死人を下ろして、繩をくれろ。此奴はなんだ。うぬが態を見やアがれ。紙雛の施主か、節季候の旅立ちか、おえねえ氣紛れだ。ちよつとも置く事はならねえぞ。この死人を、其方へ持つて行きやアがれ〳〵。

ト早桶を突きやる。

大屋　コレ〳〵、こなたは山鯨の亭主か。コレ、繩が切れたなら、見世の先であらうが、ねいし、お大名樣のお玄關前であらうが、下ろしたがどうした。死人を下ろす事は法度か。さう强情を云はれちやア、五日でも十日でも、この死人を爰の見世へ置かにやアならねえ。不承ながら、置いてもらはう〳〵。

人足　さうだ〳〵、持つて行く事は否だ〳〵。

ト口々に喚く。この時勇みの三人出て來り

吉　此奴はなんだ、山鯨の前へ死人を下ろしたな。

富　そいつはとんだ話しだ。薄穢ない。

銀　持つて行きやアがらねえか。

權助　持つて行きやアがらねえと、うぬらは、うぬ、締めるぞよ〳〵。

大屋　なんだ、施主を締める。サア、締められるなら締めて見やアがれ。

人足　締められべい〳〵。

權助　イケふざけた奴等だ。若い衆や、締めさつしやい締めさつしやい。

三人　合點だ。死人擔ぎを、ぶツ挫け〳〵。

ト立ちかゝる。喜之助、路地より鐵棒を持ち、飛び出で

喜之　コレサ〳〵、譯は知らねえが、靜かにしなんし〳〵。

ト入つて留る。

權助　否だ〳〵。おれが見世に死人を置かれちやア、濟まされねえ〳〵。

人足　濟まさねえと云つて、どうしやアがる〳〵。

權助　斯うするわえ。

ト早桶の棒を取つてぶつてかゝる。入り亂れになり、桶の繩切れ、内よりよい助の死人、經帷子の形、頭陀袋を掛けたるが轉げ出る。皆々捨ぜりふにて、思はずよい助を踏み散らし、見世にある手桶を取つてぶツつける。この水、よい助にかゝりその上踏まれ、息吹き

返す思ひ入れ。皆々これを知らず同士打ちに叩き合ふ。よい助、心附きたる體にて、スッと立ち、喧嘩と聞いてこの中へ入り裁人の思ひ入れにて

よい　待たつしやい〳〵。

ト捨ぜりふにて留めて廻り、權助の襟をひッ抱へ

おれが預かつた、預けさつしやい預けさつしやい。

皆々　否だ〳〵、否だワ。

トよい助の形を見て

イヤア、わりやアなんだ。裁人か〳〵。

よい　オヽ、裁人に濁りを打つた、ざいにんだ。

皆々　イヤア、幽靈だ。

ト膽を潰し、ワッと云つて兩方の路地へ逃げて入る。よい助一人殘つて、早桶のこはれ、又は手前の形を見て思ひ入れ。矢張り此うち通り神樂。

よい　アヽ、そんならおれは、川へどんぶり嵌つたと覺えたが、それから後は夢うつゝ。このマアおれが態といひ、そんなら死んだか。死んだら爰はもう地獄か。コレ、爰は地獄か。おれは死んだか。

トうろ〳〵あたりを見て、路地口の行燈を見て、路地口を覗いて見て

イヤ〳〵、どうやら娑婆で見た路地口。火の用心に、路地四ツぎり、紙屑籠のかゝつた樣子。そんなら爰は地獄ではない。その近所の切見世か。ア、コレ、何にしろ寒い事だぞ。

ト捨ぜりふ。捨てある合羽を見附け、ソッと取上げ

殺す神あれば助ける爰に紙合羽、娑婆か冥土か知らねども、どうで濡れたる紙合羽。

ト手早く着て

ドレ、そゝつて行かう。

ト思ひ入れ。四つ竹節、鐵棒の音にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う白地紋からの紙にて張りたる唐紙、よき所に妙見樣のお宮を飾り、上の方障子屋體、下手惣銅壺の竈、水瓶、臺所道具、煙り返し、誂らへの八間を吊し、荒神棚に高盛りの鹽、よき所に木綿蒲團を掛けたる炬燵。鬼七、切り見世亭主の拵らへにて、首きり入りあたりながら、笊の中にて鴨の毛を引いて居る。箱火鉢の銅壺へ燗徳利をかけ、女房のお綱、燗をして居る。お仙、化粧して居る。道庵、さんするなる醫者の拵らへ。右の手を懷へ入

れ、張臂をして、お留が脈を片手にて見て居る體。

いつもの所へ門口、雪しきりに降る。すべて羅生門河岸の切見世の內證、樂屋の方は、そゝり唄、鐵棒の音、女郎の呼びかける聲にて道具とまる。

ト矢張りこの模樣、仕組みよろしく、かすめて、四つ竹の合ひ方

鬼七　道庵さん、どうだね、その餓鬼はものにならうかえ。

道庵　ならいでは。愚老がかゝつた病人に、憚りながら一人でも怪我のあつた例しがないぢや。もう、山歸來もよからうかえ。

鬼七　ナニ、その餓鬼は、去年判人が、お松を値をよく抱へた禮に、負けて置いて行かうと、證文もない玉だから、死んでも元値な女サ。

とめ　わしらは、餘ッぽどしひなだ。氣を利かしてこの熊手で、門口の雪でも掻かうか。

ト前幕に出した、酉の市の竹熊手を持つて出ようとする。

つな　コレ〳〵、そりやア、雪掻きぢやアねえ、酉の市の落葉掻きだわな。そんな無駄をせずと、早く仕掛けて服まねえか。何時だと思ふ、もう七ッだわな。イケ埒の明かねえ。……、ほんに埒の明かねえと云へば、コレ、お仙や、てめえもマア、いゝ加減に身仕舞ひもしやな。外の子供は疾に見世を張つて居るよ。あんまり埒が明かねえぞ。

せん　アイ。どういふ事か、今日はいつそ白粉の灰汁が出ないでよ。

つな　云ひ譯をせずと、早く顏も仕習ひなせえなよ。

トこの時向うの襖を明けて、おいろ、四文錢を一本出し

いろ　アイ、おかみさん、口明け。

つな　奇妙だの。

ト取つて、鼠鳴きをして錢箱へ入れる。この時また襖の內にて、戸をたてる音する。お綱、直ぐに引手をちよいと明けて覗き、また締めて置く。

鬼七　お色が見世へ上がつたは、あの奴ぢやアねえか。

つな　イヽエ、初會サ。

ト火鉢の火を煽ぎ居る。お留、七輪へ藥を仕掛ける。

道庵　イヤモウ、商賣といふものは、何になつても苦勞は絕えぬ。爰の內などは樂に見えても、それぞれの心遣ひが多からうて。イヤ、それはさうと、お主の爲には血筋

ではないが、マア〱、伯父ぢやて。綱が伯父のこの道庵。死んだ女房ば伯母も同然。イヤモウ、工面の悪いその中で、女房に死なれ、いつそ仕切ればよかつたに、今日は初七日、ふた七日、イヤ三十日、それは〱、七日七日の物入り多いゆゑ、よんどころなく今日は無心に來たのぢや。お綱、さう思つてくりやれよ。

つな　エヽ、そんならお前、七日の物入りが多いから、無心に來なさつたかえ。

道庵　氣障であらうが、七五郎どのと相談してな。

鬼七　ハテモウ、そりやア、外でもない、伯父からに頼んだこなさん、嬶アのお綱と相談して、七日〱の物入りも、この鬼七が聞くまいものでもねえが、嬶アが綱の伯母といふなら聞えたが、綱が伯父とは新らしいわえ。

ト この時門口の脇の路地の口より、金六、大風呂敷を擔ぎ、袋に入れし大小を持ち、出て來り

金六　七さん、お内かえ。

ト入る。

つな　オヤ、貸物屋の金六さんか。持つて來たのは、そりやアマア、なんぞ賣り物か。

金六　ナニサ、こりやア、向う屋敷から質に取つて來た、上下と大小。直ぐに内へ歸るところだが、今親方が内に居る時分、逢つちやアちつと悪い理窟があるから、少しのうち此方へ置いてくんなさい。

つな　お安い事サ。爰は鬱陶しい。あの座敷へ行つて寝轉んでお待ち。蒲團があるよ。辻番がぬるくば天窓を張んな。

鬼七　コレ、損料屋、今日は冬至だ。いま鴨雑煮が出來るよ。

金六　そいつは稀代だね。モシ、御免なさいませ。

ト道庵を見て

オヽ、道庵さんか。コレ、お前、この中の蒲團円疊はどうするな。

道庵　ハテ、もう二三日貸さつしやいな。おれも工面が悪くて、嬶アが七日〱の物入りをさへ、借りに來る仕儀ぢや。親方へいゝやうに頼むわな。

金六　エヽ、久しいものサ。イヤ、そりやアさうと、いゝ所で逢つた。ちつと腕を見てくんな。

道庵　どうしなさつた。寒氣にでも當つたのか。ドリヤドリヤ。

ト片手にて脈を見る。

金六　コレナア、道庵さん、お前イケかぢけた。なんぼ寒いといつて、懐手をして、片手で脈が知れるものか。此方の手を出しねえな。

ト出させようとする。

道庵　ア、、コレ〳〵、右の手はちつと、どうも。

金六　なぜ出さねえな。

道庵　サア、出されぬ譯は。……アノ、オ、、それ〳〵、愚老は卽ち張臂道庵、これは醫者の張臂名代どころ、そこで片手は

金六　エ、、出しなさいな。

ト無理に出させようとする。この時向うの襖を明け、お蝶、小錢百を持つて顏を出す。

道庵　エ、、惘りした。

てふ　アイ、おかみさん。

ト小錢をコロリと出す。取つて思ひ入れ。

つな　久しいもんだの、氣を附けな。鹽屋の奉公ばかりさせるの。

てふ　エ、、自烈たいヨウ。

ト唐紙をたて、門口の戸を叩く音する。流行り唄になる。

金六　コレサ、脈を見て下さいよ。

道庵　ハテ、今見るよ。

金六　兩手出さつしやいな。

道庵　ナニ、片手でも解るわな。

ト爭ひながら、金六、大小風呂敷包みを持ち、障子の内へ入る。お仙、形を直して居る。暮れ六ツの鐘。お留、行燈をともす。

つな　コレ、お仙や、いゝ加減に見世へ出やな。

せん　アイ、もうようござりやす。ドレ、見世を張つて

ト思ひ入れあつて、唐紙を明けようとする。お綱、目を附け居て

つな　カウ〳〵、待ちや、なんだマア、てまへのその着る物の着やうは。コレ、爰へ來や。コレ、見つともない、猪首になつて居るわな。

トいろ〳〵直す事あつて

てめえの形はどうも人柄がいゝよ。なんの事はねえ、椎茸髱の御守殿の拵らへだ。それで商賣になるもんぢやねえよ。マア、立つて見な。立つて見な。コレ、見世を出て、長屋歩きをして無駄を云つて歩くにも、それ〳〵の風があるわな。コレ、見や、煙管も斯う持つわな。勇み

手合ひは勿論、坊主でも屋敷者でも、但しは生眞面目な親仁でもノ、淺目であらうが、顔と顔を見合つたが最期の助、につこりと笑つてノ、顋で斯う呼ぶわな。コレ、よく見な。……カウ〳〵、町人さん、寄んねえな、カウカウお屋敷さん、カウ見たやうだによ。なんだなう、人ぢらしな、性を附けやヨウ。……とノ、なりたけ下卑にやりねえ。向うに角の八本は、勇みが來ようが、グッとこちらから呑んでかゝりねえた。さうして、まだ前髮に油氣があるぞ。誰れが結つた。

ト髮を見て思ひ入れ。

せん　お崎さんは氣合ひが惡いと云つてね、今日の髮はおよしさんサ。

つな　道理だア。あの髮結ひさんは、餘ッぽど手が下がつたよ。サア、おれがやうに遣つて見や。

せん　アイ。聞いておくれ。

ト思ひ入れあり

カウ〳〵、町人さん、カウ息子さん、カウ見たやうだよ。斯うかえ。

つな　マア〳〵、そんなものサ。

せん　まだ敎はる事があるかえ。

つな　まだ〳〵ある段ぢやアねえが、マア〳〵、今日はそれで措かう。

せん　モシ、慥かまだありやすぞえ。

つな　無くつちやア。まだこの外に肝心のせりふがあれど。

鬼七　そりやア、なんだ。

つな　こりやマア、今度の事サ。

鬼七　そんならお仙に敎へる事は

つな　內侍でござんす。

鬼七　ほんに、その事よ。

つな　どうして。こりやア、この子には荷が張るわな。

鬼七　アヽ、出來まいか。

つな　餘ッぽど不器用だもの。

せん　モシ、わたしや見世を張りますよ。

つな　エヽ、知れた事だ。早く行きねえな。

ト矢張り唄になり、お仙、上の唐紙を明けて見世へ出る思ひ入れ。この時向うの唐紙を明け、お蝶うろたへ逃げて出て來り

てふ　アレ、幽靈だよ〳〵。エヽ、幽靈が見世へ上がるわな上がるわな。

ト駈けて來る。跡よりよい助、頭陀袋の六道錢を持ち、

よろり〳〵と追ひかけ出る。皆々驚ろき

鬼七　ヤア、幽靈だ〳〵。

ト皆々立騒ぐ。この音に喜之助、鐵棒を持ち、門口より走り出て

喜之　なんだ、喧嘩だ〳〵。

鬼七　イヽヤ、幽靈だ〳〵。

喜之　親方、幽靈はどこへ出ました。

鬼七　水瓶の間へ入つた。

喜之　そいつァ溝鼠ぢやァねえか。親方、薪ざつぱで追ひ出さつしやいな。

鬼七　爰に居やアがるワ。

ト水瓶の間を突く。よい助、逃げて出る。

皆々　ソリヤ、幽靈だ。

ト立騒ぐ。よい助追はれて、上の方緣の下へ逃げて入る。

てふ　カウ〳〵、親方さん、幽靈は緣の下へ入つたよ。

鬼七　ナニ、緣の下へ。そいつは九太夫の幽靈かも知れねえ。

喜之　親方、無駄を云はずと、行燈を持つてござい。

鬼七　合點だ〳〵。

ト金六、出て來り

金六　なんだ、幽靈が、どこへ出た〳〵。

鬼七　聞かつしやい。お蝶が見世へ幽靈が上がつたを、あつちこつちへ追ひ廻して、緣の下へ追ひ込んだワ。藪を突ついたら蛇が出ようが、緣の下を突ついて、幽靈を追ひ出すのだ。

金六　惡くすると喰ひつくよ。

皆々　追ひ出せ〳〵。

ト棕櫚箒、鐵棒、てんでに薪ざつぱなどを持ち、緣の下を覗く。

喜之　どうだ〳〵、居るか〳〵。

鬼七　幽靈は奧の方へ入つて、目ばかり光らせて居るワ。

皆々　其奴だ〳〵。引摺り出して、喰ひ附かれるな〳〵。

ト緣の下を突つく。よい助苦しがり、また駈け出る。

ソリヤ、幽靈が出たワ。

ト鬼七、よい助を取つて押へ

鬼七　騒ぐな〳〵、幽靈は生捕つたぞ。繩を持つて來い繩を持つて來い。

喜之　合點だ〳〵。幽靈を逃がさつしやるな。

皆々　縛つて置け〳〵。

ト喜之助繩を出す。鬼七縛らうとする。よい助、泣き
ながら手を合せ

よい　ア、コレ、待つて下さい〳〵。

つな　コレナ、待ちなさい。幽靈が何か遺言があるさうな。
聞いてやりねえな〳〵。

鬼七　なんだ、幽靈が遺言がある。今になつて卑怯な奴だ。
コレ、エヽ、誰れだと思ふ、羅生門川岸で切見世の、茨
木屋の鬼といはれた七五郎。鬼の内へ迷つてうせた幽靈
め、おれには何の恨み、何の祟りで出やアがつた。

よい　サア、幽靈が爰へ迷うて、出て來た用は

皆々　幽靈が出た用は。

よい　恥かしながら幽靈は、鐵砲はなしに來たわいなア。

皆々　おきやアがれ。

鬼七　アヽ、そんなら此奴は、そゝりにうせた幽靈だな。

つな　コレ〳〵、幽靈さん、勤めを持つて來なすつたか。

よい　六道錢を握つて居ます。

てふ　モシエ、親方、幽靈がわつちに、六道錢があるから、
殘りの九十を達引けとサ。イケ厚かましい幽靈だね。

喜之　アヽ、待ちなさい〳〵。そんならこの幽靈は、先刻
に山鯨の權助が見世で、轉げ出たその時の死人だな。

よい　左樣々々、川へ嵌つた土左衛門、投げ込みのその道
で、蘇生つた、めでたい亡者サ。

皆々　イヤ、とんだ話しだ。

金六　そんならこの幽靈は、無宿者だね。

よい　左樣でござります。とてもの事のお情には、親方、
この亡者を、あなたの内の居候ふに、お願ひ申しまする。

鬼七　成る程、鬼が内へ幽靈の居候ふ。こいつは話しの種
だ。お綱や、置いてやらうか。

つな　それだつてお前、どこの人か知れもしねえに。それ
にマア、死んだといふから、病人かも知れない。

鬼七　ハテ、そりやア案じるな。奥にやアお主の伯父の道
庵、お醫者が附いて居れば、氣遣ひはない。何しろ醫者
にかけるがよい。

喜之　そりやア、後生だね。カウ〳〵、道庵さん〳〵。

道庵　オイ〳〵、愚老に用かな。

ト出て來り

なんぢや、病家かな。アヽ、大抵の所ならお斷わり申し
て。

鬼七　なにサ、病人ぢやアねえがね。今日路地口でよみぢ
返つた新佛が、こなさんの療治で、達者になりさうなら、

居候ふに置いてやる積り。
道庵　ア、、蘇生つた佛が、居候ふになりたいと云ふのかた。ドレ〳〵、脈を見てやりませう。どこに居ます。
よい　ハイ、私しでござります。どうぞ御覧じて下さりませ。
道庵　ハア、、、、、。亡者は貴樣か。ドリヤ、伺ひませう。
ト片手で脈を見る。
よい　モシ〳〵、お醫者樣、あなた、片手をどうなされました。
道庵　ハテ、この人はいらぬ事を諄ねる。張醫をせねば醫者やうでござらぬ。斯う右の手は、大概の病人では出しませぬで、左樣に思し召せ。貴樣ぐらゐの脈は、片手でも片足でも、間に合せるの。
よい　ハテ、大風な醫者だ。
ト兩人顏を見詰め、いろ〳〵思ひ入れあつて
道庵　イヤア、、、、この死人は。
よい　この醫者は。
道庵　慥かに、この中隅田堤で、殺した飛脚だワ。
よい　ヤア、そんならその時、おれを殺した

道庵　イヤ、これは餘人に見せさつしやい。
ト行かうとする。
よい　ドッコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。おれが敵の藪醫者め。おれが敵だ、勝負〳〵。
道庵　エ、、べら坊め。
ト片手で突き飛ばし、逃げようとする。
喜之　ア、、コレ、どうした〳〵。
ト立騒ぐを、道庵突きのけ、逃げようとして、門口より路地へ駈けて入る。よい助、追つかけて行かうと門口へ出る途端に、落間より、道庵に似寄りの見物、花道へヒョイと上がる。
よい　ウヌ、醫者め〳〵。
ト武者振り附く。見物うろたへ、向うへ逃げるを追ひかけて、揚げ幕へ入る。
金六　イヤ、とんだ氣まぐれだ。
ト金六、お留、障子の内へ、お蝶は見世へ行く。喜之助、露路へ鐵棒を突き入る。此うち流行り唄、鬼七、お綱、殘る。正面の襖を明け、お仙、腹立ちたる氣色にて、ピンシャンしながら
せん　エ、、わつちは否だわな。泊りを取るかなんのと、

アタ嫌らしい。そんな事は外の見世へ上がつて云ひな。
わつちらは御免だよ。
　トこのせりふにて出て來る。鬼七聞いて
鬼七　コレ〳〵、お仙や。なんだてめえ、どんな客が上がつたのだ。何を泣きッ面をして熱くなるのだ。
せん　それだつてお前、わつちにふく見世を云ひながら、そんな理窟の悪い事をすると、親方のアノコレがね。
　ト小指を出して、思はずうか〳〵と言ふ。お綱思ひ入れ。
鬼七　コレ、親方のコレとは何か。このお綱がどうした。
せん　サア、こりやアね。
鬼七　これがどうした。
　トこれにてお仙思ひ入れ。お綱思ひ入れあつて
つな　エヽ、なんだな。この子は勤めするやうにもねえ、これとは何か、アノ。
　ト指を出して、思ひ入れあつて
エヽ、なにか、馴染の客人が、小指を切つてくれろとでも云つたのか。そりやア、モウ、この商賣にやアいくらもある事だわな。何をそんなにうろたへて、騒ぐ事はねえわな。
せん　イヽエ、それでも十さんがね。
鬼七　十とは誰れだ。
つな　ハテ、いゝわな〳〵。十とは何か、客人が頭の物を質に置くから、さうは云はれず、七といふ字を十の字に棒を曲げずに、ナア、さうか〳〵。なんのそれを、エヽ、仰山な。娘子供ぢやアあるまいし、義理を立てる氣前で、その位な事を、切り拔ける働らきがねえとは、エヽ、素人にも劣る。
　ト目顔で思ひ入れ。鬼七もこなしあつて
鬼七　イヤ、そりやア、アノてめえが、味にせりふに目を附けて云ひ廻すが、その位な事に如才のある女ッ子でもあるまい。聞けば男が嫌ひだの、どうの斯うのと、小間しやくれたそのお仙。鬼と云はるゝ親方が、手を下ろして附きものか、但し狐か化物か、そこらを買ふ奴が幾人あつて、現在の亭主を鼻毛に
つな　エ。
　ト思ひ入れ
鬼七　サア、あるまいとも云はれぬから、この女ッ子を間ひ條にかけて、善悪黒白を分ける。差詰めこのお仙、堅木の薪の折れる程、敲き折つて。

ト お綱へ當て、お仙を捉へて、有り合ふ薪にてぶちにかゝる。お綱留めて

つな　コレサ、何も知らねえこのお仙を、むぜッかいな、可哀さうに。

ト留める。

鬼七　コレサ、お綱、なんにも知らねえとは何の事だ。そしてこの餓鬼が、何ぞ知つて居る事でもあるのを、てめえ知つて居るか。

つな　なんだねお前、味に搦んだ物の云ひやう。どうかそれぢやア、お仙にわつちが

鬼七　頼んであると誰れが云つた。云へば云ふ程お主はおれに、味にせりふへ節を附けて

つな　コレナ、さうぢやアねえがね。

鬼七　さうでないなら、構やるな。

つな　それだといつて、可哀さうに。

鬼七　ハテ、仕置きをするは當り前だワ。

ト打たうとする。お綱留める。よき途端に門口より、權助、うか〳〵と出て來り、折檻と見て內へ入り

權助　モシ、親方、權助が來やした。マア〳〵、待ちなさいまし。こりやア、また子供衆の折檻かえ。モシお綱さん、お前この子によく云ひ聞かせなさいな。七さんには店行事から用があつて來やした。ちよつとマア懸合ひがあるよ。

鬼七　用は後でもいゝ。延びて居さつしやい。

權助　ハテ、今聞かにやアならぬ羽目だ。ちよつとわしに逢つて下さいよ。

鬼七　エヽ、今行くわな。

權助　ちよつとあよびねえな。モシ、仲間づくの事だわな。

ト無理に引ッ張り〳〵、障子の內へ連れて入る。お綱、お仙、後を見送り、思ひ入れあつて

つな　エヽ、この子としたことが、てまへが不氣轉な事を云ふから、ツイおれまでが、凹むやうな事になるわな。

せん　それだといつてお前、あの十さんがお前さんの事を頼みなさるその口で、理窟の悪い事を云ひなさるからね。

つな　ハテ、もういゝわな、こんな時にはうつかりと物を云ふと、得て間違ひあるものよ。そりやア、さうと、てまへ、あの大事の守を持つて居るか。

せん　アイ、持つて居るのを、あの十さんが見なさつて、男の起請であらうから見せろと云つて、書き物を

つな　エ。

ト思ひ入れ。この時道庵、路地より出て門口にて內を窺ふ。お仙、守をお綱に見せる。

そんなら守の書き物を、あの十さんが見かぢつて、無理な理窟を。

せん　アイ。

ト云ふ顏よく〳〵見て、憂ひを含みし思ひ入れあつて

つな　添へし守は荒磯の、伊豫の國にて、父上の、お情受けて安々と、產み落したる姬君に、斯く淺ましき

ト思ひ入れ。

道庵　さては。

ト思はず云ふ。お綱、恟り思ひ入れ。

つな　エヽ、見世を張りねえな。

ト唄になり、お仙思ひ入れあつて、障子の內へ入る。直ぐにこの唄にて道庵、門口をソツと明け

道庵　お綱〳〵。

ト入る。

つな　伯父さんかえ。

道庵　オヽ、道庵ぢやが、コレ、お綱、てめえには改めて、ちつと話しがあるぢや。不承であらうが聞いておくりやれ。

つな　そりやア、モウ、伯父さんの話しがあると云ひなさしつちやア、何事おいても。

道庵　コレ〳〵、その伯父さんも有やうは、赤の他人のこの道庵。七が所へ仲人の、その橋渡しが緣になり、賴まれた假の伯父だが、今日といふ今日緣を切る。さう思つて居やれよ。

つな　モシ伯父さん、緣を切るとはえ。

道庵　ハテ、純友の餘類だから。

つな　アヽ、コレ、それをどうして。

道庵　コレ、隱しやるな。殘黨と知つたは抱へのあのお仙、おれが外から聞くとも知らず、荒磯切れの懸け守、純友が方に限る裂れ、親の筐と二人して、話して居たを、見かぢつたが、なんと違ひはあるまいがな。

ト お綱、思ひ入れあつて

つな　さう伯父さんに知られちやア、隱したとても詮がねえ。併し守のあの裂れは、荒磯錦か知らねども、純友とやらいふ人の、別して身寄りの

道庵　ないとは云はさぬ。達てお主が云はねえと、此まゝわれを連れて行き、云はせる所でしやべらせる。この道庵と會所へ來やれ。

ト左の手にて引立てんとする。お綱振り切り

つた　エヽ、措きなさいな。詮議をされる覺えはない。

道庵　イヽヤ、詮議をせねばならぬ。手向ひすると伯父の威光で、

ト叉かゝるを、片手ゆゑお綱振り切る。

エヽ、自烈つたい／＼。おれが片手で不自由だと思やアがつて、馬鹿にするか。兩手はあれど右の腕に此やうに、握つた物が

ト右の手を出す。これに前幕の印子の尊像、袱紗の包みを握り詰め居る。お綱これを見て思ひ入れあつて

つな　こりや、伯父さんの右の手に、握つてござんす袱紗の裂れ。さも堆かき

ト腕を捉へ、よく／＼見て

どうしてこれを伯父さんは

道庵　話すも餘り慾張りだが、この中隅田の雪の日に、知らぬ飛脚が持つて來た、白木の箱のその中に、藥師如來の印子の御佛。多田の家から持つて來たと、聞くと其まま大金に、ならうと思つて物したが、佛の罰か此やうに握つた儘に手を離れず、因果な佛に見込まれて、今ではどうも道庵が、イヤ手古摺つて居る最中よ。

つな　エヽ。そんならそれは、アノ隅田の、雪のその日と云はんすが、その時纜か屋根船の、際へ流れし白木の箱。割符を合すその尊像。モシ、伯父さん、どうぞわつちにくんなさい。

道庵　イヤ、モウ、今では益體な。手前療治にいかないこの手、離れる事なら離したい。ならう事なら離してもらはう。

つな　そんなら、どうでも、握つたその手が離れぬかえ。離れぬならば斯うしねえ。この合口でその指を、切つたら大方離れさうによ。幸ひお前の差して居る

ト道庵が差して居る合口を拔いて、切らうとする。道庵うろたへ

道庵　ヤア、その合口で指を切る。イヤ、滅相なことを云ふ。指を切られて堪るものか。それよりわれを純友が、身内の詮議を

ト片手でかゝる。お綱、合口を見て

つな　伯父さん、お前、その指を切つてしまひな。

道庵　おきやアがれ。伯父の五本の指を切つて、心中にもなるまい。無駄をせずと、會所へ來い。

つな　五本の指をくんなさい。

道庵　コレ〳〵、危ねえ、刃物を寄越せよ。

つな　指をくんなよ。

道庵　エヽ、無駄をするた。

　ト片手で突き廻す。お綱、合口を両手に握り、道庵の指を切らうとして、思はず腕首をよき程落す。ドロドロになる。血の穢れにて、腕を放れ、尊像落ちる。道庵苦しみ倒れる。お綱、思ひ入れあつて

つな　さては血汐の穢れにて、握りし尊像。

　ト取上げる。

道庵　うぬ、大それた、切つたな〳〵。

つな　ア、コレ、誠に怪我だよ。

道庵　怪我だといつて濟むものか。その尊像を寄越しやアがれ。ニヽ、コレ、どうでも片手は不自由だ。アレ、お綱が伯父を、此やうに切つたぞ〳〵。切つたぞ〳〵。

　ト武者振り附く。よろしく個節が何なりと騒ぎ唄、鐵棒の音、兩人立廻りよろしく、トヾ、道庵片手にて煙燵蒲團を取つて投げ、又は櫓をも取つて打ちつける事よろしく、お綱、道庵を仕止め、死骸を炭櫃の下へ入れ、切つたる手首、合口も下家へ打込み、また元のやうにして、蒲團にてこぼれし血を拭き、元のやうに櫓にかけ、尊像は懐中してホッと思ひ入れ。

鬼七　お綱や〳〵。

　ト呼ぶ。お綱思ひ入れ。鬼七出て來り

　コレ、嬶アや、わりやア先刻から爰に居るか。

つな　アイ、アイ、お仙に何やら教へて居て。

　ト思ひ入れ。その顔を眺めて

鬼七　なんだこの女は、色青褪めて、キヨロ〳〵と。コレ、てめえ、なんぞ氣になる事でもあるか。

　ト思ひ入れ。

つな　アイ、イ、エ。

鬼七　アイ、イ、エ。そんなら氣色でも悪いか。

つな　アイ、どうも氣合ひが。

鬼七　悪くば藥でも服むがいゝ。伯父御も居たぞよ。見てもらやれた。

つな　アイ〳〵。

　ト思ひ入れ。

鬼七　伯父御はどこにだ。呼んでやらうか。コレ、道庵さん。

つな　アヽ、モシ。もうよくなつたよ。

鬼七　ハテ、押すと悪いよ。コレ、紙入れに紫金錠があつ

た。

つな　アイ。

ト思ひ入れ。

鬼七　エヽ、早く服みやれな。

つな　アイ。

ト唄になり、お綱思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。鬼七殘る。この唄を借り、海老ざこの十、傘をさし、路地口を出て來り、門口にて

十　お賴み申しやせう。茨木屋の七さんの内は爰かえ。

鬼七　アイ、七五郎はわしだが、マア、お入りなされませ。

十　お許しなされやせ。

ト内へ入り

こりやア、お初にお目にかゝりやしたが、七さんかえ。

鬼七　アイ、わしは茨木屋の七五郎といひやす。面が怖いか、世間では鬼と異名を取つた男。して、お前はどれからござりました。

十　アイ、わしやア海老ざこの十といふ、肴屋でござりやすが、今來やしたは、別の事にてもござりませぬ。ちつとお前に無心があつて來やした。

鬼七　エヽ、無心とは。なんの無心かえ。

十　外でもないのサ。此方の抱への其うちに、杜若によう似た三日月お仙、この頃見世へ出るからは、年もあらうがそこが話しだ。貰ひに來やした。貰ふ男も矢ッ張りわしだ。モシ、御不承ながらあの女をわしに下さい、貰ひに來やしたヨ。

ト ずつけり云ふ。鬼七、思ひ入れあつて

鬼七　アヽ、何の話しでござつたかと思つたら、抱へのお仙を貰ひにござつたのか。そりやモウ、折角こなさんが來たものを、潰されもしまいし、お仙が年季の證文も卷いて、こなたに熨斗を附け、清く女を

十　くれる氣かえ。

鬼七　否だ。

十　どうしたと。

鬼七　ハテ、よく物を積つて見さつしやい。こなさんが當時流行する、若い人でもあらうが、わしも茨木屋の七五郎、勇み手合ひを相手に商賣、欲しいと云つて貰ひに來る度、猫の兒ぢやアあるまいし、金で抱へた女どもを、さう手輕くやつて見さつしやい、竈にかゝはるワ。わしが高い鼻の下が、そこりになる話しだから、不承ながら、こりやア出來まいかによ。この寒いのに、こなさんも長

い橋を渡つて、足を運ばせるも氣の毒だから、さつぱりとお斷わりだ。併し、これを緣にして、ちつと遊びに來ねえ。こなさんの返事は、マアこんなものサ。

十　ア、、不承知か。併し、こりやア、不承知でもあらう。何を云つても玉を取られちやア、米櫃にかゝはる話しだ。そんならお仙は貰ふまい。あの女の代りを貰はう。

鬼七　成る程、貰ひかゝつて貰はずにも歸られまい。事と品に依つたらば、相談づくといふ事もあるが、お仙の代りには、どの餓鬼を貰はうと云ふのだえ。

十　誰れ彼れとも云ひやすまい。初めがお仙で出來た話し、お仙の面に似た女を、一人貰ひたいね。

鬼七　お仙が面に似たといふ、その心當てがあるかえ。

十　隨分あるの。外でもねえ。あの阿魔に似たと云ふは、こなさんの抱寐をする、女房のお綱どの、貴樣の嬶アをおれに下さい。

ト鬼七、思ひ入れあり。

鬼七　ナニ、おれが嬶アをくれろ。ア、、これで讀めた。道理で先刻お仙めと、お綱が今もうつかりと、色靑褪めた

十　エ。

鬼七　マア、そんな理窟は後へ廻して、コレ、こなさんは年はいかねえが、剛氣な橫を云ひ出したな。さう云へばどうかこなさんは、萬更見ねえ顏でもねえ。ア、、どこでかこの中見たやうな。

十　見た筈サ。後の酉の日、花又の、二度目の市の歸りがけ、雪に逢つたは榎木戶と、便船したる屋根船の、丁度雪見の宮戶川、連れは二階へぶらさげて、後は行火に差向ひ、酒の手もある年增ゆゑ、意氣な嬶アと小野郞が、氣の差したのが因果の始まり。

鬼七　ア、、そんならこの中雪の日に、長屋手合ひと向島、喰ひ醉つたるうたゝ寐を、待乳の鐘に起されて、いつそ今宵はずるけうと、土手から船を呼子鳥、覺束なくも向う越し。

十　慥か汐時、雪水に、せかれて何か流れ寄る、それを幸ひお土產の、竹の熊手で引き揚げた、その時土手に

ト思ひ入れ。

鬼七　黃昏なれど雪の暮れ、洲にかゝつたる屋根船の、內ぞ怪しき出合ひ船、そんならもしや

十　ヤ。

ト兩人顏見合せ、思ひ入れ。

鬼七　こいつア面の立たねえ話しだ。

十　サア、斯う云ひ出しちやア金輪際、わしが腰押し成田山、千葉妙見の扱ひでも、これぱつかりはお斷わりぢやが、非分になつても貰つて行く。三行り半の去り狀に、當時流行りのかまわぬを、印形にしてしつかりと、捺したその上、おれにくりやれ、七五郎どん、マア、さ思うつて下さい。

鬼七　成る程、お主は大膽な、横たつぷりな男氣に、流石の鬼も手こずつて、相談づくで遣りもせうが、去年に替つて顔見世から、おれが役儀を讓つたも、お江戸氣質のあなた方、御贔屓强いお取立て。いづれも樣に免じたら、女房は愚か御當地で、數年勤めた店頭、座頭株も讓るまいものでもないが、こなさんは、どうでも鬼が女房を。

トこのあたりよりお綱、障子を明け窺ひ居る。

十　鬼が女房、鬼神でも、貰ひかゝつた海老ざこが、嬶アにせねば男が立たぬワ。

鬼七　隨分遣らう。

十　それで野郎の面も立つわえ。

ト思ひ入れあつて、この時お綱、ツカ／＼と出て、鬼七の側へ坐り

つな　コレ、七さん。

鬼七　なんだ。

つな　お前、なんだどころぢやアねえわな。あの十さんが振り込んで、横を云ふのを、とつくりと、わつちやアあすこで聞いて居たが、どこの國にか亭主のある、女房をくれろといふやうな、こんな不法があるものか。それでもわつちが身に取つちやア、筋違ひでも憎くない、惚れたといふ二字を聞いては、萬更にあんまり腹は立たぬわな。それにはお前は今直に、わつちを遣らうと云ふのには、こいつは譯がありやせう。そんな氣まづい亭主なら、わつちの方から斷わりだ。遣らば遣りねえ、十さんの、綺麗に女房になつてから、お前の顔を見返すのだ。コレ、十さん、お前も今日から達引にも、わつちを女房にしてくんなよ。

十　仕兼ねるものか、わしも男だ。娘子供の色事とは、譯の違つた亭主持ち、餓鬼同然な海老ざこが、年增にかかつて跳ねられちやア、友達めらへ立たねえ羽目。人の女房を貰ふ氣で、首が惜しくて此やうな、大束附木は賣られない。サア、キリ／＼と方を附けやな。

つな　お前の性根が極つちやア、わつちも物が云ひよいよ。

今まで色戀せぬ身だが、お前の氣性に惚れやした。今日まで馴染んだ亭主だが、愛想が盡きた。サア、七さん、離れる氣なら、去り狀くんねえ。

鬼七　そんなら七が女房の綱、異名に取つたこの鬼が、手をすつぱりと切る氣だな。

つな　切らざアお前もおつかない、顏の立たねえ羽目といひ、小口も利いた茨木屋。

十　その女房のこのお綱、亭主が鬼の手を切らせ、連れて行くには去り狀が

鬼七　欲しくば爰で今直ぐに、渡す代りに其方から、貰つて置きたい品がある。女房の綱と、その品を

十　此方にあらば何なりと、この女には替へられない。貴樣に遣らうがその替り、三行り半の去り狀は。

鬼七　お主に渡す去り狀は、幸ひ爰に認めた

ト合ひ方替り、思ひ入れあつて鬼七、懷より、前幕の流れ寄つたる白木の札を出し、有りあふ熊手へ挾み、海老ざこの十の前へ差出す。思ひ入れあつて

十　白木の箱のこの蓋を、女房お綱が去り狀と

つな　熊手へ挾みし判じ物、何やらによく似た形、慥かにそりやア東寺なる、鬼の住みたる羅生門。

鬼七　建てゝ歸つた金札の、その夜の役は渡邊の

十　ヤ。

鬼七　サア、綱を貰ひに來たこなさん、女房は遣らうがその替り、去り狀替りの箱の蓋、しつくり合せるその箱を

十　そんならこの中、雪の暮れ

つな　今戸の河岸のかゝり船、流れ寄つたるその箱の、蓋は二人の手に渡り、中身は慥かに

十　なんぞの役に立たうかと、貰つて來たるこの箱の、併し、中なる代物は

ト以前の箱を出す。

鬼七　蓋の文字の樣子では、滿仲公の御所持ある、多田の藥師の印子の尊像、それを女房のその代り、渡して置いて連れて行け。

十　イヽヤ、覺えのない尊像、この海老ざこの手には無い。蓋を持つたが詮議の蔓、女房に添へて尊像を、貰つて行かねえ其うちは、貧乏ゆるぎもしやアしねえ。

鬼七　おれもそれなる箱の內、納めありつる御佛を、詮議仕出さぬ其うちは、歸ると云つても歸されぬ。五分でも敷居を跨いで見やれ。

つな　コレ、さうお前方お二人が、角芽立つての云ひ合ひ

も、元の起りはわたしから。鬼と云はれる七さんも、角突合ひをさつぱりと、また十さんも物事を、三升の角を不承にも、丸く素直になつた上、箱の內なる代物の、詮議をしたらよからうと、女のいらざる差出だが、さういふ始末にして見ねえ。

十　イカサマ、お主の云ふ通り、人の女房を貰ふ氣で、强身でばかりもいかねえ話しだ。

鬼七　こなたに遣らうといふ女房、お綱が差出た事ながら、肩張り詰めても濟まねえ刄口。そんなら互ひに仲もよく

つな　わつちを遣るとも遣らぬとも、魚と水とのその上で

鬼七　物事圓子にやらかさう。

十　さう其方から碎けちやア、此方はト〻がどうなりと

つな　兎に角、話しは酒の事、わつちやア燗をつけるによ。

鬼七　男は當つて碎けろだ。炬燵へ來さツし。

十　わしもあたつて、巫山戲うか。

つな　三人五德、仲直り。

鬼七　當らつしやいな。

十　緣起がいゝね。

ト四方より蒲團を明け、キッと目を附け、思ひ入れあり

鬼七　炬燵の際にはこの生血。

十　炭櫃の下へしたひしは

つな　エ。

ト二人を突きのけ、蒲團の上へキッと腰かけ、しやんと納まる。

鬼七　女房お綱、ハテ、仰山な。

つな　サ、これは。

十　蒲團押へてかみさんの、氣色ばんだる驚きは、そんなら炬燵に

ト思ひ入れ。

つな　アヽ、モシ、炬燵の內は埋め火の、今といふ今、七さんと、緣の切り炭いけてある、炭櫃ぢやゆゑに十さんを、この炬燵へはどうもマア、御不承ながら遠慮して。

ト鬼七へ思ひ入れ。海老ざこの十、こなしあつて

十　今まで五德に三つ金輪、話すと云つたお綱さん、誠に變る、そんなら爰に

ト寄るを、お綱キッと思ひ入れ。

つな　あの小座敷に置炬燵、行火に火がよい。お前あすこで遠慮なう。

十　あたつて居やうが、其うちに、いさくなさしに、か

みさんを

鬼七　遣るか遣らぬか善悪の、邪正を糺すは、熊手に添へた

つな　去り狀替りの箱の蓋。それも印子の尊像の

鬼七　その道行の判るまで

十　この茨木屋にいぢかつて

つな　わつちを連れて行くものか

鬼七　紛れ搦んだ絲口の

つな　結び目解けるか、ほぐるゝか。

十　二人引く手の緣の綱。

鬼七　繫がつてから女房の

つな　綱が噂の夜雨かな。

十　それは雪の夜、お綱さん。

つな　十さん。

十　ムウ。

ト炬燵へかゝる、三人思ひ入れ。

鬼七　話して行きやれ。

十　思案ものだよ。

ト唄になり、以前の札を挾みし熊手を持ち、海老ざこの十、障子の內へ入る。お綱鬼七殘る。あと合ひ方。

つな　お綱奥の方を見やり、こなしあつて

コレ、七さん。モシ、思はず手に入る

ト懷より尊像を出し、見せうとする。

鬼七　ア、コレ、云ひ譯らしく我が手から、おれに渡すに及ばぬ品。亭主の鼻毛を數へたお綱、長屋の手合ひへ知れぬうち、內には置かぬ、出てうせう。

つな　そんならわたしを十さんと、もし間男でもしたといふ

鬼七　もし間男も氣が強い。限前今戸の雪の暮れ、洲にかかつたる出合ひ船、見て見ぬ振りの通り者、面の汚れぬ其うちに、去つた女房は片時も、內には置かれぬ。サ、コレ、キリ〳〵爰を

ト目顔で知らせ、表へ出さうとする。お綱吞み込み

つな　エ、出ろなら出て行く爰の內。これから晴れて十さんの、世話になるのがわたしが願ひサ。

ト此うちお仙出かゝり、立ち聞き居る。

鬼七　エ、イケ腹の立つ、その口を。

ト立ちかゝる。

ト お仙、駈け寄つてこれを支へ

せん　ア、モシ、おかみさんを去る事は、わたしに免じ

て。

鬼七　うぬも嬶アが間男の、慥かに相摺り、二人とも、目立たぬやうに雪道をナ。コレ、キリ／＼爰を。

　ト お仙を外へ突き出す。お綱こなしあつて

つな　抱へのこの子も連れ立つて、あの十さんの世話になる。七さん今から、二人とも

鬼七　キリ／＼うせろ。

つな　うせねえぢやア。

せん　コレ、そりやアあんまり。

つな　一緒に來や。

　ト お仙が手を取り、向うへ行かうとする。奥にて

十　エイ。

　ト かけ聲して門口の雪一度に散る。三人思ひ入れあり。

鬼七　軒に積りし白雪の

つな　一度に散亂なしたるは。

　ト、ドンと太鼓の頭を打つ、三人思ひ入れ。

三人　殊に聞ゆる

　ト 思ひ入れ。この太鼓直ぐに通り神樂になり、行列三重を彈き出す。三人思ひ入れあつて、お綱、お仙向うへかゝる。揚げ幕より喜之助、青漆の合羽、高股立、大小、紺看板、若黨の形に着替へ、中間、笠をかぶり、ツカ／＼と出て來り

中間　片寄れ／＼。

　ト 押し戻す。兩人中間を掻きのけ、行かうとする。この時赤合羽、竹笠の中間、銘々三つ星、一の字の箱提灯を持ち、ツカ／＼と出て來り、兩人を中へ挾み、舞臺へ押し戻し來り、バラ／＼と取卷き

八人　お迎ひ。

つな　こりや、わたしらが行く先を、支へて出さんすお供さん、紋も覺えの三つ星に

せん　一を引いたる市川の

中間　そのお旦那のお迎ひに

鬼七　行列揃へし供廻り、誰れを迎ひにどこへ行く。此方の内には其やうな、立派な客の泊りはない。こりやア大方門違ひ。

つな　外を尋ねて見なさんせ。

　ト 障子の内にて

十　イヤ、迎ひは身が同勢。それへ參つて主に面談。

鬼七　ヤ、なんと。

　ト 鼓の合ひ方、障子を開き、海老ざこの十、上下衣裳

大小に改め、以前の熊手を持ち、渡邊の拵らへ。金六、權助、奴の形に着替へ、ツカ／＼と出て

金權　動くな。

ト三人を圍む。

鬼七　合點のいかねえ、海老ざこが、衣服大小改めて、呼びかけたには樣子があらう。

つな　その身の素性を海老ざこさん、話して聞かしてくんなさい。

十　申さずとても提灯の、紋に顯はす三つ星に、一の文字は隱れあらう、源家譜代の烏滸の者、武藏の三田にて生ひ立ちし、渡邊の源次綱。

鬼七　さてはあなたが渡邊の

つな　その綱さんが、この綱に、足を附けての目論見は

十　二人が素性を知らんが爲に。

鬼つ　ヤ、なんと。

金六　旦那の指圖に貸物屋、大小衣服を持ち込んだも、お側使ひのやつこらさ、お草履摑みの奴の三田平。

權助　山鯨から附け込んで、實名探る附け人は、同じ仲間の二合半、山椒醬油か盛切り權平。

喜之　鬼の子がらに喜之助も、路地番門番引ッくるめ、指圖に入込む三崎の藤内。

金六　實名隱す茨木屋。

權助　キリ／＼姓名

三人　名乘つた／＼。

鬼七　イヤ、實名本名と、その名を隱す男でない。疑ひ晴らして速やかに

十　イヤ、包むは卑怯の至り。正しく純友餘類の一族。綱もお仙も氏素性、ありと睨んだ渡邊が、胸中探らんその爲に、便船したる船の内、色で仕掛けてあはよくば、一味に招かん計略の、網へ落ちたる間男の、仕事にかゝつた顏を見せ、わざと入込み窺ふところ、夫婦と云へど隔てある、やうにも見えて二つには、抱へのお仙を手荒くも、見せて誠はいたはる樣子。彼れこれ以て心得すと、目を附け置きしに又ぞろや、最前下家へ血汐の滴り。人を殺めて印子の尊像、この家に隱し置きつらん。詮議の役目は源次綱、我れに渡さばこの場は一旦、見遁がし得させん。さなきに於ては抱への女、直さま繩掛け拷問なす。返答聞かん、ナ、なんと。

鬼七　すりや、我れ／＼が身の上を

つな　疾より知つたる渡邊どの。

十　異議に及ばゝ召捕らさうか。
鬼つ　サア、それは
十　實名明かすか。
皆々　サア、それは。
十　尊像渡すか。
鬼七　サア
皆々　サア〳〵〳〵
十　返答如何に。ドヾ、どうぢや。
鬼七　エヽ、遁がれるだけはと思へども、敏き詞に是非なくも、素性を明かさん、女房と、云ひしは僞はり御主人の
つな　お情受けし自らこそ、純友公の手廻りにて、宮仕へせし侍女笘屋、お腹に宿せしこの姫は、主君の爲の御落胤。
せん　九重姫が身の成行き。
十　して、又、男が實名は。
鬼七　兼ねて音にも聞きつらん、純友公の身内にて、伊豫の國高綱の、落城なせしその時まで、君に附き添ひ奉り、忠臣無二と呼ばれたる、伊賀壽太郎正純なるワ。
皆々　さてこそなア。

鬼七　斯く實名を明かす上は、渡邊觀念。
ト一腰を取つて立ちかゝる。
十　ヤレ、待て伊賀壽。例へ其方刃向ふとも、八重に取巻く我が圍み、却つて姫の命の瀬戸。そこを存じて九重姫、笘屋もろとも命を助け、無事にこの場を見遁がし申さん。その替りには印子の尊像、故なく渡すや、ナ、なんと。
鬼七　その一言に僞はりなくば
つな　わたしが手に入る印子の尊像、渡邊どのへ速かに。イザ。
十つ　イザ〳〵〳〵。
ト　お綱、海老ざこの十へ尊像を渡す、海老ざこの十取つて
十　これぞ誠の印子の尊像、今より當地に勸請なし、多田の薬師と後の世まで
鬼七　然らば伊賀壽は此まゝに、お二方の御供せん。
十　役目濟んだるこの綱は、直ぐにこの場を此まゝに。
ト表の方へ來る。
せん　返す〳〵も御仁心。
つな　仇には思はぬ渡邊どの。

鬼七　硎し下さくなこの內へ、ござつたからはお歸りまで、矢ッ張り勇みの海老ざこの十。

十　十めん九めんのこの形で、歸りは例のそゝり節。

せん　またこの次と吸ひ附けた

つな　莨一葉の別れ路も。苦界の習ひ、お屋敷さん。

十　又ひやかしに

鬼七　必らず來さつし。

つな　十さん。

十　あばよ。

皆々　お立ち。

十　コレ。

ト木の頭。

ハテ、野暮な奴ぢや。

トよろしくあつて、ひやうし　幕

二番目大切

箱根山の場

足柄山の場

淨瑠璃「親子連枝鶯」常磐津連中

役名——源賴光。山賤、斧右衛門實は三田の仕。山賤、鐵藏實は鬼同丸。馬士、どう六實は夜叉太郎國秀。鯰坊主、雷雲。池田中納言息女、花園姬。賤女實は豐後次郎妹、白梅。賤女實は三田源太妹、紅梅。怪童丸。山姥。女奴、此絲。

本舞臺、三間の間、一面に振りよき梅の立ち木。この前に笹龍膽の紋附きたる紫の幕を張り、西より東へかけて見事に紅梅、白梅の吊り枝、よき所に初音が原と書いたる榜示杭。上の方草土手の上に常磐津連中居並び、すべて箱根山中、渡り拍子やうの鳴り物にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃名題、役觸れあつて、その爲口上左やう。直ぐに前彈きになる。

〽御贔屓に、賴光公は東國へ、下向も既に箱根なる、初音が原も恥かしき、花園姬にお杉役、赤い奴を引きかへて、いよ有り難いおらが顔見世。

ト誂らへ賑やかなる鳴り物になり、眞中に賴光、羽織衣裳にて、紫の袱紗を頭へ卷き、紅梅の枝、吸筒を附け、これを擔ぎ、上の方に花園姬、廣振り袖、裲襠の

上より扱帯をしめ、梅にて葺きたる傘を賴光へさしかけ、下の方に此絲、奴の衣裳にて毛氈を附け、茶辨當にもたれ、兩人を見て居る。三人この見得よろしく、舞臺眞中へせり上がる。鳴り物打上げて

〽人も木每に早咲の、梅に心も移り香を、止めて爰に御大將、酒宴の興も杯の、花園數さへ積る花の雪、降りみ降らずみ傘を、さすがに姫は篠鳴きの、まだ鶯の懷子、此絲さて又お末の此絲が、とんだ役目の茶辨當、擔ぐも日頃のやつこらさ、御用に立ての仰せなら、色の諸分けはチ、ちつと、やつたやうではないわいな〽浮氣の風が葺屋町、こちへこちへと入り來る。

ト舞臺よろしく納まる。

賴光　誠に、花あれば人といふ、詞宜なるかな。賴光當國の任業むる折柄、蜘蛛の障礙に暫しの惱み。この程とみに全快なし、直さま下向に赴むく路次、この初音が原の梅の盛りに、日時をうつし思はずも。

花園　咲きも殘らず散りも初めぬ、この早咲きの梅の景色、櫻にまさる、好い眺めでござりますわいなア。

此絲　モシ〳〵、お二人樣、梅をお褒め遊ばすはようござりまするが、私しは奴代りの、ひよんな役目で、肩やら手やら、堪つたものぢやござりませぬ。

賴光　イカサマ、さうであらう〳〵。花見の供に侍ひどもは、堅くるしうて如何かと、本陣に皆殘して置き、其方一人を道の供、さぞ心配なことであらう。サ、これからは花の下で、酒と致さう。

花園　アノ、九獻をお上がり遊ばしまするか。

賴光　ハテ、たべいでは。仕附けもせぬ淨瑠璃の大將役、これは素面でどうして

ト杯を取上げる。花園姫瓢にてつぐ。

イヤ、これは憚り。誰れござらう、池田中納言の御息女、花園姫どのゝお酌。恐れ入りましてござりまする。

花園　アレ、又あんな。

ト此絲へ思ひ入れ。

此絲　ほんに、お野暮な事ではあるぞ。あなたも源氏の御大將樣、……お色の一人ぐらゐは、ナア、お姫樣。

ト花園姫恥かしがる。

賴光　イヤ〳〵、女に依つて家國を亡ぼす事、和漢にその例しまゝあれば、我れに於ては女の道は

此絲　アノ、お膳を据ゑましても。

賴光　箸は取らぬ〳〵。

ト此絲、花園姫、顏を見合せ、こなしあつて

花園　此絲。

此絲　姫君樣。

〽辛氣〳〵の折からに。

ト摺り鉦入り、浮いた合ひ方になり、向うより白梅、紅梅、染やつし、賤の女の拵らへ。衣裳の褄を端折り、水桶を頭へ乘せて出て來り、花道にとまる。

〽八瀨や大原おやなア、黑木をかはいの、しのぶをかはいの、こちはかはいの男まさりに麓から、水桶つむりへがつくりこ、そつくりこ、登り下りをあて呑みに。

トこの文句のうち、兩人とも、水桶を下ろし休み居る。

ト向うよりどう六、馬方の拵らへにて、脊を拵らへながら出て來る。

〽今日も朝からよたん坊、箱根は八里かれ樣は、だりむくつたる馬方の、女馬が好きか後から、ほてつぱらめと抱き附いて、ドウド、ヨ、さうだとじなつくを、エ、と振り切るはずみにころり、二人は先の坂道を、後からひよろ〳〵のたまくが、ぶつくさ云うて來りける。

ト白梅、紅梅先に、どう六、捨ぜりふにて本舞臺へ來る。

どう　うぬ、女めら、待ちやアがれ〳〵。……ヤイ、よく泉坂のどう六さまを、二人して投げやアがつた。うぬら、遣る事は、ならないぞ〳〵。

白梅　コレ、大槪な事云はしやんせ。こちらがなんのこなさんを

紅梅　ソレイナア。足場の惡いこの山道、大方石か木の根で、こなさん獨りして

どう　イヤ〳〵、女には負けては、仲間の者へ面が立たない。どこのか所をくりぬいて、胴亂代りにしてくれべい。

ト立ちかゝる。此うちこなたの三人、酒盛りして居て、この時見兼ねて、此絲支へて

此絲　ア、コレ〳〵、待たしやんせ。

どう　イヤ、構はつしやるな〳〵。

此絲　サア、構ふまいと見て居たれど、女を捉へて大人氣ない。却つてこなさんが笑はれうと、それでアノ

どう　ア、何かえ。女を相手にすりやア、わしを人が笑ひますかえ。

此絲　笑はいでかいの。

どう　ハテ、ナア、そいつは思案ものだわえ。

ト思ひ入れ。

此糸　コレ、女衆、馬士どのは、わしが宥める程に、ちやつとござんせ〳〵。
兩人　そりや有り難うござります。
ト兩人立ち上がる。
賴光　コリヤ〳〵、女、其方達は、この所の者さうなが、これより北に當り、彩雲の棚引く山は、何と申すぞ。
紅梅　アイ、彩雲とやら、さいかちとやら、其やうなものは存じませぬ。
白梅　北に當つた山と申すは、伊豆の國、足柄山と申すのでござりませう。
賴光　ナニ、伊豆の足柄山とな。彩雲は正に人傑の、隱れ住むべき祥瑞。すりや、足柄の山中に。ハテナア。
ト思ひ入れ。
花園　さうして其方の擔ぐものは、何ぢやぞいの。
どう　イヤ、その柄杓はござりませぬが、桶の中のは、汲み水でござります。
此糸　ムウ、なぜその水を麓から。
白梅　サア、この山中には、好い水がござりませぬゆゑ
紅梅　毎日斯うして麓から、汲んで登りますわいな。
此糸　そりやア、しんどい事であらうのに、なぜに男は

兩人　イヽエイナア。〽所ならひかお國の作法、かの御亭は留守して子の守りをすりや、おかゝ麓の水を汲むえ、そこで男は夜なべの仕事、寢床敷薦けんけぼむしる、ゆるさんせ山椒魚、蟲には奇妙にきくといな、詞をしほに打連れて、賤が住家へ急ぎ行く。
ト白梅、紅梅、下座へ入る。
どう　ドレ、おいらも仕事を、……モシ、お前方は、馬はいりませぬか。
此糸　コレ〳〵、あの人、賴みたいわいの。
どう　そりやア有り難い。宿へなりと、山へなりと。
此糸　イエ〳〵、そんな事ではない、コレ。
ト囁く。
どう　そんなら、あの旦那樣が、こちらのお姫樣を止めるやうに。
此糸　ア、コレ。
どう　そりやアお安い御無心だが、わしやアおじやれの色事より、外は何にも
此糸　サア、それならわたしも道々の、泊り〳〵で見聞きした

どう　おじやれと
此絲　馬士の
どう　色事を
〽夕暮れ急ぐ旅の空、泊り烏の塒をと〽お泊りかえ〳〵
〽もしお泊りならば泊らんせ〽連れが先へと振り放す、
無理に捉へて引入れて〽草鞋とく〳〵お荷物は、爰へ奥
の間に寢させて置いて、もうよい頃とくね垣を、潜り出
合ひの折りもよく〽どう六さんかの足許に、わんと一聲
〽畜生め〽なくがしよざいか威張るが癖か、その乘り味
に喰らひ込み、寒の師走も日の六月も、裸で道中通し馬
〽そりやアノ主が六道に、皆張込みの裏表、おひへを一
つ達引も、おじやれの身には眞實に、思やこそヤレ様ゆ
ゑなら、潮來出島の勤めでも。
　トこれより太皷、皷のあしらひ。
〽すいたよ髮の毛生え元まで、附けし油の匂ひまで、し
よんがえ〽今夜逢はうとて川端通れば、門では招かで櫓
で招く、オヤ〳〵。ヤレ〳〵〳〵　此絲　さうだぞ〳〵、
〽さうぢやいな。〽今の浮世は色の世盛り。
モシ、お大將様、わしらがやうな身の上まで、割れ鍋に
閉ぢ蓋と、それ相應の、小色もやらかしますぞえ。

此絲　それ〳〵。殊にあなたは誰れあらう、源の頼光公、
お色の一人や二人なうては、世間へ對して御外聞が
頼光　ア、イヤ〳〵、例へ如何程勸むるとても、この頼光
は苟しくも
〽弓矢の道に生れ出で、經典の道も尋ねしかば、代々の
武道と事替り、ちよつと摘みしたぼもなく、また引つか
けし得手もなし、元より藝者女郎には、ちつとも食やひ
仲の町、胸倉取つてこれ申し、そりやマア何の事ぢやい、
などのと云はるゝ身にはあらねども。
旣に軍馬に跨がる時は、妻妾をも顧みず。さすれば女色
は武道の妨げ。
〽重ねて諫め無用ぞと、矢張り氣まじにのたまへば。
此絲　こりやモウ、梃でもゆかぬものぢやわいの。いつそ
の事に姫君様、あなた直々打ちつけにナ。……わたしは
その間にお手水の
〽水もくも手の杜若、とじやくこなさんよいやうと、家
居もとめて
　ト此絲、下座へ入る。
どう　コレ、女中、おれにどうして。……オヽイ〳〵。
　ト兩人を見て思ひ入れ。

ソレ、仕方がない、やらかせ〳〵。
　ト花園姫を頼光の側へ突きつける。
花園　コレ、申し〳〵。
　ト頼光が顔を見る。
〽拙き身にもあこがれて、幾夜寝覚めの枕にも、物や思ふと恥かしく、身のいたづらに形振りも、かこち顔なるきり〳〵す、ないて明石のあゝ羨まし、どうぞお側にいつまでも、猶餘りあるお情を、やいの〳〵も口の内、人こそ知らぬ可愛らし、〽頼光公も姫君の、さすが心の割りなさに、兎も角もとの御氣色を〽見て取持つが、これからの、後の所は幕の内、さア〳〵早うとせり立つ馬方が、花の木の間へ。
　トどう六、頼光花園姫を無理に幕の内へ入れる。
どう　ヤレ〳〵、仕附けもしない取持ち役、どうやら斯うやら床を廻した。ハヽヽヽヽヽ。
　ト合ひ方になり、どう六思ひ入れあつて、あたりを見廻し
鬼同丸と心を合せ、頼光が當國へ、下つてうせるその道で、窺ひ寄つて馬方に、姿を窶した夜叉太郎國秀、なれども、これまで名に聞えた、武勇の奴輩に隨へば、仕損じてはと見合す折柄、幸ひとこの初音が原の、梅見物に供とては、附いてうせた女めばかり。いま頼光と花園姫が、うまいその中、覘ひ寄つてたつた一討ち。後は都の滿仲頼信、これらは射止めた猪同然。ドレマア、手強い頼光めを。それ〳〵。
　ト榜示杭のもとを掘り、一腰を出し、ぼツ込み行かうとする。この時下座より白梅、紅梅、ツル〳〵と出て來て、これを支へ
兩人　曲者、動くな。
どう　うぬは先刻の、變な小女郎。こりや、何をしやアがる。
白梅　其方こそあれなる幕の内、そりや、何事をしやる。
どう　サ、そりやア
紅梅　頼光公へ近寄つて、只一討ちとは、これが誠に出來ない相談。
白梅　それより怪しい其方の身の上。
紅梅　繩打つて詮議する。
白梅　サア、尋常に
兩人　腕まはせ。
どう　ムウ、そんならわいらも、こりやア只の

白梅　知れた事、保昌さまの仰せをうけ、頼光公の御下向を
紅梅　目立たぬやうに警固の役。誠妾は源家の身内。
白梅　豊後の次郎が妹白梅。
紅梅　三田の源太が妹紅梅。
両人　サア、速やかに縄にかゝりや。
どう　小癪な女め。さう吐かしやア、マア、うぬらから。
　ト一腰へ手をかける。両人吹替への梅の傘をおつ取り、支へる。ちよつと立廻りに、どう六、左右を拂つて、三人シヤンと見得、摺り鉦入りの所作ダテになる。
〽花に嵐はな、いつも當るぢやないかいな、梅の白雪白妙の、積るわ〳〵、さんざ座敷の綿帽子、見事に咲きし紅梅の、色もうつらふ毛氈の、八重に七重に、七重に八重に、重ね重ねる人の山々。
　トよろしくあつて、どつこい。
〽梅のしもともちり〳〵ぱつと、匂ひこぼるゝ爭ひは、詠め盡きせぬ。
　トきほひ三重、カケりになり、眞中にどう六、左右に白梅、紅梅詰め寄りキツと見得。この道具ぶん廻す。

向う一面山幕、眞中に振りよき松の大樹、枝葉左右に茂り、蔦かつら面白くかゝり、この松の上の方に栗丸太にて仕立てし葛家、簾掛けあり、尤も屋根、簾とも誂らへあり、梅の吊り枝、松と照葉の紅葉を打ち交ぜたる道具。すべて伊豆の國足柄山深山、谷蔭の體、この道具に納まる。
　ト直ぐに鳴り物打上げ、淨瑠璃になる。
〽松風ともに吹く笛の〳〵、聲すみ渡る谷蔭の、蔦の葛の纏ひては、茂れる木々を垂木とし、木の葉の屋根に露霜を、置きまどはせる山住居。
　ト谺をかぶせたる篠入りの誂らへの合ひ方になり、簾巻き上げる。内に山姥、機を織つて居る見得。正面に山神の畫像を掛けあり。簾上げると打上げ、直ぐに淨瑠璃。
〽[illegible]が昔ならねども、織るや手業のきりはたりてうてう、世を空蝉の唐衣、梳せぬ髪のおのづから、鬼とや人の見るやらん、恥かしさよとにつこりは、それしやあがりと三重の帶、とく甲斐もなきうき身かや。
　ト山姥よろしく、機の手を止めて
山姥　山里は、ものゝ侘しき事こそあれ、世の憂きよりは

住みよかるらんと、數へて見れば七歳あまり、この山蔭に身を遁がれ、明けても暮れても樂しみは、只一人の怪童丸。……ほんに、あの子としたことが、マア、どこへ行きやつたやら。岩角木の根に爪突いて、また怪我でもしやらにやよいが。

〽ほんにどつちへいたづらな、子に引かされて立ち出づる、軒の松葉が襟元を、ちよいとあいたし凩に、つれてかつ散る紅葉の時雨、さら〳〵さつと降りかゝる、袖を小笠に打見やり。

トこの文句のうち山颪しになり、山姥、蔓のまとひし枝を突き、花道へ來る。ト日覆ひより紅葉大分散る。

山姥これを見あげて、思ひ入れあつて

吹きしく風にもみぢ葉の、ア、、散るは〳〵。

〽それ林間に酒を温め、紅葉を焚くといへり、〽さなきだに暮るゝを惜しむ深山邊の、小倉の紅葉かこつけに、汲みかはしたる杯へ、落葉の風情今も見る、景色にさのみ替らねど、我れは姿もいつのまに、うつろひ果てし有樣や、あゝおとましと打ち萎れ、越し方思ふぞ道理なる。

トよろしくありて舞臺へ立戻る。直ぐに大薩摩淨瑠璃になる。

〽遠近のたつきも知らぬ山中を。

ト草笛入りの合ひ方、誂らへの鳴り物になり、斧右衞門、白髮親仁、柿の頭巾、袖なし羽織、股引、手甲、大鉞を腰に差し、柴を脊負ひ出ると、東の花道より鐵藏、淺黄頭巾、袖なし、手甲、股引、柴を脊負ひ、鉞を腰に差し、出て來る。

〽足に任せて踏み分けて、老木若木のわかちなく、柴を脊負つて大束を、しつかと肩へ兩掛けに、戻り木樵の氣散じに、伊豆の下田はさて色所、誰れも湊へ焦れ寄る、ほんにさ、唄を山路の道連れに、西と東の花道へ、隔ててこそは步み來る。

斧右　そこへ見えたは、根ツこの鐵藏ぢやアないか。

鐵藏　さういふは切株の斧右衞門どの、よく精出しますの。

山姥　オ、、お二人とも、早うござんしたな。

斧右　ホ、ウ、怪童が阿母か。

鐵藏　今日はまだ逢ひませぬの。

山姥　マア〳〵、一服のんでござんせいな。

斧右　イカサマ、いつもよりまだ日は高い。

鐵藏　そんなら一服やつて行かうか。

ト兩人柴を下ろす。山姥、葛家のうちより、百日紅の

火入れを持つて來る。兩人煙草を吸ひつける。互ひに捨ぜりふありて

斧右　時に、今日は小僧が見えぬが、どうしましだ。

山姥　さればいな、どこへやら遊びに行て、先刻にからわしが側には。

鐵藏　そりやア危ない。なんと云つても子供の事、怪我でもしたらどうしやる。

斧右　それ〳〵、後先き見ずの頑是なし。オヽ、早く呼ばつしやい〳〵。

山姥　サア、わしも疾からさう思つて。

鐵藏　さう思つてなら、呼ばつしやい〳〵。

山姥　ほんに、あの子としたことが、また大方猪猿相手に、角力取つて居やるか知らん。ほんに油斷もすきもなる事ぢや。

　ト云ひながら、こちらへ來り

　怪童どこにぞ。怪童丸〳〵やアい。

　ト揚げ幕にて

怪童　オヽイ。

　ト聲をかけ、大太鼓入りのいつもの鳴り物になり、向うより怪童丸、枇杷の葉を擔ぎ走り出て、花道よき所にとまる。

〽神樂月とてな、片山里も、笛や太鼓で面白や、足のつめたに草履買つてたもれ、子をとろ子とろ、どの子が目好い、かごめ〳〵籠の中の鳥は、いつ〳〵出やる、夜明けの晩に、つるつるつッぱいた、木の根笹原潛りくゞつて、ひよいと來たみどり子、〽母を慕うて山道を。

　ト舞臺へ來り

怪童　コレ母樣、おりやこんな花を折つて來たよ。

〽いたづら盛りぞ愛らしき。

兩人　オヽ小僧、歸つたか。

山姥　わしがちつと見ぬうちに、ちやんと山遊び。さうして今まで何してぞ。

怪童　アイ、わしや天狗の巣立ちとつゝかまへて、鼻柱折つて泣かせてやつた。

山姥　これはしたり、又そんな惡さばつかり。ソレ、小父さん達にお辭儀しや〳〵。

　ト快童お辭儀する。

　ソレ、其方の小父さんにも。

　ト快童辭儀をせぬゆゑ、頭を捉へ、辭儀をさせる。

兩人　ヤレ、よくお辭儀が出來たな〳〵。

斧右　ドレ、小父が褒美をやるべいぞ。
　ト柴に附けたる枝附きの蜜柑を出す。
鐵藏　おれも小僧に鼻藥を。
　ト袋に入れし饅頭を小枝の先に附けて
兩人　コレ〳〵。
　ト見せびらかすを、怪童丸欲しがる。
〽これを蜜柑や饅のおまん、誰れにやらうな、餘所の子にやろか、今朝も隣の洟汁垂れどのが、腰へあちよとて婆さまの細工、くべた溫石餅かと思て、とろと圍爐裏で手を燒いたの。
兩人　アッ、、、、、。
〽枝の鶯いとし、ほんそにや、鈴やつぼ〳〵、でん〳〵太鼓に風車、くるり〳〵、やつくる〳〵くる、くるりくるりと、廻る子よりも親心。
山姥　サア〳〵、怪童、その代りには、いつもの踊りを、小父さん達に踊つて見しや。
怪童　アノ、踊りを踊るのかや。
斧右　こりや、よからう。
鐵藏　サア〳〵、早く〳〵。
兩人　見たいわいの〳〵。

山姥　ソレ、怪童、山家踊りは
怪童　何というた。
〽おんらが在所はな、奥山の、てゝ打ちのでんぐり〳〵ぐり、栗の木の、木の根を枕にござれ、抱いてころび寐、こな小女郎が、貢すぐ山家の品物でござれ、だいてころび寐。
怪童　母樣、乳呑まう。
山姥　又かいなア。いつまで乳々と、そんな事云やると、つめ〳〵ぢやぞ。
怪童　ア、、、、。
　ト泣き出す。
斧右　これサ阿母、そんな事せずと、騙さつしやいな騙さつしやいな。
山姥　イエ、もう、どうも。
　ト云ひながらだます。
鐵藏　さう云はつしやるな。子供は兎角乳々と。……イヤ、乳といへば、阿母や、この小僧の父御わえ。
山姥　サア
　ト思ひ入れあつて
アノ、父御も一緒に。

トこなしある。

斧右　ナニ、父御も一緒にだ……それでもついぞ御亭主は。

山姥　そんならちよつと近附きに

ト庵の内より羽織を持つて來り

わたしが夫、二人ながら、よう見知つて下さんせ。

兩人　ナニ、この羽織を。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

山姥　サ、まだ年打たぬ女子の身、願ひあるゆゑ山ごもり、年月たつうちもしひよつと、いたづらな氣も出やうかと、心の戒め、それゆゑに、筐を今に夫と思ひ、親子二人居る心で

鐵藏　シタリ、イヤ、きつい女もあればあるものだ。まだ三十になるやならずで

斧右　さうして目立つ伊達羽織、これを男の筐とは、ハ、ア、そんならこなたの元の身は

山姥　恥かしながら都九條で、勤めを立てし憂き身の末。

鐵藏　道理で只の者ぢやアないと思つた。

斧右　なんと阿母。ものは相談、わしらはその九條の廓とやら、ついぞ話しに聞いた事もないが、なんと聞かせちやア下さるまいか。

鐵藏　それ〳〵、とてもの事に、その御亭主の客人と、こな樣とのいきさつも、おいらに話して聞かさつしやい。

山姥　これは、マア、滅相な。どうして今更その話しが

斧右　ハテ、何も慰み。仕形話しでやらつしやい。

怪童　母樣、早く話しねえな。

山姥　この子わいの、何にも知らいで。ホ、、、、、。イヤ、モウ、其やうに云はしやんすもの、話さぬも何とやら。

鐵藏　幸ひ爰に羽織もあり

斧右　して、その話しは

兩人　どうだな〳〵。

〽浮世語りも恥かしや〳〵〽流れ忙しき浮き勤め、替る夜毎のその中に、惚れた男の意地わるな、餘所へ買はれてまゝならぬ、時來ては心の廻り部屋〽おきやアがれ、今夜も客か、お目もじなし候はねばと書いて寄越して置きながら、恩にきせる八ツ當り〽胸にこたへて逢ひたさの、そつと座敷をぬき足に、廊下の音のせぬやうに、明ける障子も自烈たく、物をも云はずに取縋る〽オッとよしても暮れの鐘、今までどこのか色男と、すつぱり茂つてやう〳〵と、かけうと來たのか、ちい〳〵め、コレ〽か

けるものに取つては、衣桁に小袖、船に苫、匂ひ袋に金財布、軒の燈籠釣りかけ、輪飾り胸札狐罠、木の芽峠の茶屋の緣先〽よしかえ、こんな所に居やうより、ドリヤと辰の尾、しがみ附き、〽コレナア今日は取分け、云ふ事聞く事たんとある、その約束で今朝早う、ござんす筈を憎らしい、初に逢瀬のきぬ〳〵に、おくり出口のさらば垣、朝露結ぶ緣ぢややら、振返つての一言が、身になるやうな嬉しさに、心に思ふありたけを、云ひ交したに胸盡し、〽野暮な口舌のたゞ中へ、ぶつて脇からまた一人。

山姥　聞かしやんせ。小田卷といふ太夫すも、其方に惚れて居てな、毎日送る日文の數、大方三萬三千三百三十三本ほども遣つたでござんせうが、返事のないに腹立て、、顏に紅葉の裲襠を、取つて脱ぎ捨て、どこもかも。〽ほう〳〵夜中にかけ來り、階子とん〳〵わたしが側。コレ、八重桐さん、否な男に惚れはせぬ。これまで其方は澤山に、抱いて寐たあのおさん、今からわたしに下さんせ。〽貰ひに來たとずつけりに、此方も日頃の癇積酒。コレ、くだ卷さんとやら、折角お前の無心ぢやが、もう百年もたつてから、松葉を添へて主さんにあげう、アタ馬鹿らしいと云ひさまに〽突きのけはずみ、ぱた〳〵〳〵、緣から下へ落の人、胸がいた〳〵たゝゝゝゝと、泣き出す騷ぎの聲に、小田卷が遣手、引船、仲居、飯焚、出入りの座頭に按摩取、はこ山伏に占やさん、雪駄片足に下駄片足を駈け來る口から奧座敷、太夫さんの仕返しと、こゝでは打ちあひ抓りあひ、銚子燗鍋踏み返し、そりやこそ津波が打ち交せて、隱居が子を產む、ヤレ取揚げ、ソレ鰹節、擂鉢、まな板、庖丁ぐわら〳〵〳〵、ぴしやりと鳴る音に、そりや地震よ雷よ、桑原々々、觀音經、妙法蓮華、京中の、話しの種となりにける。

斧右　そいつは亂癡氣騷ぎだつたな。

鐵藏　それからしまひはどうなつたな。

山姥　それから廓の宿老親方、寄つてかゝつてやう〳〵と取鎭めて、此方の口舌も、ツイづる〳〵と仲直り、杯がはりに口と口。ホヽヽヽヽ、もう話しはこれぎりぢやわいの。

斧右　ハテ、それからが肝心のところだ。

鐵藏　もちつと、後をやらつしやいな。

怪童　それよりいつもの桃太郎にしないな。
斧右　イカサマ、小僧は、こりや、不承知であらう。
鐵藏　ハテ、何ぞ好い話しが。
怪童　おらア角力がよい。お爺と〳〵早く爰で。
斧右　とんだ望みをする奴だ。
鐵藏　よい〳〵、そんなら今の話しの後を
斧右　お主とおれと
鐵藏　角力に准へて
兩人　ドレ、取組んで見せべいか。
　ト白囃子になり、兩人こなしよろしくあつて、ドツコイと淨瑠璃になる。
〽忍び大閤逢ふ夜もあらば、人目關脇あらうと儘よ、アリヤアリヤ〳〵〳〵よんやさ、百手くだいてこの睦言も、漏さぬ中に力水、コリヤ〳〵〳〵〳〵よんやさ、緣小結に通ふ神、造り手が怖い前頭、首尾をつくらふ化粧紙、アリヤ〳〵〳〵〳〵よんやさ、誰れも三升に三ツ銀杏、この取組ぞ花々し。
　トこの立廻りのうち鐵藏、懐より連判を落す。斧右衛門取上げ
斧右　こりや、コレ、味方を集むる連判狀。
　ト鐵藏、ちやつと取つて
鐵藏　斧右衛門どの、靜かにござい。
〽麓の方へと。
　ト鐵藏、こなしあつて下座へ入る。斧右衛門見送り
斧右　合點のゆかぬ、あの鐵藏、彼奴も一癖ある奴だわえ。
怪童　母樣、山廻りに行かう〳〵。
山姥　これはしたり、又そんなわやくを。
斧右　コレ〳〵、その山廻りとは何の事だえ。
山姥　サア、人家離れし山住居、わしもこの子も誰れ一人、友呼子鳥も連れもなく、心慰む方とては
〽よし足引の山廻り、四季の眺めもいろ〳〵に、〽浮き立つ空の霞生山、桃が笑へば櫻がひぞる、柳は風の鷹揚に、誰れを待つやら小手招く、霞の帶の辛氣らし、〆めて手と手の盆踊り、七箇の池にうつり氣の、恨なくしの振りの葉は、露の玉章落ち初めて、焦れて濡らす袖の海、ついだまされて室咲の、梅の暦もいち早く、〽門に松立ちやつい雛も、出るかと思へば時鳥、あやめ葺く間に夏の月、待宵過ぎて菊の宴、はや祝ひ月里神樂、ほんにほんに、ほんにせはしき浮世、オ、我れは、白雪積る山廻り山廻り。

斧右　ムウ、窺ふところ、まだ裏若き女の身、斯く山中に住居なし、悴を守り立つ心のうち、何か願ひのある者ならん。我れこそは多田の滿仲が寵臣、三田の仕といふ親仁。願ひの品にて、力ともなり得させんが、包まず様子を語れやい。

山姥　ナニ、あなたが三田の仕さまとや。この上は何かお隱し申しませう。我れ〳〵二人は北面の侍ひ、坂田の藏人時行が妻、忘れ形見でござりまする。

斧右　さてこそな。して、時行が妻たる身で、如何なる仔細でこの所に。

山姥　サア、その願ひは夫時行、武門の家にはありながら、柔弱非力の身を悔み、無念の最期に過ぎ行く折柄、お腹に宿せしこの怪童、何卒勇士に育て上げ、一天下に名を上げさせよと夫の遺言。それよりこの足柄山に分け入つて、山神に誓ひを掛け、この七年の歳月を

斧右　ホヽウ、驚ろき入つたる物語り。母が丹精、山神の加護、悴が勇力さぞあらん。ヤイ、怪童、この場に於て某と、わりや力を試して見るかよ。

怪童　おもちれえ〳〵。

山姥　コレ、怪童。大事のところぢや、負けまいぞ。

斧右　サア、來い怪童。

怪童　合點だ。

〽神變不思議の怪童丸、こなたはあしらふ勇力士、怪童いらつて傍なる、松を根こぎに引き拔いて、ふんちがつたる有様は、人も恐るゝばかりなり。

ト怪童丸、縫ぐるみの松の木を引ッこ拔く見得、

斧右　その松の根こぎ面白い。サア、打つて來い。

怪童　合點だ。

〽勝負々々と打ちかゝるを、すかさず剛氣の力瘤、柄より腕の節くれて、しつかと摑めばめり〳〵〳〵、エイヤエイヤと捻ぢ切つて、左右へ別れて立ちたりしは、目覺しかりける次第なり。

斧右　オヽ、力の程は見えた〳〵。かゝる稀代の勇士の芽生え、某推擧し、賴光公の家臣となさんが、如何に如何に。

山姥　何がさて、賴光公へ差上げれば、母が喜びこの上なし。偏へによろしく、仕さま。

斧右　然らば今より、父が坂田の氏を顯はし、坂田の公時と名乘らせて、直さまこれより同道なさん。

山姥　すりや、父御の名跡を。エヽ、嬉しや喜ばしや。コ

リヤロリヤ、怪童、今日からは、坂田の公時といふ侍ひやぞ。隨分おとなしうしませうぞ。

怪童　そんならおれは侍ひになるのかや。嬉ちい〳〵。

山姥　オヽ、嬉しい筈〳〵。さりながら、今行きやると、この母に、もう逢ふ事はならぬぞや。怪童、爰へ。

ト怪童丸、側へ來る。山姥これを見て思ひ入れ。

〽夫の形見と見るにつけ、其方の大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母は獨り寢の閨の內、さぞ面影の懷かしからう、賴光公へ御奉公、勤める暇の明け暮れに。武術を勵み立身せよ、ヨオヽ、

〽かならず。

必ず人さまに

〽山姥が子と笑はれな。

今別るゝともこの母が

〽其方の影身に附添ひて、只老先きを守護すべし、とはいふものゝ、これがマア、名殘惜しやいとをしやと、抱きしめ、抱き上げ思はずワッと一聲は、梢に響きて哀れなり。アヽ、我れながら誤まつたり。斯くては果てじ怪童丸、賴み申すは仕さま、名殘りは盡きじ、早おさらば。

〽暇申して歸る山の、雲に心をかけ添へて、山また山に山廻りして、行くへも知れずなりにけり。

ト山姥、硝にて消える。この時山神の像ぬけて、煙硝火立つ。白地になる。

怪童　母樣イなう〳〵。

ト慕ふ。早笛になり、斧右衞門、下座の方を見やり

斧右　見たか怪童。麓の方より暴れ來る猛獸。仕が後に控へて居る。手取りになして君へのお土產。

怪童　合點だ。

ト早笛になり、兩人大手を廣げ待ちかゝる。下座より鐵藏、黑四天の形、牛の皮をかぶり走つて出て、ちよつと立廻りあつて、牛の皮を引ッ取り、三人立廻り。

斧右　ヤア、うぬは鐵藏。

怪童　先刻のお爺か。

鐵藏　如何にも山賤鐵藏とは、世を憚りし暫しの假名、誠はいつぞや賴信めに、搦め取られし、市原野の、鬼同丸とはおれが事だ。

兩人　さてこそなア。

鐵藏　我れに大義の望みあつて、英雄集めんその爲に、姿を替へて窺ふところ、只者ならぬ子悴、老人、味方をなさばその通り、異議に及ばゞ角にかけ、猪、狼の餌食と

なすが、返答は、どうだ〳〵。

斧右　愚かや、我れこそ三田の仕、怪童丸も今日よりは、源家の忠臣、坂田の公時。

怪童　奉公初めに、お爺を縛つて。

斧右　牢獄破つた極悪人、頼光公の御前へ引く。サア尋常に

兩人　覺悟なせ。

鐵藏　小癪な事を。

ト立廻り、引き臺よろしくあつて、ドッコイととまる。向う揚げ幕にて

雷雲　ヤレ、來いやい。

トどん〳〵になり、雷雲、裸身に鎧を着、總にて、軍兵大勢連れて出て來り

左大將の仰せをうけ、怪童丸を味方にと、出掛けて見りやア三田の仕、さては源家へ引取つたな。今一人は鬼同丸、三人一緒に引ッくるめ、入道が手柄にするワ、

三人　何を小癪な。

雷雲　者ども、ソリヤ。

トどん〳〵になり、三人へ大勢かゝる立廻りあつて

山姥　やみなん〳〵。

ト流しになつて、正面の山幕切つて落す。後打抜き遠見の山、ぬり張りの月一杯に飾り附け、山姥、誂らへの姥の拵らへにて、杖にすがつて岩臺に立ち身。此まま舞臺よき所へ押し出す。

怪童　ヤア、母樣の

三人　この體は。

山姥　山神應護の奇特に依つて、望みたんぬる上からは、今こそ人界輪廻を離れん。我が子よ、さらば。

雷雲　山姥ぐるめに打つて取れ。

軍兵　やらぬワ。

ト立廻り。

〽實にや一陽來復の、時こそ來たれ歸り咲き、武勇の花も今爰に、榮え榮ゆる源氏の御代、盡きぬ歌舞伎ぞめでたけれ。

ト淨瑠璃一杯よろしくあつて、上の方斧右衛門、連判を鐵藏と引ッ張り、下の方怪童丸、軍兵を積み重ね上に乘り、雷雲詰め寄る。眞中に山姥立ち身、皆々この見得よろしく、ドッコイ。

斧右　先づ今日はこれぎり。めでたく　打出し

戻橋脊御攝（終り）

伊勢平氏攝神風

伊勢平氏攝神風（いせへいしひいきのかみかぜ）

文政元年中村座の顏見世狂言で、作者は二世櫻田治助。「保元平治」の世界で、顏見世としては比較的末期の脚本である。紙數の關係から、例の恐にも附かぬ三建目の發端と、四建目とを略す事にした。四建目は崇德院の天狗に化せらるゝ場で、この時の創作ではなく、初代松助が度々演じたものを其まゝ加へたのである。
清盛をやつた芝居は三世中村歌右衞門の事で、文化の初年に初めて江戸へ下つて來た頃は、日の出の勢ひで江戸劇壇を壓倒し、入日を招ぐ清盛の役なぞ、江戸市中噂の種になつた位であつたが、もうこの頃は江戸でも人氣の下り坂で、しかも勢ひに乘じて除りに傲頑な振舞ひがあつたと云ふので、批難される位であつた。中村大吉の八條の局が、江戸看客の代表となつて、清盛ならぬ芝居へ意見をする所は、その當込みである。昔はその歌右衞門に壓せられた三津五郎は、依然座頭として江戸劇壇の重鎭で、この脚本では見事に一枚上の位置に立つて居る。
役割は左の通りであつた。

平清盛。傘張り法橋。出村新兵衞　實ハ上總之介廣光（中村芝翫）八條の局。お針おさく（中村大吉）飛驒左衞門景家。眼通坊（淺尾爲十郎）牛若丸（中村駒之助）長田庄司忠宗（市川友藏）常磐屋おまつ實ハ源賴朝（岩井松之助）阿波民部（二世關三十郎）難波六郎常遠（淺尾友藏）越中次郎妻歌町。傾城藻の花（中山龜三郎）花又村正作（中村七三郎）笠木小三郎（坂東簑助）佐武井寒仲（中村東藏）間壁文藤次（市川の助）奴宇田平。家主太郎兵衞（中村千代飛助）關原與市（市山七藏）師匠吟光（坂東大吉）妹吳竹（坂東三津三）作の左衞門國門。下女おさん（桐島儀右衞門）田舍娘お里　實ハ殺生石の亡魂。三國の小女郎（五世岩井半四郎）小松內府重盛。熊坂長範　實ハ齋藤市郎實盛。玉屋新兵衞實ハ三浦之助義澄。（三世坂東三津五郎）こつぶの七　實ハ平宗盛（中村傳九郎）

伊勢平氏攝神風

第一番目三建目　祇園社頭の場

淨瑠璃「誰身色和事」常磐津連中

役名。鉢叩き、次郎藏 實ハ上總之介廣光。關の次郎。難波六郎常遠。關原與市清甚。田舍娘、お里 實ハ殺生石の亡魂。面打ち、當作 實ハ三浦之助義澄。

本舞臺、三間の間、上の方に繪馬堂、この後より眞中へかけて、石の鳥居、感神院といふ額打つてあり、それより同じく玉垣、石燈籠下の方に床几二三脚、積み重ね、葭簀を立てかけ、出茶屋、夜の景色、見附けよき所に、松の立ち木誂らへあり。後ろ一面の黑幕、兩窓を下ろし、すべて祇園、夜涼みの體。ちやつぱ入りの夜神樂にて、幕明く。

ト直ぐに向うより、中間四つ手駕籠を舁いて出る。後より、關の次郎、絆纏、股引、大小にて、黑羽織の侍ひ三人、旅提灯を持ち、附き添ひて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

次郎　コリヤ／＼、待て／＼家來ども。もう何時であらうな。

侍一　只今聞えましたが、七ツの鐘でござりませう。

次郎　夜の明けるには、今少し。ちと、休息して行かう。

侍二　それがよろしうござりませう。

侍三　ちつとの間、駕籠の者。

駕舁　一息入れて參りませうか。

ト駕籠を立て、皆々休息する。此うち矢張り夜神樂にて、向うより侍ひ、先に難波の六郎常遠、繩からげしたる駕籠を舁かせ、出て來る。直ぐに舞臺へ來り

駕舁　オツと待つたり、草鞋の紐が。

常遠　エヽ、氣のきかない所で解けた。早くしやれ／＼。

ト駕籠を下ろして、向うへ思ひ入れ、駕籠舁き、草鞋の紐を締め直す。

次郎　その聲は、どうやら慥かに……。

ト立ち上がり、提灯にて常遠を見て

貴殿は、難波の六郎どの。

常遠　さうお云やるは、關の次郎。どういふ事で、この所に。

次郎　さればでござる。清盛公には、常磐が面體、お忘れなく、せめては、似たる者あらば、召連れ來れと御諚ゆゑ、所々方々と尋ぬるうち、常磐に似たる女めに、やうやう今日出會ひしゆゑ、有無を云はせず、駕籠に乘せ、夜道もいとはず御前へと、只今急いで參る折柄。して、其許には、如何の事で、その姿は。

常遠　サア、これには、仔細のある事なれど、斯ういふうちにも、又後より。

ト この時、向うバタ〳〵にて、關原與市清恭、常遠が跡を追はへて出て來り

與市　それに居るのは、常遠ならずや。

ト云ひながら、舞臺へ來る。

常遠　ソリヤこそ、關原。サア、駕籠を。

ト舁き上げようとする。此うち、與市、舞臺へ來り、これを見て

與市　待ちやれ。すりやどうあつても清盛公、召使はるゝ禿のうち、それなる者が、源家の八男牛若丸と申さるゝか。

常遠　おんでもない事。怪しいと目を附け置いたこの子倅、六波羅御所へ入込んだ仔細を、これから糺明する。與市清恭、お退きやれ。

與市　イヤ、相成らぬ。牛若丸は鞍馬にて、兼ねて御出家あらんず噂。それ聞きながら、御主君の召使はるゝ、幼なき者、糺明なぞとは、世上の聞え、源家を恐るゝ常遠、平家の耻辱と思ふがゆゑ、この關原がどこまでも、止めにやならぬ。お待ちやれサ。

常遠　エヽ、おんなじ事を又しても、疑ひかゝつたこの餓鬼め、難波が召連れ、糺明する。

與市　イヤ、さうはさせぬワ。

常遠　いらざる邪魔立て。ソレ、とも〳〵に。

次郎　心得た。

與市　小癪な事を。

トこれより早めの神樂になり、皆々與市に打つてかゝる。與市、皆々を相手に立廻り。常遠、小隠れする。關の次郎と侍ひ一人、下座へ逃げる。殘りの侍ひ、三人の駕籠舁き、一緒になつて、與市にかゝる、與市、四つ手の棒を引拔き、これにて立廻り。皆々堪らず、向うへ逃げて入るを、與市、これを追つて、向うへ入る。

ろ。此うち、下座より關の次郎、侍ひ、取つてかへし

次郎　人には觸はぬ、身共が手柄。

ト云ひながら、駕籠を取違へて擔ぐ。

侍ひ　これは迷惑。

ト舁き上げる。

次郎　急げ〳〵。

ト此うち、始終鳴り物にて、關の次郎、片棒舁いて、東の花道へ入る。ト鳴り物やんで、雨車の音して來る。トそろ〳〵常遠、後先見ながら、出て來り

常遠　駕籠はよし〳〵……南無三、雨が降つて來た。棒組み棒組み。エヽ、コレ、駕籠の桐油も……。

トそこらを見廻し、供の落せし油合羽を見附け

假にこいつを。

ト駕籠へ掛ける。この時、雷、少し鳴つて來る。

なんだ、ごろつき出したな。大降りのないうち、やりたいものだが、棒組み〳〵、どこへ逃げた。棒組みや棒組みやい……。

トこの時、雷、頻りに鳴つて來る。

エヽ、小やかましい雷めだ。うぬが鳴るので、いくら呼んでも、ねつから聞えるものぢやない。

ト矢張り、雷、きびしく鳴る。

アレ〳〵、矢ツ張り……ヤイ雷、身共を誰れとか思ふのだ。姿こそは駕籠舁きなれ、鬼神とも呼ばれたる、惡源太さへ討取つた、難波の六郎常遠だワ。早く鳴り止め。これにつけても、あの棒組み。よいよい、とても生けちやア置かぬ牛若。首にして委細の事を言上すりや、同じ道理。ドレ、ぶッ放して。

ト竹杖の仕込みを拔き、駕籠の側へ立ちかゝると、雷の音凄まじくして、雷火落ちかゝり、松の木、サッと二つに裂ける。これにて常遠は見事に宙返りして、其まゝ雷に打たれしこなし。雷、雨車、一度にしやんと止んで、駕籠の上へ狐火出でる。とテンと、雷序の頭を打つ。直ぐに誂らへの樂になる。すべてこの駕籠、高札の側に置く。合羽を掛けると、殺生石と見ゆる仕掛け。この時、駕籠、合羽を掛けしまゝ、左右へ二つに割れると、爰に田舍娘お里、實は殺生石の亡魂、廣振り袖の上へ、麻衣を引ッかけ、麥藁笠、後にして、油さしを持ちし見得にて、しやんと立ち身。かすめドロ〳〵、この途端、下の方に立てかけし葭簀、ガラガラと横に倒れる。トこの内に面打ち當作、實は三浦之

介義澄、直垂の形、大臣烏帽子にて、傘を擔ぎ、立ち身にてこなし。兩人、そろ〳〵舞臺先へ出る。チヨンと、ツカケにて、日覆より月出る。殺生石の亡魂、これを見上げる。當作は、月影に殺生石の亡魂を見附け、兩人、思ひ入れ。

亡魂　更け行けば、空に嵐の音冴えて

當作　雲間に氷る月の影。

亡魂　月の化粧も

當作　しろ〳〵と、まだら若き振り袖に。

亡魂　時雨をいとふ麥藁の、笠にもあらで駕籠の内。

當作　いつか雨にも鳴神の、晴るゝを松の下宿り。

亡魂　胸とゞろかす物の音。跡さへ消えし夢ごゝろ。

當作　覺めし思ひに思はずも、立ち出で見れば朧氣に

亡魂　いとしん〳〵たる神垣に

當作　丑満過ぎてたゞ一人。

亡魂　歸り詣でのねぎ事も

當作　戀の願ひと瑞籬に

亡魂　はしなく

當作　來たる

兩人　事ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、パッタリと音して、上の方、繪馬堂の羽目を蹴放し、内より、鉢叩き次郎藏、實は上總之介廣光、本仕立ての白丁、粕烏帽子にて、金燈籠を持ち、錦の袱紗に包みし矢の根を啣へ、ズッと出て、キッと思ひ入れ。鳴り物、變る。亡魂は、石の上なる髑髏を見附け、取上げて、其まゝズッと行かうとする。當作、ツカ〳〵と寄つて、亡魂を後より抱き止める。亡魂、思ひ入れよろしく振りほどき、こちらへ來ようとする。此うち、次郎藏、矢の根を懷中して窺ひ寄り、亡魂を支へる。亡魂、思ひ入れ。これより三人、面白き立廻り、いろ〳〵あつて、よきキッカケに鶏の聲する。これにて亡靈、驚ろき思ひ入れ。また立廻りて、兩人、亡魂を押へると、薄ドロ〳〵にて、亡魂、名玉を落し、其まゝ消える。當作、手早く取上げる。次郎藏もソレと立ちかゝる。當作、ちやつと懷中。次郎藏、爭ふ立廻り、さま〳〵あつて、トヾ、當作、次郎藏が白丁、次郎藏は、當作が裝束と互ひに、襟掛けを取つて、引拔き、尻居になる。ゴンと明け六ツの鐘。兩人、ホッと思ひ入れ。チヨンと木の頭、これにて、サッと兩窓を明け、兩人、立ち上がる。この時、烏帽

子取れて、やつし、袖なし羽織の形になる。姿を詠めろこなしよろしく、拍子、幕のキザミにつれ、後の黒幕を明ける。爰に常磐津連中、居並ぶ。日覆より、紅葉の吊り枝、鳥居、紅葉の幹に變る。右のキザミに、薄ドロ〳〵をかぶせ、花道、いつもの所へお里、振り袖、田舍娘の拵らへにて、梅の花を折りそへし苞を脊負ひ、菅笠を持ち見得にてセリ上がる。双方途端、舞臺の兩人、顔見合せ、ちやつと裏身になり、紅葉を見上げる。前彈きなしに直ぐに淨瑠璃。

〽時知るや、まだな青葉もついいたづらな、時雨々々に色づいた、しよんがいな、姿もぶきな振り袖を、田舍者ぢやと人さんが、笑ひめすともなんのその、こちも在所ぢや相應に、やれこれ昨夜もこの袖を、引いた八つ口暗闇で、綻ばされたえ恥かしや、おしやらくなれど高端折り、二布びらしやら來りける。

ト舞臺へ來る。此うち、次郎藏は、思ひ〳〵に摺り火打ちにて、煙草のみ居る。

さと　モシ、そこなお衆え。わしにも火を一つ、貸して下さりませ。

ト腰より煙管を出す。當作、火を貸しながらお里を見て

當作　ハテ怪しい。まだ東雲の暗まぎれ、さもやごとなき上﨟の、姿にも似ぬ墨衣。

次郎　合點ゆかずと見たゆゑに、窺ひ寄つて引きとめる、衣の伽羅の香そのまゝに、殘り多くもどこへやら。

當作　消えて忽ち鐘の音に、明けゆく空の朝ぼらけ

次郎　まだ道芝に置く霜の、跡さへ付かぬ下河原。

當作　所目馴れぬ

次郎　在所の姐え。

當作　おぬしや、どうして。

さと　サア、わしやな、下野の國から、父御前の代りに、内裏樣へ貢ぎを持つて上り申して、初めて都の珍らしく、三條の旅籠屋を、夜のうちから出やり申した。

當作　ムウ、アノ下野から、女の一人。

次郎　さうしてこなさんも、とんだ時分から、マア、何人だえ。

當作　わしかえ。わしが商賣は面打ちサ。

ト風呂敷包みより、誂らへの面、三つ出す。

次郎　それにどうした烏帽子裝束。

當作　サア、ありやア、昨夜、祇園町の扇九でした茶番狂

言、道風の形のまゝ、醉の紛れに思はず知らず、打ちあげた、この面を誂らへの旦那衆へ、今朝直ぐに持つて行かうと、サア茲が生醉、本性違はず。

次郎　ハテナウ。

當作　して、こなさんはえ。

次郎　わしやア毎朝、曉毎に洛中廻る鉢叩き。

ト瓢を出す。

開いて下され。爰に立ちつけた宮奴めが駈落ちしたゆゑ、人代りに夜は社頭の寐ずの番。

當作　ヘエ……それで、アノ白丁出立ちな。

次郎　こなたも。

當作　こなたも。

ト双方思ひ入れ。

さと　すりや、名玉は二人のうち。

トつか／＼と當作が懐へ手を入れろ。當作、ちやつと突き退ける。次郎藏、隔て

次郎　さてこそ、われがその時の。

トお里、思ひ入れ。

さと　イヽエ、わたしは、今初めて。

當作　そんなら、なんで懐へ。

さと　サア、そりや。

〽初めて見てもどこやらが、いたづらしう三重襷、三津五郎とやらの役者繪に、似てなりやさぞや面白い、文や起請を持つてなら、見せてもらうて色事の、手本にしようと思ふゆゑ。

當作　それで今、アノ、懐へ。

ト當作を相手に、よろしくある。

さと　アイ。

次郎　コレ／＼、その色の文や起請なら、おれが見せてやらうほどに、なんとその代りにや、おれとちつくり氣味やつて見る事はないか。どうだ／＼。

さと　ナニ、嘘云はつしやる。

次郎　イヤ、コレ、ほんに。

さと　それが定なら、此方から。

〽日天さまかけて、これな、申し、外に男は持ち前の、燒餅やいて夜晝も、側に寄り添ひ引ツついて、松脂かと云はれたら、これ芝翫ざし差向ひ、圍爐裏の側の樂しみは、たまつたものぢやないかいな。

ト次郎藏を捕へ、内懐へ思ひ入れ。

當作　ハア、そんなら、おれとの話し合ひは。

さと　ハテ、初めから、それ樣には、此方から願ふ事ぢや。
次郎　そんなら、おれに今云つたは
さと　眞實で云ひ申すのサ。
當作　イヤ今時の田舍者には、油斷がならぬと云ふゆゑ。
次郎　餘ッぽど手のあるいたづら者。
當作　この、お娘を女郎にしたなら。
次郎　ほんに、女郎と云へば、貴樣が出して見せた面。どうやら女郎の。
當作　それサ……これが傾城。大盡に太鼓持ち。變つた面を誂らへたものサ。
　トいち〳〵面を出して見せる。
次郎　なんと、何も慰みだが、こなさん、この面をかぶつて、眞似をしちや見せまいか。
さと　こりや、ずない思ひつきだ。
當作　イヤ、この衆達は、とんだ事を云つたものだ。どうしてそんな。併し、わしが親仁は、三つの面を一度にした事もあつたが、さうはせずとも、ちつとばかりは。
次郎　そこはどうでも。
當作　併し、その代りには、こなさん達も。
次郎　サア、おらもすぎはひの、鉢叩きでもやらかさうから、田舍の姐えも、何なりと。
さと　ア、、麥搗き唄でも唄ひますべい。
當作　ドレ、さういふ事なら、この面を出したか。
次郎　こりや、面白からうかい。
　ト淸搔になる。當作傾城の面にて振りにかゝる。
〽色の浮世の仲の町、櫻の山を寫し繪や、八重に開いて一重に思ふ、君待合の名も床し、その戀風に誘はれて、通ひ廓へ今日も又、來つつ馴染の大盡と、看板打つて表から、下地の酒の一調子、エ、イ、喜助々々、〽ヤア旦那これはようお出でなされました、モシ、花魁が先刻から、お待ち兼ねとは有り難いぢやござりませぬか。〽エ、措いてくれ、露蝶、お主まで、さうこけ〳〵と取扱つてくれるは、恨みだぜえ、コレ、聞いてくれ、あの、傾州め、この頃聞けばどこやらから來る、良い男ときついものだげなの。〽モシ、そんな事、どこでマア、お前は聞いて來なんしたえ、サア、その云ひ手を出しなんし、誰れでざんす〳〵〽サア、その云ひ手は〽コレ申し、矢ッ張りそんなないもせぬ、訶咎めや疳積を、わざと起してわたしにも、泣かせて嬉しがるやうな、お前は浮氣な仲か

いな、ほんに年をも打明けて、勤めで逢はぬ女房氣を、知つて居ながら憎らしい〽こりや花魁のが御尤も、もうもう口舌もそれぎりで、長う云はぬが花よりも、正燈寺の紅葉　醉うた〳〵たゝつぽゝ、ちりから〳〵ちつたぽ〳〵、てん〳〵てん〳〵〳〵〳〵天から黑雲雨が降る、供合羽か赤合羽、おいちよかうたらうつちぬべいと云うたら、大事のやつかんか、物すさまじきえ。
さと　こりや、面白かつわいな。
次郎　サア〳〵、爰で姐え〳〵。
さと　マア〳〵お前。
次郎　よい〳〵。田を行くも、畔を引くも同じ事だ。そんなら爰で……エヘン〳〵、さらば、我れらが身の上を。
〽まだ明け殘る有明の、月の都の堀川を、烏の聲に起き出でゝ、輕い身過ぎの瓢簞を、叩き納豆と擂れちがひ、後生半分商ひを、たゞ一口に嚙みこなし、空也の敎へ南無阿彌陀、佛も元は衆生なり、女房も元は娘にて、仇な勤めの床入りに、寄と涅槃の長枕、黃金の肌ぞ有り難き、なまうだ〳〵南無阿彌陀、西は島原彌陀の淨土へ。
當作　サア〳〵、これから當り前だ。姐え、なんなと。
さと　ぢやというて。

兩人　斟酌せずと、やらかせ〳〵。
さと　なんとすべい。
〽在鄉者なりや何一つ、なすべい事さ知らねども、手馴れし業のあらましは、先づ立つ春の廿日目に、初めて戀の種おろし、それからいつも日を數へ、苗代時のよい首尾を、待つてしつぽり五月雨に、二布濡らしてぞんぶりこ、水も洩らさぬ田植唄〽植ゑい〳〵早乙女、早乙女の、よこれぬ物は唄ばかり、唄も手品も見事に〳〵、さつても揃うた手拭、ぞんぶりこ〳〵、樣が菅笠、おゝやれ〳〵やれ〳〵やれさてな、ようも似合うた腰すぐり、もじりて伊達こきやろぞいの〽爰は苅入れ八束の穗波、籾挽するべい棒もくるりと廻つて作男、夜なべ手傳ふ一節に、臼と杵とは仲よい女夫で、かの〳〵とんと月夜に浮名立つ〽井戸と釣瓶はよい仲同士で、かの〳〵とんと落ちては浮名立つ、そこらで詰め込む米俵。三人にて運ぶ
ト合ひ方にて米をはかり、俵へ詰める。事などよろしくあつて
〽納めた數は幾戸前、ぎつしりいつぱい大入りぢや。
三人　しやん〳〵。
〽もひとつ藏も逹開く、日を選みたる吉日に。

さと　オヽ、神酒洗米、鏡餅、數多の供物を供へつゝ
〽手斧はじめぞめでたけれ。
當作　既に大工を內匠とは、人皇三十二世の御子
さと　聖德太子の御時に、六十餘州の諸職を召され
兩人　內匠と官を賜はつたり。
〽傳へて今も世にしるき、飛驒の內匠や竹田の番匠、その流れたる我れ〳〵は、初手親方にこの頭、叩き大工に候へど、矩規準繩はよく覺え、五重の塔でもお宮でも、請取り普請木寄せして、ちよんとはつればちよんと木取れた、ちよんやちよん〳〵ちよんと木取れた、ちよ〳〵うのちよんの間と抱きつけば〽もうてんからもと振り放し、鉢卷しめて中の字も、江戶の伯父貴に聞いた風、こりや又なんのこつた、せなご達、田舍者ぢやと馬鹿にして、あんまりなぶつてくれめすな、その仇言の露ほども誠があらば命にも、替へて契りを求女さま、優しい例しあるものを、心にもないいたづらは、男の癖か憎くらしい。
トこの文句にて、お里、兩人の懷へ心を附けるこなし。
當作　ハテ、心得ぬ娘が素振り。

次郎　やゝともすれば、二人が懷。
ト思ひ入れ。お里、こなし。
さと　イヤ……なんの、今のやうには云ふものゝ、面白さうなお二人ゆゑ、なぶられたさに此方から。
當作　仕掛ける色なら辭儀なしに
次郎　女一人を二人して
さと　三つぶところで
ト兩人より、手を取る。お里、拂つて
三人　睦言は。
ト直ぐに三人、手踊りになる。誂らへの鳴り物、踊り振りにて、二人、對の肌脫ぎになる。
〽鷄と鐘とを戀する身には、なんとした〽きつう恨んでゐるとの事が、ほんかいの〽さうぢやいの、逢うたその夜に別れを告ぐる、ほんに憎いぢやあるまいか、尤もぢや、そんなら互ひに帶解いて、寐よとの鐘も恨むかえ、首尾をつくらふ鷄も憎いか〽サア、それは〽ドヽ、、どうでんす、如何にもさう聞きや、まんざらでもないにえ〽なまめかし。
トこの踊りの切れに、お里、當作がふところより綸旨、次郎藏が懷より矢の根を引き出し見て、思ひ入

れ。

當作　それこそ、正しく。

ト當作は矢の根、次郎藏は綸旨と互ひに取る。お里、これに構はず、また當作が懷へかゝる。立廻り。この時、次郎藏、手早く綸旨を押開き

次郎　こりや、恐れある法皇の綸旨。

ト思ひ入れ。お里、これを聞き、驚ろいて其まゝ、ひらりと飛ぶ。當作、其まゝ、次郎藏が手を留め、お里を見る。雷序の頭打つ。次郎藏、片手にて綸旨を懷中する。この途端チョンと木の頭。お里、裏身にて振り返り、狐の見得。兩人、よろしく

〽後の出合ひと。

ト淨瑠璃にかぶせて、

拍子幕

第一番目大詰　　西八條清盛館の場

役名——平相國清盛入道。傘張法橋。淸水のきほひ、こつぶの七　實ハ內大臣平宗盛。茶屋娘、おまつ　實ハ源賴朝。源牛若丸。長田庄司忠宗。飛驒左衞門景家。近藤判官。難波六郎常遠。越中次郎の妻、歌町。上總五郎妹、吳竹。伊達太郎定澄。判人、權七。茶屋女、おかね。同、おせき。伴の左衞門國門。阿波民部重能。八條の局。腰元、夕榮。奴、宇田平。小松內府重盛。盜賊、熊坂長範　實ハ齋藤市郎實盛。

本舞臺、三間の間、高二重、金襖、瓦燈口。上の方、高欄の付いた御簾屋體、東西に梅の立ち樹、柴垣網代塀。舞臺前、井筒。右二重舞臺、一面に御簾下ろし、すべて西八條清盛館の體よろしく、幕の內より長田の庄司忠宗、衣裳上下にて、高札に松の枝を結びつけたるを持ち、奥へ行かうとして居る。これを左右より越中の次郎が妻歌町、上總五郎妹吳竹、襠補衣裳にて留めて居る見得。引張りよろしく、管絃にて幕明く。

忠宗　長田の庄司忠宗が、言上なすべき旨あつて、推參なしたる西八條のこの館、何ゆゑあつて女房達、某を止め召さる。

歌町　我が君には、淸水寺觀音への御參籠。重盛公はこの

程より、御所勞にましませば、猥りに奥へは相成りませぬ。

呉竹　殊に、これまで源氏に隨ひ、やう／＼この程、お目見得あつて、間もなき長田の庄司さま、何かは知らねど、暫らくはマア／＼、お控へなされませい。

忠宗　ム、ハ、、、。謂はれざる女輩の支へ立て。新院に荷擔なし、朝敵同然の頭の殿を討つて、平家に仕へる長田の忠宗。女の存じた事でない。そこ退いて通し召され。

呉竹　譜代恩顧の身を以て、主家に敵せし長田どの。

歌町　平家無二の侍ひ、越中の次郎が妻歌町。

呉竹　上總の五郎が妹呉竹。樣子聞かねば奥殿へ

兩人　滅多には相成りませぬ。

忠宗　女ばらに論は無益。妨げせずと、早く通しやれ。

二人　イヤ、どうあつても我れ／＼が。

忠宗　エヽ、面倒な。

　ト突き退ける。ちやつと立廻り、キッとなる。向う揚げ幕にて

呼び　御歸館。

忠宗　ナニ、淸盛公の

三人　御歸館とや。

　トちつと思ひ入れ。この時また

呼び　御歸館。

　トこれにて誂らへの出の鳴り物になり、向うより淸盛入道、壺折り衣裳にて、庭下駄を穿き、伊達の太郎定澄、上下、衣裳にて、日傘をさしかけ、後より伴の左衛門國門、上下衣裳にて、太刀を持ち、この後より子役大勢、千人禿にて、梅の枝を持ち、ズッと後より、飛驒の左衛門景家、龍神卷、凛々しき形、蒔繪の箱を三方に載せ、持ち出る。皆々並よく並ぶ。

淸盛　一陽既に覆溢なし、林泉のほとりに樹木の色を映ずる、西八條の我が物好き、冬の詠めも格別おやわい。

景家　梅に紅葉に赤旗と、海ひるがへす平家の御威勢、また類なき君の榮耀。

定澄　路次の御機嫌一入と、お供に立ちし伊達定澄。

國門　餓鬼大將に選ばれし、伴の太郎が召し具したる、千人禿も一對に。

梅丸　仰せを受けて洛中を、梅の魁、小野の梅丸。

坂丸　平野の坂丸。

長丸　嵯峨野の長丸。

富丸　醍醐の富丸。
石丸　太秦の石丸。
藤丸　加茂の藤丸。
子皆　御供、仕つてござりまする。
景家　君には、先づ〳〵。
清盛　みな參れ。
皆々　ハア、。
ト右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來り、二重舞臺、眞中へ、二疊臺、子役は左右へ住ふ。歌町、吳竹、こなしあつて
歌町　我が君には、御機嫌よう、お早い御歸館。
吳竹　重盛公にも、今日は、御氣色もよろしきやう、典藥の頭が伺ひ
兩人　何よりはお嬉しう存じまする。
清盛　越中上總が女房、妹、同席なしたる長田の庄司、何ゆゑあつて控へ居るぞ。
忠宗　ハツ、某、言上の旨あつて、見參なし奉らんと申すところ、兩人の女が咎め、折よく君の御歸館に、大慶至極に存じ奉りまする。
歌町　憚りながら、君の御參詣のお留守といひ、重盛公御所勞の障りと存じ
吳竹　推して推參と承はり、それゆゑ止めましてござりまする。
清盛　ハ、、、云はれざる女が馬鹿念。これといふも、伜重盛が變屈。この入道が心には、一つとして叶はぬ。イヤ、ナニ、飛驒の左衞門。
景家　ハツ。
清盛　長田が訴へ何事か、承はつて、よきに計らへ。
景家　その儀は、兼ねて某へ通達、野間の內海で義朝を討取り、平家へ屬せし庄司忠宗、恩賞の御沙汰、今以て無きも、全く重盛公、能登どのを以て、控へよとある御沙汰なれば、先づその儀に及ばれ、然るべう存じます。
忠宗　義朝、亡び失せたる後、源氏の類族、爰彼所にあつて、平家を討たんず企てなす由、及ばぬ事と存じながら捨て置かれざるこの高札。恐れながら、上覽に入れ奉りたく、わざ〳〵持參仕つてござりまする。
景家　ムウ、高札に歌を記し、松の一枝括り添へしは、如何なる仔細。
ト取つて見て
清盛の命なるべきためしには、かねてぞ折れし姫小松か

な。
忠宗　小松とは即ち重盛公。めでたき歌を悪しざまに、詠みなしたるは、察するところ、源氏の輩が調伏の詠み歌。大和大路に立てありしを、直さま引抜き、持參仕つてござりまする。
定澄　ナニサマ、平家を蔑みなすざれ歌。正しく源氏の輩が、徘徊いたすに相違ござらぬ。
國門　捨て置かば、平家の武威の薄きに似たり。御詮議あつて然るべう存じまする。
清盛　ムウ……左衛門、今一度、詠み聞かせい。
景家　清盛の、命なるべきためしには、かねてぞ折れし姫小松かな。
清盛　入道が榮耀は、凡そ天が下に並ぶものなきを羨やみさま／＼のたわ言。總じて人を呪ひ、調伏などいふは、心甲斐なき愚人の仕業。富士の山を蟻が穿つに同じ事。殊に以て、その歌は、我が爲の大吉左右、滿足々々。
景家　斯く忌はしきざれ歌を、吉事なりとの君の仰せ。
忠宗　殊には松の一枝を、取添へ結びし不吉の印を、
歌町　我が君樣には、御吉左右とのお喜び。
定澄　一圓、合點が參りませぬ

清盛　我れ、兼ねて義朝が妻の常磐を慕ひ、召し寄せんと思ひしところ、尾張の沖にて入水との知らせ、さりながら、一旦思ひ立ちたる我が戀、常磐に似たりし女あらば召し連れ來れと申し付けしが、今以て連れ來らず、空しく心を苦しめたりしに、清盛が命にかけしは、例しなき松の常磐、手折つて我が手に入りたる前表、滿足にはあるまいか。
景家　ハヽア、イカサマ御心にかけらし常磐御前、入水とあるゆゑ、似寄りし女を御詮議の最中
忠宗　松は常磐の色深く、姫小松と詠みかなへたるは、常磐に似たる小娘が、御前へ參る前表でがなござりませう。
清盛　心に叶ひし高札を、持參なしたる長田の庄司、改めて入道が、莫大の褒美與へん。
忠宗　有り難う存じ奉りまする。
清盛　小枝の松は、心の吉瑞、手づから閨の詠めにせうわい。
ト右の枝を取つてこなし。向うより侍ひ一人、走り出て
侍ひ　兼ねて仰せつけられし、常磐御前に似寄りの女、大

勢召し連れ控へましてござりまする。
景忠　ナニ、女どもを連れ参つたか。
定澄　今の歌が、當つたと見えまする。
　ト向うにて
權七　サア〳〵、來なさい〳〵。
　トてんつゝになり、向うより權七、やつし、ぜげんの形。おかれ、おせき、白無垢、緋の袴、後よりおまつ、やつし、振り袖、娘、前垂れがけ、茶店の女にて、付き添ひ出て來り。
かれ　コレ權七さん、今御門の外で云つた譯は、承知であらうの。
權七　ハテ、極まりさへすれば、おれが爰にある事だ。何にも云はずに一緒に來るがよい。
せき　權七さん、わつちらは、こんな物を穿いて、歩き憎いと云つちやアない。
かれ　それに、忙しなくせり立てられるので、ぼう〳〵肩とやらも、せずに來やしたよ。
まつ　お前方、お目見得が濟んだなら、一緒に連れ立つて參らうにえ。
權七　連れ立つて歸るやうで、埒が明くものか。なんでも本繭を引かにやならない。
せき　權七さん、早いがよいよ。
定澄　ヤイ〳〵、かしましい。御前だぞ。
皆々　ハイ〳〵。
　ト皆々、下に居る。
景家　見れば、いづれも官女の形、詞つきとは相違の姿。どういふ仔細だ。
權七　ハイ〳〵、御殿へ御奉公の女中は、白無垢緋の袴と承はりまして、不躾でないやうに、着換へて連れて參りました。
景家　ハヽヽヽ、こりや尤も。先づ何よりは、その常磐に似たる女はどれぢや。
權七　みんな代物は、お請合ひ申して、上げまする。先づこの中を、御覽なされての上になされませ。
景家　庄司どの、貴殿は、兼ねて常磐の面ざし、御存じでござらう。
忠宗　いづれ拙者が、検分いたすでござらう。一人づゝそれへ連れ參れ。
　ト管絃になり、懐より眼鏡を出し、一人づゝ見る。權七段々におかれを突き出す。忠宗、頭を振る。又おせ

きを出す。それでないといふこなしよろしく、また權七、おまつを出す。忠宗、ヂッと顏を見入り、思ひ入れあつて、懷より繪姿を出し、引合せて見て

ムウ……ハテ、この娘の面ざしが

まつ　エヽ。

ト思ひ入れ。

忠宗　イヤモウ、生寫し。ハテ、よう似たわえ。

淸盛　ムウ、忠宗、似たと申すは、その娘か。

忠宗　其まゝの常磐でござりまする。

淸盛　すりや、繪姿に。

忠宗　寸分違はぬ彼れが面ざし。ハテ、奇妙。

淸盛　ムウ。

トおまつに見惚れる。おまつ、恥かしさうにして

まつ　おかねさん、早く參らうにえ。

淸盛　その女、留めい……氣に入つた。

まつ　エヽ。

忠宗　思し召しに叶ひしとあらば、直ぐにお側へ。ナア、左衞門どの。

景家　如何にも。ヤイ町人、其方も、先づ安堵であらうな。

權七　それはマア、有り難うござります……おまつさん、お前は仕合せだ。淸盛さまのお側を勤めるのだ。嬉しいか嬉しいか。

まつ　淸盛さまとやらは、我まゝ云うて、怖いお方といふ噂。どうしてマア、そんな御奉公が。

ト淸盛、こなし。

權七　ハテ、そんな事云つて濟むものか、また居馴染むと、さうしたものではない。

まつ　それでも、わたしはな。

權七　コレサ、子供かなんぞのやうに、どうしたものだ。今更、そんな事を云へば、おれも又。

ト立ちかゝる。

淸盛　ソレ、留めい。

景家　コリヤ〳〵町人、控へぬか。

權七　ヘイ〳〵。

淸盛　加茂川の水、双六の賽、心に任せぬは戀の道。ましてや未だ少女の心、尤もさこそ。コリヤ、越中上總が女房達、あの娘を奧殿へ伴ひ、いたはり遣はせ。飛驒の左衞門、其方は、町人が望みの金子、如何程なりとも、取らせ遣はせ。

景家　畏まつてござりまする。
歌町　左樣ならば、あの娘御を、君のお伽にお召し遊ばしますのでござりまするか。
呉竹　氏なき女をお館へ、召し寄せ給ふ我が君樣。重盛さまのお聞きあらば。
清盛　苦しうない、義朝が妻にさへ、戀慕なすこの入道。無益の舌の根動かすな。
景家　君の仰せは綸言同然。
敵皆　出でゝ再び返らぬ事だ。
まつ　そんなら、どうでも歸ります事は。
權七　又そんな駄々を云ふまい。
かれ　さうして、わたしらは、どうするのだえ。
景家　女官の末に召使うて遣はさるゝ。
權七　イヤモウ、こいらはおまけに、置いて歸りまする。
景家　我が君にも奥殿へ。
清盛　まだ暮れるには間があらうか。
敵皆　ハテ、性急な思し召し。
ト清盛、おまつを見て
清盛　ハヽヽヽ。
ト笑ふ。管絃になり、チヨンと御簾下がる。歌町、呉竹、おまつを連れ、おかれ、おせき權七附いて、後よりは忠宗、奥へ入る。後に左衞門景家、伊達の太郎定澄、伴左衞門國門殘る。始終、管絃。
定澄　飛驒の左衞門景家どの、今日、清水寺の奥の院より持參召されしその箱は。
國門　平家の重寶、蛭卷の長刀、なんぞ仔細のある事でござるかな。
景家　清盛公、兼ねて大位を望み給ふがゆゑ、法皇を鳥羽の離宮へ移したるも、神寶の代りに、この長刀を以て形代となせば、君は正しく上なき御位といふもの。
定澄　ナニサマ、この上もなき我が君の思し召し。さりながら、重盛どのゝ仁義立てに、もしこの事が露顯いたさば
國長　一大事と存じまする。
景家　それゆゑ長刀は斯くの如く箱に納めて、何となく某が預かり、また二つには、兼ねてより源氏の餘類、この長刀に心を掛けると承はれば、これを囮に誘き寄せるか、降參させて味方に附けるか、どの道用に立つべき一品。それゆゑ、拙者が守護いたすのでござる。
定澄　何かにつけて、我れ〳〵が氣ぶさいなは、重盛ど

の。
國門　この程、所勞とあるからは、こりや、手短かに片付
　ける御思案。
景家　その儀も身共が、我が君と申し合せ置いてござる。
兩人　すりや、邪魔なる重盛どのを。
景家　コレ、密かに。
　ト押へる。向うにて
呼び　阿波の民部出仕。
　ト太鼓、謠になり、向うより、阿波の民部重能、上下
　衣裳にて、蒔繪の太刀の箱を抱へ出て來る。景家、見
　て
景家　阿波の民部重能には、先達て君の御勘氣、それに何
　ぞやいかめしく
定澄　出仕披露と呼び次がせ、西八條のお館へ
國門　何ゆゑあつて推參召された。
重能　その不審も近頃以て尤も。樣子はそれにて、申すで
　ござらう。ソレ、者ども、その繩付きを引立てい。
　ト向うにて
侍ひ　ハア、。
　ト時の太鼓になり、向うより、熊坂太郎長範、百日、
　大どてら、强盜の形。大繩にかゝり、これを半素袍の
　侍ひ二人、繩を扣へ出て來る。
景家　見れば怪しき曲者を、引据ゑ參つた阿波の民部、か
　たがた以つて心得ぬ。
重能　先つ頃より紛失なしたる日の御劍、奪ひ取つたる曲
　者を、召捕つたるを功となし、卽ち、出仕のこの民部、
　それゆゑ推して推參いたした。
景家　神寶の一つたる、寶劍を奪ひしとは、並み〱なら
　ぬ曲者め。必定彼れが仕業ならば、外に荷擔の武士もあ
　らん。
定澄　物ども、其奴を拷問いたせ。
侍ひ　ハツ。
　トかゝるを、見事に投げ退ける。定澄、國門、キッと
　なつて
定門　こりや、手向ひか……サア、眞直ぐに白狀ひろげ。
長範　やかましいわえ。一天下の寶物と知つて、盜みに入
　つた泥坊。同類を賴みに働らきがなるものか。馬鹿な事
　を云ふ二本棒めら。ドリヤ、そこへ行てお神輿を据ゑよ
　うか。
　ト合ひ方になり、長範、舞臺の眞中へ來る。

重能　御覽の通り不敵の曲者。美濃の國青墓の山賊、熊坂太郎とやらん云ふゑせ者。

景家　その熊坂は、世に聞えし强盜の張本、容易く手に入る筈がない。察するところ、强盜と僞はり、平家を窺ふ曲者であらう。

長範　名將勇士も運次第。名に聞えた盜賊でも、天の網ならば仕方がない。日本國に隱れのない、熊坂太郎長範といふ、れつきとしたお泥坊樣だ。

景家　ハヽヽヽ。餘人は知らず、飛驒の左衞門、僞はりを誠としやうか。ソレ、家來とも、兼ねて捕へし盜賊どもその外、巾着切りなどにて、四人繩をかゝり、後より早く爰へ引摺り出せ。

家來　ハ、ア、立たう。

ト時の太鼓になり、盜人三人、世話形　盜人の拵らへ足輕、十手を差し、附き添ひ出る。

下に居らう。

ト下の方へ引据ゑる。

足輕　ハッ、仰せに從ひ、捕へ置きたる盜人ども、これまで引据ゑましてござりまする。

景家　ヤイ、罪人めら、わいらをこれへ呼び出したるは、今日これへ召捕へたる曲者、熊坂太郎と名乘れども、合點ゆかねば、わいらにとくと引合せ

足輕　有やうに申すならば、その罪を赦し、追ひ拂ひ遣はさるゝ。それへ參つて面を見た上、僞はりなく吐かし居らう。

盜皆　ハイ〳〵、有り難うござります。

ト皆々、長範を見て

盜一　コレ、皆見たか。彼奴が熊坂だと吐かすさうだが、おいらが見知つた熊坂どのとは大違ひ。

盜二　面魂ひは逞ましいやうだが、熊坂ならば見知つて居ります。

盜三　連雀町の祭りの花車でも、大概知れた形格好。

盜四　今坂餅の甘口な、小泥坊のおいらでさへ、知らぬ事はないが

四人　大層な事を、吐かす奴でござるわえ。

ト皆々笑ふ。長範、四人をヂロ〳〵見て

長範　皆久し振りで顏を見るな。日頃、仲間の固めた通りどんな責めを請けても同類を吐くな、一緒に居ても見知らぬ顏をしろと云つたを、よく守つて、ハテ、奇特な奴等。併し、斯うなつたら、どうでおれは無い者と思つて、

わいらは今までのよしみに、回向を頼むぞよ。

盗一　アヽ、コレ〳〵、そりや何を云ふのだ。ついに見た事もないおいら。

盗二　それ〳〵、そんな事を云はれると、此方が怪しまれて迷惑するわい。

盗三　廿里四方に働らくだけの仲間は、知らぬと云ふ事はない。

盗四　正直正路なおいらをば、嘘つきにするのか。

皆々　盗人を見るやうな奴でござるわえ。

長範　ハテ、未練な奴等。同類といふ事は、金輪奈落隠してやるワ。さう思つて落ちついて居ろよ。

盗一　エヽ、忌々しい。さう吐かすほど、矢ッ張りおいらに疑ひが

四人　大泥坊め、ぶちのめしてやれ。

ト立ち上がらうとして、體の叶はぬこなし。

景家　ハヽヽヽ、ハテ、企んでうせ置つたな。只今の様子では、大概は知れた。最早用無き科人ども。繩を解いて門外へぼッ拂へ。

足輕　畏まつてござりまする。

盗四　エヽ、有り難うござります。

足輕　立たう。

ト管絃になり、足輕、盗人四人を引立て、下座へ入る。

景家　熊坂でもない奴に、なき名をつけて引据ゑ、その出かし顔。君を僞はる阿波の民部、盗賊よりはおてまへを詮議せにやならぬわえ。

重能　拙者へ詮議とお云やれば、飛騨の左衛門、貴殿にも詮議がある。

景家　ナニ、身共に詮議とは。

重能　今日、清水寺の奥の院より、持參召されし蛭巻の長刀。

景家　なんと。

重能　その長刀こそは清盛公、先達て、先帝御惱の折から清水寺へ御奉納あつたる一品、何ゆゑあつて持參召された。最前より見るところ、その箱こそは慥かに長刀。

景家　如何にも平家の重寶、蛭巻の長刀、持參いたせと清盛公の仰せ。

重能　禁廷へ達しもなく、我まゝに持參あつても苦しうござらぬか。

景家　ムヽ、ハヽヽヽ。清盛公のなさる事に、誰れが點の

打ち手はない。重盛公の御病氣御祈念の爲、持ち歸つたを、我まゝなどゝは、憚りなる一言。それは兎もあれ、寶劍持參とあれば、拙者が取次ぎ。

重能　イヤ、某がお詫びの種のこの一品。當殿へ取次ぎ相頼まぬ。

景家　君の御前を遠ざけられし阿波の民部、御前へは罷りならぬ。ソレ、民部を早く引立て召されい。

國定　ハツ。

ト兩方より

民部、お立ちやれ。

トかゝるを、ちよつと突き退け

重能　君の御前へ參らぬうちは、各々方のいらざる差配。

景家　ムウ、勘氣の身を以て、推しての推參、苦しうないか。

重能　サ、それは。

景家　この盜賊も火水の拷問、民部諸とも、ソレ兩人。

國定　ハツ。

ト皆々立ちかゝつて

キリ〳〵お立ちやれ。

トきつとなる。この時、向う揚げ幕にて

八條　待つた、その御詮議、局八條お止め申しました。先づ〳〵お控へ下されませう。

ト三味線入り、下がり葉になり、裲襠衣裳、八條の局大乘經を三方に載せ、後より夕榮、振り袖、奥女中、誂らへの嶋臺を持ち、出て來る。

重能　我れ〳〵の爭ひの只中、出仕召された八條の局。

皆々　何ゆゑ待てと止め召された。

八條　樣子は何か存じませねど、各々樣の爭ひと見請けまして、取敢へず御挨拶申し上げんと、お止め申せしこの八條。

夕榮　重盛公の御代參として、祇園の社へ御參籠の歸り、獻上のこの島臺。何は兎もあれ、お局樣には、マア〳〵あれへ、お越しあられませう。

ト矢張り、下がり葉にて、兩方、本舞臺へ來り、八條の局、上の方。夕榮は下に控へる。

八條　重盛公の御病氣、御全快あるやう、諸寺諸山にての御祈念。殊に、今日は自らを以て、祇園の社へ御代參。その折柄にござりますれば、お二人樣にも角目立ちてのお爭ひは、如何と存じ、憚りながら、お止め申したのでござります。

る。

景家　阿波の民部は、御勘氣の身ながらも、日の寶劍手に入りしを功に推參とござるゆゑ、その一品を受取らうと申す某。

重能　イヤ、拙者が功を掻い取つて、推しての取次ぎ、頼み申さぬ。それよりは、大切なる蛭卷の長刀、心得難きは飛驒の左衞門。

景家　イヤ、淸盛公の仰せに依りて、所持なす長刀。いらざる差配控へてお居やれ。

八條　君の仰せとあれば、左衞門さまのお詞も尤も。寶劍を手に入れ、お詫びの印とあるからは、すりや、この曲者が。

長範　熊坂といふお泥坊さまサ。何もかも云つて聞かせたら、早く淸盛どのゝ、前へ連れて行つてもらひたい。それがならずば、切るとも突くとも、ごくにも立たぬ爭ひを、聞いて居るのも何より大儀。八條どのとやら、早く片を付けさして下さい。

八條　淸盛公の御前へ望む熊坂太郎。並々ならぬこの曲者。召捕られしは民部さまの大功。また君の仰せを蒙むられ、御持參とあらば、その長刀も寶劍も、御兩所ともに銘々に、差上げられての上の事と、憚りながら存じまする。

景家　それは兎もあれ、この曲者、熊坂と名乘つても、心得難き彼奴が俗姓、とくと詮議を糺した上。

八條　イヤ、これが俗姓何者にも致せ、その儀は後して、とくと御詮議がよろしいではござりませぬか。

夕榮　八條さまの仰せの通り、民部さまの御勘氣を詫びの印の一品、直ぐに御推參あるが順道かと、憚りながら存じまする。

景家　アノ、御勘氣の阿波の民部、推しての推參、苦しうないか。

八條　その儀は、局八條がお執成し、禁廷よりの附け人に差し置かれまする自からが詞。それでもお止めなされまするか。

景家　サ、それは。

八條　サア。

二人　サア〳〵。

八條　よもや、御批判はござりますまい。

景家　我まゝの淸盛公も、折にふれては、お心を置かるゝが局の八條。然らば勝手に計らひ召され。

重能　拙者は此まゝ、君の御前へ。併し、推して推參もいはゞ憚り。八條どのゝお取次ぎ。
夕榮　左樣ならば私しは、八條さまのお歸りを、重盛公へ次手ながらに御案內いたしませう。
重能　然らば幸ひ、御一緒に。
景家　ドレ、某も君の御前へ。
定澄　でも此まゝに、あの曲者。
景家　ハテ、何事も身共が胸に。然らばお局。
八條　左衞門さま、民部さま。
重能　後刻、御意得ませう。
ト管絃になり、皆々、下座へ入る。長範、八條の局殘る。八條の局、あたりを見廻し、守り刀にて、長範が繩を切る。
長範　これは。
ト合ひ方になる。
八條　熊坂太郞、免し遣はす。大儀にあつた。
長範　すりや、虜にしたわしを。
八條　免し遣はすは其方への返禮。日の御劍の紛失、これぞ正しく我が君と、それに隨ふ佞人の爲す業、今日これへ寶劍を持參いたさせ、熊坂が奪ひしと、其方を賴み、佞人の心を惑はし、二つには、淸盛公の御心を、窺ひ奉らん爲、阿波の民部と云ひ合せ、暫しがうちもこの糺明。盜賊ながら恩義のその方、此まゝ歸すは八條が心の禮、目立たぬうちに少しも早う。
長範　西八條の館へ行けば、望みを叶へてやるとあるゆゑ、得心づくで來たものゝ、あんまり心持ちはよくもなかつた。
八條　自らが持參なしたる、新院の書寫なし給ひし大乘經、現世の苦患罪障消滅、有り難う拜んで行きや。
長範　佛臭いお經を有り難がるやうな氣で、こんな仕事はされませぬ。用がなくば、もう古巢へ歸りませう。
ト懷手して、ノサ〳〵花道へかゝるを
八條　曲者、待ちや。
長範　まだ用がござりますか。
八條　似せ者の熊坂太郞、本名が聞きたい。
長範　なんと。
八條　强盜の張本と、假に名乘れども、其方が俗姓、有やうに自らに明かすまいか。
長範　流石は八條のお局、熊坂太郞に、本名があらうと呼び留められたら、此方も、本名云つて聞かせたいが、今

は云れぬ。
八條　平相國清盛公の、お首を望んだ上であらう。
長範　ヤ。
八條　大それた其方の望み、樣子に依つたら叶へてやらう。
長範　ムウ、すりや、今の望みを
八條　叶へて遣はす。ソレ、者ども。
子皆　ハア、。
ト子役皆々梅の枝に文を附け、持ち出て
動くな。
ト兩方より取卷く。
長範　事仰山に取卷いたは、ハ、ア、噂に聞いた千人禿、
大人そばへに何をするのだ。
石丸　お局樣の仰せつけ、みな一樣にこの出立ち。
長丸　子供遊びに事寄せて
坂丸　見たり聞いたり千人禿。
富丸　梅に結びし化粧文。
梅丸　隱し目付けの我れ〳〵に
皆々　文の返事を聞くのおやわいなう。
長範　見れば、梅の花に括り付けた結び文。

ト殘らず見廻し
思ふ君樣、焦るる身より
八條　その戀人は熊坂太郎。
長範　焦るゝ身よりは
子皆　お局樣。
長範　アノ、盜人のおれに附け文。
八條　サア、お館向きの堅苦しい、男と違うてどこやらが。
ト長範にこなし。
長範　立派な女中が泥坊に、さしつけての色事とは、こつてりとした取組みも、一年振りでまんざらでもない据ゑ膳だが、併しどうやら。
八條　ハテ、何事も自らが心任せ、沖津白波、夜半に必らず
長範　忍ぶは此方の商賣がら、獨り越ゆらん越山傳ひ、
八條　手引きは卽ち千人禿。
長範　二人禿の花魁より、手のある年增のお局樣。
八條　心に積る話しは、ゆるりと、自らが部屋まで。
長範　ドレ、案內してもらひませうか。
ト唄になり、八條先に、子役、長範を取卷き、下座へ

入る。管絃になり、向うより七、やつし、着流し、侠ひの拵らへにて、うそ／＼出て來り

七　なんだか、べら坊に廣い屋敷だ。奥御殿とやらいふ所へ行きたいものだが。

ト云ひ／＼來る。下座より、おかれ、おせき出て來り

二人　オヤ、七さんか。お前、何しに來なすつた。

ト七、見て

七　なんだ、お前達は、赤い袴を穿いて、水引の化物かと思つた。

かれ　わたしらは、權七さんの世話で、この屋敷へ奉公に來たのサ。

せき　折角目見得に來て、掃かれて歸るも智惠がなさに、こんな形をして勤めるのサ。

七　そんなら、おまつも一緒に來たぢやないか。

かれ　おまつさんは、清盛さまの氣に入つて、お側勤めになつたのサ。

七　なんだ、お側勤めになつた。

せき　旦那の氣に入つたといふ事だから、お妾は當り前。お前、なんにも知らずか。

七　イヤ、その事を、ちらつと聞いたから、屋敷でも町でもぶつかつて、一番物を云ふ氣で來た。どうぞ、清盛とやらに逢ひたいものだが。

かれ　とんだ事を云ひなさい。清盛さまは、爰の內の旦那だ。どうして話し合ひがなるものかな。

七　なつてもならないでも、是非しらちを付けにやならない。

せき　わたしらも、今日目見得に來て、勝手も知らない。連れ立つて行くと目に立つ。後からお出で。

かれ　おまつさんには、强勢のほせておいでだの。

せき　娘の跡を追ひかけて、野郎のお三輪を見るやうだによ。

七　そんなら、爰に待つて居るから、沙汰をしてくんな。

兩人　アイ／＼、合點ぢやわいな。

ト矢張り管絃にて、兩人、下座へ入る。

七　あのおまつは、祇園の水茶屋に居た娘、おれが口說いて、どうか話し合ひが付く段になつて、あの權七めがこの屋敷へ上げ玉。それも、れこづく、慾の世の中。併し向うが屋敷だけ、ぶつかつた日にや、どつちへ轉けてもまんざらではないわえ。

ト思案すると、バタ／＼にて向うより、牛若丸、走り出て來るを、關の次郎、追はへ出る。七は下の方に窺ふ。兩人、舞臺へ來て

次郎　ヤイ子倅め、おのりやア、この間、下河原で取違へた牛若丸。清盛公の御前へ連れて行く。サア。歩びやアがれ。

ト引ツ捕へる。牛若丸、逃げ廻るうち、牛若丸、下座へ逃げて入る。

おのれ、逃げるとて逃がさうか。

ト追ひかけ行かうとするを、七、ツカ／＼とよりて、關の次郎の大小を取る。ソレと寄るを、眼潰しをくらはす。ロツと倒れる。

七　腰拔け野郎め。

ト管絃になり、下座へ入る。關の次郎、心づき、腰を見て、思ひ入れあつて

次郎　泥坊々々。

ト向うへ入ると、本神樂になり、上の方の井戸より、難波の六郎常遠、眞黑、忍びの形、千兩箱抱へ、ヌツと出て、あたりを見廻し、思ひ入れあつて

常遠　小松の内府重盛が、唐土育王山へ送るこの黄金。長田の庄司に頼まれて、あの空井戸より盗み出したが、どうぞ手渡したいものだが。併しながら、見咎められては一大事。ちつとも早く高ぶけり。さうだ。

ト行かうとする。この前より、朝顏、後に窺ひ居て、この時、突き廻して

朝顏　曲者、待ちや。

常遠　こりや女郎め、何するのだ。

朝顏　何ゆゑとは、我が君重盛公、育王山へ御寄附の黄金奪ひ立退く曲者。この朝顏が目にかゝつた上からは、尋常に縄かゝるまいか。

常遠　ハヽヽヽ、寛永この方お定まり、お江戸の臺詞は呑み込まぬが、こんな仕事は上方でも、淺み込んで居る黒ん坊。憂目を見ぬうち、キリ／＼とそこ退いて通せ。

朝顏　何を小癪な。

ト始終、本神樂にて立廻り。よき程に、下座より、伴の團門、出て、朝顏を支へ

團門　爰は身共が受取つた。ちつとも早う長田どのへ。

ト行かうとする。常遠を朝顏支へる、これより三人、ちよつと鳴り物なかり、タアあつて、どつこいと見得。管絃になり、チヨン／＼と道具廻る。

本舞臺、一面の高二重、金襖、欄間に凌雲の二字を記したる額かけ、東西、梅の立ち樹。上の方、柴垣非常は其まゝ。梅の吊り枝。すべて西八條、奥殿のかゝり、管絃にて納まる。

ト下座より、歌町、呉竹、權七出て來り

權七　モシ〳〵、お二人樣、今申しました事は、とつくり御合點でござりませうな。

歌町　最前の女中が、清盛さまは、怖いお顏と聞いて、只管の歎きと云やるかいの。

呉竹　清盛公の日頃の御氣質、お聞き遊ばしたら、大抵の事ではあるまいぞや。

權七　そこで、私しが思ひつき。若旦那の重盛さまを、清盛さまだと云つて、座敷が引けた所で、お床でこつそり入れ代りの役者づけは、どうでござります。

歌町　その事は重盛公に、密かに申し上げ置いたれば、あなたが清盛さまといふ事は、御合點ぢやわいな。

呉竹　マア、早う娘を、伴うたがよいわいの。

ト奧にて

女二　サアおまつさん、早くお出でな。

ト管絃になり、下座よりおまつ、振り袖、衣裳に着替へ、おかれ、おせき附き出て來て

おまつさん、とんだよく、似合ひなすつたなう。權七さん。

權七　コレサ〳〵、清盛さまのお妾樣を、輕々しく、おまつさん〳〵と云つては惡い。

歌町　成る程、云へば高位のお側勤め、名も改めて隨分とも、心を付けて云うたがよいぞや。

權七　イカサマ、おまつぢやア、形にそぐはぬ。店の障子に待合とあるからは、待宵としては、どうでござりませう。

女皆　成る程、それがよいわいの。

まつ　なんのよい事があるもので、ほんにモウ、皆さん、聞いて下さんせ。

ト合ひ方になる。

わたしは、小さいから、父樣に別れて、母さんと二人、下河原に茶店を出して居りましたが、ちつとしたした事で、母さんが外へござんして、わたし一人、皆さんのお世話になつて居るうち、あの權七さんが、年のゆかぬ娘の只一人、難儀であらう。わしが好いお屋敷へ奉公にや

つてやらうと云はしやんす。もう便りない身ぢやに依つて、よいやうにと、頼んだわたしを連れて來て、無理やりに妾奉公。今更になつて仕樣はなし、鬼の住家に來た心、諦らめては居りますれど、心がゝりは、いつぞやフッと。サア、たつた一度のこの身の願ひ、それぱつかりが心がゝり。ならう事ならどうぞ、ま一度、お歸しなされて下さりませ。

權七　コレおまつ、何を云ふのだ。一つ云ふと二言目には歸してくれ／＼と、下河原の茶店に、若い娘のたつた一人、揚句の果は祇園町か島原へ賣り物。可哀さうだと思ふから、幸ひな妾の口、初めから斯うと云つちやア、得心しないは合點で、連れて來たのは口入れの當り前。われが身の上について、由縁かゝりは誰れもない。結構な形で、御大身の懷へ入つて寐る事を、否だと云へば、どこへでもやつて金にするわえ……コレサ、おまつ／＼。ヘエ、、默つてゐるは、どうでも否か。否と云へばおれが又……エ、、何もぶつものがない。

トあたり見廻し、手水鉢の柄杓を取つて

情剛くすれば、おれが又。

トぶたうとするを、歌町支へて

歌町　オ、コレ、こりや何しやるぞいの。

權七　イヤ、あんまり强情でござりますに依つて、この杓で、無間の鐘ではござりませぬ。意見の爲でござります。

歌町　イヤ、例へ女が否と云やらうが、淸盛公のお目に留まつたこのおまつ、我まゝに打ち叩きしやつたら、却つて其方の爲になるまい。

權七　でも、あんまりな片意地。

歌町　もし、過ちあつた時は、其方にキッと、お咎めぢやが。

權七　エ。

歌町　おまつよりは、其方へわしが意見しようか。

權七　イヤモウ、それには及びませぬ。

歌町　そんなら早う、お次へ立ちや。

權七　でも、此まゝでは。

歌町　下し置かるゝ金子。

ト袱紗包みの貳百兩を出す。

權七　ヤア、こりやア、お金。

歌町　それを持つて、早う下がりや。

權七　エ、、有り難うござります。これは夢かや、現か

や。

ト管絃になり、下座へ入る。

呉竹　歌町さま、あの娘御の今の詞、心に一つの願ひとは、どうやら樣子ありげな詞。姫御前の身にはある習ひ。もし、云ひ號けの男でもあると云ふやうな事かいな。

まつ　サア、そのお尋ねも今更に、年端も行かいで厚皮な、徒ら者とお下げすみもお道理。思ふお方は、お名も知らねど、ま一度お顏見た上ならば、なんのその、外に心の願ひと云ふは。

ト御簾の内にて

重盛　あらざらん、この世の外の思ひ出でに、今一度の逢ふ事もがな。

ト唄になり、御簾上がる。重盛、羽織、衣裳にて、見臺の本を見て居る。脇には腰元二人、最前の嶋臺、長柄、銚子、三方に土器並べ、控へる。

腰一　我が君樣には、この程よりのおしつらひ。それにマア、御本を御覽遊ばしますと、お氣が晴きまするでござりませう。

腰二　春待ちかねし梅の早咲き、お庭の景色も又一入。

腰三　九獻一つ召上がられて、よろしうございませう。

重盛　イカサマ、酒は天の美祿と稱し、佛者は德を奬水に比ぶ。百藥の長と云へば猶更。女子どもを相手の酒は、壽命の藥でがなあらう。

ト杯を取る。

歌町　君には、いよ／＼御機嫌うるはしう、何よりは恐悅に存じ上げまする。

呉竹　それにつきましては、奧にて只今申し上げました、お側勤めの者、呼び置きましてござりまする。

重盛　ムウ、側女を召し寄せたとは、アヽ、なにか、兼ねて聞いたる常磐に、面ざし似たる女子か。

二人　左樣でござります。

重盛　そりや、父入道がこの程より

歌町　アヽ、イヤ／＼、その儀を兼ねて御前樣に、父君よりの仰せ。

呉竹　清盛公のあなた樣がなア、申し、あなた樣は、清盛公でござりまする。

歌町　世上の者が、淸盛公は、怖いお顏と噂を致しまするに依つて、それでは、何事も調はぬこの場のしな。それゆゑ、御前が矢張りナ。淸盛公には、左樣に思し召されてよろしうござりませう。

重盛　ムウムウ。成る程〳〵。父相國の形相の、逞ましきに一見は、この……淸盛で喰ひつかしてくれいと申すのぢやあらう。
歌町　御意の通りでござります。
重盛　その儀ならば承知ぢやが、して、その娘は、いづれに居るぞ。
歌町　即ちこれに居りまする。
　トおまつを、よき所へ連れて出て
これはしたり、其やうに何をマア、案じる事はない。淸盛さまのお側へちやつと。
　ト無理に二重舞臺へ上げる。おまつ、始終泣いて居る。
重盛　この重盛、ではない、淸盛、親人の云ひつけ、いま其方達が進め。兎も角も承知いしたが、肝心の時は。
　ト入れ替へるといふ仕方して
よきに計らふであらうな。
歌吳　御意の通りでござります。
重盛　ムウ。爪はづれといひ、下々の娘とも見えぬ。して年は幾つ、名は何と申す。
歌町　まだマア、年は參りませねど、名は待宵と申しまする。

重盛　ムウ、待宵とあれば、定めて年も十四には、大きう見える。ナア、女子ども。
歌町　左樣でござります。淸盛さまは、常々から、我まゝ仰しやつて、只怖い〳〵と娘心の一筋に、思ふも道理なれど
腰一　待宵どの、淸盛さまは、お優しいお方。其やうに怖いと思はぬがよいぞや。
腰二　お心立てなら御器量なら、大内方の優人も、及ばぬ程の御器量よし。
腰三　一目お顏を見てならば、其やうにもあるまいぞや。
重盛　イヤモ、形は大きう見えても、初心ながあるもの。コリヤ待宵、淸盛は、さのみ人に怖がらるゝ事はない程に、案じぬがよいぞや。
　トおまつが手を取つて、引寄せる。おまつ、おづ〳〵して居る。
これはしたり、何が怖うてマア。
　ト無理にこちらへ向かし
其やうに氣を詰める事はないぢや。
　ト無理に顏を見る。兩人、こなし。おまつ、ヂツと重盛を見て

まつ　ヤア、お前は。
重盛　其方は誰か。
まつ　尋ねるお方。
重盛　オヽ、矢ッ張りさうぢや。
腰皆　エヽ。
　ト呆れる。誂らへの合ひ方。
重盛　いつぞや清水詣での折柄。
まつ　フツとお顔を見交りに、降りかゝつたる雨舎り。
重盛　車舎りに供人は、歸して一人賤が軒。
まつ　上々樣やら、どなたやら。
重盛　白歯娘に戯むれ言。
まつ　その時、わたしに仰しやつたを
重盛　今まで覺えて居やつたか。
まつ　なんの片時忘れませう。そんならあなたが清盛さま。
重盛　イヤ……成る程、清盛々々。
まつ　でも、世間では、怖いお顔ぢやと。
重盛　そりや、源氏方へ威勢を振ふをどしの爲。
まつ　さうとは知らいで
重盛　矢ッ張り怖いか。

まつ　ナンノイナア。清盛さまがお前なりや、わたしや疾から參りますわいな。
重盛　エヽ、可愛い奴。
　ト抱きしめる。女形、皆々こなしあつて
歌町　そんなら、我が君さまは、待宵どのと
　ト皆々、顔見合せ
皆々　がをれ。
重盛　イヤ、越中上總が女房、清盛は心急きになつた。直ぐに爰へ寢所を申しつけい。
歌町　申し、それでは。
呉竹　清盛公の
重盛　ハテ、清盛ぢやに依つて、我まゝを申すのぢや。
皆々　ぢやと申しまして。
重盛　何をウヂ〳〵。早く致せ。
　ト皆々、顔を見合せて
皆々　畏まりました。
　ト小短がき獨吟になり、腰元二人、奥より夜具を運びよき所へ床を敷き、屏風を直し、皆々本舞臺へ下りる。
呉竹　お側の御用もござりませうに。

皆々　私しどもは

重盛　イヤ、殘らず次へ。

皆々　ハアイ。

トまた獨吟になり、皆々顏見合せ、下座へ入る。おまつ、恥かしきこなし。重盛、こなしあつて

重盛　サア、女どもは次へやつたぢや。さて、いつぞや雨舍りに、其方の家に佇み居たが、ハテ、美しい可愛らしい少女が風情と、一つ二つ座興を申すうち、從者の輩が參つたゆゑ、本意なくも、ついそれなり。今日其方の顏見やうとは、思ひがけもない事ぢや。

まつ　わたしも、それと存じませぬ事ゆゑ、怖い〳〵が一ぱいで、あなた樣とは露知らず、お顏を見てのその嬉しさ。さうして、あなたが、いよ〳〵ほんまの淸盛さまで。

重盛　オヽ、サ、淸盛ぢや。なんの其方に嘘云はう。これまで音信をせなんだは、免してたもれ。

まつ　その御挨拶、痛み入りますわいな。

重盛　痛み入るどころか、今時は十四やそこらで、子を持つ娘があるわい。所柄とて、定めて外に色男があるであらう。

まつ　なんのマア、色男のなんのと、其やうな事が。

重盛　そんなら、色男も何もないぢやまで。ア、、それで落ちついた。

ト椽の下より七、一本差しにてヌツと出る。

七　その色男は爰に居る。

トずつと二重へ上がる。おまつ、悯り。重盛見て

重盛　そちや何者。

まつ　ヤア、お前は五條坂の七さん。どうして爰へは。

七　爰へ來たは、間男の詮議に來たのだ。蒲團の上に二人居るからは、云はずと知れたお身樣は間男。四つにする氣できめて來たのだ。

重盛　ムウ、間男と申すからは、すりや、この娘が男か。

まつ　イ、エイナア、なんのマア。

七　やかましいわえ。云ひ分があつて來たから、云ふのだわえ。

重盛　してそちや、何者。

七　五條坂では顏も賣れ、土地では、ちつとばかり小口もきいて、もつれた始末達引も、後へは寄らせぬお先者。これまでやぶ酒手、おれが口說いて承知した娘を、其方の得手勝手に連れて行かれちやア、友子友達に顏が

立たない。大將であらうが、大名であらうが、云ひ草が惡けりや、死ッくらだ。見そくなつたか、誰れだと思ふ、こつぶの七さんといふお兄さんだ。否とも應とも手短かに、返事をしやれ。ド、どうだえ。

重盛　ナニサマ、亂心者と見ゆる。者ども、參つて遠ざけい。

七　やかましい。いつそ。

ト拔いてかゝるを、足をかけて、二重より下へ落す。この時、下座より長田の庄司忠宗、宇田平を連れ出て來て

忠宗　宇田平、其奴を括し上げい。

宇田　ハッ。

ト十手にて、こつぶの七に打つて行く。こつぶの七、宇田平を取つて投げ、刀を振り上げる。

忠宗　エイ。

ト利腕へ小柄を打つ、こつぶの七、アッとたぢろぐ所を宇田平取つて押へ、繩をかける。

出かした宇田平。其奴を、キッと取逃がすな。

宇田　死暴れのこの二歲め。大骨を折りましてござります。

忠宗　御前間近く不敵の曲者。いつそこの場で。

ト拔きかけるを

重盛　ア、コリヤ、いま寢入りの和らか身、手討などとは近頃殺伐。彼れめは、其方が勝手に計らへ。

忠宗　今に始めぬ御仁心。ハテ、命冥加な。

重盛　この場の計らひ、下郎が働らき。これとても庄司が早速。當座の褒美。

トあり合ふ硯にて、墨附を認め遣る。忠宗、取つてすりや、この墨附の、美濃尾張兩國を恩賞に。

重盛　猶この上とも平家へ忠心。

忠宗　何がさて、有く難う頂戴仕る。

重盛　ヤレ〳〵、花に嵐の彼れが狼藉。待宵、其方は怖かつたであらう。

まつ　アイ。

重盛　もう大事ない、心措きやんな。

ト引寄せる時、おまつが手のひらの黑子を見て

待宵がこの手の黑子。

三人　ヤ。

トおまつ手を隱す。忠宗、ツカ〳〵と寄るを。

重盛　親仁、免しやれ。

七字　ト唄になり、御簾下ろす。宇田平、こつぶの七の繩を解き、あたりを見廻し
庄司さま、まんまと。
忠宗　コリヤ。
ト思ひ入れ。管絃になる。
まんまと騙かり美濃尾張、我が領國に手に入れたるも、兩人が働らき。
七　お頼みゆゑ、首尾よく參つて、私しも喜び。
宇田　併し、善惡解らぬ重盛。女に心を迷はすのが、この儀は猶も庄司さま。
忠宗　兎角邪魔になる重盛、今一人は局八條、女ながらも何かの妨げ。其方達は身が合圖を待つて、重盛と八條めを。
七字　心得ました。
ト下座より、難波の六郎常遠、以前の形、千兩箱を抱へ出る。
常遠　庄司さま、これにござりましたか。お頼みの黄金、まんまと手に入りました。
忠宗　出かした〳〵、先つ頃、野間の内海に於て、義朝を討つて、平家に隨ふと雖も、格別の恩賞もなきは、重盛が賢人立て。我れに心を措く樣子。兼ねて傘張法橋と心を合せ置いたれば、騙かり取つたるこの墨附。美濃尾張にて味方を語らひ、片腕となす爲、廻文の印に持參なし、人數を集めよ、心得たか。
常遠　すりや、墨附を廻文狀となし、美濃に隨ふ者どもを。
忠宗　荷擔させるは、汝が働らき。この黄金は暫しがうち手水ばちのあたりへ。
常遠　心得ました。
ト手水鉢の後へ隱す。
七字　この上は、萬事の手つがひ
常遠　然らば拙者は、これより直ぐに
忠宗　必らず、ぬかるな。
常遠　心得ました。
ト管絃になり、常遠は向うへ、こつぶの七、宇田平、下座へ入る。
忠宗　何かの手番ひ。巧い〳〵。
ト思ひ入れ。管絃になり、下の方へ入る。琴唄になり、下座より腰元一、手燭を照らし、後より清盛、出て來り。

腰一　我が君樣にも、さぞ待ち久しう思し召しませう。女中達もよけまして、お庭傳ひに、私しが御案内申しまする。

清盛　戀なればこそ、入道が只一人、小娘の所へ忍び通ふも、常磐が俤忘れやらず、思ひに暗き戀慕の闇。アヽ、戀は曲者ぢやなア。

ト腰元一、手燭にて寢間を窺ひ

腰一　モシ。

ト囁く。清盛、いろ〳〵こなしあつて

清盛　アヽ、どうやら胸がもだ〳〵と、少し後れが來たやうな。

腰一　ほんに、常からにお似合ひ遊ばさぬ。其やうな事御意遊ばさずと、ちつとも早う。

清盛　思ひ切つて、やつてのけうかい。

腰一　しつぽりお樂しみ遊ばしませい。

ト入る。

清盛　どうでも一人殘して行き居るかい。情を知らぬ奴ではある。

ト屏風の所を窺ひ、ツヽと屏風を明ける。内に八條の局、最前の大乘經を前に直し、袈裟を掛け、讀誦して居る。清盛、よく見て

ヤ、其方は局八條。何ゆゑ爰に。

八條　内府重盛公は、熊野三社へ御立願の旨あつて、今宵密かに御參籠。お留守を守る八條の局。それゆゑ爰に居りまする。

清盛　ムウ、重盛は、熊野へ參つた。

八條　左樣でござりまする。

清盛　熊野へでも、人參でも構ひはない。して、これに居つた娘は知らぬか。

八條　素性知れざる賤の女。君のお伽は憚りと、八條が退けました。

清盛　ヤア、折角見當つたあの娘、常磐に生寫しゆゑ、抱いて寢ようと樂しんで居たを、なぜ逃がした。今これへ連れ參れ。早く呼べ〳〵。

八條　また其やうな我まゝを。

清盛　我まゝは入道が生れつき。一旦思ひ付いたる事は、變ぜぬ清盛。どのやうな事を申しても苦しうない。サア今の女を連れ參れ。

ト八條の局、默つて經文を頂き、靜かに繰返し居る。清盛、氣をいらち

エヽ腹の立つ。おのれは、この淸盛を阿房にひろぐな。憎くい奴の。

ト柄に手をかける。この後へ、以前の箱を持ち、阿波の民部重能、出てキッと留めて

重能　我が君、先づ〳〵。

淸盛　ヤア、其方は阿波の民部。勘當の身を以て、何しに參つた。すさり居らう。

重能　イヽヤ、君の御勘氣はさる事ながら、紛失の日の寶劍、持參いたせば禁廷の役人。

淸盛　なんと。

ト重能携へし箱を直し

重能　この寶劍の紛失ゆゑ、鳥羽の離宮へ押籠め給ふ。さるに依つて某、草を分つて寶劍を詮議なし、持參いたした。

淸盛　ハヽヽ、世に類なき寶劍を、汝如きが尋ね出さうか。僞物を以て淸盛を欺むくは、奇怪なる阿波の民部。見ずとも知れたこの寶劍。とく〳〵持つてすさり居らう。

ト立ち蹴に、箱を打返すと、中より破れ傘一本出る。

ヤア、さてこそおのれ僞はり者。

重能　イヽヤ、大位を望み給ふ我が君には、この傘が國の神寶。

淸盛　なんと。

ト傘をさしつける。笙入り、鞨鞁の合ひ方。

重能　莫耶が劍と下俗の諺。武官にあつては益なき寶劍、この傘でも、國の神寶と敬ひ尊むは、我まゝの淸盛公でも、國の掟をないがしろになし給はゞ、コレ、この傘の六十六本、天が下しる榮華の御身も、遂には天の御罰を蒙むり、御一門はばら〳〵に、破れ傘の平家の成行き。淸盛公、我が君、この傘を寶劍と申した阿波の民部、よもひが事ではござるまいが。

淸盛　アハヽヽ、破れ傘の譬へ、聞き事〳〵。この淸盛の威光の强さは、天が下を立たうと伏せうと、我が心次第。この傘を寶劍と云はせうといへば、我れ又、六十六本の天が下にあつて、背く奴輩、一々に。

ト傘を取つて、膝にあて、へし折つて

先ッこの通り

重能　エヽ、飽くまで猛きその我まゝ。

淸盛　それをおのれは今知つたか。禁廷よりの使ひと吐かすから、命は助け取らす。とく〳〵この場を退き居ら

う。らぬ、立去らずば、入道が手を下ろして。
ト立ちかゝるを、八條の局、これまで構はず經文を讀んで居て、この時、清盛が手をとめて
八條　ア、、イヤ〳〵、我が君樣、輕々しき御有樣、お心に違ひました事あらば、この八條が。
清盛　默れ八條。最前より入道が申す事、聞く耳つぶして居りながら、控へて居らぬか。
八條　イヤ、控へませぬ。
清盛　なぜ〳〵。
八條　母君、池の禪尼さまよりの仰せ。
清盛　ヤ。
八條　入道に申し聞かせいとあつて。
清盛　そりや、何事を。
八條　こなた樣へ御意見を。
ト下に引据ゑて
ようお聞き遊ばしませ。
ト誂らへの合ひ方になる。三人こなしよろしく
こなた樣には過ぎし年、當お館へお入り。その折から人も敬ひ、世上一統、いづれも樣のお惠み厚う、安藝守清盛の官位も次第にお引立て、一方ならぬ御贔屓に、一世一代として、津の國難波にお歸りあつて、兵庫へ築島の思ひ立ちあつて、彼の地へお越し。妾は跡に殘りましても、朝夕こなた樣の事を、心にかけぬ事はござりませぬかいなア。この前、當お館へお越しの折柄と違ひ、世間の惡口の譏り、今までと違うて、さま〳〵の事をお聞きなされませうが、定めて、お覺えがござりませうがな。
清盛　そりや、前方の清盛のやうには申さぬが、どう致した。
八條　サ、、そこをようお聞き遊ばせ。其やうに、この一つ御殿にばかり御座なされて、外へとてはお出でなされぬあなたゆゑ、世上の人が自ら、あのマア清盛は、一つ館にばかり居て、威を振ひたさか、官位が欲しさか、餘所の哀れを知らいで、我ればかりと、惡口を仰しやられるも道理。源氏贔屓の人心。妾も去年の一年は、福原の都に姫御前の、身にも應ぜぬ宮仕へ。また今年とても、このお館へ、相も變らずござるゆゑ。この末とてもこなた樣を、口さがなう云はしまするが口惜しさに、外ならぬこの八條が御意見。必らず惡うお聞きなされて下されまするな。
重能　お局の申さるゝ通り、盛んの平家を羨やんで、惡口

申すは世の常。ましてや君はこれまでも、世に稀れなるお引立ての、その御贔屓に連なりまする我れ〳〵まで、こなた樣が、人に惡う云はれるを、御意見申さずに居られませうか。返す〴〵も世の人口、いづれも樣の御贔屓。その身の冥加を御存じなら、少しはお心を靜へし下さるやう

八條　及ばぬ妾がこの御意見。

重能　拙者が寸志ばかりのお諫め。

八條　必らず、惡う聞し召されまするな。

重能　我が君、清盛公。

ト兩人、さま〴〵こなし。此うち、清盛、火鉢の灰をせゝりながら、聞いて居る。

清盛　八條、其方が意見、また民部が諫め。如何にも二人が云ふ通り違ひあるまい。聞えてある。この入道が片意地で、當館にばかり居て、強いこと勝ちに、我まゝを申すかと、評判いたすであらうが、これまでいづれも樣のお引立てにて、官位に經上り、冥加にあまつたこの清盛なれば、外の館に行きたいは、合點いたし居れど、池の禪尼は入道が親、その親同然に尊む人が、外へやつては下さらぬゆゑ、自由に行く事もならず、また當館には、十一年この方、段々官位昇進の恩もあり、定めて世上では、あの清盛めは、一つ館にばかりへばりついて居る、片意地な奴ぢやと、皆樣へ憎しみ。どうぞして外へも出て、忠義を盡してと思へど、おれが體で、おれが儘にもならぬ。今となつては致し方がないわい。

八條　それ程に、辨まへ給はゞ、國の神寶の行くへをも

清盛　イヤ、意見は聞かうが、それは聞かぬ。

重盛　すりや、我れ〳〵が申す事も。

清盛　ハテ、無益の尋ね。清盛を、寶劍の番人だと思ふか。たわけ者め。

トきつとなり、管絃、バタ〳〵にて、奧より近藤判官、牛若丸を引ッ抱へ、おまつを引立て出て、舞臺へ引据ゑる。清盛、見て

ヤア、近藤判官、そりや最前の娘、よく爰へ連れて參つた。

判官　イヤ、この娘こそ重盛公、兼ねて清水詣での折柄、いつの間にかは人知らず、忍び逢ひしと相見えて、熊野へござつた重盛公のお跡を慕ひ、駈け出づるゆゑ、この判官が斯くの通り。又この子悴は、牛若丸と見たるゆゑ、召連れ參つてござりまする。

清盛　ムウ。娘は重盛が、親の物をば子の物に。憎い奴。
判官　して、この子倅は。
清盛　牛若丸ならば、首打つてしまへ。
判官　ハッ。
　ト立ちかゝり、牛若丸を引ッ捕へ
　サア、小びつちよめ。うぬは牛若丸であらうがな。
牛若　イ、ヤ、知らぬわいなう。
判官　おのれ、得知らぬとて、云はさずに置かうか。サア、牛若丸と眞直ぐに吐かせ。
牛若　イヤ、わしはそんな者ぢやない。堪忍して下されいなう。
判官　エヽ、面倒な。さう吐かしや、いつそ。
　ト柄へ手を掛ける。
重能　待ちやれ近藤。彼れが口から牛若とも、慥かな證據もなきに、首討つて後、それでなければ近頃麁忽。
まつ　わたしもどうぞ、重盛さまのお跡を慕うて。
　ト行きかゝるを
清盛　ソレ留めい。
判官　動くな。
　ト引き留める。

八條　すりや、重盛公のお手のかゝつたその娘を。
清盛　苦しうない。人の女房の常磐にさへ、執心するこの清盛。
八條　でも、現在。
清盛　子の物は、親の物にするわえ。それへ呼べ。
判官　ハッ。ソレ、正眞の清盛公だワ。
　ト二重へ上げる。清盛、顔を見て
清盛　ハテサテ、常磐に生寫し。
　ト手を取るを
まつ　それでも、わたしは。
　ト振り切り、立ち上がるを、清盛　ちよつと當てる。
皆々　これは。
清盛　ハテ、構はずと捨て置け。
八條　入道、我まゝの振舞ひあらば、局八條、意見を加へ、連れ來れよとある禪尼さまの仰せ。
清盛　アノ、母人が。
八條　コレ、この經文を以て受戒させ、誠の出家に致させうとある仰せ。
重能　某、いつぞや鳥羽海道にて、不思議に手に入るその經文。新院の御直筆、おろそかになし給はぬやう。八條

清盛　どのに渡し置きしも、池の禪尼の思し召し。

八條　何ぞと云ふと、母人々々と、どうでも池の禪尼は、おれが爲には、椀白小僧の灸据ゑられるやうなわえ。

清盛　その母人の、くれ〴〵との仰せ。悴重盛に世を讓り、心の法體清くせよとある、この經文。

八條　イヤ〳〵、坊主になつても、魚も喰ふ、女も抱いて寐にやならぬ。

清盛　逢て御違背あらば、直ぐに爰へ母君を。

八條　ア、イヤ〳〵、物堅い母人、御免だ〳〵。

清盛　すりや、御得心なされまするか。

八條　出家には頭ばかり。魚や女は許してくれい。

清盛　イヤ、大人しうなされにや、母君樣。

ト立ちかゝる。

八條　イヤ、そりや、免せだわい。

清盛　まだ〳〵、頼朝や牛若を殺すとは、仰しやりませぬか。

八條　助ける〳〵。

清盛　重盛さまの仰しやる事を、お聞きなされまするか。

八條　オ、、聞く〳〵。

清盛　オ、、大分灸がききましたわいな。

重能　我まゝの清盛公でも、こればつかりは。

判官　我が君は押しすくめるとも、この子悴は朝敵の血筋。イデ、判官が。

ト刀を拔きかける。重能とめて

重盛　例へ朝敵の悴にもせよ、淸盛公の仰せもなきに、我まゝの成敗、そりやなるまい。

判官　ヤア、又しても、いらざる留め立て。そこ退きやれ。

重盛　なにを。

トちよつと立廻りのうちに、清盛、判官が刀を拔き取り、判官をポンと切る。兩人、恟りして

八條　これは。

ト三味線入り樂になる。

清盛　我れ、佞人輩の進めによつて、さま〴〵の謀惡。いま母禪尼が仁愛の教訓、八條の局が實義の意見、阿波の民部が忠義の諫め、かた〴〵以て心魂に徹したれば、牛若を助け、賤の女も放ち歸す。善心に飜へる惡事の仕納め。

重能　すりや、常磐に似たる娘が戀路も。

清盛　輪廻の迷ひも、再び晴れた。

八條　すりや、我が君には、御善心とや。
重盛　それでこそ、平家の棟梁清盛公。
清盛　斯く本心を現はす上は、我が手に隱せし日の寶劍。
　八條、其方に手渡しなすぞ。
　ト帶せし一腰を、八條の局へ渡す。
八條　さこそと推せし一腰は、日の御劍にてましますか。
　ハ、、ハ、、……ハッ。
重能　さすれば、これなる牛若も、助け歸す事、重盛公のお聞きに入れば、君の御仁心と、如何ばかり御滿足に思し召されませう。
　ト此うち、八條の局、懷より白旗を出し、經文へ添へ持ち
八條　これに所持なす大乘經、まつた、先つ頃布引にて手に入つたる、正八幡の白旗、お渡し申し奉らん、重盛公はしろし召されず、熊野權現へ御立願のしるしあつて、日の御劍の行くへも知れ、君善心になり給へば、平家の武運全き印と、母君はじめ、人々のお喜びと、この八條も何程か、喜ばしう存じまする。
清盛　すりや、これが正八幡の旗、新院の大乘經。
　ト取つて、ニツタリと笑ひ

この經文に歸依する、老耄の母禪尼が佛いぢり。邪魔になるこの一品。また白旗は源氏の重寶。これをおとりに生死知れざる常磐をも誘きよせ、鹿笛の火串同然。アラ〳〵、喜ばしや、嬉しやな。
二人　ヤ、、、、。すりや、矢ッ張り御本心は。
清盛　嘘だワ。僞はりだワ。日の御劍と云つたも似せ物。誠の御劍は人知らず隱しあるワ。
二人　ヤ、、、、。
清盛　この上は、この子悴め、隨分早く、飛驒の左衞門、參れ。
景家　畏まつてござりまする。
　ト飛驒の左衞門景家、上下、衣裳にて出て
　我が君の御本心承はり、安堵仕つてござりまする。
重能　すりや、景家とも兼ねてより知れた事。やゝともすれば、君をやり込める八條の局。池の禪尼を先として、仁義立てする重盛どのも、熊野へやつたその後で、これから惡事の根組みの礎。思ふ壺へ嵌つた二人。ハテ、よい氣味でござるわい。
清盛　景家、その子悴を、成敗いたせ。
景家　ハッ。

ト牛若丸を引ッ抱へ

餓鬼め、身共と一緒にうせ居らう。

八條　イヤ、その子は。

景家　君の仰せだ。すッ込んでうせ居らう。

ト嘲笑ふ。管絃になり、向うへ入る。

清盛　先づ一方は片付いた。これからば、常磐に似たあの娘、抱いて寐るのが樂しみ。

重能　我れ〳〵が諫めも用ひ給はず、いよ〳〵增る君の惡心。

八條　善心と見せ給ひしも、本心は邪しま非道の我が君。

清盛　知れた事。清盛入道の實事師があるものか。下手な作者の顏見世狂言、目先ばかりで騙したのだ。

二人　すりや、これ程に心を盡し申す事を。

清盛　まだ〳〵、返らぬ事を吐かす兩人。清盛が威勢、經文でも、直筆でも、この通り。

ト有り合ふ火鉢へ、打込む。バッと煙立つ。薄ドロドロ。

二人　ヤア、勿體なくも大乘經を。オヽヽ。

清盛　琵琶法師でも、招いて樂しまうか。

重能　人間の榮耀は、風の前の燈火。末々御身に報ふといふ。

八條　御公達の方々の御嘆き。氏の穢れは、思し召さいで。

清盛　女を抱いて、旨いものさへ喰へば樂しみ。

重盛　その歡樂も人間僅か

清盛　五百年も生きにやならぬ。

八條　奢る平家と人の譏り。

清盛　吐かす奴には、云はせて置け。

八條　それではいよ〳〵、人の憎しみ。

清盛　可愛がられて死ぬよりましだ。

兩人　チエヽ。

清盛　エヽ、耳やかましい。默つて居らぬか。

ト大ドロ〳〵にて、清盛、いろ〳〵思ひ入れあつて、キツとなり

ハテ心得ぬ、今この經を火中なし、煙咽喉に入ると等しく、五臟忽ち燃ゆるが如く覺ゆるは。

ト思ひ入れ。兩人、清盛を見て

兩人　ヤヽヽ、我が君樣の御有樣。

ト大ドロ〳〵にて、清盛が膝の前へ、髑髏數多現はれ、舞臺一面に火燃ゆる。清盛、苦しみ、キツとなり

清盛　アラ、熱や、堪え難や。總身五體火炎の如く、眼にさへぎる異形の有樣。我が爲に亡ぼされし源氏の亡靈、爰に現はれ來りしか。兩人早く遠ざけい。
ト兩人には、見えぬこなし。
重能　物狂はしき御有樣。ハテ、爭はれぬ神罰冥罰。
八條　新院の大乘經、煙となしたる天の咎め、忽ち報う火の病。
重能　但しは義朝、義平なんぞ、恨を報ふ障化なるか。
八條　エヽ、淺ましき御身の成行き。
清盛　ヤア、天をも恐れざるこの清盛、神罰などとは、なんのたわ言。小癪な亡靈。うぬら一々。
ト有り合ふ旗にて、打ち散らす。髑髏、消え、ドロドロ止む。ト日覆にて
大勢　ハヽヽヽ、
ト笑ふ。
清盛　ヤア、源氏の奴等、恨みをなしなば、この白旗も引裂き捨てん。
ト件の旗を引裂かうとする。この時、最前より悶絶せしおまつ、起き上がつて、清盛が持つたる旗を取る。それをと寄るを、落ちたる刀にて、清盛が首を打ち落し、前の井筒へ飛び込む。
八條　ヤヽヽ、我が君を討ち奉りしあの女。
重能　白旗までも奪ひしは、正に源氏の餘類の者か。
八條　通路の空井戸、手分けをなして。
兩人　ござりませ。
ト兩人奥へ入る。トばつたり誂らへの本神樂になり、上の緣の下を切り破り、熊坂太郎長範、袋入りの寶劍を持ち、悠々と出て、寶劍を見て
長範　先つ頃より失せ給ひし日の寶劍、清盛、兼ねて奪ひ隱し、大位を望むと聞きしゆゑ、騙かつて館へ入込み、まんまと手に入る誠の寶劍。忝ない。
ト思ひ入れ。この時、後へ難波の六郎常遠、以前の形。捕り手四人連れ窺ひ出て
常遠　ソリヤ。
四人　動くな。
長範　こりやア、うぬら、何とするのだ。
常遠　熊坂太郎と僞はつて、紛れ込んだ曲者め。我れこそ熊坂が手の者、三國の九郎。汝が奪ひしその寶劍、此方へ渡した上、覺悟ひろげ。
捕一　盜人仲間も兼ねてより、その日の寶劍に心をかけ

捕二　最前それと窺ふところ、盜人なりと申せども
捕三　似ても似つかぬ熊坂太郎。正しく源氏の打ち洩され。
捕四　飛驒の左衞門景家どのへ、又もや繩掛け引立てる。
四人　尋常に腕廻せ。
長範　ハヽヽ、押しの強い事を吐かしやがるが、熊坂が目に掛けたるこの代物、渡せなどゝは、ハテ、奇特な泥坊だわえ。
常遠　ヤア、面倒な。ソリヤ。
四人　やらぬワ。
ト打つてかゝる。これより鳴り物になり、四人を相手にタテ。トヾ、四人を追ひ込む。常遠、寶劍に手をかける。立廻りに寶劍を拔きかける、とドロ〳〵にて鍍金の日輪現はれる。長範、立廻りながら見上げ、キッとなる。誂らへの鳴り物。
長範　ハテ心得ぬ。頃は玄冬極寒の只中、しかも時刻は亥下刻。
ト立廻りあつて
空にあり〳〵日輪の、光りも斯くや赫々と
ト立廻りて
現れ出でしは、これ、正しく、國の守りの神寶。
ト また立廻りあつて
日の寶劍に疑ひもなき印なるか。
トちよつと立廻りて
アラ〳〵、喜ばしやなア。
ト常遠を、立廻つて當て、寶劍を納める。ト行きかゝる。ドロ〳〵やむ。常遠を、柴垣へ抛り込み、
ドレ、御勝手に逃げりませうか。
ト行きかゝる。ドロ〳〵にて、また日輪現はれると、長範、五體すくみ、キッと思ひ入れあつて
ハテ心得ぬ。日の御劍を携へ行かんとするに、五體思はず立ち戻さるゝは
ト正面の御簾の內にて
清盛　桓武の正統從一位、太政大臣、前の安藝守、平の清盛入道淨海が威勢、匹夫め、恐れをなしたであらう。
長範　なんと。
ト早下がり葉になり、御簾上がると、誠の清盛、裝束緋の袴にて、蛭卷の長刀を掻いこみ、金地に日の丸の扇をかざし、上の方に八條の局、三方に誠の白旗を載せ、下の方に千人禿、殘らず引添ひ居る。長範、ツカ

ツカと舞臺へ來て、清盛を見て

ハテ心得ぬ、最前、賤の女が手にかゝりしと思ひの外、又もや爰に清盛と、威あつて猛きその形相、さては、最前討たれしこそ。

八條　我が君に、面ざし似たる僞はり者。我れも一年、大内にあつて、我が君の行跡、我まゝの振舞ひ。君若冠の折柄より、隨ひ參らせしはこの八條、心得がたしと窺ふところ、案に違はぬ入道の積惡。その身に報いし彼れが天罰。さりながら、何ゆゑあつて、義心全き我が君には、似せ物を清盛と名乘らせ給ふか。心得難き御本心。

長範　ムウ、さては、本心逆意にあらざる、清盛どのにてありしよな。

清盛　ホヽウ、汝は元より局八條、不審に思ふは尤も、さこそ。今ぞ語らん、承はれ。

長範　ナヽなんと。

ト これより、誂らへの物語りの鳴り物になり、清盛、床几にかゝり、こなしあつて

清盛　そも我れこそは、尊き御方の御胤ながら、忠盛に養育せられ、若冠の頃よりも、天恩の重んじ、朝廷に私しなきに依つて、上もなき高官に登りし事、新院始め宮方の輩、偏執の心を抱き、中にも右衞門の頭信頼は、左馬頭を語らひ、平家を討たんず寄り／＼の企て。源平互ひに隔たる上、朝敵の輩なれば、一天の君への忠勤。既に夜討の待賢門、亂れ立つたる軍の興廢。義朝、謀反ならざるゆゑ、汚名を雪ぎ得させんと、思ふ間に情なや、長田の爲にやみ／＼落命。それより四姓は心々。佞人の心を探らん爲、又二つには、源氏に威勢を見せつけんと、我れに面體さも似たる、五條の傘張法橋を以て、日の寶劍を奪ひ、大位に備はらんず企て。剰つさへ、敵義朝が妻、常磐に戀慕の振舞ひ。遂には天罰報い來て、落命なしたる傘張法橋。彼れが隱せし日の御劍に、心をかける汝が俗姓、心得がたしと思ふゆゑ、天孫の威德にて、アレ、あの日輪に象りし、日の寶劍を招き戻せし清盛が威勢。匹夫め、恐れをなしたであらう。

長範　ヤア、匹夫とは舌長し。盜賊と名乘る我れこそは、源氏の類族、北國加賀に生ひ立ちし、永井の齋藤市郎實盛なるワ。

ト 引拔き、キツと見得。

清盛　さてこそ、只者ならざる人相。叡山法師に泡吹かせし、武藏の住人、永井齋藤實盛なるか。地下の身として

寶劍に心を寄するは、朝敵義朝が討洩らされに、隨ふ心の汝なるか。

長範　穢らはしき朝敵呼はり。清盛、大位を望むと聞く。賢人と呼ばれし重盛どのへ渡さん爲、奪ひ取りしは、これ四海の爲ならずや。清盛には、卑怯にも、似せ物こしらへ、その身は形を現はさぬは、日頃に似ざる入道が心底。仔細は如何に。

清盛　それこそば、入道が深き計略。今ぞ知らせん、その印。

　ト掛けたる額を、長刀の石突にて突く。ばつたり落ちる。煙硝火立つ。これと一緒に遠寄せになる。

長範　ハテ、心得ぬあの貝鉦。

清盛　不審には尤も。あれこそは、四姓の輩、我が榮耀を羨やみて、新院始め、宮方によしなき御謀叛を進め參らせ、時を窺ふ奴輩を、討たんず合圖のあの貝鉦。

　ト長範、思ひ入れあつて

長範　高倉の君の御謀叛現はれ、源三位賴政を語らひ、宇治瀨田に討つて出でたる知らせなるか。

清盛　案に違はぬ賴政が謀叛。ハテ、小ざかしい。

八條　小松の內府重盛公は、熊野へ宿願の旨まし〳〵たるも、平家の御運を末長く、猶も祈りの神慮の御幣。又もや修羅の爭ひとは。

清盛　源平互ひに確執も、私しならぬ天下の爲。ハテ、是非もない。

長範　さほど義心の清盛どの、義朝が子の賴朝、牛若、何ゆゑ、虜になし給ふ。

　ト奥にて

景家　その賴朝と牛若は、飛驒の左衞門、疾より助け置いてござる。

　トつツかけにて、おまつ實は賴朝、以前の形を脫ぎかけ、牛若丸先に、飛驒の左衞門景家、股立ち凜々しく後より女形、殘らず附き添ひ出る。

賴朝　池の禪尼の情にて、助命の賴朝。恩義は恩義、敵は敵。禮儀を報ぜんその爲に、わざと姿も此まゝに、並び來りしこの賴朝。

牛若　平家の恩義は成長なし、我れ〳〵兄弟その時に、互ひの運に任すであらう。

景家　この景家も、清盛公に隨へば、惡事は知れた事ながら、めでたき花の顏見世に、この座へも初めてなれば、立役に引ツくり返つた奉公始め、この上ともに、お取立

て、よろしう願ひ奉る。
歌町　我れ〳〵も、重盛公の御仁心、仰せを請けて頼朝どのを
呉竹　池の禪尼の御仁德、お命恙なき上に
女皆　蛭が小島へお見送り。
長範　聞きしに違ふ淸盛の義心。源氏へ屬せし實盛も、一旦平家に隨つて、義朝公の汚名を雪ぎ奉るは、日の寶劍の御形代、淸盛公へ。
淸盛　この長刀は嚴島の神勅、形は月の影淸く、日の寶劍諸とも、大內へ捧げ、日月和順に國の長久、これを汝に與へ得さする。
長範　すりや、この長刀を、門出の餞別。
八條　最前、法橋に渡せし旗こそ似せ物。誠の旗は賴朝へ禪尼さまより賜はる餞別。
ト旗を賴朝に渡す。
賴朝　返す〳〵も嬉しさは、池の禪尼が情の程、忘れは置かじ、忝ない。
ト長田の忠宗、下座より出て
忠宗　ヤア、朝敵の義朝が餘類、助け歸す淸盛の本心。生け置いては後日の妨げ。賴朝、われを。

ト立ちかゝる。この時、向うより、エイと矢響きして、忠宗が肩に、矢あたる。
ヤア、何奴なれば、遠矢を以て、卑怯な奴の。
重能　主殺しの長田の忠宗。そこ動くな。
トつッかけにて、阿波の民部重能、上下、弓矢を持ち軍兵大勢、附いて出て來り
淸盛公の御本心、聞いたる上は、邪なき平家の政道。庄司忠宗、忠臣無二の重能が、矢先にかゝつて、本懷であらう。
忠宗　ヤア、平家の爲には忠義の某。まつた重盛より墨付を以て、安堵なしたる美濃尾張、兼ねて荷擔の我が手の者へ、知らせは、まッから。
ト矢を後へ投げる。ト柴垣より、こつぶの七、實は平の宗盛、忍び頭巾、鎗を持ち出て、忠宗を突く。
皆々　これは。
忠宗　ヤア、うろたへたか、某を。
宗盛　愚かや忠宗、我れこそ、傘張法橋が元に、育てられたる父の落胤。法橋兼ねて某を實子となし、兄重盛を失ひし上、平家の世を奪はん企み。その荷擔人は、長田の庄司に、重盛より賜はつたる墨附は、直ぐに汝がみの尾

初演の錦繪　三世坂東三津五郎の長範

張。それとも知らず我れを語らひ、育王山への黄金まで、盗み隠せし人非人。名乗る我れこそ、平家の嫡男、内大臣宗盛なるワ。

皆々 ナニ、宗盛公とや。

忠宗 ヤア、さてはおのれは宗盛よな。似せ清盛に悪事を進め、重盛をおッ殺し、平家の輩、我が幕下にせんと企みしも、却つて事を計られしが、残念よなア。

宗盛 極悪人の企み事。主を内海の野間なれば、報いを知れや長田の忠宗。

忠宗 せめては頼朝。

ト寄るな、宗盛、首を打ち落す。直ぐに以前の黄金を出し

宗盛 これこそ、即ち、黄金のその一つ。

ト宇田平、出て

宇田 それを。

トかゝる

長範 我れも一先づ本國へ引き退き、又の再會。先づそれまでは青葉に、名を得たりし熊坂太郎。また重ねての見參には

清盛 齋藤別當實盛と、錦を飾り參會せよ。

長範 おんでもない事。

八條 賞罰正しき平家の功し。君の御武運榮華の榮え。

景家 イデ、その時は、この左衛門、日頃手馴れし大身鎗、眞向にさしかざし

長範 分捕り高名、譽れをなさん。

清盛 やがて再會。源家の輩

頼朝 清盛公。

景家 齋藤實盛。

清盛 方々萬歳。勝鬨々々。

軍兵 エイ〳〵、オウ。

長範 これより二番目始まり、左様に御覧下されませう。

ト皆々、引ッ張りの見得よく、軍兵大勢、アリヤ〳〵の聲、賑やかに。皆々前へ並び、よろしく打込みにてめでたく幕

第二番目序幕

奥山の場

吉原の場

役名――植木屋、出村新兵衛 實ハ上總之介廣光。新造、藻の花。同、姫松。山伏、眼通坊。丁稚、

門吉。奴の長兵衛。損料屋兼九郎。同、小介。醫者、佐武井寒仲。茶屋娘、おみつ。花又村の正作。山伏、眼通坊。間壁文藤次。遣り手、おさき。禿、たより。笠木小三郎。夜蕎麥賣り、玉屋新兵衛實ハ三浦之介義澄。

本舞臺、三間の間、黒幕。草土手、柳の吊り枝、よき所に石地藏、この脇にさしかけの床店、山鯨お吸ひ物と書きし障子、繩簾。下に稻村、藪疊、炭團の干し場、臼、杵など取散らし、爰に赤合羽の中間、十吉、これを御用の門吉、捕へ、損料屋の兼九郎、小介、立ちかゝり、若い者二人、同じく立ちかゝり、テンツヽ、雪颪しにて幕明く。

皆々　其奴を締めろ〳〵。

門吉　オイ親方、また小僧めが、喰ひ逃げをするよ。

ト亭主、出て來り

亭主　なんだ、また喰ひ逃げだ。この小折介め、うぬ、常住、喰ひ逃げをしやがる。いけッ太え奴だ。

ト喰はす。

十吉　コレサ、錢をやりさへすれば、よいぢやないか。そんなに喰はす事はない。

門吉　ナニ、うぬ錢があるものか。おれが屋敷へ行く度に、御膳籠の味噌や酒を、盜みやがるワ。

ト喰はす。

兼九　全體、意地の穢なさうな面だ。

小介　思ひ入れ、ぶッ挫いてやるがよい。

ト皆々、喰はす。

亭主　アヽコレ〳〵、そんなに喰はして、疵でも附いては惡い。此奴は、おれがそびいて行つて、部屋頭に斷わらにやならない。門吉、後を賴むよ。

門吉　合點だ〳〵、ひどい目に遭はせるがよい。

十吉　この御用め、うぬが損にもならぬ事を、とんだ目に遭はせやがるな。覺えて居ろ。

門吉　何を、うぬ。

亭主　ハテ、もうよいわな。サア、うしやがれ。

ト下座へ引ッ張つて入る。

兼九　とんだ奴にかゝつて、鍋が焦げついた。

小介　おへねえ事をした。もう一鍋やらう。門吉、拵らへて下さい。

門吉　オッと合點だ。

若一　岩園へ臺なし、雪が積つた。
若二　菰を掛けたら、おいらも一杯やらうぞえ。
ト捨ぜりふにて菰をかける。門吉、鍋を拵らへにかゝる。テンツヽになり、向うよりおみつ、詰め袖、やつし、王子土産、柚の枝に附きしを提げ、安下駄。寒仲醫者の形、から傘、足駄にて出て來たり、花道にて
みつ　寒仲さま、あなたのお庇で凌ぎましたわいな。
寒仲　イヤモウ、夏の夕立より、途中からの雪は、格別難儀なものぢやて。
みつ　駕籠になと乘つたら、ようござりましたに、此やうにあらうとは存じましなんだ。
寒仲　愚老は、病家へ參る道、丁度幸ひ、あの店は心安い者の内ぢや。女中が山鯨とは、色氣がないが、ちと雪の小止むまで、休んで行くがよい。
みつ　そんなら、揚げを直して參りませうか。
寒仲　さうさつしやい〳〵。
ト舞臺へ來る。兼九郎、見て
兼九　オヤ、寒仲さん、雪降りに、道行きと出かけたの。
寒仲　損料屋の兼九郎どの、すつかりきまるの……門吉か、宿六は、どうしたえ。
門吉　寒仲さんか。宿六は今、屋敷まで行きました。
寒仲　ハア、出前でも持つてか。
門吉　イヽエ、折介の喰ひ逃げ一件でサ。
寒仲　そいつは油斷がならない。
門吉　オヤ、どこの姐さんだと思つたら、堀の大黑屋のおみつさんか、どこへ行くのだ。
みつ　王子様へお參り申して、道で雪に遭うて、難儀したわいな。
小介　似た事もあるものだ。わしも今日は、山の手へ行つて、道からこの雪、傘は借りて來た。一緒に行きやせう。
みつ　そんなら、さうして下さんせ。
寒仲　そりやマア、傘の連れが出來てよいワ。そんなら、おれは病家へ見舞ひに行つて來よう。コレ門吉、てまへ留守をして居るなら、眼通坊が來たなら、おれが逢ひたいと云つて居たと、云ひ傳へてくりやれ。
門吉　オイ〳〵。
寒仲　そんなら、見舞つて來やうか。
みつ　こりやモウ、お有り難うござりました。
トてんつゝになり、寒仲、下座へ入る。雪、頻りに降

る。向うより眼通坊、鼠木綿、足駄を穿き、頰かむり、番傘をさし、蜜柑籠を繩にてからげ、出て來る。後より正作、百姓の形、草鞋にて、笠をかむり、出て來て

正作　コレ〱、そこへ行くのは、眼通坊ではないか。

眼通　オヽ、花又村の正作、雪の降るのに、どこへ行くのだ。

正作　わしは、こなさんの所へ、わざ〱用があつて行くところだ。よい所で逢ひました。

眼通　なんの用か知らぬが、道中で話しもなるまい。幸ひあすこの山鯨。

正作　奧山なら、丁度こなさんの內も同然。

眼通　マア、わしと一緒にござりませ。

ト舞臺へ來る。門吉、眼通坊を見て

門吉　ヤア、お前は、奧山の眼通さんだの。

眼通　わりや、大三津の門吉かい。

ト粂九郎、小介、見て

二人　さう云ふは、念佛堂の眼通坊か。

眼通　南無三。

ト逃げうとするを、門吉、粂九郎、引ッ捕へ

三人　どつこい、逃がして堪るものか。

粂九　コレ御用どん、貴樣もどうか、借錢の催促であらうが、おれに先へ云はして下され。コレ眼通坊どの、貴樣は、坊主の癖に女好き、おれが請合つて貸した損料の五兩、約束の日限りも切れた。これから貴樣を、貸し方へ引摺つて行かにやならない。

小介　おれが存み込んで居る。ちよつと〱の下がりが一兩二分、夾講の仕舞ひ金も、當て身のさう〱は、內證へ濟まない。今日は是非々々貰はにやならないよ。

門吉　外の借は兎も角も、此方の店へ來て、呑んだり喰つたりその上に、今は一升、後まで一升と、二十五貫九百八十文、勘定してもらはにやならぬ。

三人　サア、步ばつしやい〱。

眼通　ア、コレ〱、三人ながら尤もだが、もう長たらしい云ひ譯はせぬ。金を戻す、勘定もしてやる。

三人　又ぬけ〱と噓を云ふのか。

眼通　イヤ、噓ではない。ちつとした事で金になる事があつて、それさへ極まれば、直ぐに算用してやるわい。

三人　イヤ、どうも合點がゆかぬ。

ト正作、前へ出て

正作　イヤ〱、そりや噓でもあるまい。慥かでござりま

す。
三人　ヤ、さう云ふは、どこの人で。
正作　わしや、花又村の正作と云ふ者。あの眼通どのに頼んだ事があつて、コレ爰に。
　ト懐中より財布を出して
その事が調へば、金を渡す約束。間違ひはござらぬ。
粂九　イカサマ、眼通坊が云ふなら、合點がゆかねど
門吉　お前の云ひなさる事なら、嘘もありますまい。
眼通　どんなものぢや。コレ、あんまりがや／＼と喧ましく云ふまい。
三人　さうして、その算用は。
眼通　今夜の暮れ六ツ、爰に居るから、取りに來い。
正作　イカサマ、わしが頼んだ事も、晝は人目を憚り。
三人　そんなら、晩の暮れ方まで。
正作　わしと一緒に、待ち合せてござりませ。
　トおみつ、前へ出て
みつ　眼通さま、この間はお目にかゝりませぬ
眼通　ヤア、大黒屋のお娘か。
みつ　ハイ、わたしも、御催促でござりますが、今のを聞きまして、御遠慮申しましたが、どうぞ、此方も暮れ方に。
眼通　オ、サ、それも勘定してやる。
門吉　コレ、そんなに大風を云つて、よいかえ。
眼通　まだ／＼、爰の内の宿六に、猪や鹿の借りがしたワ。
門吉　そりや、猪くつた報いと云ふもの。
みつ　わたしは、大感寺前に、寄る所があるに依つて、そんなら後に。
眼通　ハテ、勘定したら、直ぐに彼れが所へ。
みつ　モシ、昨日も、お噂がござりました。
眼通　ハテ、現金な嘘を云ふ奴。
正作　まだこなた樣には、話しもあり。
眼通　そんなら、大感寺まへの茶漬屋で、何かの話し。アアコレ、ひどく寒いがなア。
粂九　おれは、もゝんぢいのお庇で、温まりました。細見の繪圖だ。
小介　貸しも取らないで、よい機嫌だの。
門吉　そんなら、これから、ドレ、留守のうちに思ひ入れ喰はうか。
正作　サア、行きませう。

ト祭文の唄になり、眼通坊、蜜柑籠を提げ、おみつ、兼九郎、小介、正作、下座へ入る。跡に門吉殘り、店の蔭にて、待らへにかゝる。この唄、終り、向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を擔ぎ、出て、直ぐに舞臺へ來て

駕一　棒組み、寒いが、一杯やつて行かうか。

駕二　旦那、お願ひ申します。

ト駕籠の側にて云ふ。内にて返事したる思ひ入れに

駕一　御如才があるものか。グツとやつて行かう。

駕一　オイ、烟を熱くして、鍋を一つだ。

門吉　アイ〳〵、直ぐに出來ます。

トこの時、犬二匹、出て、葭簀の蔭の猪を喰ひにかゝる。駕籠舁き、見て

駕一　シツ〳〵、アレ、犬が代物を喰やアがる。

ト息杖にて追ふ。門吉、見て

門吉　この畜生め。

ト禪のツトメになり、三人、犬を追ふと、犬嚙み付かうとかゝる。駕籠舁き二人、這々下座へ逃げて入る。門吉、腹だち、犬を打ち据ゑる。トこの時、駕籠の垂れを上げて、長兵衞、ズツと出て

長兵　お若いの、待たつしやりまし。

門吉　どこのお方か存じませぬが、待てと仰しやるは、手前の事でござるか。

長兵　如何にも左やう。今のお手の內、感心いたし、思はず見惚れて居りました。

門吉　拳も鈍き生兵法、お恥かしうござります。手前ことは、矢大臣門前、大三津ではござらぬ。坂三津の門弟、樽拾ひ門吉と申す者。して其許の御家名は。

長兵　わしは、江戸の花川戸の者サ。

門吉　エヽ、さてはお前は、幡隨院の長兵衞さまか。

長兵　その長兵衞は、おれがお祖父さん、お父さんの臺詞を、よく覺えて居る。無口生眞面目、親に似ぬ子の鬼ごつこ、草履返しのいさくさにも、山のお父さんが附いて居るお庇にやア氣が強い。韋駄天が革羽織で、竹馬に乘つて來ても、びくともするのぢやない。子供の中の子供一匹。マア、さう思つて居やれ。

ト見得。

門吉　イヨ高麗屋……イヤモウ、さうして見たところは、お父さんに其まゝ。お前はマア、形は小鬢だが、膽は根

生えの江戸氣質。わしは又、弱い犬をば嗾しかけて、強い奴なら水をかけ、ほんの事だが正月の、宿りに錢のありつたけ、買喰ひを腹一杯しても、五分でも後へ寄るのぢやござりませぬ。夜明け烏は納豆賣り、灰吹き掃除に川を達し、飯時時分にや遣ひをしたが、只の男に叩られる、男の中で丁稚一疋、いつでも逃げて行きますから、影膳据ゑて待つて下さりまし。

長兵　置きやアがれ。おらア今から、遊びに行く所がある。

門吉　ア、、今戸の祭へかえ。

長兵　知れた事、サア、早くおぶつて、連れて行け。

門吉　わしも江戸小僧だ。送つて進ぜますワ。

ト長兵衛をおぶひ

そんなら高麗さん、必らず今戸で

ト兩方より犬、來るを見事に投げ退け

二人　遊びませう。

ト祭文になり、門吉、長兵衛を負うて、向うへ入る。

ト下座より寒仲、出て來る。向うより間壁文藏次、捕り手二人、附き、出て來たり、寒仲を見て、思ひ入れあつて、下の方に窺ひ居る。寒仲、ウロ〳〵簾の内など探し

寒仲　ハテ、彼奴、爰へ來て居る筈ぢやが、ア、コレ、其うちに、外へやつてはならぬ物、世間で欲しがる、顏の白い、毛の黄色な狐、受領させて、頼む事を頼めば、何事に依らず自由との事。一時も早く、金渡して、受取りたいものぢやが。

文藏　ソレ。

捕手　動くな。

ト取卷く。寒仲、悄りして

寒仲　こりや狼藉な、なんとなされます。

文藏　ヤア、何ゆゑとは横道者、先つ頃、高尾の文覺、窃に奪ひ取つたる法皇の綸旨、草を分つて詮議最中。然るに此ほど下野の國、那須野の原の殺生石、さま〴〵祟りをなすとの取沙汰。此ほど彼の地へ立ち越え、小狐を捕へ來りし者あるとの風聞。毒氣殘りし殺生石へ、近寄りしは不審の一つ。合點ゆかぬ。汝が只今の詞。陣屋へ召連れ、詮議いたす。身と一緒に、うせ居らう。

寒仲　何事のお尋ねかと存じましたれば、殺生石へ近寄つた者が、その珍い物でも持つて居るかとの、御詮議でござりますか。

文藤　如何にも。

寒仲　そりや狐の事は格別、綸旨とやらの御詮議なら、ちつとわつちに

文藤　心當りが、あると申すか。

寒仲　左やうでござります。

文藤　いづれ汝を召連れ行き、尋ね問ふべき仔細もあれば。

寒仲　すりや、どうあつても。

文藤　違背いたすと、爲にならぬぞ。

寒仲　こりや又、迷惑な事ではある。

捕手　キリ〳〵、歩め。

寒仲　ドリヤ、行きませうか。

ト時の鐘、雪颪しになり、文藤次寒仲を連れ、向うへ入る。眼通坊、最前より出かゝり、窺ひ居て、後を見送り

眼通　ムウ、あの藪醫者めを連れて行く今の侍ひ、慥かにおいらが身の上の詮議、事の破れぬ其うちに、あの藪醫者も百姓めも、兎や狸でまやを喰はし、金を取つたその上で、この小狐をお頭へ。イヤ〳〵、その金で、日頃から惚れて居る、吉原のあの藻の花、根曳きしてかたげてズイ……よし〳〵。なんでも、これから、さうだ。

ト向うへ行きかゝる。と、ドロ〳〵、狐火、現れる。雷序になり、花道よりタヂ〳〵と連理曳きに引き戻さるゝ。眼通坊、さま〴〵あつて

ハ、ア、この小狐に附きまとうて居る親狐か。但しは、同じ仲間の狐か。おれが手に入つたこの狐。うぬらが手くさいで、何猪口才な。

トまた行きかゝる。ドロ〳〵にて、引き戻される。

エ、、忌々しい。しつこい四つ足め。よい〳〵、さう附きまとへば。

ト懐中より鏡を出し、差しつける。ドロ〳〵止んで、狐火、消える。

へ、、なんと奇妙か、けうといものであらうが。引き戻さうとすれは、これぢや。

トひらつかせ、さま〴〵あつて

ドレ、この間に。

ト向うへ行きかける。人影するゆゑ、立ち戻り、思ひ入れあつて

イヤ〳〵、大切なこの鏡、懐中から出して、ひらつかせては、歩かれぬ、ハテ、どうしたら。

トあたり見まはし、石地藏を見て

オヽ、幸ひぢや。この地藏の下へ、ちつとの間。

ト雪を掻き分け、地藏の下へ隱し

斯うして置けば、氣遣ひない。

トこの時、以前の駕籠舁き一人、出て

駕一　怪しい、坊主め。

トかゝるを、立廻り、見事に投げ退け

隈通　今夜はどつさり、積らにやよいが。

ト樣を見る。時の鐘、雪颪しにて、道具、廻る。

本舞臺、三間の間、赤塗りの格子、女郎屋のかゝり下の方、柿の暖簾、上の方、獸物屋は打返しにて、煙草店の書き割り、諸國名藥、柚の梅の看板、よき所に誰哉行燈を取りつけ、一面に雪降りの景色、すべて吉原、江戸町、大見世のかゝり、よき所に床几直し、爰に正作、旅人の拵へ、酒を呑み居る。おみつ、稻荷の娘、遣り手のおさき、禿、たより。寒仲、雪の兎を拵らへ居る。よき所に餅臼を直し、若い者二人、絆纏、股引、鉢卷にて、餅を搗いて居る。損料屋兼九郎、小介、絆纏、股引にて鞠を蹴つて居る。通り神樂、淸搔にて道具納まる。

若一　コレサ小介どの、兼公、いゝ加減に、代らつし。

若二　先刻から餅は搗かないで、鞠ばかりついて居るぜ。

ト云ひながら、兩人、搗いて居る。

兼九　べら坊め、こりやア蹴鞠だ。つくと云ふものぢやない。

小介　今に行く。早く搗かッし。

ト云ひながら、鞠を蹴つて居る。

さき　コレたよりや、いゝ加減に雪なぶりをしないのか。

たよ　それでも、わたしや、雪の降るのが、樂しみでござりますわいなア。

寒仲　イヤモウ、子供は風の子とやら、寒い事は、なんとも、思はぬものぢや。併し、愚老は名の通り、佐武非寒仲、拵らへた兎は、どんなものぢや。

正作　イヤ、なか／＼細工は手早い……ほんに、早いと云へば、爰の内の餅搗きは早いな。

さき　イエ、こりやア、春の餅ではござりませぬ。此方の嘉例で、冬至に内で祝ひますわいなア。

正作　ハヽア、それで讀めた。

ト此うち兼九郎、小介、鞠を何所へか蹴飛ばし

粂九　サア、見えぬワ〳〵。旦那からお借り申した鞠を、何所へか小介が蹴なくした。
小介　貴様の蹴やうが悪いから。捜せ〳〵。
トあちこち探す。この鞠、例の天水桶へ入りしを、探し出し
粂九　途方もない、天水桶の中へ蹴込んだ。
小介　エヽ、綻びから水が入つた。
ト思ひ入れにて、手桶の屋根へ載せる。
粂九　入つたはよいが、この藻の花は、もう戻りさうなものぢやが。
さき　先刻、花魁の迎ひに、駿河屋へお出でなさつたと。
寒仲　番所と云ふものは、お屋敷で家老職と云ふものだから、世話が一倍であらうなう。
遣手　そんなら、わたしらはえ。
寒仲　遣り手と云ふから、鑓持ちでもあらうか。
さき　オヤ、不作法な。好かないよ。
皆々　ハヽヽヽ。
ト清掻になり、向うより藻の花、とめ袖、番頭新造。姫松、新造、寝巻、扱帯の形、相合ひ傘にて、この先へ若い者、大箱提灯、持ち出る。後より眼通坊、以前の形、編笠をかむり、鼻扇にて窺ひ出る。
藻の　姫松さん、主はマア、寝巻の形で、何處へ行かしやんしたえ。
姫松　サア、急に花魁の用で、やう〳〵見世を忍んで出たのぢやわいな。
藻の　そんならマア、格子で一服お上がりなんし。
姫松　折角その人ぢやと思うて、逢うたのは、うまらぬものぢやわいな。
藻の　ほんに、覚えのある事ぢやわいな。マア、ござんせ。
ト清掻、弾き流しにて、両人舞臺へ来たり、若い者は暖簾口へ入る。眼通坊、思ひ入れあり、後より下がつて舞臺へ来り、様子を見て、其まゝ下の方・誰哉行燈の蔭へ忍び、窺ふ。皆々、両人を見て
みつ　オヤ、姫松さん、藻の花さんと連れ立つて、大分遅うござりましたね。
藻の　なにサ、花魁の客人が酔ひなんして、いろ〳〵の無理ばかり。それをくるめて、つい隙が入つたわいなア。
寒仲　新造同士の道行き、ハア、提灯が、羨やましいな。
みつ　さうして、姫松さんわえ。

姫松　アイ、ちつと逢はねばならぬお方の、あと追うて行て、主と仲の町から、一緒に戻つたわいな。
正作　して、主は。
みつ　こりや、お向うの、松葉屋の花魁の、尾花さんのお部屋の。
　ト藻の花、正作を見て
藻の　オヤ、正さん、まだ爰にお出でなんしたかえ。
正作　そもじの歸るまでは、いつまでも斯うして居るのサ。
藻の　そりやアお嬉しうござんすなア。
正作　嘘ばつかり。
藻の　エ。
正作　聞けば、お主はこの頃、色が出來て、血道を上げて居るさうだが、その色男の顏を、ちつと見せてくれないか。
　ト眼通坊、小蔭にて思ひ入れ。藻の花、こなしあつて
藻の　正さんとした事が、なんのマア、わたしがやうな。
寒仲　色と土用干しを、した事がないと云ふ、云ひ譯も古い〳〵。
みつ　イエ〳〵、藻の花さんは、花魁のお世話をして、お出でなさんすつて、なんのマア。
正作　どこの二階でも、客人と云ふものは、口癖に、ナア藻の花さん。
　ト藻の花、思ひ入れ
ハヽヽヽ、色男々々と云ふのが、金の無い癖に、人の女郎を盗んで樂しむは、マア盗人同然。こんな所に居やうより、二階へ行て飲み直さう。
寒仲　それ〳〵、それがようござりませう。
みつ　サア申し藻の花さん。
磯の　イエ〳〵、わたしは矢ッ張り。
　ト思ひ入れ。
みつ　そんなら、お後から。
皆々　サア、お出でなされまし。
　ト淸搔になり、皆々、暖簾口へ入る。兼九郎、小介は餅にかゝり、牡丹餅を拵らへる。眼通坊、小蔭より出て、藻の花を見て、思ひ入れ、また四人を見て、心遣ひの思ひ入れ。藻の花、眼通坊を見て、飛び立つ思ひ入れ、あたりへこなしあつて鼻へ扇を當て
眼通　藻の花〳〵。

ト呼ぶ。四人、これを見て、立ちかゝり
粂九　なんだ〳〵、薄穢ない乞食のやうな形をして
小介　此方の大事の新造衆を呼ぶは、此奴は、名を知つて
騙りかも知れない。
四人　ぶんのめせ〳〵。
ト てんでに棒杵、薪を持つて、立ちかゝる。眼通坊、
思ひ入れ、藻の花、心遣ひ。暖簾口よりおさき、飛ん
で出て来り
さき　様子は見て居た。何するのぢや。いま云ふ強請り、
騙りなら猶の事、ひよつと又知る人なら、ほんの不作
法。マア、わし次第に。
トよろしく制し、ソッと眼通坊を窺ふ。
眼通　大事ない、おさき、わしぢや。
ト思ひ入れ。
さき　ヤ、眼通さま、ヤレ、お久しや〳〵……そりやこそ
留めまいものか。あなたは此方のお客、ひよつと杵棒当
てましたら。
四人　エヽ、そりや、斯うしては。
ト皆々暖簾口へ入る。おさき、見送りながら
さき　サア〳〵此方へ。

眼通　イヤ、行くまい。また、今のやうに男どもが。
さき　なんのマア、お前様を……とは云ふものゝ、そのお
姿、昔はわたしが迎へに出る。
眼通　今はやう〳〵長刀の、草履を取るにも及ばぬ大道。
さき　中の座敷は、あの床几に。
眼通　何にも云はぬ。ソレ、二歩金。
ト紙包みをおさきにやる。
さき　エヽ、有り難い。
ト戴く。清搔になり、おさき、ツイと暖簾口へ入る。
藻の　逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなア。
ト取縋つて、思ひ入れ。
眼通　オヽ、道理ぢや〳〵。わしも逢ひたいは山々なれど
見窄らしい姿で、其方に逢ふのも面目なさ。アヽ、おれ
ゆゑいかい、苦勞しやるの。
藻の　そりや、惚れた男にするのぢやもの、それにいとひ
は……さうしてマア、お顔のやつれ。オヽ、幸ひの嘉例
の餅搗き、これなとマア。
ト並べてある餅を、盆を載せて、差出す。
眼通　成る程、いつも餅搗きは、二人一緒の床の内。その
心で。

ト取つて喰ふうち

藻の　モシ〳〵、昨日も文で知らせた通り、あの正さんがわたしを身請けすると云うて。

眼通　ヤア〳〵〳〵。

藻の　わたしや、お前に別れては、生きて居ぬ氣、もしその時は、モシ。

ト懷中より剃刀を出し

覺悟極めて居る程に、好い思案して下さんせいな。

眼通　思案と云うて、今さらに。もう斯うなつたら、覺悟の前。

藻の　一緒に死んで下さんすか。エヽ、嬉しうござんす。

眼通　爰は往還、人無き所へ。

藻の　ちつとも早う。

眼通　おぢや。

ト此うち姫松、出かゝり居て

姫松　コレ、待たしやんせ。死んで、花實が咲くかいな。

眼通　なんと。

姫松　サア、年端も行かぬ新造の、ませた事云ふと思はんせうが、お前方の、死なうと思はしやんすも、金ゆゑ。藻の花さんの手付けさへ、渡さんすりや、死ぬるには、及ぶまいぞえ。

眼通　サア、そりや知れた事。その手付けの金がないゆゑに。

姫松　サレバイナア、藻の花さんの前では云ひ憎いけれど足らはぬわたしが、此やうな事云ふも、此やうな花魁の心意氣。可哀さうに惚れ過ぎて、急に逢ひたい、どうぞ連れ申してくれいと、逝ひの文は、コレ、此やうに。

ト四五本、文を出して

四五日逢はねば、文の數々、ちつとは花魁の心意氣も察し、忍んでお上げなさんした上、相談づくで、手付けの金も、とサア、花魁の名代に、新造の當り前ぢやわいな。

藻の　成る程、主を深切に、可愛がつて下さんす、松風さんの事も、疾に承知して。ハテ、わたしが好けば、餘所外の女郎さん方の、惚れるは當り前、締らめて居るわいな。

眼通　お主が、さう碎けてくれゝば、何を隱さう、二人は一生、見捨てはせぬ。

姫松　身請けを延ばす相談のうち、主を隱して上げ申す、その都合は、花魁と。

眼通　さうしてくれ〳〵。
姫松　ドリヤ、首尾して來うか。
ト唄になり、姫松、下座へ入る。眼通坊、思ひ入れあつて
眼通　先づこれもよしと。コリヤ藻の花、田から行くも、畔から行くも、其方と夫婦になりたいばかり。併し、松風が方で、金が出來ぬ時は百年目、爰を駈落ち。それまで小蔭で。
藻の　サア、ござんせ。
ト唄になり、藻の花、暖簾口へ、眼通、入らうとすると、この時、人音するゆゑ、誰哉行燈の蔭へ忍ぶと、時の鐘になり、向うより笠木小三郎、五分月代、大小着流しにて、傘をさし、後より捕り手二人、窺ひ附いて出て來たり、花道にて
小三　まだ、鐘は四ツでもあらうか。慥かに江戸町に來て居るとの事、夜の更けぬうち、逢ひたいものだ。
捕手　捕つた。
ト十手にて打つてかゝるを、傘にてちよつと立廻り、追ひ散らす。捕り手、逃げて入る。
小三　ハヽヽ、廓ぞめきの袖ふり客。やゝともすれば喧嘩仕掛け、宵の間は、これが氣障だわえ。
ト舞臺へ來るうち、下座より飛脚、提灯をつけ、出て來り
飛脚　ちと、物が尋ねたい。吉原の江戸町と申すは爰か。松葉屋と云ふに、京家の武士の、遊んで居る所はござらぬか。
小三　數限りなき諸人の入込み。京家の武士とばかりでは。
飛脚　イヤサ、名を憚かれば、迂濶には。
小四　して、狀筥でも持參かな。
飛脚　そりや、これに所持して居る。
ト首に掛けし狀箱を見せる。
小三　三浦どのへ、長谷部信連。この狀は。
ト取らうとするを
飛脚　なにを。
トやるまいとするを、小三郎、拔打ちにポンと切る。伊勢音頭になり、小三郎、狀箱を銜へ、刀を拭ひ納め、こなしあつて
小三　長谷部信連よりの密書とあれば、慥かにこれが法皇の綸旨。

眼通　ヤ。

　ト顔見合せ

小三　そちや何者。

眼通　おれが事より、こなたは。

小三　雨の降る夜も、雪の夜も、毎晩廓へ。

眼通　素見ぞめきのほてゝんがう、後でとつくり。

小三　すりや何も彼も。

眼通　殘らず見て居た。

小三　それを知つたら。

　ト切りかける。立廻り。眼通坊、傘にて受けとめ、

眼通　ヤレ、早まるまい、源氏に心を寄せる若者、河内の覺照、一味しよう。

小三　ナニ、貴殿が、河内の覺照とな。

眼通　いま其方が奪ひ取りしは、正しく法皇の綸旨であらうが。

小三　如何にも。河内の覺照とあらば、包まんやうなし。兼ねて、こなたを語らひ來れと、主人競瀧口より屬託の印。

　ト懷中より百兩包みを出し、渡す。

眼通　すりや、兼ね〴〵密書を以て通達せし、瀧口の家來となる。

小三　まだ〳〵、味方へ取り得し手段の一品、御覽に入れう。

　ト礫を打つ。ト上手より侍ひ、着流し、大小にて、白木の臺へ緋の衣と、三百兩載せ、持ち出て

侍ひ　合圖の礫は、この品の御用ならん。

　トそこへ直す。小三郎、行けとする。侍ひ、引返して入る。

眼通　なんとも解らぬ、この品は。

小三　これこそ、殺生石の怨魂を鎭められんと、大德の聞えある、壽木和尙へ賜はる、大僧正の官位。功なる上は天下の祈願所とある。參內の手當て金三百兩、此方へ奪ひしも、覺照假りに大德となり、行列美々しく參內遂げ、禁裏の樣子窺ふ手段。

　ト渡す。

眼通　すりや、この二品が。ハテ、好い物が手に入りしよな。して、おことが實名は。

小三　笠木小三郎と申す者。斯く本心を明かす上からは。

眼通　我が從へし徒黨の連判。

　ト懷中より出す。

小三　この綸旨と二品と、引替へに。

ト互ひに取替へ、眼通坊綸旨と金を、手拭にくるみ、懐中へ入れる。下座より、藻の花、おさき、おみつ、姫松、出て來り

藻の　モシ、喜んで下さんせ親方さんへ金渡し

みつ　彼方へ身請けは、さつぱり變替へ。

姫松　花魁も金拵らへ、百兩を手付けに渡し、お前に不自由させまいと、この百兩は、上げるわいな。

ト覺照へ遣る。

眼通　ヤア、〳〵〳〵。

姫松　サア、ちやつとしつぽり。

ト手を取る。

藻の　イエマア、わたしが床で、ちやつと寐てから。

ト手を取る。

藻姫　サア、ござんせいな〳〵。

ト兩方へ引ツ張る。眼通坊、いそ〳〵として思ひ入れ。

眼通　さて斯うも、思ふ事の叶ふものか、思ひがけない金が五百兩、こちらの事が片付けば、國取り大名。いけぬところが大僧正。二人の女郎は死ね殺せ。

みつ　金さへ持つてお出でなら、天下晴れた

姫松　花魁は、奥様。

藻の　わたしは、お妾。

覺照　イヤモ、それで落ちついた。

ト奥にて

寒仲　イヤ、滅多には落ち付かれまい。

ト云ひながら寒仲、間壁文藤次をつれて、暖簾口より出る。正作、後より附き、出て來る。

眼通　ヤア、わりや、藪醫者に百姓にお侍ひ、なんで爰へ出て、落ちつかれまいとは。

寒仲　オヽサ、われが日頃、心のよくない事を頑張つて、お役人へ訴へしは

正作　藻の花が身請け、松風が色狂ひに事寄せ、惡企みを探らん爲、姿をやつし、云ひ合せ

寒仲　一旦、金を其方へわたし、身請けさして、二人の女郎は、此方へ捲き上げるワ。

眼通　ヤ、なんと。

ト暖簾口より、小三郎、捕り手二人、連れ出て

小三　ソレ、眼通坊を、取卷き召され。

捕手　動くな。

眼通　ヤア、今の惡者仲間、何ゆゑあつて。
小三　最前、侍ひと僞はりしは、其方を計らん爲、河内の覺照とあるからは、どうで熊坂が手の者。
文藤　いま、京洛中を嚴しく詮議、間權文藤次が引立て行く。最早、遁がれはあるまいが。
眼通　すりや、何奴も、此奴も、云ひ合せであつたか。エヽ、口惜しい。
正作　サア、この上は、藻の花は此方へ。
ト手を取る。
小三　尾花は某、姫松もろとも。
ト同じく姫松が手を取る。
眼通　ヤア、其方ばかり得心しても、おれと云ふ、虫のある女が心。
藻の　イエ、わたしや正さんに、身請けされて行くわいなア。
姫松　花魁も、主が深間。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
正作　其方の身請けの、金と云ひ
小三　身共が渡せし黄金も、猥りに通用なり難き、六波羅小判。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
正作　女を賴み、金を與へ、其方で身請けさせ、證文は此方へ取れば、否應ならぬ二人が身の代。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
藻の　お前の女房にならうと云うたも、みんな噓。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
姫松　花魁の惚れたも噓。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
みつ　マア、わたしが取持つて、色になつたが噓の始まり。
眼通　ヤア〳〵〳〵。
正作　サア、この上は眼通坊。
寒仲　奪ひ返せし照魔鏡。
小三　在所明かして此方へ渡せ。
文藤　但し踏みつけ、拷問しようか。
出通　サア、それは。
皆々　サア〳〵〳〵。
眼通　エヽ、モウ、破れかぶれ。
ト文藤次が一腰を拔いて、切り殺す。これにて入り亂れ、ドン〳〵になり、小三郎、藻の花が手を引き、逃

げて入る。捕り手、支へるうち、おみつ、姫松、出て
刀で切られる。
此まゝでは……姿を變へて。さうだ。
ト有り合ふ剃刀にて、幸ひと雪の兎にて頭をしめし、始終、逃げうと、あちこち駈け走り、氣を焦ちながらよろしく頭を剃り落す所へ、藻の花ウロ／＼逃げて出る。アリヤ／＼の聲。眼通坊、見て
うぬ、寶女め、思ひ知れ。
ト乘つかつて切り倒す。ト大ドロ／＼、雷序、狐火、數多出て、藻の花、切り穴へ消えて、返しになる途端、後の格子、打返しにて、暮明きの道具になり、炭團の干し場、臼杵、元の通り。これと一緒に板返しにて、首は南瓜、腕は大根になり、以前喰ひし餅はさん俵にのせたる炭團になる。眼通坊、馬の沓の差したる竹を持ち、仕掛けにて緋の衣、稻荷の幟になりしまゝ、案山子を刎つて居る。薄ドロ／＼。持ちたる竹を刀のやうに持ち、藻の花と心得、案山子に附けたる蹴鞠を打ち落し、首のやうに持ち、唾を吐きかけ、口惜しき思ひ入れにて、舞臺へ打ち投げ、グッと踏みにじると、チウと水氣立つ。ドロ／＼、雷序、一度に止む。ゴンと時の鐘。眼通坊、心付き、悄り思ひ入れあつて、蜜柑籠を明けて見て、小狐なきゆゑ、ハ、アと思ひ入れにて、眉毛へ唾を附け、手早く懷中の金を出し、手拭を解くと、金、石となる。これにていろ／＼こなしあつて
此やうにやり居つても、綸旨ばかりは。
ト懷中より綸旨を出すと、小便無用の木札になる。この時、有り合ふ炭團を見付け
最前、餅と思ひしは。
ト口の廻りを撫でる。この時、口の廻り眞黑くなり、氣味惡き思ひ入れにて、唾を吐き
愚僧は元、戌の年、戌の月、戌の日、戌の刻の誕生。斯く戌の年度、揃ひ生れゆゑ、なか／＼狐の寄り付く事ならず。多くの眷屬を語らひ、
ト竹の脇差をよく／＼見て
エ、エ、エ、。
トきつと無念の思ひ入れにて
ようやり居つた。
ト竹を提げ、ぐんにやり思ひ入れにて、この時、奥より兼九郎、小介、大ぜい

皆々　サア〳〵、暮れ六ツが鳴るぞや。

眼通　ヤア、ありや、借金乞ひめら、こればつかりは、ほんまぢや。この間に。

トうろたへ、石の地藏の下より鏡を出し

これさへあれば。

ト押戴くを、此うち後へ出村新兵衞、やつし、頰かむり、尻からげにて、ヌツと出て鏡をひよいと引ッたくる。それを、と來るを、ポンと當て、鏡を見たき思ひ入れ。時の鐘合ひ方、股引、やつしにて、向うより玉屋新兵衞、手拭を卷き、風鈴蕎麥の荷に、玉の附きし行燈を點け、これを擔ぎ出て、玉屋直ぐに舞臺へ來る。出村、この行燈にて鏡を見たき思ひ入れ。玉屋、留まらぬゆゑ

出村　オイ、一杯下さい。

玉屋　アイ〳〵。

ト荷を下ろし、拵らへにかゝる。この間に、出村、ソツと鏡を出し、行燈に寄せ見る。玉屋も見て

そりやソレ、燵か。

ト此うち眼通坊、心付き、起き上がり

眼通　それを。

ト取りにかゝる。これより三人、鏡を枷になかしき立廻り、いろ〳〵あつて、三人、よろしく、

拍子幕

第二番目大詰　　孔雀長家の場

役名＝植木屋、出村新兵衞 實ハ上總之介廣光。踊の師匠、吟光。家主、孫左衞門。下女、おさん。お針、おさく。醫者、佐武井寒仲。花又村正作。間壁文藤次。下男、喜助。圍ひ者、小女郎 實ハ殺生石の靈魂。夜蕎麥賣り、玉屋新兵衞 實ハ三浦之介義澄。

本舞臺、三間の間、裏借家のかゝり。二重舞臺、三間を九尺づゝ仕切り、東西に腰障子戸、上げ。上の方、朝鮮矢來。後ろ、植ゑ込み。下の方、路地口。この前、井戸端の駒寄せ。右二重舞臺、東の方は見附け、押入れ、腰窓、軒口に宇嶋と記し、下に表札、踊りの師匠の家。西の方は見附け、反古張り佛壇の書割り。兩方ともに、一つ竈。すべて淺草田町、孔

雀長屋、裏屋のかゝり。右道具、誂らへの通りよろしく、幕の內より上の方に、吟光、やつし袖なし羽織、意氣な親仁の拵らへにて、三味線彈いて居る。孫左衛門、椀久を稽古して居る。子供二人、樂屋着の形にて、扇を二本、腰に差し、見物して居る。井戸端に下女おさん、米を磨いで居る。この見得よろしく、一面に雪降りの模樣。冬至の太神樂、椀久の切れにて、賑やかに幕明く。

ト孫左衛門、踊を踊りながら、子供二人の頭をくらはす。これにて子供二人、立ちかゝり、三人にて、ワヤワヤと捨ぜりふ云ひながら摑み合ふ。吟光、下女も捨ぜりふにてこれを制し

吟光　コレサ〳〵、喧嘩をするものぢやない。

さん　ほんに、お前方、大家さんも大人しくない。さうして大家さん、お前は、踊をお習ひかえ。

孫左　わしも、形は小さくても、この長家の家主、隱し藝に覺えて置く氣で、精出します。

さん　わたしも、踊は大好きサ。

吟光　時に大家さん、これから何を始めませうな。

孫左　半田稻荷が、やつて見たいね。

吟光　なんだ、勘三の芝居が見たい。

孫左　何を云はつしやる。

子二　お師匠さん、わたしには、新物を教へて下されまし。

吟光　オヽ〳〵、教へてやらう〳〵。時に、お家主でも、弟子にすれば、わしは師匠、七尺去つて影を踏まずと云ふに、九尺店では、餘ッぽど骨が折れます。シタガ、爰の內は、此やうだが、あの奧の小女郞さんの所は、小ぢんまりとした、粹な住居だ。あの子を世話にして置くは、どこの人だか知らずか。

さん　わたしも、奉公はして居ながら、旦那のござるは知らずサ。なんでも、あゝして相應にしてだから、まんざらなんでもないのさねえ。

吟光　イヤモ、女やもめは花が咲くとやら。わしも古へは芳町で、堀井熊之助と云つて、人より花の數も貰つたものだが、若い時の遊藝が役に立つて、九尺二間の內で踊の師匠、凌ひ日などには二軒續きに、あの壁をぶッこ拔く積りサ。

さん　そんならお前は芳町で、熊之助と云つた、若衆だえ。

吟光　さうサ。
さん　アノ、お前が、ヘ、、ハ、、、。
　ト通り神樂、テンツ、になり、向うより玉屋新兵衛、前垂の形、蕎麥の荷を擔げ、後より喜助、風呂敷包みを脊負ひ、出て來る。子供は奧へ入る。兩人、花道にて
すイ／＼、蕎麥屋、一杯熱くして、拵らへてくれぬか。
玉新　イエ、まだ仕込みをしたばかりでございますから、ちつと、間がござります。
喜助　どうで、あそこへ行くから、待ち合して喰つて行かう。
玉新　そんなら、さうさつしやりまし。
　ト矢張りテンツ、にて、兩人、本舞臺へ來る。吟光、見て
吟光　オヽ、玉屋の新兵衛どの、日の暮れぬうちから出かけたの。
玉新　イエ、わしは寅仲どのゝ口入れで、お前の内を相談に。
吟光　オヽ、その事か。それならば、マア／＼此方へござい。幸ひお家主も爰に居られる。

玉新　それは幸ひでござります。時に先づ、その内を檢分したうござります。
吟光　爰の内が、わしが住居サ。造作もわしが好みで、ちつと裏家にしては、高慢に拵らへてあるのサ。
玉新　イヤモウ、高が夜商人の獨り者、さのみ立派でなくてもようござります。
孫左　先づ第一は、染め賃が、恰好でござるぞや。
玉新　左やうなら、先づ、相談は出來たと云ふもの。
さん　蕎麥が長家内では、それぢやア、誂らへに行くに、世話がなくつてよいね。
喜助　コレ、おさんどん、お針のおさくさんは、此方ではないか。
さん　イエ、まだお留守サ。大方、追ツつけ來なさるでござりませう。
喜助　そんなら、ちつとの間、待つて居るうちに、蕎麥が出來るであらう。
玉新　ハイ、そろ／＼仕込みにかゝりませう。
吟光　コレ／＼、新兵衛どん、斯うするがよい。どうで茶振舞ひを配るなら、直ぐに大家さんもござる。爰で御馳走申すがよい。

喜助　おいらも、手傳つてやるべい。おさんどん、當り前だ、水でも、汲んで來るがよい。
玉新　そんなら、さうして拵らへませう。
ト荷を上の方へ持つて來る。この時、新兵衞、懷中より袱紗に包みし、だんまりの玉を落す。吟光、拾つて
吟光　こりや、おつな物が、落ちてあるが。
喜助　ほんに、變つた物が……
ト新兵衞、手早く取つて、懷中へ入れる。
そりや、貴樣のか。
玉新　左やうサ。
ト思ひ入れ。
喜助　なんだか、玉のやうな物だの。
玉新　エ……イヤ、こりやアノ、蕎麥のつなぎサ。
喜助　ハア、さうか。立派な物に包んで置くの。
玉新　蕎麥も饂飩も拵らへ上げると、この通り玉にして置きますから、そこで看板も、玉屋新兵衞。
皆々　それで來歷が解つたわい。
ト向う揚げ幕にて
小女　おさくさん、早う來なさんせいな。

ト通り神樂、流行り唄になり、向うより小女郎、着流し圍ひ者の形、後よりお針おさく、番傘をさし、出て來て
さく　小女郎さん、お前マア、この雪に、なんだやら、ソワ／＼として、何處へお出でなさんしたのぢやえ。
小女　イ、エイナア、わたしも、つい隣り町まで用があつて、今朝から今まで、つい酒事に一つ二つ、遲うなつては、皆さんへもお氣の毒ぢやと、氣を急いて戻つて見れば、爰も茲、變らぬ雪の銀世界。積つた景色は、格別でござんすなア。
さく　わたしも、お前の歸りを待ち兼ねて、わざ／＼迎ひに雪の道。丁度よい所で、お目にかゝつた。そんなら一緒に
小女　連れ立つて、戻らうわいなア。
ト矢張り右の唄にて、兩人、本舞臺へ來る。
さん　オヤ小女郎さん、お歸りでござりますかえ。
吟光　イヤア、奧の小女郎さん、道連れは、お針のおさくさん、どうでござります。
喜助　おさくさん、この間の小袖は、まだ出來ませぬかえ。

さく　喜助さん、まだマア、明日でなけりや出來ぬわいな。
喜助　それは、困つたものだ。
小女　さんや、今日は、風呂を拵らへて置いたか。
さん　小女郎さん、まだお歸りではあるまいと、お炬燵も拵らへませなんだ。ちつとの間、爰におゐでなされませ。とつくりと片付けて參りませう。
吟光　ハテ、奧の內よりは、爰の庭から、山谷の方を見晴らす所が、風流々々。
喜助　風流よりは、風鈴の夜鷹蕎麥、もう出來さうなものだ。
玉新　モシ〳〵、夜鷹蕎麥〳〵と、其やうに云はつしやりますな。ハテ、人には添つて見ろとやら、見掛けは饂飩に思はれても、氣は正直な正直蕎麥、一膳上がつて御覽じませ。
吟光　イヤ、なまじいな手打ちを喰ふより、風鈴に氣の利いたのがあるて。矢ッ張り色事も、この理窟かなア、小女郎さん。
小女　そりやモウ、色事と云ふものは、其やうなものでござんせう。シタガ、斯うして、獨り居る者は、わりや誰れぞと、譯でもあるかと、疑ふ人があるかは知らねど、ナア、おさくさん。
さく　さうでござんす。兎角男と云ふものは、銘々の浮氣は退けて、喧ましう云ふものでござんすわいな。
　ト新兵衛、蕎麥の鐵砲を煽ぎながら
玉新　ヘエ、そんならお前が、奧に圍はれてござる、小女郎さんかえ。
　ト小女郎へ思ひ入れ。
吟光　おらが長家に、獨り住みの小女郎さん。爰の長家へ引ッ越して來たら、心安く、お頼み申すがよい。
玉新　そりやモウ、どうで獨り者の事、お世話になり勝ちお頼み申します。
小女　わたしも獨り、アノ、おさんが居りませぬ時には、ちつと又。
玉新　エ。
　ト思ひ入れ。
小女　お頼み申しますわいなア。
さく　イエ〳〵、獨りで居なさんす小女郎さんに、獨り者のお前、ナア皆さん……こりや、お頼み申しますわいな。

さん　朝寢をして、寢忘れたら、どうぞ起して下されまし。お賴み申します。

喜助　イヤ、忘れて居た。なんだか、お觸れのある寶物ものやら、この書付けが讀めませぬ。大家さん、お賴み申します。

　ト懷中より觸れ狀を出す。

孫左　家主に、觸れ書が、讀めるものか。其方で、お賴み申します。

吟光　わしも、そんな野暮なものは御免だが。賴み申します。

玉新　お賴み申すを、賣りに來たやうだ。ドレ〳〵。

　ト開き見て

ウム、こりやア、照魔鏡と云ふ、鏡を持つて居る者を見付けたら、褒美をやると云ふお觸れ書。

吟光　なんだ、照魔鏡だえ。アノ、菓子屋のかえ。

喜助　何を云はつしやる。

玉新　ハテ、その鏡は、平家の寶物とやら聞いたが、それが又、この江戸へ。

さく　そりやア、慥か、狐の嫌ふ鏡とやら。

小女　モシ、その書いたものなら。

玉新　エ。

　ト取らうとする。

小女　わたしや又、流行り唄の文句ぢやと思うて。

　ト思ひ入れ。

玉新　なにサ、そんなものぢやない。シタガ、買ふ氣なら、眞面目に見て置きなされまし。

小女　なんのマア、わたしらが見たとて。

玉新　イカサマ、そりやア、そんなもの。こりやア、わしが預かつて。

　ト卷かうとする。ドロ〳〵にて狐火、現はれ、件の書き物、新兵衞が手を離れ、おのれと狐火にて燃える。

ヤア、今の書付け。

皆々　こりやア不思議。

玉新　ムウ、ハテ、合點のゆかぬ。手に持つて居た今の書き物が、自然と離れて。ムウ。

　ト思ひ入れ。小女郎、何氣なく新兵衞が側へ來て

小女　新兵衞さん、ちつとわたしが內へ、お話しにお出でなさんせぬか。

玉新　ハイ、アノ、お前のお內へかえ。

小女　アノ、裏口が庭續き、座敷の方から、御遠慮なしに。

玉新　併し、お長家も廻らぬうち、もうしけ込むかと思はれても、どうやら。
小女　ハテ、大事でござんせぬ。もう斯うして居る身の上では、よう何の角のと、云はるゝものぢやわいな。ハテ心さへ淸ければ、なんのマア。
　ト新兵衞が懷中へ思ひ入れあつて
サア、大事ないわいなア。
玉新　そんなら矢ッ張り、お心安く。
さく　アノ、小女郎さんの所へ。
小女　おさくさんもお出で。また內で、呑まうぢやないかいな。
さく　そんな事も、ようござんせう。
喜助　こいつはちよつぴり付け込まうわえ、
さん　如才のない人だよ。ホヽヽヽ。
玉新　ドレ、わしも買ひ物をして、また後に。
小女　必らずお出でえ。
　ト手を取りさうにして懷中へ心意氣。
玉新　ハテ、馴れ〳〵しい、小女郎さんの樣子。
　ト思ひ入れあつて
それに、今の書いた物も。

小女　エ。
　ト思ひ入れ。
さく　ほんに何やらヅッとして。
　ト思ひ入れ．小女郎、ぎつくり。
小女　オヽ、寒。醉醒めぢやさうな。
　ト唄になり、小女郎、おさく、おさん、喜助、下の方。新兵衞は上の方へ入ろ。テンツヽになり、向うより寒仲、前幕の醫者。出村新兵衞、纏天の上へ帶を締め、辻番鍋、釜、を擔げ、植木と木鋏を持ち、出て來たり、直に舞臺へ來たり
寒仲　オヽ、師匠さんにお家主も、よく內にござりました。昨日は、お目にかゝりました。
吟光　イヤ、昨日の云ひ傳を聞いたから、それで今、行かうと思ふところサ。
寒仲　イや、この方も、アレ、あの人が、急に引ッ越したいと云はれるので、直ぐに同道しました。
吟光　もう引ッ越してござつたのかえ。性急な。
出新　わしは、性急でございますから、店を明けて、この通り、直ぐに引ッ越して來ました。
　ト思ひ入れあつて
吟光　そんなら、何かの話しは、寒仲さんにお聞きであら

うな。
出新　そりやア、承知で、造作の金も、渡して置きました。
吟光　よし〳〵。時に、これが今のお家主、引ッ越しなら、樽代も持つてござりましたか。
寒仲　それも、合點ぢやて。
出新　どうぞ、その內を見たうござります。さうして、壁隣りに、例の先生が居ましたの。
寒仲　居るとも〳〵。モシ、師匠さん、彼の圍ひ者は、內に居るかえ。
吟光　丁度今、歸つたところだ。
寒仲　貴樣の內から、あの圍ひ者の內は、裏同士で、覗けばつい見える。ア、、美しいな。
出新　なんでも、早いがよいぞや。
寒仲　オ、、合點ぢや〳〵。
ト上の方へ來て
サア〳〵新兵衞どの、爰の內ぢや。早う入らつしやれ。
出新　ハイ〳〵、御免なされませ。
ト上の方の家を見て
造作付きの五兩は、これかいの。

寒仲　なんと、好い家であらうがの。
出新　附け物と云うては、さしたる道具もなし、これが五兩では。
寒仲　サア〳〵、高いやうだが、安いところもある。獨り住みには、持つて來いぢや。
吟光　先づ第一、井戸は長屋內にあり、掃溜は近し、長家の付合ひは煩くなし。先づ、この壁の破れが、五兩がものはある。
出新　ナニ、この壁の破れが、五兩とは。
吟光　コレ、斯う爰から。
ト覗いて見せて
今日のやうな日などは、蒲團をかぶりながら、寢轉んで雪を眺めながら、覗いて見たところは、ほんに千兩が物はある。
出新　ドレ、そんなら、わしにも見せて下されませ。
ト出村を覗かせ、扇を持つて
寒仲　さて、最初、取り立て御覽に入れまするが、孔雀長家裏のかゝり。金の間に、銀の間、麒麟、鳳凰の間はなけれど、ソレ、炬燵にあたり居りまするが、杜若に似たる圍ひ者の、側に年增の縫ひ仕事は、お針のおさくと申

しまして、夜は内へ歸る。跡は、あの先生たゞ一枚。いろいろお目に掛りますれば、これが直ぐに夜分の體。

出新　こいつは妙だ。

寒仲　オツと、先様は、替り〳〵。

ト出村を此方へ連れて來り

なんと、どうでござります。

出新　イヤモウ、こいつは早く長家を廻つて、寢る事にしたい。

吟光　家移り粥でも、炊いての事がよからう。

出新　ほんに、田中に蒲團を預けて來た。ちやつと取つて來やう。

孫左　そんならわしも、長家を敎へがてら、連れ立ちませうか。

出新　先づ、この鍋釜も、植木も、爰に斯うして。

トよき所へ置き

ドレ、一走り行つて來ようか。

ト唄になり、出村、孫左衛門、寒仲、吟光、上の方へ入る。ト新兵衛、出て來り

玉新　ハ、ア、あの圍ひ者は、美しい代物だ。それに、今ちやつと來た年増も、まんざらでもない代物。こいつは、おつな長家へ引ッ越して來たわえ。

ト思ひ入れ。出村が殘して行きし木鋏を見て

こりやア、なんだ、木鋏が爰に。

ト柄の燒印を見て

出村と云ふ燒き印……ムウ、この出村と云ふは、慥か。ハテ、變つた物が、爰にあるわえ。

トてんつゝになり、向うより文藤次、前幕の形にて、狀箱を持ち、出て來り

文藤　ちつと物が尋ねたい。新兵衛と云ふ人が、今日爰へ引ッ越してはござらなんだか。

玉新　ヘイ、新兵衛は私しでござります。どちらから、お出でなされました。

文藤　イヤ、身共は、京都宇治の領

ト云ひさうにして

イヤ〳〵。して、おてまへは、いよ〳〵新兵衛か。

玉新　左やうでござります。見れば旅のお侍ひ様、京都からとあれば、もしや。

ト思ひ入れ

文藤　商賣は庭作りで、出村新兵衛と云ひめさるか。

玉新　左やうなら、お前様は、その出村新兵衛を。

文藏　すりや、おてまへは、出村ではないか。
玉新　イエ、成る程、庭作りが商賣。
ト今の木鋏を出し
御覽じませ、商賣道具の記しに燒き印。
ト文藏次、見て
文藏　ムウ、出村としつかりあるからは。
ト狀筥を出し
兼ねて、宇治の頼長どのより、貴殿へ送り越さるゝ千兩の手形。當地の掛け屋にて、これを持つて受取り召されとある事。委細は、書狀に記しござれば、とくと披見召された上。
玉新　成る程〳〵、その儀は、兼ねて通達ござれば、慥かに落手。お返事は、追つて此方より。
文藏　まだ、申し入るゝ事もござれば、何卒馬道まで、身共と一緒に。
玉新　御同道申しませう。
ト唄になり、新兵衞、文藏次、向うへ入る。この時、手形を懷中へ入れ、狀は舞臺へ落して行く。上の方より出村、蒲團をかたげ、出て來て
出新　ヤレ〳〵、止め度なしに降る雪だ。先づ、蒲團を持つて來たから大丈夫。
ト蕎麥の荷を見て
なんだ、玉屋と書いた、蕎麥屋の荷がある。狹い所へ、こんなもの。
ト新兵衞が落せし狀を拾ひ
出村新兵衞へ、京都より。こりやア、覺えのある狀。
ト見て
ムウ、千兩の手形、着爲へやるとある狀ばかり、爰に落してあると云ひ、この蕎麥屋の荷……ムウ。
ト思ひ入れ。唄になり、向うより正作、前幕の形、坊主合羽にて、狀筥を持ち、出て來て
正作　ちと物を尋ねたい、新兵衞どのと申す人が、この所へ引ツ越しては。
出新　アイ、新兵衞は、私しでござります。
正作　すりや、おてまへが、玉屋の新兵衞どのでござるか。
出新　イヤ、私しは……ヘイ、玉屋の新兵兵でござります。
正作　して、その玉屋新兵衞と申すれば、何ぞ證據が。
出新　オヽ、玉屋新兵衞と云ふは。

ト蕎麥の荷を見て

正作　イヤ、卽ち、アレ、あの玉屋と申すが、私しが家名。イカサマ、夜商人とは、兼ねて承はる。然らば、この書狀……井出の左大臣どのより、執成しを以て、勅勘御免を願はれよとある、內意の書狀、イザ。

ト渡し

まだ外に、道中船路、關所の鑑札、これも、貴殿へ。

ト渡す。出村、取つて

出新　慥かに、落手いたしました。

正作　然らば、まだ外に、用向きもあれば。

出新　お返事は、後程これまで。

正作　書狀は、しかとお渡し申してござるぞ。

ト唄になり、正作、上の方へ入る。出村、二品を見て

ムウ、實名はなけれど、左大臣よりこの書狀。こりや好い物が、手に入つた……イヤ〳〵、おれが所へ來た狀が爰に落ちてあるからは、何でもおれが名を騙り、手形を取つた奴がなけりやならぬ。斯うしては居られぬ。なんでも。

ト右の鑑札を懷中へ入れる。この時、今の正作の持つて來た狀を落し、これに心付かず

心當りは、慥かに。

ト時の鐘になり、向うへかゝる。ト向うより新兵衞、狀を尋ぬる心にて、出る。出村とよき所にて摺れ違ひ、本舞臺へ來て、新兵衞、出村が落せし正作が狀を拾ひ、嬉しやと云ふ心にて、開き、文言、違ひあるゆゑ、思ひ入れ、この時、出村もヅッと花道にて今の狀を落したと心付き、いろ〳〵あつて、そこらを探しながら、戾つて來る。新兵衞、矢張りそこらを尋ね步き、兩人舞臺にて頭を當て

二人　アイタ、、、、。

ト兩人、顏見合せ

出新　貴樣は、誰れだ。

玉新　おりや今日、爰へ引ッ越して來た者だ。

出新　おれも、引ッ越して來た者だ。

玉新　そんなら、アノ、お主もか。

出新　さうして、貴樣の名は、なんと云ふ。

玉新　わしや新兵衞と云ひます。さうして、こなたの名は。

出新　おれも、新兵衞と云ふワ。

玉新　おれも、新兵衞と云ふワ。

出新　アノ、新兵衞。
玉新　ハテ
二人　新兵衞ぢやよなア。
出新　その新兵衞が又、なんでおれが内へ。
玉新　ハテ、おれが内も凄まじい。
出新　ハテ、いま越して來たから、おれが内だわい。
玉新　とんだ事を云ふ。この間から、付け込んで置いた棧敷だ。後から來て、さうはならねえ。
出新　イヤ〱、おれが頼んで、喰ひ物まで誂らへたこの棧敷、実は、おれが借り切りだ。引舟へでも、行つて見たがよい。
玉新　そんなら、茶屋は、どこだ。
出新　ハテ、わたつた棧敷に、いさもくさもあるものか。
玉新　なんだ、途方もない。おれが棧敷だ。
　トこの時、立ちかゝるを、吟光、出て
吟光　コレサ〱、二人とも、どうしたのだ。待たつしやい待たつしやい。
　ト留めるを、出村、吟光を見て
出新　オイ、師匠さん、コレあの内は、おれが金を出して、借りた内を、あの男が、おれが内だと云ふからの事だ。
吟光　人が何と云はうとも、ハテ、ようごぜえやす。
　ト新兵衞、吟光を下へ連れて來て
玉新　おれが五兩で約束して、四兩二分に負けてもらつて、おれが買つた内だから、おれが内だ。それに、なぜ、あの男が。
吟光　ハテ、ようごぜえやす。
　トこれにて兩人、腹立ち師匠を踏みにじる。これにて師匠は丸裸になり、そこへ倒れる。兩人、爭ひながら
二人　おれが内だ〱〱〱。おれが家だ。
　ト出村は上、新兵衞が下、兩人、胡坐を掻き、よろしく見得。唄になり、一面に障子をさす。ト下座より孫左衞門、出て來り、吟光が着類を丸め、持つて行かうとするを、吟光、見て
吟光　ア、大家さん、こりやアどうするのだ。
孫左　どうと云つたら、こなたは店を明けて、越すぢやないか。おれが店賃の貸しがあるぜ。これぢやア、足りない。もつと寄越さつしやい〱。
　ト兩人、捨ぜりふにて、せり合ひ、吟光、手早く縫ひ物の白襦袢を着て、頭へ手拭をかぶる。この時、おさん、子供二人、出て來たり

さん　コレ〳〵師匠さん、わたしが襦袢を。
孫左　店賃の勘定もある、待たつしやい。
皆々　待たつしやい〳〵。
　ト吟光、構はず花道へ行く。皆々、附いて
待たつしやい。待たつしよ〳〵。
　ト風鈴を振り、吟光、皆々早足に向うへ入る。ト直ぐに下座より文藤次、出て來り、あたりを窺ひ、小石を取つて下座の方へ礫を打つ。トかすめし通り神樂になり、下座より喜助、出て來たり
喜助　文藤次どの。
文藤　那藏どの。
　ト兩人、立寄り
兼ねて賴長公の御謀叛に荷擔の貴殿。して、那須野に埋め置かれたる、彼の一品は、取り得めされたか。
喜助　さればでござる。仰せを請けて彼の一品、取り得んとなせしところ、皆暮れ以て行くへなし。それゆゑ諸人を探らん爲、廓へ入込み、詮議いたせど、今に於て、その行くへ。
文藤　ハテ、何者の仕業でござらう。
喜助　サア、それについて、この家の小女郎、合點行かずと存ずるゆゑ、何かにかこつけ、この所へ。
文藤　然らば貴殿は、窃かに忍び、小女郎が實名を。
喜助　心得申した。
文藤　忍び召されい。
　ト喜助、うなづいて、下の方へ入る。ト奥にて、人音するゆゑ、文藤次、小蔭に窺ふ。ト矢張り通り神樂にて下座より新兵衞、出て來たり
玉新　あの新兵衞は、庭作りの出村新兵衞。おれが名と取違へた、最前のこの手形。
　トちやつと出して
その時、思はず落した一通、尋ぬる道で、また拾つたこの狀。こりや、あの新兵衞は、この新兵衞が、一番、詮議ものだわえ。
　トこの時、文藤次、出て
小藤　そんなら、われは玉屋新兵衞、それでは違つた。その密書。
　ト取りにかゝるを、ちよつと立廻りのうち、正作、出て來り
正作　すりや、貴殿が玉屋新兵衞どのとな。さうとは存ぜず、誤まつて大切なるあのこの狀。イデ、踏ん込んで。

玉新　アイヤ、その手紙は、我が手に入つた。先づそれよりは、千兩のこの手形、僅かながらも軍用金、蛭が小島の賴朝どのへ。

ト手形を渡す。

正作　然らば拙者は、直さまこれより。

文藤　それを、やつては。

ト行かうとするを、新兵衞、捕へて思ひ入れ。此うち正作は花道へかゝる。

玉新　構はずと、ござれ。

正作　ハツ……さうぢや。

ト時の鐘になり、正作、向うへ入る。

文藤　この上は、新兵衞、覺悟。

ト拔いて行くを、立廻つて、文藤次を見事に切り倒し、死骸を井戸へ投り込み、あたり、見まはし

玉新　ドリヤ、茶振舞ひの、支度でもしようか。

ト思ひ入れ。時の鐘、流行り唄になり、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、丸柱の屋體、風流に仕立て、舞臺、下の方へ雪見形の燈籠、振りよき松。いつも所所に栗丸太の門口。上の方へ少し黒塀、一面に雪を積らせ、すべて、これまでの道具、奥長屋、寮の體。爰に小女郞、しかみ火鉢の火いぢりしながら、寒仲に按摩を取らせ、火鉢のこなたにおさく、萌黃に杜若の裾模樣ある小袖をひろちやくして居る。よき所に絹の蒲團を掛けし炬燵、丸行燈、直しあり。唄、太神樂、かすめし時の鐘にて道具納まる。雪、降つて居る。

さく　寒仲さんは、お醫者さんばかりぢやと思うたら、隱し藝があるね。

寒仲　サア、心安い小女郞さんの事ゆゑ、止む事を得ず、斯くの仕合せ。必らずとも世間へは、沙汰なしにお賴み申すぞや。

さく　なんのマア、役にも立たぬ……さうして、モシ、あれを縫ひ直すのでござりますか。

小女　イエ／＼、あんまり模樣が、派手々々しいゆゑ、いつそ搔卷にしようと思うて、それをお前に相談ぢやわいな。

さく　そりやモウ、よいはよいけれど、あんまり、あつたらものゝやうな。

寒仲　さうサ。なんと、こいつを黑に色揚げしたら、どうでござります。

小女　お前、これでさへ派手な物を、どうしてそれが。モシおさくさん、どうぞ、そんならお前のお間に。

さく　お前のお氣に入るやうに、出來ればよいが。

小女　又おさくさんの、あんな事を。

寒仲　云ふもんの上下とは、如何ぢやな。

ト云ひながら、肩越しに鳩尾の所を探る。

小女　ソレ、そこの所が、どうも。

寒仲　サヽ、兎角に婦人は、この積めが業をなしますて。

さく　モシ、わたしなども、どうも弱つてなりませぬが、なんと寒仲さん、よい灸はあるまいかいな。

寒仲　あるとも〳〵、小女郎さんも、大氣になつたら、灸をばなさるがよいて。醫者が灸を進めるは、商賣の表徴おやが、炎ほどのものは……ござらぬてサ。

ト云ひながら、帶の下へ手をやるゆゑ、小女郎、驚き、手を突き退けて、飛び退く。これにて寒仲、前へ轉ぶ。おさく、思ひ入れ。

小女　寒仲さん、何をお前。

寒仲　サア、こりや……積を臍下へ納めうと思ひまして。

ト手を痛めし思ひ入れ。此うち始終、流行り唄に神樂にて、下座より新兵衞、膳に夜鷹蕎麥を二つ載せ、持つて出て來り

玉新　御免なされませ。先程お目にかゝりました、新兵衞でござりまする。

ト小女郎、見て

小女　オヽ、ようお出でなされました。サア〳〵、此方へ。

玉新　ハイ〳〵……これは、あまり商賣物で、おかしうござりますが、引ッ越しました印でござりまする。

ト蕎麥を出す。

小女　これはマア、お使ひがらと申し、お丁寧に、おめでたうござります。

ト膳を取る。

玉新　アヽモシ……一つは、お隣りの引ッ越しでござります。

小女　ハイ〳〵。

さく　モシ、マア、ちつとお上がりなされませ。

玉新　ハイ〳〵、これは、どなたかと思ひましたら、お前はお留守ゆゑ、まだ上げずに置きました。なんなら後

方、寢しなに、熱くして上げます。
さく　それは、有り難うござります。
寒仲　新兵衛どの、太郎南蠻はござらぬか。
玉新　オ、寒仲さん、お前も爰か。エヽ、そんならいつそ、荷を擔いで來ればよかつた
ト思ひ入れ。小女郎、煙草盆、火鉢を引寄せ
小女　サア、一服、お上がりなされませ。
玉新　お構ひなされますな／＼。
ト思ひ入れ。矢張り右の鳴り物にて、下座より出村、傘を提げて、出て來り
出新　お免しなされませ。ちやつと改めて。オヽ、お隣りの、お早うござりました。
玉新　モシ、御祝儀の蕎麥は、お長家殘らず配りました。
出新　それは、お世話でござりました。
小女　只今は、お祝ひなされて下さりまして。
さく　わたしも、それで。
小女　おめでたうござります。
出新　ハイ／＼、お心安うお頼み申します。引ツ越しのせりふも、極つたものだ。
寒仲　引ツ越しの蕎麥も、極つたものだが、伸びやうかと思つて、愚老、甚だ心配するが、丁度、今夜は冬至なり幸ひめでたく小女郎さん、賞玩しては、どうであらうな。
小女　ほんに、冬至蕎麥ぢやが、わたしはモウ。お前、上がるなら御遠慮なう。
寒仲　然らば、これをお肴にして、奥で一杯やりま針と致さうか。
小女　そんなら次手にお二人へ、煮花なとして。
玉出　ア、モシ、それぢや。
さく　なんの、遠慮なさるやうな、内方ぢやないわいな……ほんに、わたしとした事が、こんな事云ふ隙に、ドレ内へ行て、夜なべでも。
寒仲　然らば、我れらは、次手に煮花を。
小女　おさくさん、ようお出でたえ。
さく　ハイ、どなたも、お話しなされませ。
ト流行り唄になり、おさくは向う、寒仲は奥へ入る。あと誂らへの浮いた合ひ方になり、小女郎、庭を詠めて
小女　なんとマア、きつう冷えるぢやござんせぬか。
ト火鉢の側へ寄る。

玉新　イエモウ、冷えるのなんのと。併し雪と云ふやつは、惡くないものさね。

出新　これを惡いと云ふ奴は、あんまりな無風流。イヤ無風流と云へば、モシ、わたしは出村新兵衞と云つて、庭作りが商賣。なんぞ又、御用があるなら、お頼み申しますぞえ。

小女　そりや御近所の事、此方から、お頼み申しますわいな。

ト思ひ入れ。

出新　豪勢お前さん、世辭がよいね。

小女　イエ、世辭ぢやござんせぬ。ほんの事いな

ト思ひ入れ。此うち新兵衞、煙草のみながら、これを見て居て

玉新　エヽ、商賣々々と、味な所から手を入れて、得意旦那をすつぱりと、有り難く引請けたな。

出新　さう云ふ、こんたも、取入る心であらうがの。

玉新　例へば心にあつたとて、夜鷹蕎麥屋の玉屋新兵衞、なんの御用があるもので。

小女　モシ、そりや、さうも云はれまいぞえ。ハテ、なんぞ頼みたい御用も、あらうぢやござんすまいか。

ト思ひ入れ。

玉新　ヘエ、そんなら、わしが、なんなりと、頼まれる氣があるならば

小女　頼んで見たい用もあり。

ト思ひ入れ。

玉新　こいつはどうやら、まんざらでも……併し、彼方も此方もと、合せ鏡で氣が多い。

出新　それ／＼、心の移る旦那場なら、なまじな仕事をしやうより

玉新　さんめうさがしと、てつぺんから

出新　斷わり云つて

玉新　しまふのが

出新　却つてましで

兩人　ござんせうかえ。

ト思ひ入れ

小女　イヽエ、眞實。

兩人　でも二人に。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

小女　サア、先刻にお目にかゝつた時、話し合うても見たならば、嫁もしさうなと思うたも、誰れと主なき獨り身

の、心細さに此方から、女房になりと、色なりと、頼む
も誠の心を、とつくりと見た上ならば、どちらでも、帯
解くお方は只一人。

兩人　ムウ。

　ト思ひ入れあつて

玉新　イカサマ、今のを聞いて見りや。

出新　マア、まんざらでもないやうだが。

玉新　併し、惚れた女にかゝつちやア

出新　いとはぬ心サ。

　ト思ひ入れ。小女郎、これを聞き、思ひ入れあつて

小女　もうそれ程に、思うて下さんすりや、女子の身で
は、大抵や……併し、さうお前方が、同じやうな心では、
兩の手に何とやらで、どちらへどうとも、返事に。

　ト困つたる思ひ入れ。新兵衞、思ひ入れあつて

玉新　イカサマ、こいつは、さうでもあらうが、おれが方
へ札が落ちたら、あつちで料簡しまいし。

出新　此方へ本鬮を引いたらば、あつちで四の五の吐かさ
うし。

　ト出村も思ひ入れ。小女郎、煙管を杖にしながら

小女　ほんに、どうしたものであらうしらん。

　ト思ひ入れ。

玉新　なんと新兵衞どの、こなさんとわしと、お互ひに力
味ばかり云ひ合つて居ても、いつまでも果てしがない。

出新　そんなものサ。

玉新　實は、一つ、相談ものだが、なんと二人で、女房に
持つたなら、互ひに意趣遺恨も、ありさうもないものぢ
やないのかえ。

出新　ハテ、互ひに女房に持ちさへすりや、なに云ひ分が
あるもので。さうして、こなさん、その持ちやうは、ど
うする積りだ。

玉新　サア、そこで相談、月替りか、一日替りに。

出新　成る程、こいつも面白い。そんならなんと、一時替
りにしちやどうであらう。

玉新　そりやアわしや、承知だが、肝心の……カウ、小女
郎さん、今お前、聞く通りだが、こりやア、どうだえ。

小女　サア、あのやうに深切に云うて下さんす、お前方の
事ぢやに依つて、わたしや挨拶に困つて居る所ゆゑ、そ
れでお二人さへ得心なら、わたしが方は、どうなりと。

兩人　サア、それで極まつたと云ふものだ。

玉新　サア／＼、そんなら、夜の更けぬうち、其方から、

寢かけるがよい。
ト此うち暖簾口より寒仲、出かゝり、これを聞いて居る。
出新　さう云はれちやアどうも……マア、お前から、お休みなされまし。
玉新　湯の辭儀は水とやらで、こんな事を云つて居るうち、めりが立つ。そんならモウ、五つに程もあるまい。それともわしが、抱いて寢ようか。
出新　それがよいのサ。
玉新　そんなら、お床としやせう。
ト新兵衞、出村、手傳ひ、押入れの夜具を出す。此うち寒仲、いろ〳〵腹の立つ思ひ入れあつて入る。三人床を敷いて
小女　マア〳〵、お前方、相談づくで、さう解けて下さんすりや、わたしも大抵や大方、嬉しい事ぢやござんせぬ。併し、なんと云つても、斯う明けばなしで、お二人と新枕も、おかしなもの。
玉新　オツとそこらは、安見世氣取りで、割り床にして。
ト有り合ふ屏風を仕切りに立てる。小女郎、新兵衞、入る。

サアそんなら、隣りの御亭主、お辭儀なしに、先へ寢ますよ。
出新　勿論サ。
ト一人、寢腹違ひ
ドレ、隣りの吐かし事を、聞いてやるべい。
玉新　なんとマア、世の中に、緣と云ふものは、おつなものぢやないかえ。どこの者やら知らぬ者が、斯うして二人、寢ると云ふは。
小女　サア、夫婦の事は神樣達が、出雲の大社で、結ばしやんすと云ふ事ぢやが、ありやマア、ほんまであらうかいな。
玉新　何違ひがあるものか。あれにはこれ、これにはあれと。併し、おいらを見るやうに、一人二人、くツついたりするを見りや、神樣の知つた事でもあんまりか。
小女　なんの、こりや神樣の、忙し紛れに、取違へたであらうわいな。
兩人　ハヽヽヽヽ。
ト寢ようとする。此うち、向うより番人、五ツを打つて出て來る。舞臺まで來て、向うへ引返す。出村、これを聞いて

出新　サア〳〵、五ッだ〳〵〳〵〳〵〳〵。
　ト屏風を叩く。新兵衞、これにて是非なく。
玉新　エヽ、もうちつと、コレ……約束だ。サア、行かつしつたり〳〵。
小女　どうやら、おかしいものぢやわいな。
　ト云ひながら、出村が方へ來る。此うち寒仲、下の方より出て、番人の後を追うて、花道の末まで行き、何か騷き、拍子木を借り、手拭を冠り、舞臺へ來り、門口に窺ふ。番人は向うへ入る。新兵衞、寢腹這ひ
玉新　これから、あちらの睦言を聞いてやるべい
　ト煙草、吸ひつける。
出新　カウ、なんと、詰らないものぢやないか。初手はおれにおつりきな事を云つてからに、又あの新兵衞にも口をかけて、揚句の事が二人組。
小女　サア、これもみんな緣づくであらう程に、マア、不承して下さんせいな。
出新　なんの事はない、女房を一本、三枚に下ろして、片身買つたやうなものだ。併し、骨附きは、おれが方だぞえ。
小女　知れた事いな。
　トこの時、寒仲、四ッを打つて廻る。新兵衞、聞きつけて
玉新　コレ、四ッだ〳〵〳〵〳〵。
　ト屏風を叩く。
出新　なんだ、四ッだ。
　ト膽を潰す。
小女　あちらへ行かずばないまいわいな。
　ト新兵衞が方へ來る。寒仲は花道まで打つて行き、取つて返し、門口に窺ふ。
出新　マア、どう云ふもんだらう。五ッを打つて、小女郎が來たワ。二口三口話しをすると、直ぐに四ッをカッチカッチ。あの番太め、大方、寢とぼけてゝも、居るだらう。よい〳〵、明日、大家へ斷わつて、あの番太め、梵天國を喰はしてやるべい。はッつけ番太め。
　ト屏風へ思ひ入れ
玉新　エヽ、そウ、隣りの御亭主と、すつぱり話し合つて、剛氣に、うまく喰はせたやら。コレ、脊中も、どこも、大汗になつて來たな。
　ト懷中へ手を入れ、いろ〳〵ある。小女郎、思ひ入れあつて

小女　アレ、こそぐつたいわいな。エヽ、惡いてんがうばつかり。さうして、なんの、そんな眞似する間があらうぞいな。大概積りにも。
玉新　成る程、さう云へば、それ程な間はなかつたが。でも、四ツは打つたぞえ。
小女　サア、四ツを打つたゆゑ、わたしや其まゝ。
玉新　そんなら、此方は一寢入り。
　ト夜着を引ツかようとする。この時、寒仲、九ツを打ちかけ、舞臺より花道へ行く。出村、嬉しく、これを聞く。
出新　ソリヤ、九ツだ〳〵〳〵〳〵。
　ト屛風を叩く。
玉新　ナニ、九ツだ。
　ト兩人、起き上がり
なんだか、夏の夜よりは短かいやうだ。
小女　どうしてマア此やうに、冬の夜は短かいぞいな。
出新　どうでも斯うでも、九ツだ。早く來ないか。早く來ないか。
玉新　仕方がない。サア〳〵、行くがよい。
小女　ほんに、ひよんな切り凶で、あつちへ行つたり此方へ來たり、マア、今年のやうな、忙しい顏見世はないわいな。
　ト云ひながら、出村が方へ來る。寒仲は又、門口に窺ふ。
出新　コレ、何をそんなに小言を云ふのだ。
小女　イエ、小言ぢやないが、好いた男を一時に、亭主に持つ事ぢやもの。いつそ、嬉しうて〳〵。
出新　エヽ、無性に嬉しがらせる奴サ。シタガ、隣りの新兵衞と、こつてりした話し合ひを、聞いたぞえ〳〵。
小女　イエ、なんにも聞かれて惡い事は。
出新　カヤ、そんなら鷄山鳥。マア、此方へ寄つて。
　ト手を取つて引寄せる。この時、寒仲、八ツを打ちかける。
玉新　八ツだ〳〵〳〵〳〵。
　ト屛風を叩く。
出新　エ。
　ト思ひ入れ。
小女　こりやモウ、大儀な事ぢやわいな。
　トこちらへ來る。出村、思ひ入れ。
出新　滅法かいに早い時だ。

玉新　時にマア、何も角も、打ッちやつて置いて、寢る事の話しがよからう。
小女　サア、わたしもこれでは續かぬゆゑ、ちつとなと寢にやならぬわいな。
ト兩人、寢ようとする。寒仲、また七ッを打ちかける。
出新　ソリヤ、七つだ〳〵。
小女　こりやモウ、どうもならぬわいな。
ト此方へ來る。新兵衞、思ひ入れ。これまでのうち、仕組みよろしくあるべし。
玉新　たつた今、七ッを打つたに
出新　直ぐに六つとは。
小女　ほんに今夜は、どうしてマア。
出玉　氣紛れ番太め、引ッ捕へて。
ト云ひながら、出村は門口、新兵衞は外へ駈け出す。寒仲はこれを知らず、拍子木を打ち歩いて居るを、引ッ捕へ
玉新　うぬだな。
ト捕へて來り、寒仲を殴り倒す。小女郎、奥へ行かうとするを、兩人、止めて

兩人　此まゝ、お主は。
玉新　マア〳〵此方へ。
出新　イゝヤ、此方へ。
ト兩方より引ッ張るうち、出村、懷中より序幕の鏡を落す。小女郎、これをちやつと取上げ見て、驚ろく。薄ドロ〳〵にて、立つてある屏風へ消える。九尾の狐の影、屏風へ現れる。兩人、これを知らず。寒仲を小女郎と思ひ、あちこち引ッ張り、心付き、見て、寒仲を下の方へ投げる。寒仲、脾腹を打ちし思ひ入れにて其まゝウンと倒れる。出村、九尾の狐の影に心付き、思ひ入れあつて
ト新兵衞、鏡を見て
ヤ、小女郎がこの有樣。
玉新　こりやコレ御鏡。
ト出村、手早く取つて懷中する。また、薄ドロ〳〵にて、小女郎、ちやつと現はれる。兩人、見て、思ひ入れあつて
兩人　矢ッ張り小女郎。
小女　新兵衞さん。
ト双方へ思ひ入れ。

兩人　ハテナア。
　ト思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり
小女　お前方もマア、あのやうに、人を嬉しがらせて。サ
　ア一つ、呑ましやんせぬか。
兩人　こりや、よからう〳〵。
　ト燗鍋を火鉢へ掛け、杯を出す。
小女　サア、もう燗も、ようござんせう。ドレ、マア、わ
　たしが一つ、呑んで。
　ト手酌に注がうとする。出村、見て
出村　オツと、手酌とはどうだ。ドレ〳〵。
　ト燗鍋を取り、注いでやる。
小女　こりや、憚りで。
出村　エヽ、おつう云ふものだの。
　ト小女郎、呑んで、新兵衞へさす。
小女　サア新兵衞さん、上げたぞえ。
　ト新兵衞、思ひ入れあつて
玉新　イカサマ、二才子供を見るやうに、野暮にひぞる事
　もない。そんなら一杯、寒さ凌ぎに。
　ト一つ、受けろ。
小女　お前、寒くば、これなりと、引ツかけてごんせい
　な。
　ト最前、おさくが疊んで置きし、小袖を廣げる。
玉新　イエ〳〵、それにやア及ばないのサ。
出新　新兵衞さん、剛勢もてるの。
玉新　そりやア、ちつと、違ふのサ。
出新　直に自惚れを吐かしやがる。
玉新　サア、新兵衞さんへ。
　トさす。
出新　忌々しいが、呑んでやるべい。
　トこれより、よろしく酒盛りあつて、新兵衞、小女郎
　に目を付け
玉新　最前といひ、今と云ひ。
出新　二人を二人、小女郎が。
小女　エ。
　ト思ひ入れ。
出玉　サ、どうも、怪しい。
　トきつと思ひ入れ。
小女　何がいなア。
　ト思ひ入れ。合ひ方變る。新兵衞、氣を替へ
玉新　サア……怪しい事は都にて、合點ゆかぬは先つ頃、

時にもあらぬ稲妻の、はためく後の雨あがり、月になまめく女が態。

出新　それと、柳の姿には、似ても似付かぬ衣手に、携へ持ちし油壺、笠も異なる出立ちに

小女　御燈間近く後より、女子の腰を無遠慮な。

玉新　つい徒らに抱きとめて、心を引いて御注連繩。

小女　そこらは手強く振り切つて、行く先とてもまた男。

玉新　其まゝ空しく、どこへやら

出新　逃げたは色めと忍んだが

小女　東雲早く夜も明けて

玉新　朝日まばゆき紅葉が下。

出新　どこの誰れやら知らぬ同士。

小女　知らぬ旅路の、氣散じに

玉新　思ひ〳〵の

ト小女郎の手を取る。

出新　ざれ言を。

ト同じく手を取る。

小女　そんなら、祇園の

三人　下河原で。

ト三人、だんまりの通りのやうなる、小短き立廻りに、

燗鍋を打ち返す。

玉新　南無三、酒を。

出新　おへない事をしてしまつた。

ト思ひ入れ。かすめて時の鐘。

小女　酒がないと思へば、一杯……オ、寒。

ト炬燵を掻き散らし、グツと入る。

出新　サア、お前方も、あたらしやんせぬか。

出新　當れとは、延喜がよいね。

玉新　あたりやせう〳〵。

ト三人、炬燵へ入る

ア、その口鋒で、これまで多くの人を、痴話や手管で殺し文句の濶來節。そんなら、この炬燵は。

出新　取りも直さず

玉新　ト今の小袖を炬燵へ掛ける。ト裾の杜若、竹矢來と見えて、殺生石の見立て。出村は手早く、有り合ふ三味線へ殺生石と書き、煙草盆の手へ結び附ける。兩人、途端よろしく

兩人　殺生石。

トこれにて小女郎、ギックリ思ひ入れあつて、炬燵を飛び越え、兩人、よろしく、三人、キッと見得。誂ら

ヘ、三味線入り、大小の合ひ方になる。

玉新　既に去んぬる保安の頃、鳥羽の院の御宇に當つて、玉藻の前と召されたる、金毛九尾の妖狐あり。

出新　折から帝の御惱こそ、これなる玉藻が所爲なりと、阿部の泰成調伏の、祈りに堪へず飛び去つて

小女　この吾妻路の下野なる、那須野が原の、草隱れ。

ト此うち喜助、四天の形にて、窺ひ居て、この時

喜助　怪しい女め。

トかゝるを、小女郎、立廻つて、しやんと留まる。

玉新　その後下る勅使樣、揃つて三浦に

出新　上總の兩介が、士卒の數萬に

小女　野を圍め。

玉新　遂に命を

出新　那須野が原に

小女　消えても、殘る

三人　殺生石。

玉新　今に執心とゞまつて、鳥獸あたりに近付けば、忽ち命を落すと聞く。

出新　それかあらぬか、この女、心を付けて窺ふところ

玉新　怪しき女め。正體を

出新　サア、キリ／＼と

兩人　現はすまいか。

トきつと思ひ入れ。小女郎、思ひ入れあつて

小女　今は何をか包むべき、殺生石に名を留めし

ト喜助かゝるを、ちよつと立廻つて

玉藻が靈にて候ふぞや。

ト立廻りにて、引抜き、玉の肌脱ぎになる。薄ドロドロ、雷作。新兵衛、出村、こなしあつて

兩人　さてこそな。

ト思ひ入れ。兩人、錦の肌脱ぎになる。

小女　その上、源翁の教化にて、解脱なせしを、有り難や

ト立廻り

保義公の家臣にて、那須明神と云はるゝ身の、何とて仇をなすべきぞ。

ト立廻りあつて

情なや、宇治頼長公、保元の亂れに新院のこの御旗。

ト錦の旗を出し、喜助、かゝるを、見事に投げ退け

人の恐れを嫌ひと、殺生石のその下へ、密かに埋め置きしかば、近寄る鳥獸、御旗に恐れ、忽ち命を落すゆゑ、殺生石の名は遁がれず

ト また立廻つて

この事嫌かん鐺にこそ、神祇官へと都の空、はる〴〵至る道もせにて。

喜助　なにを。

トかゝるを、よろしく立廻つて

小女　雷火と共に恩義ある、忠盛公の御病難、義平と祀せし髑髏。

トまた立廻りあつて

コレ、浅ましやと取上ぐるを、思へば怪しと義平公の、さゝへに其まゝ立退く折、詛まつて名玉を取落そしゆゑ、無官となり、神祇官へも叶はねば、御勘気げんやうもなく、何卒名玉詣にらば、御家へ身寄りは義平どのへ饒の御敷、渡らん

ト喜助を投げ退け、新兵衛へ渡す。

髑髏も共に。

ト喜助、上の石燈籠の下より髑髏を出し、壁厘引きのやうになり、新兵衛へ渡す。新兵衛、取上げ、喜助を投げ退け

玉新　イカサマ、聞けば、理りなる小女郎が詞。如何にも名玉、返し與へん。

ト玉を出す。

小女　ナニ、名玉を賜はるとや。ハヽヽ忝ない。

ト頂く。田村、こなしあつて

田新　ヤア、髑髏は格別、その玉は、輻長どのと、大望を計るの便り、身共へ渡せ。

玉新　名鏡と云ひ、御家にまで、心をかける、さては汝は。

田新　如何にも我れこそ、勅勘をうけし、上総之介が同苗たる、廣光なるワ。

玉新　ナニ、其方が。

田新　三浦之介。

玉新　上總之介とや。

喜助　何奴も観念。

トこの時、寒仲、出て

寒仲　様子は聞いた。三浦之介どの。

玉新　ソレ。

喜助　小女郎、らぬか。

ト双方かゝる、田村は寒仲を一刀切る。ドロ〳〵にて名鏡、飛び去り、新兵衛が手へ入る。綸旨も忽ちに新兵衛引き取る。喜助、小女郎、立廻りよろしく、ト、

小女郎、眞中に、小袖を掛けし炬燵へ上がる。皆々詰め寄り

三人　どつこい。

トしやんと見得。

玉新　先づ今日は、これぎり。

トめでたく、打出し

伊勢平氏摂神風（終り）

編輯校訂責任
渥美淸太郎
鈴木　侃

日本戲曲全集・第十三卷
顏見世狂言篇・第十七回配本

編纂者檢印

昭和四年十二月十二日印刷
昭和四年十二月十五日發行（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彥
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一、六四一
三七、八一
振替東京一六一七八

製版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社）